

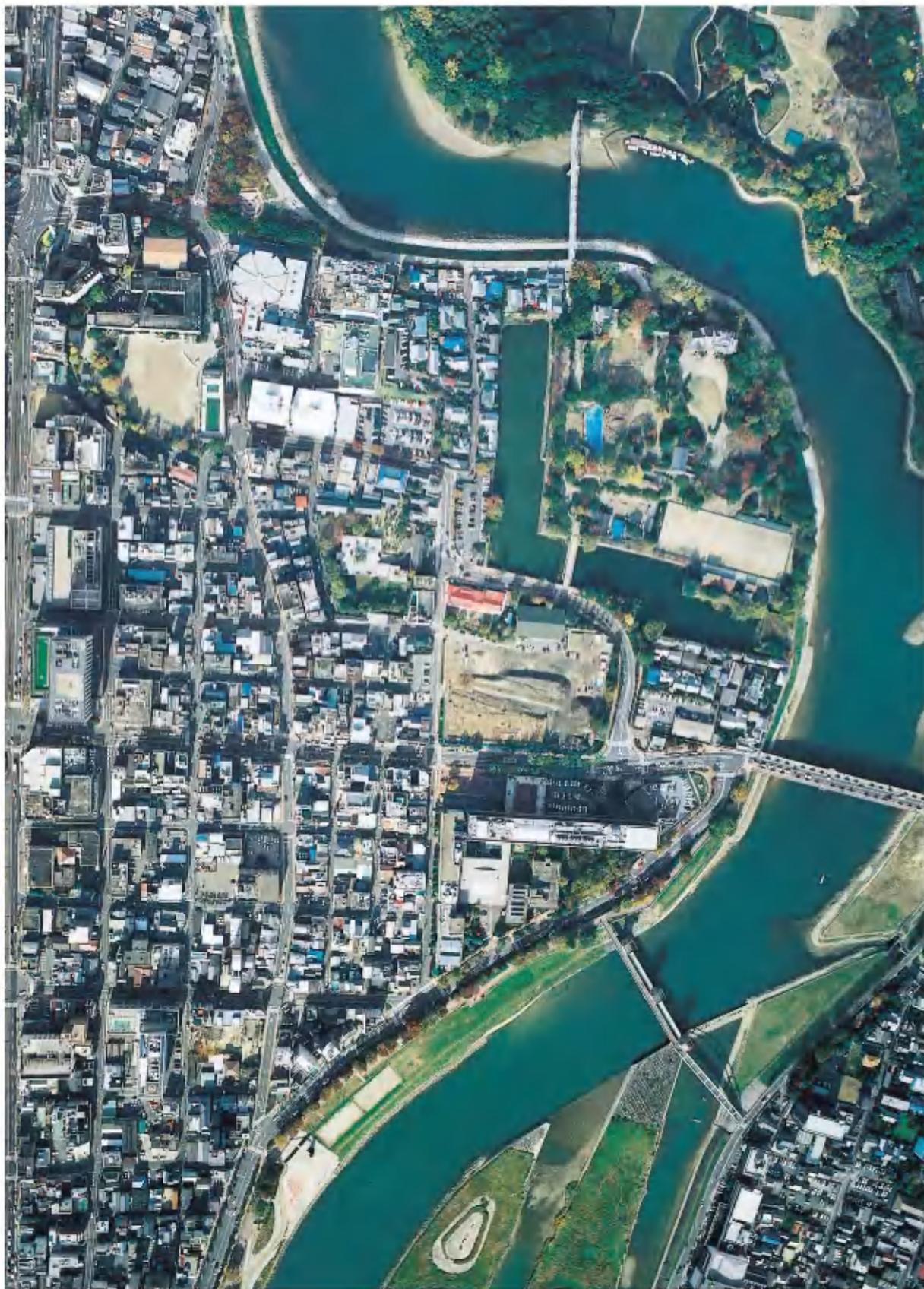
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 175

岡山城二の丸跡

県立図書館建設に伴う発掘調査

2003

岡山県教育委員会



岡山城と市街地（上空から）



外郭全景（北東から）



外郭全景（北東上空から）

堀家純一氏撮影

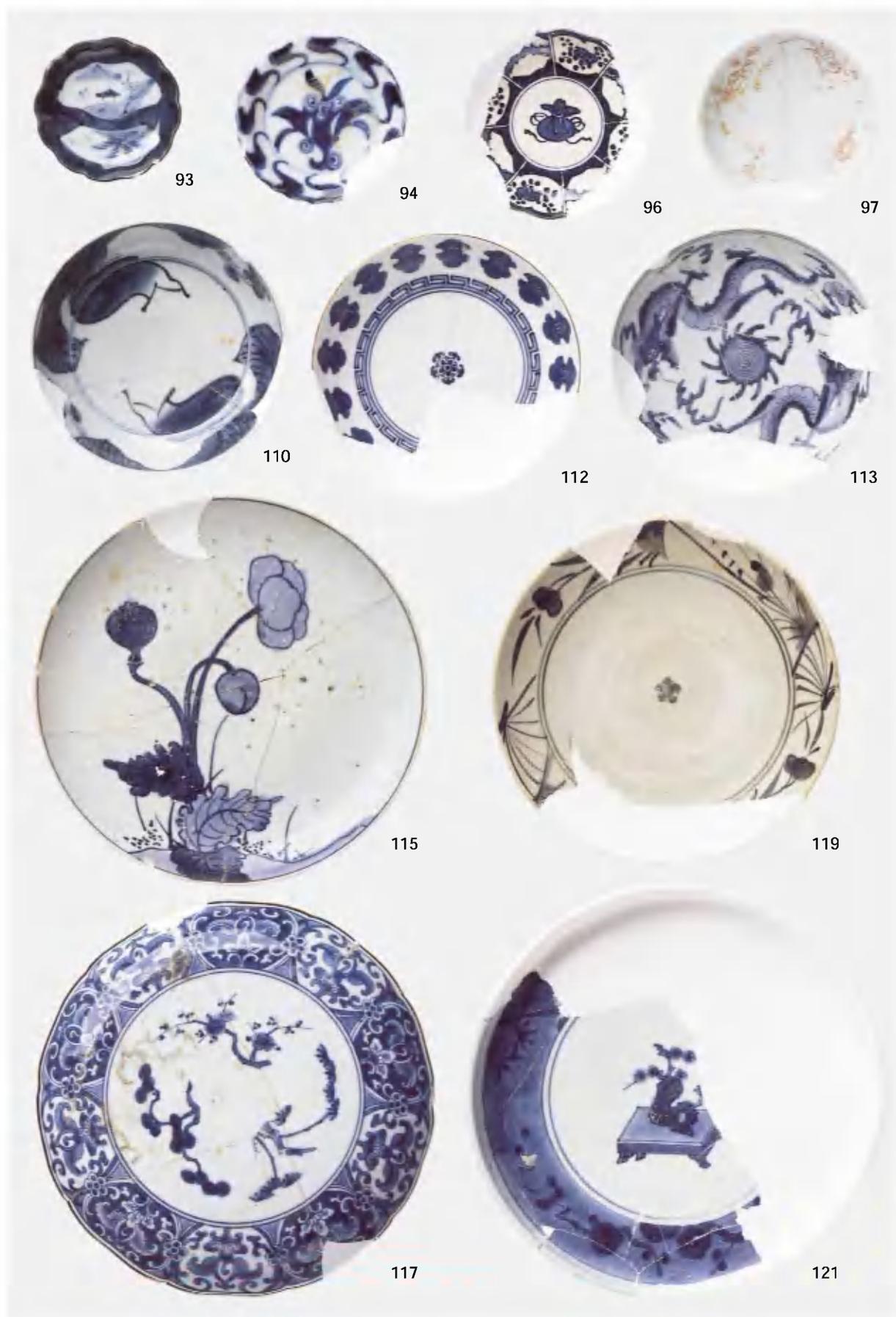


外下馬門石垣全景（南西から）



外郭東辺石垣全景（北東から）











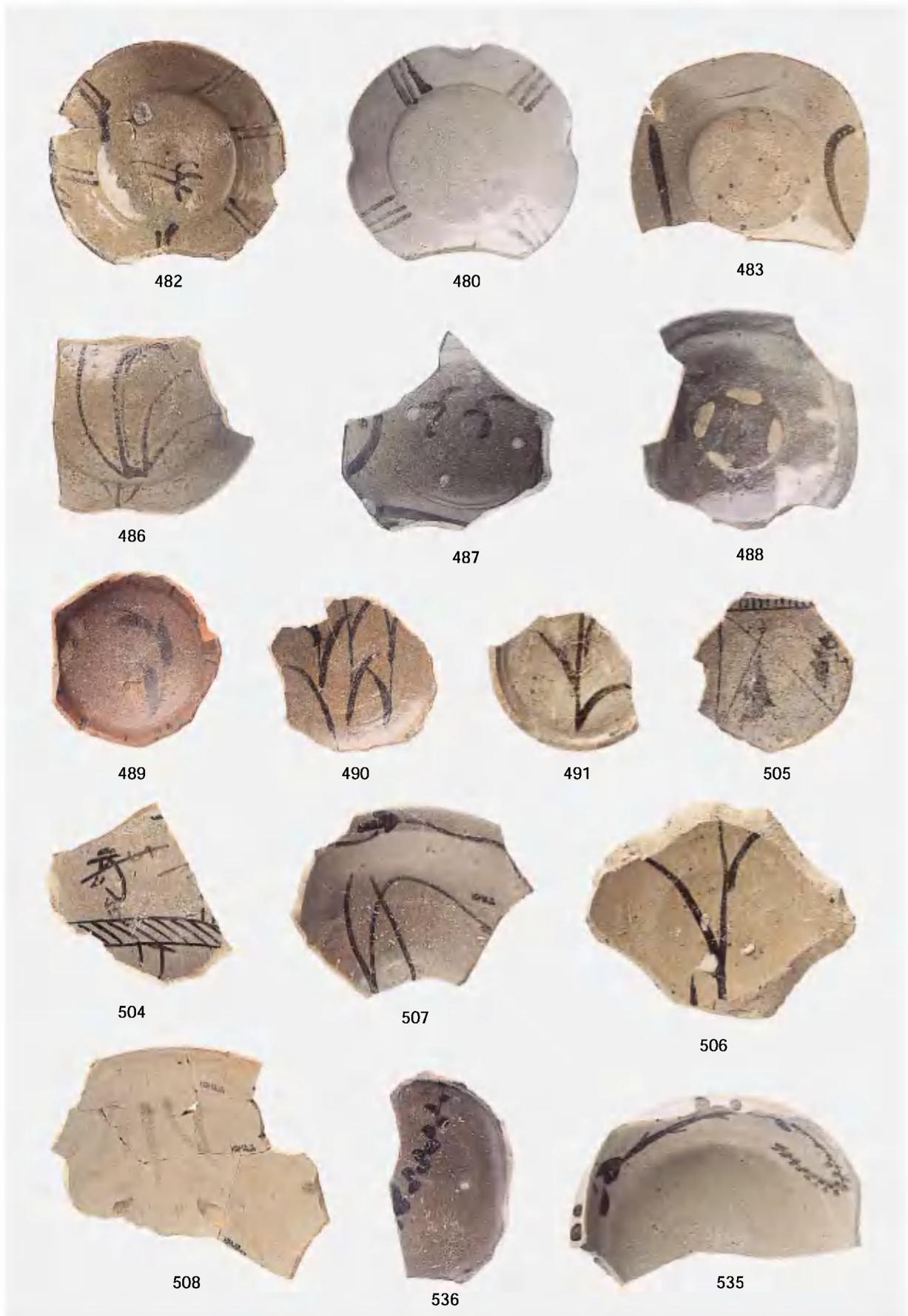


近世後期の陶器

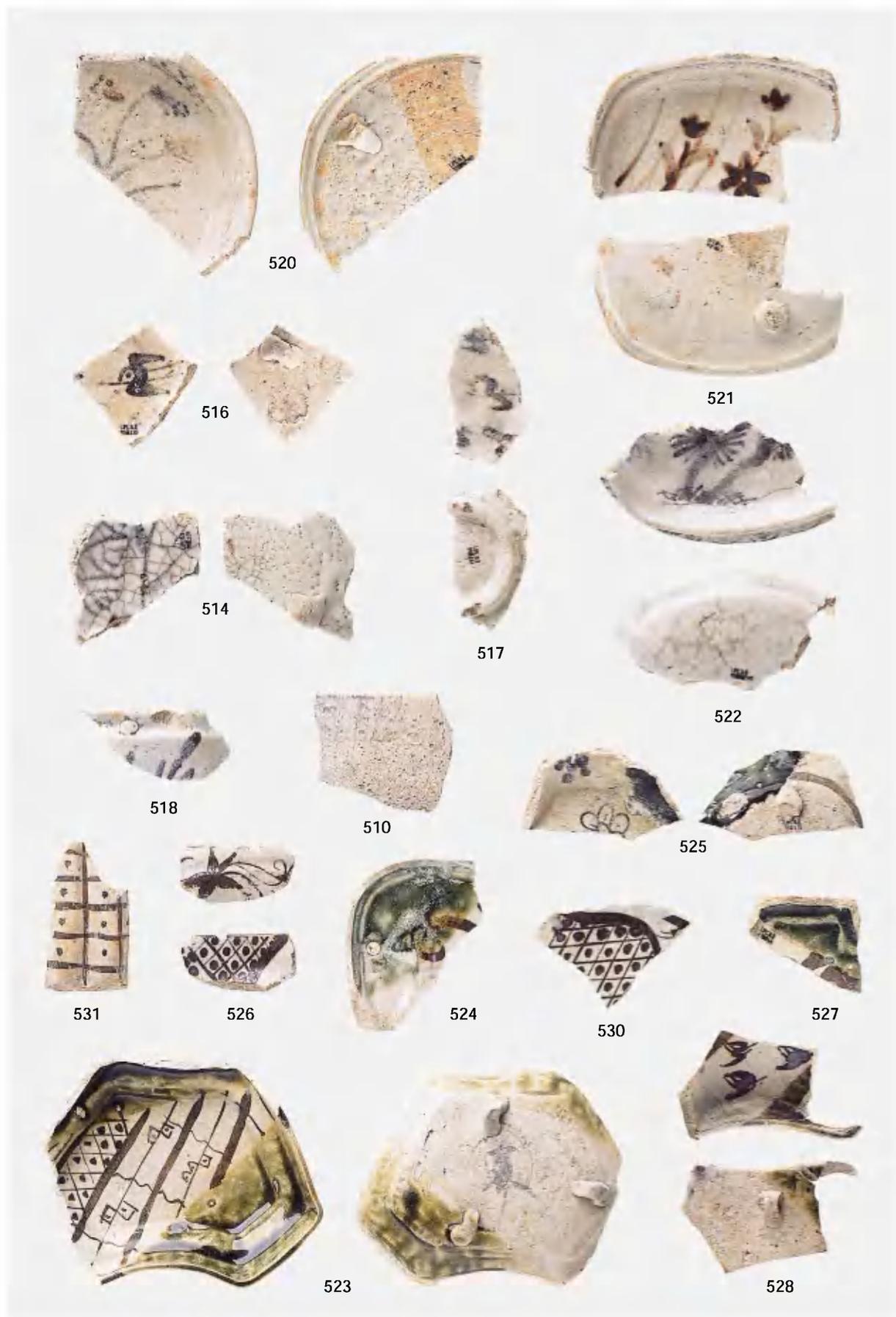




近世前期の陶器 2



近世前期の陶器 3



近世前期の陶器 4



寛永年間の岡山城下（岡山大学附属図書館蔵）



慶安年間の岡山城下（岡山大学附属図書館蔵）

序

近年岡山市の中心部では、児童・生徒の減少に伴い、小・中学校の統・廃合が進められてきました。岡山市内山下にある岡山市立丸之内中学校も、同旭中学校と統合されることとなり、平成11年3月をもって廃校となりました。その跡地に県立図書館の建設が計画されたことから、岡山県教育委員会では平成11年度と平成12年度の二次にわたって発掘調査を実施しました。

この場所は、幕末の絵図を見ると岡山城二の丸の「榎馬場」と呼ばれる広場として描かれています。周囲には重臣の屋敷が建ちならび、内堀にかかっていた外下馬橋を通過して本丸へと至る、岡山城中心部への入り口にあたる場所です。また、江戸時代の文献によれば、天正元年に宇喜多直家が入城するまで、蓮昌寺や三社明神（現在の今村宮）などの寺社がこの場所にあったことが記されています。

調査の結果、絵図に描かれていた内堀の位置や広場の構造が詳しく判明するとともに、内堀の底からは橋脚が見つかり外下馬橋を復元する手掛かりが得られました。さらに、広場の下層からは宇喜多時代の堀や岡山城以前の集落跡が確認され、岡山城やその城下町の成り立ちを考える上で貴重な資料が得られました。

本書が、岡山城をはじめとする近世城郭の研究資料として、また市街地の下に眠る城郭遺構を保護するための一助として活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめとして、岡山市教育委員会や地元住民のみなさんから多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

例 言

- 1 本書は、県立図書館の建設に伴って岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、岡山市内山下2丁目6-45に所在する岡山城二の丸跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成11年10月4日～平成12年1月29日に1,250㎡を対象として第1次調査を、平成12年10月2日～平成13年3月30日に2,700㎡を対象として第2次調査を実施した。
- 3 調査は、第1次調査を亀山行雄が、第2次調査を亀山行雄、蛭原啓介(平成13年1月～)、白神賢士、若林学が担当した。
- 4 調査記録・出土遺物の整理は、平成13年5月～平成14年3月に亀山が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて行った。
- 5 発掘調査および報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員 狩野久氏、同 高橋護氏から指導・助言を得た。
- 6 本書に用いた高度は海拔高である。
- 7 本書に用いた方位は国土地理院第V座標系に基づく。
- 8 本書の周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/25,000「岡山北部」・「岡山南部」を複製して使用した。
- 9 本書の執筆は亀山、松本和男・尾上元規(岡山県教育庁文化課)が行い、編集は亀山が担当した。
- 10 本書の作成にあたり、出土動物遺存体について岡山理科大学 富岡直人氏、出土鉄滓について株式会社九州テクノリサーチ 大澤正己氏から玉稿を賜った。また、石材について倉敷芸術科学大学 妹尾護氏、陶磁器について佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏、岡山城の調査成果について岡山市教育委員会 乗岡実氏より有益な御教示に預かった。
- 11 本書の作成にあたり、岡山大学付属図書館ならびに山陽新聞社(小西正浩氏蔵)から資料の提供を受けた。
- 12 本書の作成にあたり、遺物写真は江尻泰幸氏、遺物浄書は渡辺恵理子氏の協力と援助を得た。
- 13 本書に係わる調査記録・出土遺物の一切は、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)において保管している。

目 次

巻頭図版

序

例 言

目 次

第1章 序説	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査の経緯と経過	5
(1) 調査の経緯	5
(2) 調査の経過	6
(3) 調査の体制	7
(4) 城郭遺構の保存	7
第3節 整理の経過	9
(1) 整理の経過	9
(2) 整理の体制	9
第2章 近・現代の遺構・遺物	10
第1節 近・現代の遺構	10
第2節 近・現代の遺物	10
第3章 近世の遺構・遺物	13
第1節 近世の遺構	13
(1) 内堀	13
(2) 外下馬門・外下馬橋	19
(3) 外郭	23
第2節 近世の遺物	37
(1) 出土状況	37
(2) 国産磁器	37
(3) 輸入磁器	47
(4) 国産陶器	53
(5) 輸入陶器	78
(6) 炆器	78
(7) 土器	96
(8) 瓦	108
(9) 木製品	139
(10) 石製品	144
(11) 土製品	146
(12) 金属製品	151

第4章 中世以前の遺構・遺物	156
第1節 平安～室町時代の遺構・遺物	156
(1) 平安～室町時代の遺構	156
(2) 平安～室町時代の遺物	158
第2節 奈良時代以前の遺構・遺物	162
(1) 奈良時代以前の遺構	162
(2) 奈良時代以前の遺物	163
第5章 考 察	165
第1節 調査地の変遷	165
第2節 内堀北辺石垣の測量調査	175
第3節 岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析	177
第4節 岡山城二の丸跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	194
表	203
図版	
抄録	

第1章 序 説

第1節 遺跡の位置と環境

(1) 岡山城前史

現在、岡山市街地が広がる岡山平野は、中国山地に源を発し吉備高原を貫いて流れる旭川によって形成された沖積平野である。縄文時代前期には南方付近に汀線があったことが確認されているが、ダイミ山の南麓に営まれた縄文後期の朝寝鼻貝塚では淡水産の貝類中心で、この時期には沖積化がかなり進行していたものと推測される。操山山塊の北麓に広がる百間川遺跡群や朝寝鼻貝塚の南側に位置する津島（岡山大学構内）遺跡などでこの時期の生活跡が確認されており、晩期には上伊福遺跡や雄町遺跡など、集落域はさらに南へ拡大する。

弥生時代前期には著名な津島（総合グラウンド）遺跡や南方遺跡などが形成されるが、その規模はかならずしも大きくない。中期には、上伊福遺跡や絵図遺跡、南方遺跡など東西1 kmほどの範囲に集落が集中して営まれる。ことに南方遺跡は豊富な青銅器を有し、石斧の製作を行うなど、これらの中核をなしていたものと推定される。しかし、後期に入ると南方遺跡は解体に向かい、かわって伊福定国前遺跡や鹿田遺跡、天瀬遺跡など西岸平野の広範囲に集落が分散して営まれるようになる。

古墳時代には旭川の両岸を見下ろすダイミ山や竜ノ口山塊に七つ塚1号墳や都月坂1号墳、車塚古墳など40m級の前方後方墳が築かれる。一方、吉備の穴海に臨む操山山塊では網浜茶白山古墳や操山109号墳など80m級の前方後円墳が築かれ、その系譜は全長160mの金蔵山古墳まで続く。前期の集落は津島江道遺跡や伊福定国前遺跡、鹿田遺跡など前代から引き続いて営まれるが、中期前半には極端に減少し、後半に至って再び広範な展開を見せるようになる。中期の古墳は西岸に一本松古墳や青陵古墳などの小形前方後円墳が見られる一方、東岸では中井・南三反田遺跡のような低位部の古墳群が現れる点で注意される。しかし、後期には竜ノ口山塊や操山山塊に群集墳が営まれる東岸に対し、西岸では矢坂山の群集墳が知られるにすぎない。こうした偏差は古代寺院の分布にも現れており、後の津高郡域を含めて考えるにしても旭川西岸地域（御野郡）の特異性は否めない。この時期、半田山西麓では製鉄が行われており、津島遺跡や原尾島遺跡など鉄生産にかかわる集落も出現する。

平安時代に開かれた鹿田庄は殿下渡領として知られているが、鎌倉時代には東大寺復興の料所として野田荘が開発される。この時期の集落は平野部全域に広がるが、百間川米田遺跡のように溝で区画された「屋敷」が出現しており、後の国人へと成長していく有力名主の存在を窺わせる。

承久の乱後、地頭として伊福郷に来住した松田氏は、室町時代には備前守護代として威をふるい、守護赤松氏と反目するに至る。文明15年（1483）には山名氏の助勢を得て守護代浦上氏と争い（福岡合戦）、以後西備前を勢力下において浦上氏と睨み合いが続く。やがて浦上氏の麾下にあった宇喜多直家が急速に勢力を延ばし、毛利氏と組んで三村氏の侵入を退けるとともに、松田・浦上氏を相次いで滅ぼし備前の覇権を手にする。



第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

- | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|----------|------------|
| 1. 岡山城 | 2. 朝寝鼻貝塚 | 3. 津島岡大遺跡 | 4. 津島遺跡 | 5. 上伊福遺跡 |
| 6. 南方遺跡 | 7. 百間川原尾島遺跡 | 8. 天瀬遺跡 | 9. 鹿田遺跡 | 10. 神宮寺山古墳 |
| 11. 金蔵山古墳 | 12. 網浜茶白山古墳 | 13. 唐人塚古墳 | 14. 賞田廢寺 | 15. 幡多廢寺 |

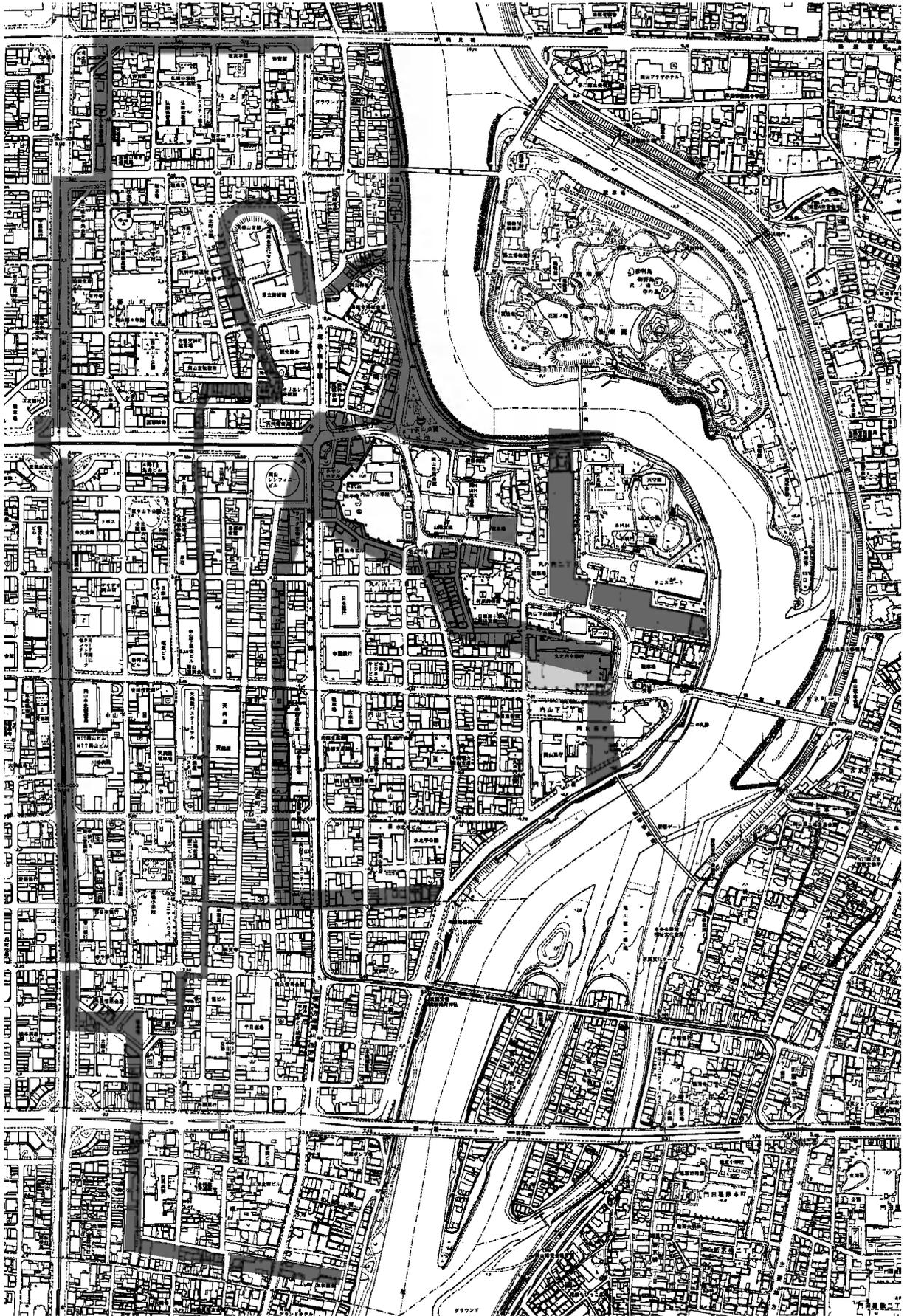
(2) 岡山城の歴史

岡山城は、大永年間に松田氏の麾下にあった金光備前が在城していたと伝えられるが、その子宗高は元亀元年（1570）、沼城主宇喜多直家によって謀殺され岡山城を奪われる。直家は岡平内を奉行として城地の拡張を行い、天正元年（1573）には岡山城に入る。この時、岡山の南麓にあった岡山寺や榎馬場にあった蓮昌寺と三社明神を移転させたという。直家が没した翌天正10年（1582）年、家督を継いだ秀家は高松城攻略の後57万石の所領を認められる。天正19年（1591）、秀家は九州攻略の途上に立ち寄った秀吉の意見に従い本丸を岡山に移して城の拡張・整備を進め、慶長2年（1597）には天守閣が竣工、城下町の大綱が定まった。しかし、慶長5年（1600）の関ヶ原戦に敗北した宇喜多氏は改易され、かわって備前・美作に封じられた小早川秀秋が岡山城を受け取る。慶長6年（1601）、岡山城に入った秀秋は、外堀を掘削し、沼城や富山城の櫓・城門を岡山城に移すなどしたが、翌年謎の死を遂げる。

慶長8年（1603）、池田輝政の次男忠継が備前に封じられるが、幼少のため兄利隆が岡山城に入り国政を代行する。慶長18年（1613）、父輝政の死去に伴って利隆は姫路城に移り、忠継が岡山城に入るが、元和元年（1615）に死去する。このため、淡路洲本城にあった弟忠雄が襲封し岡山城に入る。忠雄は月見櫓をはじめ小納戸櫓・数寄方櫓・廊下門を築造、大手門を修理するとともに西川をつけ替えて城下町を完成させた。寛永9年（1632）、忠雄は江戸藩邸において死去し嫡子光仲が襲封したものの幼少のため因幡・伯耆へ国替えとなり、かわって鳥取城にあった光政が岡山城へ入る。その後、承応3年（1654）の大洪水等による修復工事を除いて、城郭の大幅な改変は行われていない。

明治2年の藩籍奉還によって二の丸以内は陸軍省の管轄となり、明治15年（1882）には天守・月見櫓・西手櫓・石山門を除く城門・楼櫓が破却された。また、このころから外堀の埋め立てがはじまっている。明治23年（1890）、二の丸以内は池田家に払い下げられ、明治35年（1902）には榎馬場跡に岡山市立商業学校が開校する。同校は、大正5年（1916）に内堀埋立地を運動場として借地しており、このころまでに中堀や内堀の埋め立ては完了したようである。昭和6年（1931）には天守が、その2年後には月見櫓・西手櫓・石山門が国宝に指定される。昭和12年（1937）、岡山商業学校の女子部が女子商業学校と改称される。昭和20年（1945）、アメリカ軍が岡山市を空襲、天守・石山門とともに岡山女子商業学校も焼失する。昭和22年（1947）、岡山女子商業学校の跡地に岡山市立第一中学校が開校し、翌年には岡山市立丸之内中学校と改称される。昭和41年（1966）には天守が再建され、慶長2年の天守竣工より400年目にあたる平成9年（1997）にはその装いが一新された。

一方、昭和62年（1987）に国史跡に指定された岡山城の整備事業として、平成4年（1992）から本丸跡の発掘調査が開始された。また県庁舎増築工事や中国電力変電所建設に伴って二の丸跡の発掘調査が相次いで実施され、文献によってのみ語られてきた岡山城の実態が次第に明らかになりつつある。しかし、今日までかろうじて保存されてきた地下の遺構は、近年建造物の大型化、高層化によって急速に失われつつあり、早急な保護措置が求められている。



第2図 調査位置図 (1/8,000)

第2節 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

県立図書館の機能をもつ「県総合文化センター」は昭和37年に建設されたが、現在では蔵書の収蔵能力、施設の老朽化、高度情報化への対応の遅れ等によって県立図書館として必要とされる機能を提供することが困難な状態となっている。

このため、県総合文化センターから「図書館」を独立させ、その内容を充実・強化させる新県立図書館の建設構想が浮上した。昭和62年に設置した「岡山県総合文化センター再編整備検討委員会」に諮問したのを最初として、平成元年には具体的に県立図書館・公文書館を日本銀行岡山支店跡地に建設する案が公表された。しかし、敷地面積が狭く高層化を余儀なくされることから、図書館関係者などの批判が集中した。その後、財政難から建設計画（規模、経費等）の見直しを行ったが、平成9年10月には岡山県行財政改革懇談会から「場所の変更も視野に入れ、当面3か年凍結」の答申を受け、11月には凍結決定となった。しかし、12月の定例県議会において、知事は「凍結期間中において新たな場所での基本計画等の検討が必要であると考えている」との見直しを表明した。平成10年4月には「岡山県立図書館基本構想策定委員会」を設置し、建設場所未定のまま、図書館の機能・規模等について検討を開始した。そして6月になって岡山市立丸之内中学校跡地を県立図書館建設用地とすることで県と岡山市が合意したことを発表した。丸之内中学校が平成11年4月に旭中学校に統合されるため、その跡地を平成13年度に県が市から取得し、新県立図書館を建設することになったのである。建設場所の変更、その後の財政難等もあるが、建設構想が打ち出されてから実に11年の歳月を経て決定したのである。

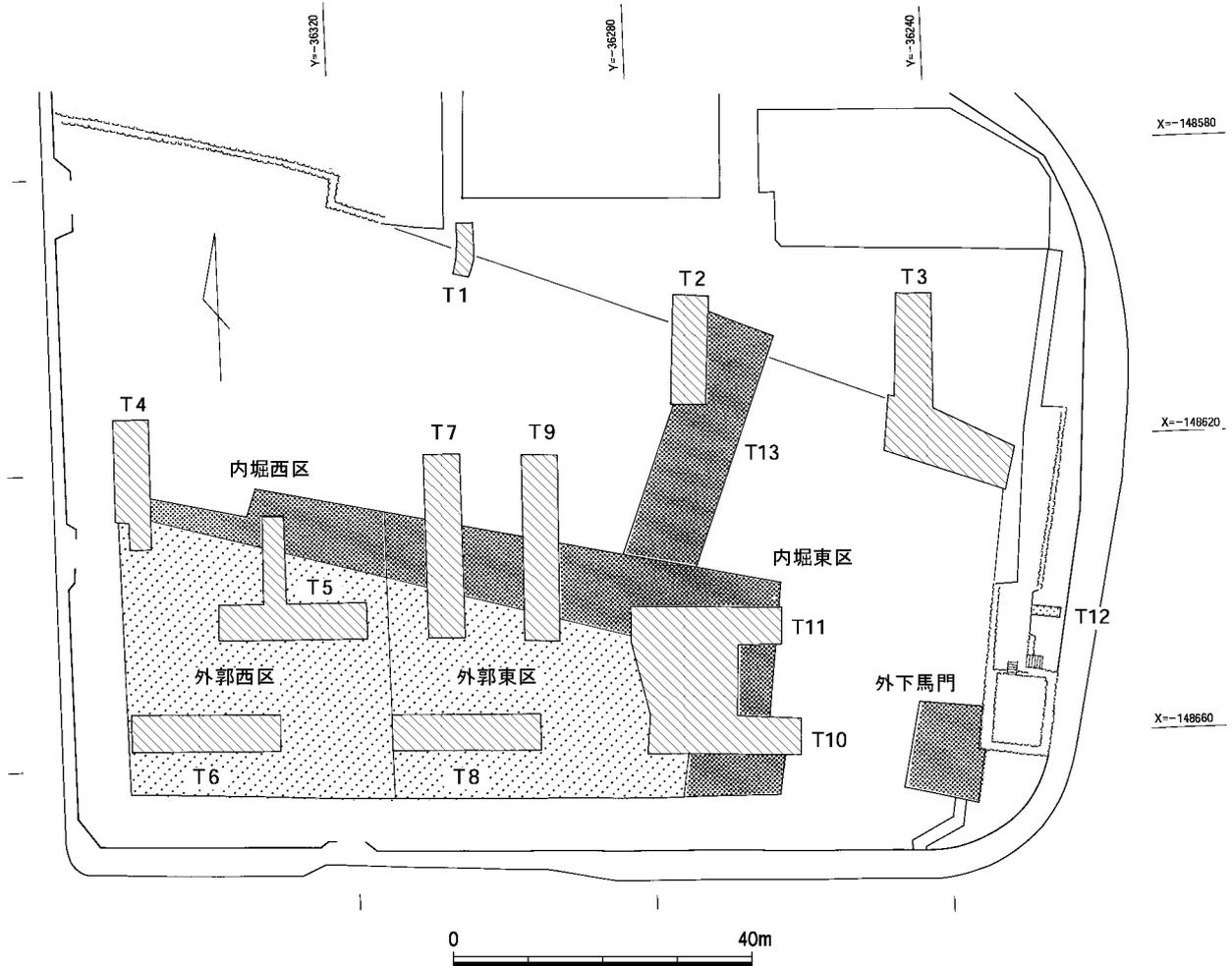
新県立図書館の建設地が岡山城二の丸内に決定されたことを受けて、担当部局の県教育庁生涯学習課と文化課で具体的な協議を平成10年10月から開始するが、当該地にはいくつかの課題が存在した。すなわち、建設地に隣接する外下馬門や内山下幼稚園の南に露出する東西石垣は国指定史跡ではないが、岡山市の管理計画では追加指定の候補にしている遺構であるため、発掘調査でこの東西石垣が線として続くのであれば、この石垣ラインから城までの間を含めた面として追加指定の可能性がありうるため、隣接するこの地での図書館建設については文化庁と事前に協議する必要がある。さらには、図書館建設という新たな要因がでたことから、岡山市の今後の史跡整備管理計画の見直しの必要性という新たな課題も発生しているが、図書館建設に伴う発掘調査、基本・実施計画の完了までは文化庁並びに県文化財保護審議会委員の指導を適時受けながら事業を進めてきた。

生涯学習課では、当初図書館の建設位置を敷地のほぼ中央に計画したが、「岡山城下絵図」によると当該地が内堀北辺の石垣に図書館がかかることから、最終的には敷地の南西部に寄せる建物配置に計画変更した。文化課ではこの建設計画をもとに確認調査を企画し、平成11年に校舎解体工事と一部並行しながら確認調査を実施した。

文化課ではこの調査結果が建設位置・規模等の計画に反映されるよう生涯学習課に検討を要請するとともに、新図書館建設について文化庁と断続的に協議を行った。こうした協議を経て最終的に建物位置が決定し、全面発掘調査が実施された。 (松本)

(2) 調査の経過

平成11年10月に着手した第一次調査では、内堀の正確な位置を把握するとともに、二の丸外郭における諸施設の遺存状態を確認することを目的としてトレンチを11本設定し（T1～11）掘り下げを行った。内堀部分の調査は湧水が激しく、かつ4 mにも及ぶ深さのために極力重機を使用し、細部を人力によって精査する手法をとった。その結果、内堀北辺については石垣が検出され、その位置がほぼ確定できたが、外郭側の南辺には石垣がなく素堀のままであることが判明した。また外郭では、上層に幕末期の遺構が、承応3年の洪水に由来すると見られる砂層の下では「榎馬場」造成以前の遺構とともに、宇喜多期のものと見られる堀が検出された。さらに下層からは、中世に溯る柱穴群や水田も確認された。平成12年10月から開始した第二次調査では、第一次調査の成果をもとに外郭の全面調査を実施した（外郭・内堀区）。また、文化庁の指導により外下馬橋の架橋部分について調査を行い（外下馬門区）橋脚の遺存を確認するとともに、整備のための資料を得るため外下馬門内の石塁についても調査を実施した（T12）。第一次調査では湧水に悩まされ、第二次調査では大量の排土と保存樹木等の障害物によって多大な制約を受けた。また、不十分な調査期間や調査体制の中で、調査地点が度々追加されるなどしたうえ、石垣の実測は不要などという指示が出される異常な状態での調査となったが、調査員や発掘作業員の増員を図ってようやく調査を完了した。



第3図 調査区配置図（1/1,000）

(3) 調査の体制

第一次調査（平成11年度）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

参事 正岡 睦夫

課長補佐（埋蔵文化財係長） 松本 和男

主任 奥山 修司

文化財保護主任 大橋 雅也

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

<総務課>

課長 小倉 昇

課長補佐（総務係長） 安西 正則

主査 山本 恭輔

<調査第一課>

課長 高畑 知功

課長補佐（第二係長） 下澤 公明

文化財保護主任 亀山 行雄（調査担当）

第二次調査（平成12年度）

岡山県教育委員

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

課長代理（埋蔵文化財係長） 松本 和男

文化財保護主査 福本 明

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧

<総務課>

課長 小倉 昇

課長補佐（総務係長） 安西 正則

主査 山本 恭輔

<調査第三課>

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐（第一係長） 浅倉 秀昭

文化財保護主査 亀山 行雄（調査担当）

文化財保護主事 蛭原 啓介（調査担当）

平成13年1月～

主事 白神 賢士（調査担当）

主事 若林 学（調査担当）

(4) 城郭遺構の保存

図書館建設場所の選定経緯からみて、建設場所は変更できないため、生涯学習課との協議の結果、敷地内で確認された内堀北辺の石垣遺構から北側エリアについては現状保存とし、その南側に図書館を配置する。そして、外下馬門の対岸部で確認された南北の石垣遺構は現状保存とするなど、できるだけ地下遺構を壊さないよう配慮して建設することになった。

詳細設計協議において、文化庁からは建物の基礎部分はもちろん、地上部の建物面の垂直下が石垣遺構の根石から最低1m以上離すように指導を受けたが、図書館南側は玄関となり、身障者等への配慮などバリアフリー化する必要があるため、北西角の建物壁と石垣の間隔は最終的には根石から50cmしか離すことはできなかった。また、将来の追加指定を想定して、内堀から北側については広場と駐

第1章 序 説

車場にするなど外構整備や内堀石垣の復原、外下馬橋の橋脚表現等についても指導を受けた。

発掘調査は建設予定地だけでなく、将来の追加指定を想定して外下馬門に取り付く橋脚の位置や石垣下端部、外下馬門櫓台から北に延びる石垣遺構の東辺下端部の確認調査を実施するよう文化庁から指導を受けた。さらには、平成13年度には内山下幼稚園の南に露出する石垣遺構の下端部を確認するため、3か所で確認調査を実施し、埋没している内堀北辺の石垣遺構の基礎資料を得た。

こうして、図書館建設は進められたが、一般県民にとっても現在の岡山城がかつての勇姿を想像させないため、史跡の追加指定によって岡山城周辺に残る石垣遺構等を整備し、築城当時の勇姿を後世に伝えるべきだという保存・活用の要望が県民から起こるとともに、県内の考古学研究者で組織する「岡山県遺跡保護調査団」からは、県教育長にあてて以下のような要望書が出された。

平成13年 5月18日

岡山県教育委員会
教育長 宮野正司 殿

岡山県遺跡保護調査団
委員長 稲田孝司

岡山城関連遺跡の保護について（要望）

岡山県立図書館の建設に伴う発掘調査では、岡山城関連の石垣あるいは橋脚などの遺構が非常に良好な状態で検出されました。これらに関しましては、貴教育委員会において、文化庁などと協議しつつ、その保護・活用に努力されていると伺っております。

岡山城周辺地域における昨今の市街地開発をみますと、今後もさらに開発による岡山城関連遺跡の破壊が進むのではないかと危惧されます。個々の地点における遺跡保護の取り組みもさることながら、それらを岡山城と一体でどのように保存していくかが重要な問題となります。

今後においては、今回の県立図書館予定地で保護措置をとられようとしている部分を含め、岡山城周辺における関連遺構を史跡として追加指定する等の方法によって恒久的な保護をはかり、岡山城と一体とした活用を要望いたします。

今後は、文化庁・市・県で協議し、追加指定等によって岡山城周辺に残る遺構の保存・活用を図っていく必要がある。

最後になりましたが、文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官本中眞氏、同主任文化財調査官坂井秀弥氏には多大なる御指導・御教示を頂いたことに対し厚く感謝する次第であります。（松本）

第3節 整理の経過

(1) 整理の経過

出土遺物の洗浄・注記作業は発掘調査と併行して行っていたが、400箱を越える遺物が出土したため調査期間中に完了せず、整理作業のなかで補足した。出土遺物の過半を占める瓦類は厳選して取り上げたが、それでもなお全てを掲載するのは困難であるため、型式分類あるいは計測等を行って資料化に努めた。陶磁器類については岡山市教育委員会の乗岡実氏、佐賀県立九州陶磁資料館の大橋康二氏に教示を仰いだ。また、土壙等に廃棄されていた動物遺体については岡山理科大学の富岡直人氏に、鍛冶炉等から出土した鉄滓については株式会社九州テクノロジーの大澤正己氏に、外下馬橋の橋脚材については環境考古研究会に鑑定・分析を依頼した。

膨大な遺構・遺物にもかかわらず整理期間は11か月と標準よりはるかに短く、しかも他事業の報告書の編集作業と平行したうえ、担当者の近世遺物に対する理解が不十分なこともあって作業は総じて遅れがちであったが、整理作業員や文化財センター職員諸氏の協力によってようやく作業を完了することができた。

(2) 整理の体制（平成13年度）

岡山県教育委員会	次 長	能登原 巧
教 育 長 宮野 正司	<総 務 課>	
岡山県教育庁	課 長	安西 正則
教 育 次 長 國貞 忠克	係 長	田中 秀樹
文化課	主 任	小坂 文男
課 長 松井 英治	<調査第一課>	
課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男	課 長	高畑 知功
課長代理 藤井 守雄	課長補佐(第二係長)	島崎 東
主 任 奥山 修司	文化財保護主査	亀山 行雄(整理担当)
岡山県古代吉備文化財センター		
所 長 正岡 睦夫		

第2章 近・現代の遺構・遺物

第1節 近・現代の遺構

厚さ20cmほどある校庭造成土の下で、丸太を束ねて打ち込んだ上に碎石を敷いてコンクリートを打設した建物の基礎が検出された(第5図)。東西45m、南北9mの建物が10mの間隔をもって南北にならんでおり、その間にも4m四方の建物の基礎が対になって検出された。これらは昭和32年頃の丸之内中学校の校舎配置図と一致することから、戦後改築された同校の木造校舎跡と思われる。

内堀は、深さ2.5mにわたって大量の石炭滓によって埋め立てられている。岡山市立商業学校が大正5年に内堀の埋め立て地を運動場として借地しており、このころまでに内堀の埋め立てが完了していた模様である。また、外郭の北東には外下馬橋たもとの石垣に続いて、高さ2mの切石積みの石垣が30mにわたって築かれていた。この石垣は、径10cm、長さ1.5mほどの丸太を打ち込み、その上にわたした横木を基礎としてほぼ垂直に築かれている(第4図)。その西端から先では矢板列が検出されており、石垣にかわる土留めと見られる。これらは石炭滓によって埋め込まれていることから、明治32年に開校した岡山市立商業学校関連の施設と考えられる。

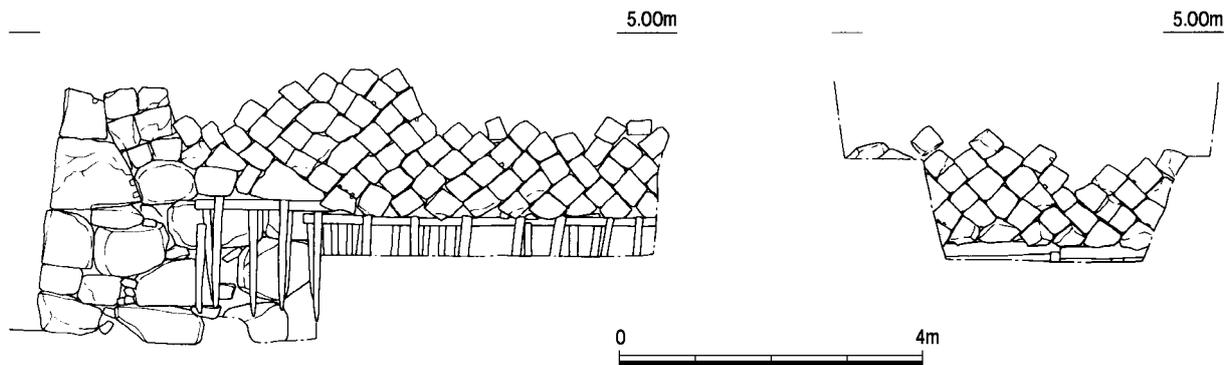
第2節 近・現代の遺物

学校関連の遺物(第6図)

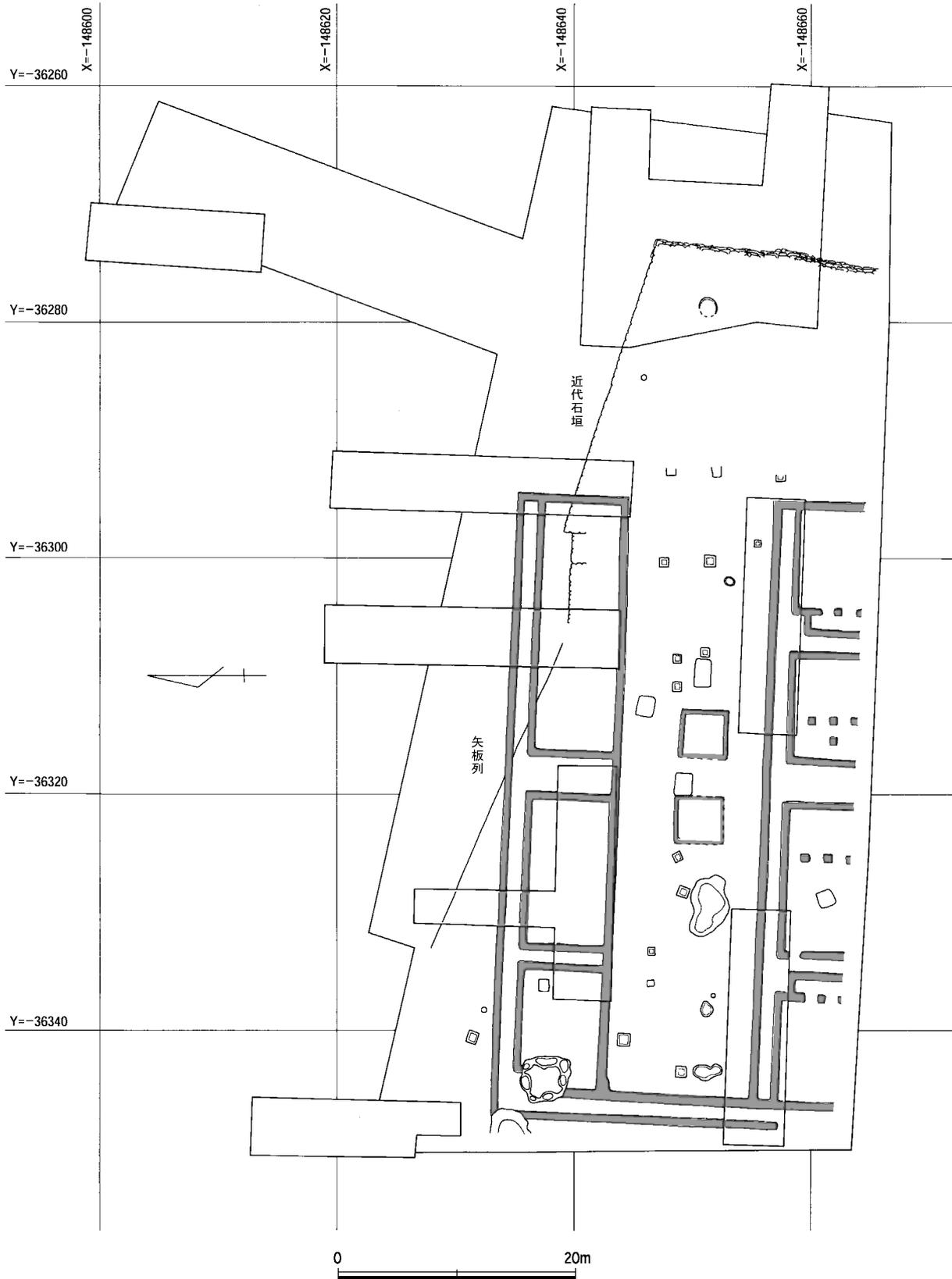
学校関連の遺物は、中庭に設けられた井戸や、煉瓦を組んだ集水枡、内堀よりに埋設された陶器の甕内などからインク瓶1・2や目薬瓶3・4、電球、硯、学校教材などが出土している。

内堀の遺物(第6図)

5～13は内堀の埋め立て土から出土した遺物である。5は褐色のワインボトル、6は透明ガラスのネジ栓をもつ牛乳瓶、7は陶器のインク瓶である。8はいわゆる陶器の汽車土瓶で、静岡県平沼駅の銀月軒で販売されたものである。銀月軒は明治34～大正4年に平沼駅で営業しており、内堀の埋

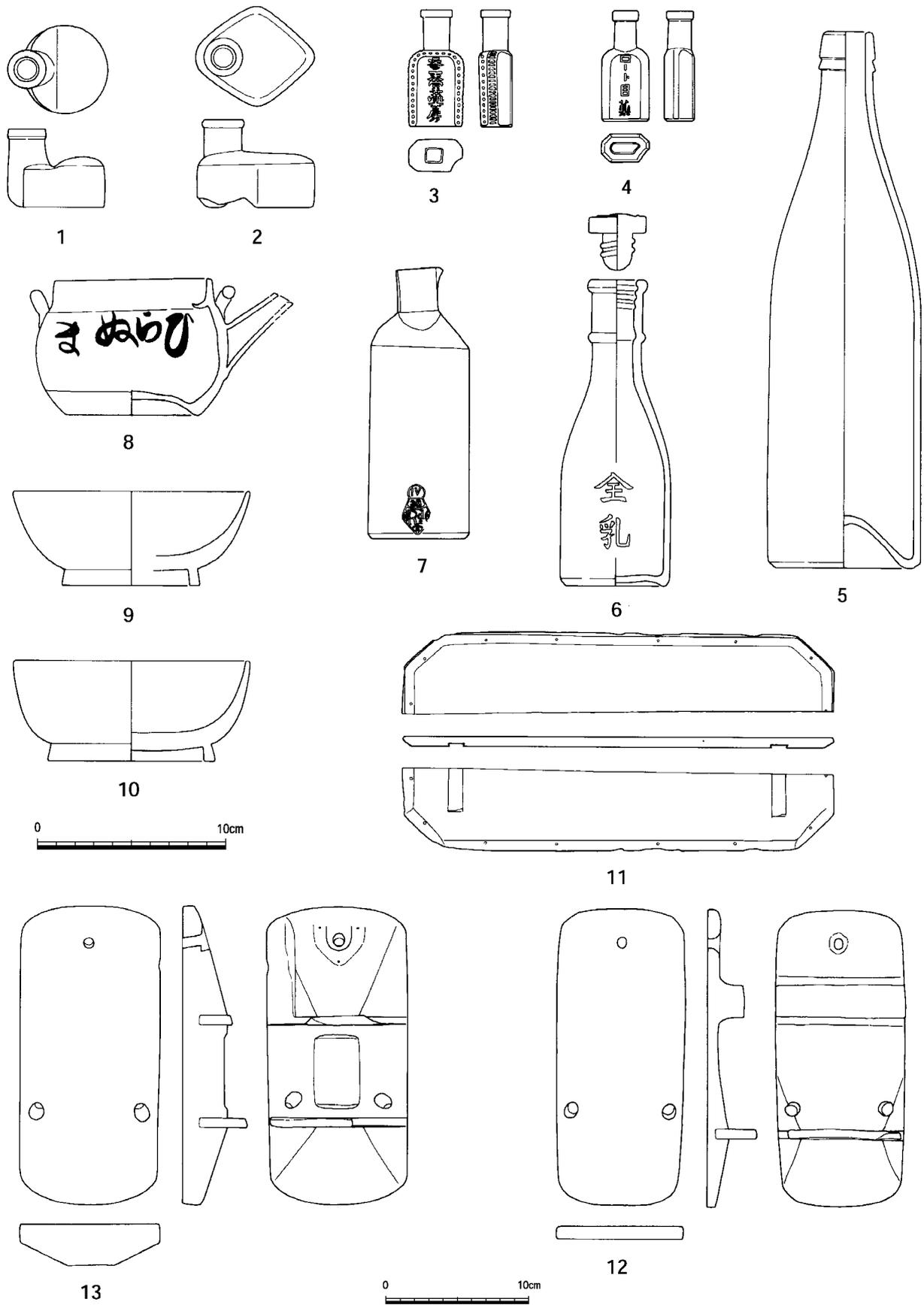


第4図 近代石垣(1/100)



第5図 近現代遺構配置図（1/500）

め立て時期とも一致する。9・10は漆器椀で、9は内外面赤色、10は内面赤・外面黒色の漆で仕上げている。11は黒漆塗りの折敷（膳）で、裏面には脚をはめ込んだ痕が見られる。下駄は、後歯下駄12と差歯下駄13を図示したが、ほかにはほぼ同大の連歯下駄も出土している。



第6図 近・現代の遺物（1/3・1/4）

第3章 近世の遺構・遺物

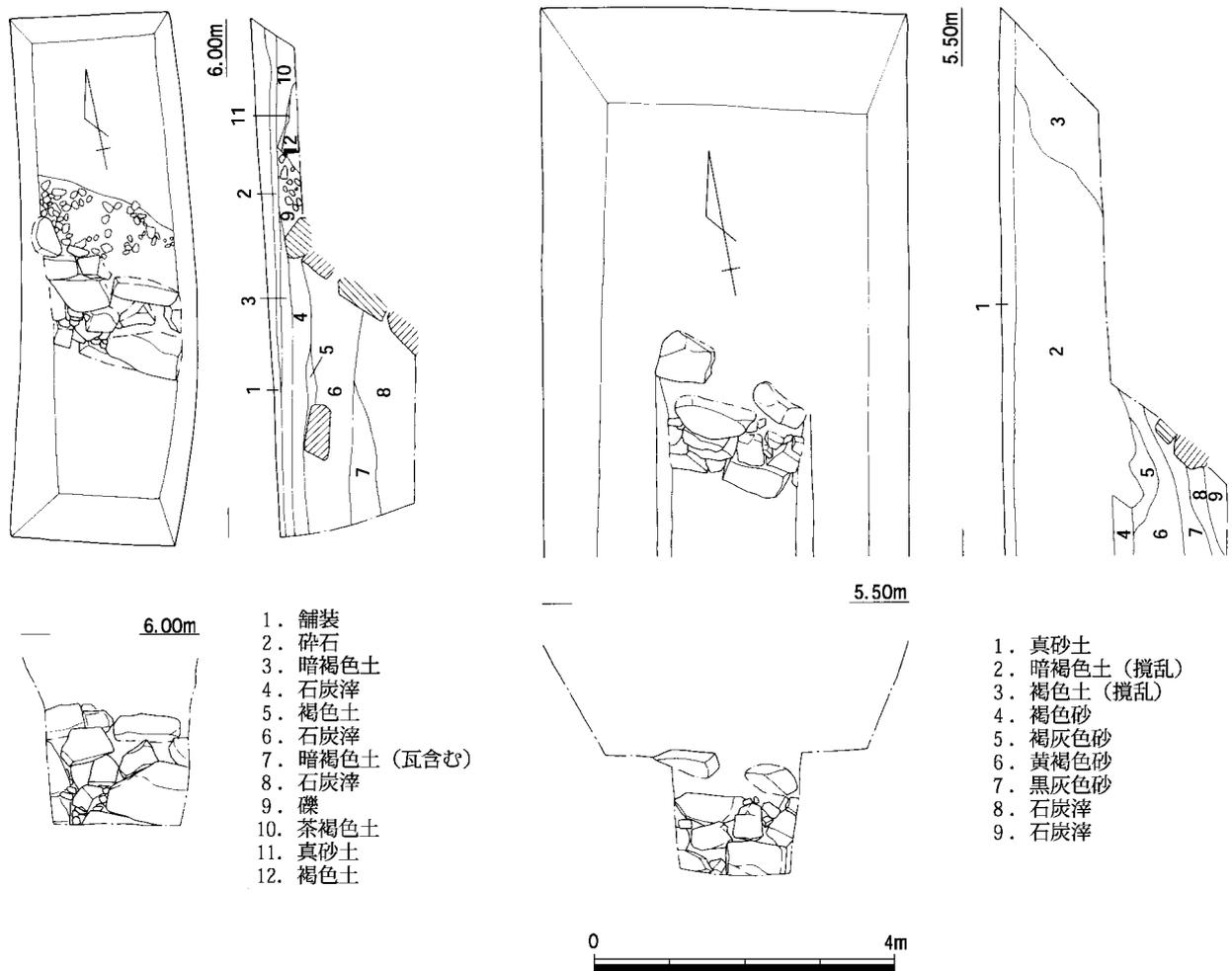
第1節 近世の遺構

(1) 内堀

内堀の北辺は、現在内山下幼稚園の石垣として一部遺存している。今回、内堀北辺の位置を確定するためT1～3の3か所にトレンチを設定した。

T1（第7図、図版2）

内山下幼稚園の南東隅から2m東側に設定したT1では、地表下25cm（海拔5.6m）で石垣の上端を確認した。長さ40～105cm、幅30～85cmの石材を51°の傾斜をもたせて3段積み上げており、奥行き1mほどある石垣の掘り方には拳大の円礫が詰められていた。この石垣は幼稚園の南東隅より南へ3m



第7図 トレンチ1・2（1/100）

ずれており、現存する石垣の一部が後世の改修によるものであることが改めて確認された。

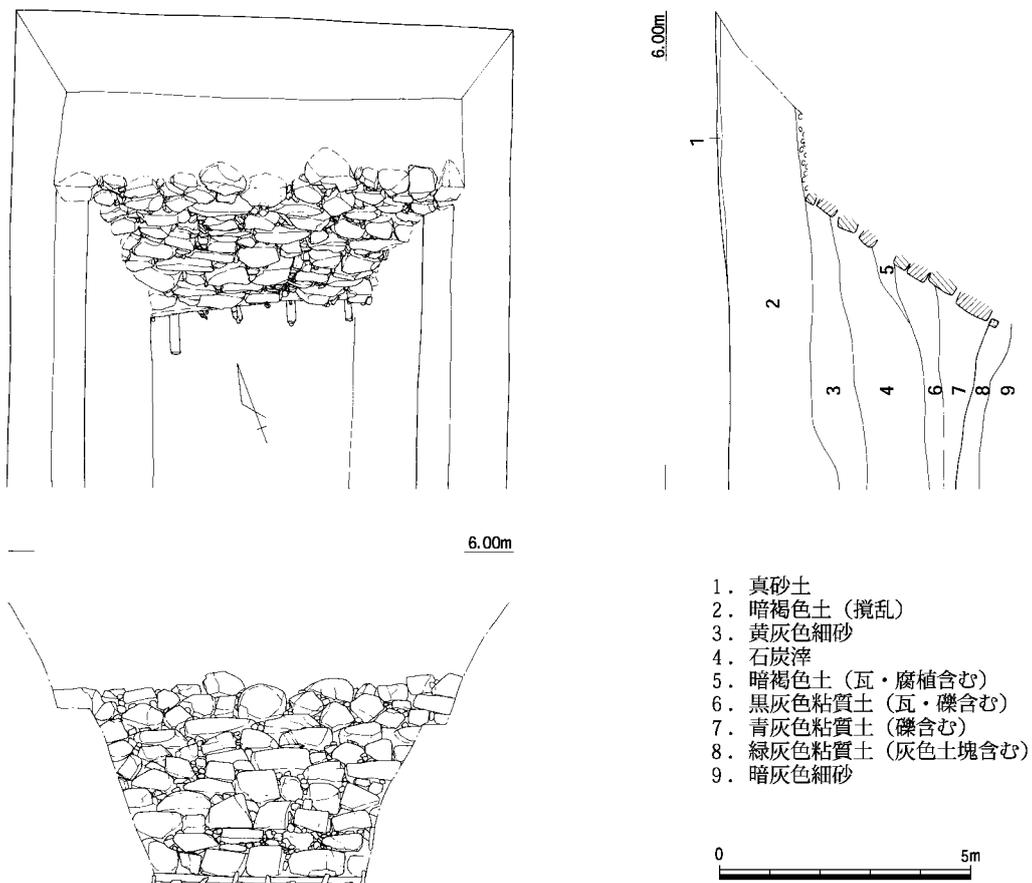
T2・13（第7・8図、図版2・3）

T1の東27mに設定したT2は、校舎解体による攪乱が地表下1.5mにまで及んでおり、海拔3.0mでようやく北辺石垣の一部を検出した。第2次調査では、このトレンチと重なるようにT12を設定してさらに掘り下げた結果、海拔-0.5mで胴木を伴う石垣の基底部を確認した。これは、1m前後の間隔で平行に並べた幅15~20cmの角材の上に幅15cmほどの角材をわたし、その上に長さ50~120cm、幅40~70cmの石材を55°の傾斜をもたせながら7~10段積み上げて高さ4mの石垣を築いており、角材の先端や側面には径7cm余りの丸木杭を打ち込んで固定している。

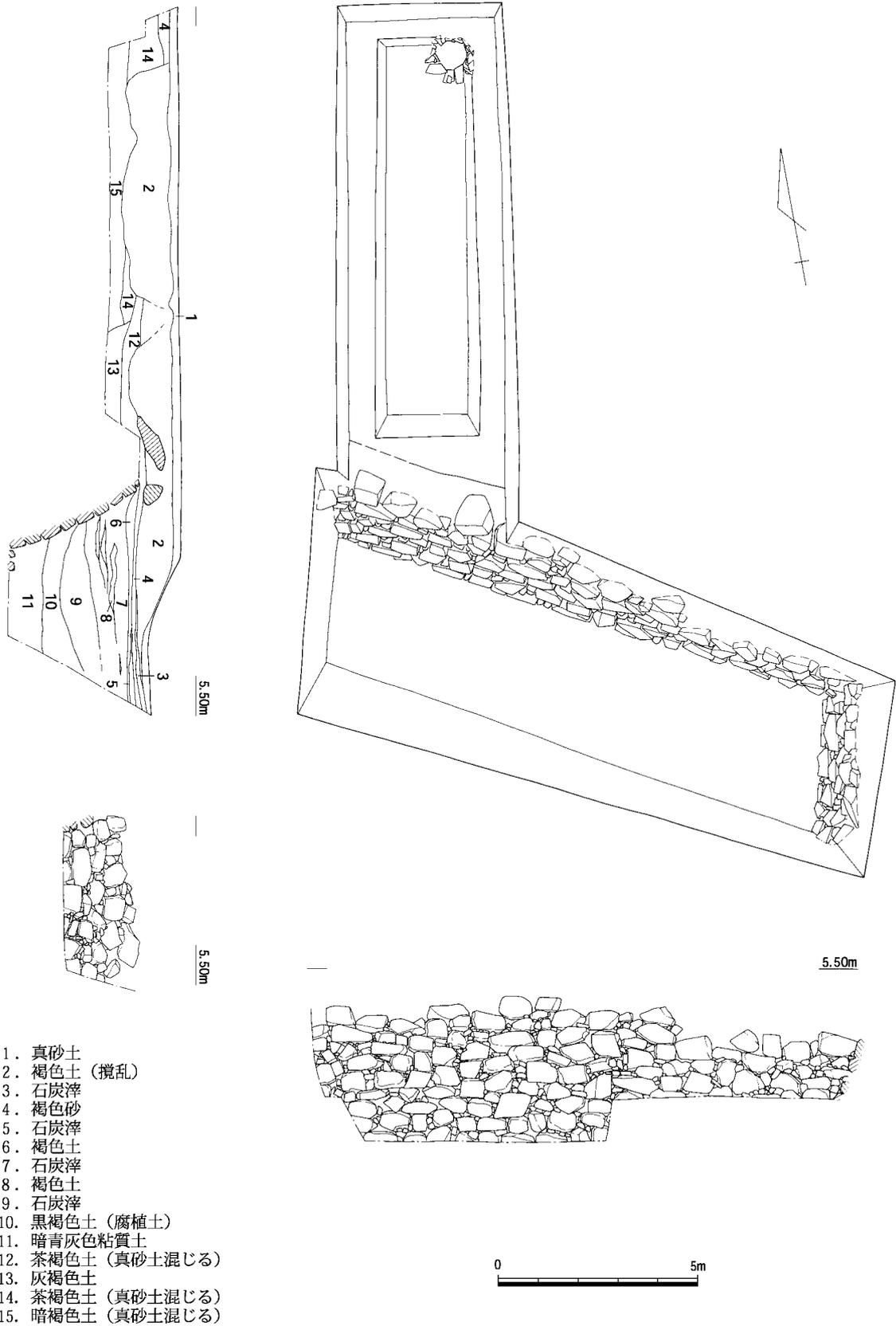
T3（第9図、図版3・4）

T13の東16mに設定したT3でも校舎解体による攪乱が地表下1.3mまで及んでいたが、校舎跡と校庭の間に残存する石垣を確認した。このため調査範囲を東に拡張し、東へ延びる石垣が105°の角度で南へ折れ曲がる内堀の角を確認した。東西にのびる石垣は、長さ60~130cm、幅40~70cmの築石を62°の勾配をもたせながら8~9段積み上げて構築しており、現存高は4.4mを測る。海拔-0.1mにある基底部は砂礫層の上に直接据えられており、T13で見られた胴木は確認できなかった。

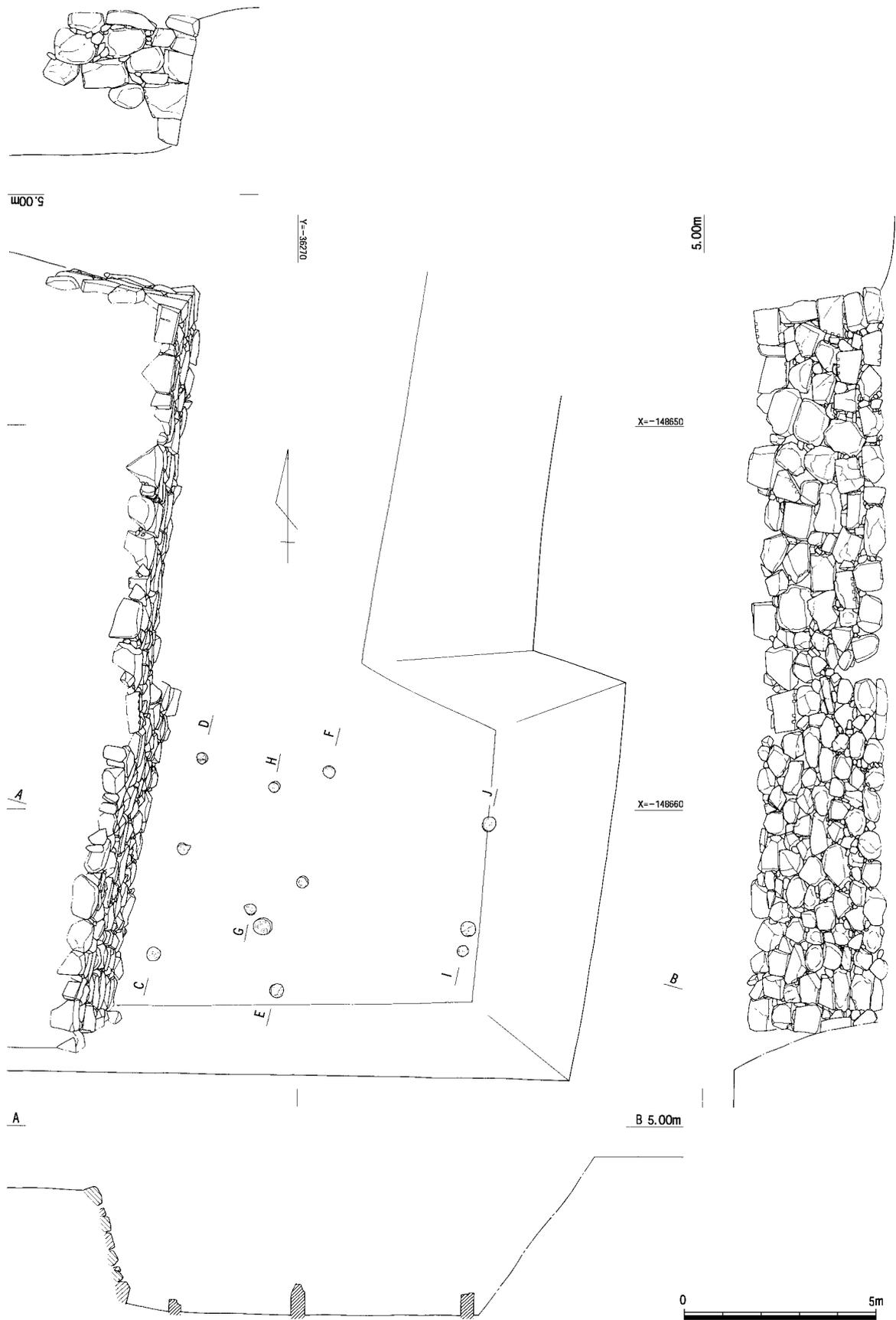
また、北東の隅で石組の井戸を検出した。長さ20~40cm、幅10~20cmの石材を7~8段積み上げて内径80cm、深さ170cmの井筒を構築しており、底面の海拔高は2.7mを測る。埋土からは肥前磁器の碗57や揚羽蝶紋の軒丸瓦1145が出土しており、17世紀末には機能を失っていたものと思われる。



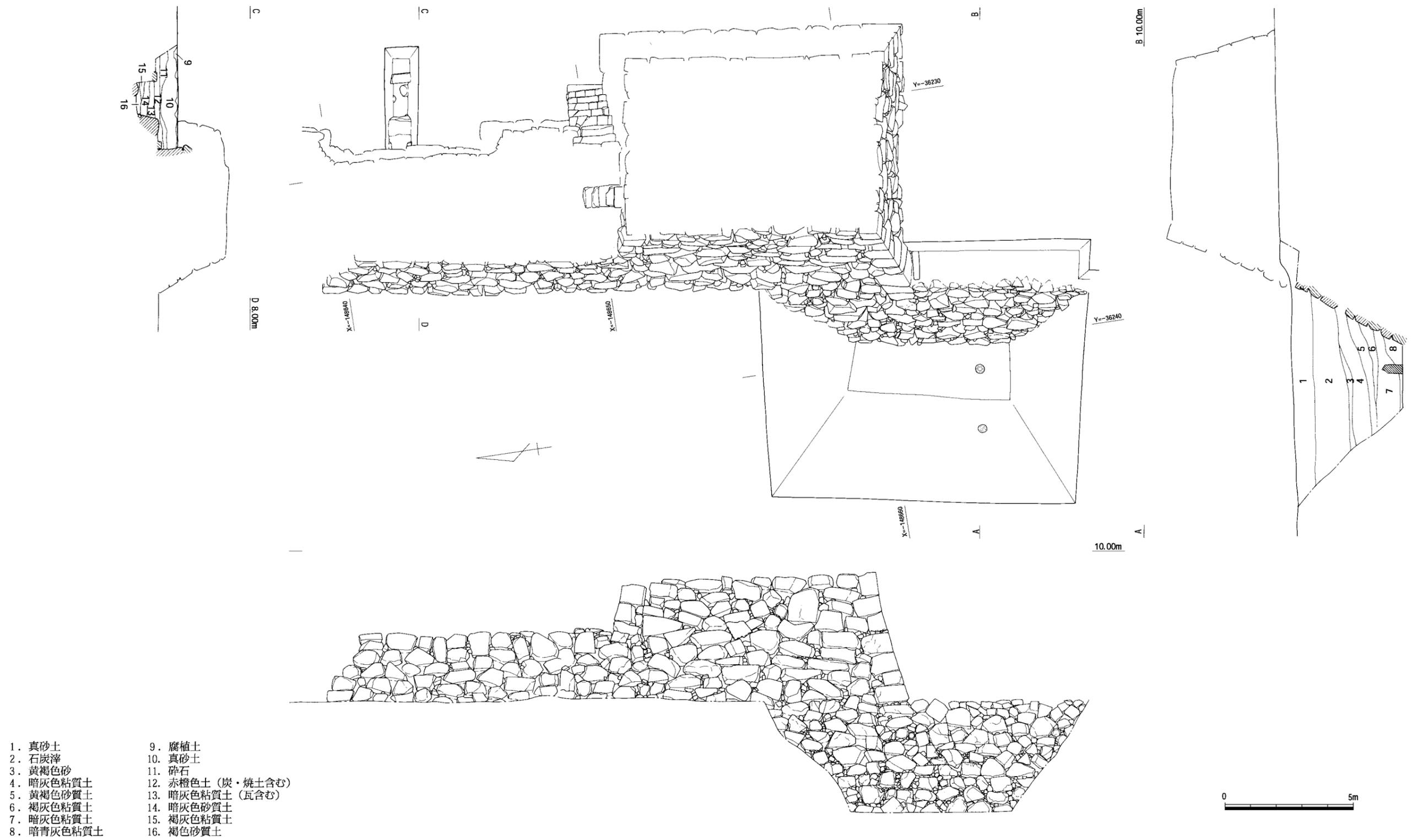
第8図 トレンチ13（1/150）



第9図 トレンチ3 (1/150)



第10図 外郭東辺石垣と橋脚（1/150）

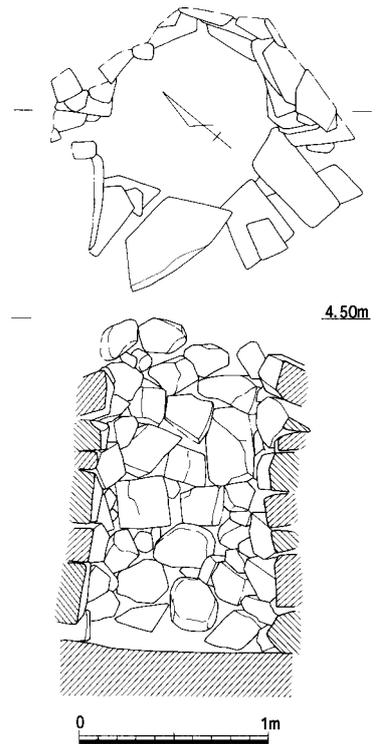


第11図 外下馬門と石壁 (1/150)

(2) 外下馬門・外下馬橋

外下馬門 (第11図、巻頭図版3)

外下馬橋の架橋位置を確認するため、外下馬門の前面を南北12m、東西10mの範囲で掘り下げを行った。その結果、地表下4.5m (海拔-0.2m) において石垣の基底部を確認した。基底部の石材は砂礫層上に直接据えられており胴木は確認できなかった。長さ50~110cm、幅40~80cmの築石を59~62°の勾配で積み上げているが、横目地が通る3段目以下は築石がやや小振りとなっている。外下馬橋の石垣は高さ4mあるが、橋の撤去後に小振りの石材を高さ50cmほど積んで上端を揃えている。外下馬門の檜台は高さ5.4m、堀底からは9.2mを測る。68°の勾配で積み上げられた築石は長さ60~160cm、幅40~110cmと大きく、矢穴を残すものもある。これに対し、外下馬門から北へ続く石塁は檜台以下の石垣と共通した築石を使用しており、檜台との間に時間差を認めてよいかもしれない。



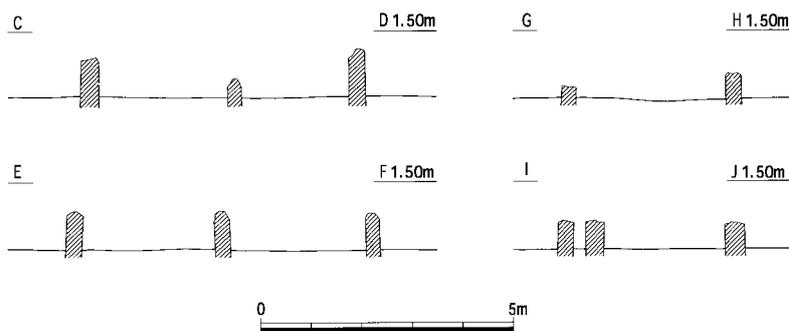
第12図 井戸 (1/40)

T12 (第11図、図版2)

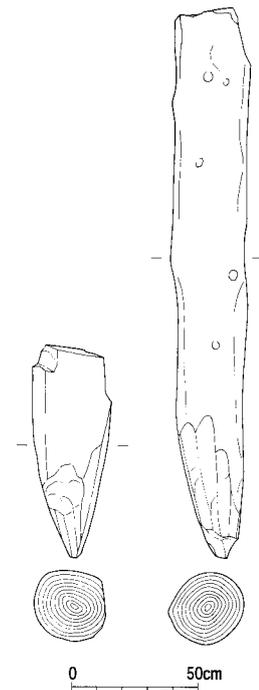
この石塁については改修を受けている部分にT12を設定し掘り下げを行った。その結果、石塁東面の基底部は海拔3.6mにあり、長さ50~110cm、幅40~80cm余りの築石を79°の勾配で4~5段積み上げ、高さ3.2mの石垣を構築していることが判明した。

外郭東辺 (第11図、巻頭図版3、図版4)

外郭側の石垣は長さ20mを測る東辺にのみ認められたが、この石垣は中央付近に見られる不整合を境にその南北で様相を異にしている。北側の築石は長さ60~130cm、幅40~90cmと大きく、矢穴の残る切石が多く見られるとともに、その勾配も80°ときつくなっている。これに対し南側は、長さ40~120cm、幅30~60cmと小振りの自然石を76°の勾配で8段ほど積み上げて構築している。その南端は縦目地を境に切石と接することから、当初幅8.6mで築かれた石垣の南北に新たな石垣が継ぎ足されたものと考えられる。この当初の石垣は、内堀の北~



第13図 外下馬橋の橋脚 (1/150・1/30)



(2) 外下馬門・外下馬橋

外下馬門（第11図、巻頭図版3）

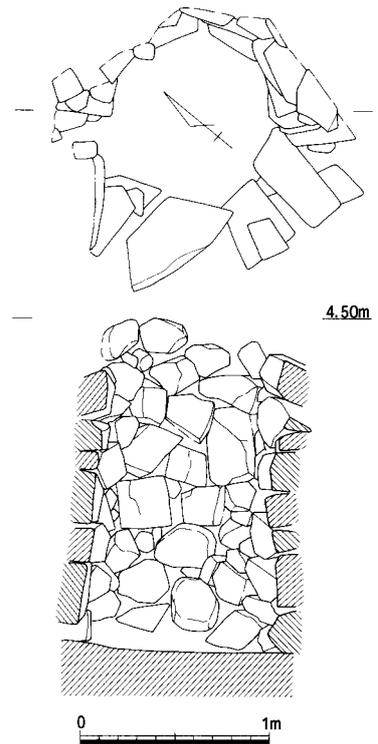
外下馬橋の架橋位置を確認するため、外下馬門の前面を南北12m、東西10mの範囲で掘り下げを行った。その結果、地表下4.5m（海拔-0.2m）において石垣の基底部を確認した。基底部の石材は砂礫層上に直接据えられており胴木は確認できなかった。長さ50～110cm、幅40～80cmの築石を59～62°の勾配で積み上げているが、横目地が通る3段目以下は築石がやや小振りとなっている。外下馬橋の石垣は高さ4mあるが、橋の撤去後に小振りの石材を高さ50cmほど積んで上端を揃えている。外下馬門の檜台は高さ5.4m、堀底からは9.2mを測る。68°の勾配で積み上げられた築石は長さ60～160cm、幅40～110cmと大きく、矢穴を残すものもある。これに対し、外下馬門から北へ続く石塁は檜台以下の石垣と共通した築石を使用しており、檜台との間に時間差を認めてよいかもしれない。

T12（第11図、図版2）

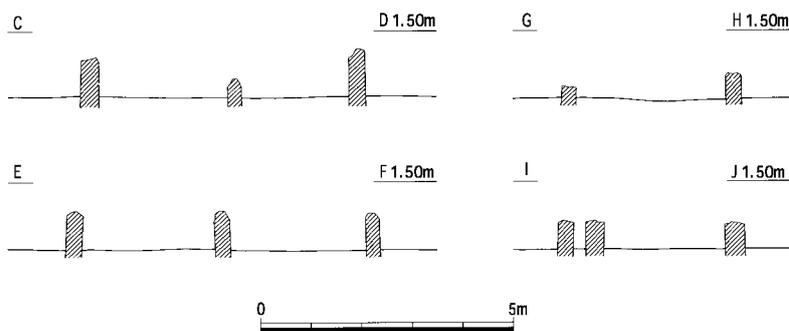
この石塁については改修を受けている部分にT12を設定し掘り下げを行った。その結果、石塁東面の基底部は海拔3.6mにあり、長さ50～110cm、幅40～80cm余りの築石を79°の勾配で4～5段積み上げ、高さ3.2mの石垣を構築していることが判明した。

外郭東辺（第11図、巻頭図版3、図版4）

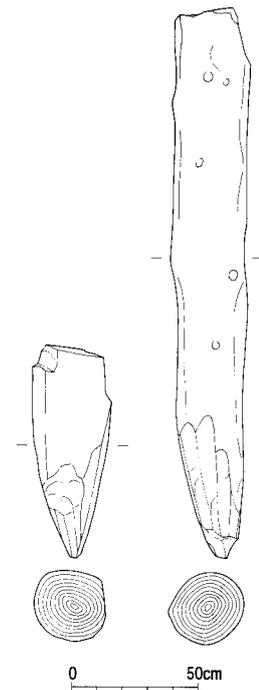
外郭側の石垣は長さ20mを測る東辺にのみ認められたが、この石垣は中央付近に見られる不整合を境にその南北で様相を異にしている。北側の築石は長さ60～130cm、幅40～90cmと大きく、矢穴の残る切石が多く見られるとともに、その勾配も80°ときつくなっている。これに対し南側は、長さ40～120cm、幅30～60cmと小振りの自然石を76°の勾配で8段ほど積み上げて構築している。その南端は縦目地を境に切石と接することから、当初幅8.6mで築かれた石垣の南北に新たな石垣が継ぎ足されたものと考えられる。この当初の石垣は、内堀の北～

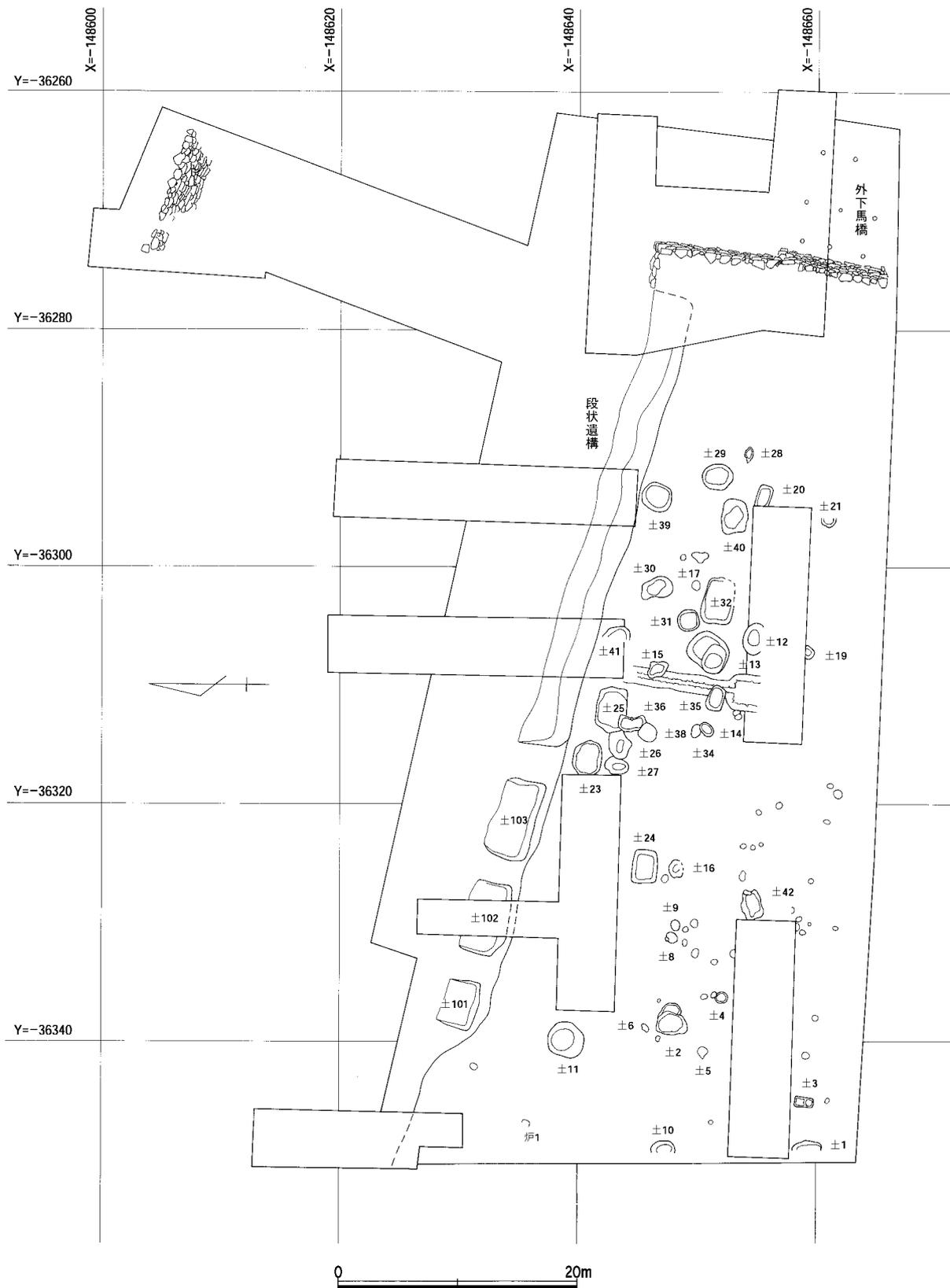


第12図 井戸（1/40）



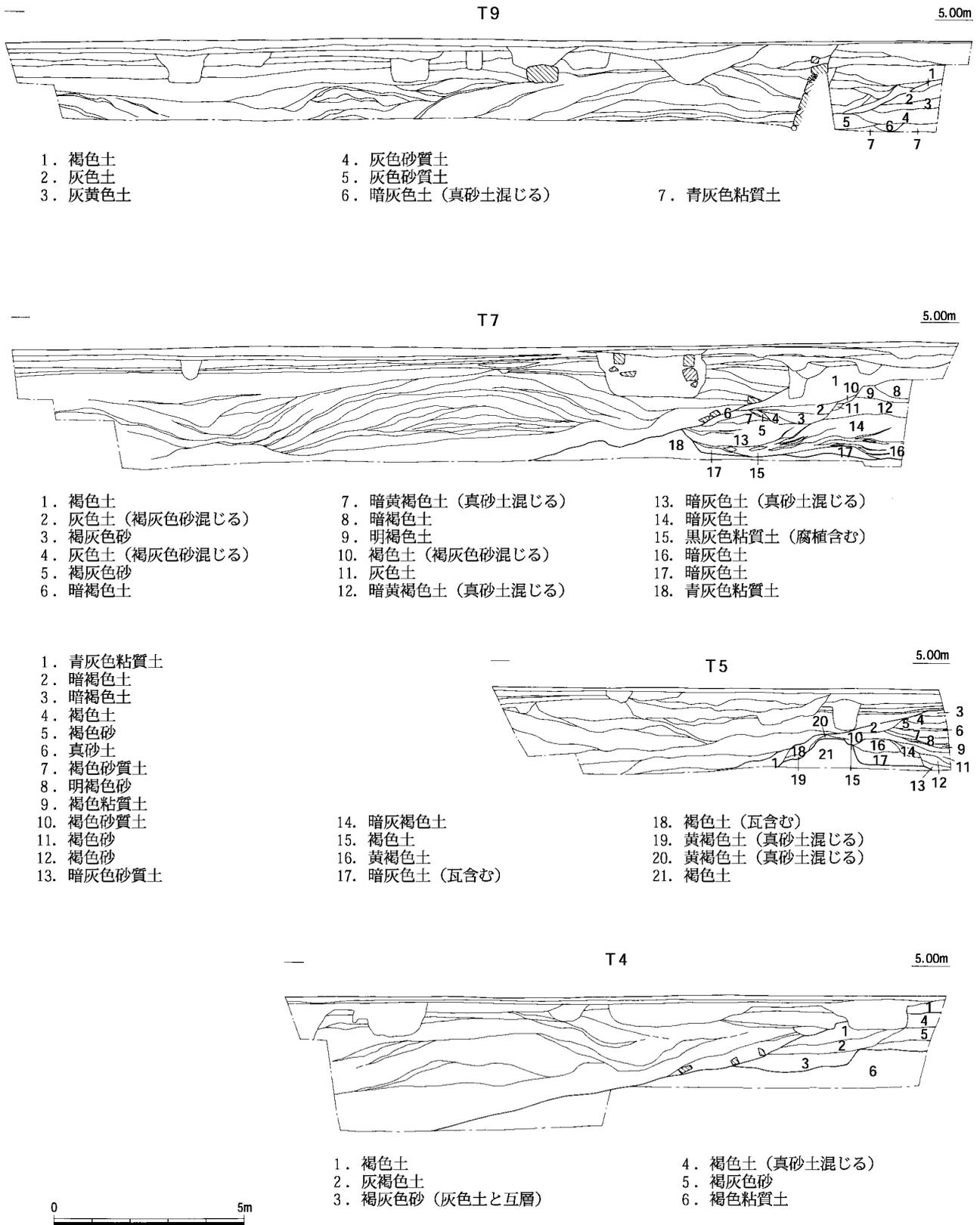
第13図 外下馬橋の橋脚（1/150・1/30）





第14図 近世遺構配置図1 (1/500)

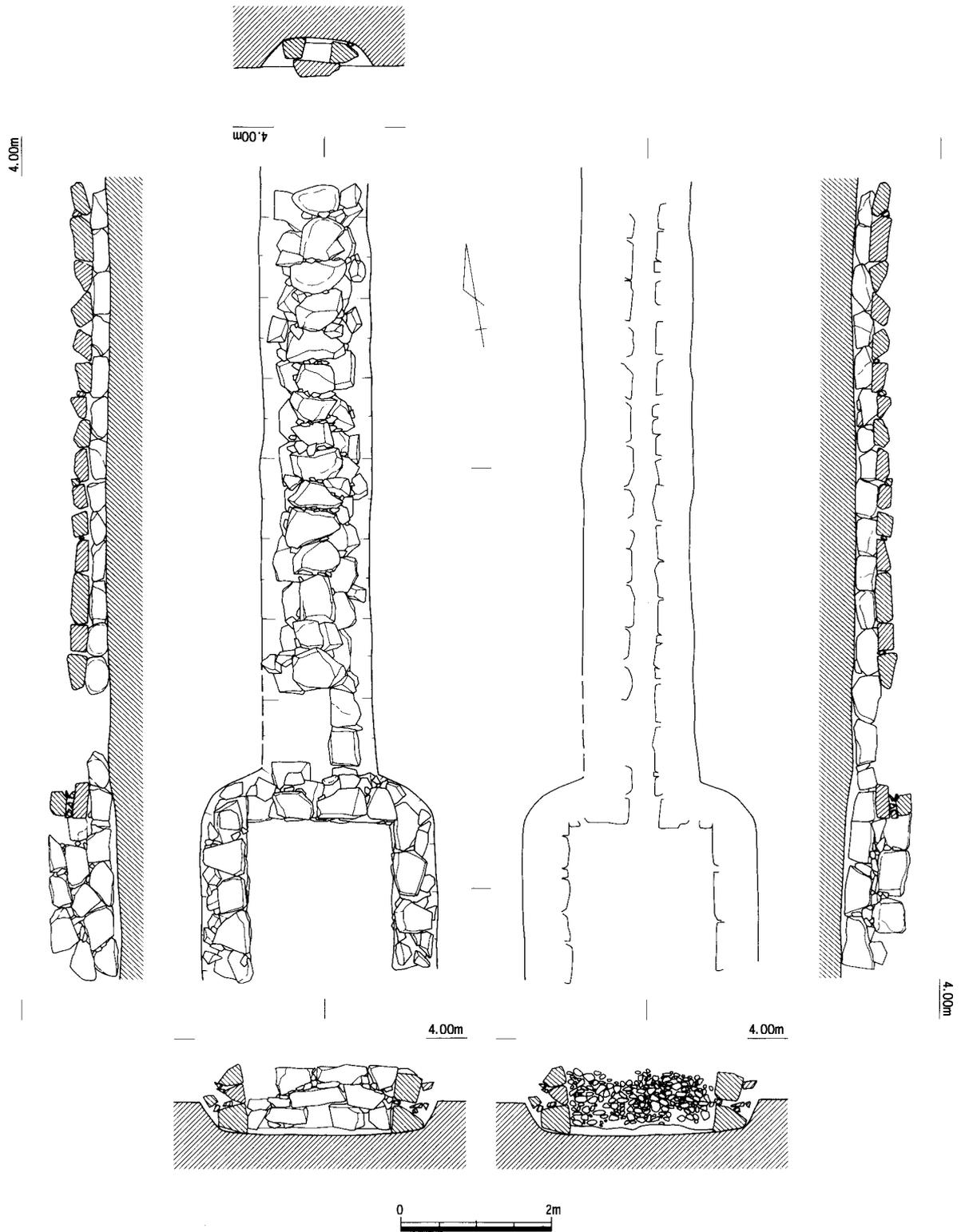
東辺の石垣に類似し、その位置からして外下馬橋のたもとを固める橋台として築かれたものと思われる。



第15図 内堀土層断面図（1/150）

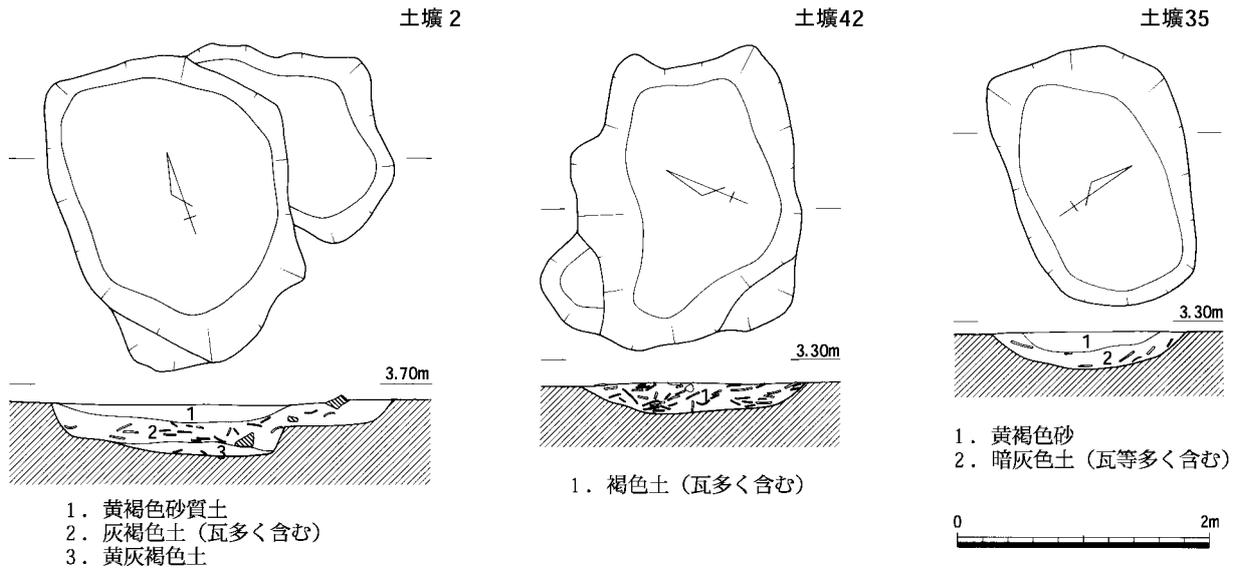
外下馬橋（第10・11・13図、図版4）

この石垣の前面で外下馬橋の橋脚と見られる木材が堀底に打ち込まれた状態で出土した。14本ある橋脚は径30～40cmほどの丸太材で、ツガ材1本を除いてすべてマツ材が使用されていた。その上面は



第16図 石組遺構（1/80）

水平面をなし、解体・修理に際して切断されたものと思われる。ここで橋脚の組み合わせを検討すると、432cmのI-J・E-F間は435cmある石垣・E-F間とほぼ一致し、切断面の高さも同一であることから同時期の可能性が強く、3本の橋脚からなる長さ584cm程度の橋台6基で橋桁を支えていたものと思われる。また、322cmあるG-Hは他の橋脚より低く、材も細いことからこれらに先行するも



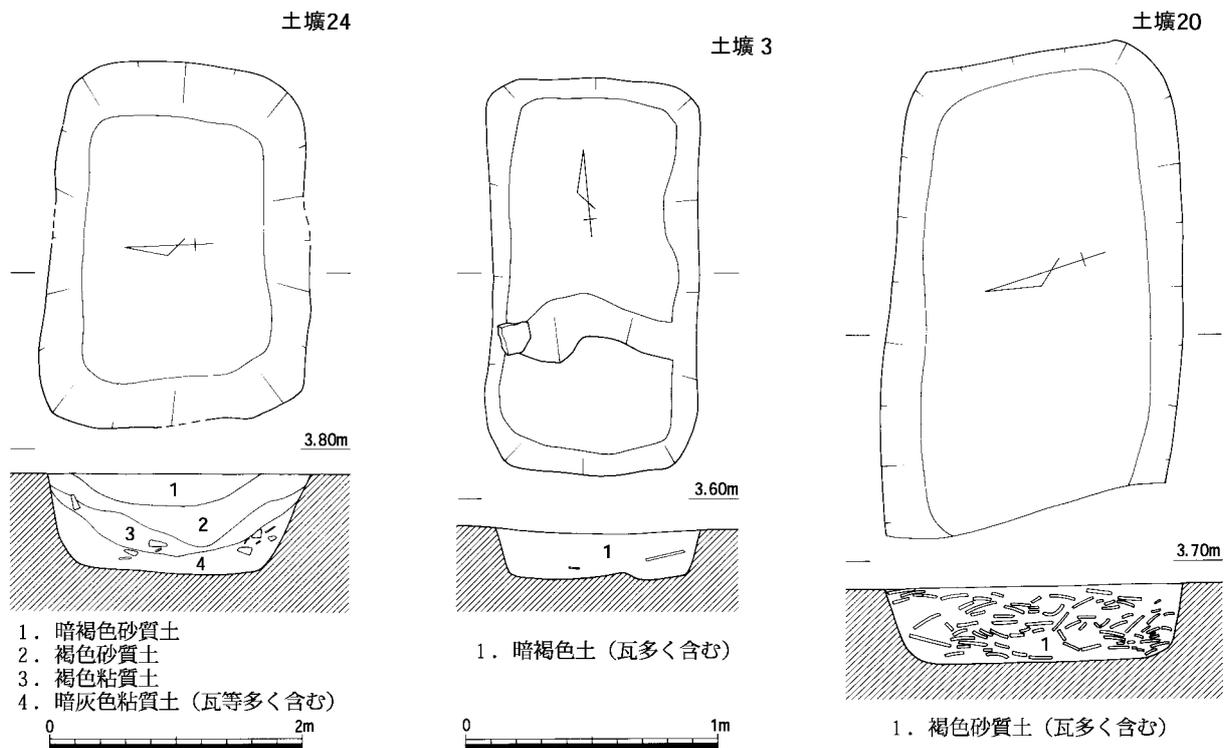
第17図 土壙2・42・35 (1/60)

のと思われる。これに組み合う可能性のあるのはI-Jの南端にある橋脚で、G-Hとの距離は556cmあり、堀幅からして7基の橋台が想定できる。現状では2本の橋脚しか検出していないが、3本で構成されていた可能性もあり、その場合の橋台の長さは644cm程度となる。

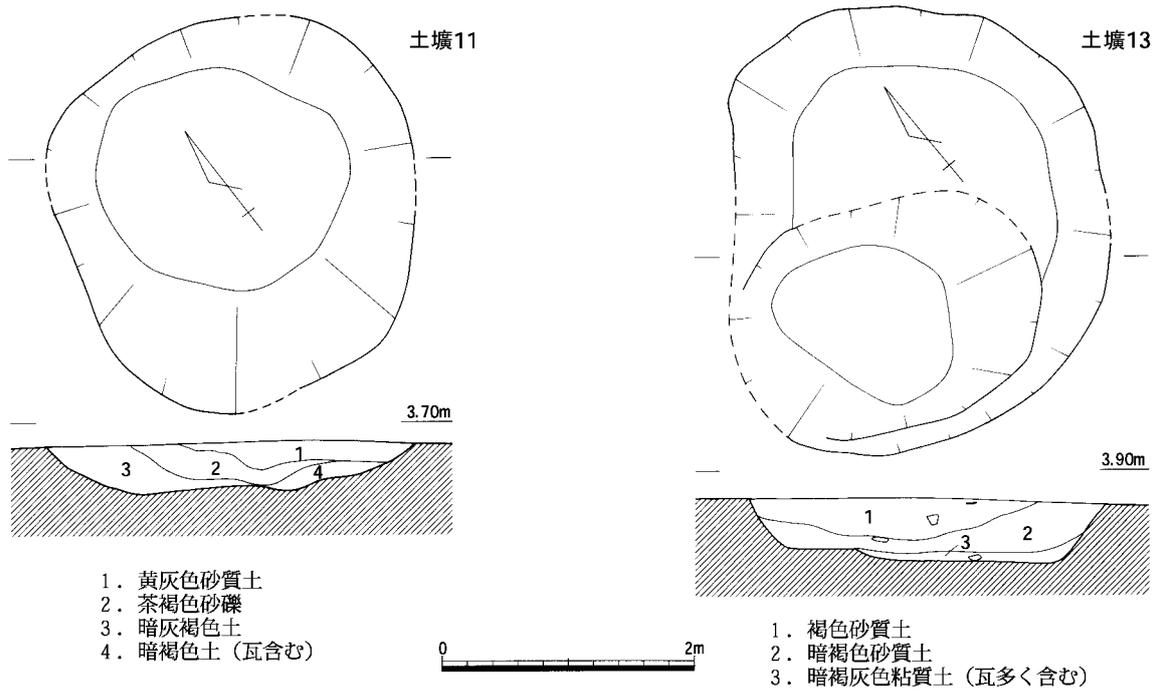
(3) 外郭

1. 外郭北辺 (第15図、図版5)

内堀の南辺にあたる外郭の北側は、外下馬橋のたもとに築かれた石垣が西に折れ曲がり4mほどのびて終わる。それより西では15~18°の傾斜をもって下る斜面となっている。明治時代には高さ2m



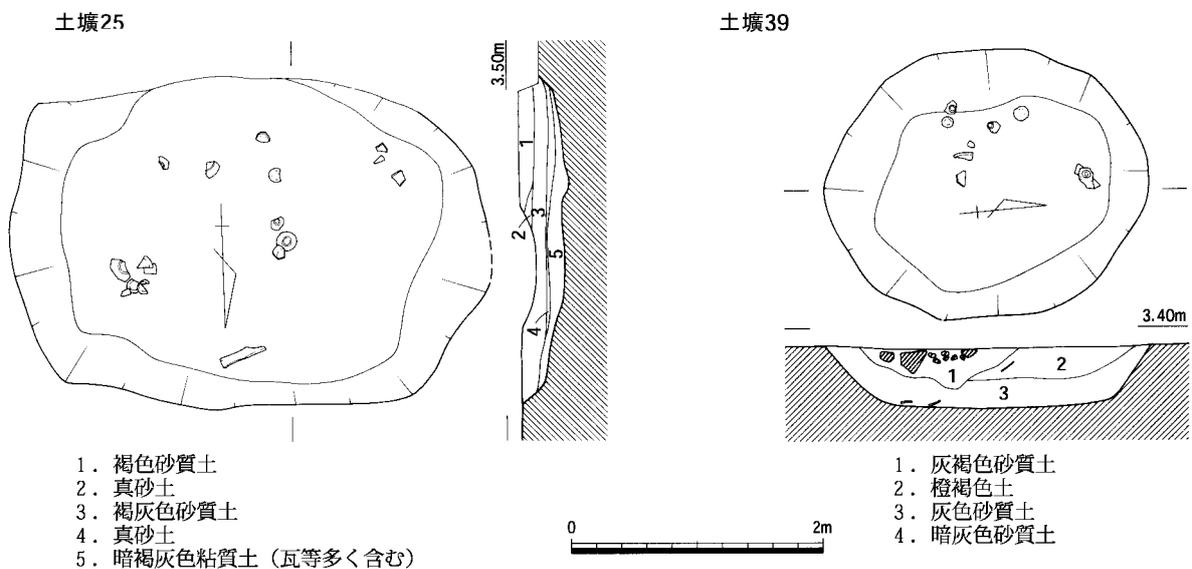
第18図 土壙24・3・20 (1/60・1/30)



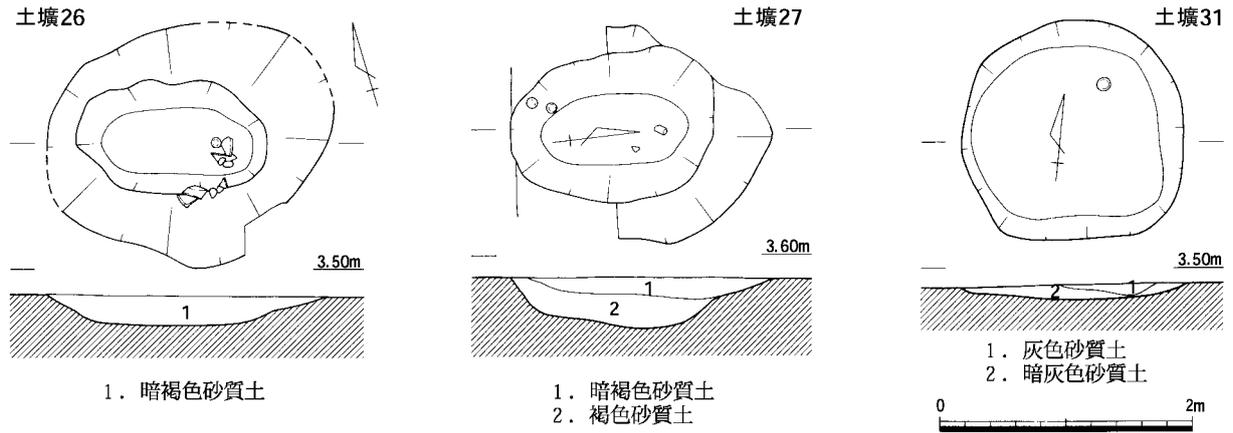
第19図 土壌11・13 (1/60)

ほどの石垣が26mにわたって築かれているが、それ以前に石垣が存在した形跡は認められない。

ただし、その肩口に幅3.8m、深さ1.3mの段状をなす遺構が40mにわたって検出された。また、その西側では長さ4.1~6.9m、幅2.9~3.8m、深さ0.7mのコ字形をなす土壌101~103が2.1~3.2mほどの間隔をもって検出されている。これらの内部には粗砂が自然堆積しており、磁器の杯16・18・21、碗28・33・41・43・46~48・52・55・59~62・77~79、猪口38、皿95・100・101・111・113、蓋物126・127、香炉157、瓶145~147、仏花瓶、仏飯器164、水滴、陶器の椀248・252・256・258・259・261・264~267、鉢、水注、土瓶、瓶312、土鍋、火入、灰吹324、炆器の匣鉢、搦鉢、灯明皿、土器の鍋、羽釜、焙烙などが出土したが、その性格については明らかにできなかった。



第20図 土壌25・39 (1/60)



第21図 土壌26・27・31 (1/60)

2. 上層の遺構 (第14図、図版5)

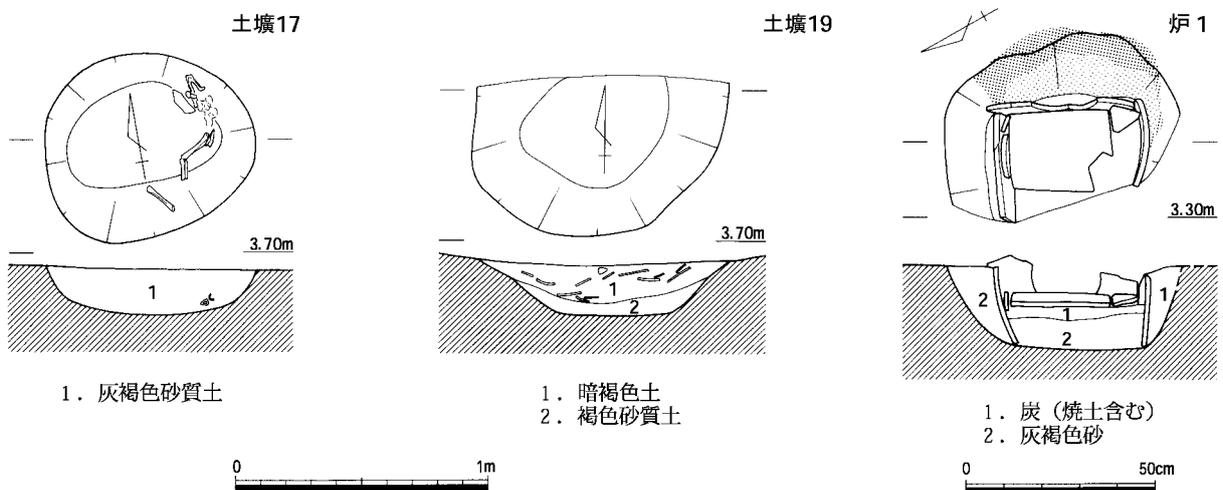
学校関連の造成土の下で検出したもので、基礎等による攪乱を受け遺存状態は必ずしも良好ではない。塵芥溜と見られる土壌が多く、榎馬場の管理が緩んだ19世紀前半のものが大半である。

石組遺構 (第16図、図版5)

外郭のほぼ中央で検出した暗渠と見られる石組の遺構で、洪水砂層を掘りこんでつくられている。長さ40~60cm、厚さ20~40cmの石材を2~3段積み上げて、一辺200cm、深さ85cmの方形の石組をつくり、その南辺中央から内堀に向けて長さ40~60cm、厚さ25cmほどの石材を2列に並べて幅30cmの溝を設け、その上を長さ50~80cm、幅40~60cmの石材で蓋をしていた。集水桝と見られる方形の石組内には拳大の円礫を詰め、その上を薄い黄褐色の粘土で覆っていた。集水桝から排水溝にかけての底面は海拔2.8mとほぼ一定である。

土壌 (第17~22図)

長さ252cm、幅267cm、深さ42cmを測る土壌2は外郭西区の中央西よりで検出した。二つの土壌が重複した形状をなすが明確な切り合いは認められない。埋土から肥前磁器の碗、鉢、油壺139・仏花瓶、149、陶器の椀247・255、皿、鉢300、土瓶286、土鍋303・304、瓶、植木鉢319、炆器の匣鉢585、



第22図 土壌17・19・炉1 (1/30・1/20)

播鉢、灯明皿、土器の焙烙**874**、焜炉**896・897**などが出土している。

土壌2の東10mに位置する土壌24は長さ292cm、幅210cmの長方形をなし、深さ80cmある埋土からは肥前磁器の杯**14**、碗**30・31・35・42・45・58・64・65・67・68・72~74**、皿**107・109**、鉢**92**、段重**130**、瓶**141**、仏飯器**161**、香炉、置物**125**、陶器の椀**245・246・250・268**、皿、鉢、水注**277**、土瓶**280・285**、土鍋、瓶、火入**322・323**、灯明台**327・330**、炆器の鉢**569・571**、匣鉢**580~582・585**、播鉢**591**、土器の鍋、焙烙、焜炉**895**などが出土している。このうち、磁器の瓶**141**や炆器の鉢**569**は土壌35のものと同接合している。

長さ210cm、幅145cm、深さ32cmの楕円形をなす土壌35は、石組遺構を壊してつくられている。埋土から肥前磁器の碗、皿、段重**131**、香炉、油壺**140**・水滴**165**、陶器の椀、皿、水鉢**316**、土瓶**278・284**、土鍋、瓶、炆器の花入**589**、灯明皿、鉢**570**、匣鉢**583**、土器の火鉢**890**、焙烙などが出土した。

外郭西区の南西で検出した土壌3は、長さ159cm、幅85cm、深さ19cmの長方形を呈する。埋土から多量の瓦と磁器の皿、陶器の椀、灯明皿、銅の簪などが出土している。

T8の東端にかかって検出した土壌20は、長さ195cm以上、幅118cmの長方形をなし、深さ30cmある埋土から多量の瓦が出土している。

外郭西区の北西に位置する土壌11は、長さ320cm、幅292cm、深さ38cmの円形を呈する。埋土から磁器の碗**66**、皿、蓋物**123・129**、陶器の椀**244・260**、皿、土鍋、灯明台、炆器の匣鉢、灯明皿などが出土している。

石組遺構の東に接する土壌13は長さ359cm、幅297cmの楕円形を呈し、深さ48cmにある底面は南西側が一段低くなっている。出土遺物には磁器の杯**15・17**、碗**32・39・40・49・53・54・63・71**、猪口**36**、皿**96・104・106**、蓋物**124・128**、段重、仏花瓶**148・150**、香炉、陶器の椀**269**、皿、瓶**311・314**、土瓶**281・282**、土鍋、水鉢、火入、灯明台**331**、甕**335**、炆器の皿**563・564**、瓶**574**、匣鉢**579・586**、灯明皿、播鉢**593**、土器の鍋、焙烙、植木鉢、火鉢、焜炉などが出土している。

外郭東区の北西に位置する土壌25は長さ385cm、幅265cm以上の楕円形をなし、深さは40cmある。磁器の杯**20・23**、碗**171**、皿**115・116**、鉢、瓶、仏花瓶、陶器の椀**263**、皿、土瓶、炆器の灯明皿、播鉢、土器の羽釜、火鉢、煙管のほかシカやマダイなどの動物遺体が出土している。

土壌22の西に接して検出した土壌26は長さ236cm、幅193cm、深さ23cmの楕円形を呈し、磁器の碗、皿、陶器の椀、皿、炆器の播鉢**594**、土器の皿、焼塩壺蓋**827**、火鉢**886**を出土した。

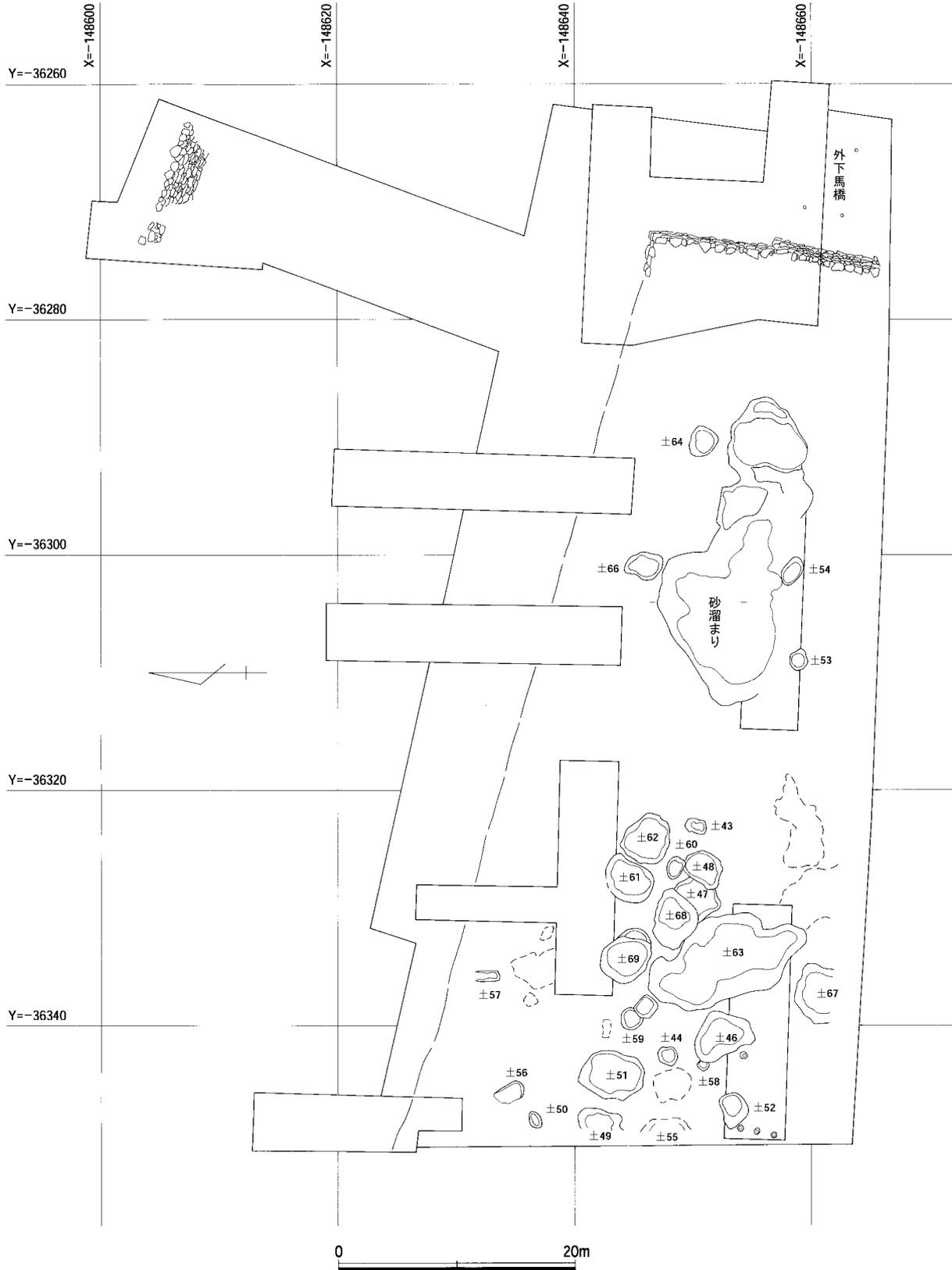
土壌26の西に接する土壌27は、長さ207cm、幅177cm、深さ40cmの楕円形をなす。出土遺物には磁器の碗、皿、陶器の椀、炆器の播鉢**592**、土器の皿がある。

長さ258cm、幅212cm、深さ47cmの楕円形をなす土壌29は、土壌20の北2mで検出した。埋土からは磁器の碗、皿、香炉、陶器の椀、土器の皿**754**、羽釜を出土している。

土壌13の北東0.5mにある土壌31は長さ175cm、幅174cm、深さ11cmの不整な円形をなす土壌で、磁器の碗、皿、香炉、土器の皿**770**が出土した。

土壌17は長さ83cm、幅73cm、深さ18cmの楕円形を呈する土壌で、土壌31の東1.5mに位置する。出土した獣骨からイヌの埋葬施設と考えられる。

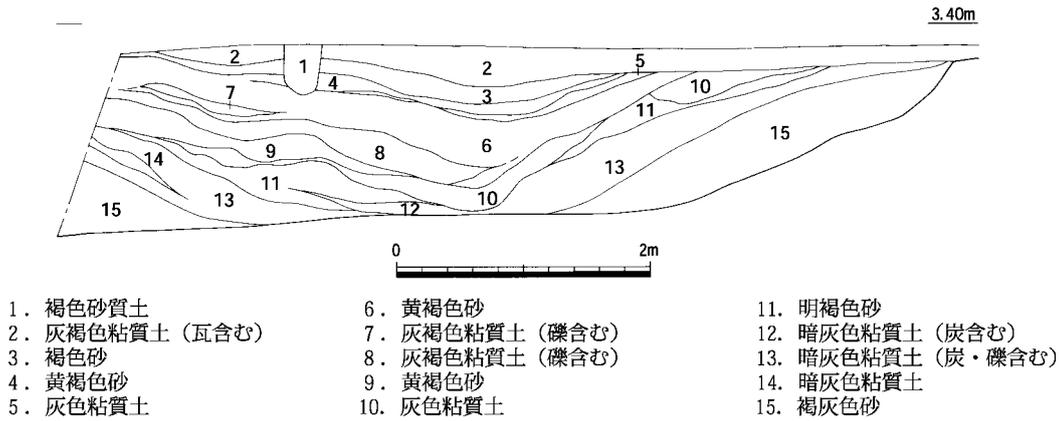
T8の南壁にかかって検出した土壌19は幅100cm、深さ20cmを測り、楕円形をなすものと想定される。陶器の椀、皿、瓶**307**、土瓶、炆器の播鉢、灯明皿、土器の羽釜、火鉢が出土した。



第23図 近世遺構配置図2 (1/500)

炉 (第22図)

炉1は径65cm、深さ25cmの円形をなす掘り方内に、平瓦を一辺37cm、深さ10cmの箱形に組んだもので、掘り方にも被熱が見られることから地床炉をつくり替えたものと思われる。



第24図 砂溜まり土層断面図 (1/60)

3. 中層の遺構 (第23図)

外郭全域を覆う洪水砂の下面で検出した遺構で、砂溜まりや土壇、柱穴などがある。埋土に砂を含むものが多いが、これら全てが洪水時に機能していたかどうかは明らかでない。

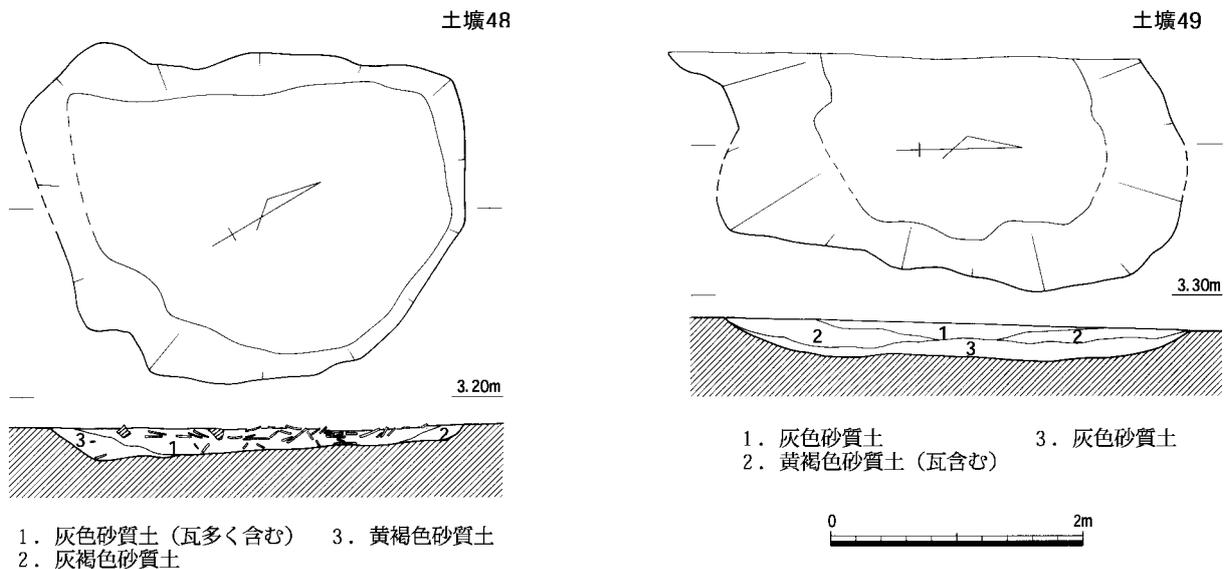
砂溜まり (第23・24図)

砂で埋積した窪みでT8にかかって検出した。長さ26.4m、幅10m以上あり、深さ1.5mの底面には階段状の凹凸がある。壁面が大きく抉れている箇所があり、洪水等で洗掘された痕跡と見られる。埋土からは磁器の杯**169**、碗**188**、陶器の椀**366・400**、皿**466・504**、鉢**538・561**、炆器の鉢**648・667・670・686**、播鉢**708・716**、瓶**722**、土器の皿、焼塩壺**841・852・865**など下層と同じ陶磁器や瓦が出土している。

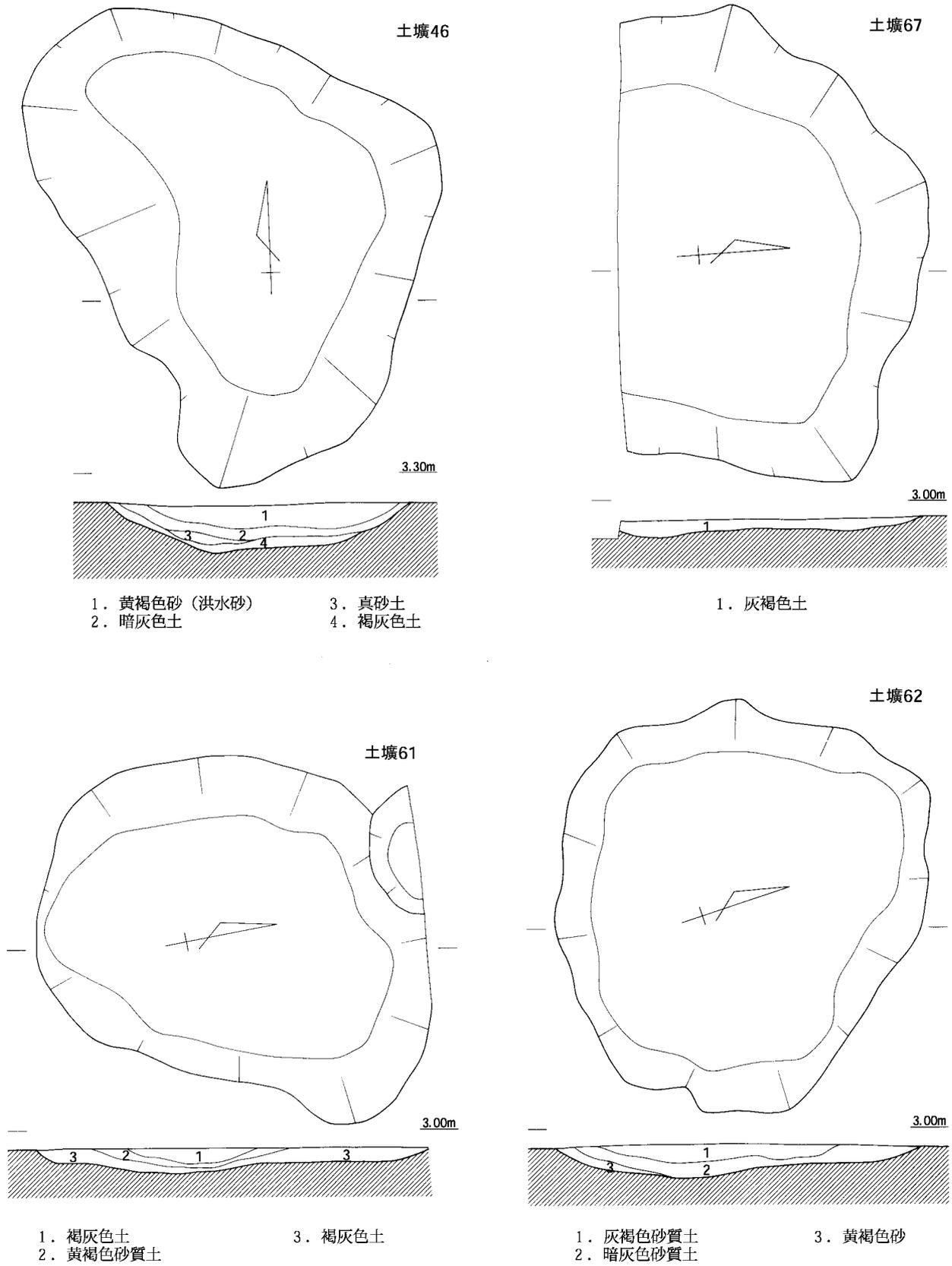
土壇 (第25～27図)

外郭西区の中央東よりで検出した土壇48は、長さ359cm、幅258cmの不整形をなし、深さ24cmの埋土からは多量の瓦とともに唐津の皿、志野の向付、備前の播鉢、土器の皿、鍋、焼塩壺が出土した。

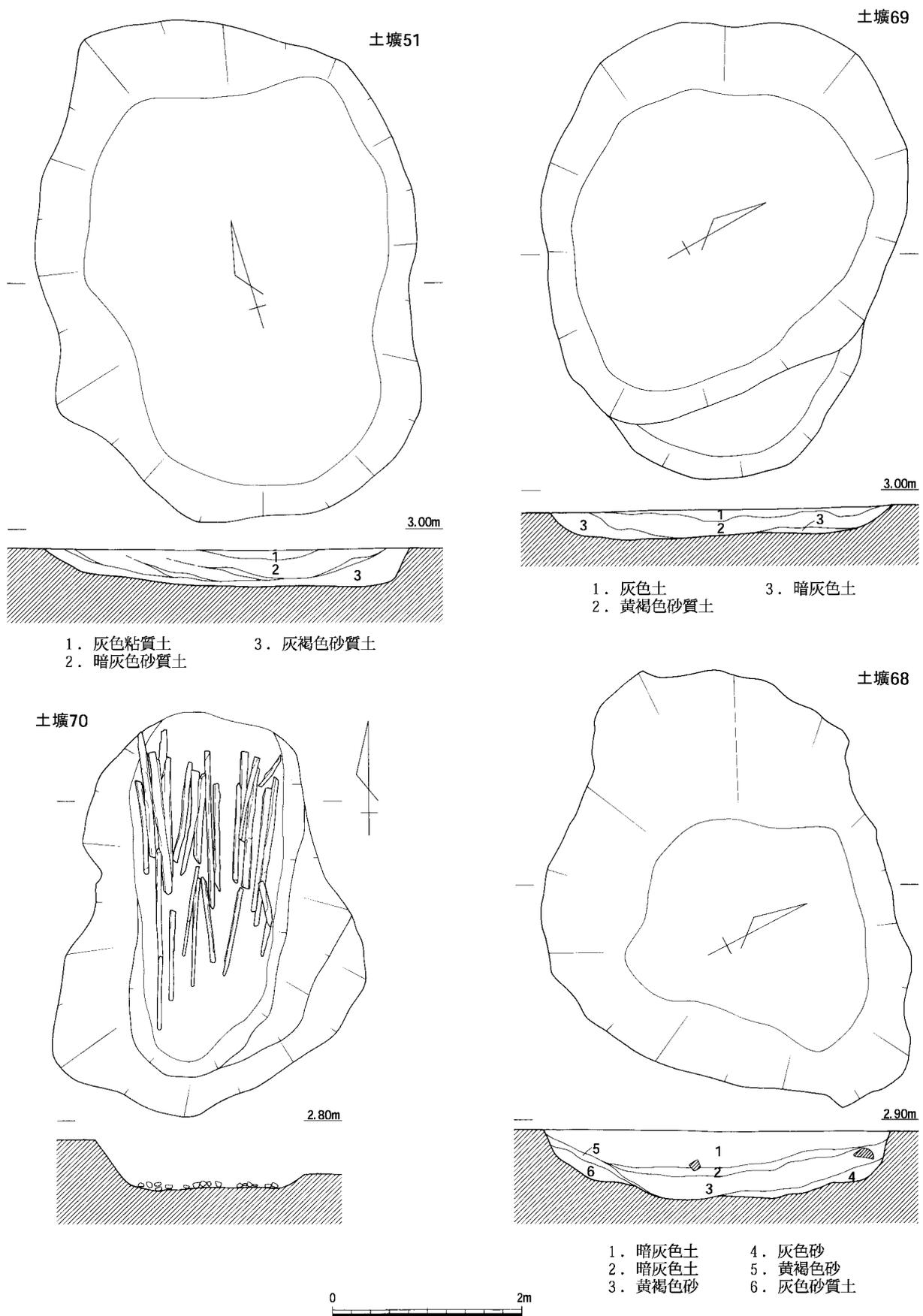
土壇49は外郭西区の西壁にかかって検出した。長さ369cm、深さ29cmの不整形をなし、唐津の皿、甕、土器の皿、焼塩壺が出土している。



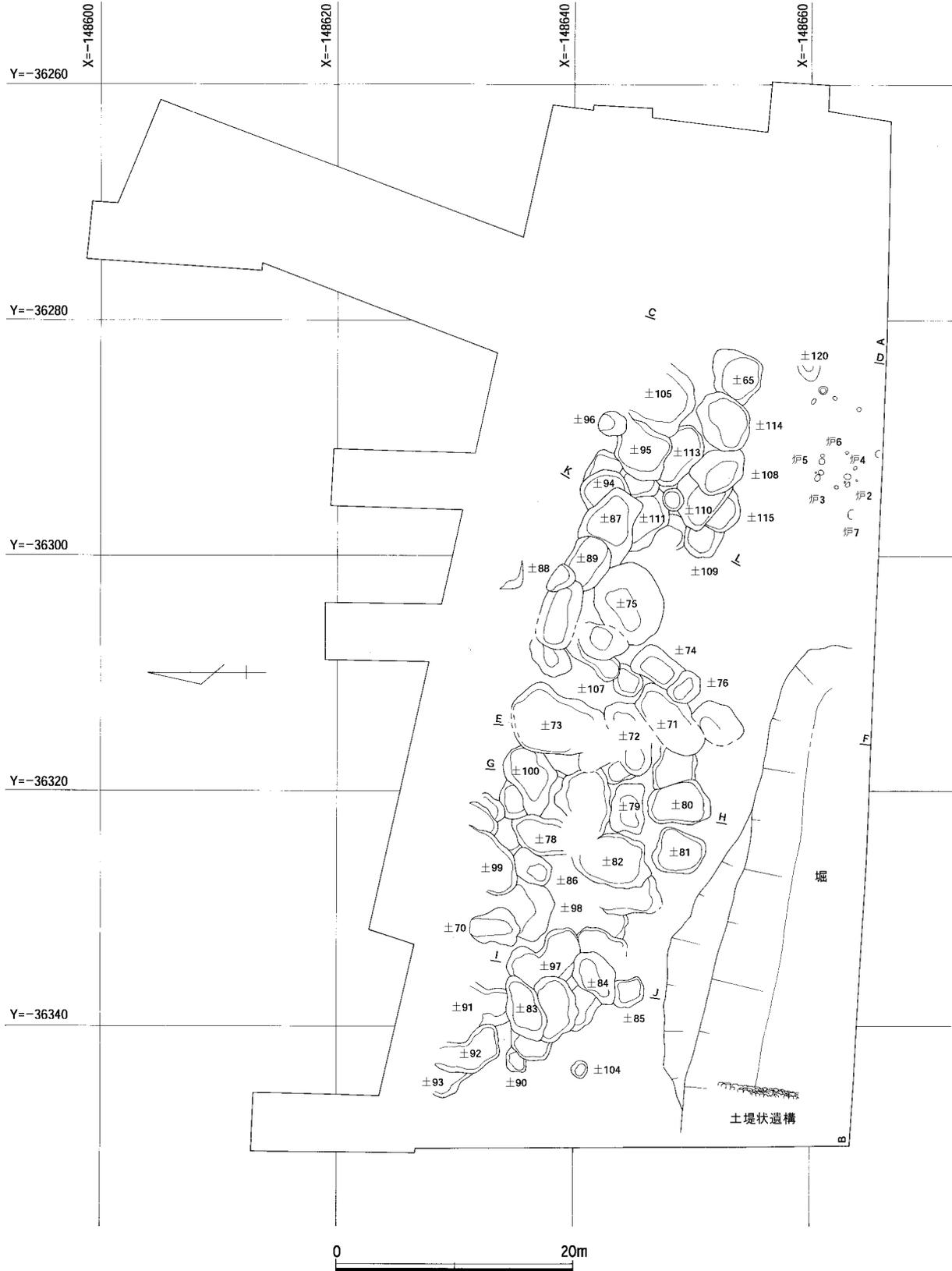
第25図 土壇48・49 (1/60)



第26図 土壙46・61・67・62 (1/60)

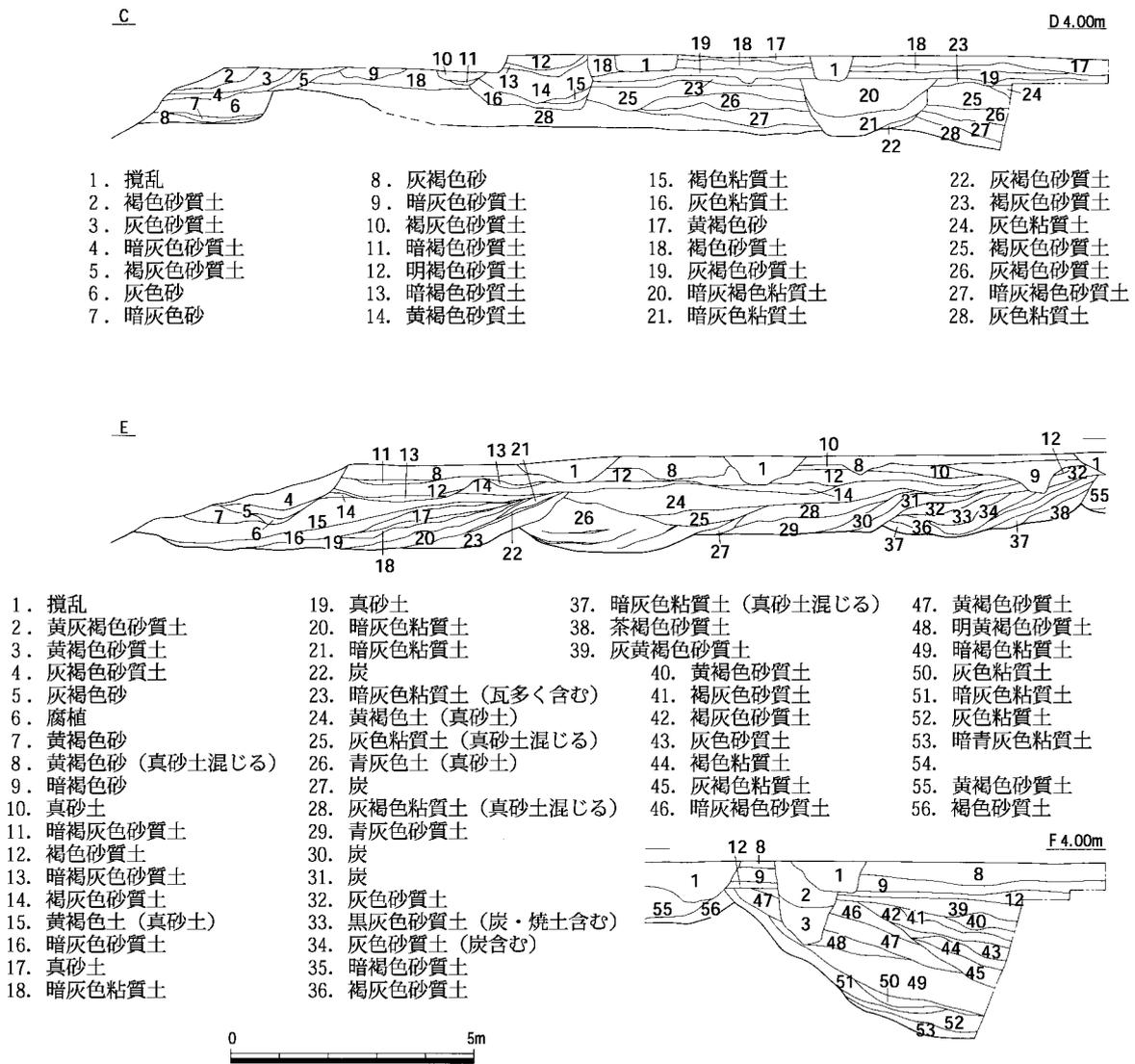


第27図 土壌51・70・69・68 (1/60)



第28図 近世遺構配置図3 (1/500)

T 6 にかかって検出した土壙46は、長さ・幅443cm、深さ50cmの三角形を呈する。埋土からは青花の碗196・206、白磁の皿、唐津の椀396・478や片口540、瀬戸の椀、志野の向付、上野・高取の甕、備前の鉢649・672、播鉢711、焼台739、土器の皿、焼塩壺836、火鉢892、漆椀が出土している。



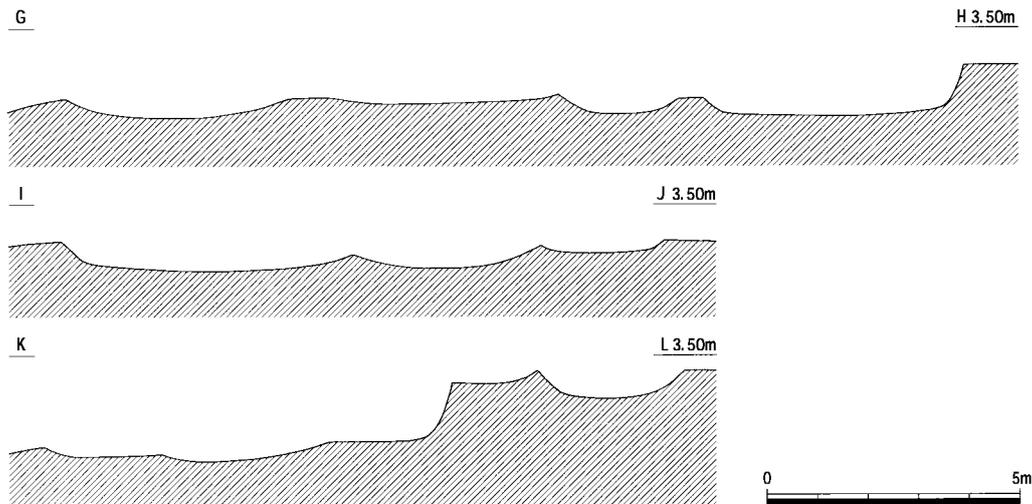
第30図 外郭土層断面図2 (1/150)

土壌61は長さ421cm、幅338cm、深さ27cmの楕円形を呈し、T5の南壁にかかって検出した。青花の碗**186**、唐津の椀や皿、志野の向付**517**、備前の鉢**676**や播鉢、甕が出土している。

長さ436cm、幅384cm、深さ36cmの不整な楕円形をなす土壌62は、土壌61の南東に接して検出した。埋土からは青花の碗、白磁の皿、唐津の椀や皿**424**、瀬戸の椀、備前の平鉢や播鉢、土器の皿や鍋、焼塩壺**863**、弾型**1585**が出土している。

外郭西区のほぼ中央に位置する土壌63は、長さ1,405cm、幅712cm、深さ25cmの南北に長い溝状の窪みである。出土遺物には青花の碗**193・198・201・205**、唐津の杯**357・360**や椀**382・390・394・395・397**、皿**458・459・461~463・470・472**、片口**541**、鉢**539**、瓶**554・555**、織部の向付**531**や鉢**532**、備前の椀**641**や平鉢**655・659**、鉢**670・676・687・692**、播鉢**706・709・717・718**、瓶、甕**737**、焼台**740**、土器の皿や鍋、焼塩壺**847・861**のほか、棟込瓦**1330**や墨書木製品**1496**、硯**1534**、切羽**1577**、シカやイノシシ、アカニシや魚類などの動物遺体が見られる。

土壌67は外郭西区の南壁にかかって検出した幅481cm、深さ17cmの楕円形に復元される土壌で、出土遺物には青花の碗**184**、備前の壺**721**がある。



第31図 下層土層断面（1/150）

長さ532cm、幅402cm、深さ38cmの不整な楕円形をなす土層51は土層49の東1mに位置する。青花の碗**182**、白磁の碗や皿**225**、唐津の椀や皿**465**、瀬戸の椀、志野の向付、備前の平鉢、土器の皿や焼塩壺のほか、多量のアカニシが出土した。

土層68は土層61の南西1mで検出した土層で、長さ512cm、幅401cm、深さ74cmの不整な楕円形を呈し、多量の瓦とともに備前の椀**640**などが出土している。

土層68の北西1mに位置する土層69は、長さ492cm、幅369cm、深さ30cmの楕円形をなす。白磁の皿**222**、唐津の椀**341**や皿**204・485**、片口**543**、瀬戸の皿**411**、志野の向付**511・514**、土器の焼塩壺**855**、北宋銭が出土した。

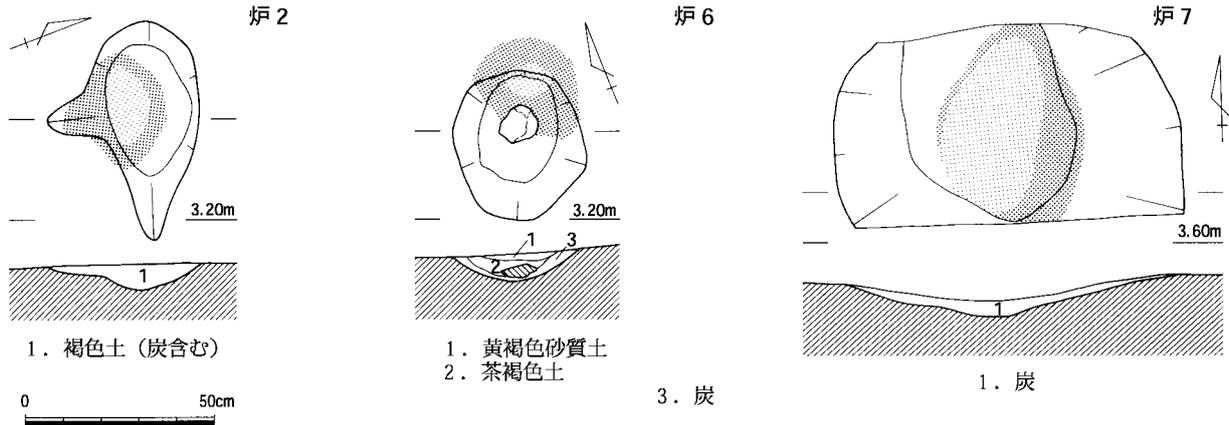
4. 下層の遺構（第28図、巻頭図版2）

造成土と見られる暗褐色土や真砂土の下で検出した遺構で、外郭の北半に集中する土層や、南東で検出した鍛冶炉、南西に位置する堀などがある。

土層（第28～31図、図版6）

外郭の北半を掘りこんでつくられており、長さ7～20m、幅5～13m、深さ0.5～1mの不整な楕円形を呈するものが多い。土層底の海拔高は1.2～2.4mで北東に向かって低くなる傾向にあるが、隣接する土層間では一定で掘削単位を明瞭に識別できない箇所も見られる。土層断面を観察すると、南から掘削がはじまった土層は塵芥廃棄後、順次埋め戻しながら北へ向けて掘削を進めており、掘り方に明瞭な切り合いが認められない箇所があるところを見ると短期間のうちに連続して掘削されたものと思われる。

土層内からは、陶磁器や瓦、木製品（漆椀・箸・篋・折敷・曲物・下駄・部材）、石製品（硯）、土製品（土錘・羽口）、金属製品（銭・煙管・釘）、動物遺体（シカ・イノシシ・ウシ・ウマ・アカニシ）など多量の遺物が出土している。しかし、遺物が全く見られない土層や埋め戻しの過程で遺物が投棄されているものも多く、土層の掘削は塵芥処理以外に土取などの目的があった可能性もある。なお、外郭西区の北で検出した土層70は、長さ430cm、幅316cm、深さ54cmを測る楕円形を呈し、底面に並べられた径7cmほどの木材の上に柿状の板が重なり、その上を茅が覆った状態で出土している。



第32図 炉 2・6・7 (1/20)

炉 (第32・33図、図版6)

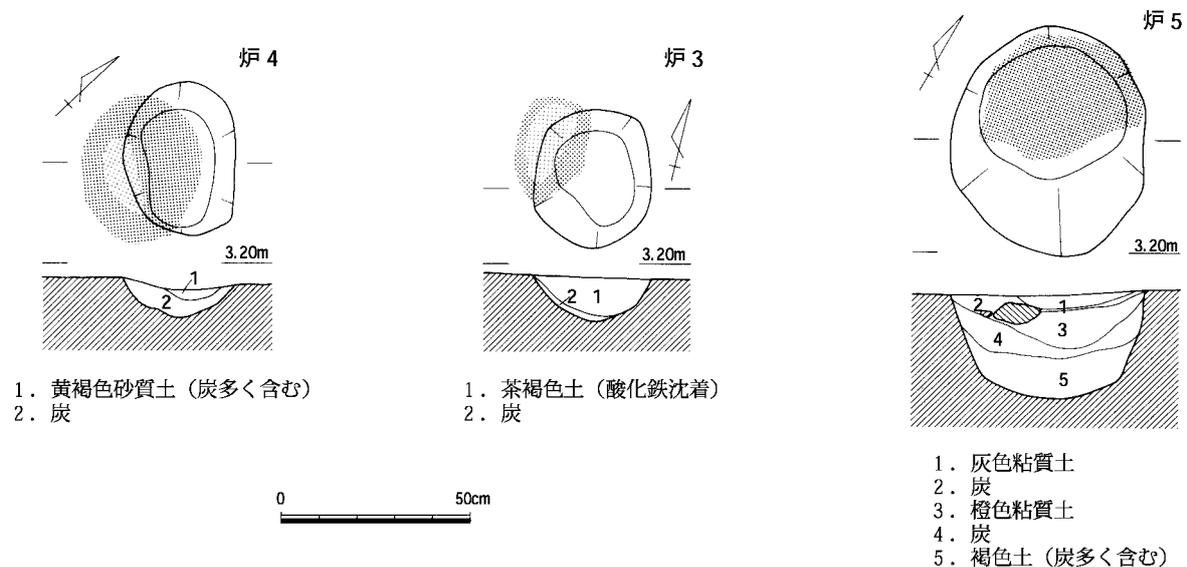
外郭東区の南側で6基の炉を検出した。海拔3.1mを測る炉の周辺は、砂礫層の地山の上に真砂土を東西9m、南北7m以上の範囲に薄く敷いて作業面を造成しているものの、建物を構成するような柱穴は検出できなかった。

炉2～4・6は長さ40cm、幅30cmほどの楕円形を呈する。掘り方は深さ7～10cmと浅く、炉2・6では南・北側、炉3・4では西側に強い被熱が認められる。また、長さ61cm、幅51cmの円形をなす炉5は、深さ27cmある掘り方を鉄滓を混じえた木炭で4cmほど残して埋め、その上に粘土を貼って炉床としている。隣接するピットからは鍛造剥片がまとまって出土しており、鍛冶炉と見て差し支えないものと思われる。これに対しやや離れた位置にある炉7は長さ92cm、深さ10cmと浅く広い掘り方をもち、被熱を受けた底面には木炭が薄く堆積していたことから、やや性格を事にするものと思われる。

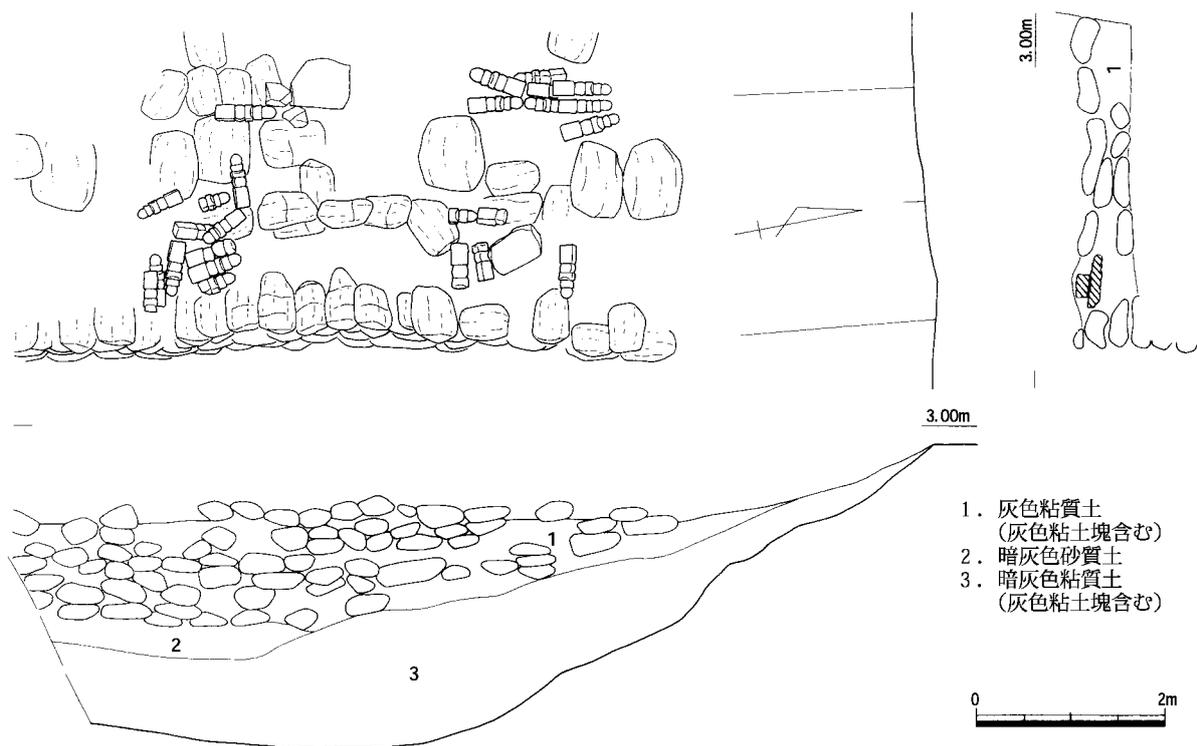
なお、これらの周辺からは土器の皿や銅銭1614・1618・1623・1640がまとまって出土している。

堀 (第28・34図、図版7)

外郭の南西で検出したもので、上幅は最大で10mあり、検出面からの深さは3.2mを測る。その東端は調査区西端から42.5mの位置で南へ屈曲しており、県庁に向けてのびるものと推測される。の傾



第33図 炉 4・3・5 (1/20)



第34図 土堤状遺構 (1/80)

斜をもって掘りこまれており、海拔-0.6mにある堀底は平坦となっている。

その西側では高さ1.2mほどの土堤状の遺構が検出された。これは堀底に堆積した厚さ1.4mの粘質土を基底とし、長さ60~70cm、幅40cm、厚さ20cm余りの土俵を6段ほど積み上げて構築したもので、上部からは豊島石製の一石五輪塔が転用された状態で26点出土した。土俵には主に粘質土が用いられていたが、上部では瓦や人骨・獣骨を含む砂礫を詰めるものも見られた。

遺物は土堤状遺構の基底となる層位より上で、磁器(杯175、碗213、皿221・231・236)や陶器(上野・高取545)、備前(皿647、鉢681)、瓦(軒丸瓦898・899・930・937・940・946・962・974・991・1140、軒平瓦1153・1154・1180・1234・1238・1255・1257・1270・1292・1293・1306・1307)、木製品(漆椀1406~1408・1413・1414・1424・1431・1435・1437・1439、箸、折敷1474、曲物、下駄1501~1505、墨書木製品1489~1492)、石製品(硯1534)、金属製品(小柄1571~1573、鉋1599、金箸1605、釘1600、銭1621・1624・1626・1645・1647・1666・1667)などが多量に出土した。

しかし下層の出土遺物は少なく、磁器(碗177・180・187・712・717・718、皿223)、陶器(瀬戸345)、炆器(瓶725、鉢681)、土器(皿、鉢882・883、鍋872・873)があるにすぎない。

第2節 近世の遺物

(1) 出土状況

上層では土壌13・24・35などのほか、内堀に沿ってつくられた段状遺構で国産の磁器や陶器、瓦などがまとまって出土している。下層では、整地土やその下に広がる土壌、堀の埋土から国産陶器や輸入磁器、瓦、木製品、土製品、石製品、金属製品など多量の遺物が出土した。

(2) 国産磁器

国産磁器には、杯・碗・蓋・皿・鉢・蓋物・段重・合子・瓶・壺・香炉・仏飯器・水滴・置物などがあり、18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器が大半を占める。

杯（第35図、巻頭図版4）

小杯は22点出土している。口径4.2～4.5cmの**14～17**、5.8～6.6cmの**18～21**、6.8～7.7cmの**22・23**があり、その形態から桶形の**14・23**、端反形の**15～22**に分けられる。このうち寿字を飾る**20**は17世紀前半、草花や山水を描く**15・19・21**は17世紀後半に属する。

紅猪口・猪口（第35図、巻頭図版4）

口径4.2～7.8cmの紅猪口は丸形の**24～27**、浅い丸形の**28**、半球形の**29**、平形の**34・35**に分けられる。18世紀前半の**28**を除いて18世紀後半～19世紀前半のものである。

36～38は桶形の猪口でいずれも輪高台をもつが、蛇ノ目凹形高台のものもある。花唐草や水裂文を飾る**37・38**は18世紀前半、**36**は18世紀後半に位置付けられる。

碗（第35～37図、巻頭図版4）

口径6.8～10.5cmの小碗は76点ある。平形の**39～43**、端反形の**44・45**、丸形の**46～51**、半球形の**52～58**、筒形の**59～62**がある。このうち**44**は瀬戸の製品で焼継が見られる。また、寿字を飾る**56**が17世紀前半、一重網文の**57**が17世紀後半に属するほか18世紀後半～19世紀前半のものである。

中碗は166点ある。**63～76**は口径10.2～12.4cmを測る肥前の広東碗で、**75**は外面に青磁釉を施している。このほか、捻花文を飾る瀬戸の広東碗が1点ある。

口径13cm以上の大碗は8点と少なく、ここでは**77～80**を図示した。梅木や蝶を描く**77・80・81**は18世紀前半、蓮華を飾る**78**は18世紀後半のものである。

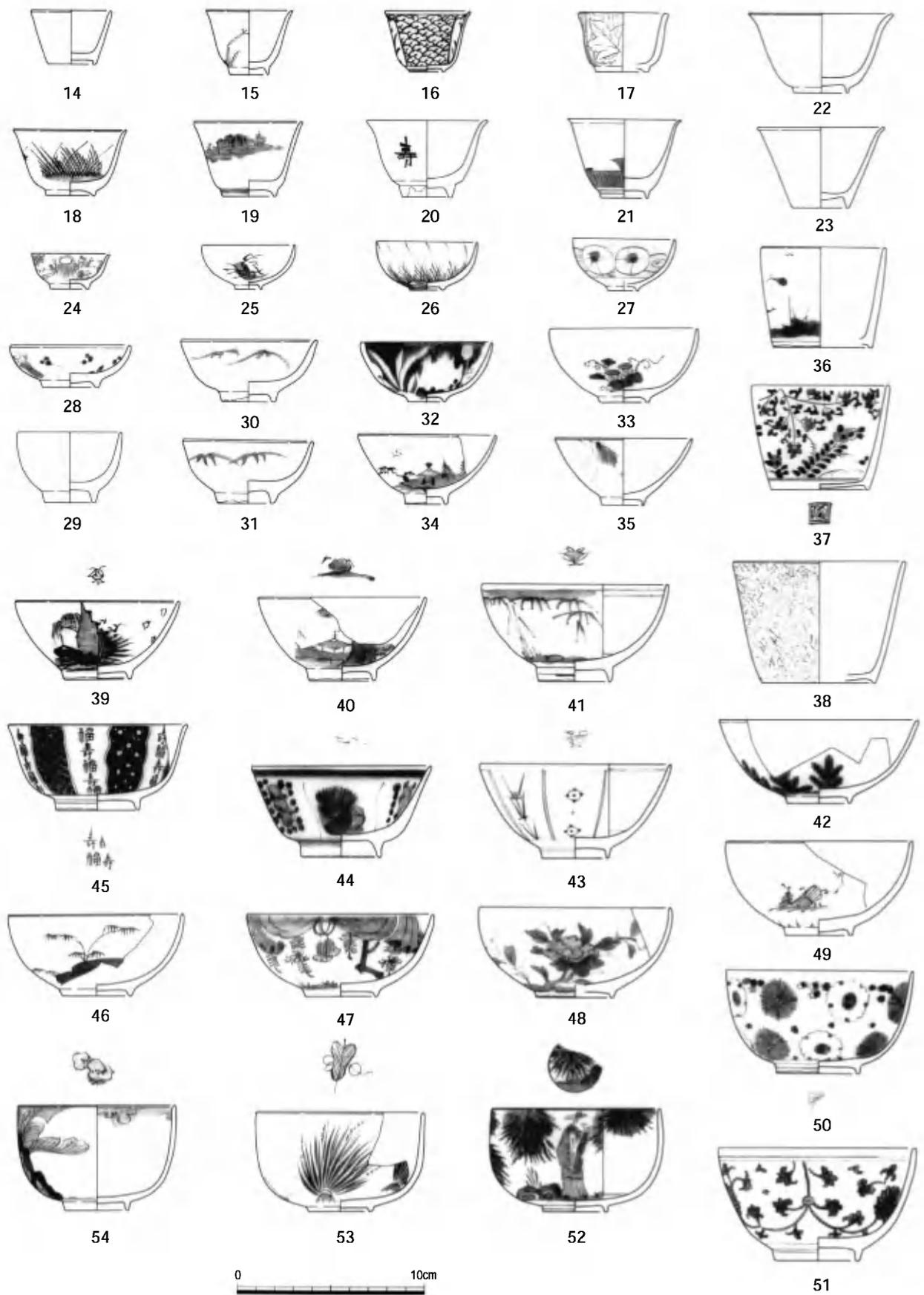
81～89は碗の蓋で、丸形の**81～84**と、端反形の**85～89**とがあり、口径10cm前後の**81～83・85**と9cm前後の**84・86・89**、8cm前後の**87・88**に分けられる。19世紀前半の関西系磁器である**86**以外は、18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器である。

鉢（第38図、巻頭図版6）

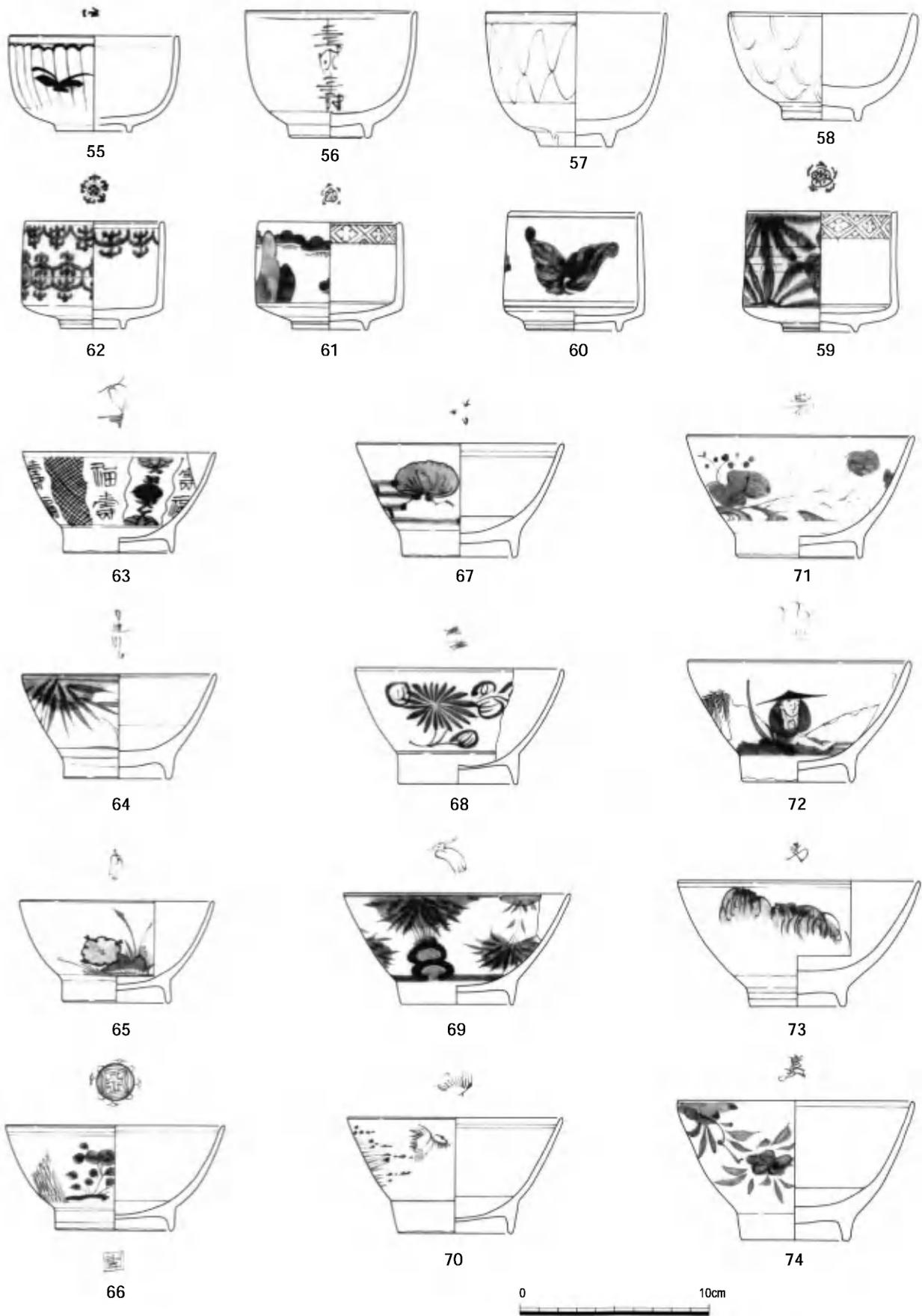
口径14.2cm、器高7.8cmを測る**90**は端反形の鉢で、外面には柳と鳳凰、内面には雨竜を描く。**91**は外面に山水、内面に牡丹を描く筍干形の鉢で、口径18.5cm、器高8.2cmを測り、蛇ノ目凹形高台をもつ。**92**は口径32cm、器高14cmを測る18世紀前半の大鉢で、外面には花唐草、内面には果木を描く。

皿（第39～42図、巻頭図版5）

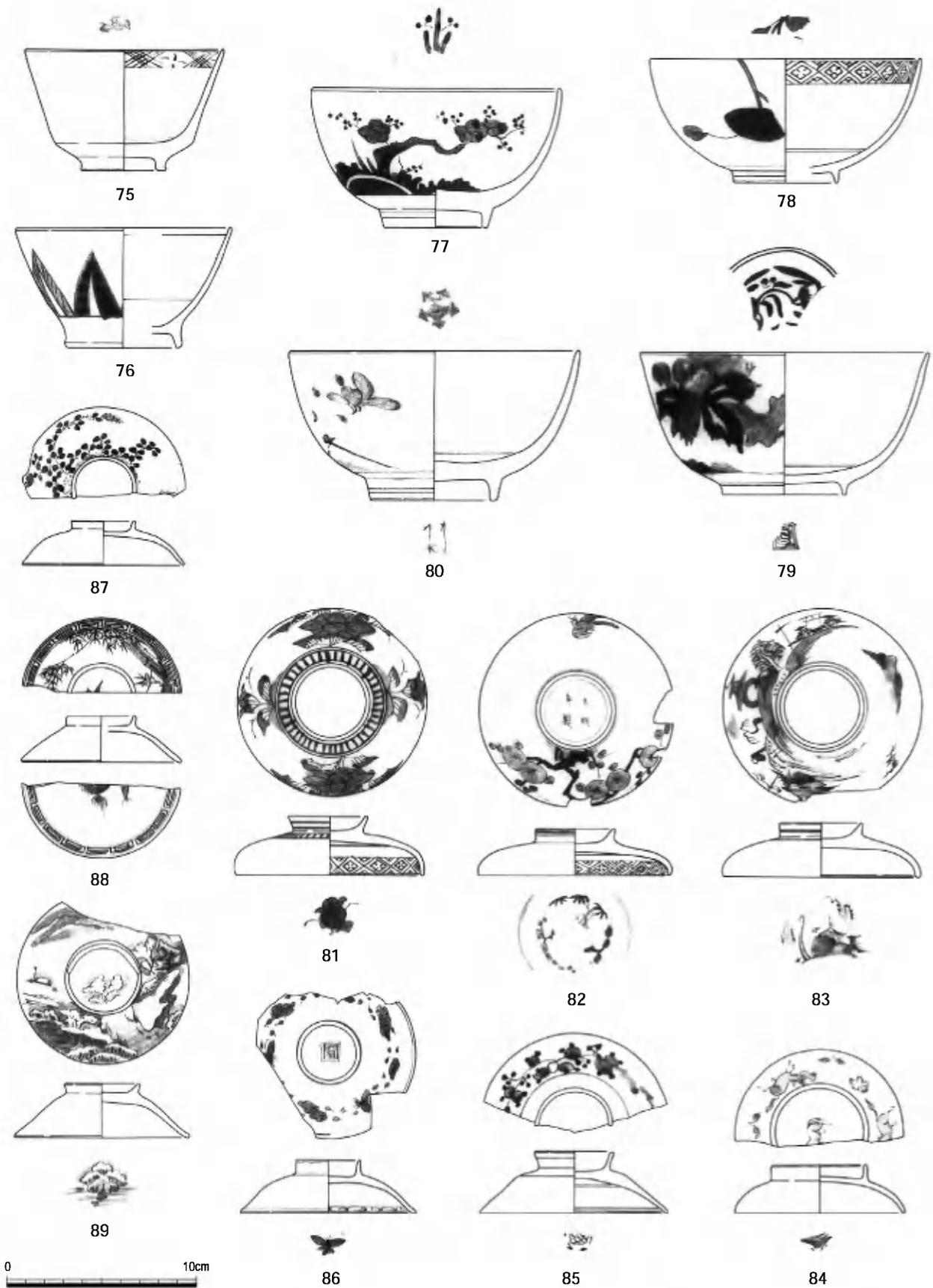
小皿は25点出土している。口径8.1～10.6cmを測る**93～96**は輪花に型打ちされた18世紀末～19世紀



第35図 国産磁器 1 (1/3)



第36図 国産磁器 2 (1/3)



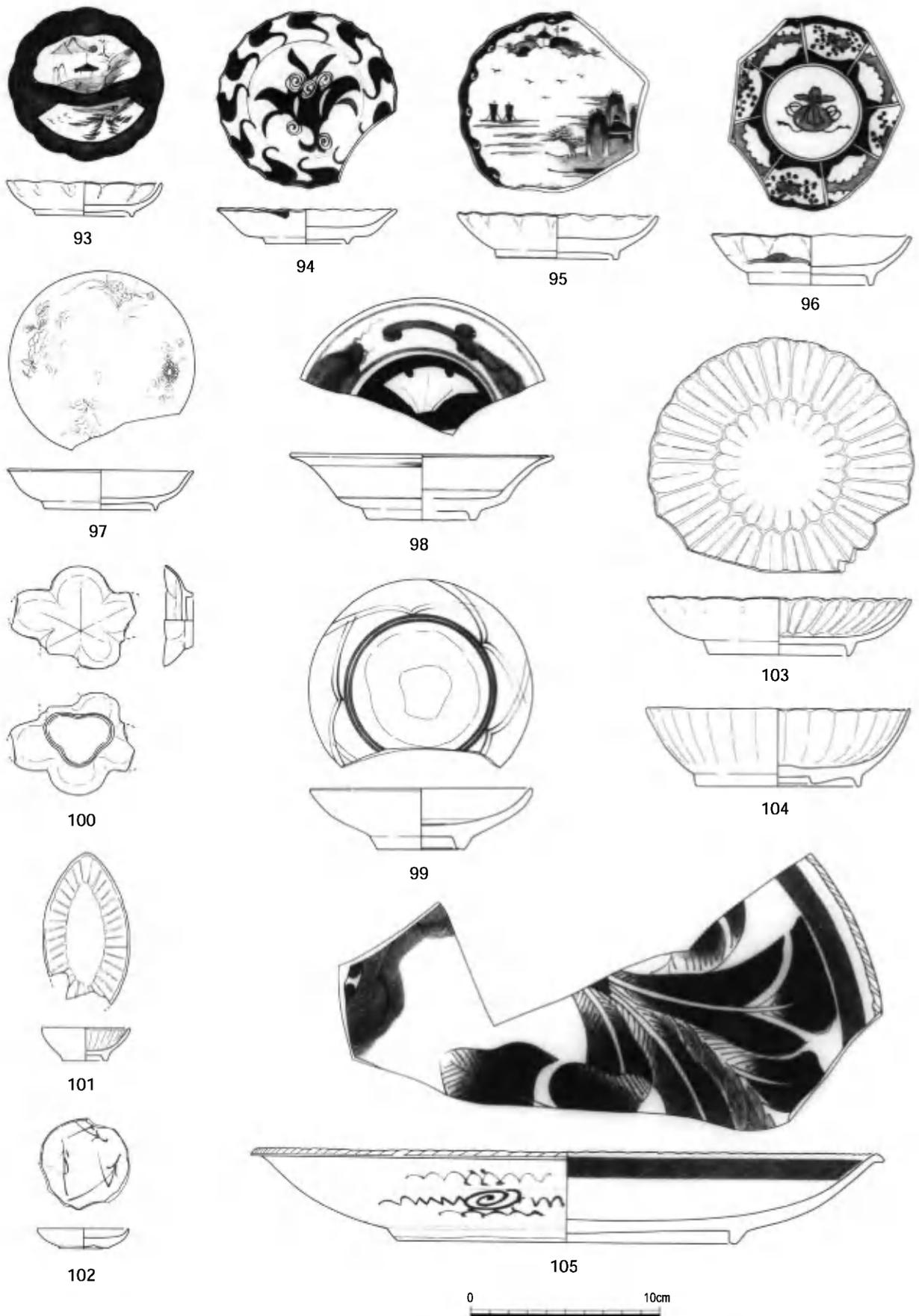
第37図 国産磁器 3 (1/3)



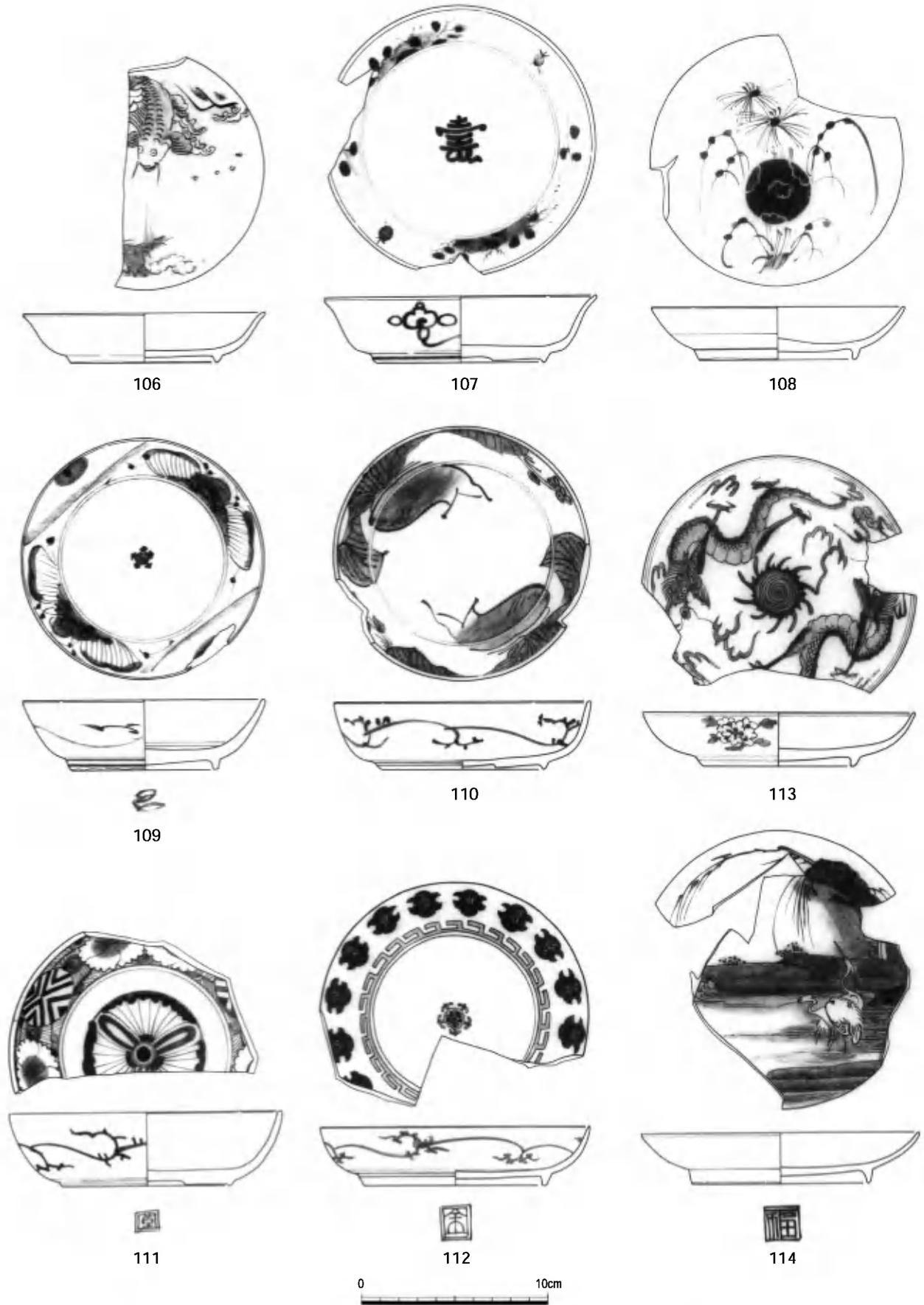
第38図 国産磁器 4 (1/3)

前半の小皿で、**94**は瀬戸産である。口径9.8cmの**97**は18世紀前半の色絵の小皿、**99**は見込を蛇ノ目に釉剥ぎする肥前波佐見の染付皿である。**100**は梅花形、**101**は花菱形に型押しされた17世紀後半～18世紀前半の白磁の皿、**102**は口径4.8cmを測る17世紀前半の極小皿である。

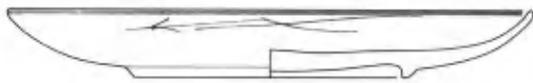
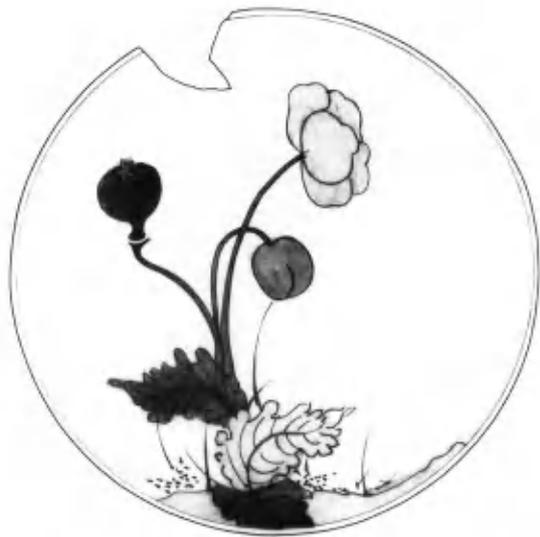
口径13.9～15.0cmの五寸皿は23点出土しており、白磁**103・104**と染付**98・106～114**がある。菊花



第39図 国産磁器 5 (1/3)

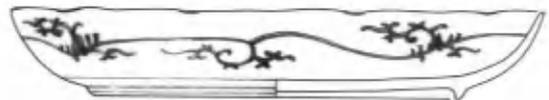


第40図 国産磁器6 (1/3)

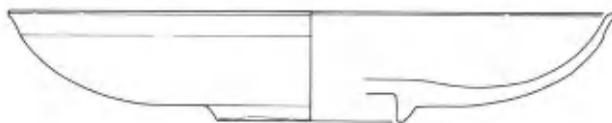


大明成

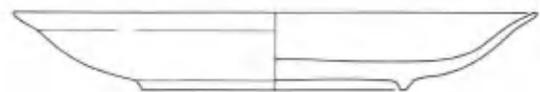
115



117



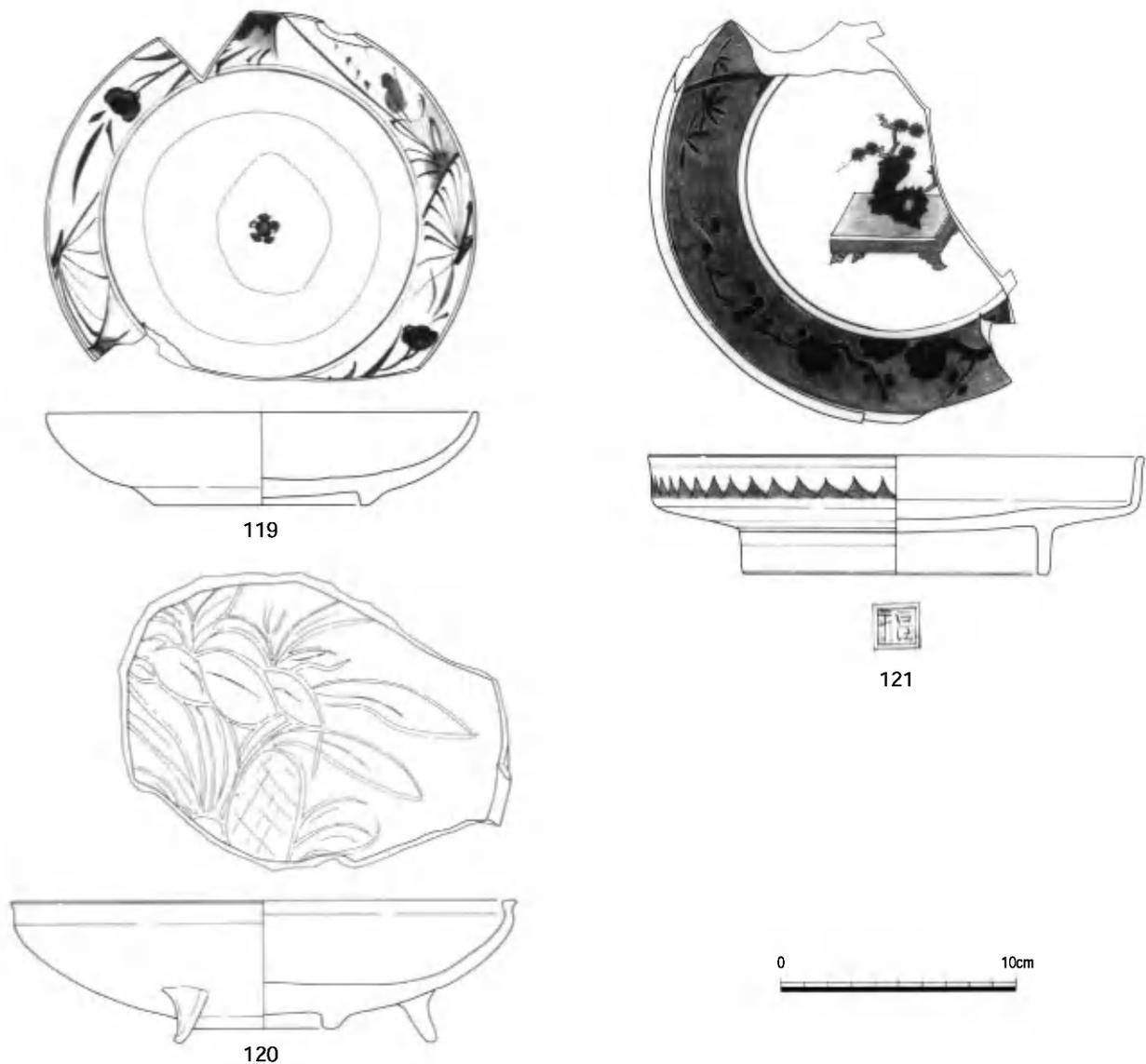
116



118



第41図 国産磁器 7 (1/3)



第42図 国産磁器 8 (1/3)

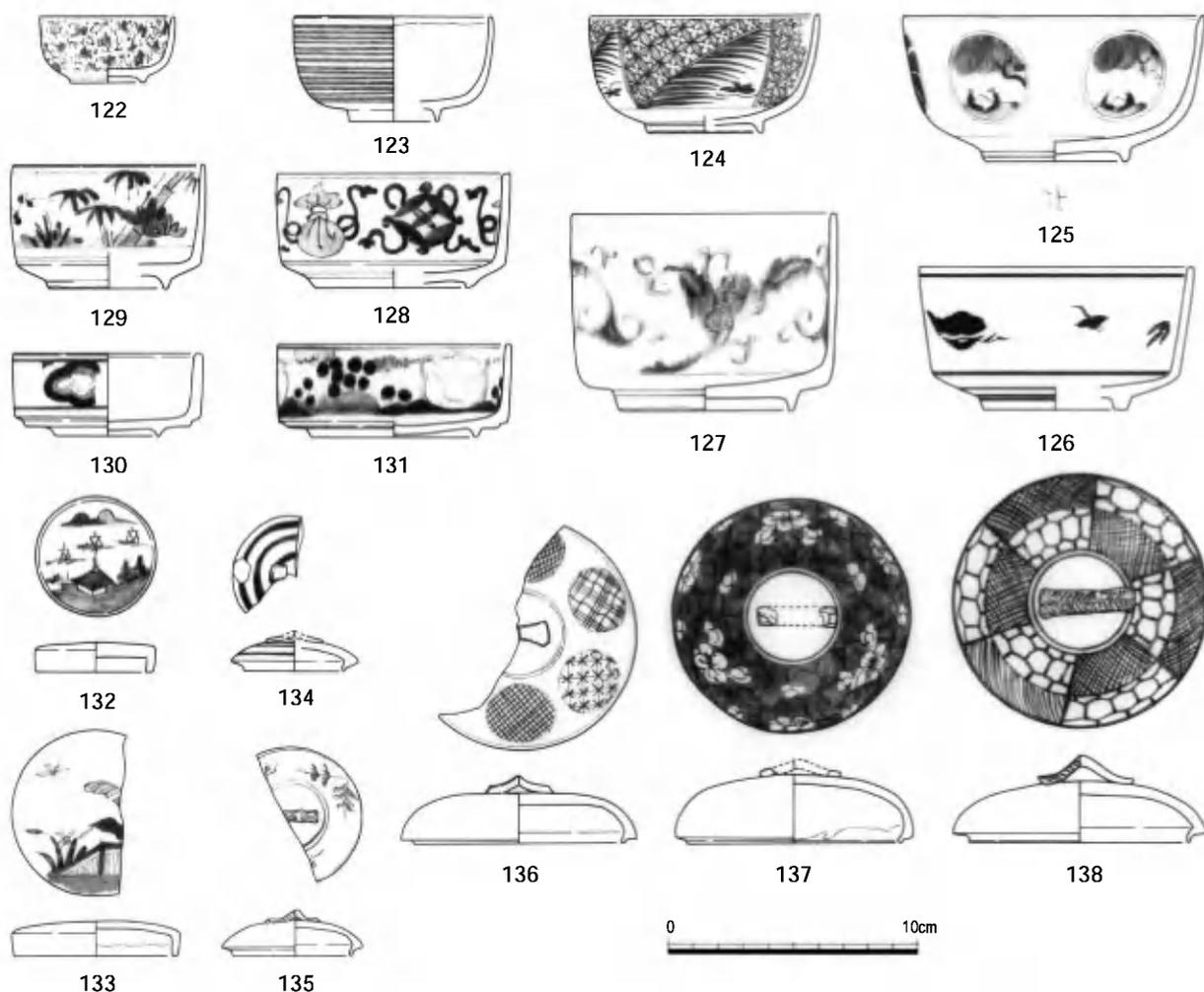
形に型打ちされた**103**は19世紀前半、**104**は17世紀後半に属する。染付は、稜をもつ**98**、端反形の**106・107**、浅い丸形の**108・113・114**、丸形の**109～112**に分けられ、**107・110・111**は蛇ノ目凹形高台をもつ。**98**は17世紀前半、**108・113・114**は17世紀中葉～後半、**112**は17世紀末の肥前南川原窯、**111**は18世紀後半の肥前筒江窯の製品である。

口径18.2～24.0cmを測る染付の中皿は22点ある。浅い丸形の**115**、丸形の**116・117・119**、端反形の**118**があるが、このうち**115・116**は17世紀前半、**118**は17世紀中葉に属し、17世紀末の肥前南川原窯産と見られる**117**は2点組で出土している。見込を蛇ノ目に釉剥ぎする**119**は18世紀後半の肥前波佐見の製品と見られる。また、青磁の三足皿**120**も17世紀前半の肥前波佐見産である。見込に盆栽文を飾る**121**は高い高台を備えた18世紀前半の染付盤で、類例に乏しい。

105は口径32.8cmを測る大皿で、19世紀前半の肥前志田窯の製品である。

蓋物・合子・段重 (第43図、巻頭図版6)

蓋物には、**122～125**の半球形、**126～129**の半筒形があり、法量も口径5.3cmの小形、口径7.7～9.0cmの中形、口径10.5～12.0cmの大形に分けられる。いずれも18世紀前半のものである。



第43図 国産磁器 9 (1 / 3)

段重は4点出土した。口径7.5cmの**130**は色絵、口径9.3cmの**131**は染付で、どちらも腰に括れをもっている。

2点ある合子の蓋は、口径4.7cmの小形**132**と口径6.6cmの大形**133**とがあり、いずれも染付で山水を描く。

蓋物ないし段重の蓋は5点あり、やはり口径4.0～4.8cmの小形**134・135**と口径8.4～10.1cmの大形**136～138**に分けられる。合子・段重とも18世紀後半～19世紀前半に属する。

瓶 (第44図、巻頭図版6)

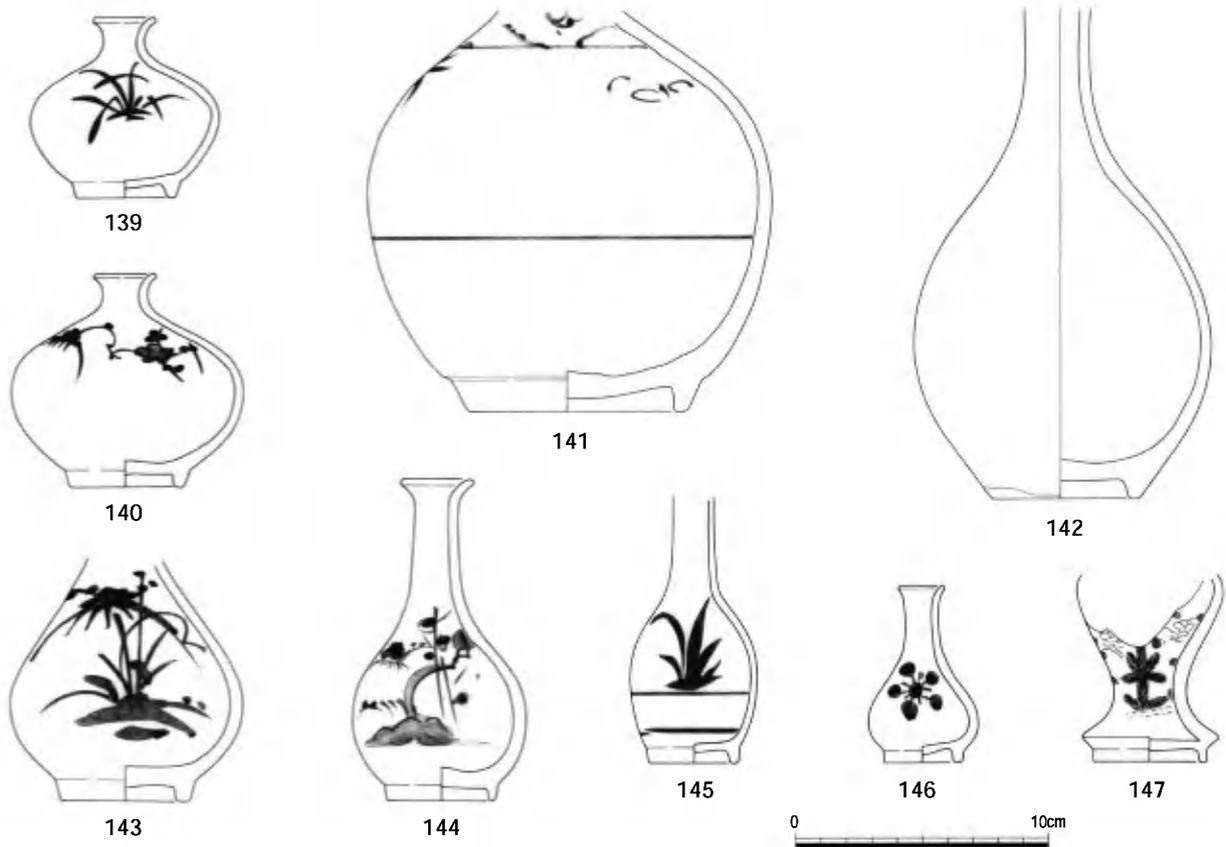
3点ある油壺はいずれも頸部の短い胴丸形で、図示した**139・140**は胴径7.4～9.1cm、器高7.1～8.5cmを測り、18世紀後半に比定される。

141は19世紀前半の辣蕪形をした胴径16.0cmの大瓶で、口頸部を欠いているものの肩部に岩竹文を飾る。胴径11.7cmの中瓶**142**は18世紀末の白磁、胴径4.4～9.2cmの小瓶**143～146**は18世紀中葉～19世紀前半の肥前染付である。このうち、小形の**145・146**は神酒徳利と見られる。

瓶子形の神酒徳利は4点あり、**147**は色絵で若松を描く。

仏花瓶 (第45図、巻頭図版6)

仏花瓶は9点ある。**148・149**は青磁、**150**は染付で、いずれも逆蕪形の体部に喇叭形の口頸部を備えた18世紀後半の仏花瓶である。



第44図 国産磁器10 (1/3)

壺 (第45図)

151は初期伊万里の壺で、径11.0cmの胴部には松を描く。

香炉 (第45図、巻頭図版6)

香炉は6点出土している。このうち152～155は青磁の香炉で、半筒形で輪高台をもつ152・155と偏平な鼎形で三足をもつ153・154に分けられる。155は17世紀前半、152は18世紀後半に位置付けられる。157は18世紀前半、159は19世紀前半の内湾形をした染付の香炉である。

仏飯器 (第45図、巻頭図版6)

160～164は低い輪高台をもつ仏飯器である。このうち斜格子や菊散らし文を飾る器高6.0～6.3cmの160・161は18世紀後半、雨降り文を描く器高4.0～4.8cmの162・163は18世紀前半に位置付けられる。

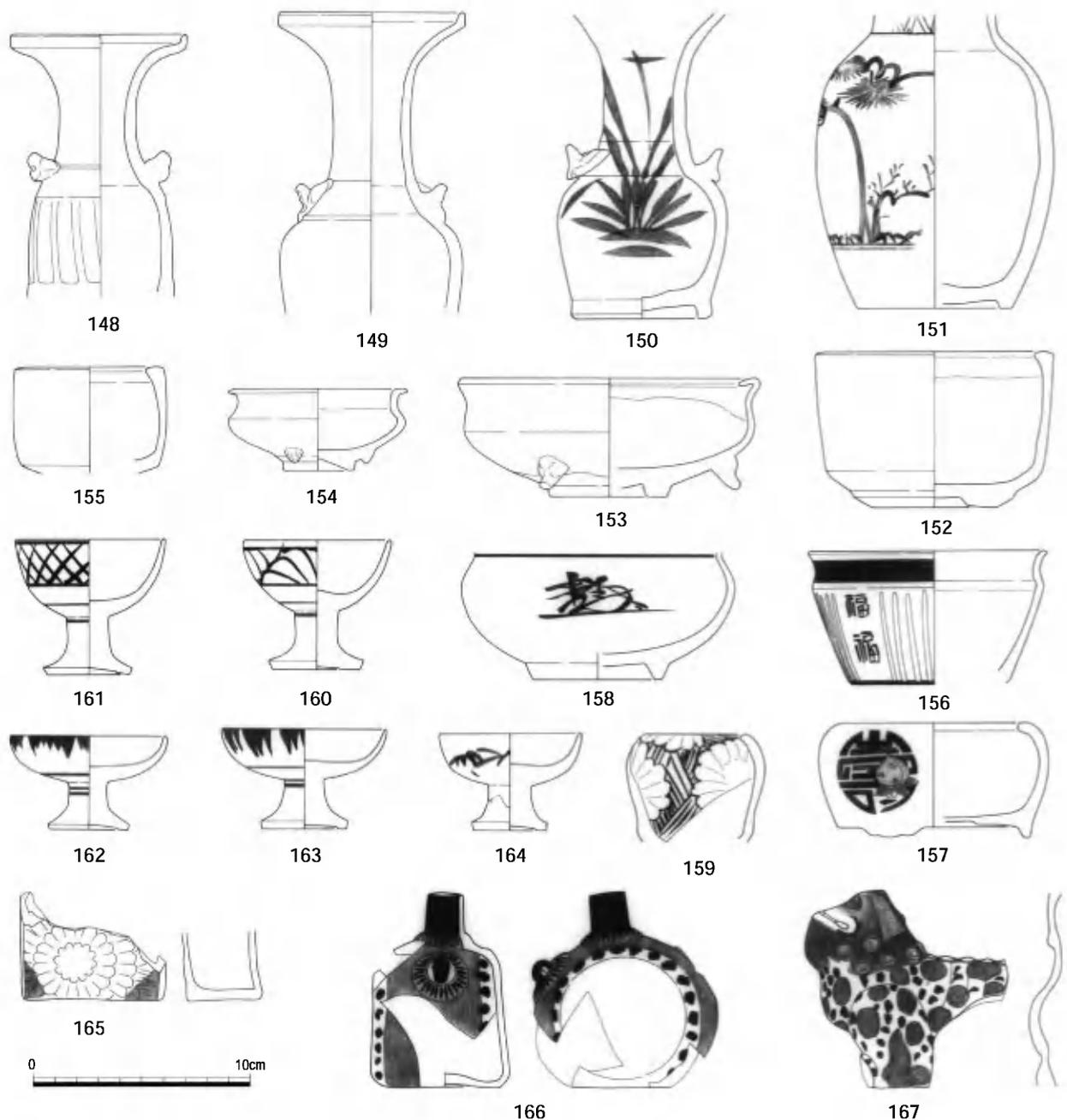
水滴・置物 (第45図)

165は菊を型押しした豆腐形の水滴で、幅6.2cm、高さ3.5cmを測る。高さ9.0cm、幅6.6cmの166は太鼓形に型押しされた色絵の水滴である。167は獅子形の置物で、17世紀末～18世紀前半の肥前磁器である。

(3) 輸入磁器

杯 (第46図、巻頭図版7)

168～172は青花、173は白磁の小杯である。口径4.8～5.4cmの168・169と口径6.6～7.0cmの170～173があり、漳州窯系の168を除いて景德鎮の製品と見られる。口径6.6cm、器高6.1cmを測る脚付小



第45図 国産磁器11（1/3）

杯**175**は16世紀後半の景德鎮製で、堀から2点出土している。

碗・鉢（第46～48図、巻頭図版7・8）

176～183・185～188は景德鎮系の丸形碗で、口径10.0～10.8cmの小碗**177～180**、口径12.1～12.9cmの中碗**181～185**、口径13.9～15.2cmの大碗**186～188**がある。このうち中碗の**181**は輪花、**182**は型打ちの碗である。**189～201**は漳州窯系の丸形碗で、口径11.0～12.4cmの中碗**189～198**と口径13.9～14.3cmの大碗**199～201**がある。**176・202～206**は端反碗で、**176・202・203・206**は景德鎮、**204・205**は漳州窯の製品と思われる。特に**176**は釉裏紅で蛇ノ目高台をもち、**205**は外面に雪もちを飾る。

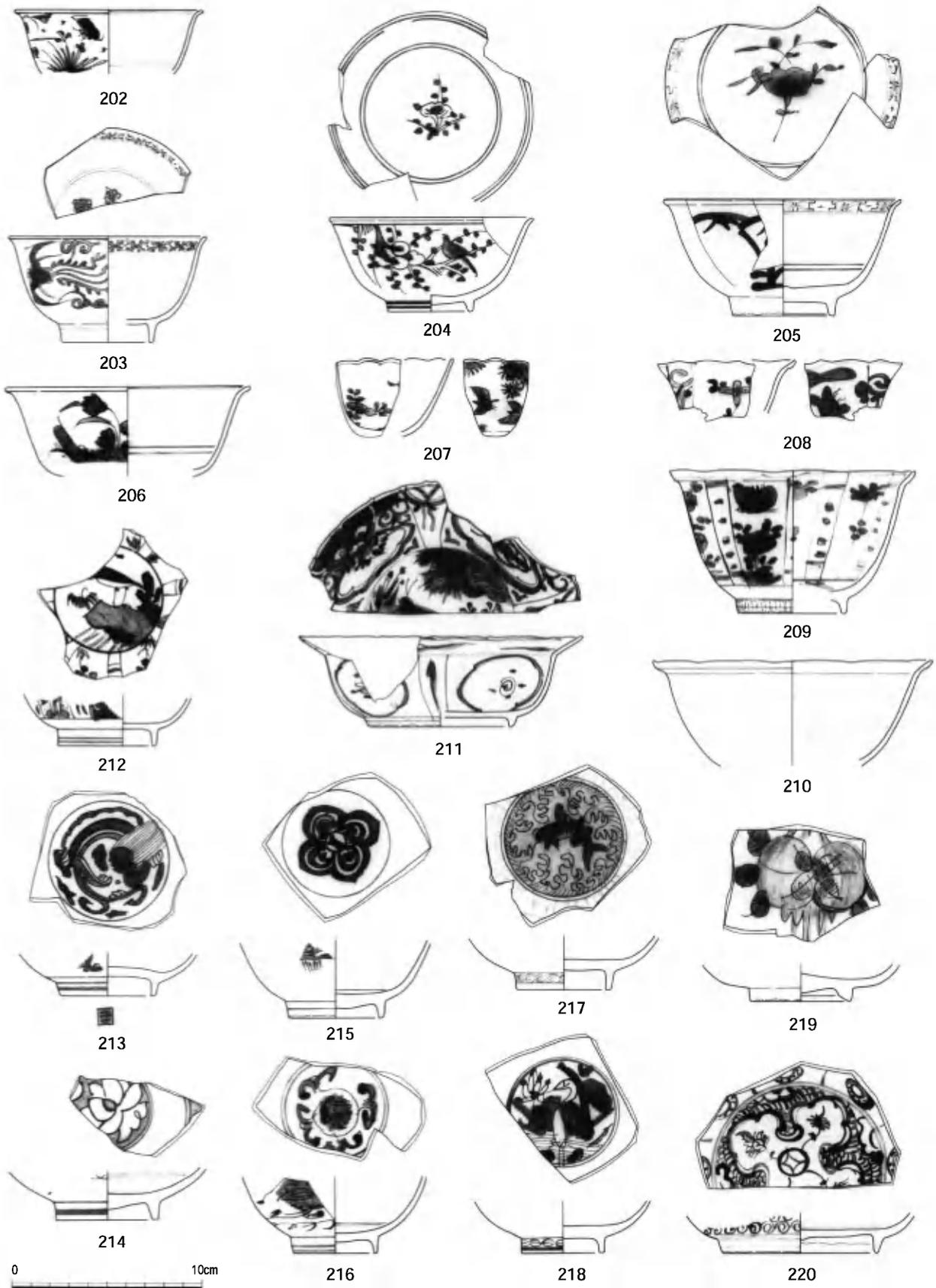
口径13.0cmの**208・209・212**は芙蓉手の碗、口径14.6cmの**210**は型打ちされた白磁の碗である。**211**は口径15.0cmの鉢で、獣面文を飾る。これらはいずれも景德鎮製と見られる。



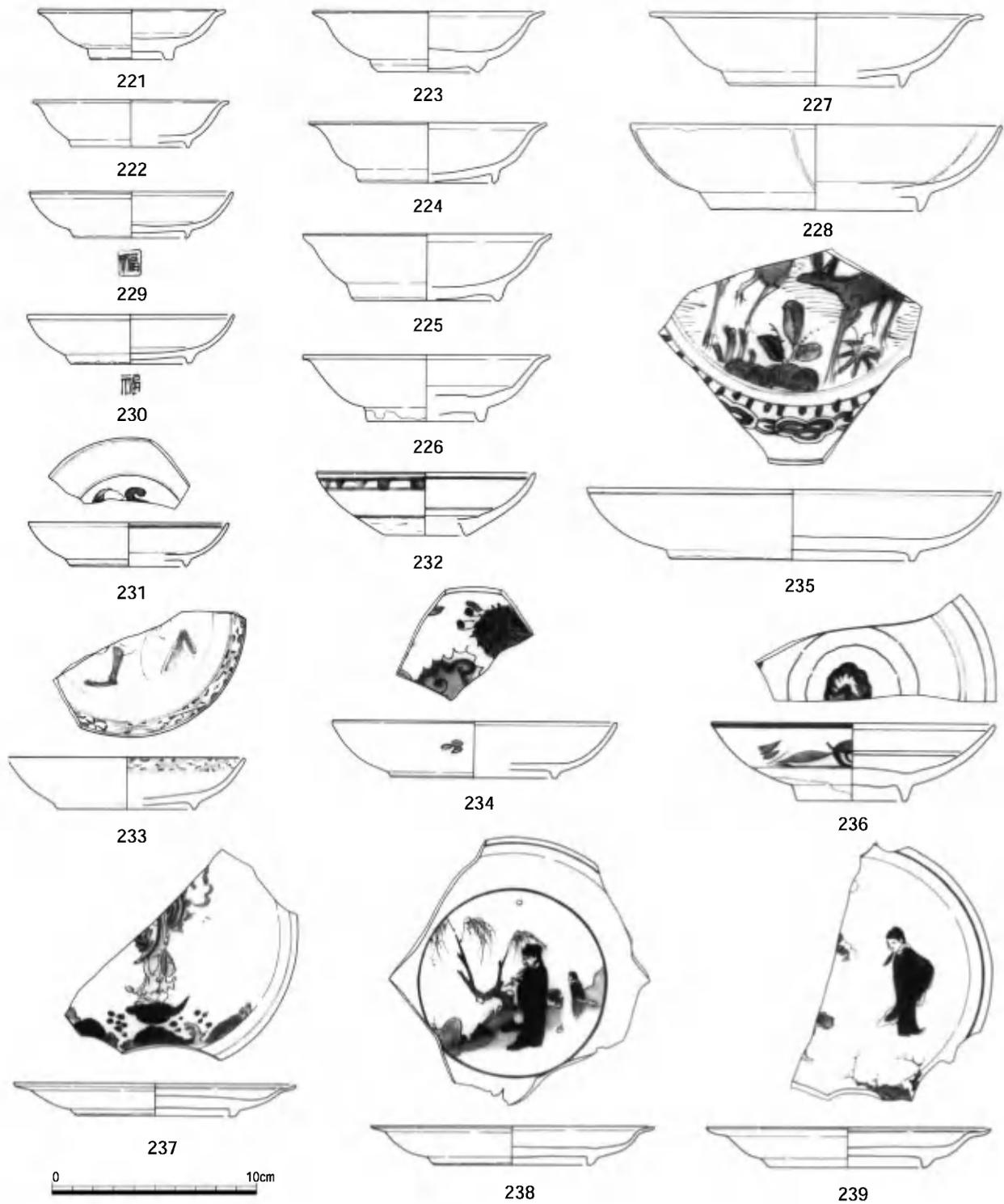
第46図 輸入磁器 1 (1/3)



第47図 輸入磁器 2 (1/3)



第48図 輸入磁器 3 (1/3)

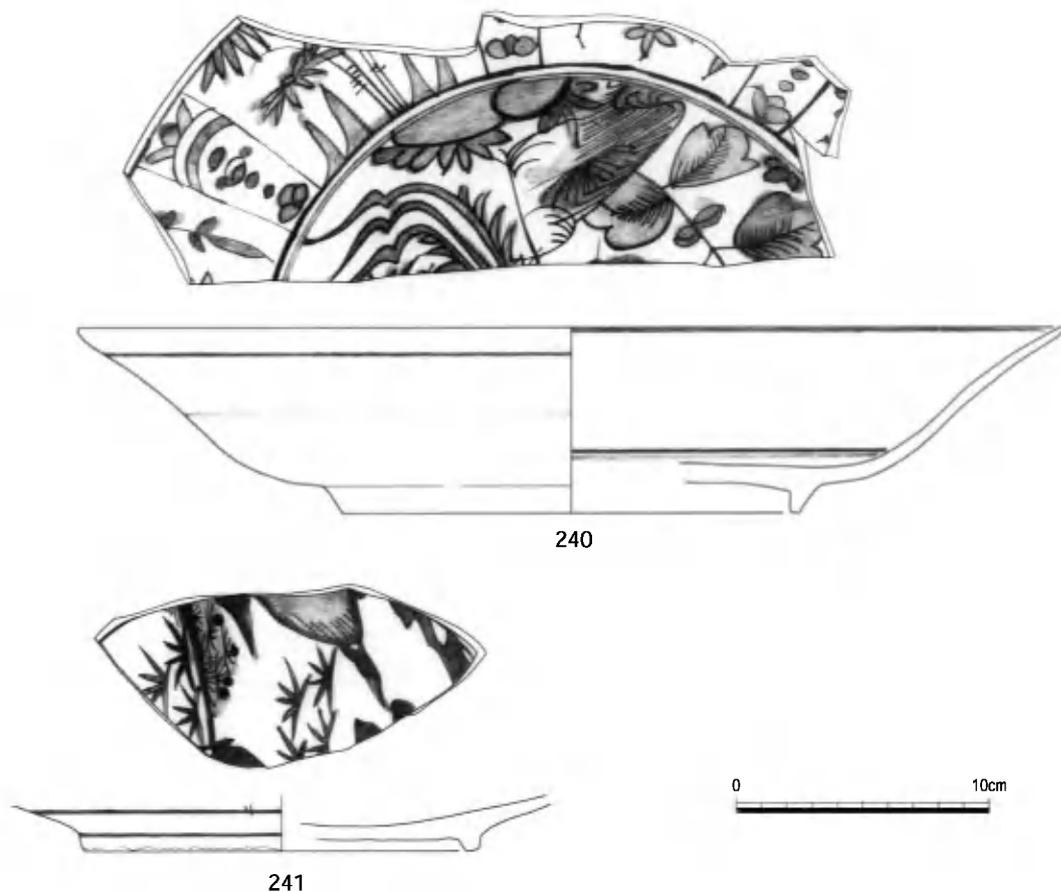


第49図 輸入磁器 4 (1/3)

皿 (第49～51図、巻頭図版8)

端反形の白磁の小皿には、口径9.0～9.6cmの221・222と11.2～12.0cmの223～226があり、いずれも漳州窯の製品と見られる。

丸形の青花の皿は、口径9.8～11.6cmの229～233、13.8cmの234・236がある。このうち230～231・233・234は景德鎮の製品と見られ、漳州窯系の230・232・236のうち、堀から出土した232・



第50図 輸入磁器 5 (1 / 3)

236は16世紀後半に位置付けられる。

口径16.2cmの227は端反形の中皿で、漳州窯のものと思われる。

丸形の中皿のうち、口径18.2cmの228は白磁の輪花皿、口径20.0cmの235は青花の皿で、いずれも景德鎮の製品である。

また、口径13.8～14.0cmの237～239は景德鎮系の折縁皿で、土壌74からまとまって出土した。

大皿には口径39.0cmの240や43.8～46.4cmの242・243があり、高台には離れ砂が付着する。いずれも漳州窯の製品と見られる。

(4) 国産陶器

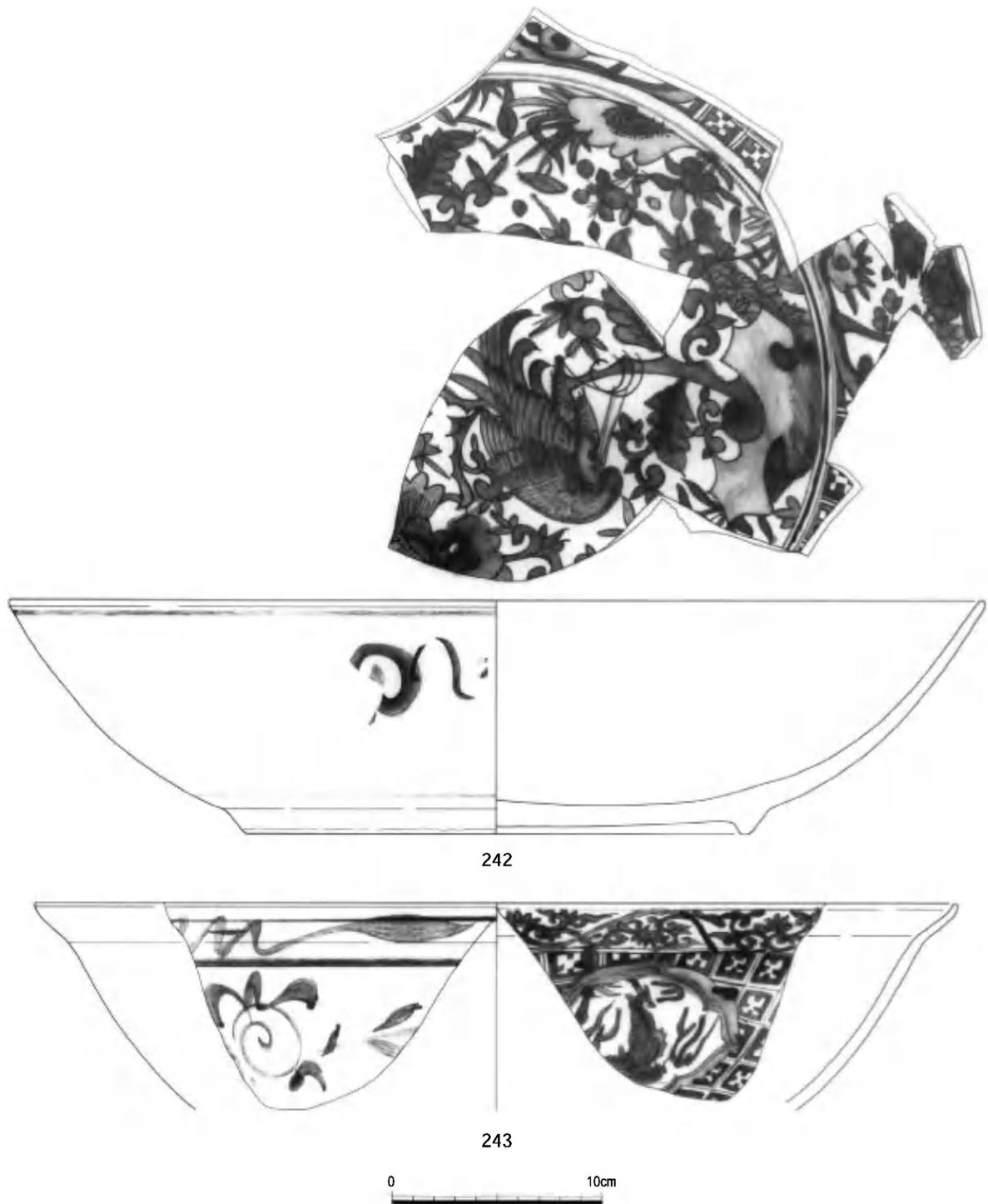
1. 上層の国産陶器

上層から出土した国産陶器には、椀、皿、鉢、土瓶、鍋、瓶、灯火具、甕などがある。その多くは18世紀後半～19世紀前半に京・信楽や瀬戸・美濃、肥前などで生産されたものである。

椀 (第52・53図、巻頭図版9)

小椀は口径7.2～8.7cmあり、69点出土している。信楽の小杉椀244～246や端反椀248～452が主体で、高台内に天と墨書したものが数点ある。特に端反椀には灰釉に細かな貫入の入る249・250や桜風景を描いた248、口縁部に緑釉を掛け分けたものなどがある。また、藁灰釉を掛ける萩の轆轤手椀247や筒形椀254、京系の丸形椀255～257などもある。

口径9.6～12.6cmの中椀は112点ある。せんじと呼ばれる瀬戸の腰折れ形椀258・259や信楽の小杉

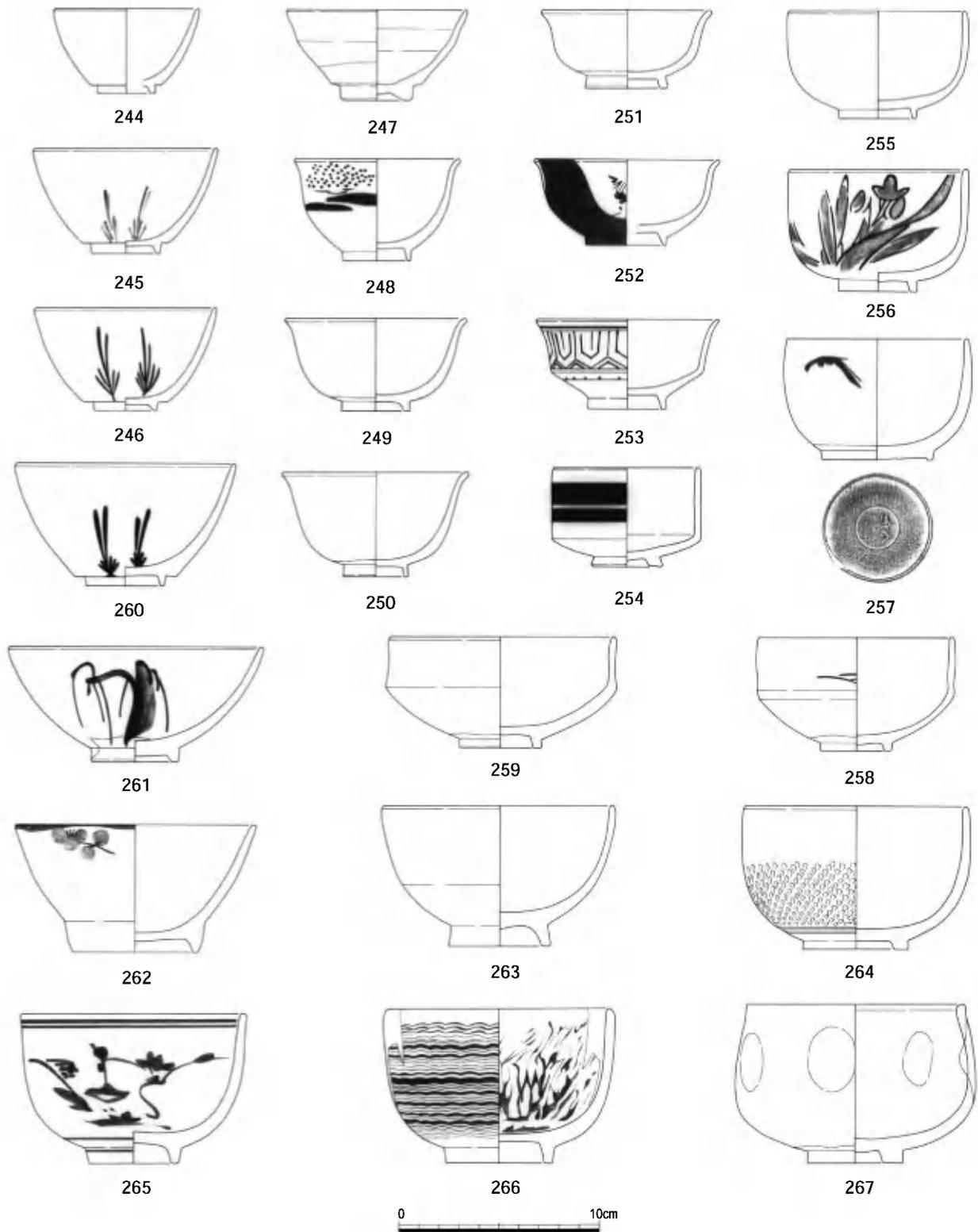


第51図 輸入磁器 6 (1/3)

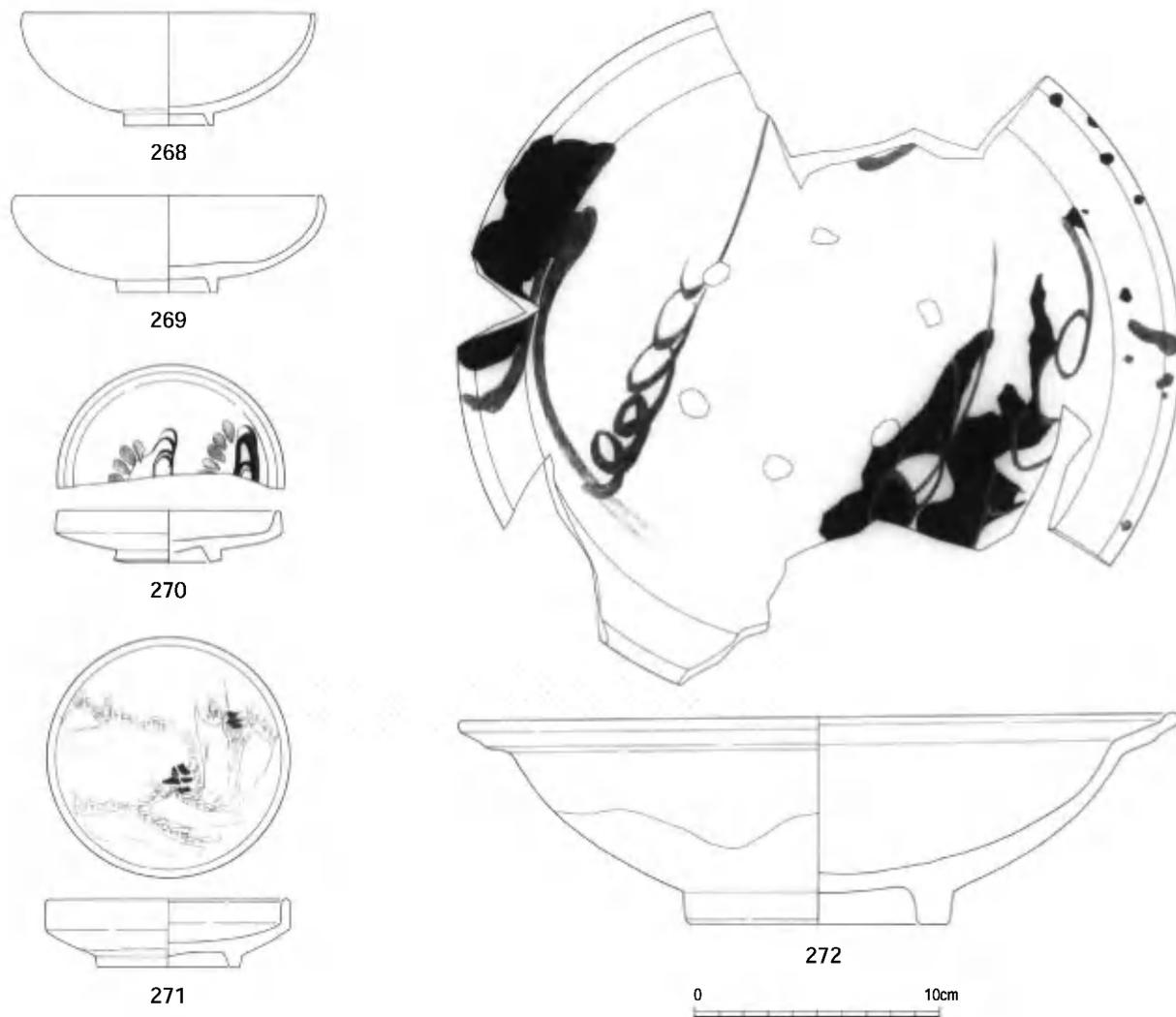
碗260、瀬戸の柳碗261、折枝梅花文を飾る瀬戸の広東碗262、肥前の呉器手碗263、瀬戸の鎧手碗264、肥前の陶胎染付265、肥前の刷毛目碗266、漆黒釉を掛けた瀬戸の拳骨碗267など多様であるが、その中であって信楽の小杉碗や口径11.8~12.4cmを測る京・信楽の平碗268・269は比較的出土量が多い。

皿 (第53・54図)
陶器の皿は磁器に比べて出土量が少ない。270・271は口径9.0~9.8cmを測る京・信楽の小皿で、見込みに菊水や山水を描く。

口径29.0cmの**272**は肥前の二彩手の大皿で、17世紀のものである。ほかに肥前の刷毛目皿が7点出土している。**273・274**は見込みに渦文をちらした19世紀前半の美濃の馬ノ目皿で、口径23.8cmを測る**273**は鐙縁をもつ。



第52図 国産陶器 1 (1/3)



第53図 国産陶器 2 (1/3)

鉢 (第54・56図、巻頭図版9)

275は口径20.7、器高4.2cmを測る手鉢で、3足を貼り付ける底面には永の陶印が見られる。口径19.9cm、器高5.6cmの276は鉄釉で竹を描く鉢で、いずれも18世紀に瀬戸で生産された復興織部である。

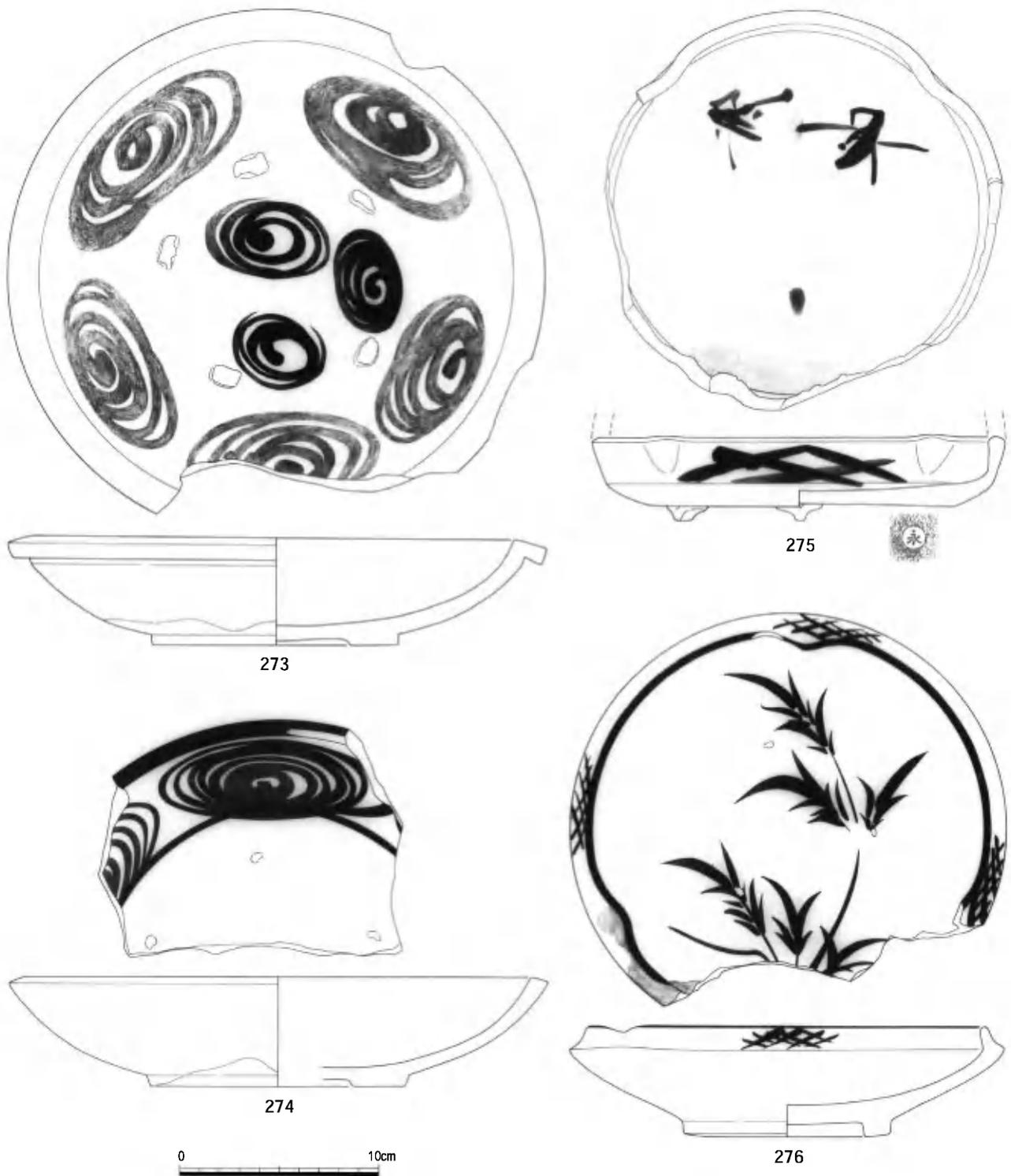
299・300は灰釉に鉄釉を掛ける信楽の鉢で、径15.6cmある口縁部は輪花につくり、見込には三足ハマの痕が残る。318は底部を欠いているが口径28.8cmの大形の鉢で、灰釉に鉄釉を掛ける信楽の陶器である。

口径7.0cm、器高5.5cmを測る320は筒形の小椀に似るが内面無釉で、薬味入などの用途が想定される。

水注・土瓶 (第55・56図、巻頭図版9)

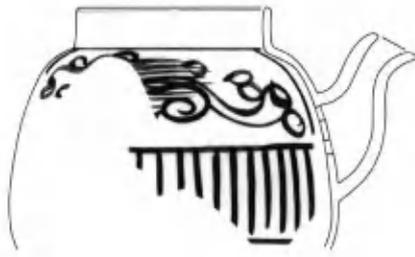
277は白土の上に鉄釉で文様を描く水注で、ほかに灰釉を掛けた瀬戸の水注が1点出土している。

土瓶は35点出土している。口径5.6~7.9cm、胴径15.5~16.6cmの小形280・281・286と、口径8.1~10.2cm、胴径18.9~20.4cmの大形278・279・282・283・285があり、いずれも偏球形の278~280・286と算盤玉形の281~285に分けられる。このうち278は瑠璃釉、280~283は鉄釉(鮫釉)、279・284・285は灰釉を施し、286は染付で山水を描く。

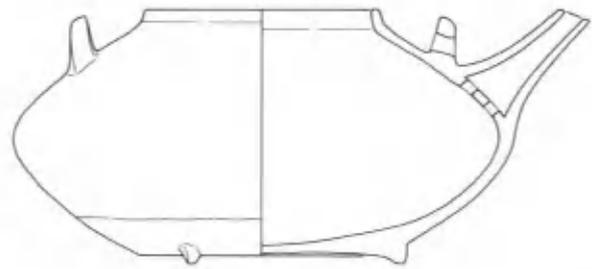


第54図 国産陶器 3 (1/3)

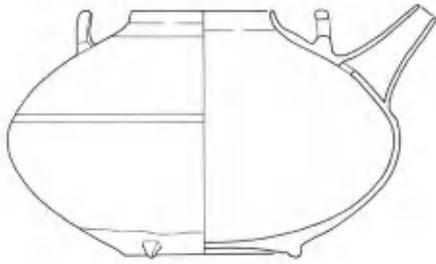
土瓶の蓋は13点あり、凹形の**287～292**とかえりをもつ**293～298**に分けられる。凹形の蓋は口径9.3cmの**287**、7.7～6.3cmの**288・289**、5.0cmの**290**があり、**287・288**には橋状の、**289・290**は釘状のつまみをもつ。鉄釉の**290**以外は灰釉を掛ける。かえりをもつ蓋は口径7.2cmの**294**、6.0～6.6cmの**295～298**、5.6cmの**293**に分けられる。化粧土に鉄絵で八ツ手を描く**293**やイッチン掛けの**294**、灰釉を掛ける**295**、鉄釉を施す**296～298**などがあり、いずれも釘状のつまみをもつ。



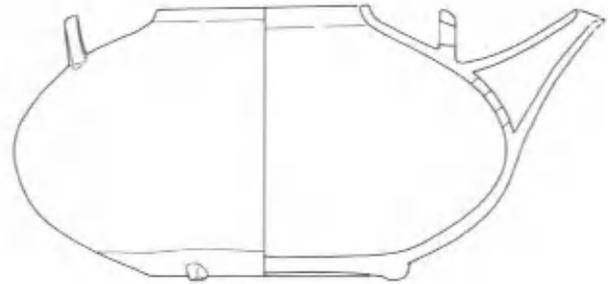
277



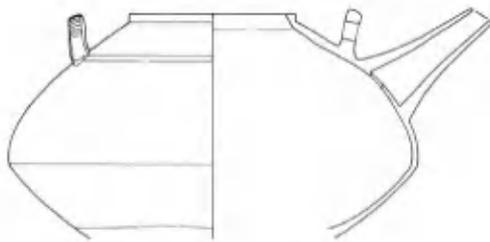
278



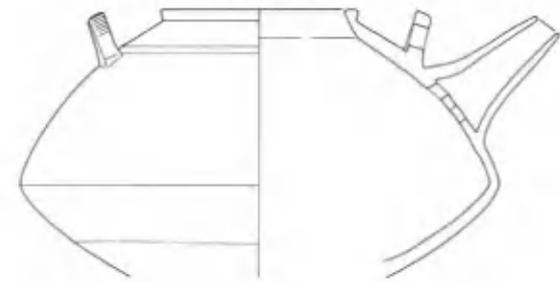
280



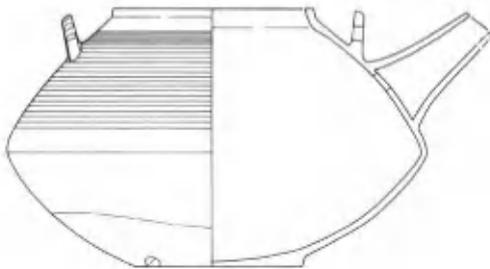
279



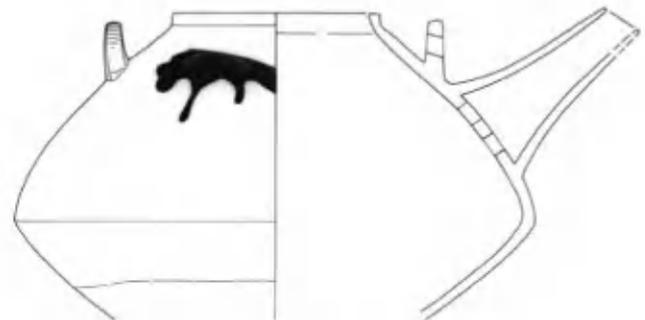
281



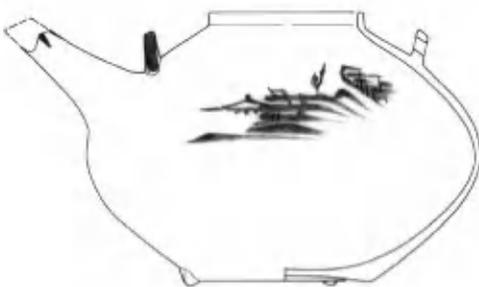
282



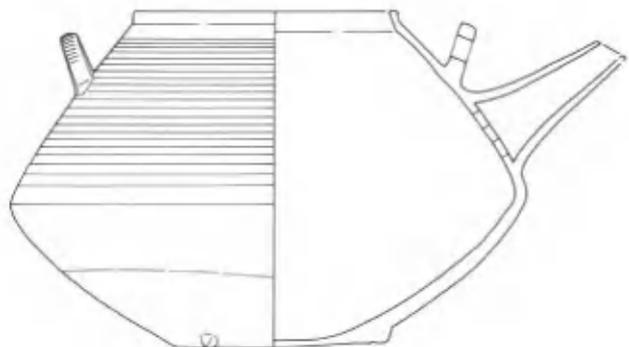
284



283



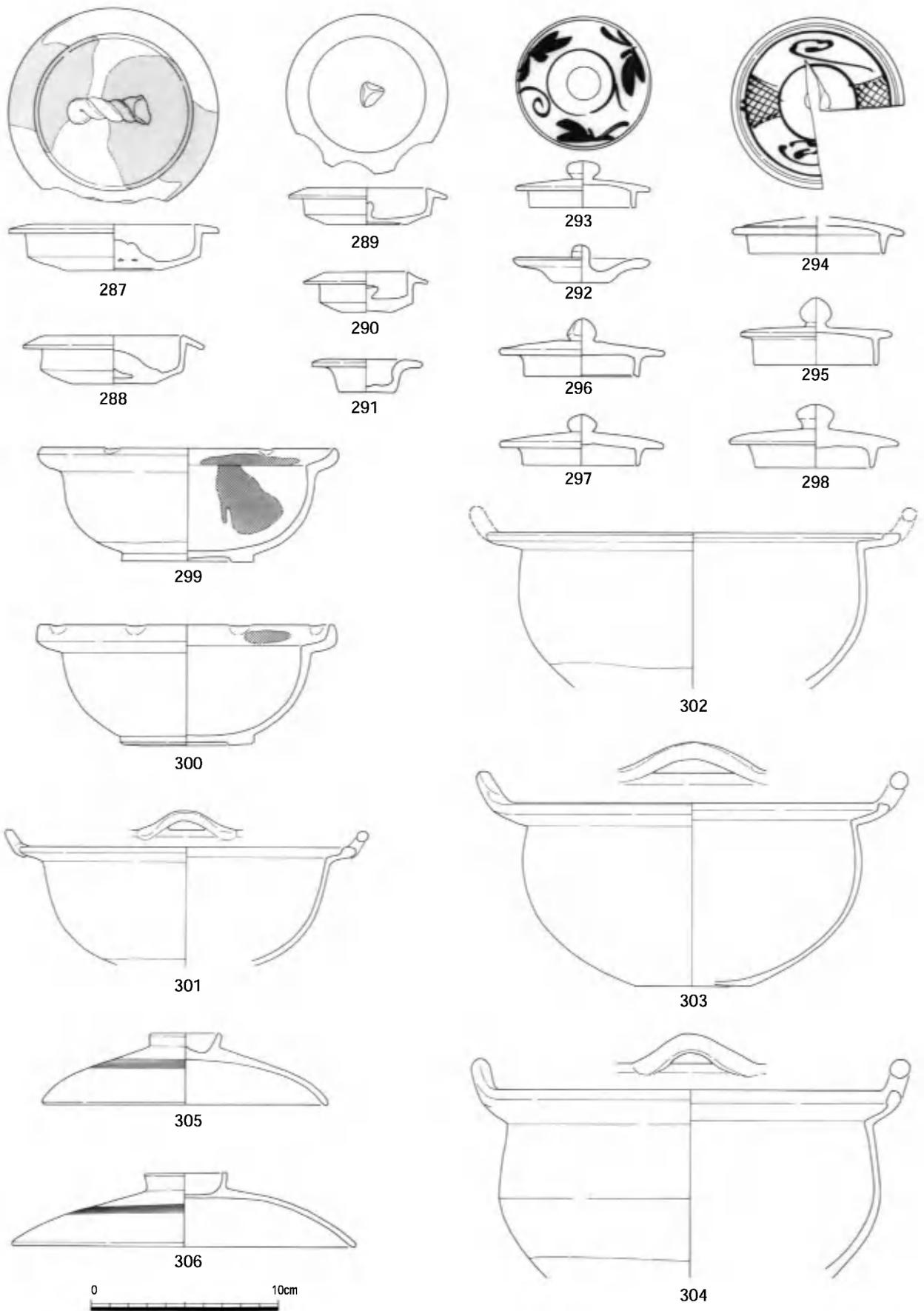
286



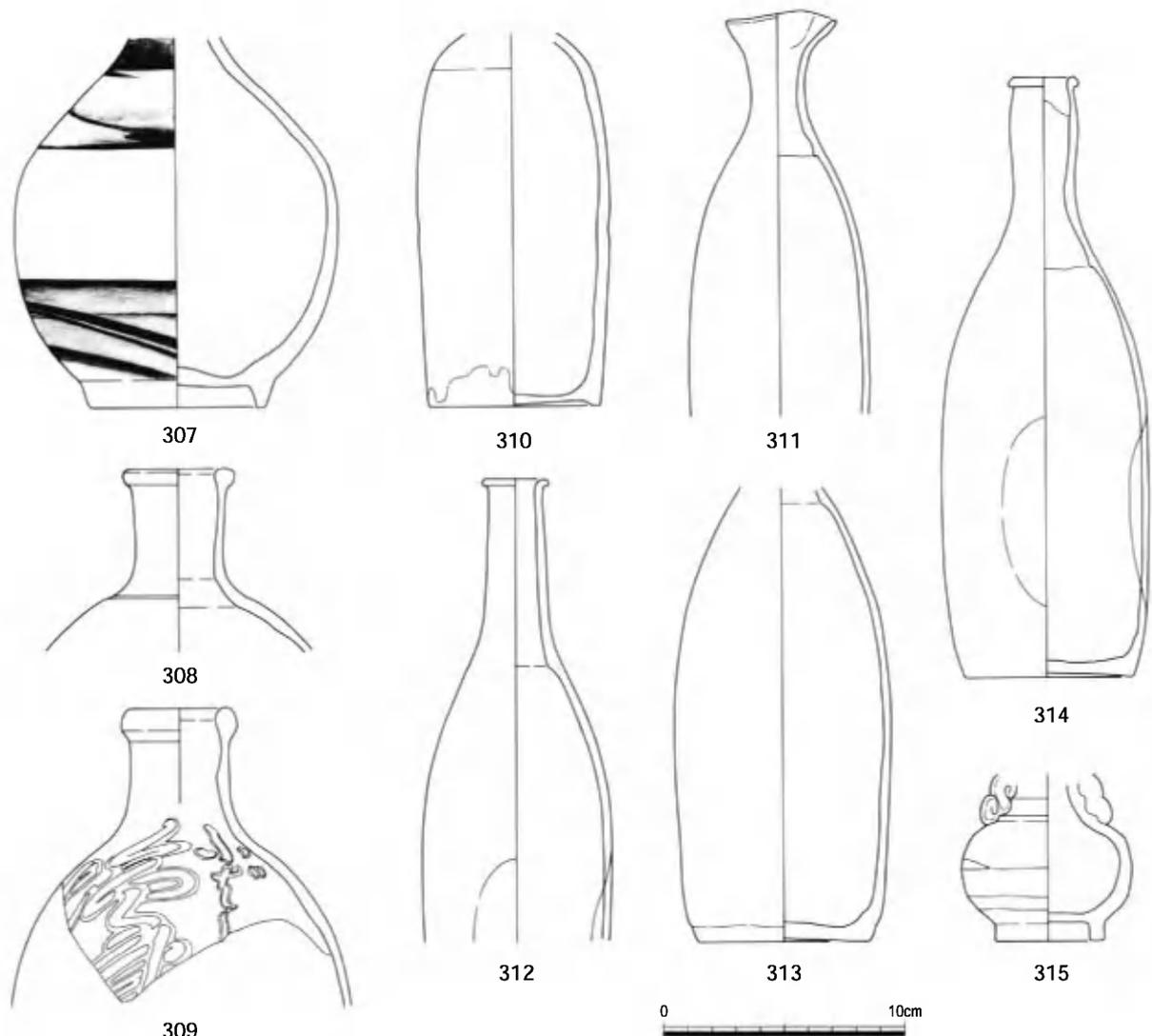
285



第55図 国産陶器 4 (1/3)



第56図 国産陶器 5 (1/3)



第57図 国産陶器 6 (1/3)

口径4.0cmの**291**、口径3.0cmの**292**は凹形をなす急須の蓋である。

鍋 (第56図)

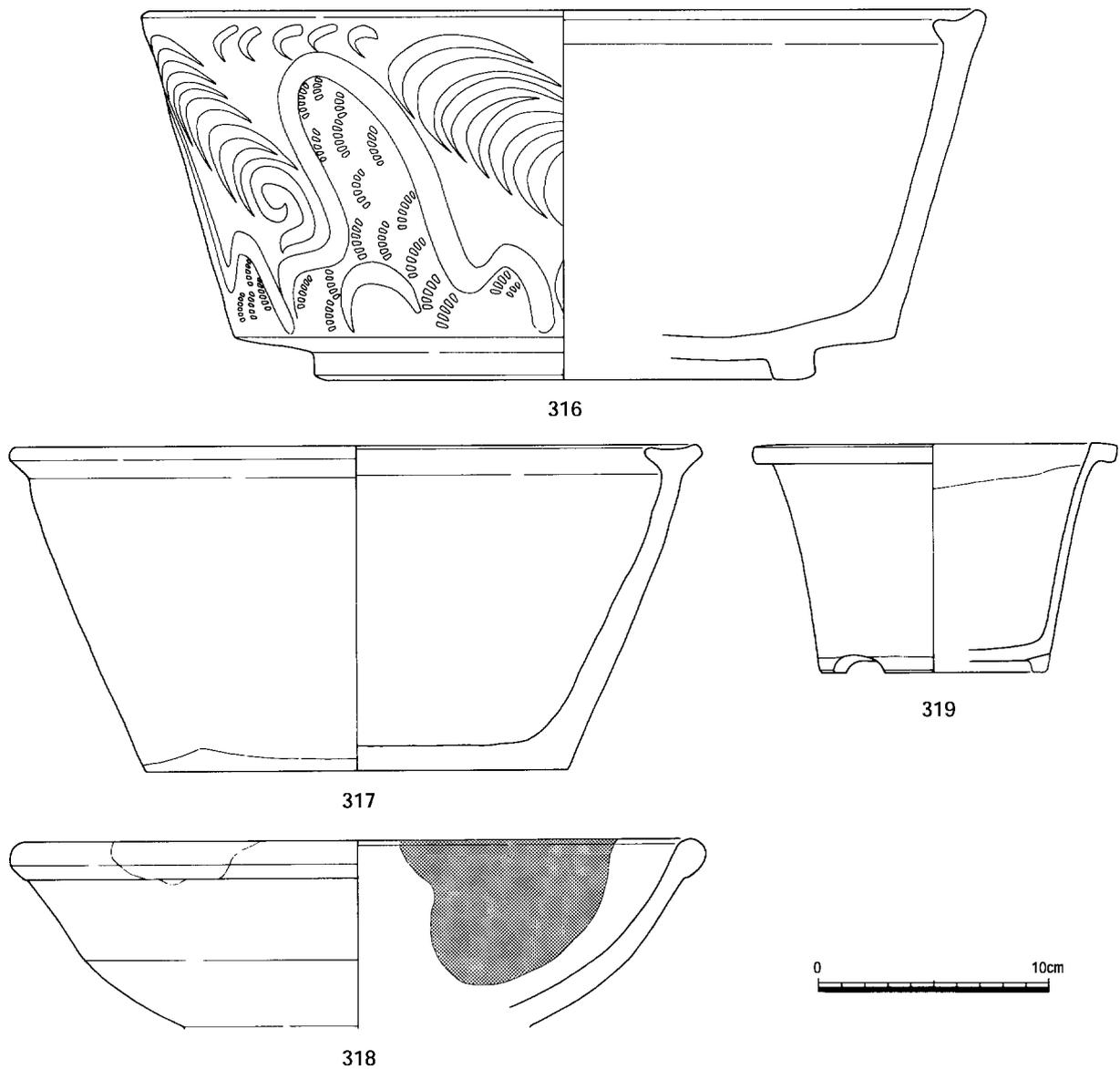
鍋は9点あり、いずれも紐状の把手を貼り付ける。口径18.0cmの**301**と口径20.0~22.0cmの**302**~**304**があり、**301**・**302**・**304**は鉄釉、**303**は褐色の胎土に透明釉を掛けるが、ほかに灰釉を施すものもある。

土鍋の蓋は4点ある。**305**は口径15.0cm、**306**は口径18.3cmを測り、いずれも灰釉を掛ける。

行平は図示できなかったが、灰釉をかけた把手が出土している。

瓶 (第57図)

胴径13.5cmを測る**307**は18世紀の肥前の刷毛目徳利である。胴径8.1cmの**310**は灰釉を掛けた瀬戸の高田徳利で、18世紀後半~19世紀前半に属する。**308**・**309**は鉄釉を掛けたいわゆる貧乏徳利で、**309**には施釉後に店名が記されている。**311**・**313**は19世紀前半の鳶口をもつ爛徳利で、化粧土に透明釉を掛ける。**312**・**314**は鶴首をもち筒形の胴部が凹むべこかん徳利で、口径2.2cm、器高25.1cmを測り柿釉を掛ける。



第58図 国産陶器 7 (1/3)

水鉢・植木鉢 (第58図、巻頭図版9)

316は浅めにつくられた19世紀前半の瀬戸・美濃の水鉢で、口径35.8cm、器高16.1cmを測り、灰釉の上に緑釉や鉄釉を流す。**317**は鉄釉の鉢で、口径29.6cm、器高14.2cmを測る。

口径15.8cm、器高10.1cmの**319**は鍔縁をもつ桶形の植木鉢で外面に鉄釉を施している。

火入 (第59図)

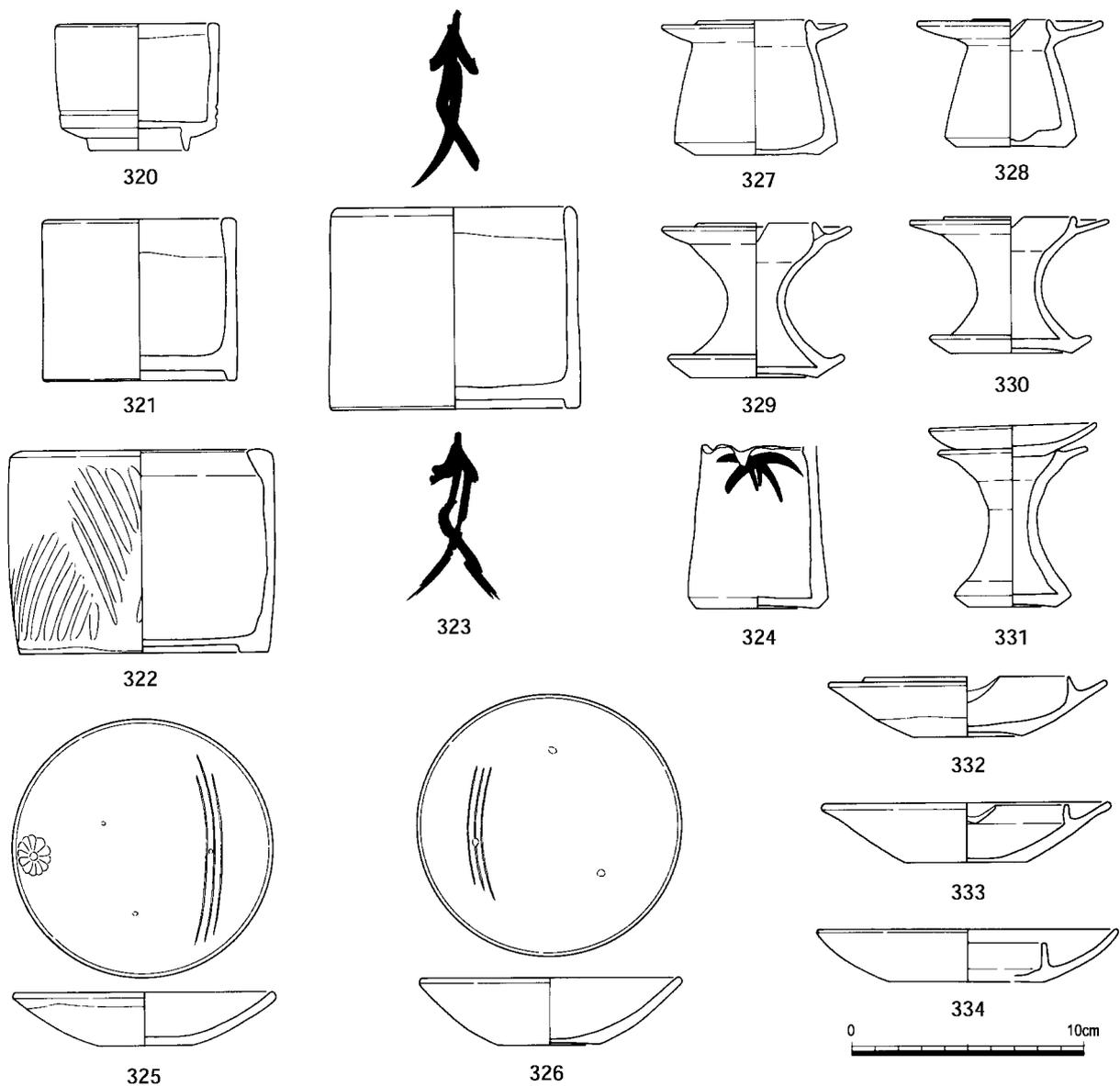
火入は8点出土している。**321**～**323**は筒形の火入で、口径7.8cmの**321**と口径10.0～11.3cmの**322**・**323**とがある。**321**・**323**は化粧土の上に透明釉を、鏝で飾る**322**は鉄釉を掛ける。また**323**の底の内外には墨書が残る。

灰吹 (第59図)

324は上方に窄まる灰吹で、底径5.3cm、器高7.1cm以上あり、口縁部は打撃によって欠損している。

灯火具 (第59図、巻頭図版9)

油皿は9点出土している。口径11.0cmを測る**325**・**326**は19世紀前半の信楽の油皿で、灰釉が掛か



第59図 国産陶器 8 (1/3)

る見込には櫛目が施され三足ハマ痕が残る。

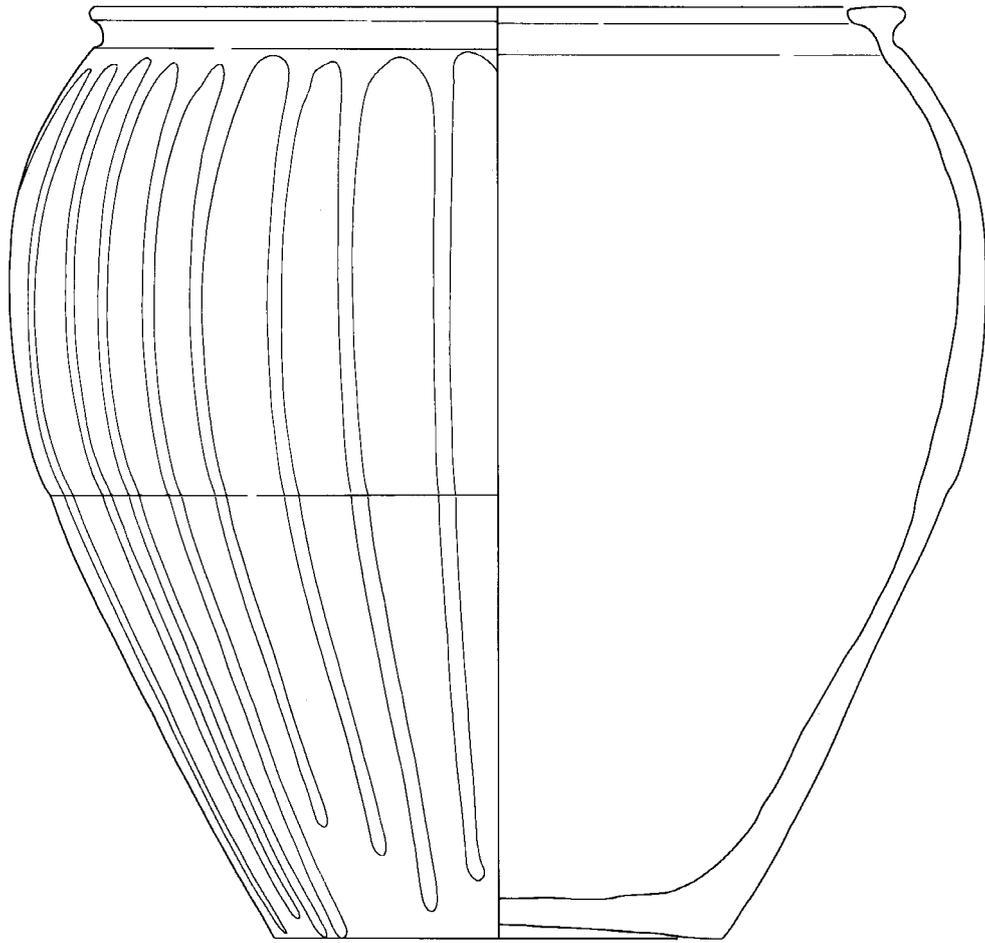
下皿は6点ある。325～327は受けを貼り付けた信楽の灰釉皿で、口径12.0～12.9cmを測る。

立鼓形の灯明台は11点出土している。このうち、327～330は口径7.8～8.0cm、器高5.5～5.9cmで台が筒形をなす327・328と、口径8.2～8.6cm、器高5.9～6.7cmで屈曲する台をもつ329・330に分けられる。これらはいずれも19世紀前半の信楽系陶器である。

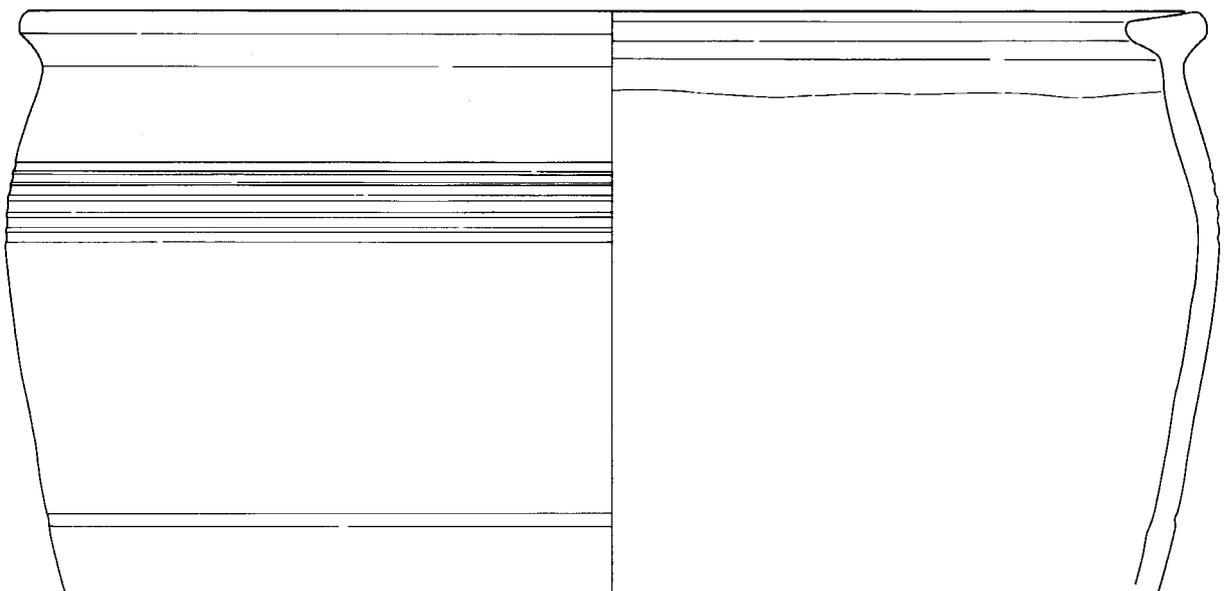
また、鉄釉を掛ける331は油皿と灯明台が一体でつくられており、油皿径7.2cm、下皿径6.5cm、総高7.8cmを測る。

甕 (第60図)

328は丹波系の甕で、口径32.0cm、器高37.1cmを測る。T字形の口縁部をもち、張りのある胴部には鉄釉の上に灰釉を流し掛ける墨流しが見られる。329も口径46.4cmを測る鉄釉の甕である。



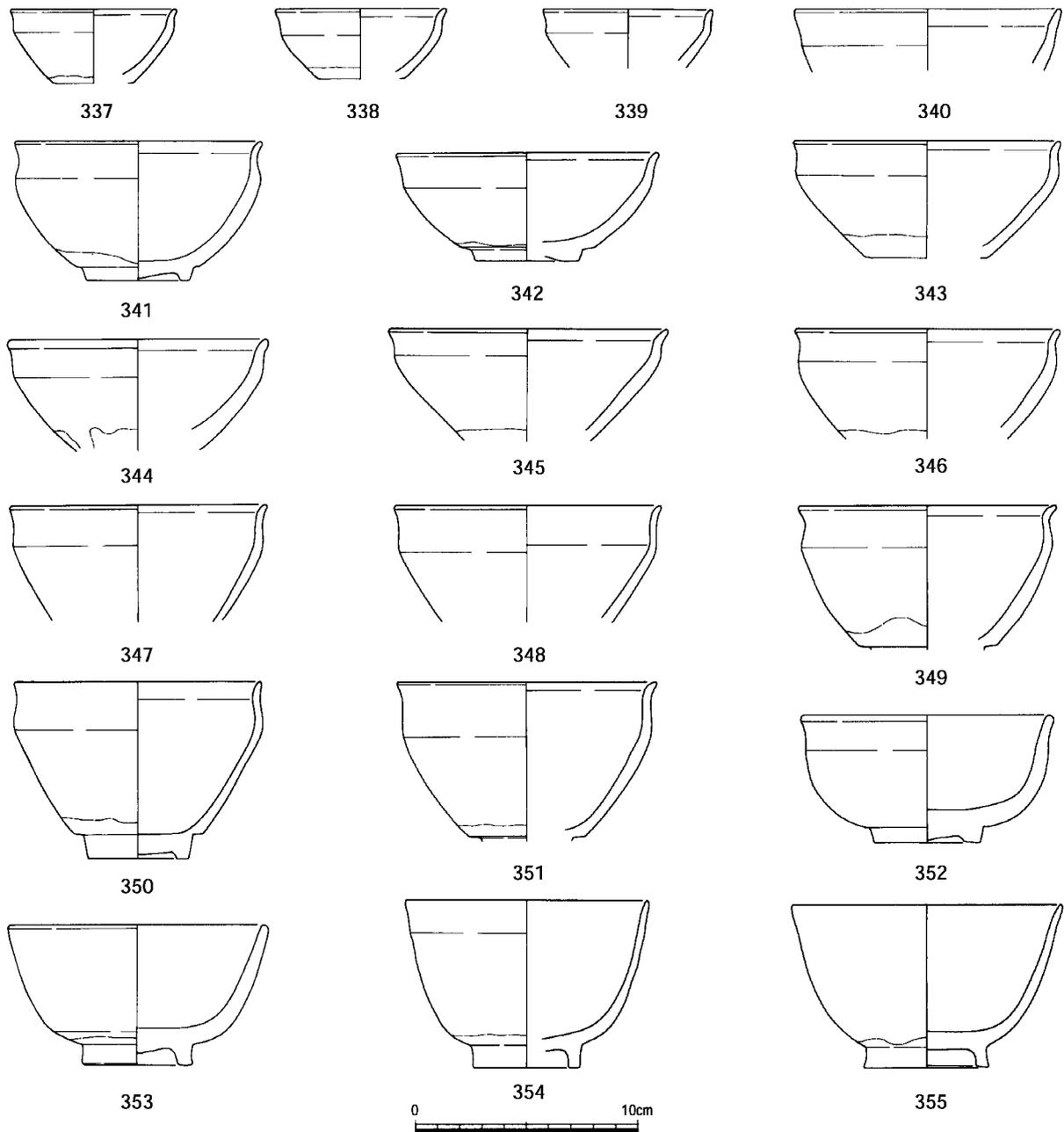
335



336



第60図 国産陶器 9 (1 / 3)



第61図 国産陶器10 (1/3)

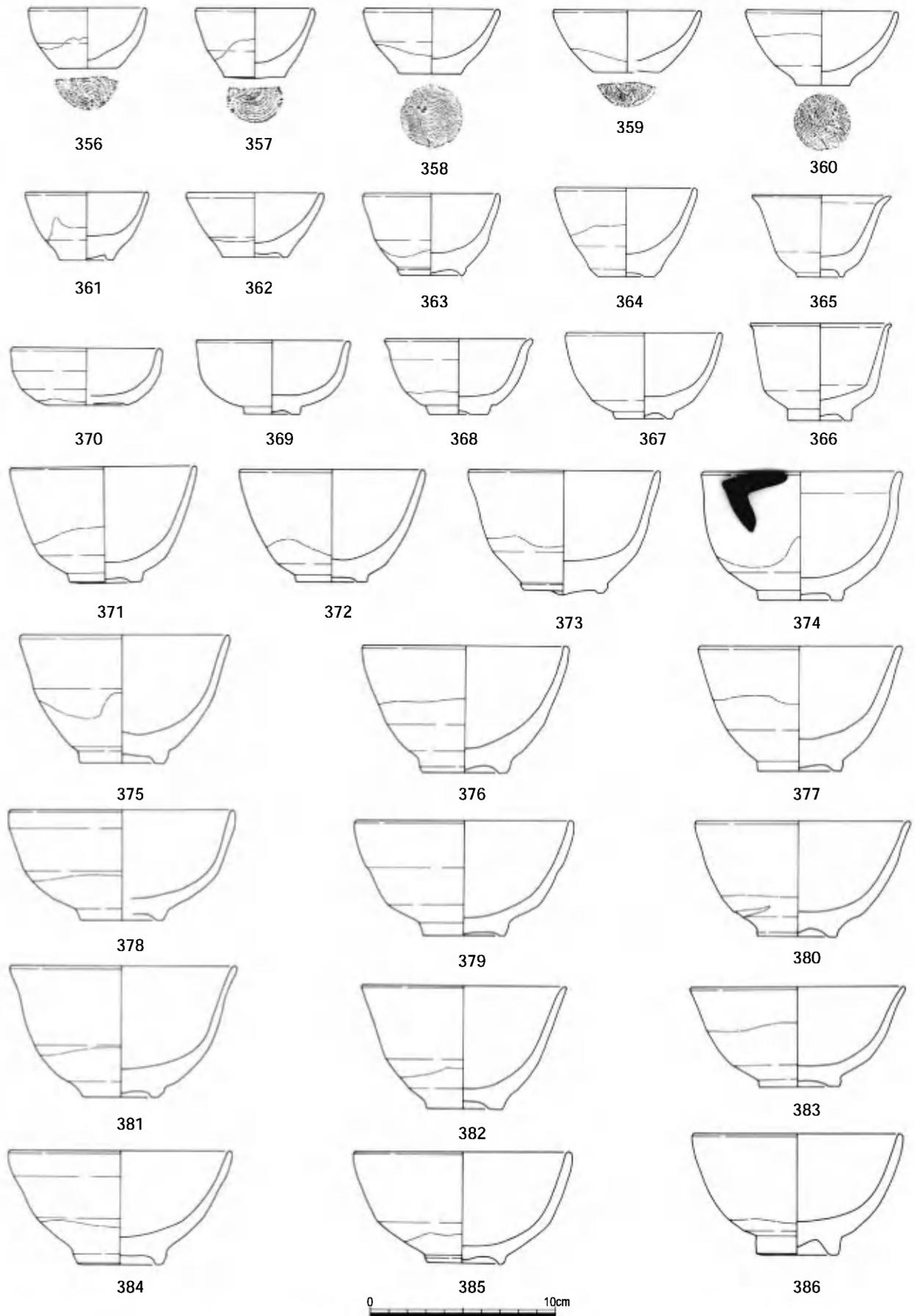
2. 下層の国産陶器

下層出土の国産陶器は17世紀初頭の唐津（肥前）が大半を占め、ほかに上野・高取や京、瀬戸、美濃、志野、織部などがある。

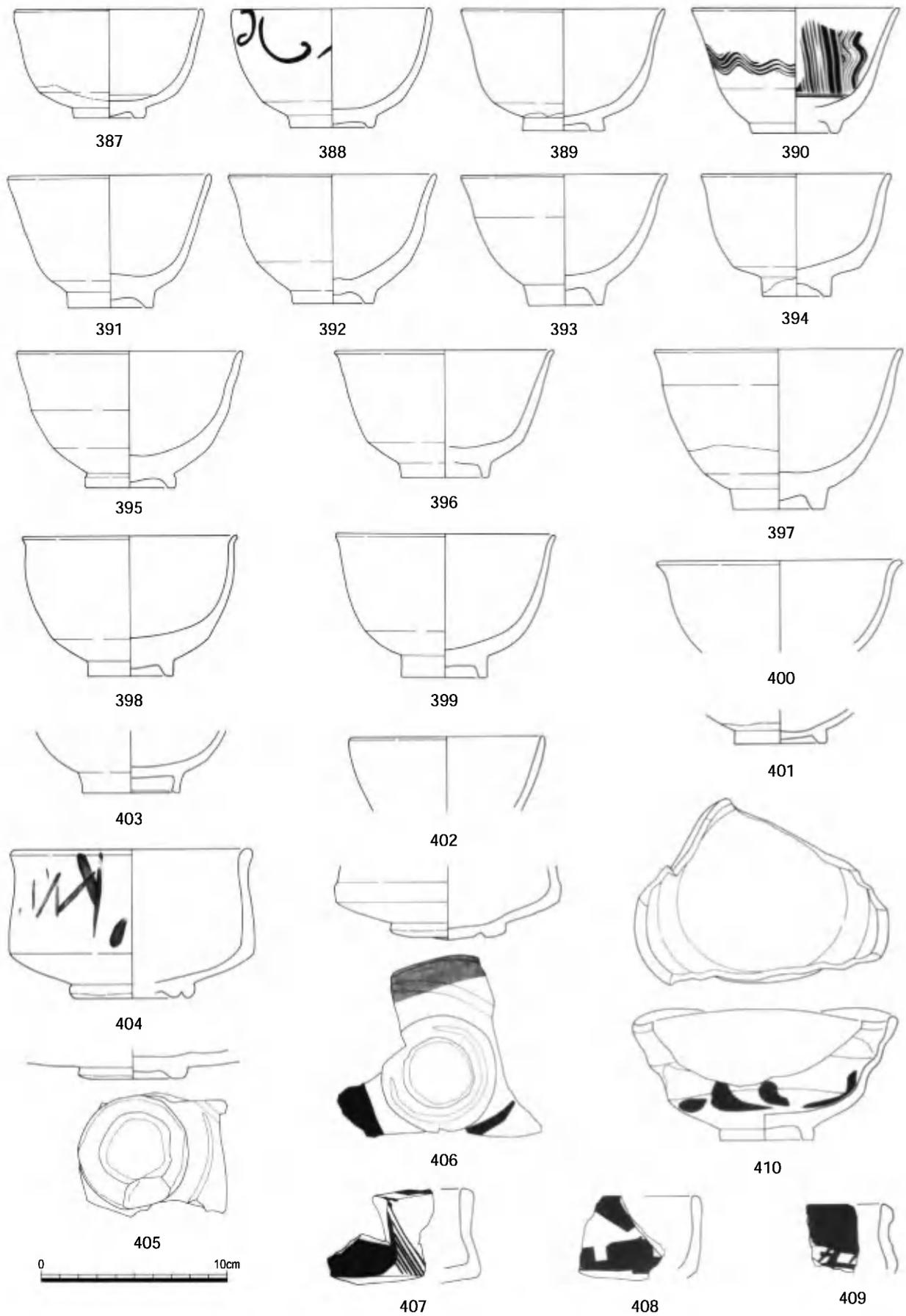
椀（第61～63図、巻頭図版10）

337～351は鉄釉を掛けた天目形の椀で、口径7.4～7.6cmの小椀337～339と口径11.0～11.8cmの中椀341～351がある。唐津と見られる341のほかは瀬戸の製品である。また、口径11.0～12.2cmを測る352～356は柿釉を掛けた瀬戸の丸形椀で、器高が4.8～6.3cmと低く厚手の352・353と、器高が7.4～7.6cm高く薄手の354・355に分けられる。

小椀には、唐津の356～367と志野の368～370がある。口径7.8～8.1cmを測る志野はいずれも丸形



第62図 国産陶器11 (1/3)



第63図 国産陶器12 (1/3)

をなし、碁笥底の**370**と輪高台の**368・369**が見られる。口径6.2～8.3cmの唐津では桶形の**356～364**と端反形の**365・366**があり、後者がいずれも輪高台をもつものに対し、前者は糸切底の**356～360**と碁笥底の**361～364**、輪高台の**367**に分類できる。

肥前の中椀**371～399**のうち、口径9.8～11.6cmを測る**371～385**では高台の削り出しが弱いのにに対し、口径11.0～12.0cmの**386～399**は整った輪高台をもち、**396～399**のように端反形になるものもある。前者の高台では胎土目もしくは砂目が、後者では砂目のみが観察される。また、**374・388**には鉄絵、**390**には刷毛目が施される。

口径11.6～13.8cmを測る**400～402**は藁灰釉を掛ける上野・高取の椀で、丸形の**402**と端反形の**400**がある。

高台径5.2cmの**403**は軟質陶器の椀で、初期の京焼と見られる。

404は厚く長石釉を掛けた志野の茶椀で、口径12.6cm、器高8.1cmを測り、鉄釉で檜垣を描く。

405～409は黒織部の杓形茶椀で、黒釉を省いて幾何学文様を描く。

410は上野・高取の杓形茶椀で、口径13.7cm、器高6.8cmを測り、高台には胎土目が残る。

皿（第64～69図、巻頭図版11・12）

411・414は碁笥底をもつ瀬戸の柿釉の小皿で、**411**は口径8.5cmを測る浅い丸形、**414**は口径11.8cmの端反形をなす。

412・413は志野の菊皿で、口径12.0～12.4cmを測る。ロクロ成形した丸形皿を菊花形に彫りこんでつくられており、見込にはピン痕が見られる。

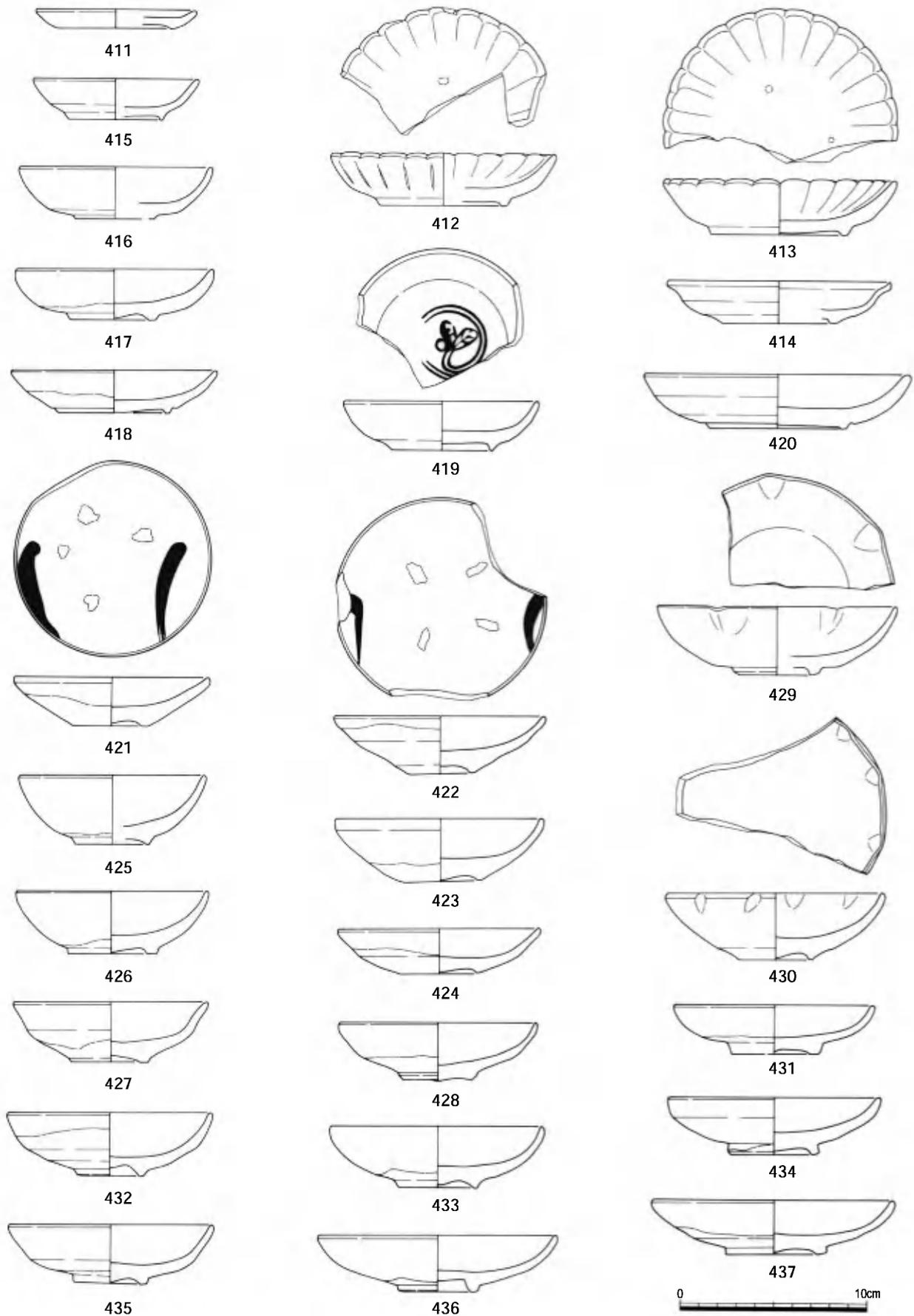
口径10.1～10.4cmを測る**416・417**は、藁灰釉を掛ける上野・高取の皿で低い輪高台をもつ。

415・418～420は灰釉を施した瀬戸・美濃の丸形皿で、高台内に輪トチンの痕を残す。口径8.8cmの**415**、10.2～10.8cmの**418・419**、14.1cmの**420**があり、見込に花文を飾る**419**や**415**は16世紀代、**420**は16世紀後半、**418**は17世紀前半に位置付けられる。瀬戸・美濃の皿はほかに、灰釉の折縁ソギ皿の小片が出土している。

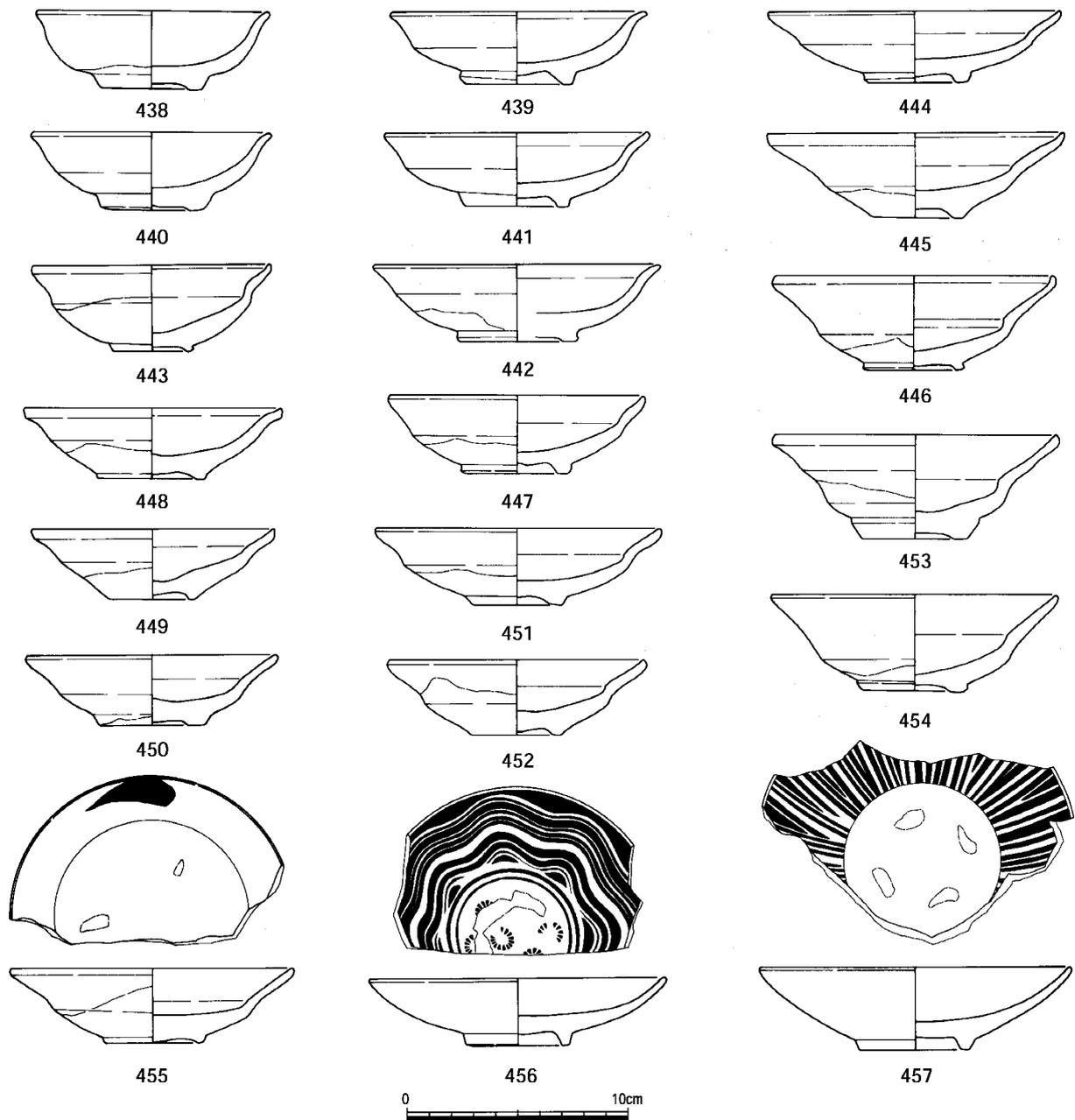
421～437は口径9.8～12.6cmを測る丸形皿である。産地不明の**431・434・436**以外は唐津で、岸岳系の皿も1点含まれている。見込に胎土目を残すものが多く、碁笥底をもつ**421・422**には鉄絵が施される。また、**456・457**は肥前の刷毛目皿で、砂目が観察される。**438～440**は端反形の皿で、**438・440**には砂目、**439**には貝目が見られる。口径10.5～16.0cmを測る**441～457・458～472**は唐津の折縁皿で、胎土目**444～447・451～453**と砂目**448・450**がある。また、**458～460**のように輪花につくるものもある。**473～478**は溝縁皿で、口径12.6～13.6cmを測り見込に砂目を残す。**477・478**は灰釉と緑釉・鉄釉の掛け分けがなされている。**479**も掛け分け手の皿で、高い高台をもち上野・高取の製品と見られる。**480～491**は鉄絵を飾る唐津の折縁皿で、**480・486**は輪花、**484・485・487・488**は四方形につくる。胎土目をもつものが多いが、**483・488**のように砂目もある。

唐津の中皿**492・496**は口径17.8～19.2cmを測り、鉄絵が施される**502～505**には胎土目が残る。**493・494**は上野・高取の皿で、**494**の高台内には陶印が見られる。口径19.8cmの**495**は鉄釉の皿で、北部九州の製品と思われる。

498～501・506～508は口径30.4～34.0cmを測る唐津の大皿で、胎土目を残すものが多く、**506～508**には鉄絵が施される。



第64図 国産陶器13 (1/3)



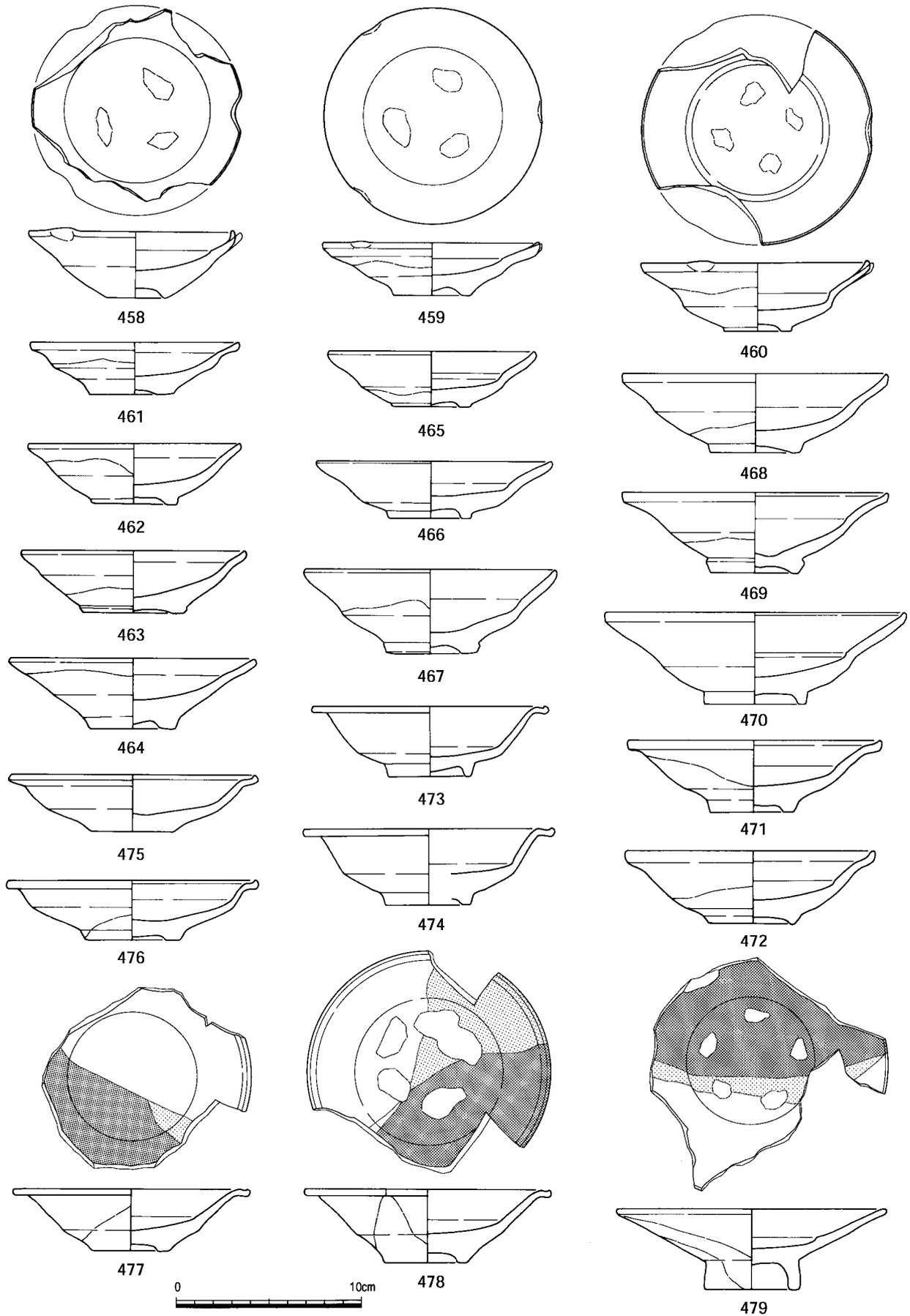
第65図 国産陶器14 (1/3)

向付 (第70～72図、巻頭図版12～14)

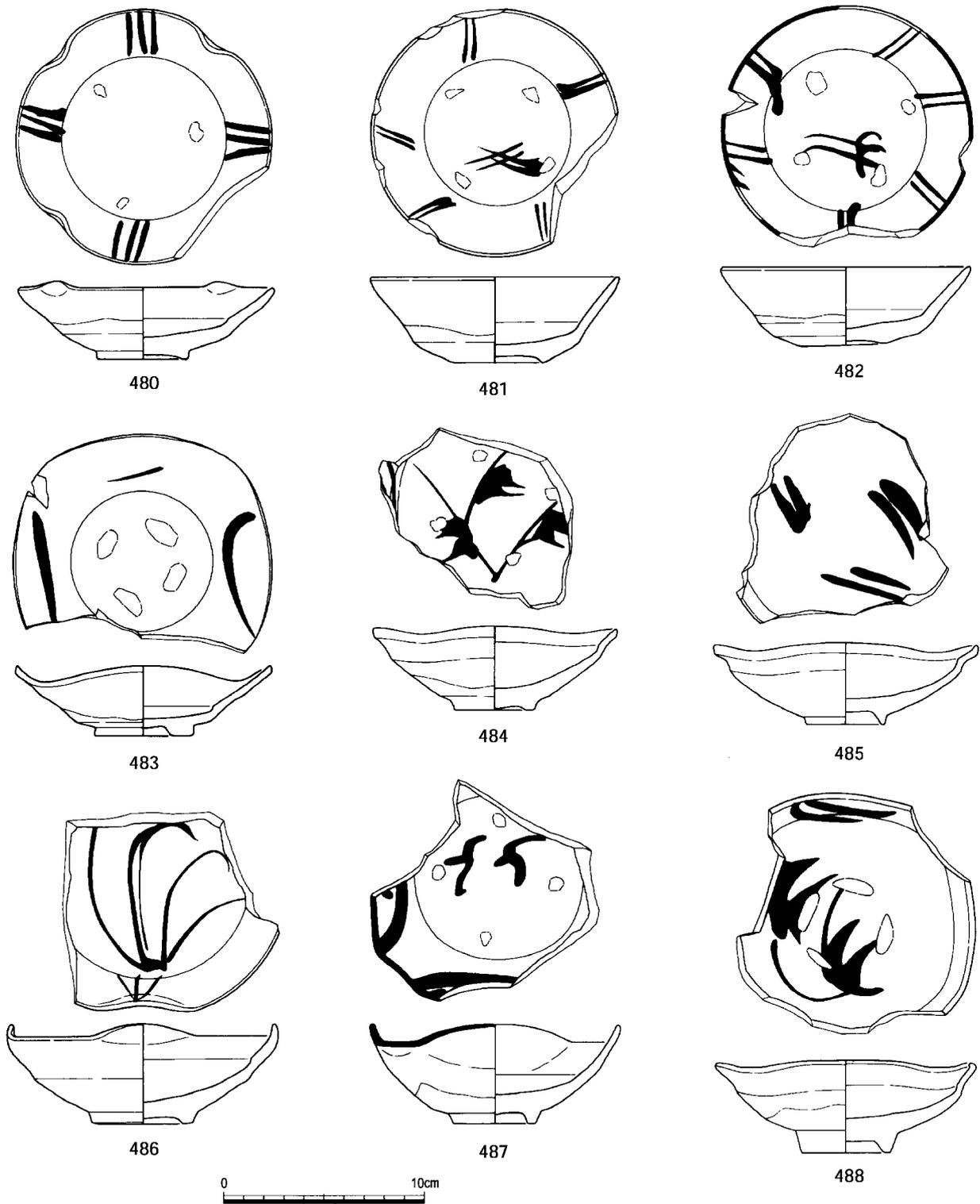
509～522は長石釉が施された志野の向付である。509～513は入り隅四方形に型打ちされた向付で基筒底をもち、外面に檜垣や草文を描く。器高は509で6.0cm、510で6.7cm以上、幅は511で12.2cmを測る。518は括れた口縁部をもつ四方形の向付で、口縁下に播座を貼り付け鉄絵を描く。

519～522はロクロ成形後、口縁部を四方に整えた向付である。519は径13.2cmを測る胴部を胴紐形につくり、外面に鉄絵を施す。口径15.2cm、器高5.2cmを測る520は段をなす口縁部を四方形に整え、見込に芒文を描く。521も草花文の鉄絵を飾る向付で、段をなす口縁下には1対の播座を四方に貼り付け、底部には棒状の足を備えている。522は内傾する口縁部をもち、見込に松を描く向付である。

523～528は粘土板を型打ち成形した織部の向付で、523は枅と格子に丸、525は梅花、526は紅葉



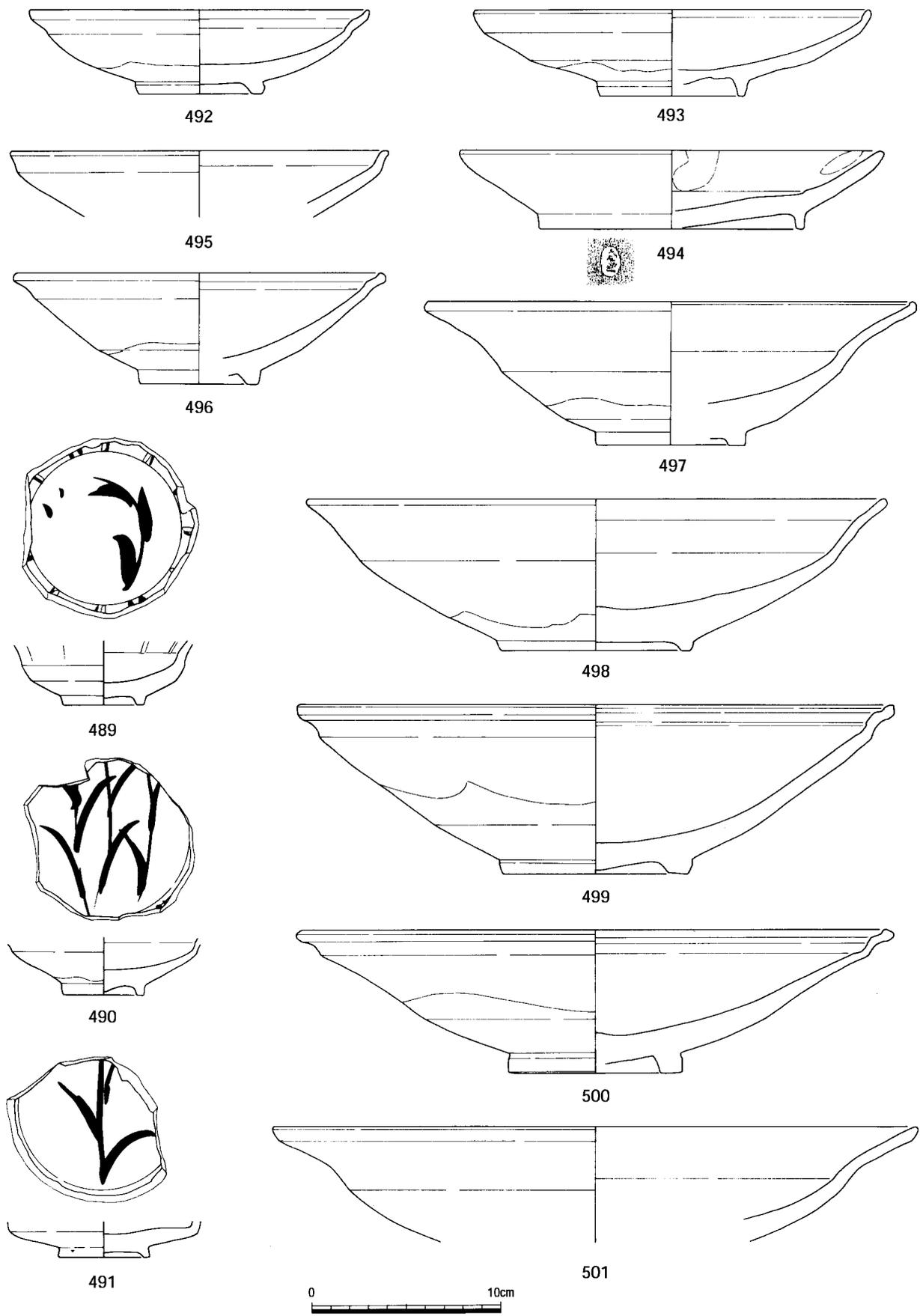
第66図 国産陶器15 (1/3)



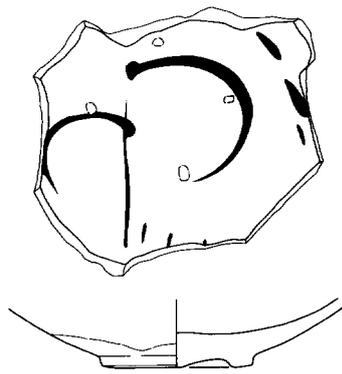
第67図 国産陶器16 (1/3)

唐草と格子に丸、528は鳥を描き、底部に3つの半環足を貼り付ける。このうち、長さ15.6cm、幅11.3cm、高さ5.2cmを測る523の底面には墨書が見られる。

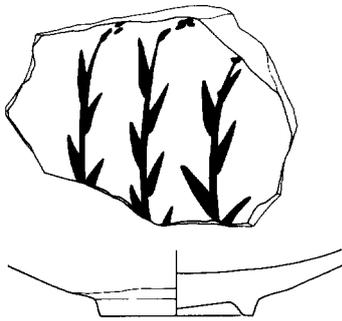
529・530は把手を失っているが口径23.0cm、器高8.0cmを測る織部の手鉢で、花唐草や鳥、格子に丸を描く。



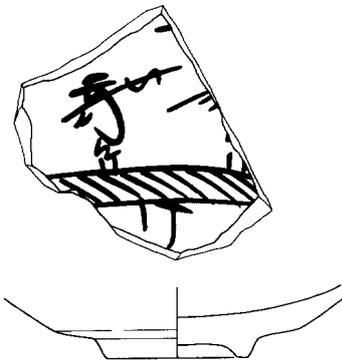
第68図 国産陶器17 (1/3)



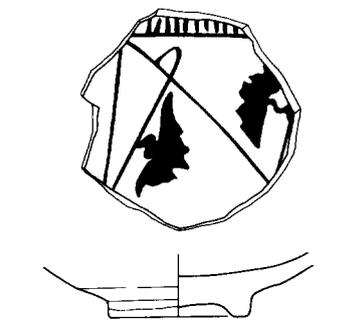
502



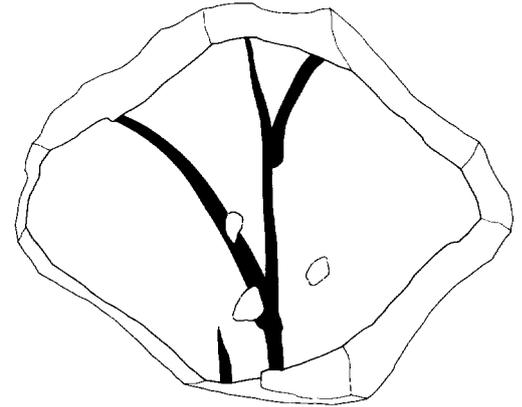
503



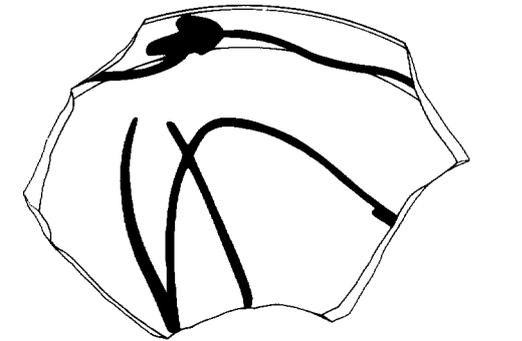
504



505



506

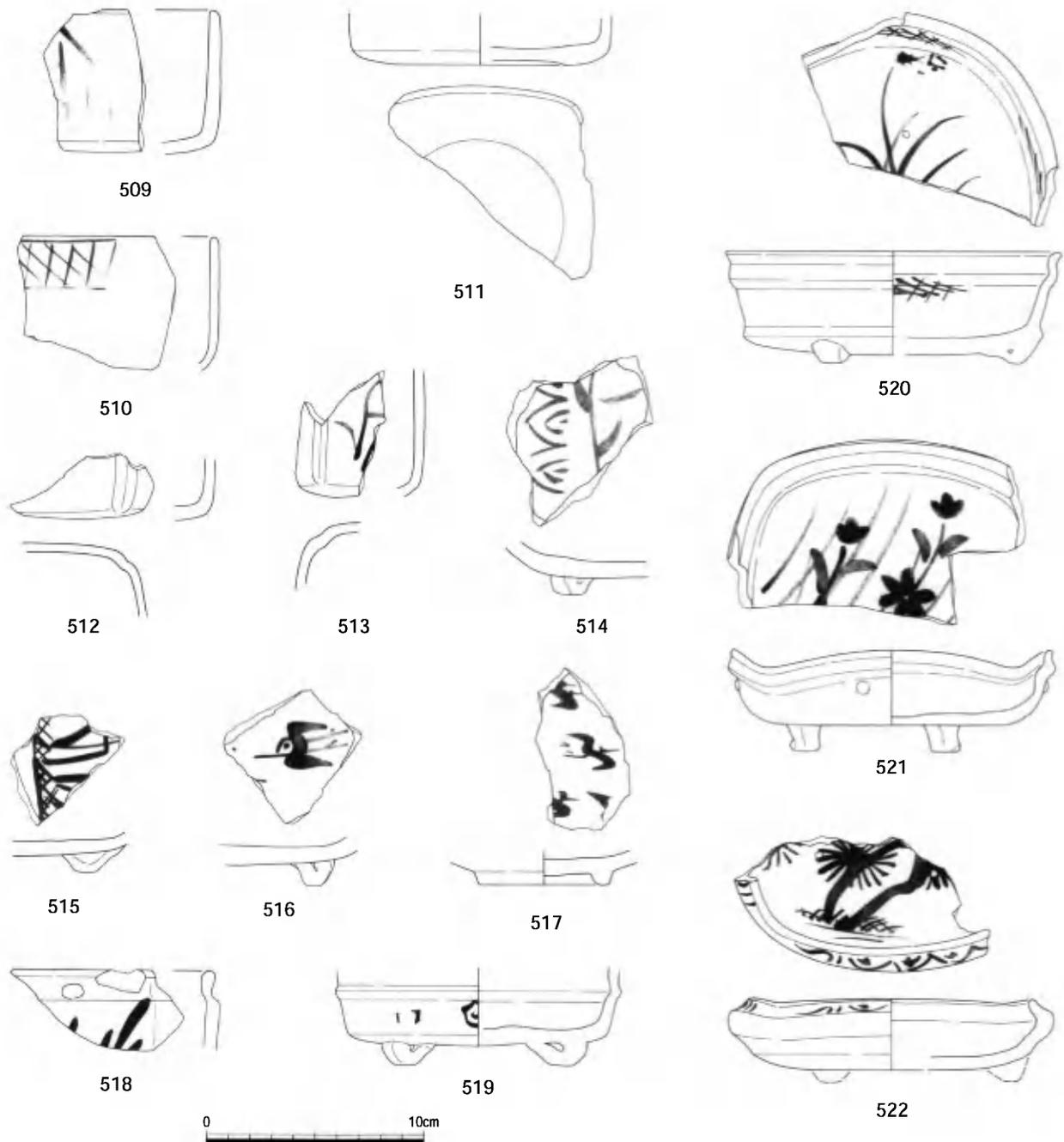


507



508

第69図 国産陶器18 (1/3)

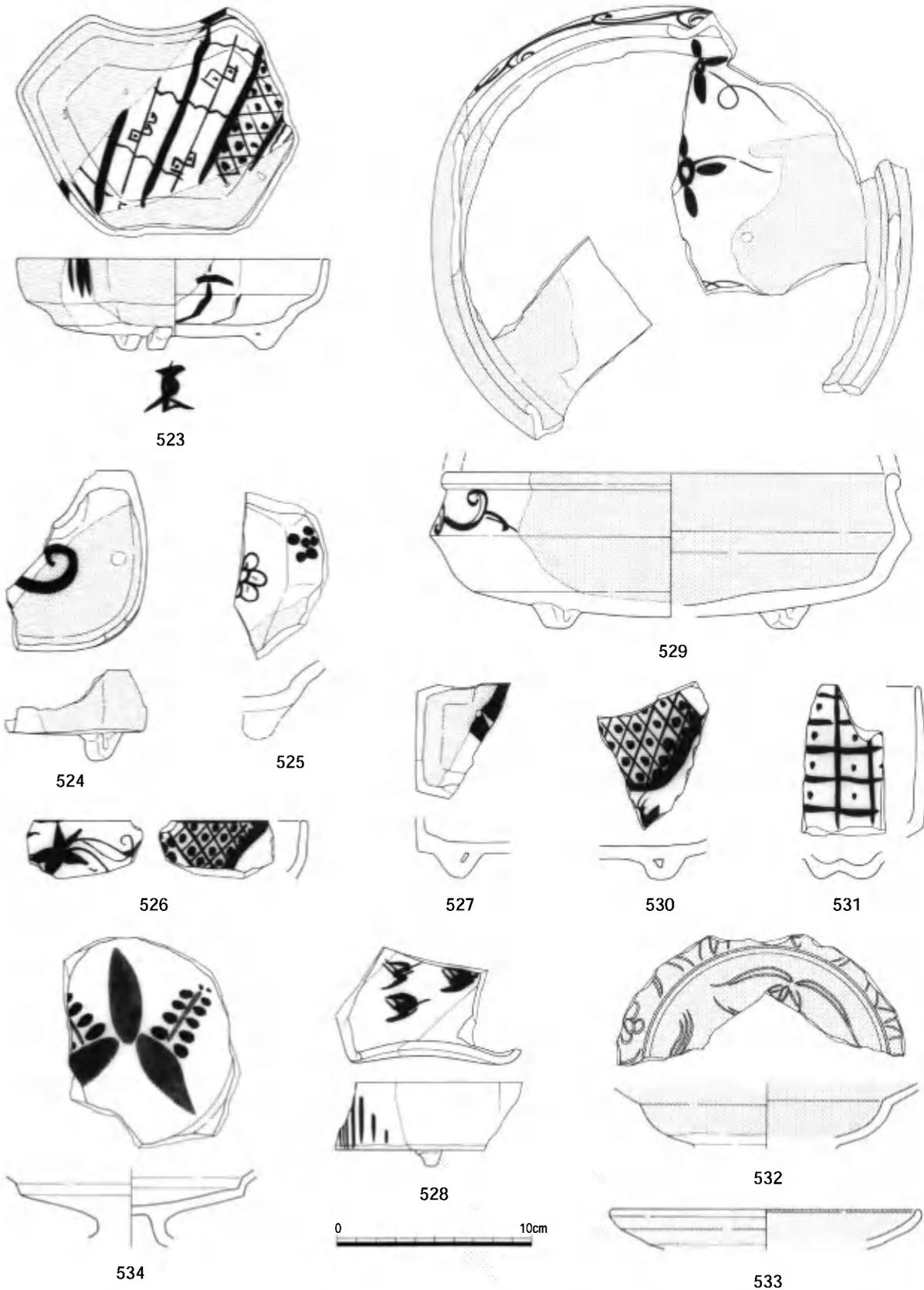


第70図 国産陶器19（1/3）

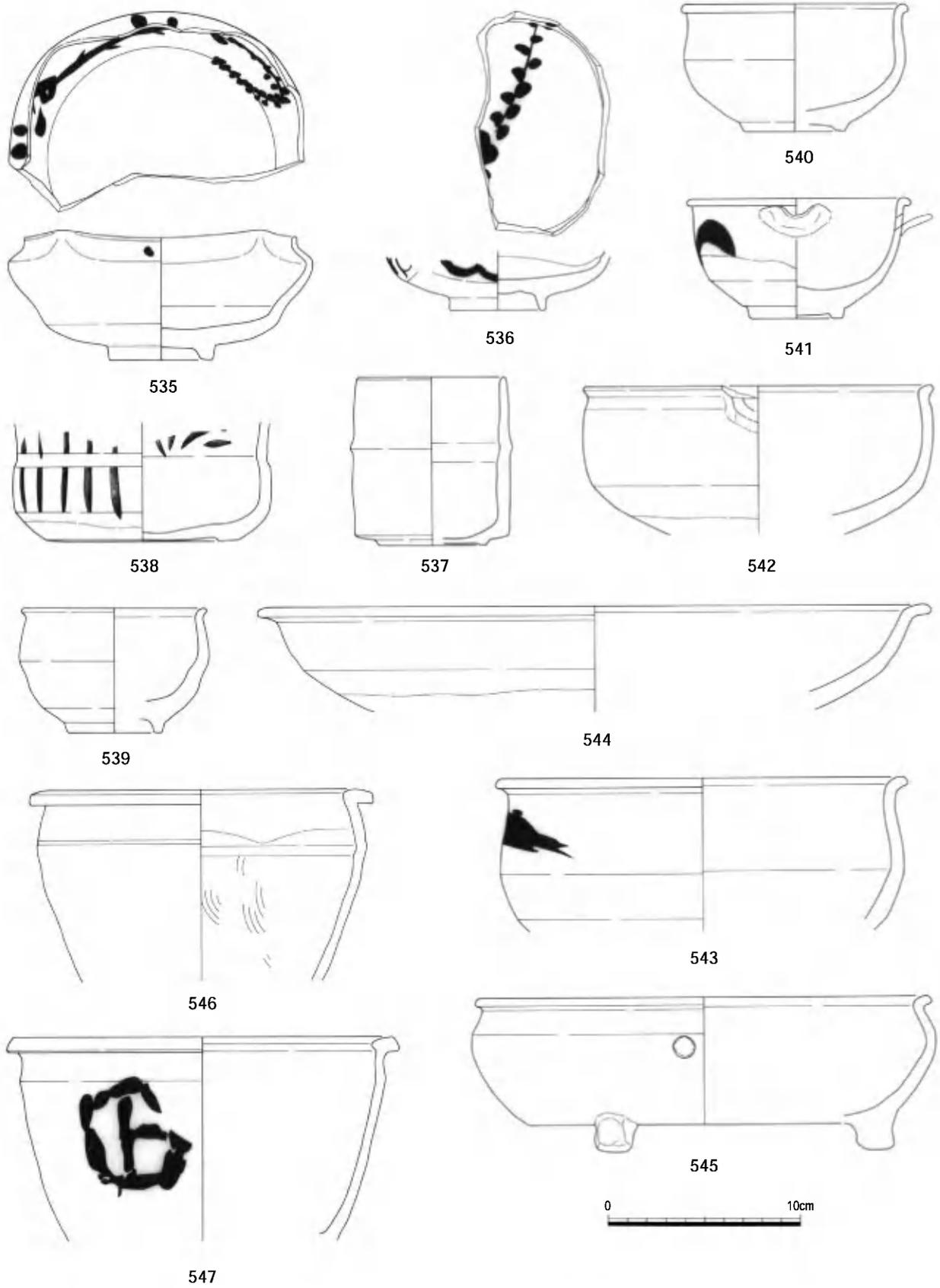
531は菊花形に型打ちされた半筒形の向付で、格子に丸文を描く。器高は7.8cm以上ある。532は総織部の鉢で、花文を陰刻する。537は胴紐をめぐる灰志野の筒形向付で、口径7.6cm、器高8.8cmを測る。

534は高杯形の軟質陶器で、見込に緑釉で立沢瀉を描く初期の京焼である。同様の器種はほかに2点出土している。

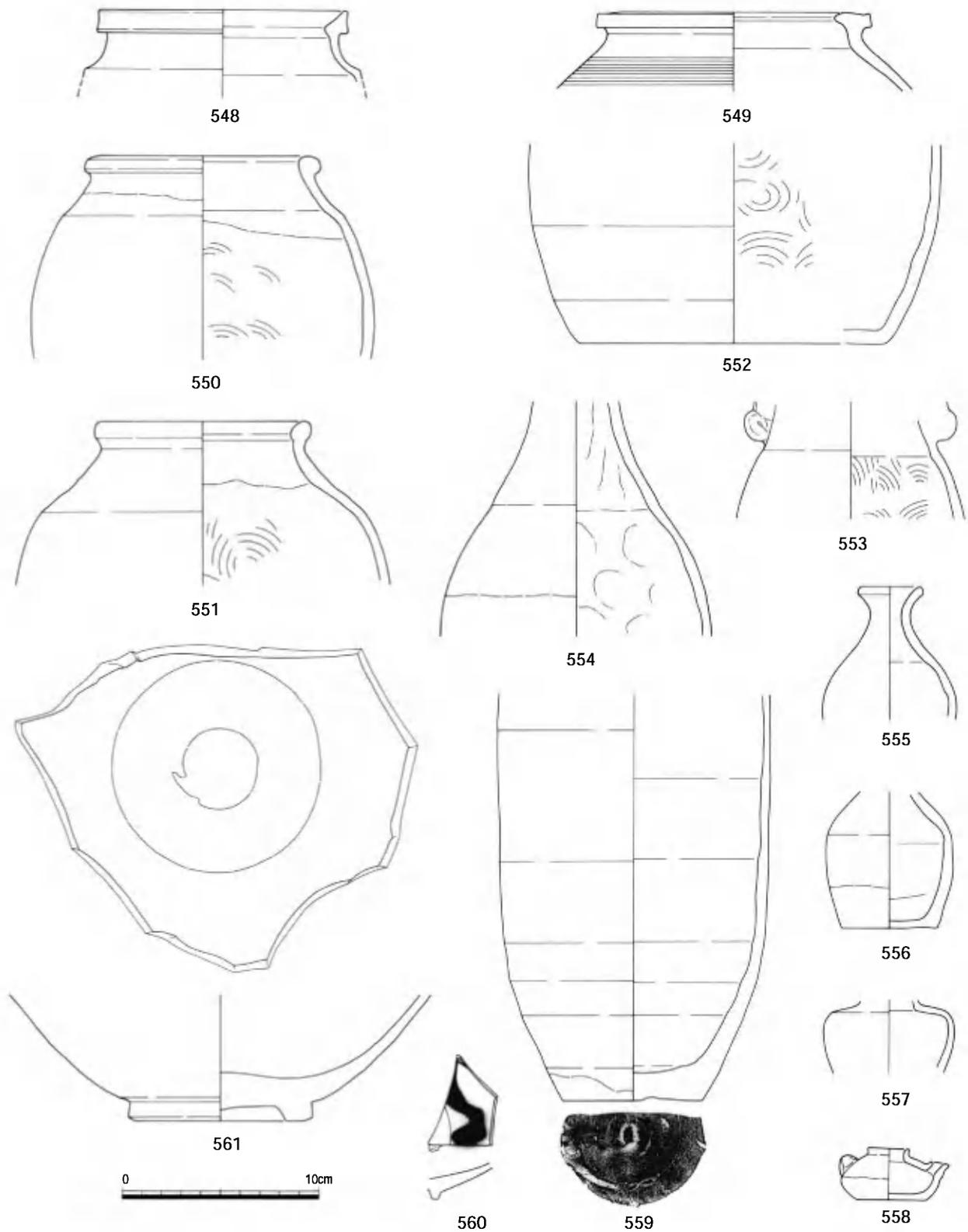
535はロクロ成形した鉢の口縁部を四方形に整えた唐津の向付である。口径14.0cm、器高6.8cmを測り、内外に鉄絵を施す。唐津の向付はほかに、粘土板を型打ち成形したものが数点ある。



第71図 国産陶器20 (1/3)



第72図 国産陶器21 (1/3)



第73図 国産陶器22・輸入陶器（1/3）

鉢（第72図）

538は鉄絵を飾る唐津の鉢で胴径10.0cmを測り、底部は碁笥底となる。

唐津の片口には口径11.0～11.4cmの540・541、18.1cmの542、20.9cmの544があり、541・544は鉄

絵を施す。

544は藁灰釉をかける上野・高取の捏鉢で、口径は34.4cmある。口径23.3cm、器高8.0cmを測る**545**は、3つの団子足をもち胴部には播座を貼り付ける上野・高取の鉢である。

546・547は口径15.8～19.5cmを測る唐津の鉢で、内面には同心円の当具痕が残り底部には貝目が見られる。

壺（第73図）

548～552は胴径が17.4～20.9cmほどある唐津の壺で、口縁端部が垂直な面をなす**548**、玉縁をなす**550・551**、T字形を呈する**551**がある。**550～552**の内面には同心円の当具痕が残り底部には貝目が見られる。

瓶・花入（第73図）

553は頸部に双耳を貼り付けた唐津の花入で、胴部の内面には同心円の当て具痕を残す。

唐津の瓶には胴径13.8cmを測る掛け分け手の**554**と6.8～6.9cmの**555・556**がある。

茶入（第73図）

胴径6.7cmを測る**557**は肩衝形をした鉄釉の小壺で、瀬戸の茶入と見られる。

水滴（第73図）

558は水注形をした鉄釉の水滴で、全長5.6cm、器高2.6cmを測り、瀬戸産と見られる。

（5）輸入陶器

輸入陶器は下層からごく少量であるが出土している。**340**は建窯の天目である。長胴となる**559**は中国南部の壺で、底部はヘラキリする。**560**はベトナムの皿。**561**は中国南部の鉢で、見込みを蛇の目に釉剥ぎする。このほか中国南部のものと見られる馬形をした軟質陶器の水滴が出土している。

（6）炆器

1. 上層の炆器

上層の炆器は、灯明皿や匣鉢、播鉢を主体とする備前に、関西系の播鉢が若干加わる。

皿（第74図、図版8）

563・564は型押し of 煎餅皿で、18世紀末～19世紀前半のものである。**565**は口径19.6cm、器高3.4cmを測る厚手の皿で、底部は平高台となる。**567**は型押し of 小皿で、口径は9.6cmある。

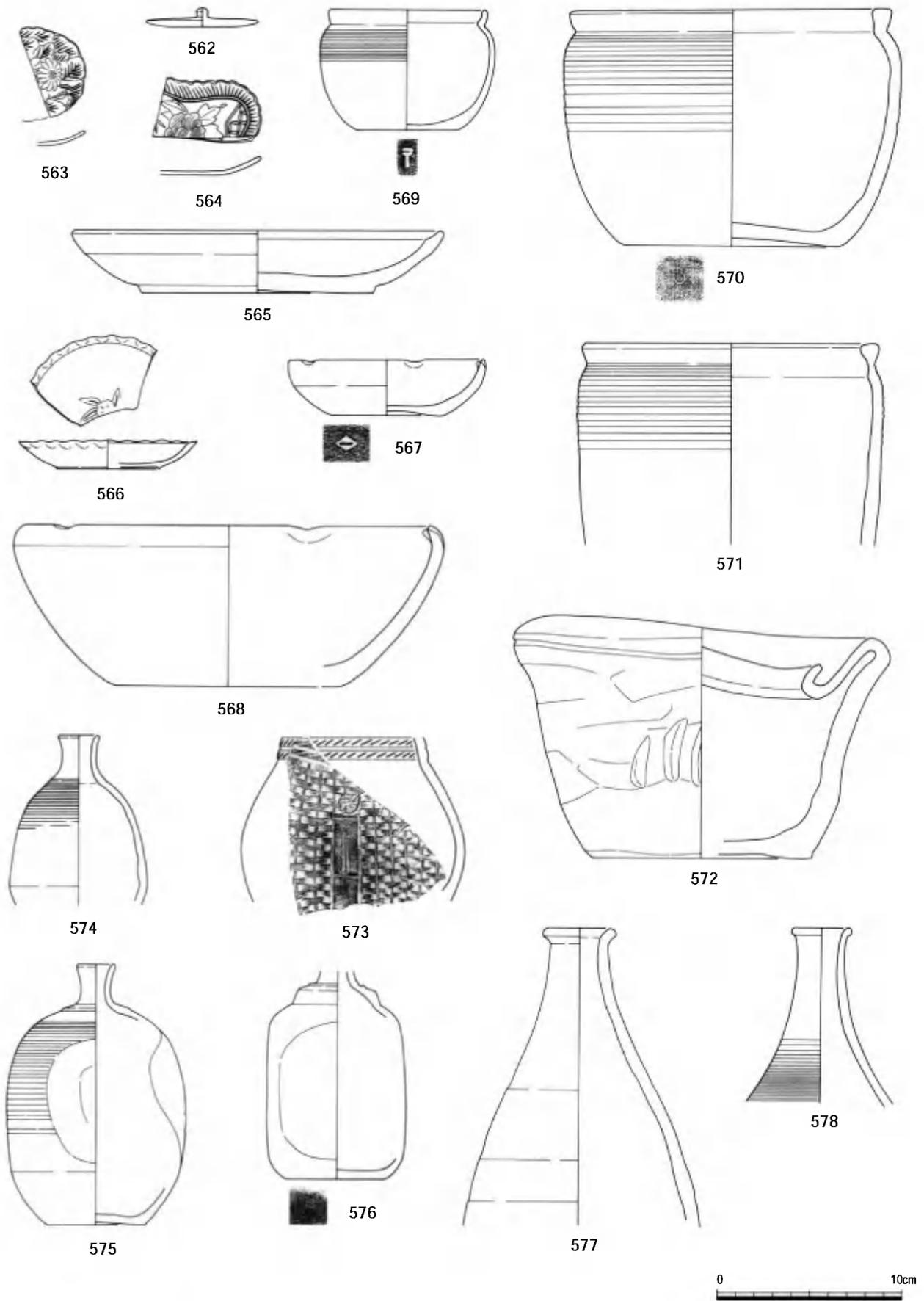
鉢（第74図、図版8）

丸形の鉢は比較的出土量が多い。ここでは口径10.4cmを測る小形の**567**と21.6cmを測る大形の**568**を図示したが、いずれも内湾する口縁部を輪花につくる。火櫛の見られるものもあり、**301**の底面には菱に一の陶印が見られる。

569～571は甕形の鉢で、肩部に多条の凹線を飾る。個体数は多く、口径4.1cmの**1606**、口径8.4cmの**569**、口径15.6～17.3cmの**570・571**がある。このうち小形の**1606・569**には朱泥が施されている。また、**569**には干、**570**には○の陶印がある。

胴径20.5cm、器高12.0cmを測る**572**は焼け歪んだ鉢で、体部にはヘラ目が施されているところを見ると水指の可能性はある。

573は竹籠を模した型づくりの鉢で、胴径12.0を測る。



第74図 炆器 1 (1/3)

匣鉢（第75図、図版8）

匣鉢は25点あり、その蓋と思われるものも3点出土している。匣鉢は口径10.6～13.6cm、器高6.3～7.5cmの**579～582**、口径12.4cm、器高10.3cmの**583**、口径17.6cm、器高9.4cmの**585**、口径23.2cmの**586**など様々で出土量も多い。総じて粗製のものが多いが、沈線を巡らす**583**や曲物を模した**584**もあり、多様な用途が想定される。また、**579・582**の側面には笠に上、**581**には下、**580**には上に一などの陶印が見られる。

瓶（第74図、図版8）

574は小形の尻張り形をした徳利で、胴径7.5cmを測る。**575**は胴径9.6cm、器高14.2cmのぺこかん形の徳利で、体部の凹みに人形を貼り付けた人形徳利もある。**576**は幅7.7cmの角徳利で、ロク口成形の体部を箱形に撓め、型づくりの口縁部を接合している。底部には四つ目結の陶印がある。

577は体部下半を失っているが、口縁部から体部へ直線的に開く形状から舟徳利と考えられる。**578**は薄手のつくりで肩部に沈線をめぐらした上手の徳利である。

花入（第75図、図版8）

589は備前の筒形花入で、口径9.9cm、器高23.8cmを測る。底部には丸にく字の陶印がある。

播鉢（第75・76図、図版9）

播鉢は、関西系が2点、備前が23点出土している。**591**は口径35.7cm、器高12.2cmを測り、内面に播目を施したのちナデによって鋭い段をつくり出す。また、見込に7単位の播目を放射状に施しており、口径17.6cmを測る**590**とともに明石の製品と見られる。

一方、備前の**592・593**では32.8～34.0cmある口縁部の内面にナデによる鈍い段をつくり出したのち播目を全面に施しており、19世紀前後のものと思われる。

灯火具（第77図）

油皿は55点、下皿は37点出土している。油皿は口径7.3～7.8cm（約2寸5分）の**595～604**、9.3～9.8cm（約3寸）の**605～609**、10.6～12.4cm（約3寸5分～4寸）の**610～614**がある。

受けを貼り付ける下皿も口径6.9～7.8cmの**615～626**、8.9～9.1cmの**627～632**、10.8～12.2cmの**633～638**に分けられる。これらは対をなすように製作されたものと思われるが、下皿をつくり付けた灯火具もあり、油皿が単独で用いられることも多かったと思われる。

2. 下層の炆器

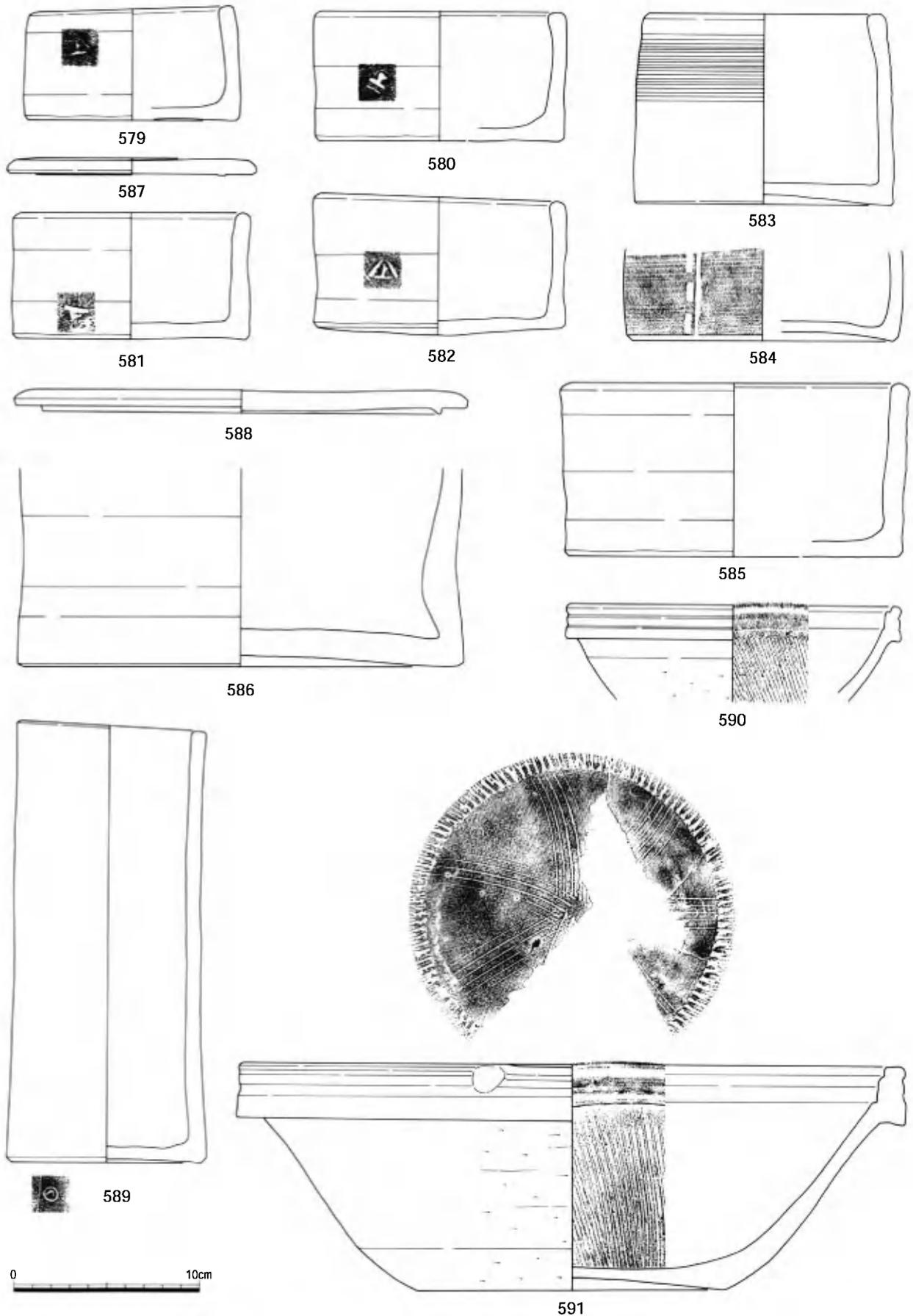
下層の炆器は備前のみで、椀や皿、瓶、壺のほか多様な鉢類があり、播鉢や甕も多く出土している。

椀（第78図）

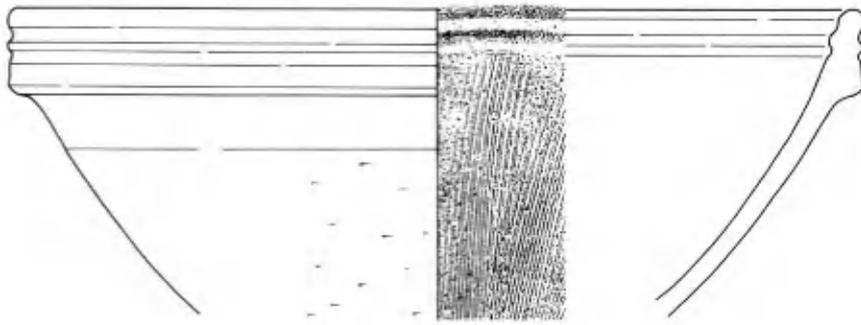
椀は数が少なく、6点のみ図示した。径8.8cmを測る**639**は筒形の椀もしくは花入と思われる。半球形の椀には径9.9cmを測る小形の**640**と12.4cmを測る大形の**642**がある。**643**は口径12.4cm、器高4.7cmを測る丸形の椀で、高台は三角形をなす。**644**は折湾形の椀で、口径は12.5cm以上ある。このうち**641**には○の陶印、**644**にはりのへら描きが見られる。

皿・鉢（第78～82図、図版8・9）

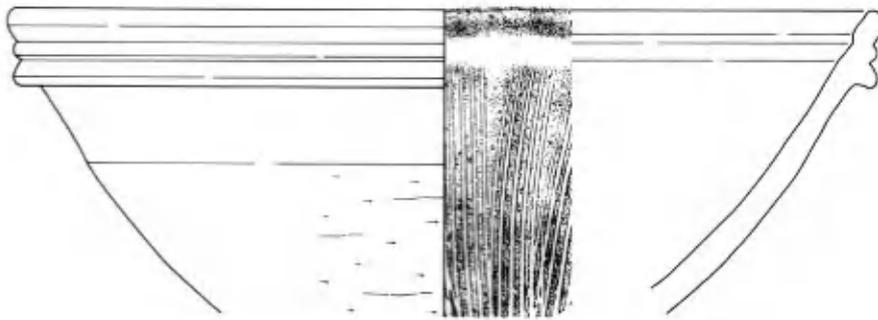
647は折縁皿で口径22.8cm、器高2.4cmを測る。底面には鳥をへら描きする。**648**は口径24.5cm、器高5.7cmを測る菊形の鉢で、高台内には扇形の陶印がある。**649～651**は器高の低い鉢で、端反形の**649**と丸形の**650・651**がある。**652**は高さ6.4cmの角鉢である。口径27.6cm、器高5.0cmの**653**は八角鉢で、方形の脚を取り付ける。**661**は厚手につくられた小判形の鉢で、幅8.8cm、器高4.8cmあり、底



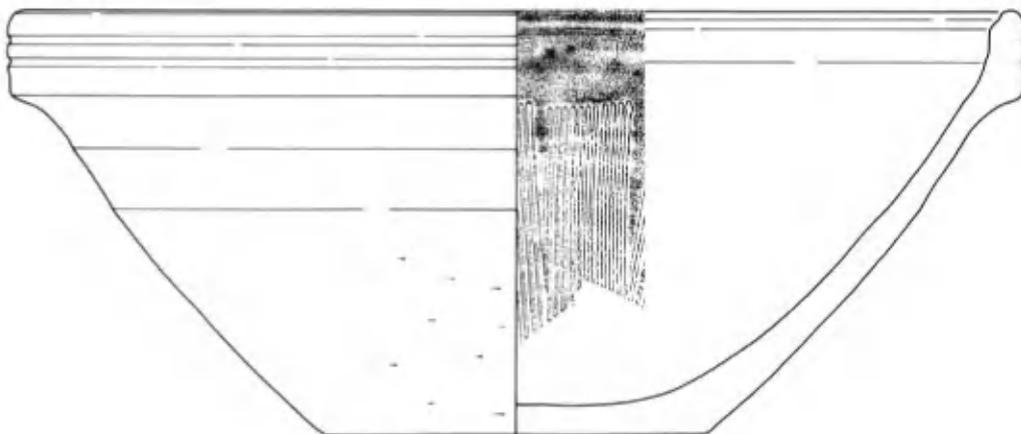
第75図 炆器2 (1/3)



592



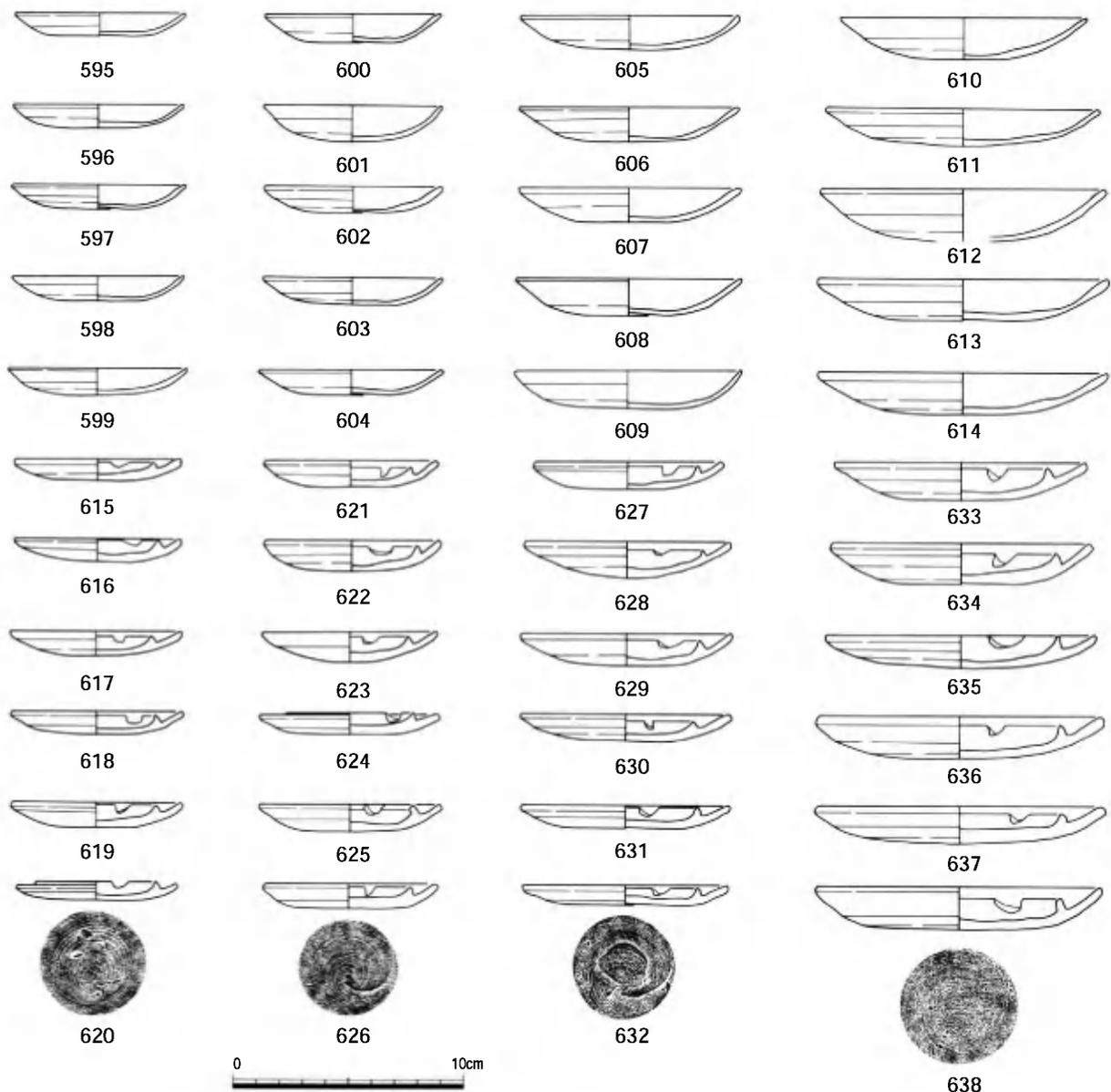
593



594



第76図 炆器3 (1/3)



第77図 炆器4 (1/3)

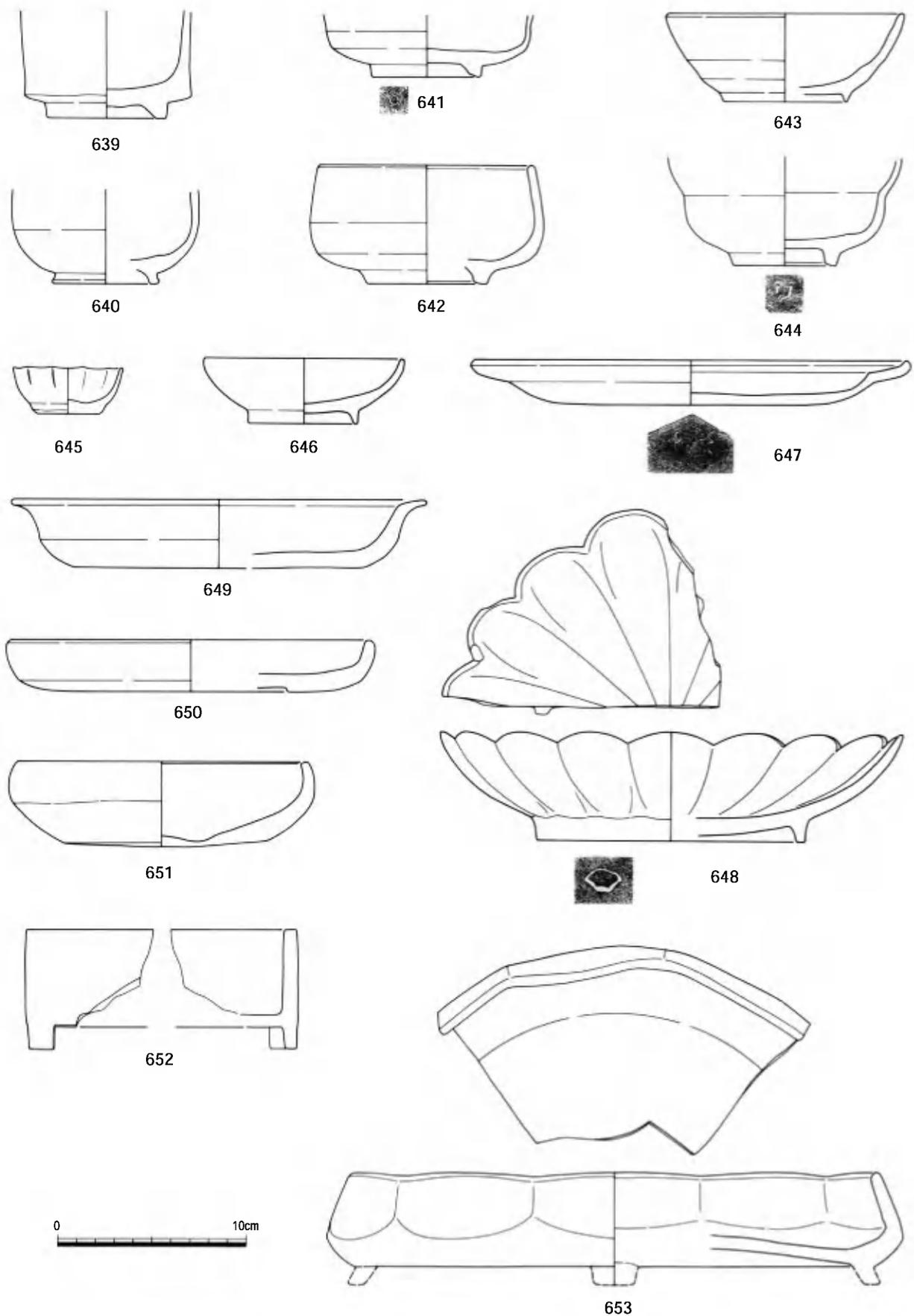
面にはヘラ記号がある。

平鉢は10点ほどあるが、ここでは**654**～**659**を図示した。口径40.6～46.0cm、器高6.4～8.7cmを測り、口縁端部は内側に巻き込むように拡張する。**655**・**657**には火襴が見られるほか、**656**には丸にハの陶印、**655**にはカ、**657**にはΣのヘラ描きがある。

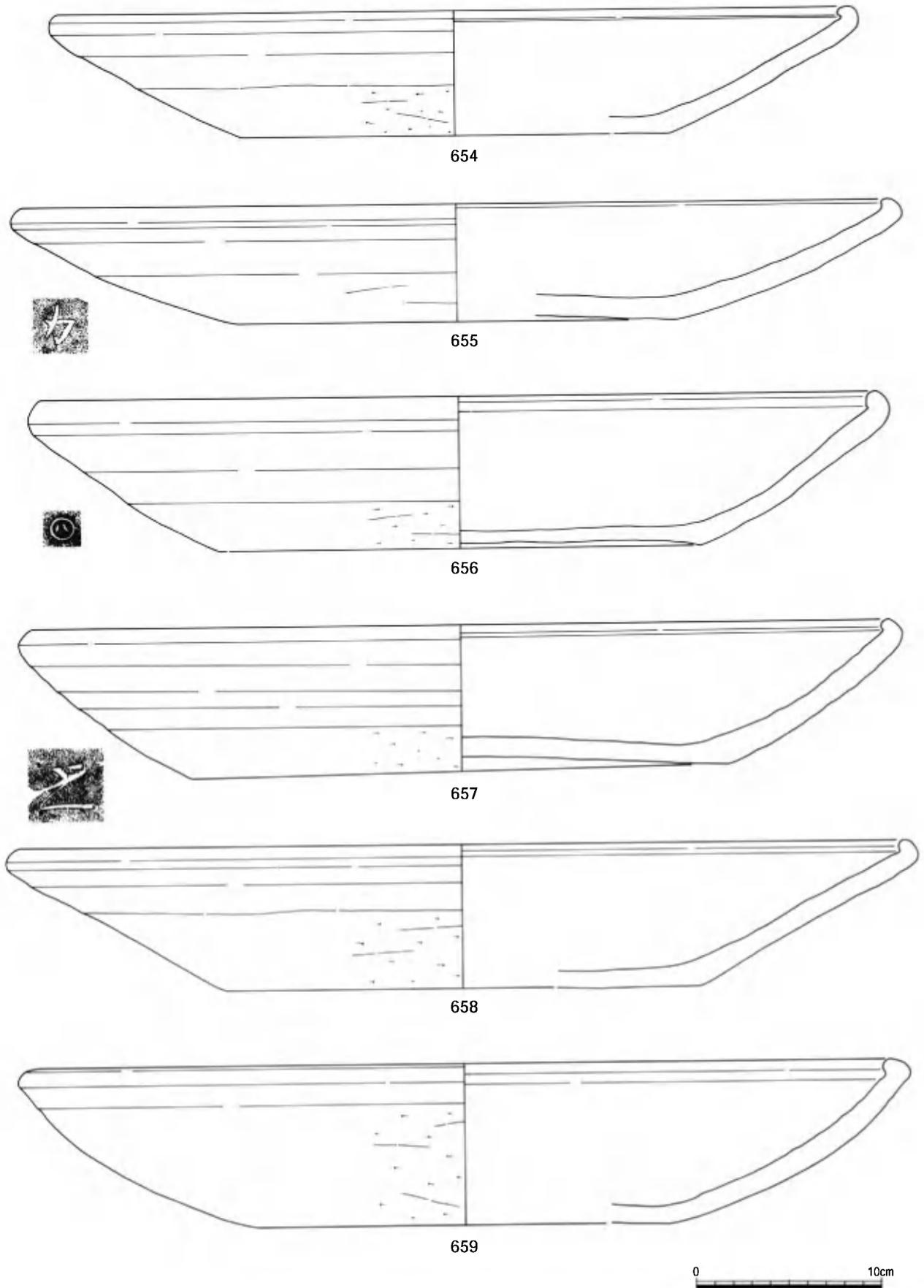
661～**665**は口縁部が窄まる筒形の鉢で、口径10.2～11.2cmの**661**・**663**と14.8～15.4cmの**662**・**664**・**665**がある。**661**・**662**は口縁部を強くヨコナデし凹線状をなすもので、口径15.4cm、器高9.5cmを測る**683**に類似する。**663**・**664**は口縁部が括れて段をなす。**663**は花入、**664**は水指になる可能性がある。**665**は偏平な玉縁をもつ鉢で、**683**と似た形態をとるものと思われる。

火襴がかかる**666**は口径12.9cmの二重口縁をもつ厚手の鉢で、**676**に類似する。

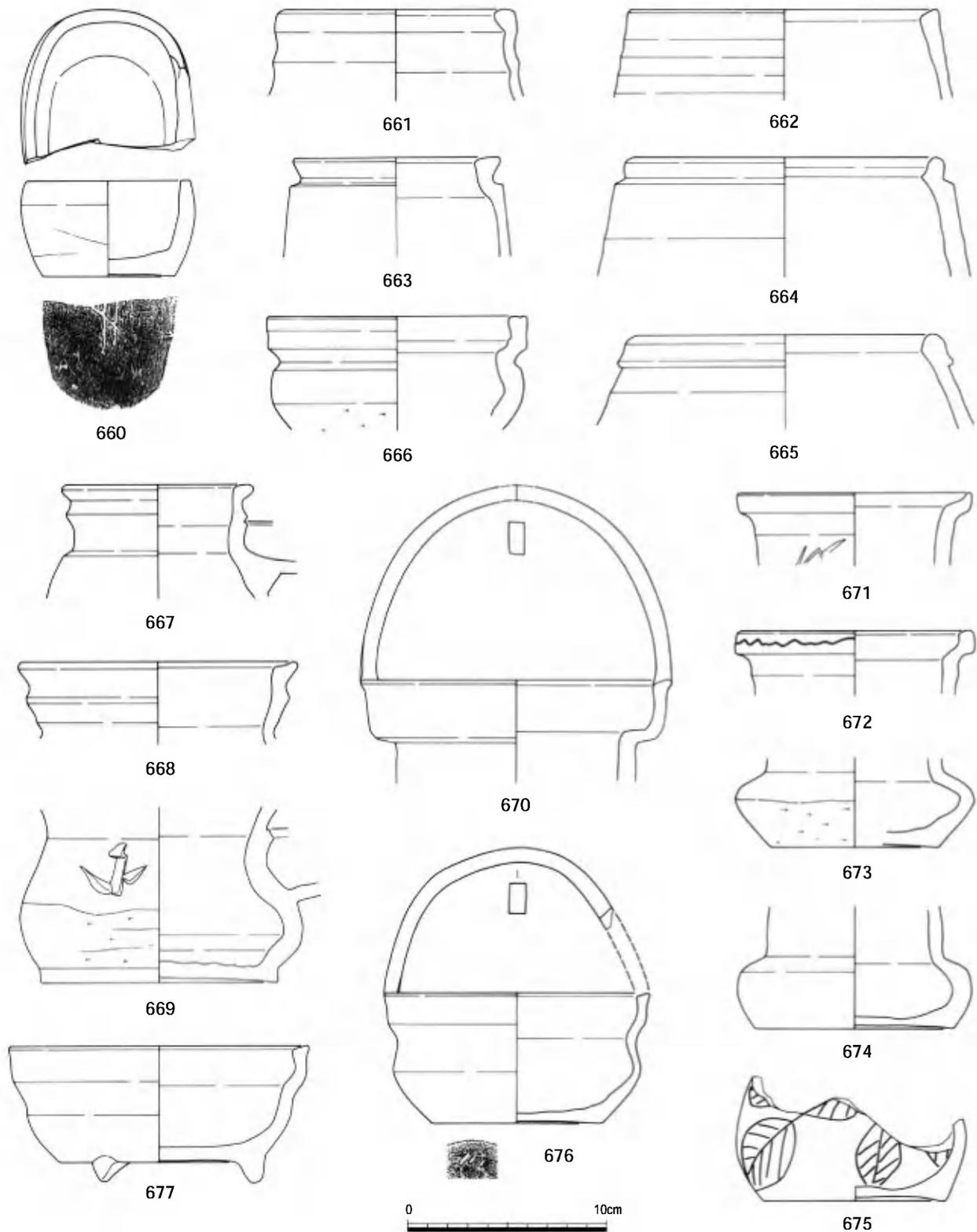
667～**669**は二重になる口縁部と巾着形の胴部からなる壺形の鉢で、**667**は口径9.1cm、**668**は13.7cmを測る。側面に小形の杯を貼り付け、ヘラ描きも認められる。**670**～**674**は筒形の頸部に張りのあ



第78図 炆器5 (1/3)



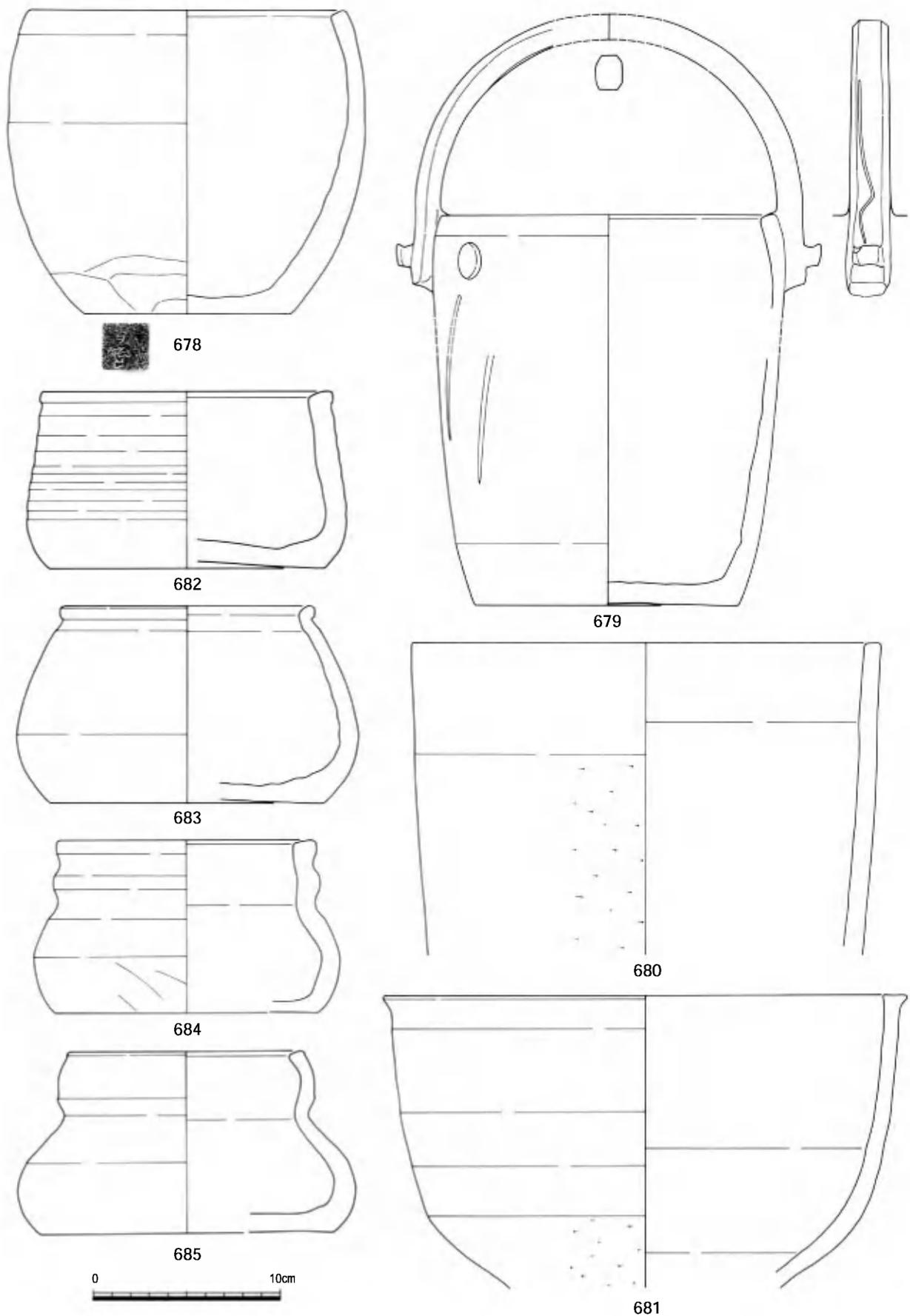
第79図 炆器6 (1/3)



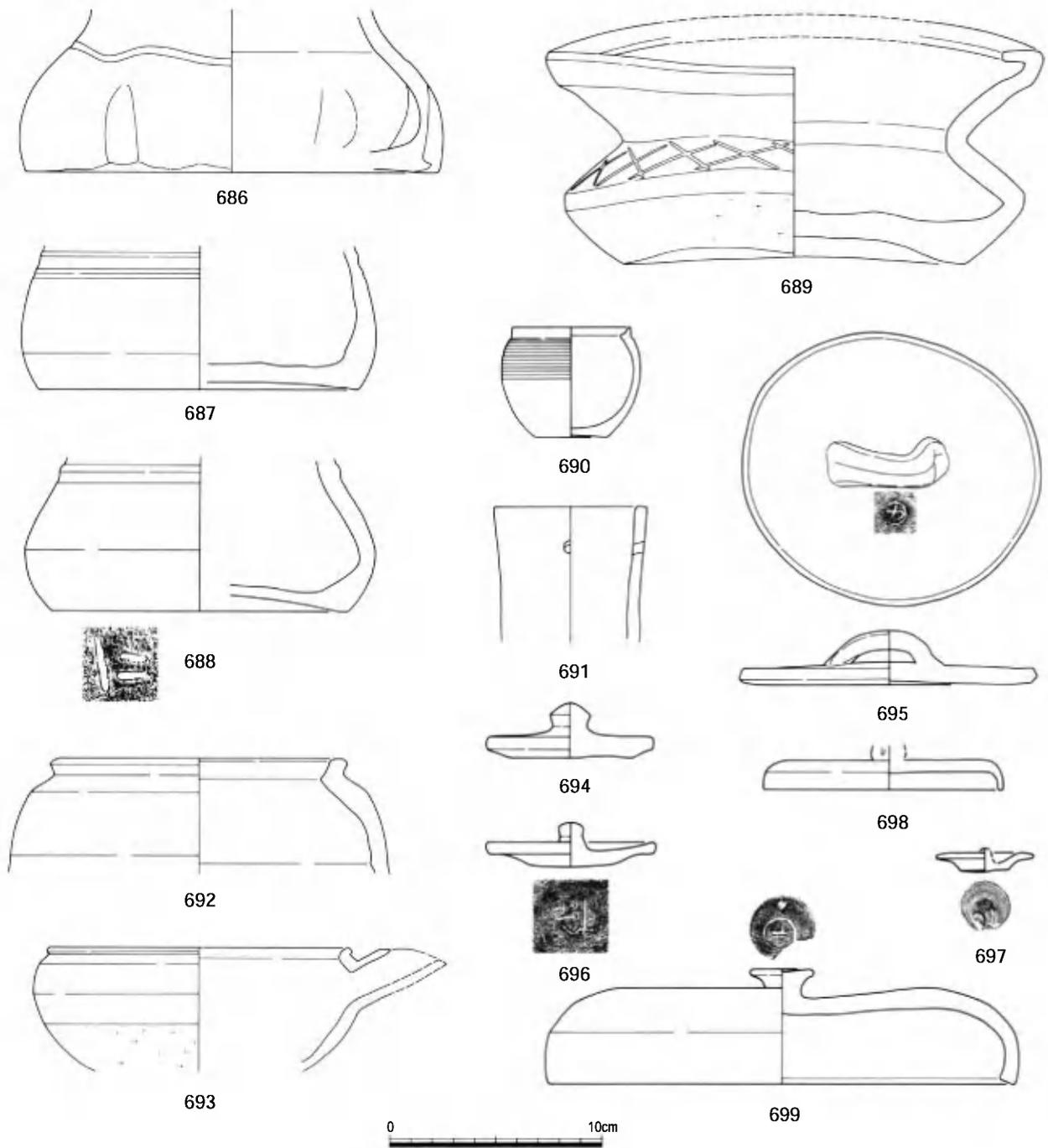
第80図 炆器7 (1/3)

る低い胴部を備えた壺形の鉢である。口径15.5cmの**671**と11.4~11.8cmの**671・672**があり、大形の**671**は把手をもつ。**683**は口径13.4cm、器高10.6cmを測る榎壺形の鉢、口径12.4~13.8cm、器高9.3~9.8cmの**684・685**は餌籠形の鉢である。

676・677は口径12.4~14.8cmの二重口縁をもつ浅い鉢である。把手をもつ**676**は一部に赤漆が塗ら



第81図 炆器 8 (1/3)



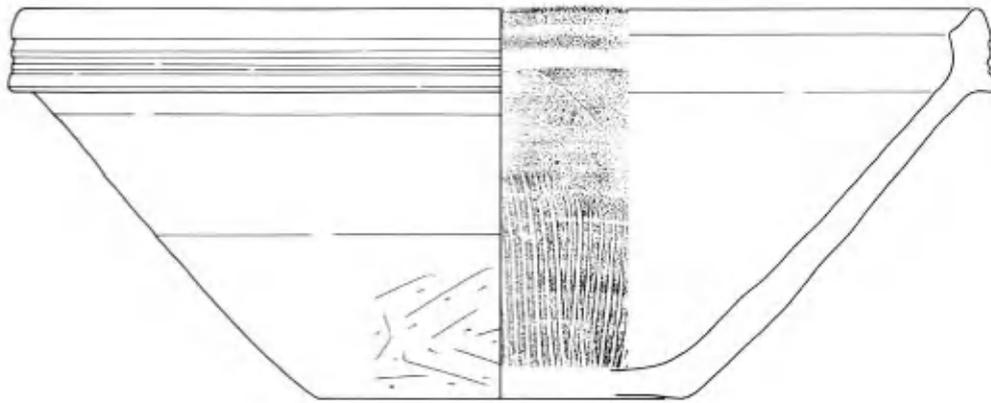
第82図 炆器9 (1/3)

れており、底面にはへら記号がある。また、**677**は三足をもち、火櫓が見られる。

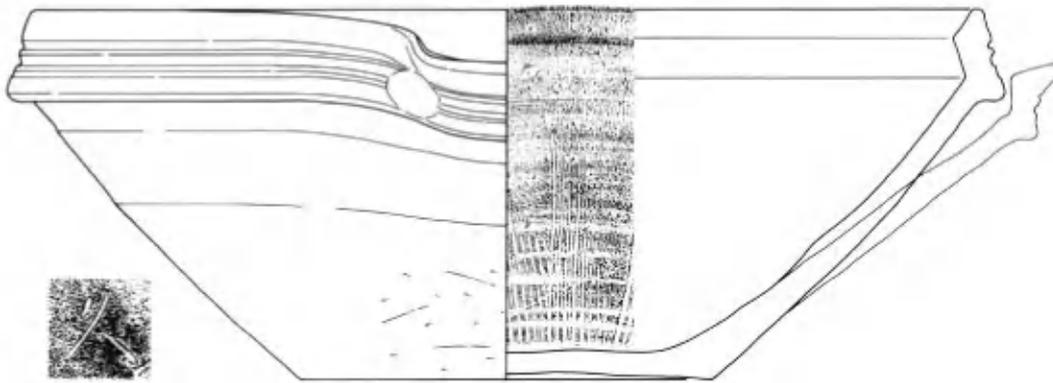
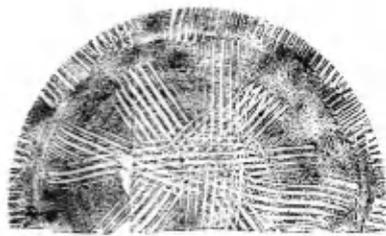
口径16.7cm、器高16.3cmを測る**678**は胴丸形の鉢で、底部にへら描きがある。**679**は面取りを施した断面六角形の把手をもつ桶形の鉢で、口径17.6cm、器高31.9cmに復元される。**680・681**は堀から出土した鉢で、口径25.0cmの**680**は筒形、27.8cmの**681**は鉢形をなす。

口径23.4cm、器高11.4cmの**689**は大きく開く口縁部と算盤玉形の胴部をもつ鉢で、肩部にはへらで粗く斜格子を刻む。大きく焼け歪み、水指として用いられた可能性がある。甕形の**690**は口径5.5cm、器高5.2cmを測る小形の鉢で中層から出土した。

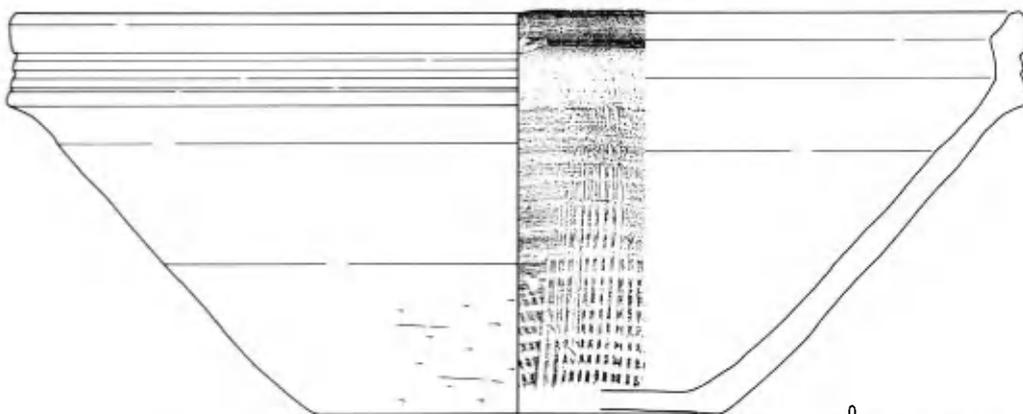
691は口径7.0cmを測る掛け花入である。**693**は口径14.0cmの丸形の鉢に注口を付けた片口である。



700



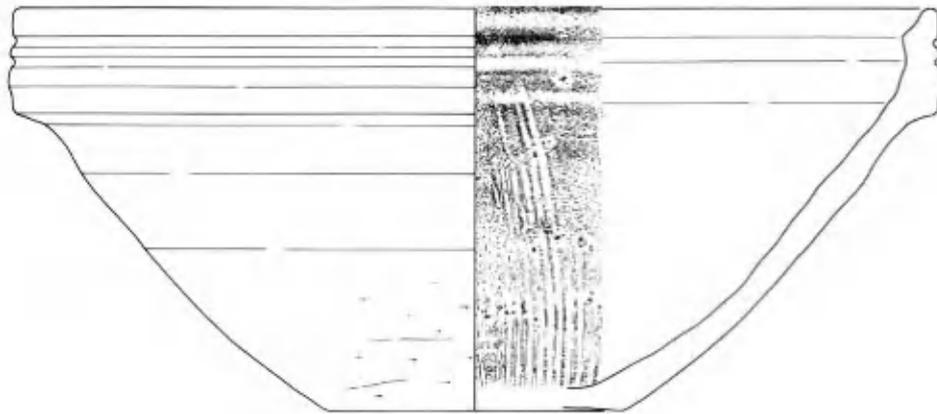
701



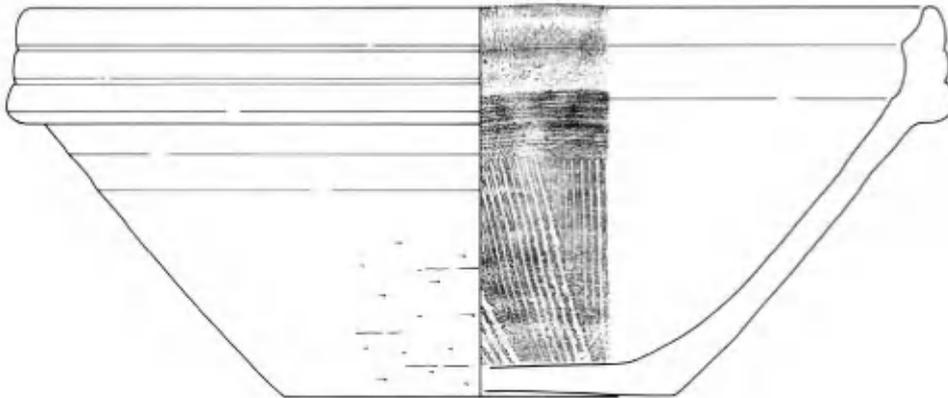
702



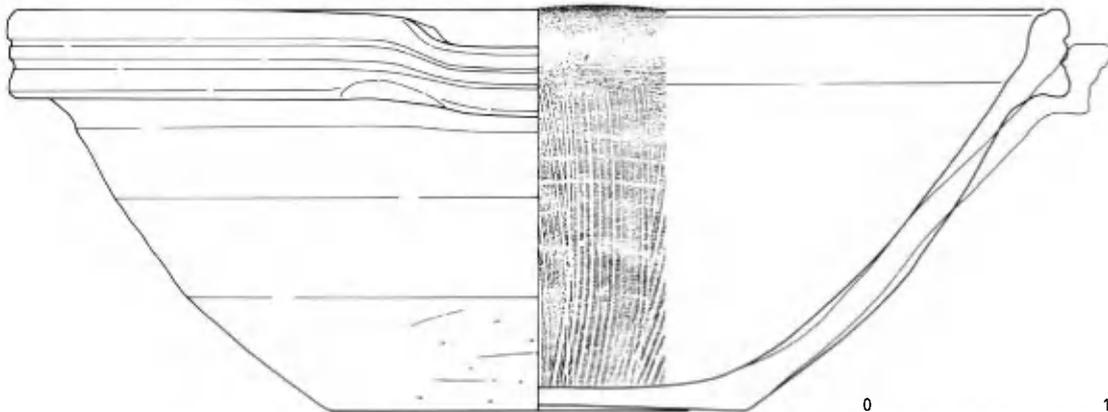
第83図 炆器10 (1/3)



703



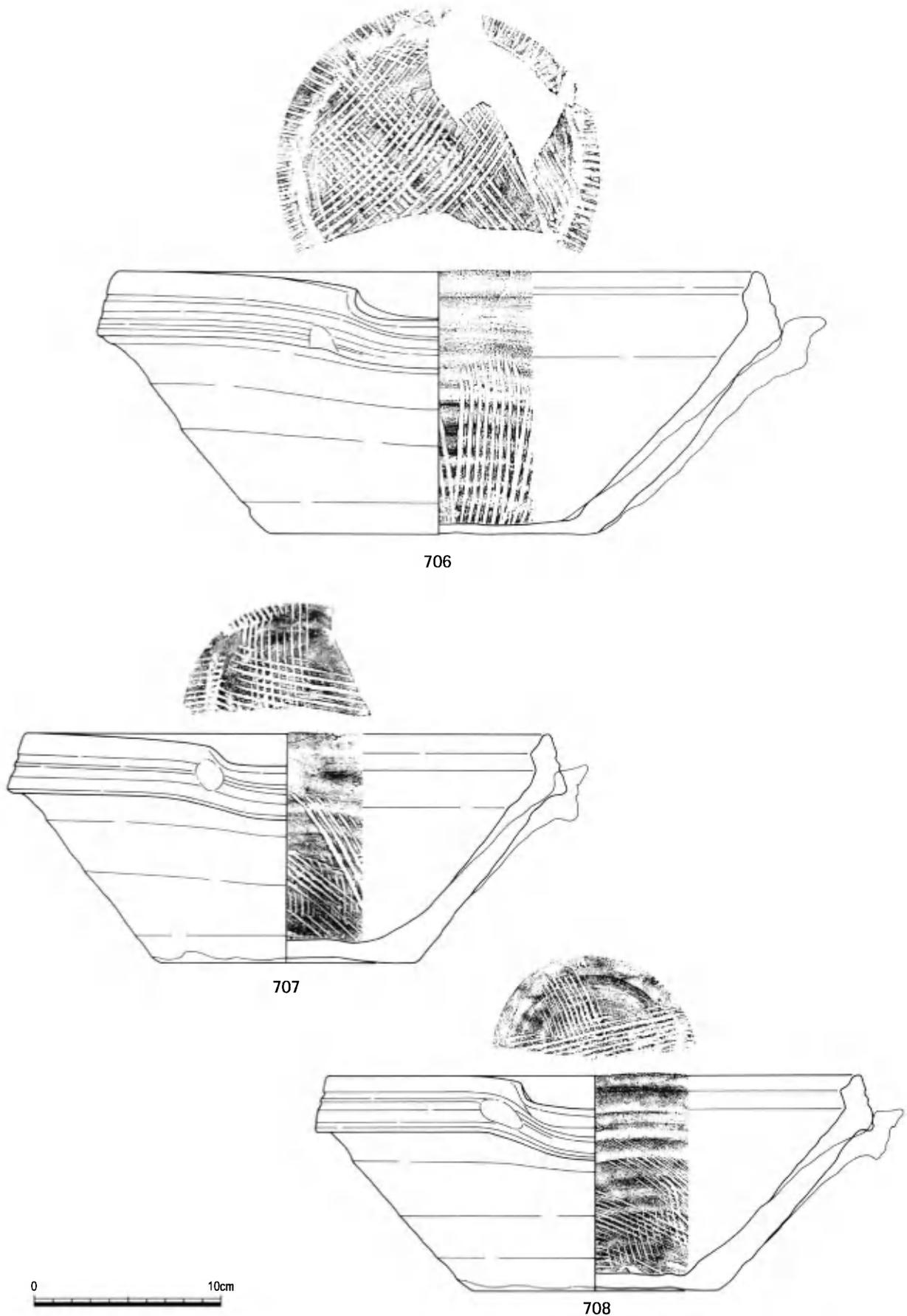
704



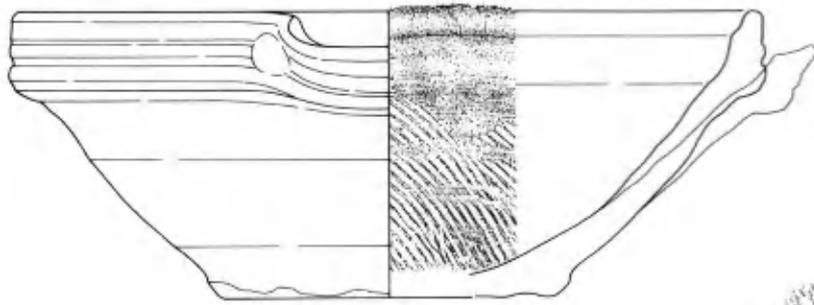
705



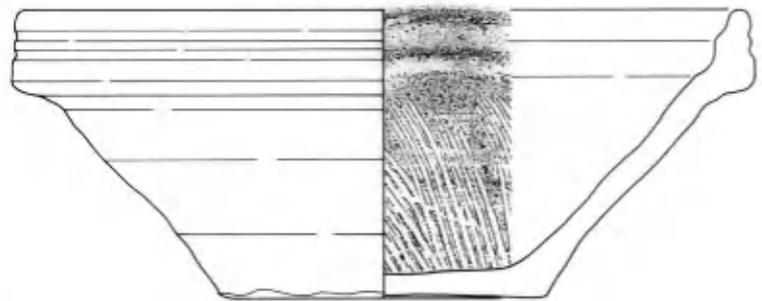
第84図 炆器11 (1/3)



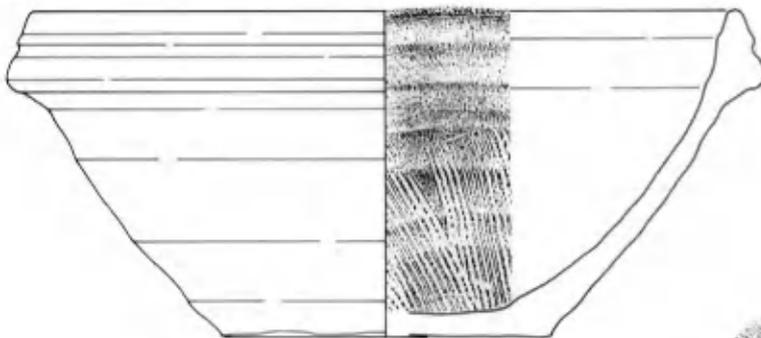
第85図 炆器12 (1/3)



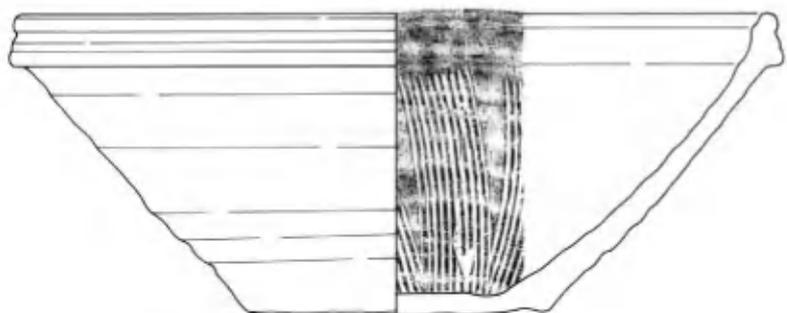
709



710



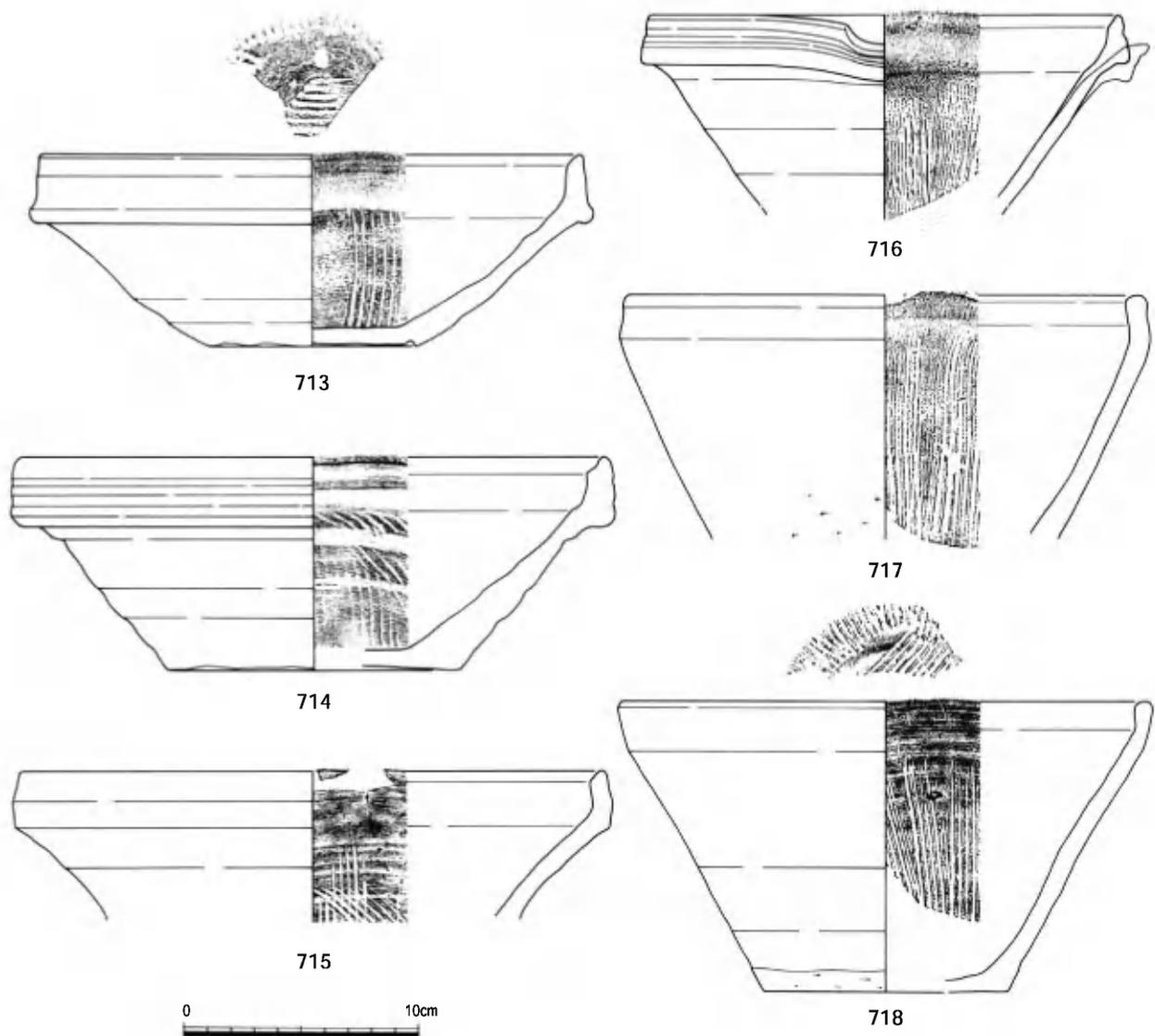
711



712



第86図 炆器13 (1/3)



第87図 炆器14 (1/3)

蓋 (第82図)

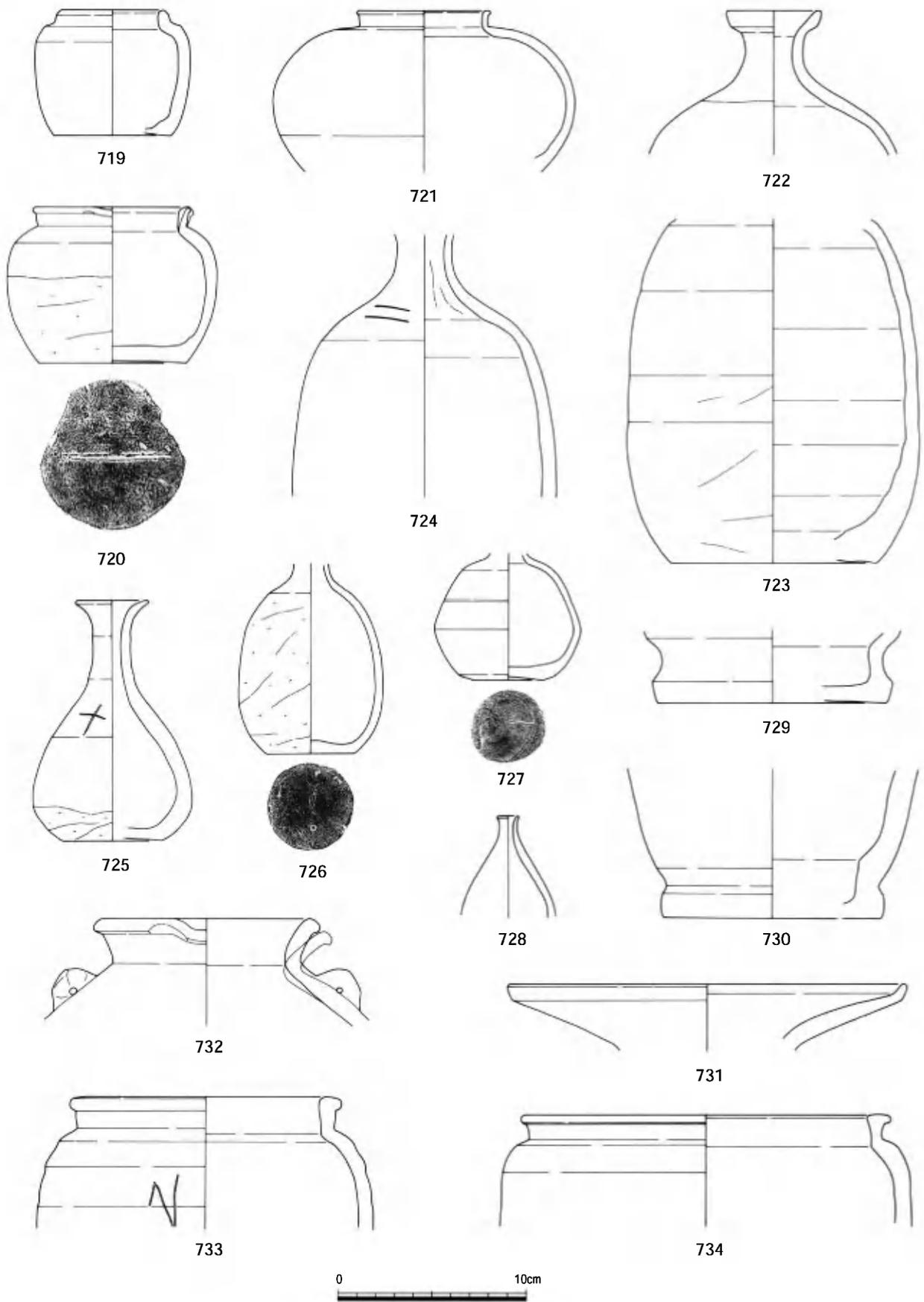
694は径7.5cmの平蓋で、宝珠形つまみをもつ。長径14.0cmの695は不整な円形をした平蓋で、橋状つまみをもつ。上面には丸にカの陶印があり、水指の蓋になる可能性がある。被せ蓋には口径11.2cmの698と21.8cmの699があり、後者のつまみには丸に一の陶印が見られる。

播鉢 (第83～87図、図版9)

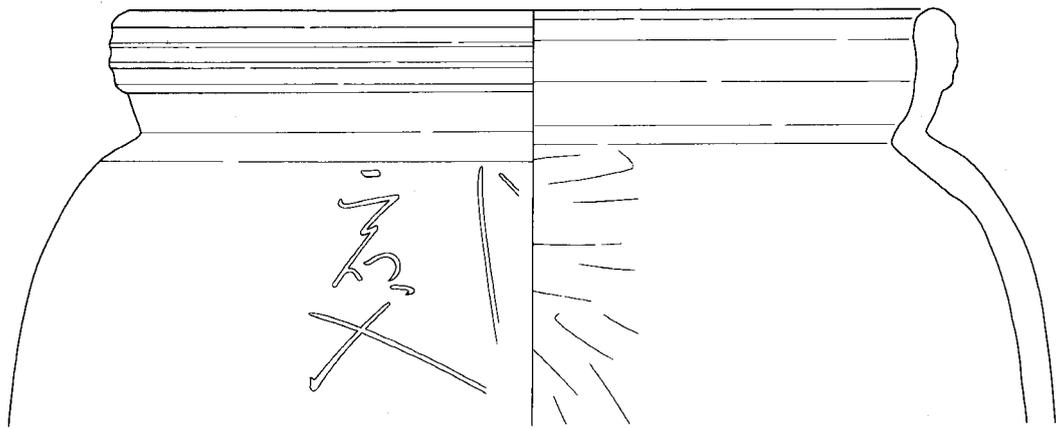
700～718は備前の播鉢で、口径34.1～41.2cmの700～706、口径27.8～29.4cmの707～712、口径20.0～25.0cmの713～716に分けられる。700～705は口縁部に2条の凹線をめぐらし、体部の外面下半をヘラケズリして底面を平滑に整えており、火櫓が見られるものもある。見込には、2条の播目を十字形に交差させるものと3～4条の播目を放射状に交差させるものがある。

706～711も口縁部に2条の凹線をめぐらせているが、体部の外面には轆轤目が残りに、底面は調整されていない。斜め播目が見られるものがあり、見込の播目も、前者に加えて3条の播目を格子状に交差させるものや、曲線状に播目を施すものなど多様である。

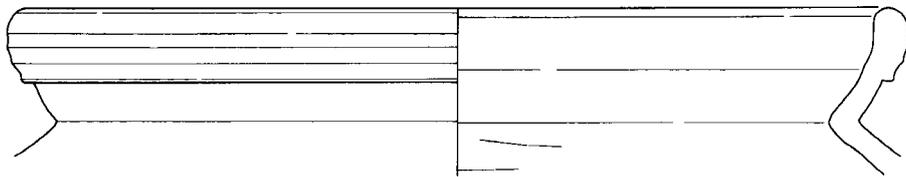
口径22.0～22.4cm、器高12.5cmを測る717・718はやや深い鉢形をなす播鉢で、わずかに屈折して上



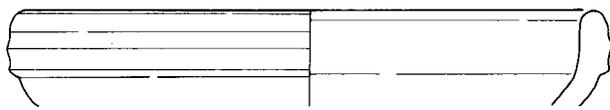
第88図 炆器15 (1/3)



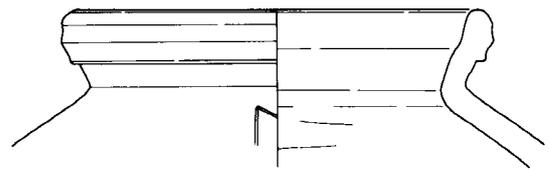
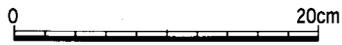
735



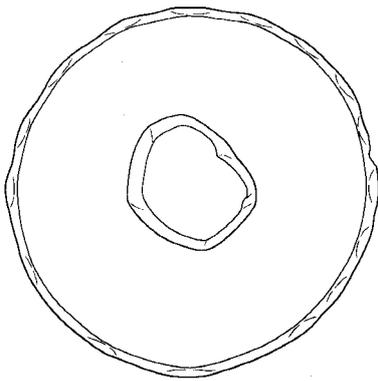
736



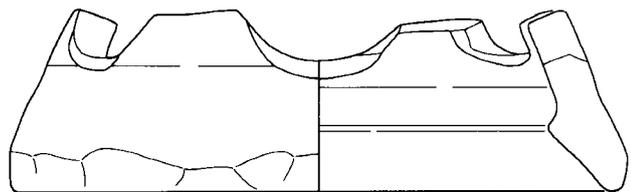
737



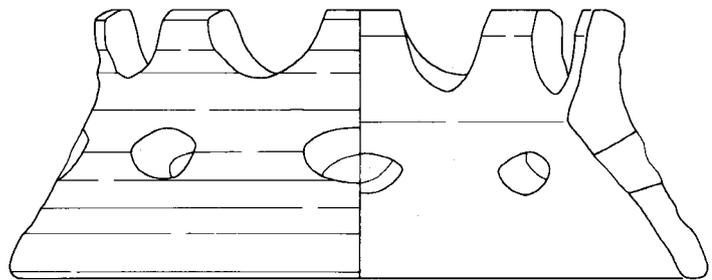
738



739



740



741



第89図 炆器16 (1/5・1/3)

方にのびる口縁の端部は丸く収める。類例は知られていないが、胎土や焼成からみて備前と思われる。
壺（第88図、図版9）

719は口径5.4cm、器高6.7cmを測る小形の壺である。**721**は偏球形の胴部に短い頸部を備えた大海形の壺で、口径6.8cm、胴径16.0cmを測る。

口径8.2cm、器高8.3cmの**720**は雀口で、底部に一のへら記号をもつ。**732**も片口をもつ壺であるが、玉縁となる口縁の径は10.8cmと大きく、肩部に縦の双耳を貼り付ける点でも異例である。

瓶（第88図、図版8）

大瓶**722**～**724**は胴径14.0～15.5cmを測る芋徳利で、**724**の肩にはへら記号が見られる。小瓶には胴径8.4cmの辣蕪徳利**725**や7.6cmの芋徳利**726**、5.0cmの尾張徳利**728**などがある。このほか、胴径24.8cmを測る大形の蕪徳利も出土している。

花瓶（第88図）

口径21.0cmの**731**は盤口形の花瓶と見られ、**729**・**730**は花瓶もしくは水指の底部と思われる。

甕（第88・89図）

733・**734**は種壺形の甕で、**733**は口径13.0cm、**734**は口径20.0cmを測る。

735・**736**は口径52.4～57.0cmを測る大甕で、**735**の肩部には「二石」のへら描が見られる。

焼台（第89図）

739～**741**は焼台である。**739**は円孔を穿った径14.6cmの台に二方に割りこんだ径8.1cm、高さ8.0cmの筒を貼り付ける。**740**・**741**は下方に広がる筒形をなし、底径23.8～27.0cm、器高7.2～10.7cmを測る。上端には半円形の挟りを数箇所入れ、**741**は木葉形の透かし孔を穿つ。器台等に使用されたものと思われる。

（7）土器

土器には、皿や鍋、焙烙、焼塩壺、焜炉などの土師質土器と、羽釜や土瓶、火鉢などの瓦質土器がある。

皿（第90～94図、図版10）

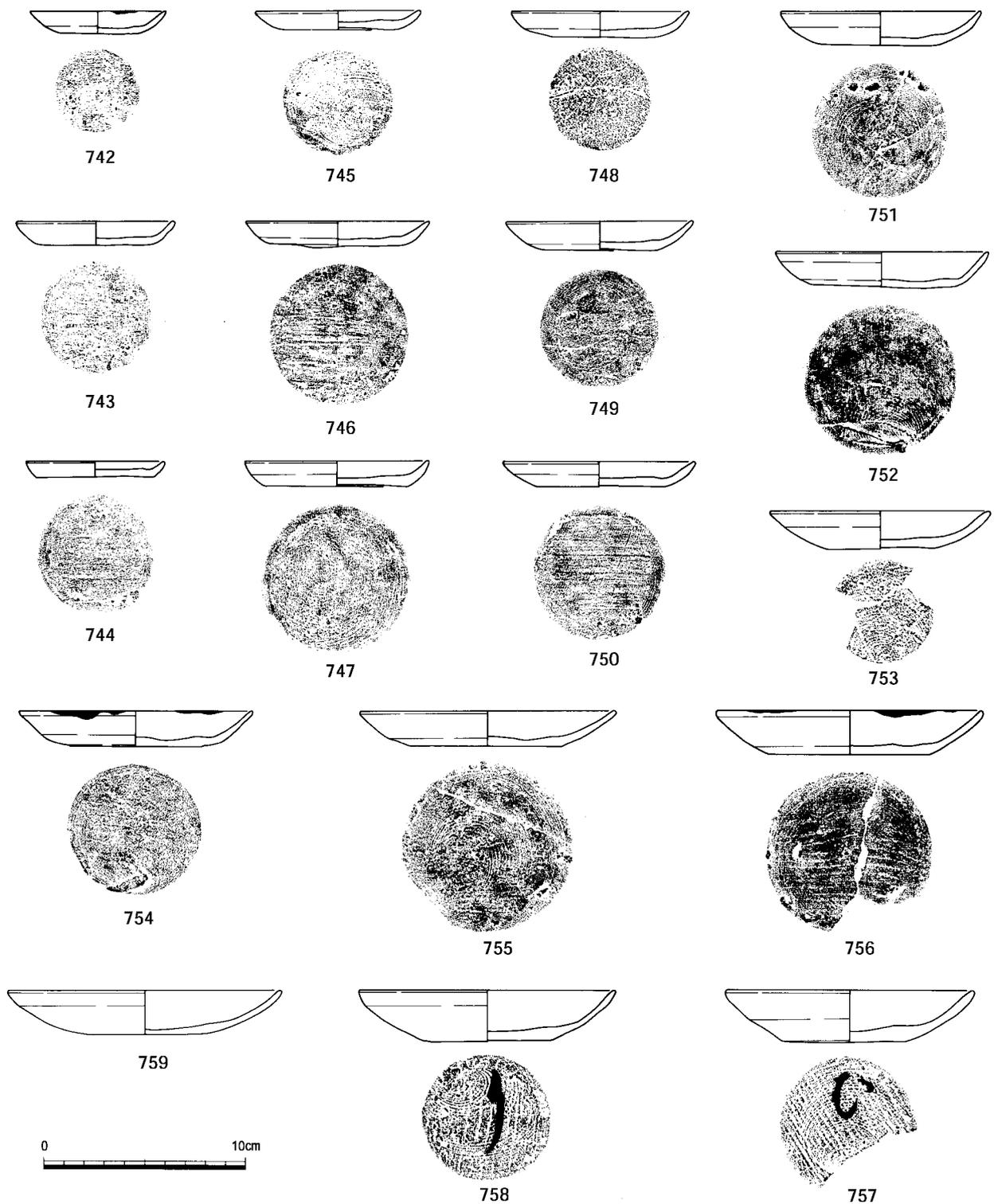
上層の皿は141点出土している。これらは口径6.7～9.4cm、器高0.8～1.3cmの**742**～**750**、口径9.8～11.5cm、器高1.5～2.0cmの**751**～**754**、口径12.6～13.4cm、器高1.8～2.7cmの**755**～**759**に分けられる。これらは底部に糸切・板目を残すものが多いが、不整方向にへラケズリする**759**も認められた。胎土はいずれも灰白色をなす。また、煤が付着するものも多く、**757**・**758**のように墨書の見られるものもある。

下層の皿は402点あり、その形態と胎土によってA～C類に分類できる。

A類**760**～**775**は、糸切する底部との境をヨコナデにより丸く仕上げるもので、口径8.1～10.3cm、器高2.2～2.4cmの**760**～**765**、口径11.0～11.7cm、器高2.0～2.5cmの**766**～**770**、口径12.4～14.5cm、器高2.4～3.1cmの**771**～**775**がある。

B類**776**～**787**は器高の低い皿で、口径5.4～6.9cm、器高1.0～1.5cmの**776**～**780**、口径7.7～8.7cm、器高1.6～1.9cmの**781**～**783**、口径8.7～9.0cm、器高1.1～1.6cmの**784**～**786**、口径11.0cm、器高1.5cmの**787**がある。

直線的にのびる体部と糸切する底部が稜をなすC類**788**～**804**は口径7.4～9.8cm、器高1.3～2.1cm

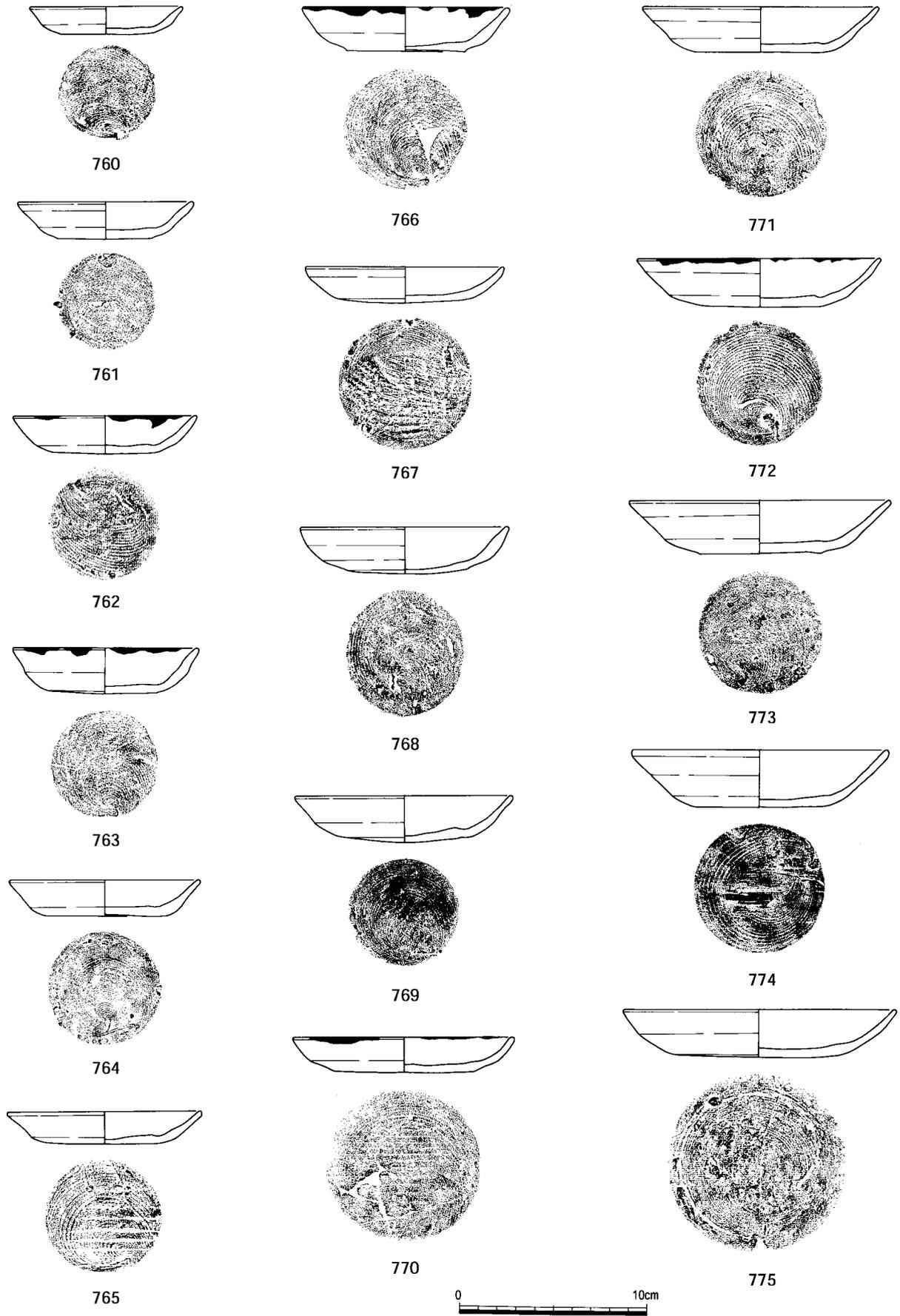


第90図 土器1 (1/3)

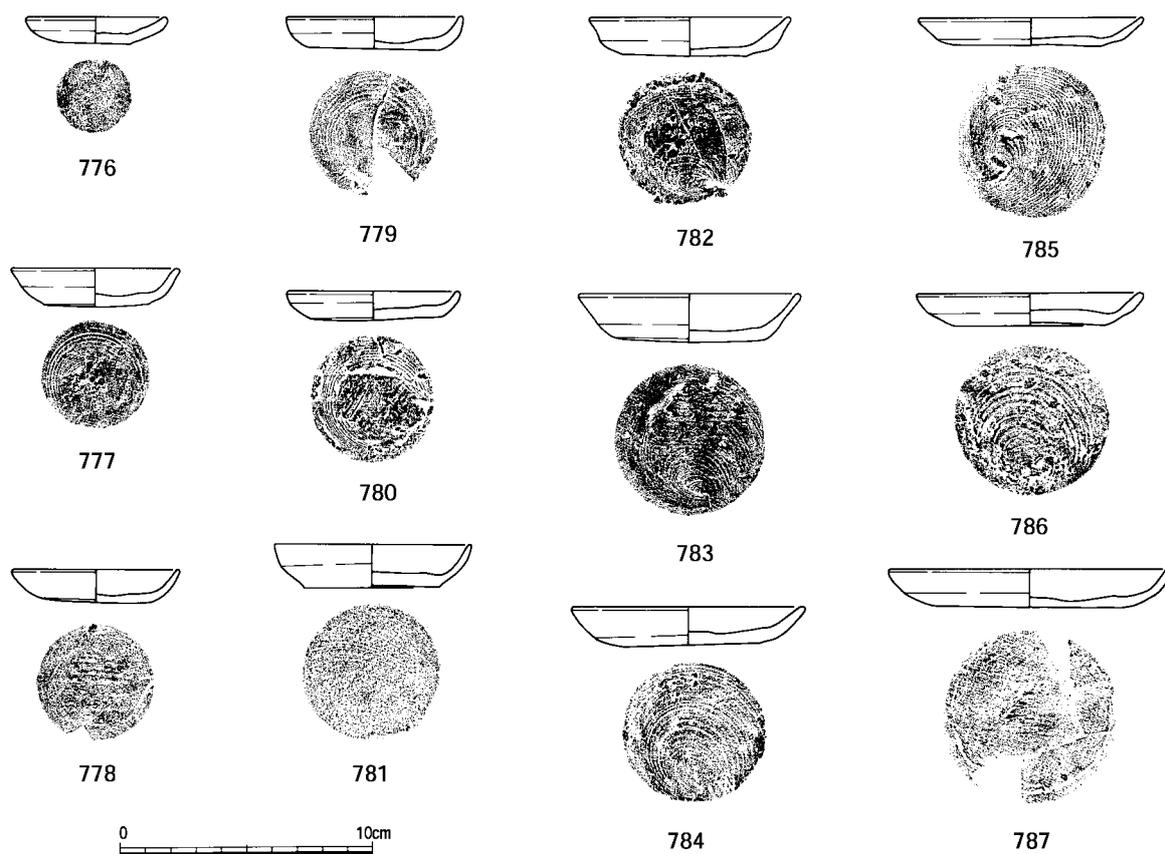
の788~795、口径10.4~12.4cm、器高2.0~3.0cmの796~803、口径13.8cm、器高2.2cmの804がある。

A類は灰白色の胎土をもつものが多く、B類では橙色、C類では黄橙色が主体をなす。しかし、B・C類の中にも灰白色の胎土をもつ777・793・794・798・800があり、これらは内湾ぎみにのびる口縁部をもつ点で一致する。

堀から出土した皿805~826は下層の中でも古く位置付けられるもので、口径6.0~6.4cm、器高0.9



第91図 土器2 (1/3)



第92図 土器 3 (1/3)

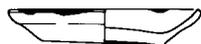
～1.1cmの**805～808**、口径9.6cm、器高3.0cmの**822**、口径8.6～9.0cm、器高1.0～1.5cmの**809～814**、口径10.2～11.0cm、器高1.7～2.1cmの**815～821**がある。また、底部をナデで仕上げる口径8.9～9.0cm、器高2.3～2.8cmの**823・824**や口径8.9～9.6cm、器高1.8～2.0cmを測る手捏ねの**825・826**もある。これらは橙色ないし黄橙色の胎土をもつものが多く、灰白色の胎土も**812・816**があるものの上部の土壌から混入した可能性を否定できない。以上のことから、灰白色の胎土をもつA類は下層新段階で出現し、中・上層を通じて主流となっていくものと思われる。

焼塩壺 (第95図、図版10)

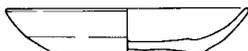
焼塩壺と蓋は上層から3点、下層から122点出土している。上層の焼塩壺は棒に粘土板を巻き付けてつくられており、整った裁頭円錐形をなす。これに組み合う蓋は**827**で、「泉州岸」とある**828**は鉢形をした焼塩壺の蓋と見られる。

下層の焼塩壺**827～866**はその特徴から4つに分類できる。A類は壺が38点、蓋が46点ある。黄橙色の胎土をもつ壺**848～858**は、棒の先に粘土紐を巻きつけて体部とし、それに被さるように粘土をあてて底部をつくる。体部を叩きしめた後、内面を粗くナデ、口縁部をユビオサエとナデで整えている。**829～845**の蓋と組み合うようで、**848**に「ミなと藤左衛門」、**849・850**に「天下一堺ミなと藤左衛門」とあるところから堺の製品と見られる。

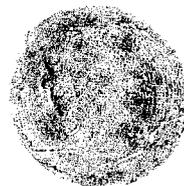
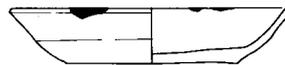
橙色の胎土をもつB類は壺が24点、蓋が8点出土している。壺**859～864**は整った円筒形をなし、接合痕が明瞭でないことからすると、円筒状の粘土塊を挟んでつくられている可能性がある。A類とほぼ同大をなすものの、厚手のため容量は3割ほど少ない。これに組み合う蓋はユビオサエの痕が明



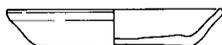
788



794



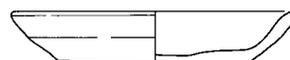
800



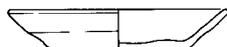
789



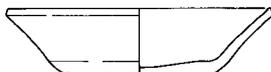
795



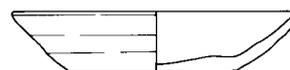
801



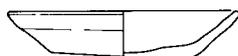
790



796



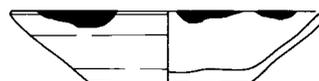
802



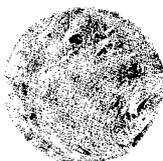
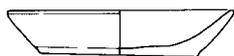
791



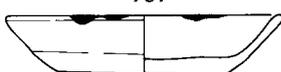
797



803



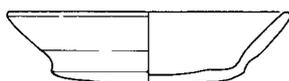
792



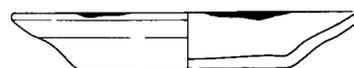
798



793



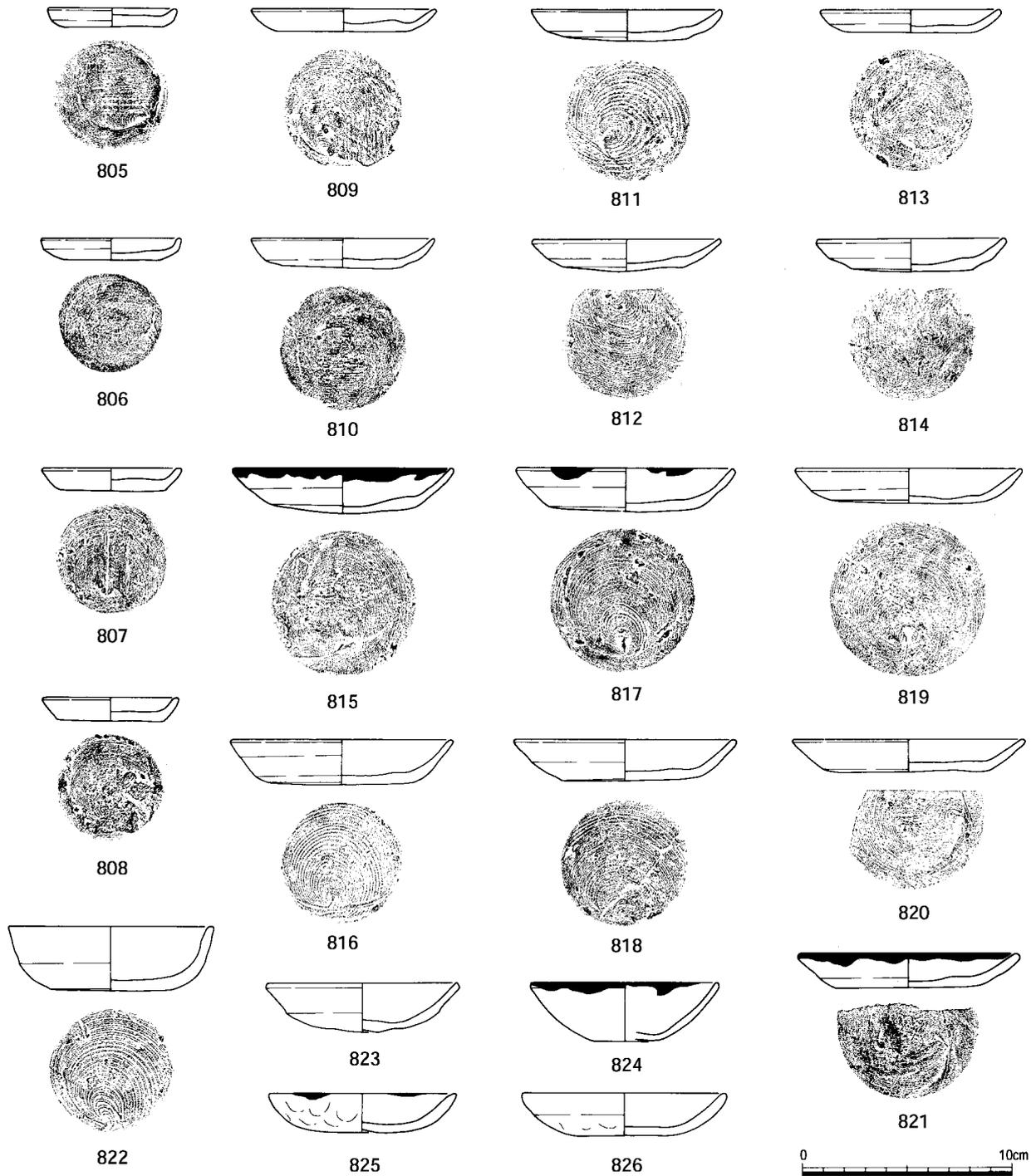
799



804



第93図 土器4 (1/3)

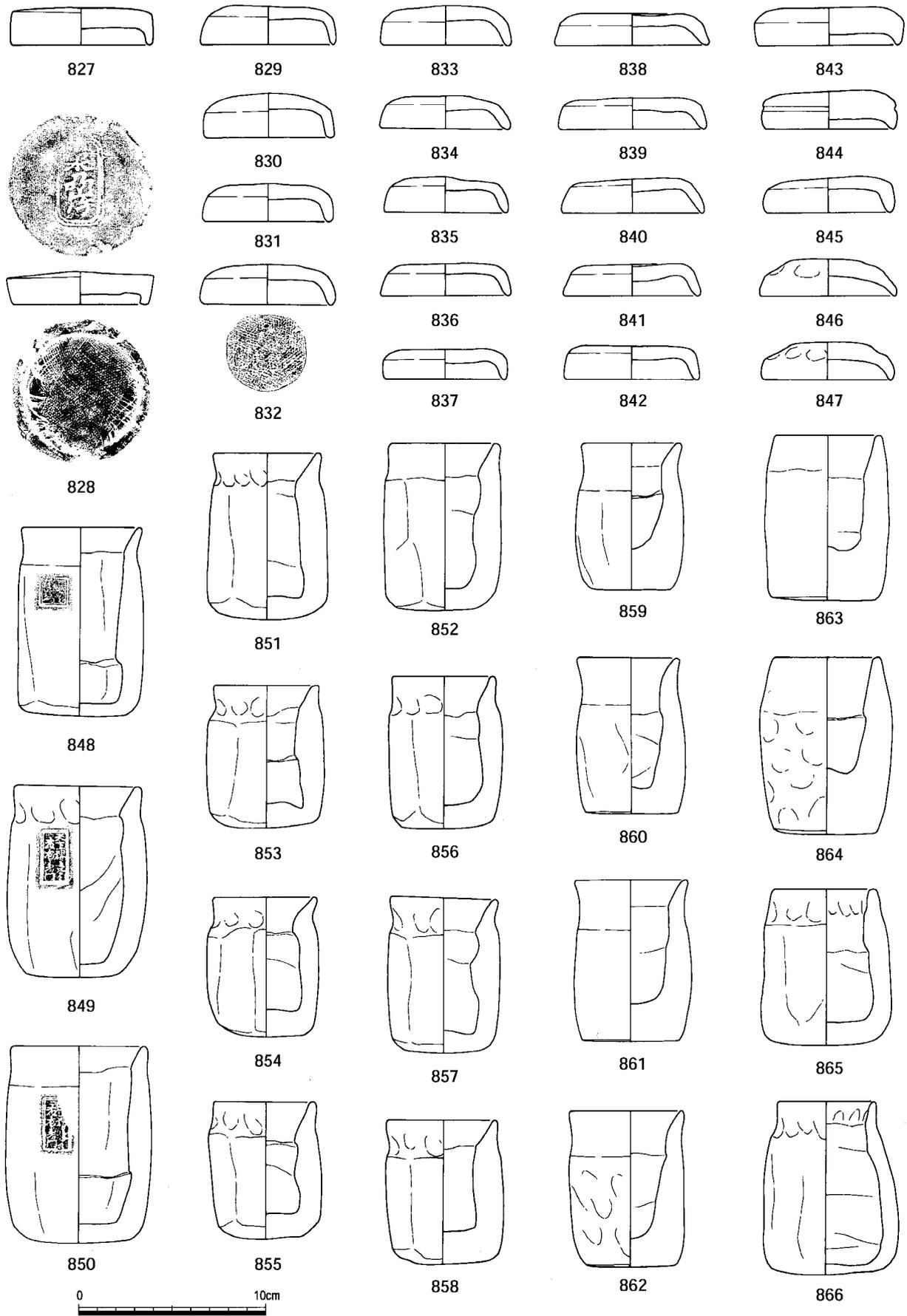


第94図 土器5 (1/3)

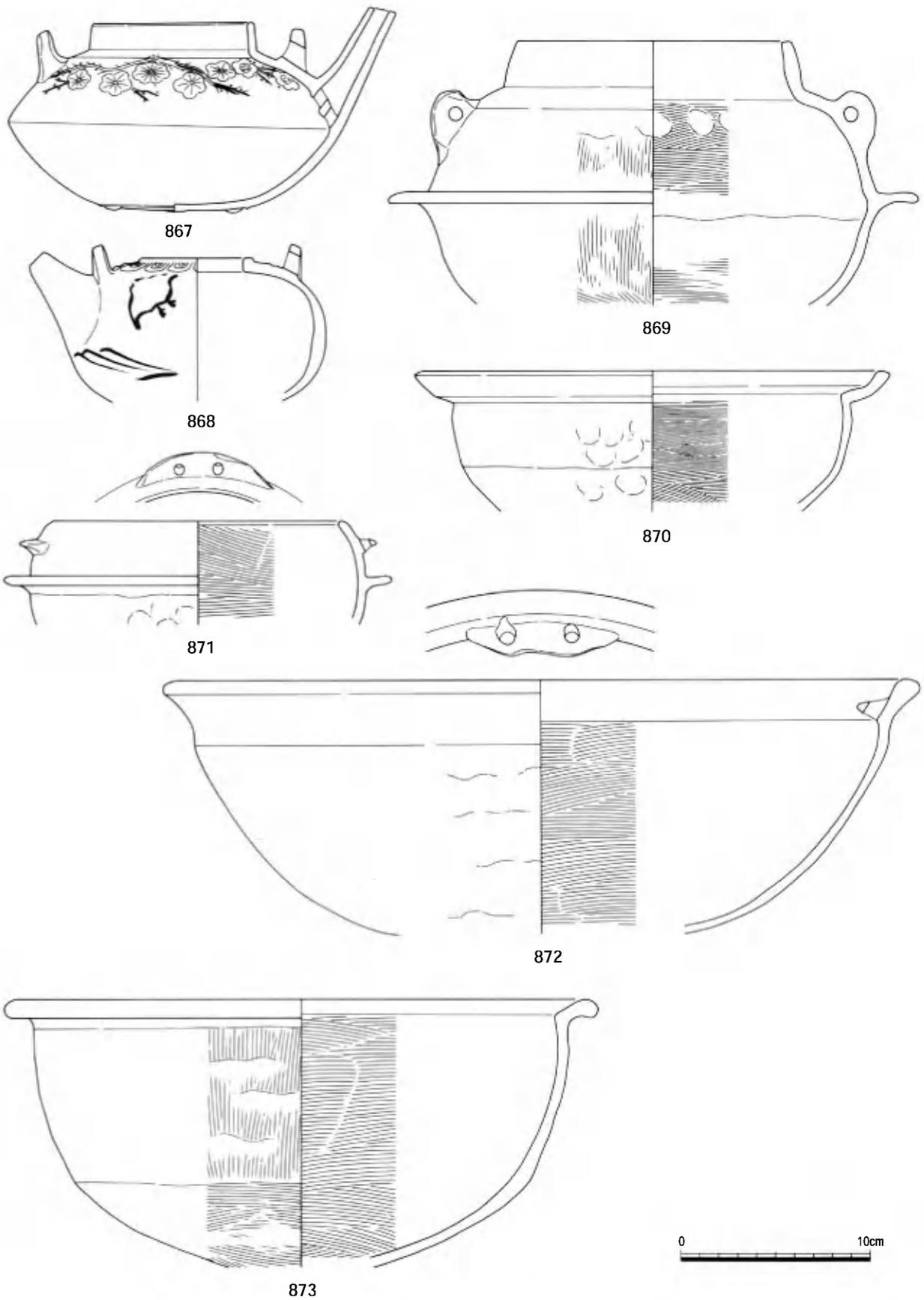
瞭に残る846・847である。

浅黄橙色の胎土に砂粒を多く含むC類は壺が3点ある。865・866は口を絞った壺形を呈し、A類よりも薄手につくられている。これに組み合う蓋は出土していない。

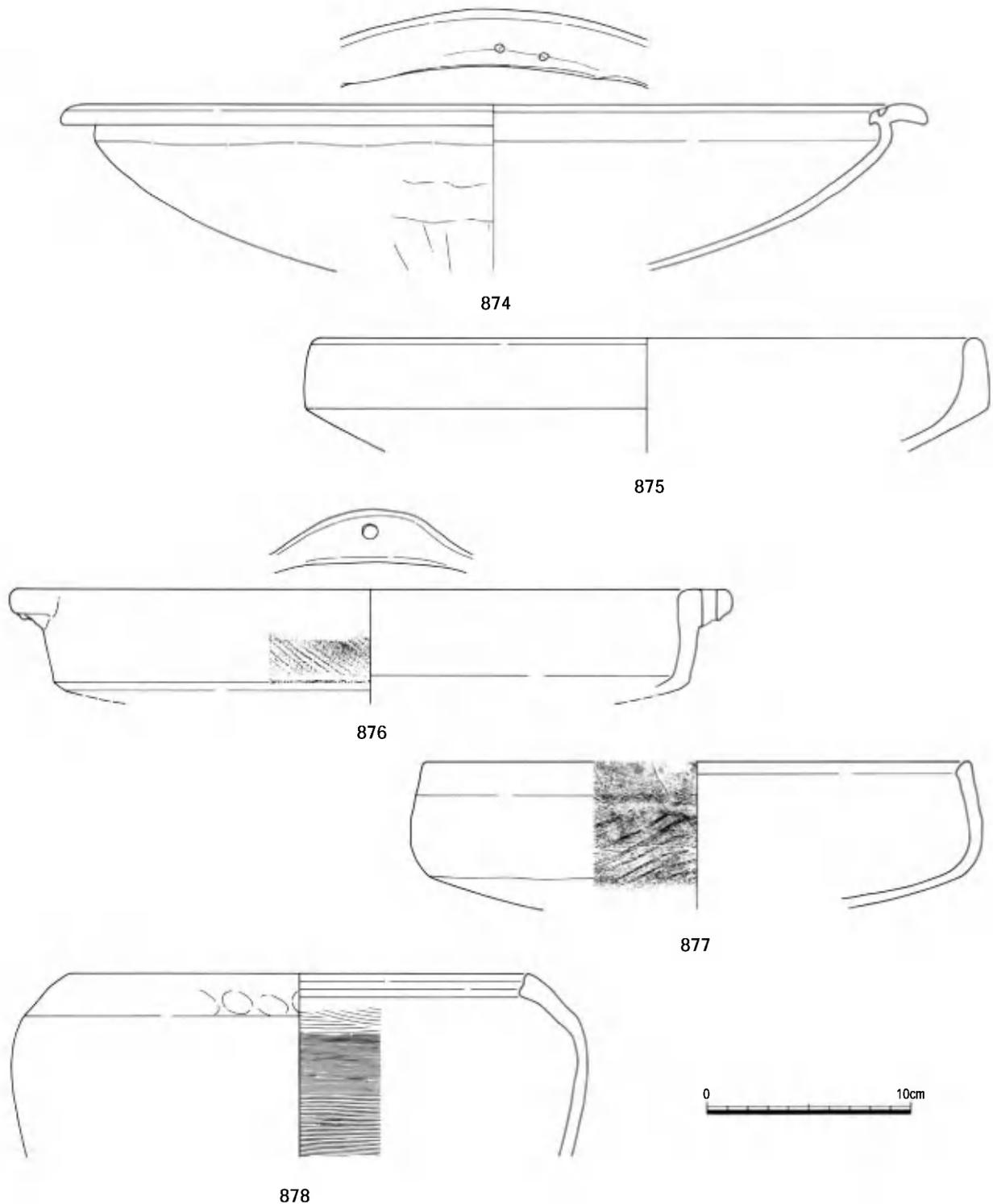
D類は壺・蓋ともに2点ずつあるが、いずれも小片のため図示できなかった。淡紫色の精良な胎土をもつ焼塩壺で、薄手につくられた内面には布目を残す。A類と同じく搬入品と見られるが産地は不明である。



第95図 土器6 (1/3)



第96図 土器7 (1/3)



第97図 土器 8 (1/3)

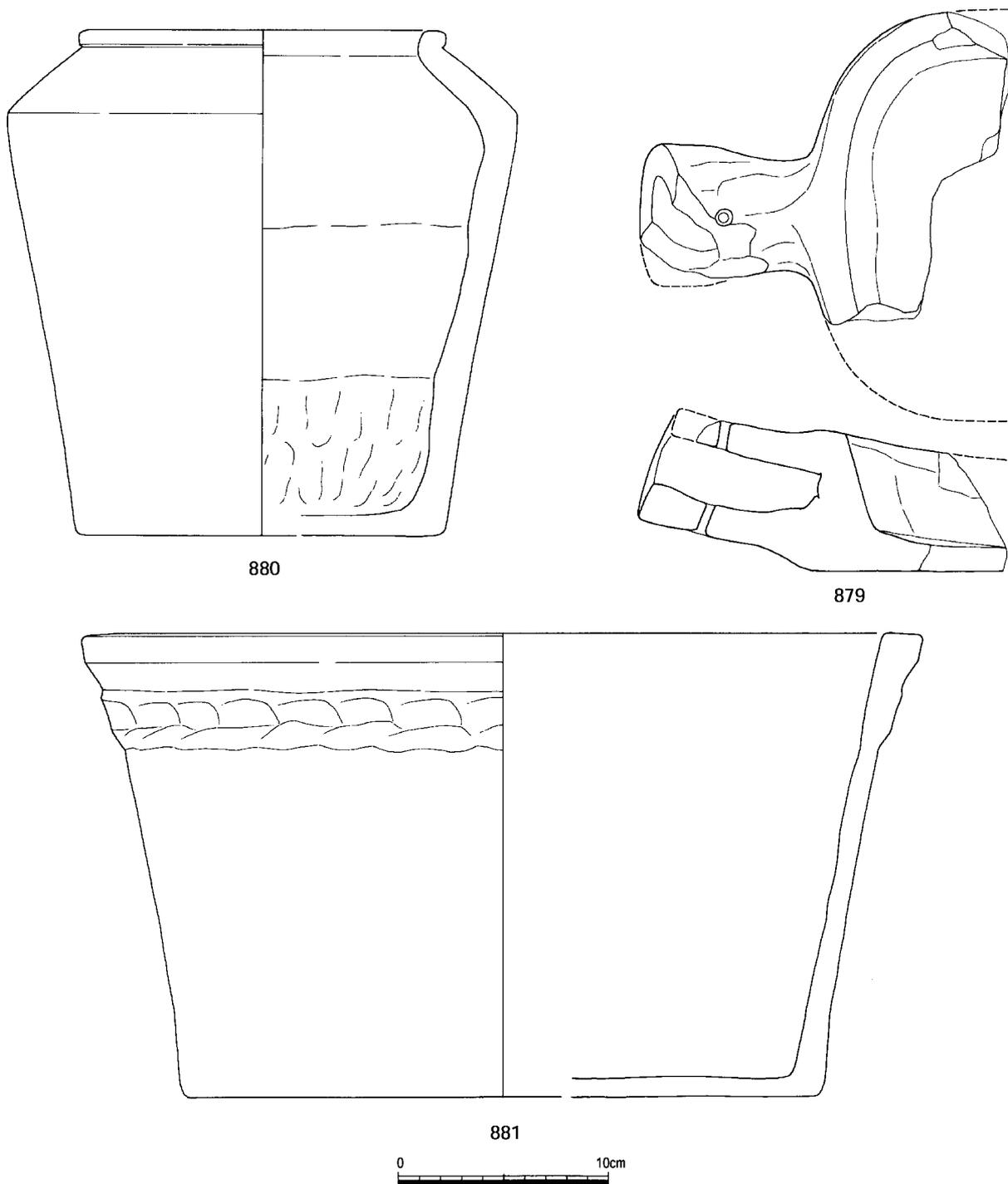
土瓶・急須 (第96図、図版10)

867は瓦質の土瓶で、径17.5cmある算盤玉形の胴部は型押しされ、肩部に梅花を飾る。

868は胴径13.6cmを測る土師質の急須で、型押しした丸形の胴部には千鳥を墨描きする。

羽釜・鍋 (第96図、図版10)

羽釜には内湾する口縁部をもつ870と直立する口縁部をもつ869とがある。869は偏球形をなす胴部の中ほどに径24.0cmの鐶をめぐらし、肩の双耳は縦に貼り付ける。870は口縁部の下に径20.4cmの



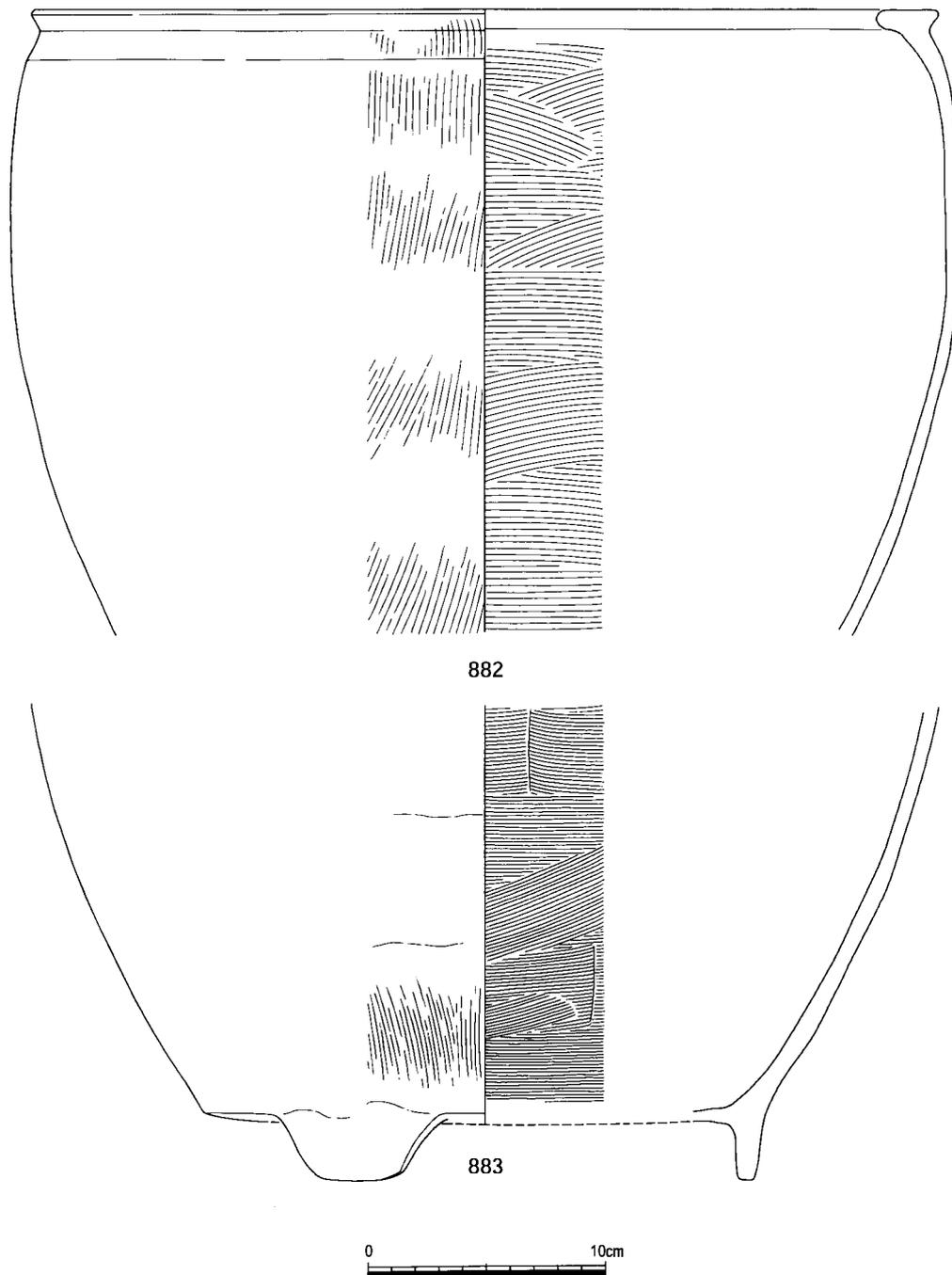
第98図 土器9 (1/3)

鏝をめぐらし、口縁部の双耳は水平に貼り付ける。

鍋は12点ある。口径24.2cmを測る**871**は受け口状の口縁部をもつ。**873**は深い胴部から屈折して水平にのびる口縁部をもち、口径は30.0cmある。**872**は口径38.4cmを測り、外反する口縁部には内耳を貼り付ける。**869**～**871**は上層から、**872**・**873**は堀から出土した。

焙烙 (第97図)

焙烙は9点出土している。このうち最も多いのは難波洋三の言う「岡山系」**874**で、径39.2cmを測る口縁部には形骸化した内耳が見られる。



第99図 土器10 (1/3)

上層から出土した**875**は難波洋三のD類、**876**はC類、下層の**877**はA類にあたり、関西から搬入された可能性がある。

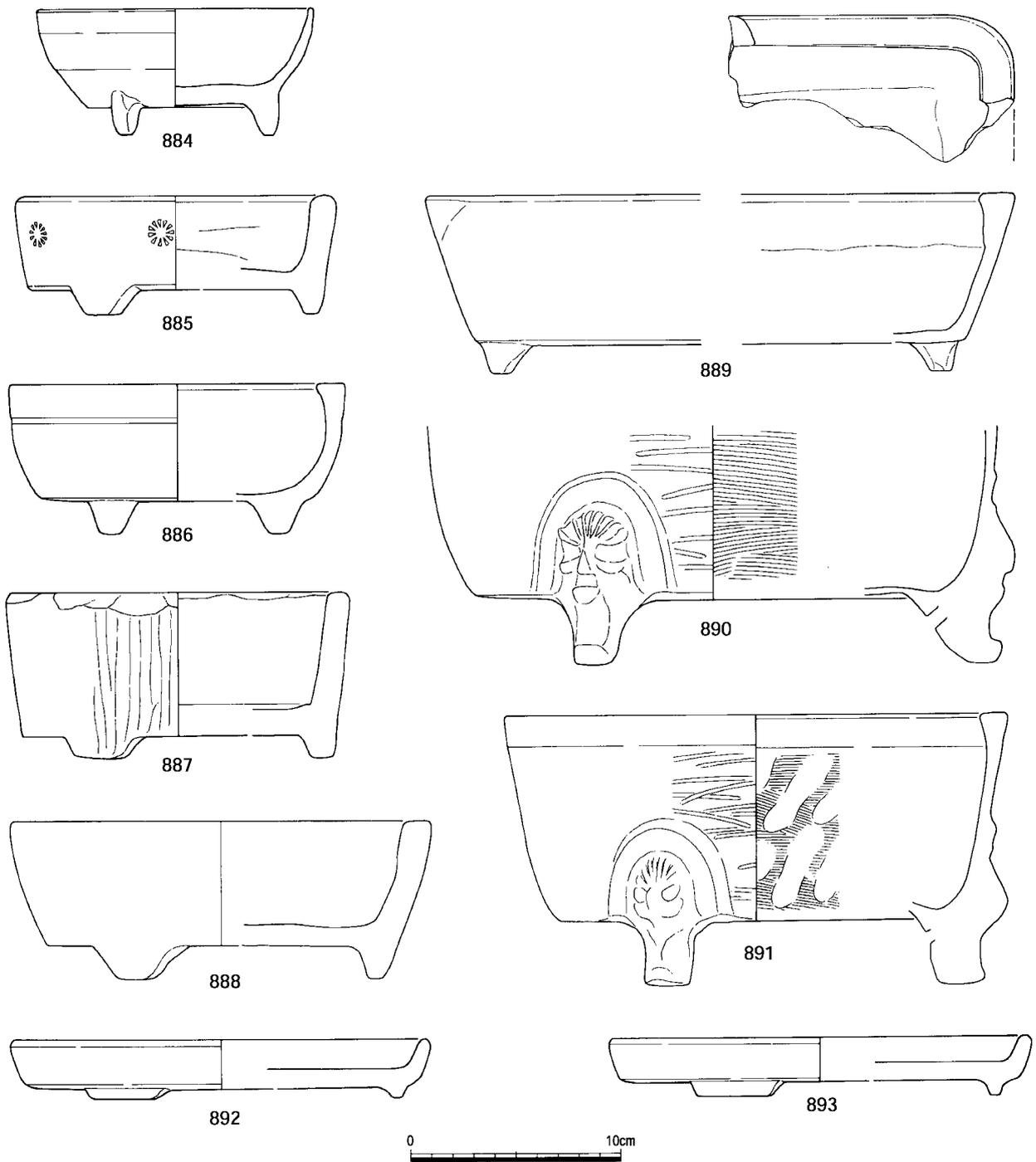
壺・鉢 (第98・99図)

口径16.8cm、器高24.2cmを測る**880**は火消し壺と見られる。**881**は桶形の鉢で口径39.7cm、器高22.2cmあり、口縁下には箍を模した突帯を貼り付ける。

堀から出土した**882・883**は口径38.0cmを測る瓦質の鉢で、底部には板状の足をもつ。

火鉢 (第100図、図版10)

瓦質の火鉢には方形の**889**と浅筒形の**885~888**、盤形の**892・893**、瓶掛形の**894**があり、口径14.5

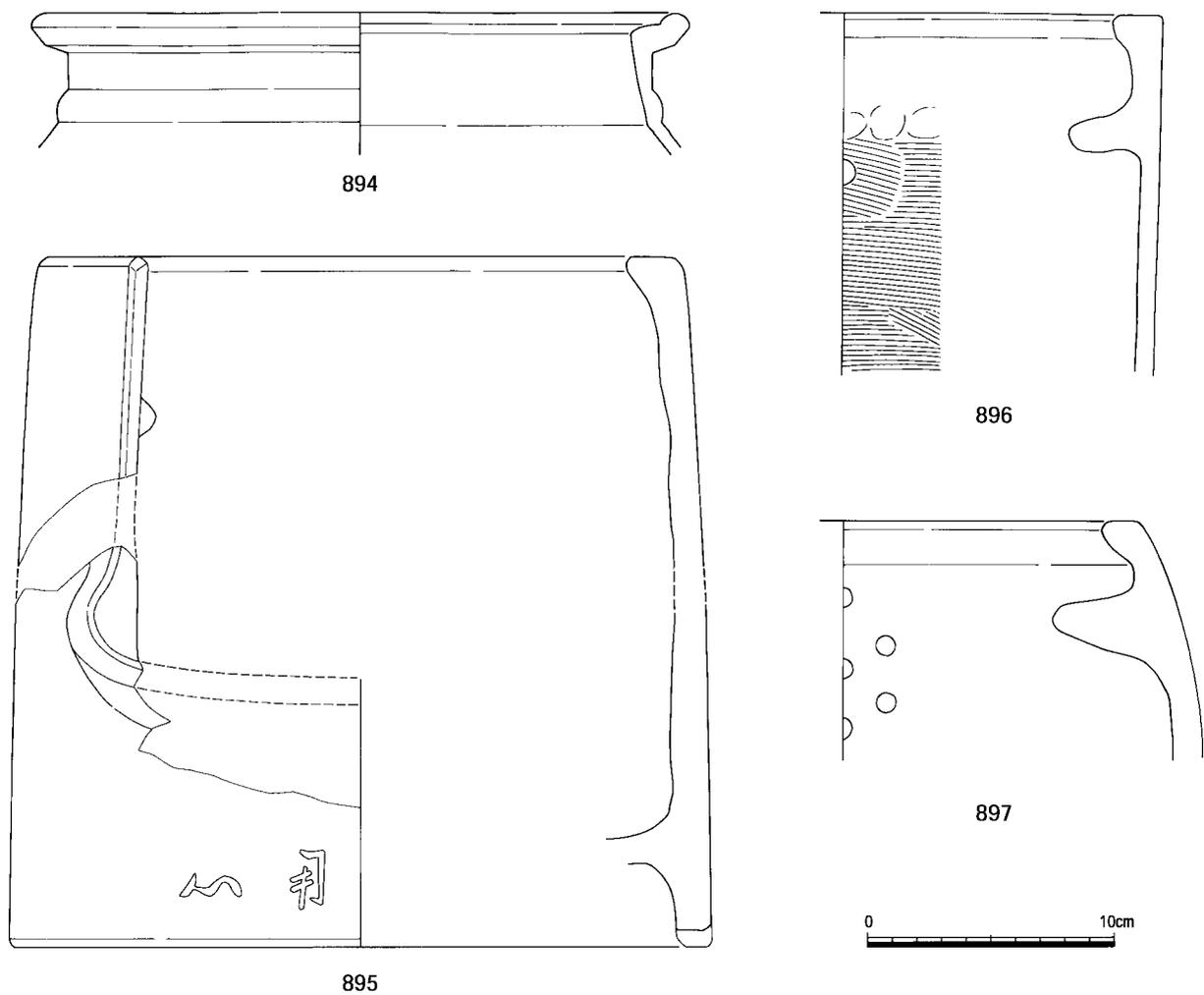


第100図 土器11 (1/3)

～15.8cmの**885・887**、19.5～19.8cmの**888・892・893**、23.5～27.2cmの**890・891**に分けられる。このうち、口縁部が内側に肥厚する**886・889～891**は上層から出土している。また下層から出土した土師質の**884**は中世まで溯る可能性がある。

焜炉 (第101図)

895～897は窓を大きく開けた竈形の焜炉で、**895**は口径25.4cm、器高28.0cmに復元される。筒形**895・896**と胴丸形**897**とがあるが、いずれも口縁内に瓶掛を貼り付け背面に孔を穿つ。



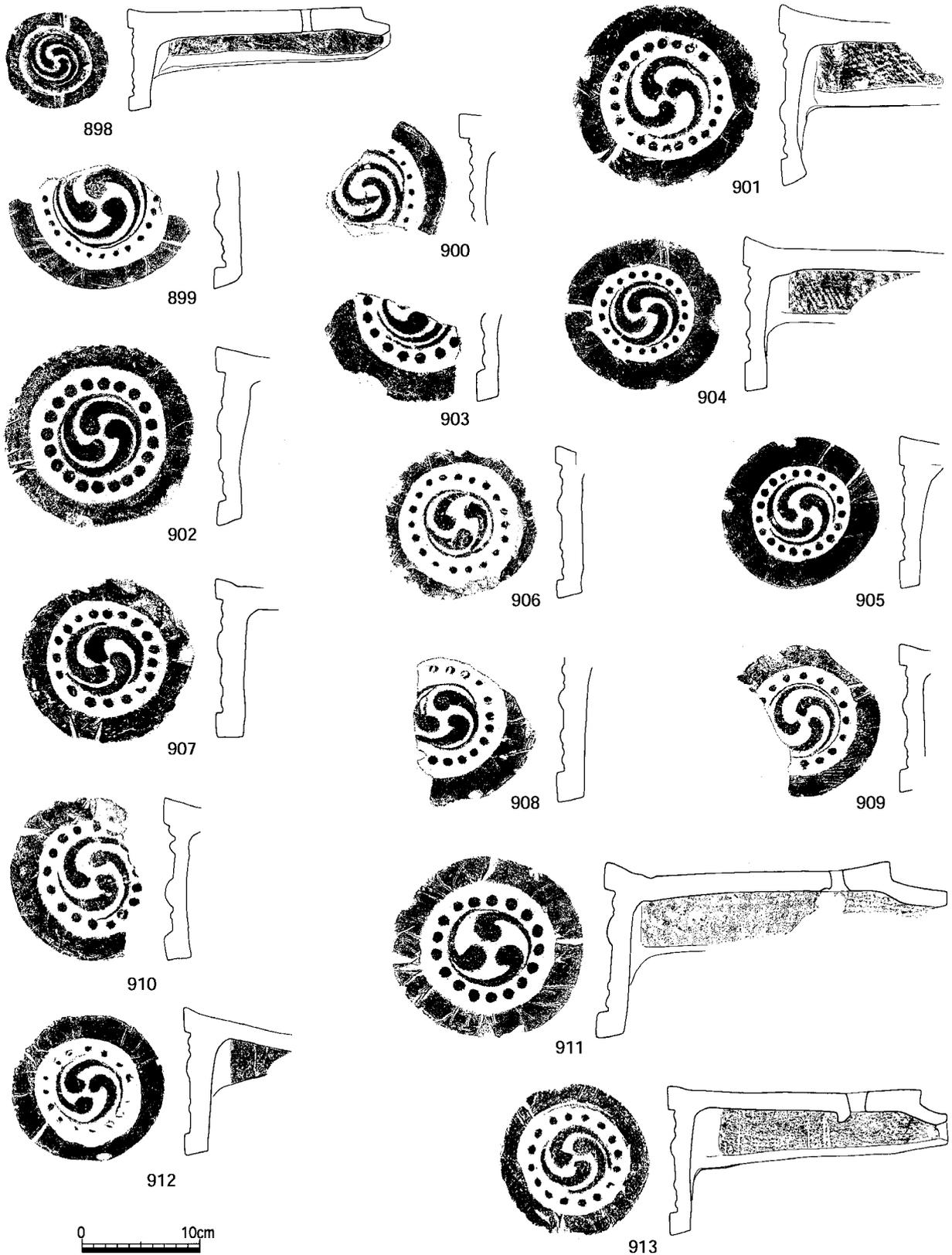
第101図 土器12 (1/3)

(8) 瓦

軒丸瓦 (第102～115図、図版11～20)

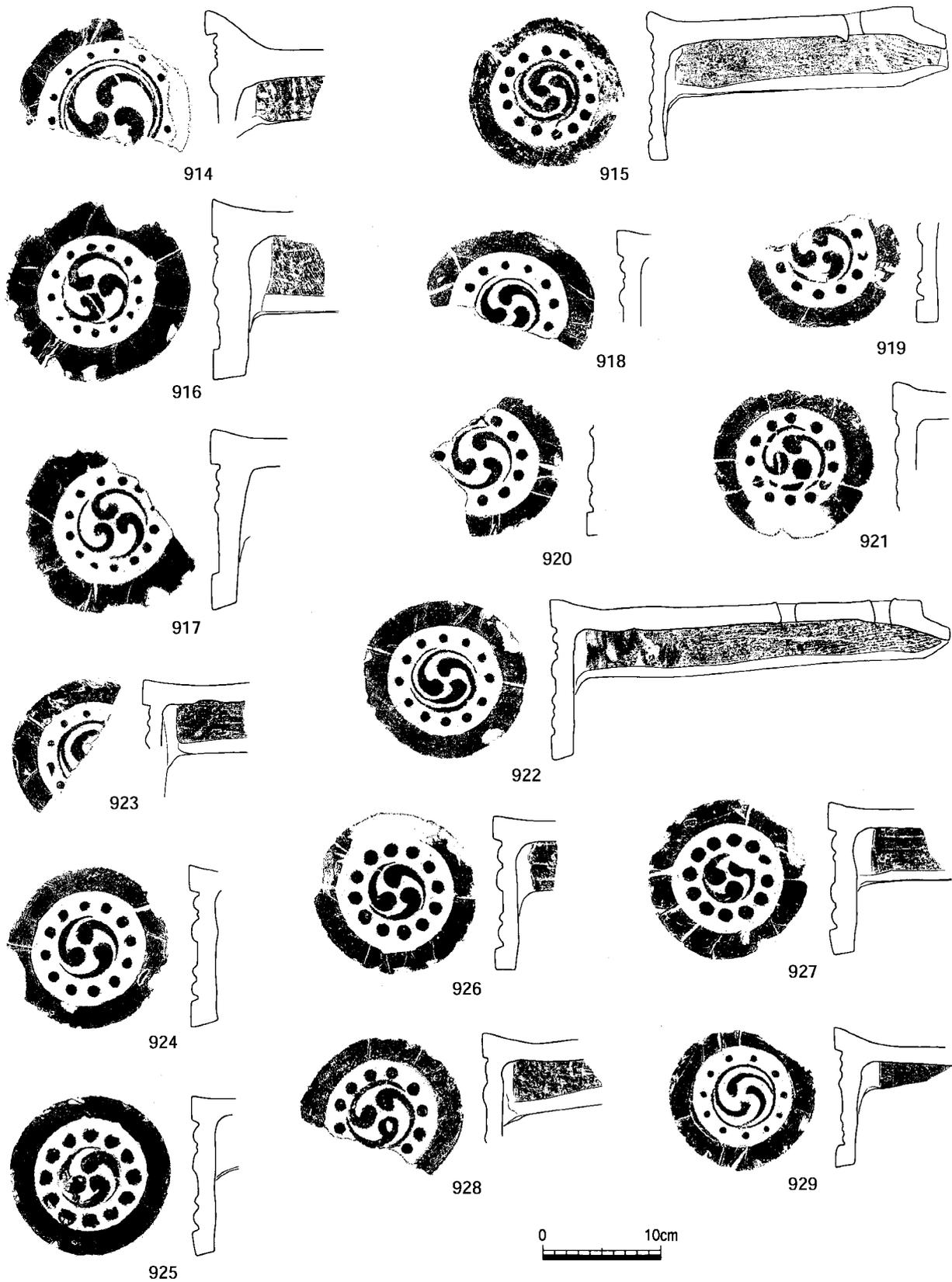
軒丸瓦は248型式を確認している。898～929は、右巻き二巴の900を除いて右巻き三巴で、32型式ある。珠文は9～32個あるが、10型式ある12個に次いで、19個が4型式、17・18個が3型式と多い。瓦当径は13cm前後が多いが、15cm代の大形899・901・903・911・914・916・917や8cmの小形898がある。このうち瓦当径12cmの913・929は棟込瓦である。巴は、頭部が小さく尾部が長く巻き込む909・914、全体が太く表現された902・907、頭部が大きい911、C字形をなす916・917などがある。丸瓦部にコビキAが見られるものは898・901・902・904・915・916で、珠文数19個以上のものに多い。

930～1130は左巻き三巴で201型式ある。珠文は9～34個あり、62型式の12個に次いで、17個が19型式、18個が18型式ある。また、珠文間に「大」を配した1071・1074、「L」を配した1045・1048・1059・1065・1126、井桁を配した1003、三角形を配した1068・1130や巴が珠文を貫く995・1009がある。巴には、頭部が小さく尾部が長く巻き込む930・931・935・996・1014・1015・1056～1058・1127、頭部が接する966・1016・1017、全体が太く表現された939・958・967～969・1019・1129、頭部が大きい973・1023・1034・1037・1067・1083、C字形をなす932・948・1031、巴間に珠文を配した976・



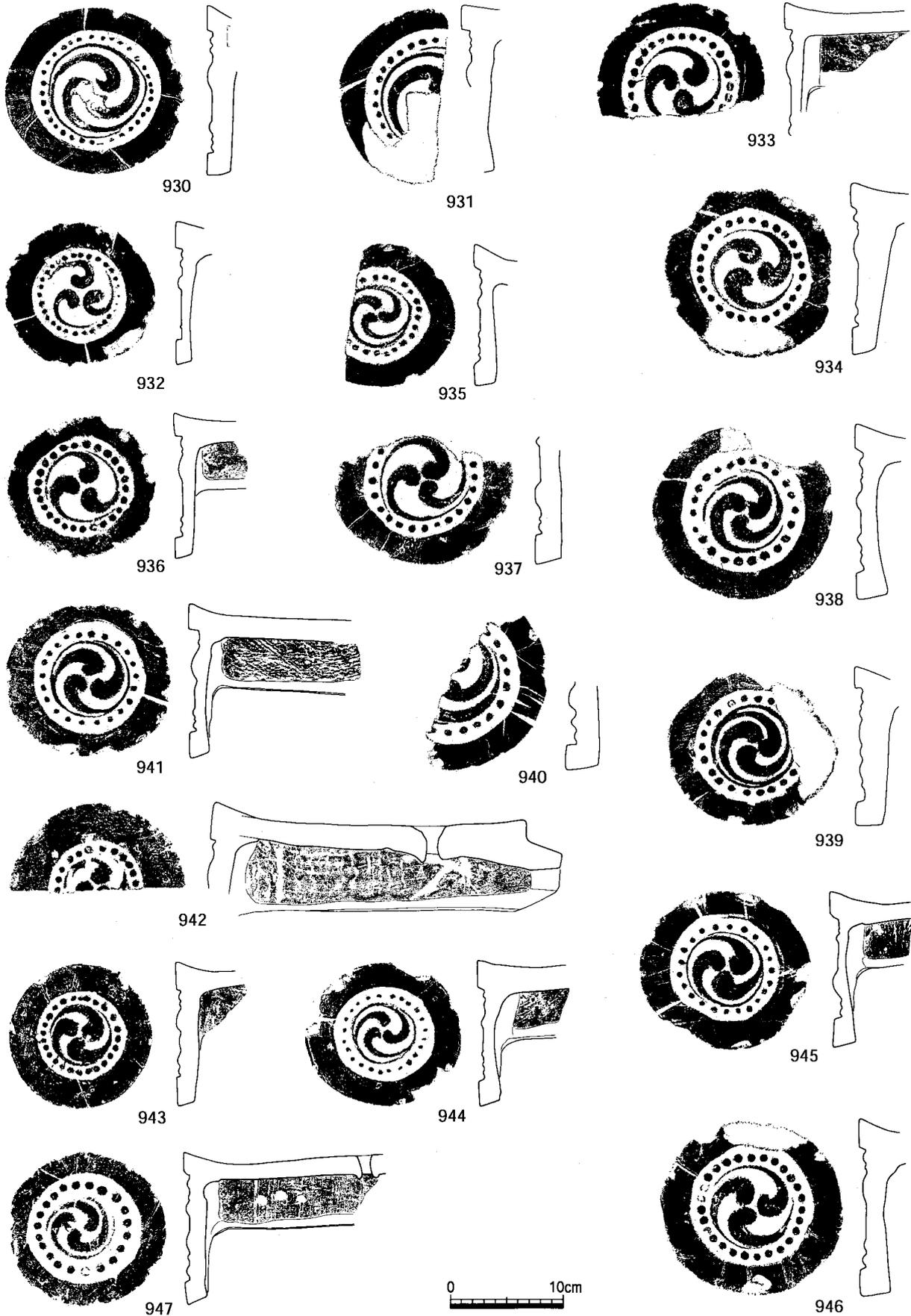
第102図 瓦1 (1/5)

977・978などがある。瓦当径は13cm前後のものが多いが、15cm以上の大形は930・931・934・937・938・940・942・946・950・951・953～955・957～960・967～969・971・972・974・975・978・980・983・990～992・997～999・1010・1012・1027・1028・1032・1037・1041と珠文数17個以上に多い。

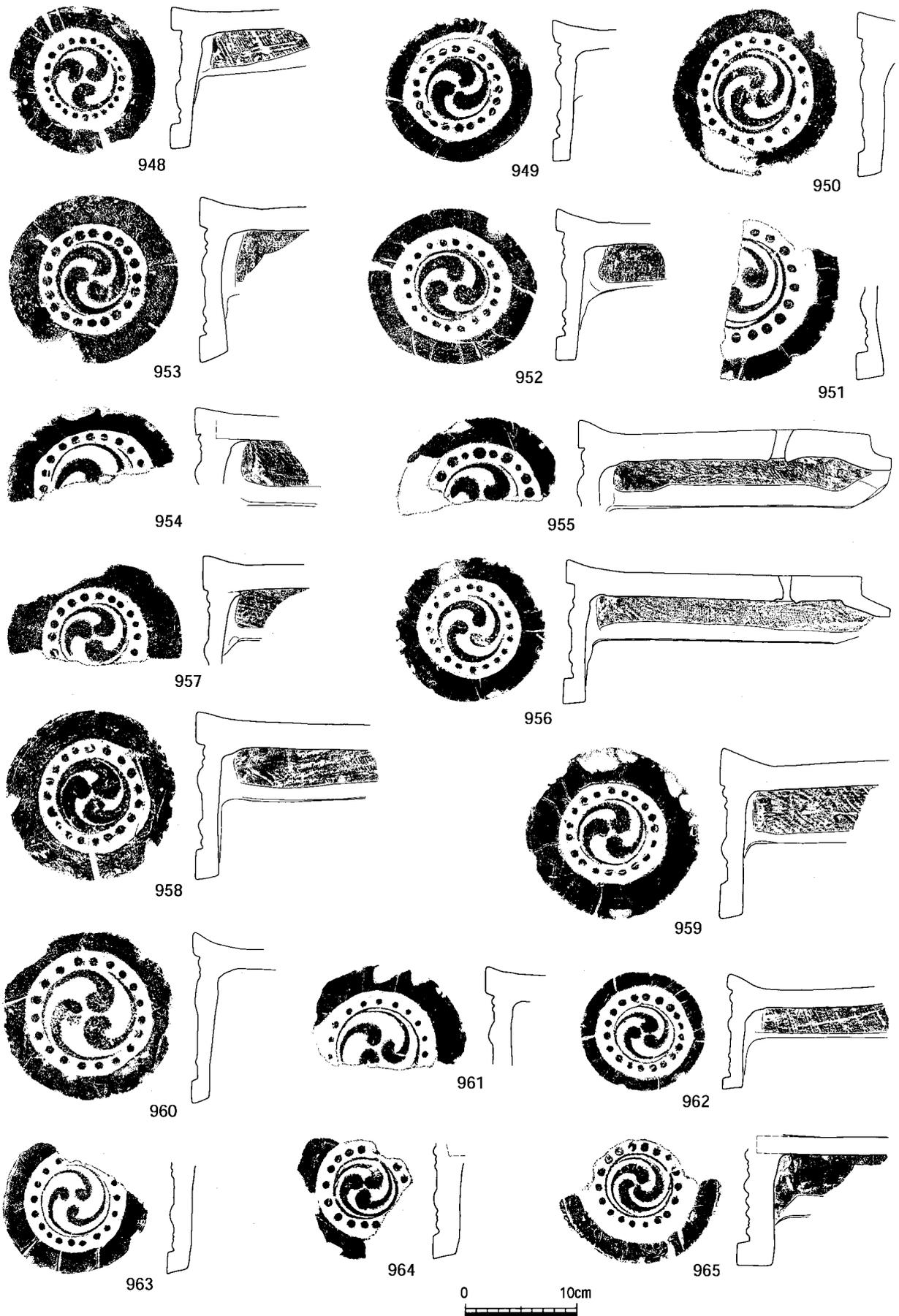


第103図 瓦 2 (1/5)

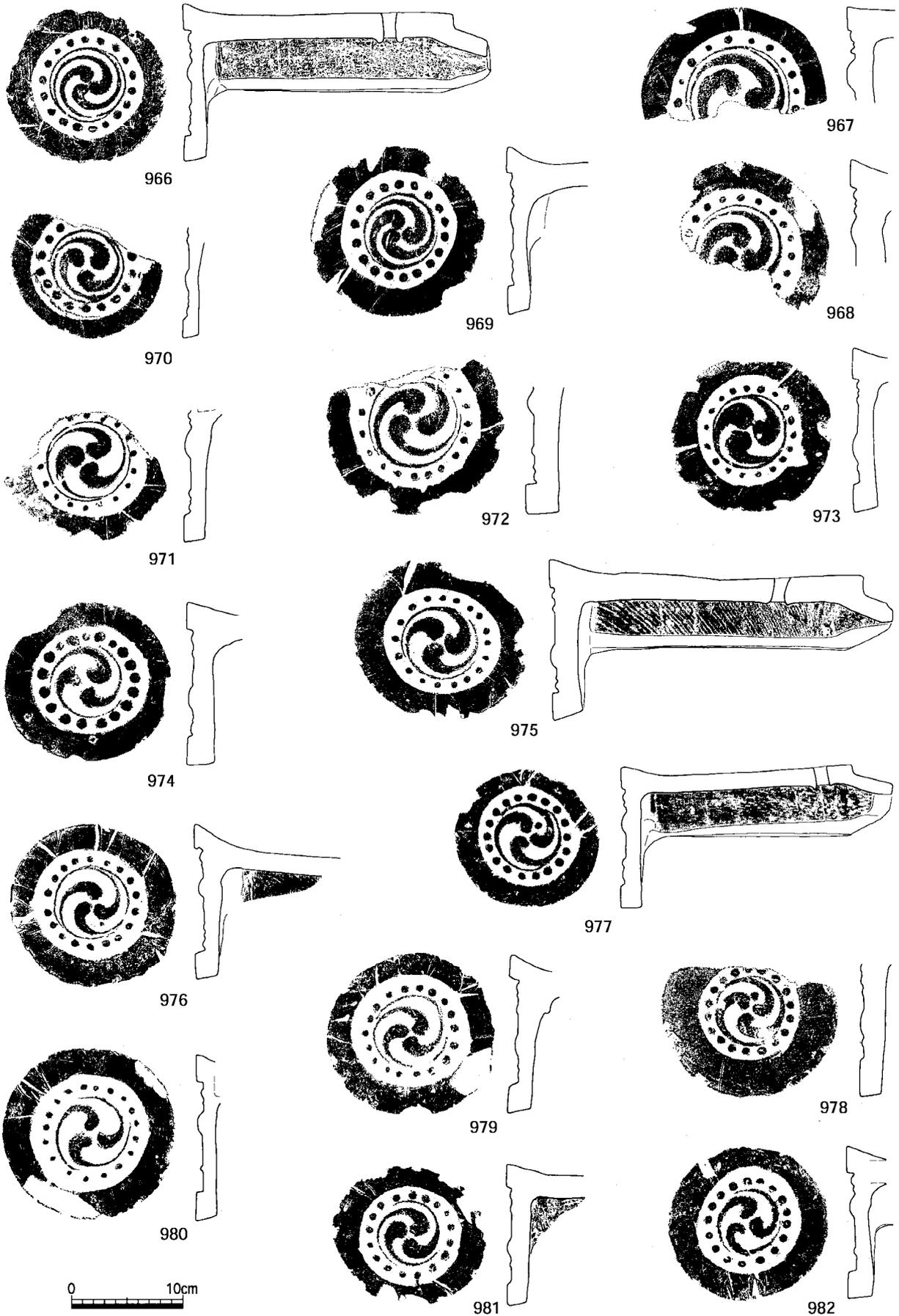
また、12cm以下の小形962・1008・1011・1015もある。コビキAの丸瓦をもつものは941・948・952～959・975・976・987・988・993・1010・1023・1032・1044で、やはり珠文数17以上に多い。



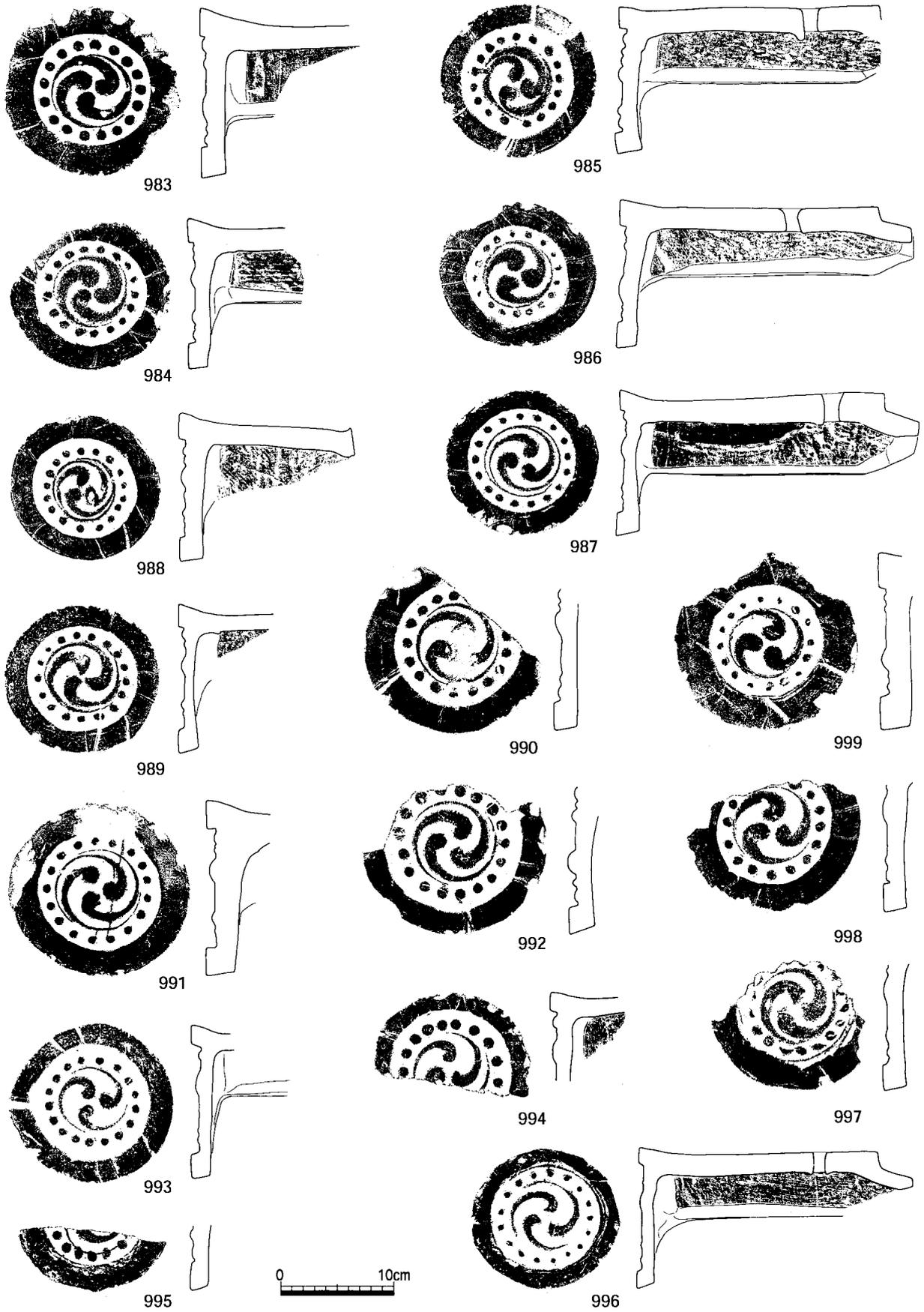
第104図 瓦3 (1/5)



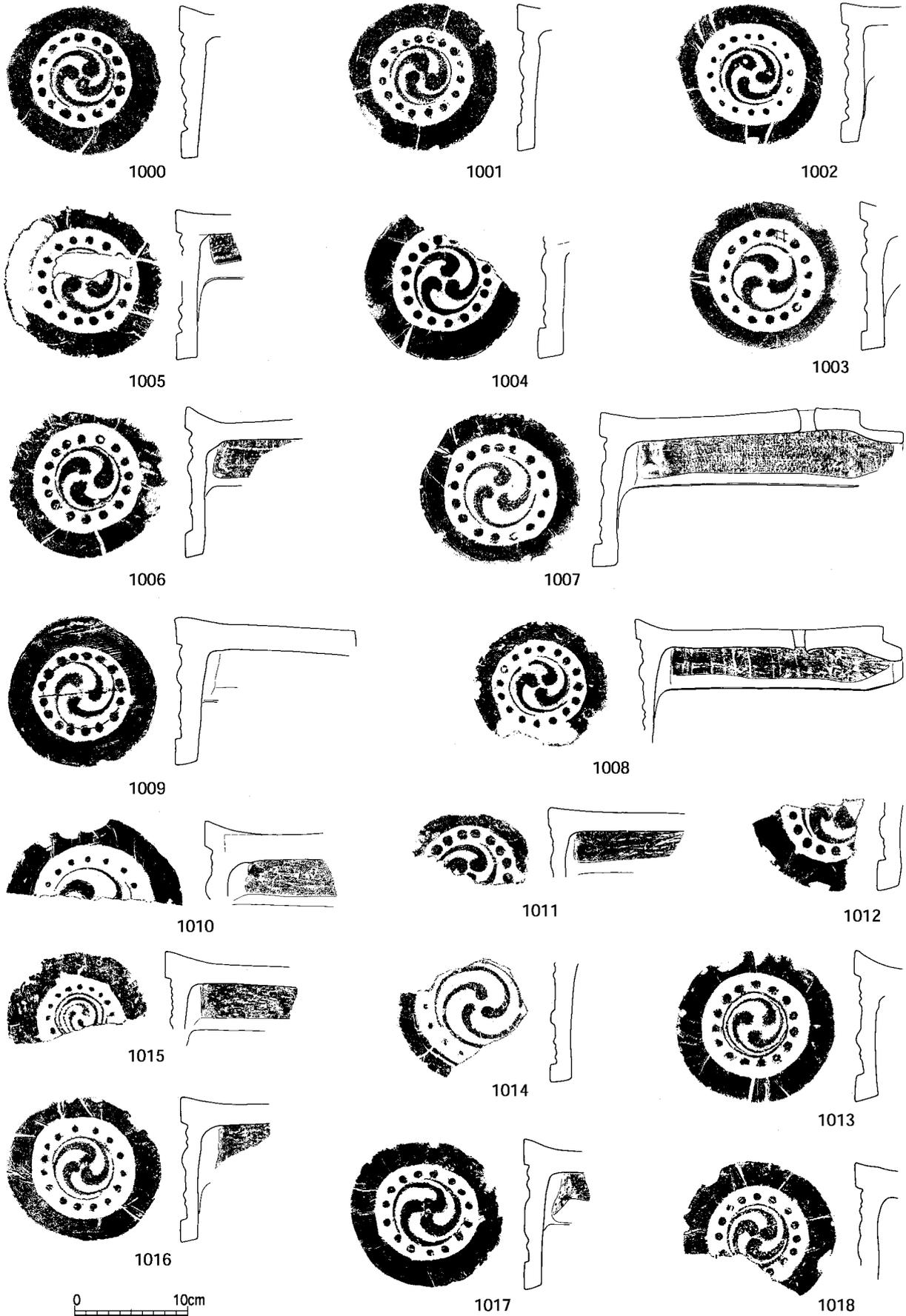
第105図 瓦4 (1/5)



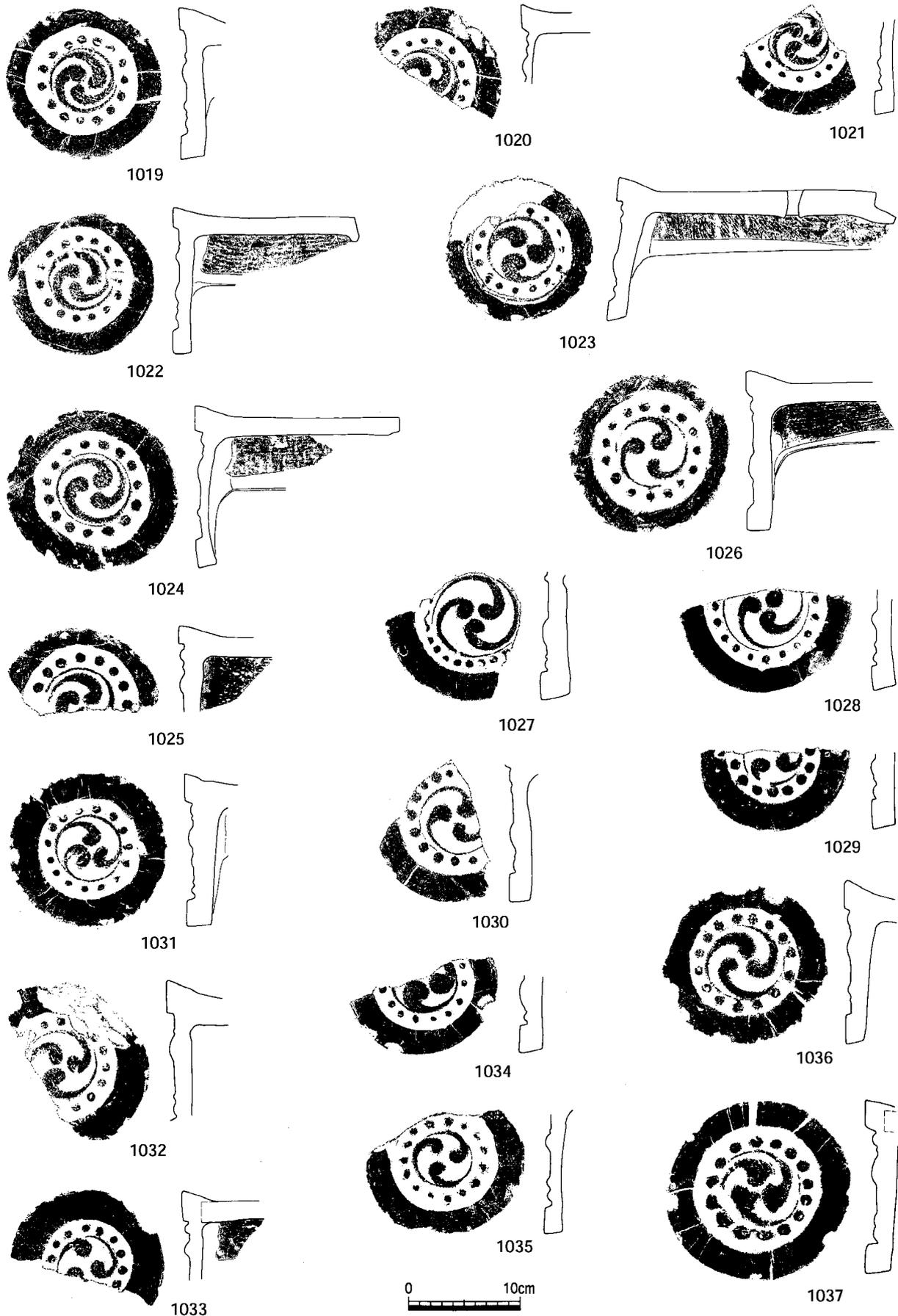
第106図 瓦5 (1/5)



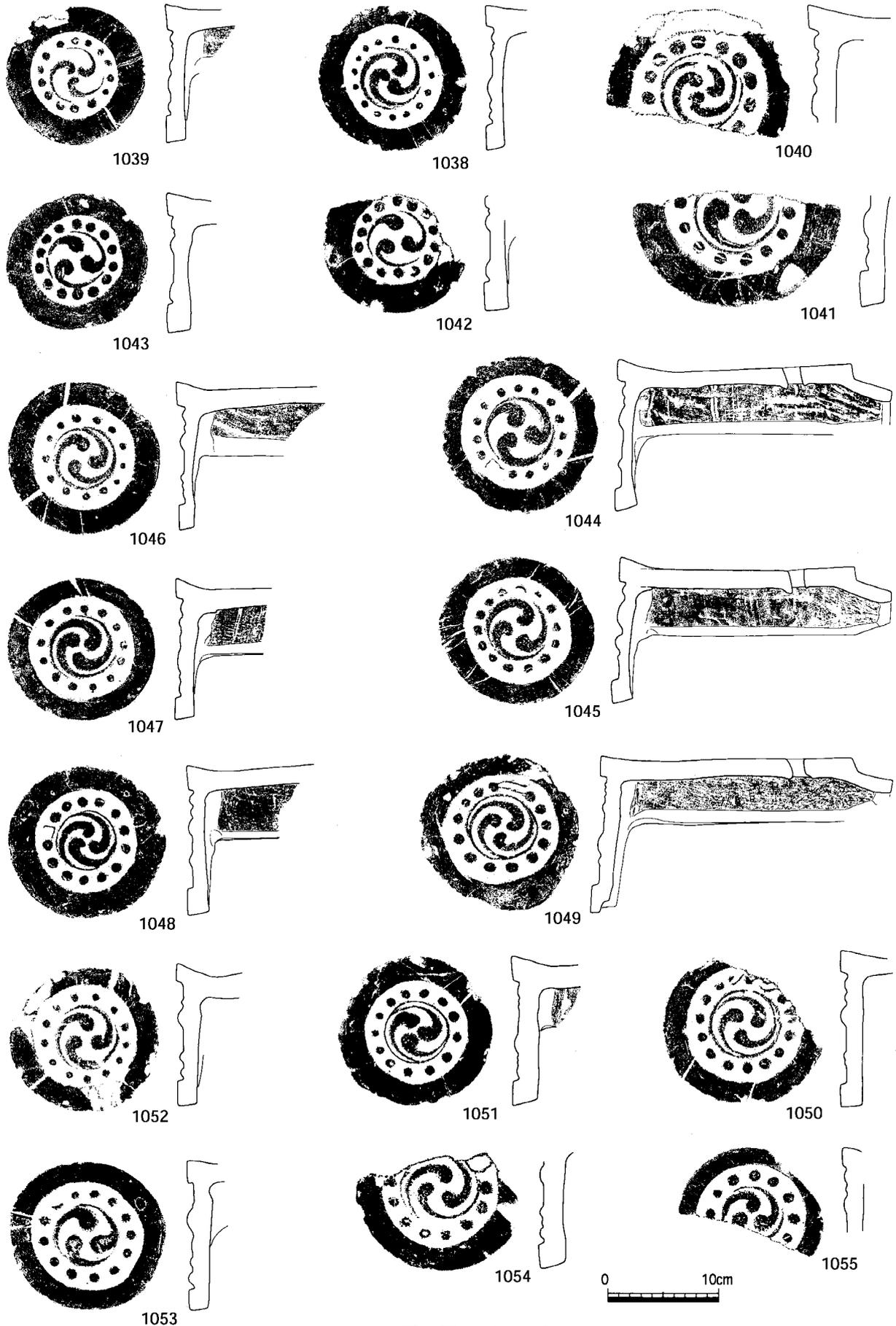
第107図 瓦6 (1/5)



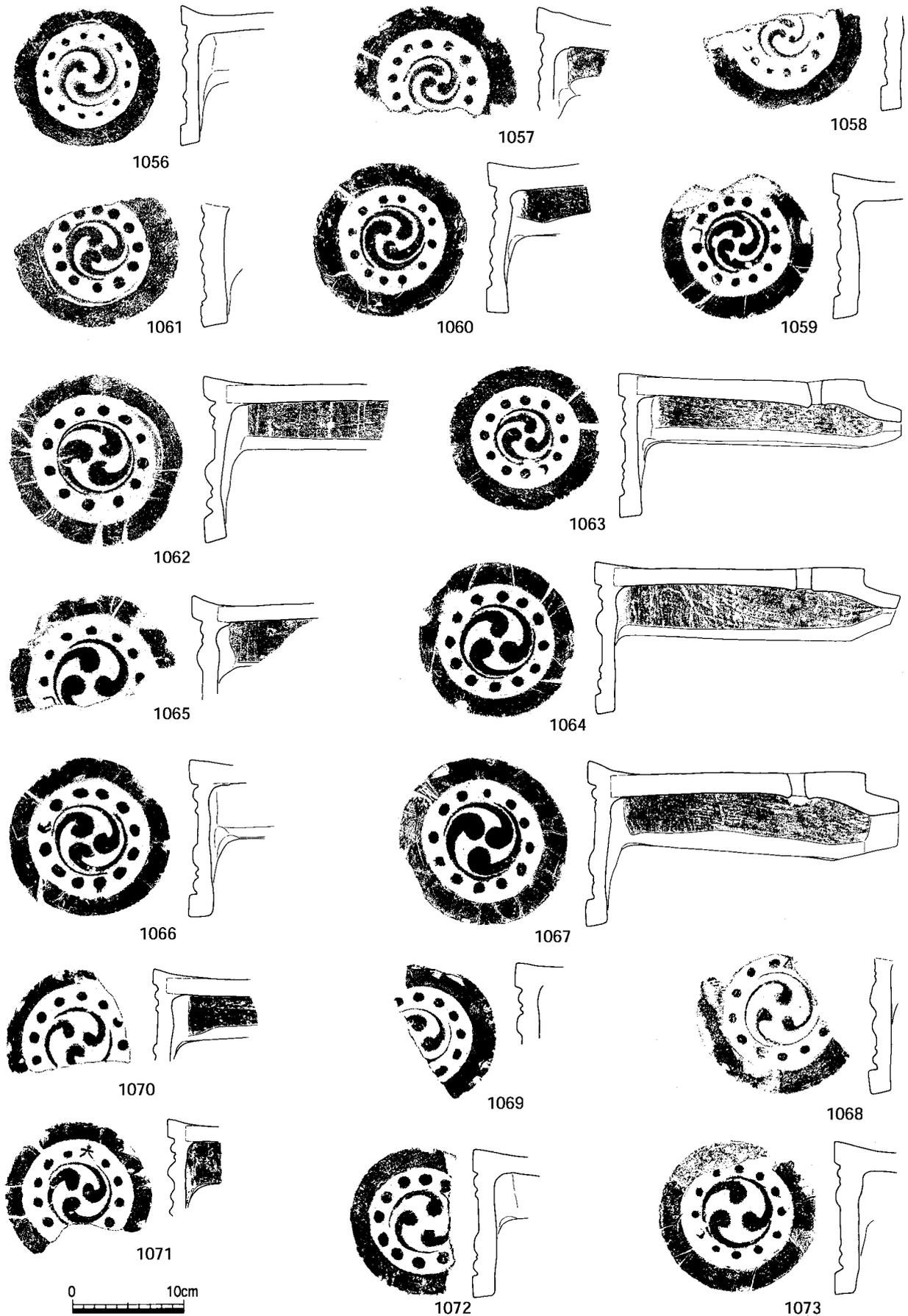
第108図 瓦7 (1/5)



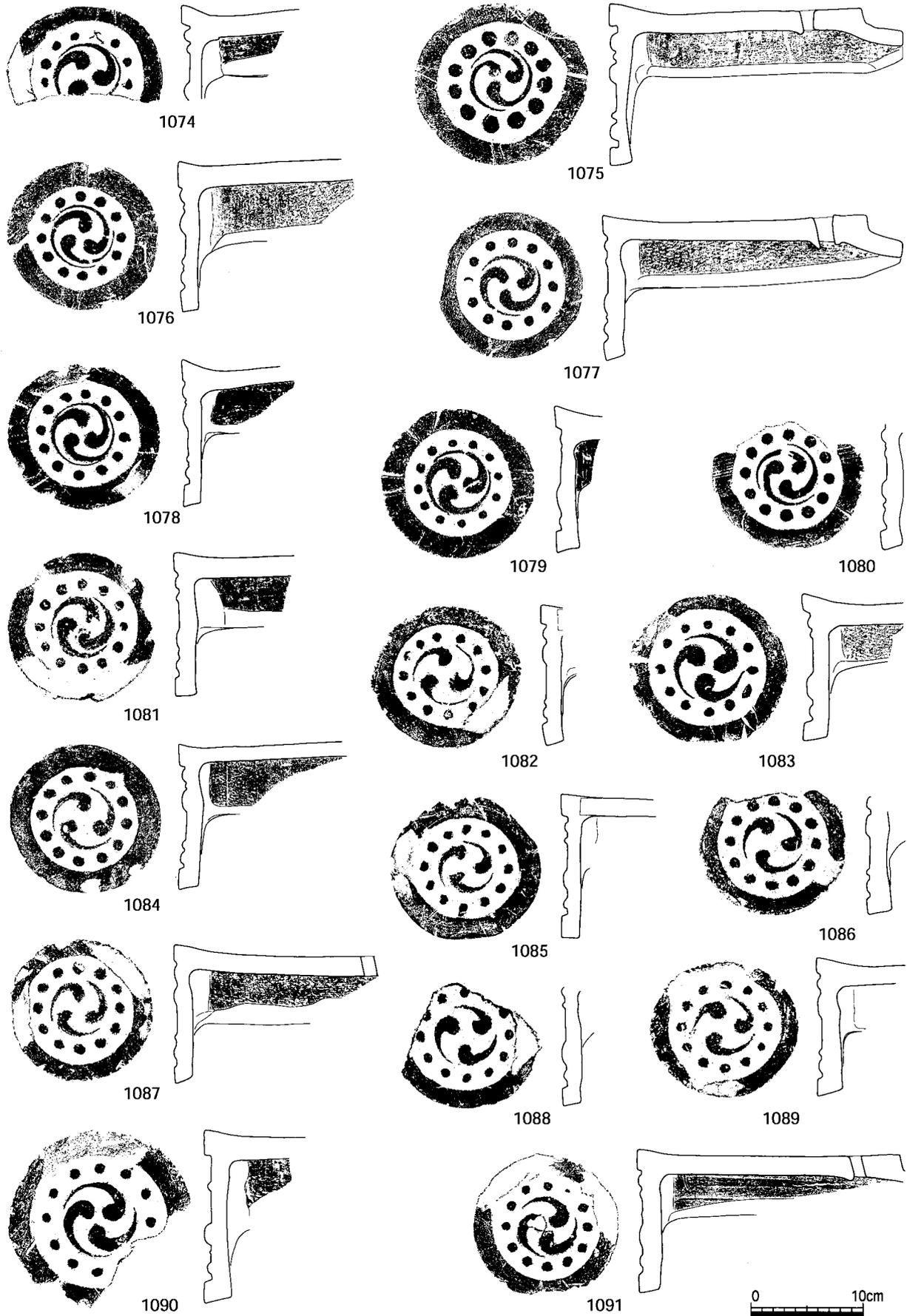
第109図 瓦 8 (1/5)



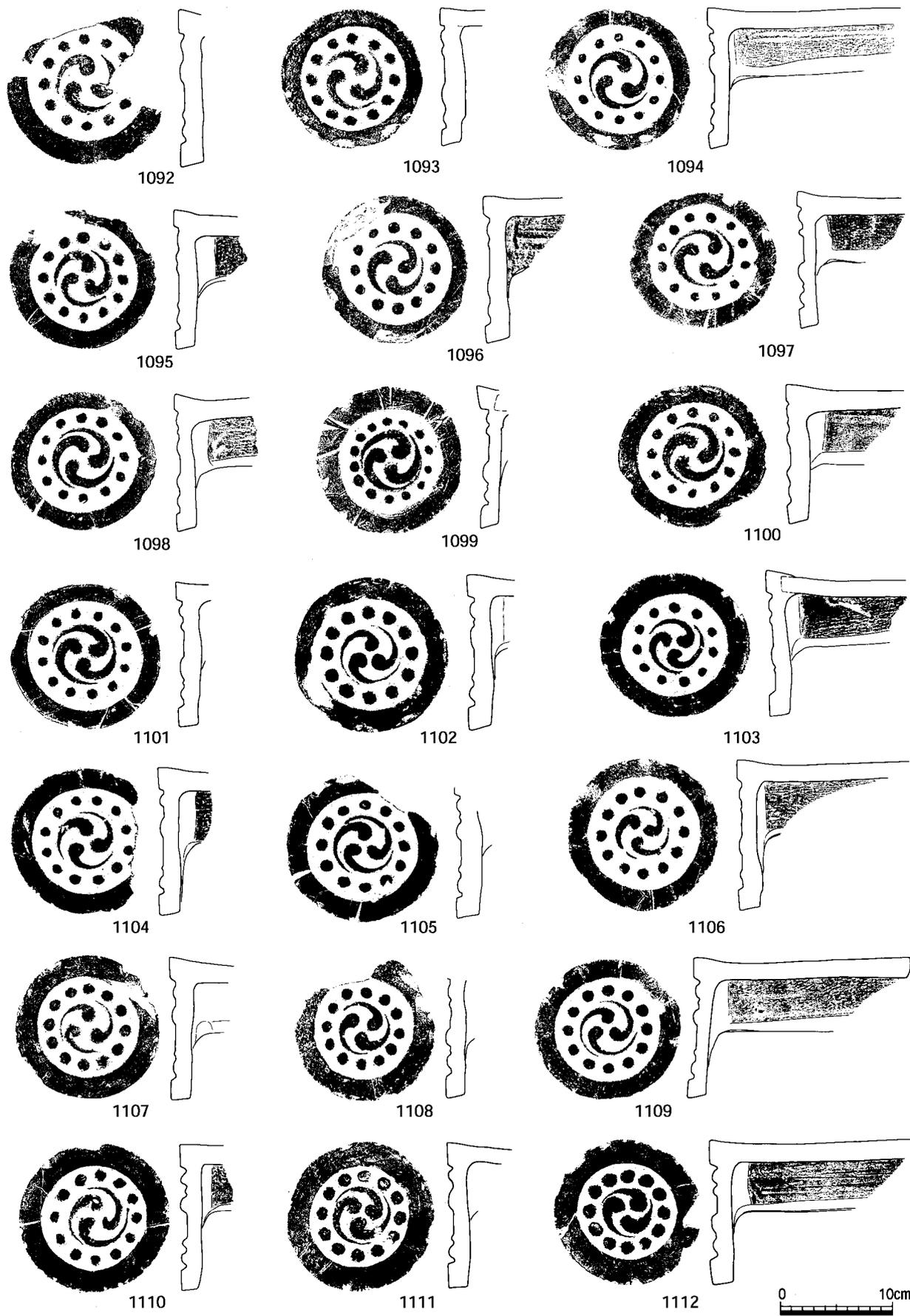
第110図 瓦9 (1/5)



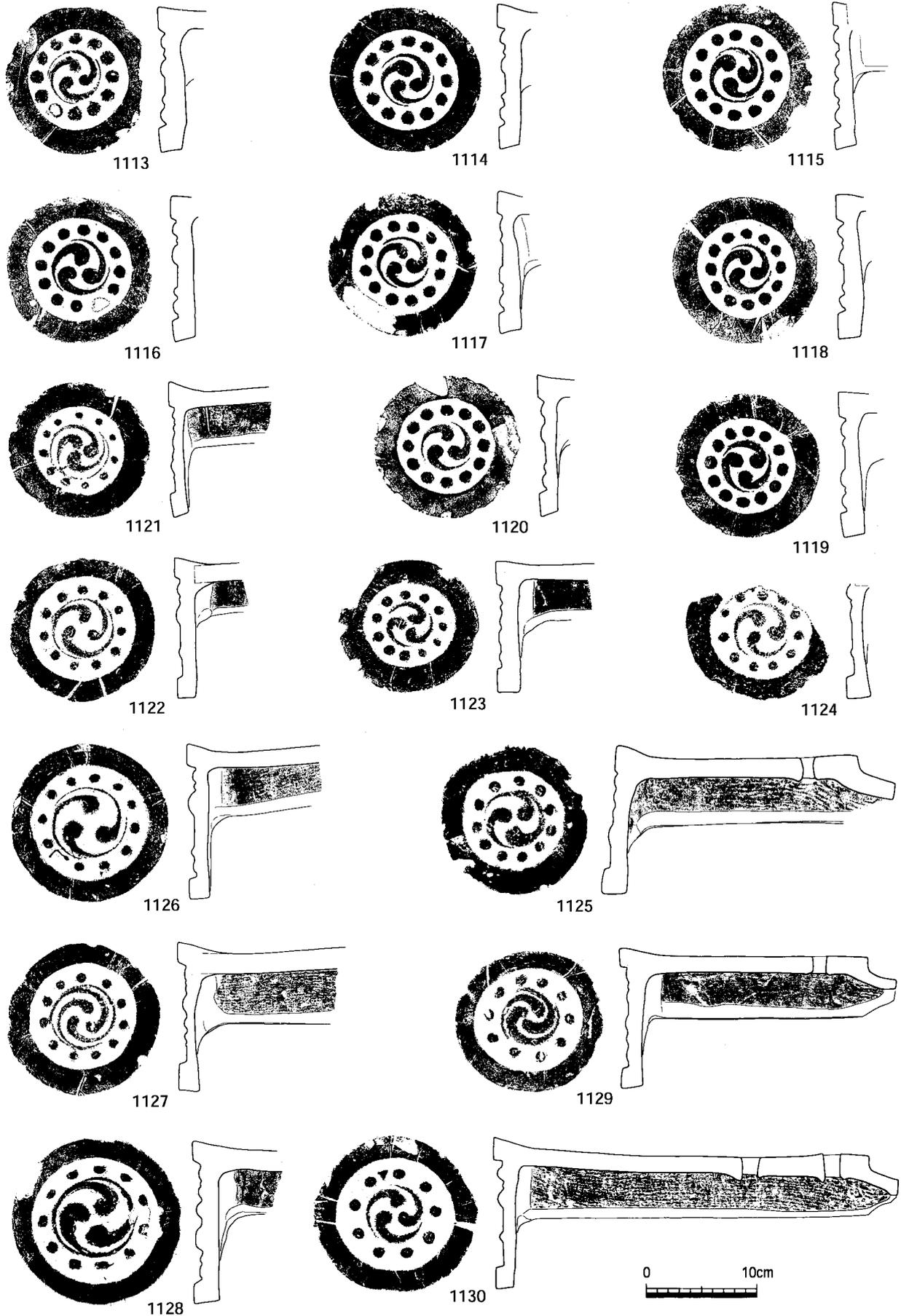
第111図 瓦10 (1/5)



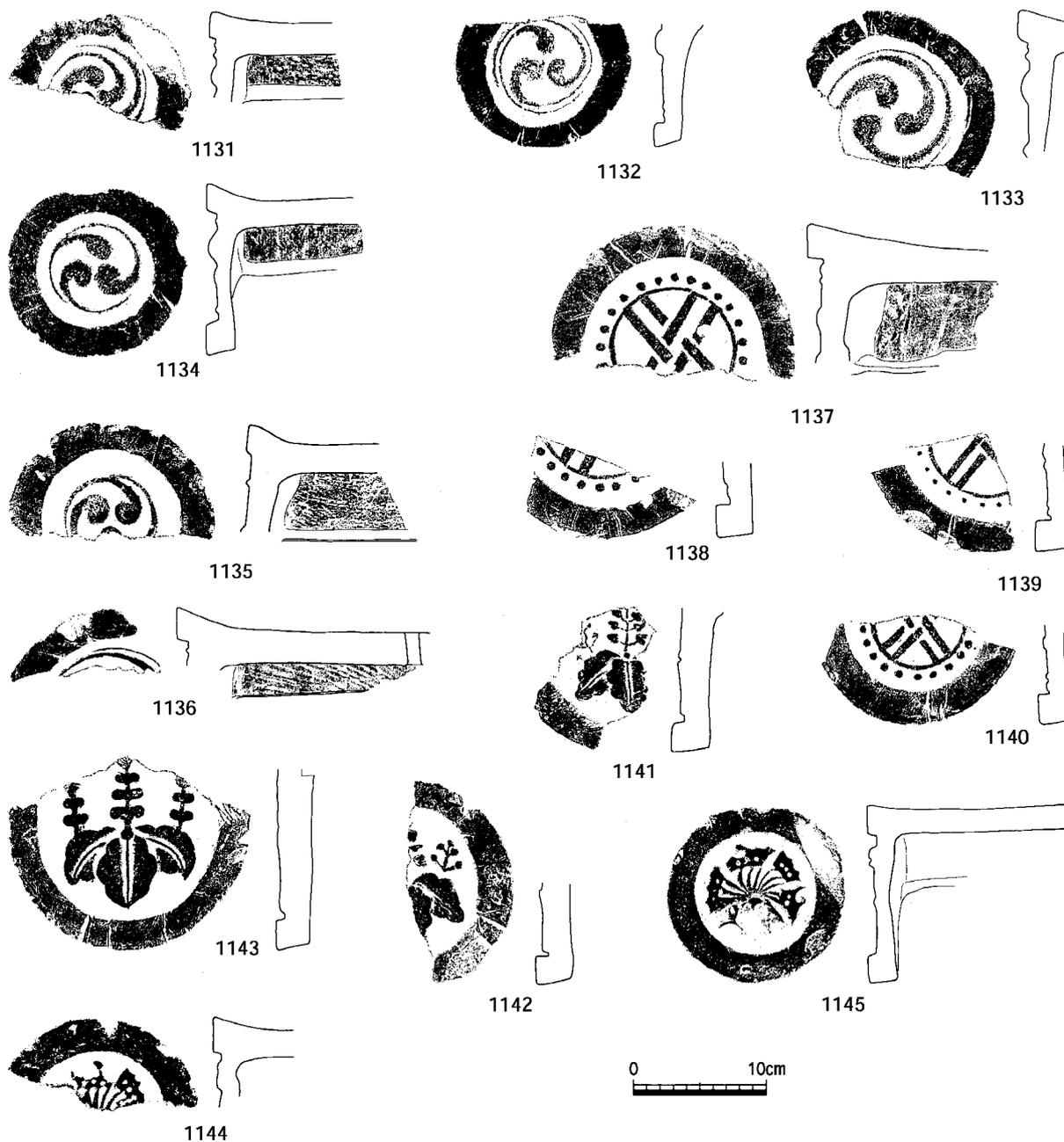
第112図 瓦11 (1/5)



第113図 瓦12 (1/5)



第114図 瓦13 (1/5)

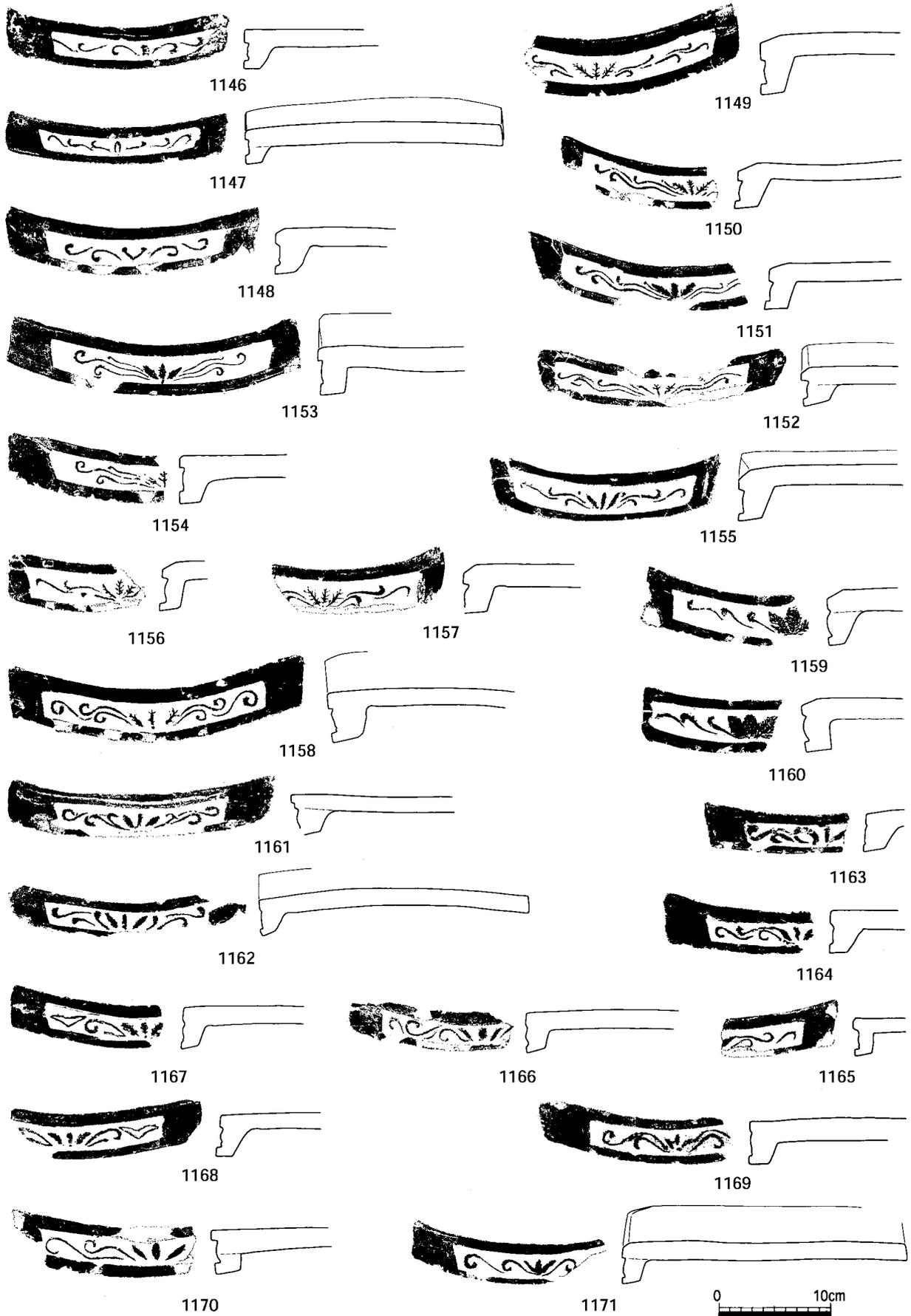


第115図 瓦14 (1/5)

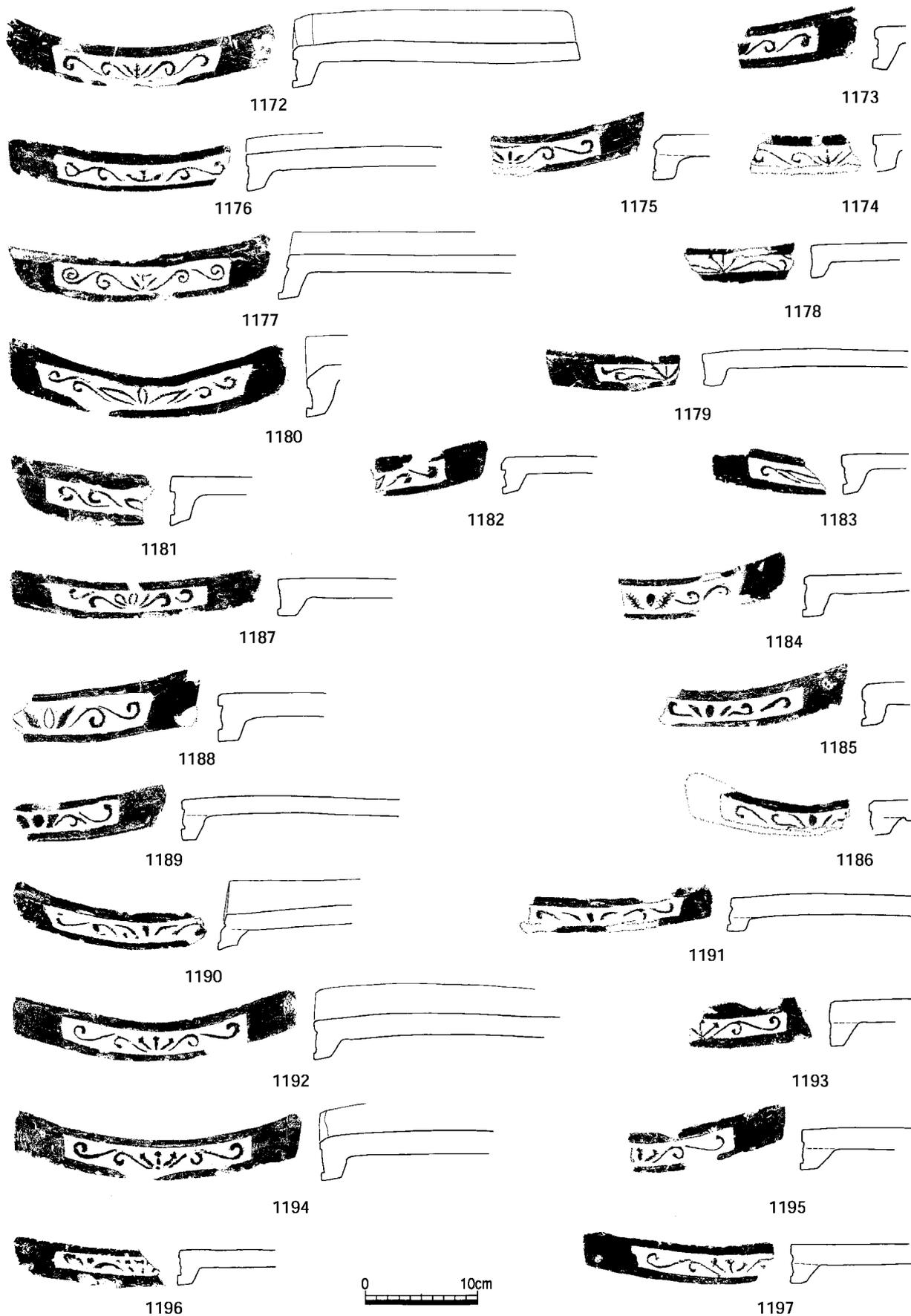
1137～1145は紋所を飾る軒丸瓦である。1137～1140は筋違い紋を飾る軒丸瓦で3型式あり、瓦当径17.3cmを測る大形1137～1139と15cm前後の小形1140に分けられる。五七桐紋を飾る軒丸瓦は、瓦当径15.2cmの1141・1142と17.3cmの1142の2型式ある。揚羽蝶紋を飾る軒丸瓦には、瓦当径13.4cmを測る1145と15cm前後の1144がある。

軒平瓦 (第116～121図、図版21～28)

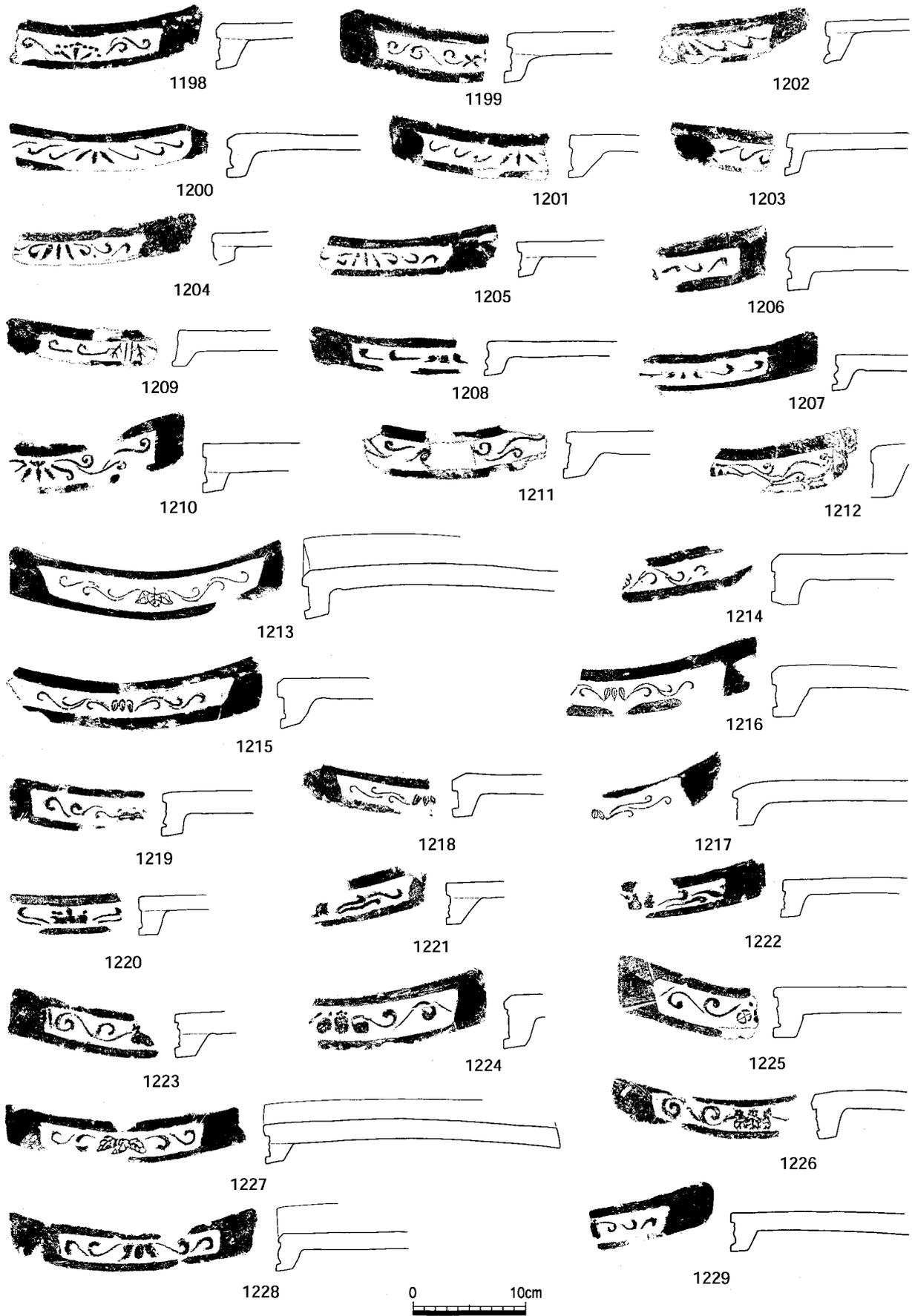
軒平瓦は159型式170点を図示した。1149～1212は三葉の中心飾をもつもので61型式ある。中心飾の三葉は、葉脈をつけ立体的に表現する1149～1160や、輪郭線で表現する1180～1184、三葉の先端に飾りをつける1192～1199、三葉を下向きに表現する1200～1212などがある。また、中心飾から左右にのびる唐草には5転の1149、4転の1150～1152・1210～1212、3転の1153～1168・1199～1206、2転の1169～1198・1207～1209がある。



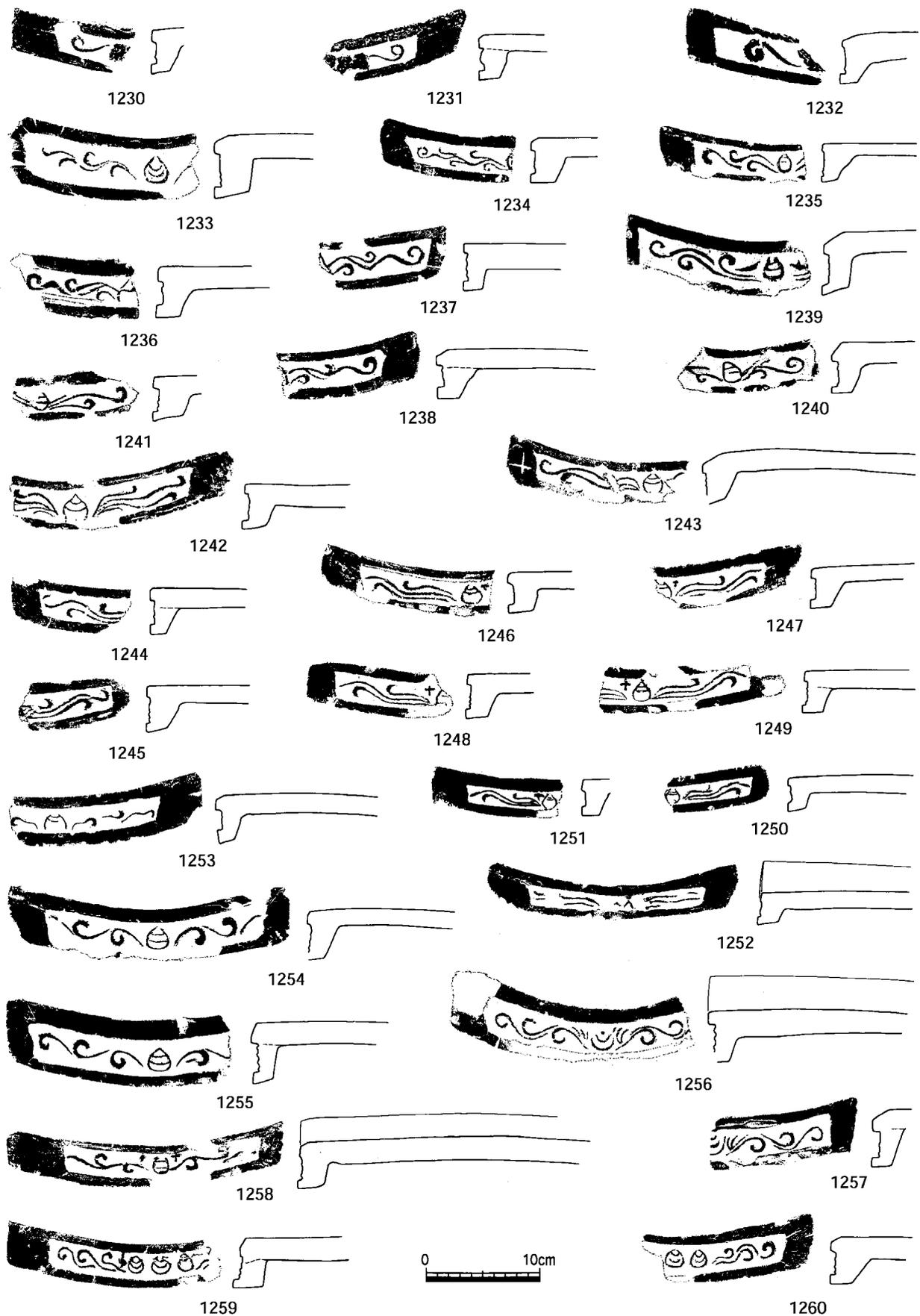
第116図 瓦15 (1/5)



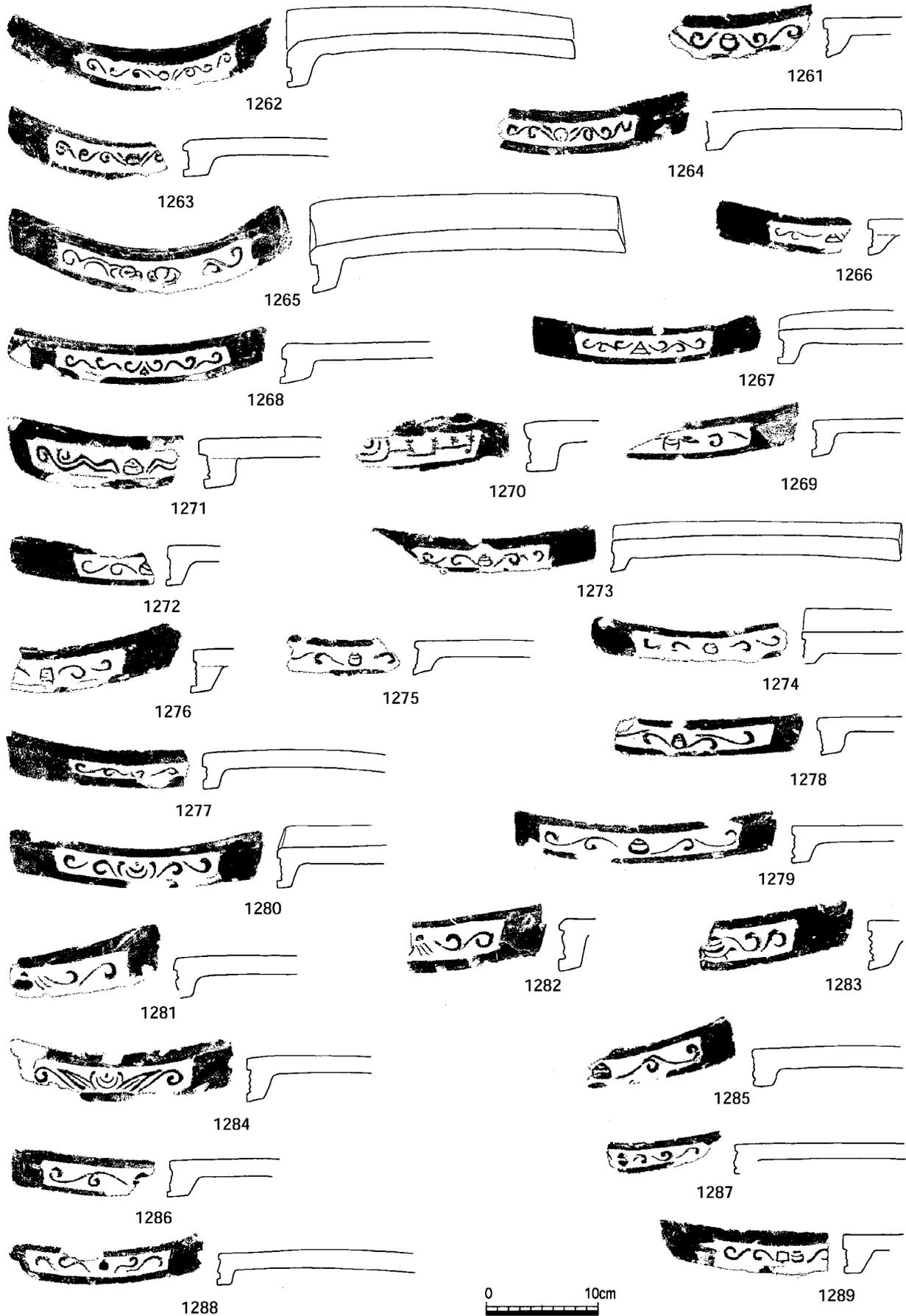
第117図 瓦16 (1/5)



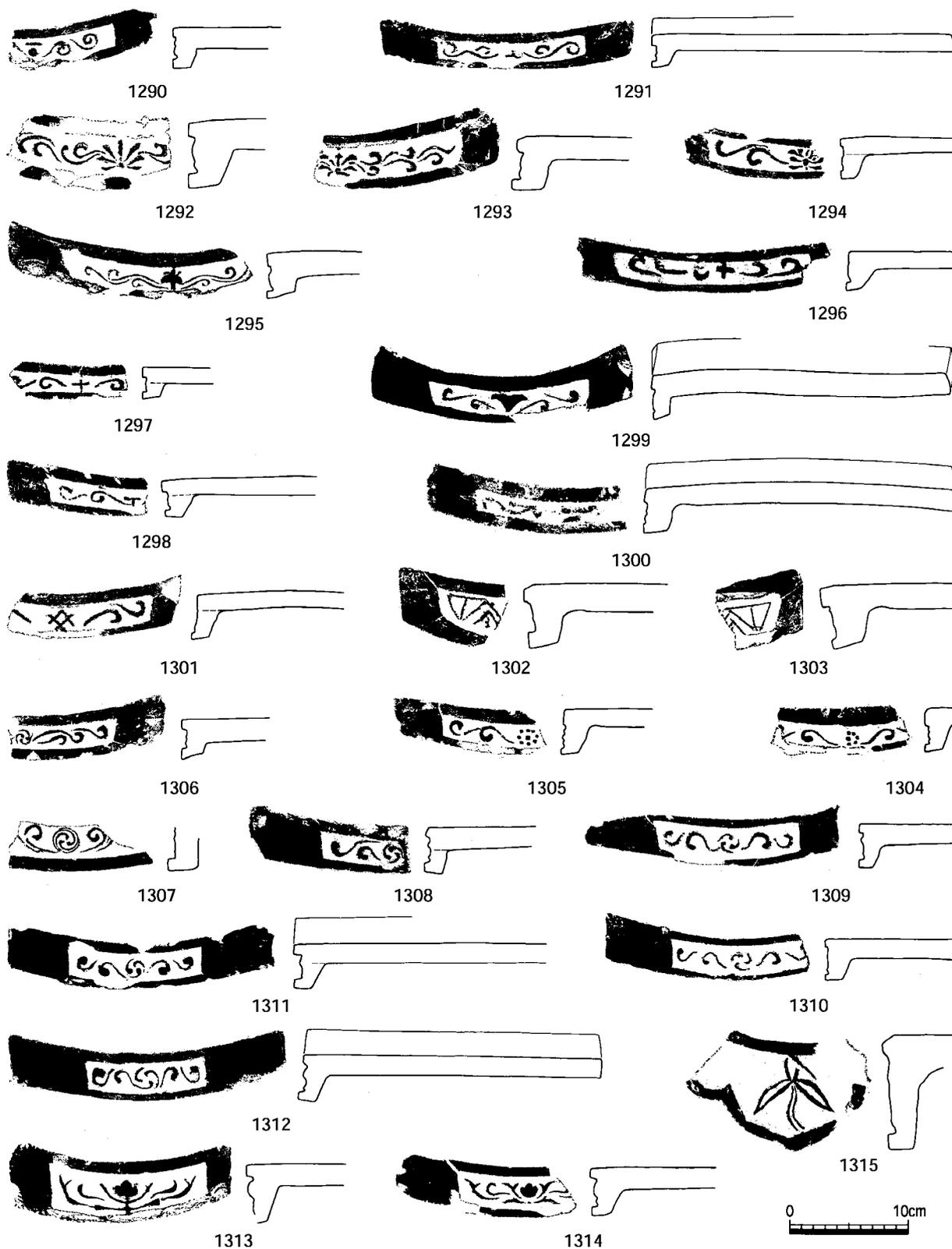
第118図 瓦17 (1/5)



第119図 瓦18 (1/5)

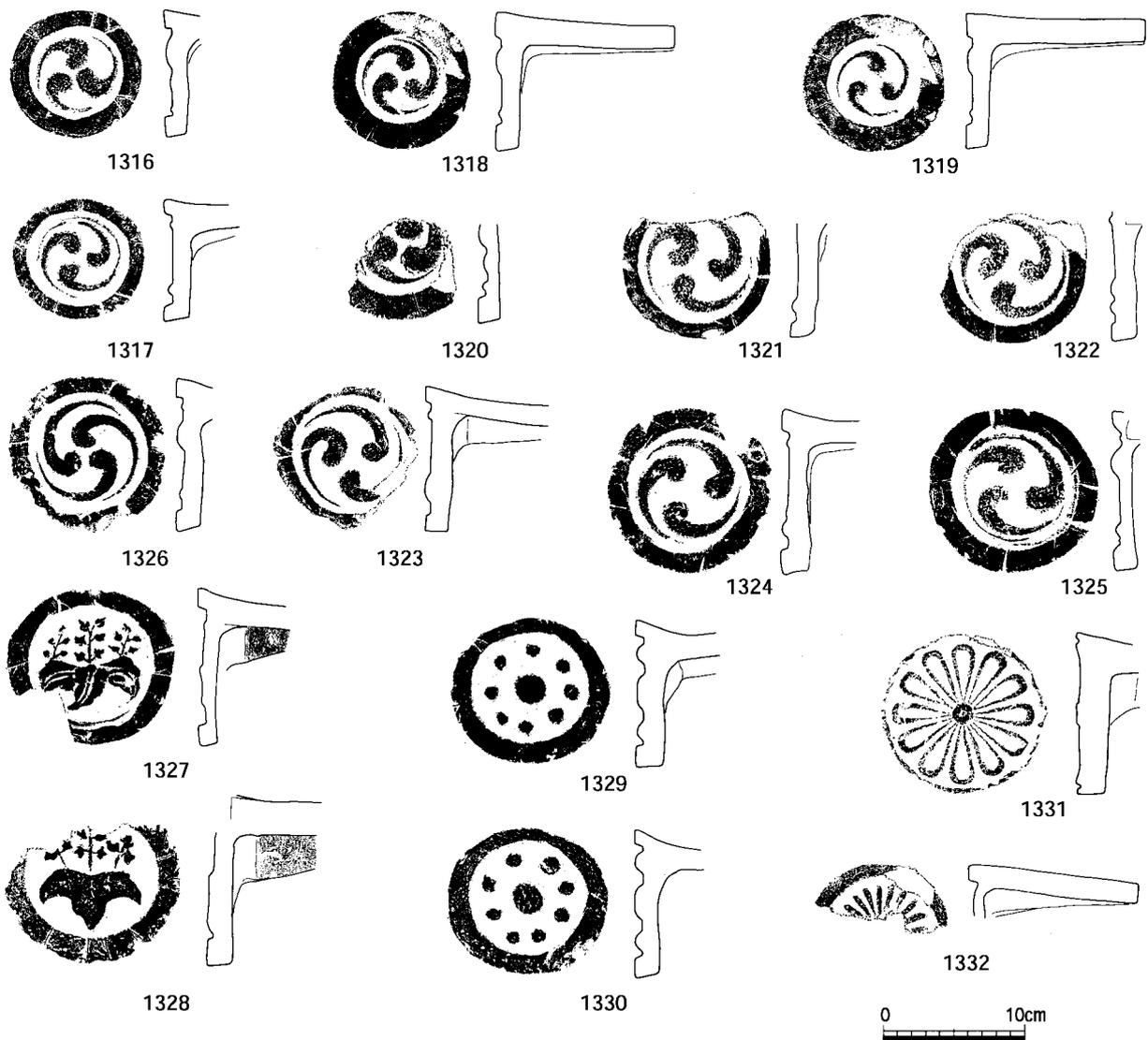


第120図 瓦19 (1/5)



第121図 瓦20 (1/5)

桐の中心飾をもつ1213～1232は17型式あり、左右にのびる唐草が3転する1213～1222・1229、2転する1223～1228、1転する1230～1232がある。中心飾は、笹葉様に線で表現する1213～1218、蔦葉様に凸線で表現する1227と立体的に表す1228～1232、花蕾をもつ桐を線で表現する1213と立体



第122図 瓦21 (1/5)

的に表す1219～1226がある。

1233～1290は宝珠を中心飾とするもので、54型式ある。中心飾から左右にのびる唐草には5転の1234、4転の1233・1242、3転の1235～1241・1243～1268などがある。中心飾の宝珠も、一つ以外に二つの1265、三つの1259・1260があり、木槌と組み合わせる1289もある。また、その表現も三角形を呈する1266・1267や四角形をなす1276、凸線で表す1233～1278や立体で表現する1279～1290がある。

花文を中心飾とする軒平瓦には、唐草が6転する1293、4転する1292、2転する1294がある。このうち堀から出土した1292・1293は瓦当幅が広く、平瓦部も厚いことから、室町時代に溯るものと思われる。1295～1298の中心飾は木槌で、左右にのびる唐草が3転する1295と2転する1296～1298がある。1299は銀杏葉、1301は井桁、は九曜紋を中心飾とする軒平瓦で、いずれも左右に2転する唐草をもつ。1302・1303は鋸歯文を飾る軒平瓦、1315は立沢瀉を飾る滴水形の軒平瓦で、いずれも厚手につくられている。

巴を中心飾とする軒平瓦には右巻き三巴1308・1311・1312と左巻き三巴1306・1307・1309・1310がある。唐草は2転のものが多いが、1306のように3転するものもある。文様区が短く華奢な

つくりのものが多いなかで、**1307**は厚手で巴の巻き込みも長く古相を呈する。**1313・1314**は橘を飾る軒平瓦で、近代まで下るものと思われる。

棟込瓦（第122図、図版11）

1316～1325は左三巴、**1326**は右三巴を飾る棟込瓦で、瓦当径8.5～9.8cmの**1316～1319**と10.8～11.4cmの**1320～1326**に分けられる。また、軒丸瓦に図示した右三巴の**913・929**や左三巴の**1121**も棟込瓦と見られる。瓦当径11.4～12.3cmの**1327・1328**は五七桐、五三桐紋、瓦当径11.1～11.3cmの**1329・1330**は九曜紋の棟込瓦である。菊文の棟込瓦には瓦当径11.3cmの**1331**と9.6cmの**1332**がある。

丸瓦（第127図、図版34）

丸瓦は全形を知り得るもので195点あるが、**1379～1384**のような玉縁式は195点、**1376～1378**の行基葺式は8点あり、両者ともコビキAとBが見られる。

コビキAの丸瓦**1376・1381～1384**は118点ある。長さ25.2～33.9cm、幅13.4～16.6cm、高さ6.2～8.5cmと大形で、重量は1170～3370g（平均1844g）ある。外面にはヘラナデの下に縄目を残すものがあり、内面にはC・D類の吊り紐痕が見られる。

コビキBの丸瓦**1377～1380**は74点ある。長さ23.0～28.4cm、幅12.2～14.7cm、高さ4.8～7.4cmと小ぶりで、重量は765～1455g（平均1061g）を測る。内面には莫産状の粗い布目に加えて棒状工具による叩きが見られる。

平瓦（第128・129図、図版35）

平瓦は多量に出土しているが全形を知り得るものは少なく、一辺長を計測できるものでも27点を数えるにすぎない。

上層から出土した平瓦**1385・1386**は、長さ25.4～27.8cm、幅22.1～22.8cmと小ぶりで、厚さは1.6～1.7cmと薄く、弧の深さは2cmと浅い。

これに対し下層の平瓦**1388～1394**は、長さ27.3～32.1cm、幅22.5～24.8cmと大形で、厚さは1.6～2.2cmと厚く、弧の深さは3cmと深いものがある。

鳥衾（第123図、図版33）

鳥衾には右三巴の**1333・1337**、左三巴の**1336**、木瓜の**1334**、五七桐の**1335**がある。いずれも瓦当の周縁幅は一定であるが、**1335**を除いて反りが強くやや新しい様相を示す。完形の**1333**はコビキBの丸瓦を用いており、二つの釘穴が見られる。

獅子口（第123図、図版33）

1339～1342は獅子口と見られるもので、右三巴の**1339～1341**と左三巴の**1342**がある。このうち下層（整地土）から出土した**1340**には金箔が残る。

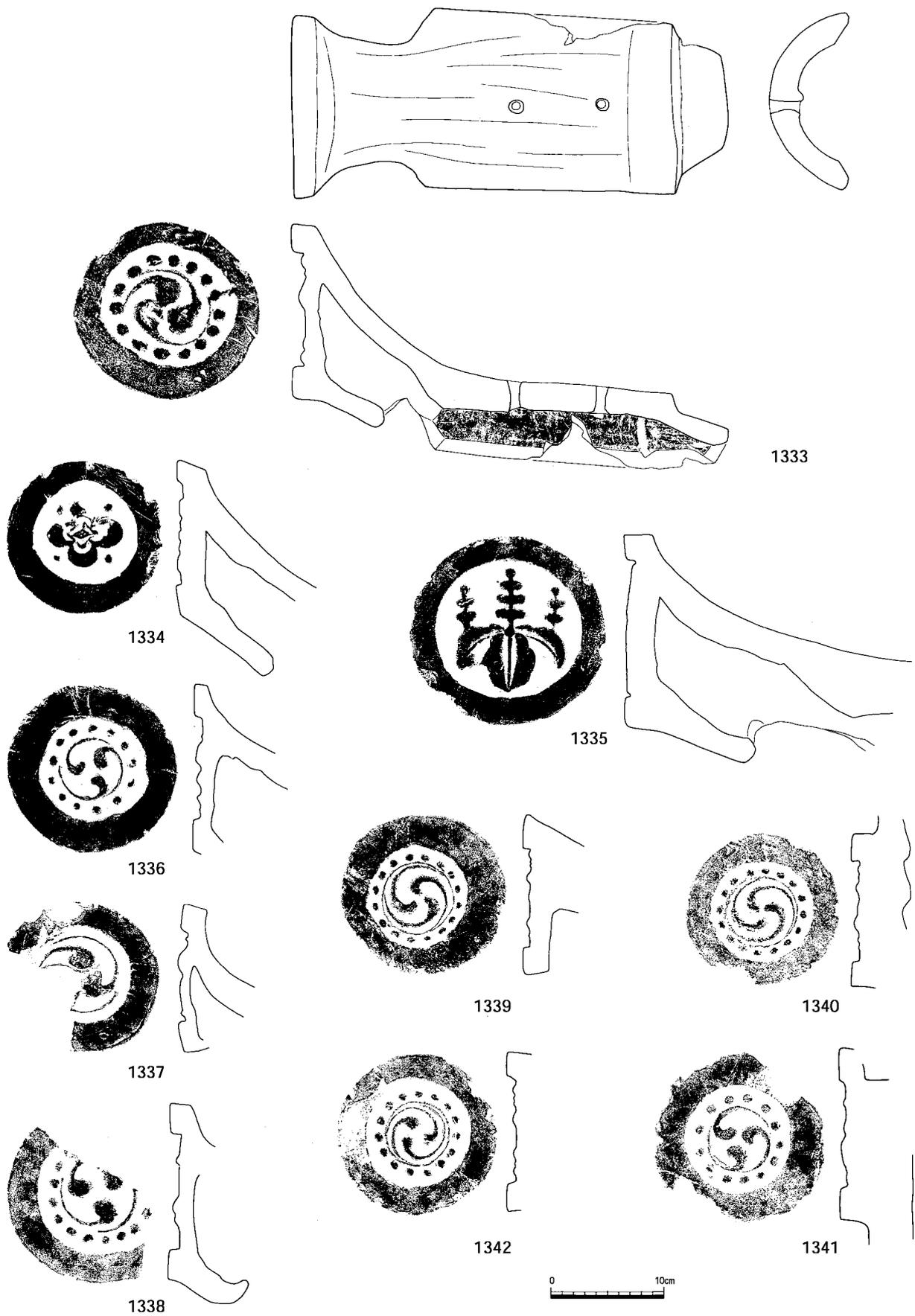
鯨（第123図、図版29）

1343は大形の鯨の一部で、腹部を段形に表し、鱗を馬蹄形の刺突で表現する。**1344・1345**は背面を省略した杓形の鯨で、総高30cmほどに復元される。

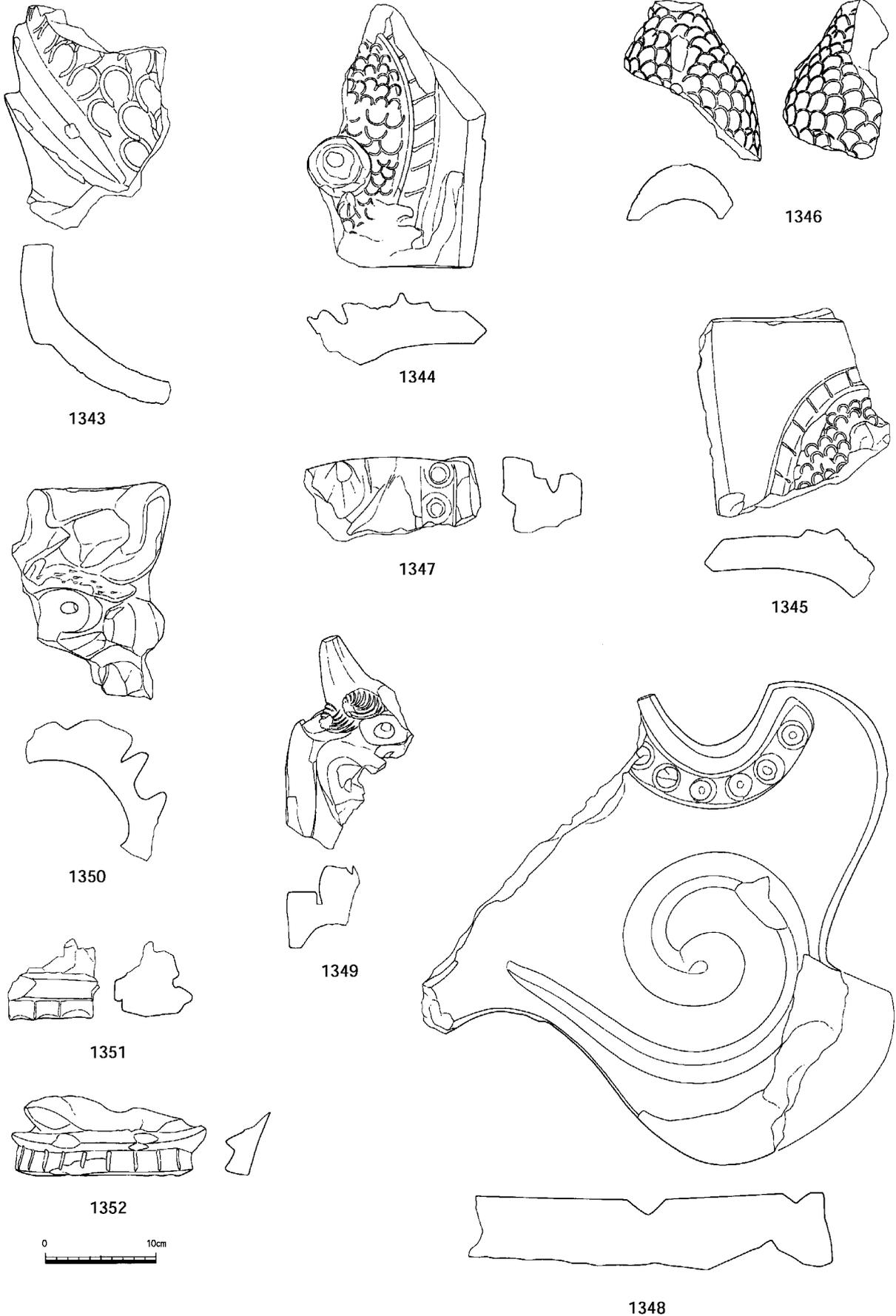
鬼瓦（第124～126図、図版29～32）

鬼瓦には鬼面を表すもののほか、揚羽蝶の**1357**、巴文の**1358・1361**、木葉の**1356・1359・1360・1366・1367**、木槌の**1362**、宝珠の**1363**などがある。これらは地板の裏面を粗く削りこむものばかりで、箱形につくるものはない。また、裏面の中央を削りこみ把手をつくりだすものが多い。

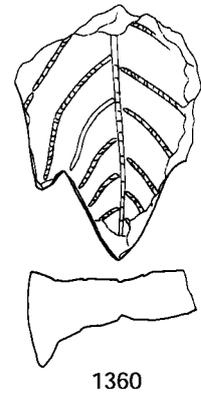
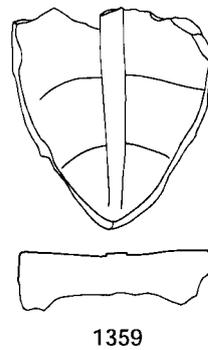
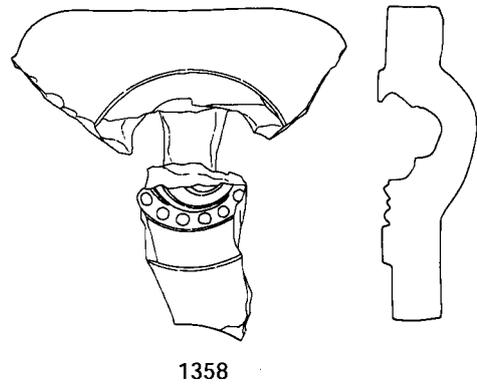
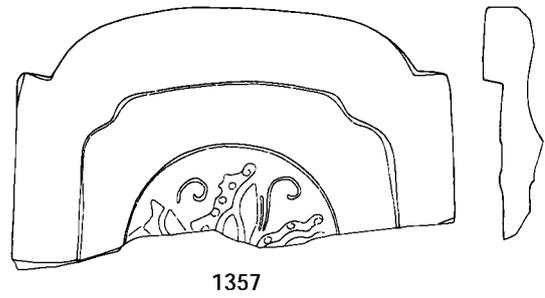
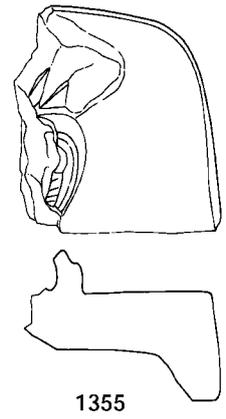
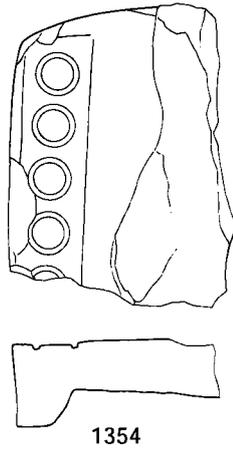
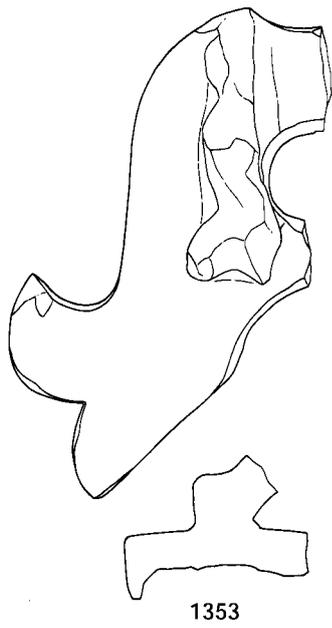
1350・1352・1353は、地板にアーチ形に高く盛り上げた鬼面を貼り付ける。**1347・1348**は総高



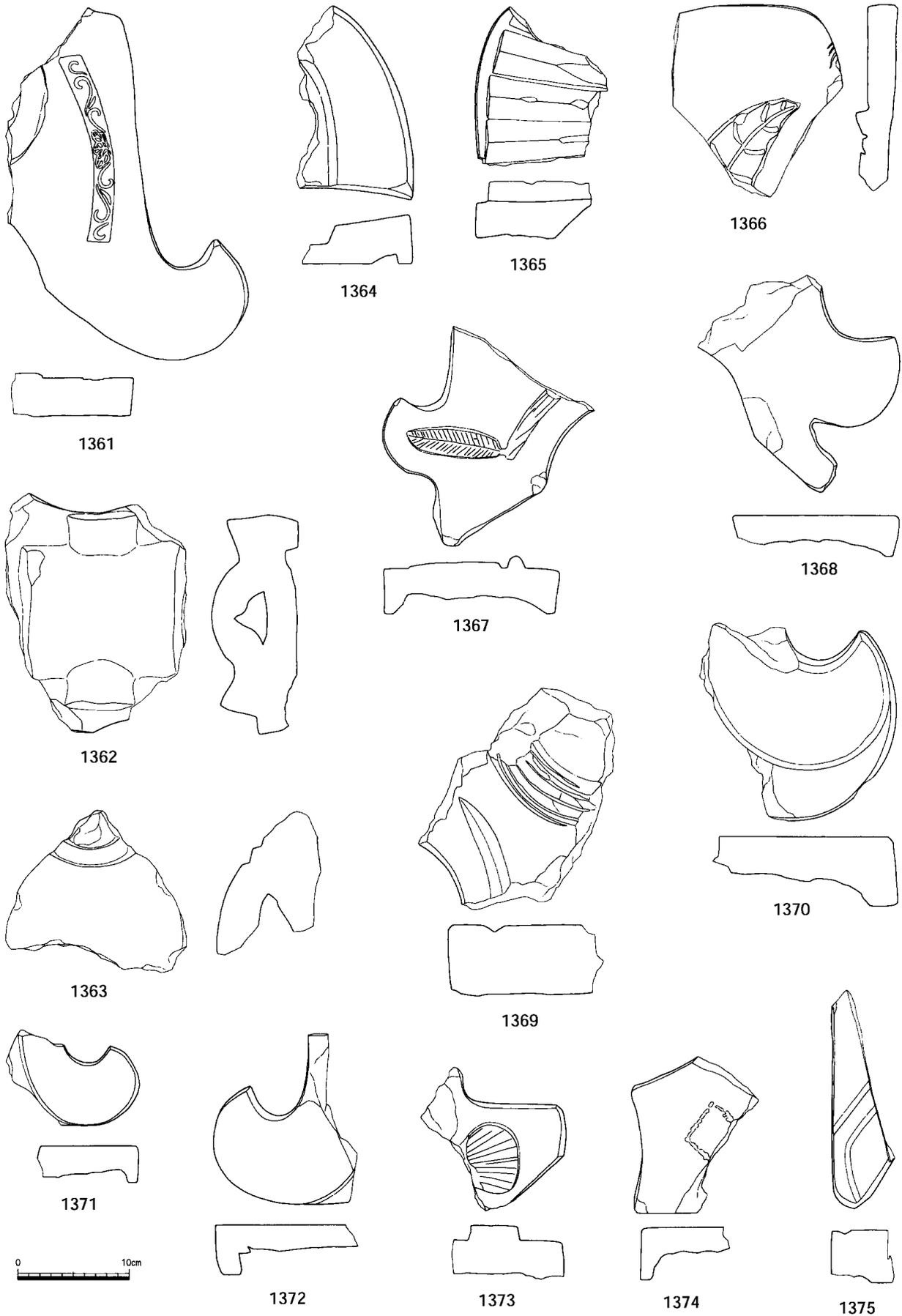
第123図 瓦22 (1/5)



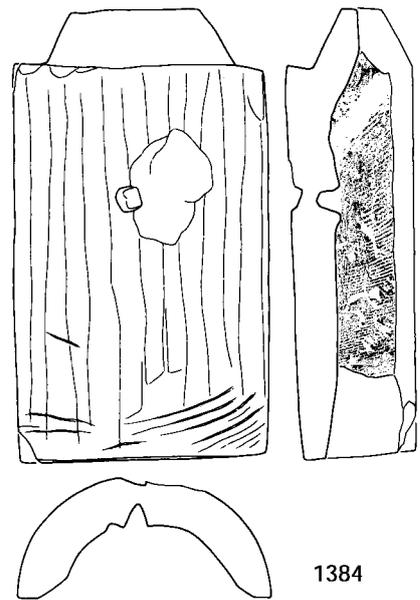
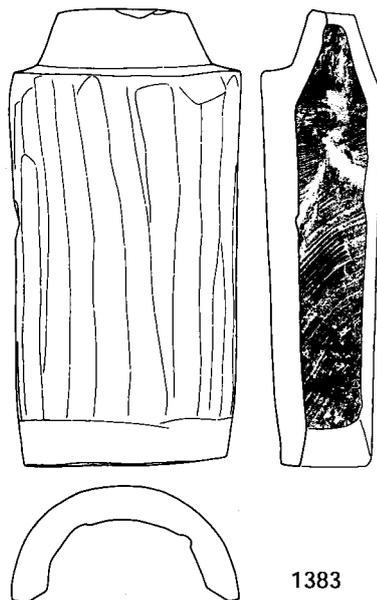
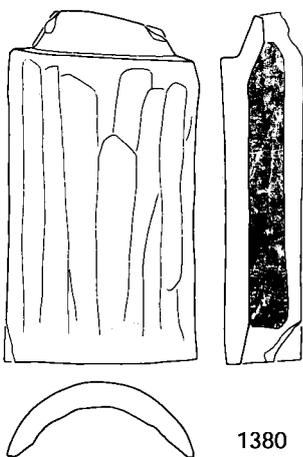
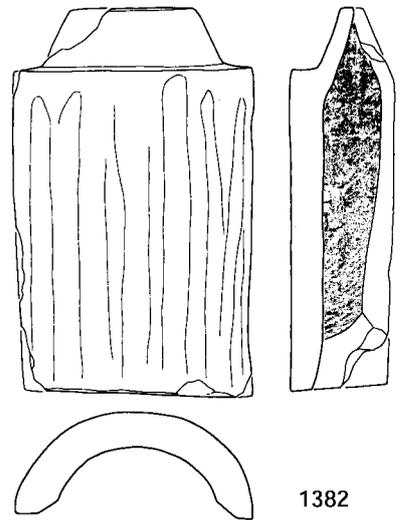
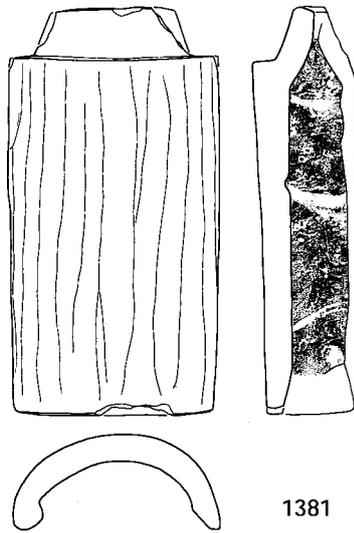
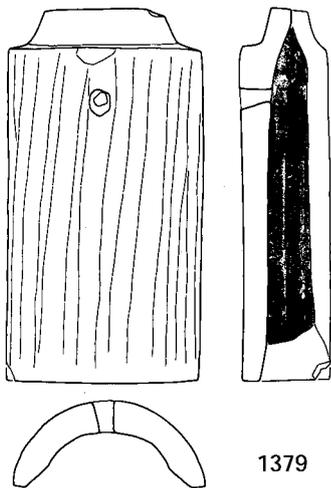
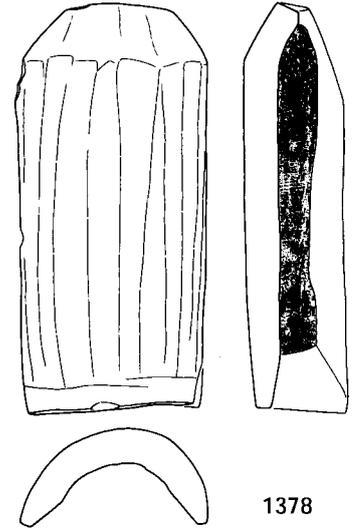
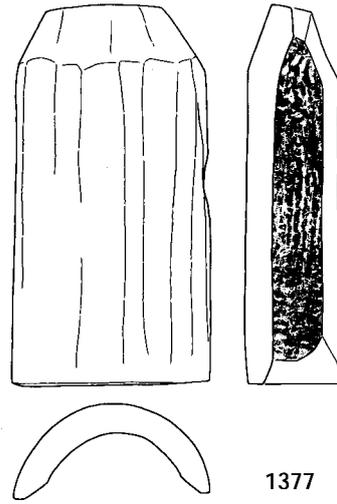
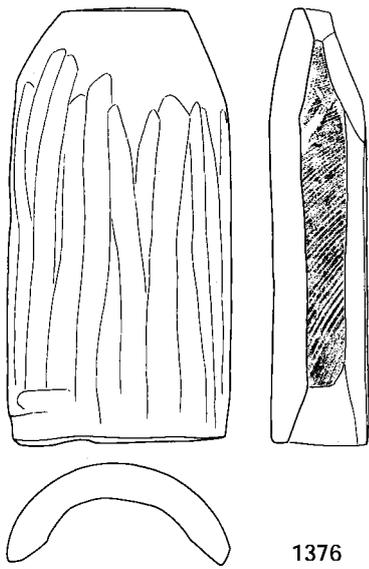
第124図 瓦23 (1/5)



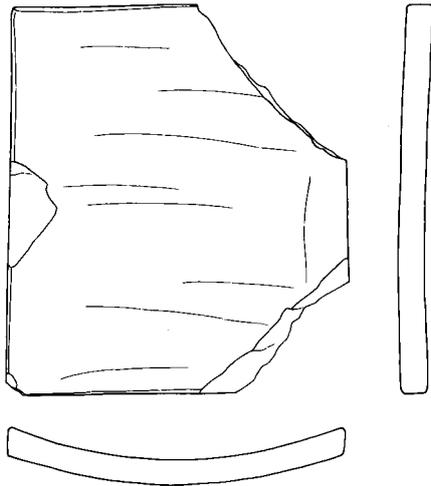
第125図 瓦24 (1/5)



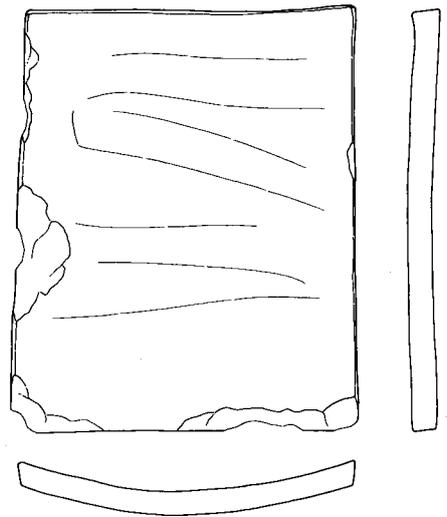
第126図 瓦25 (1/5)



第127図 瓦26 (1/5)



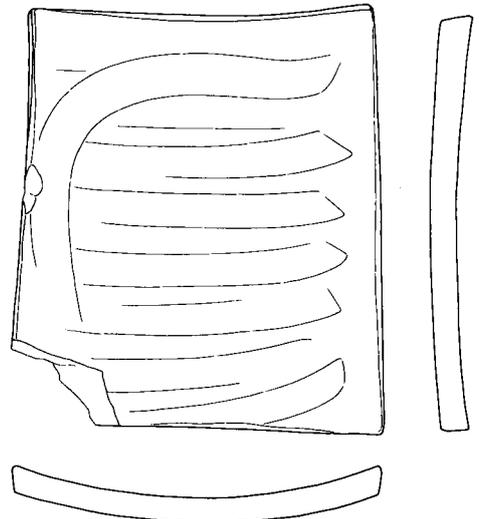
1385



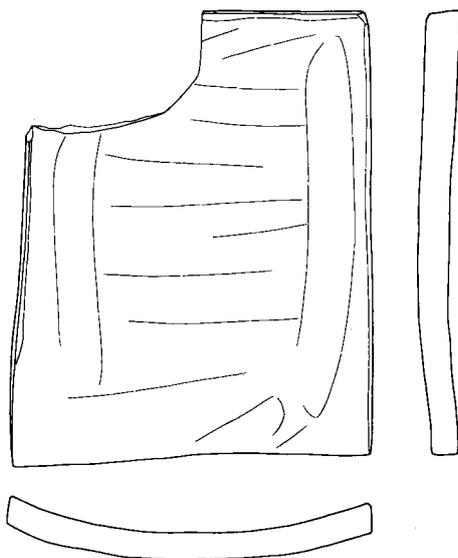
1386



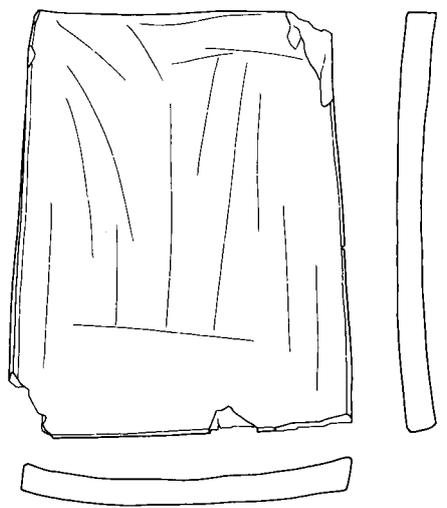
1387



1388



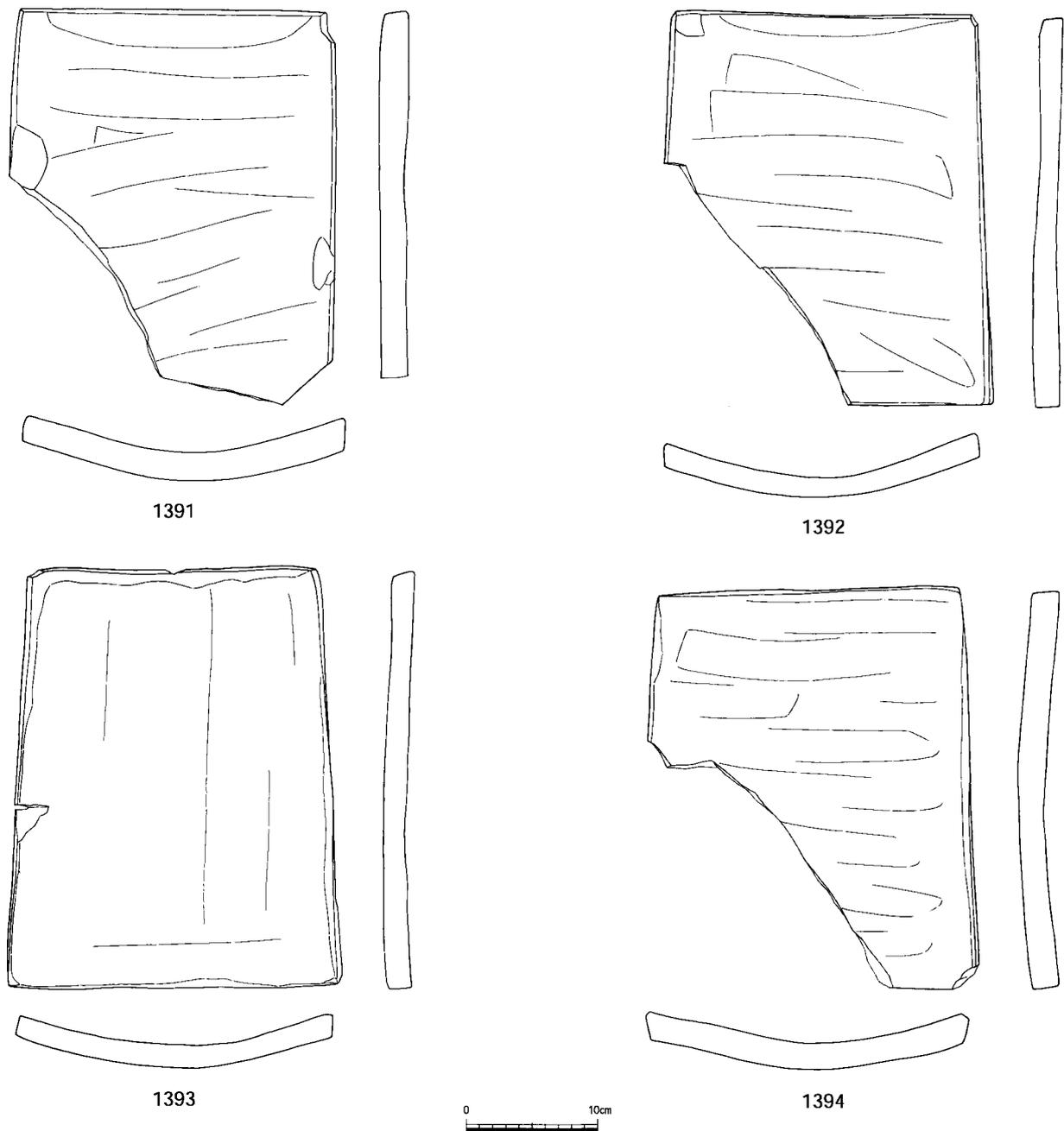
1389



1390



第128図 瓦27 (1/5)



第129図 瓦28 (1/5)

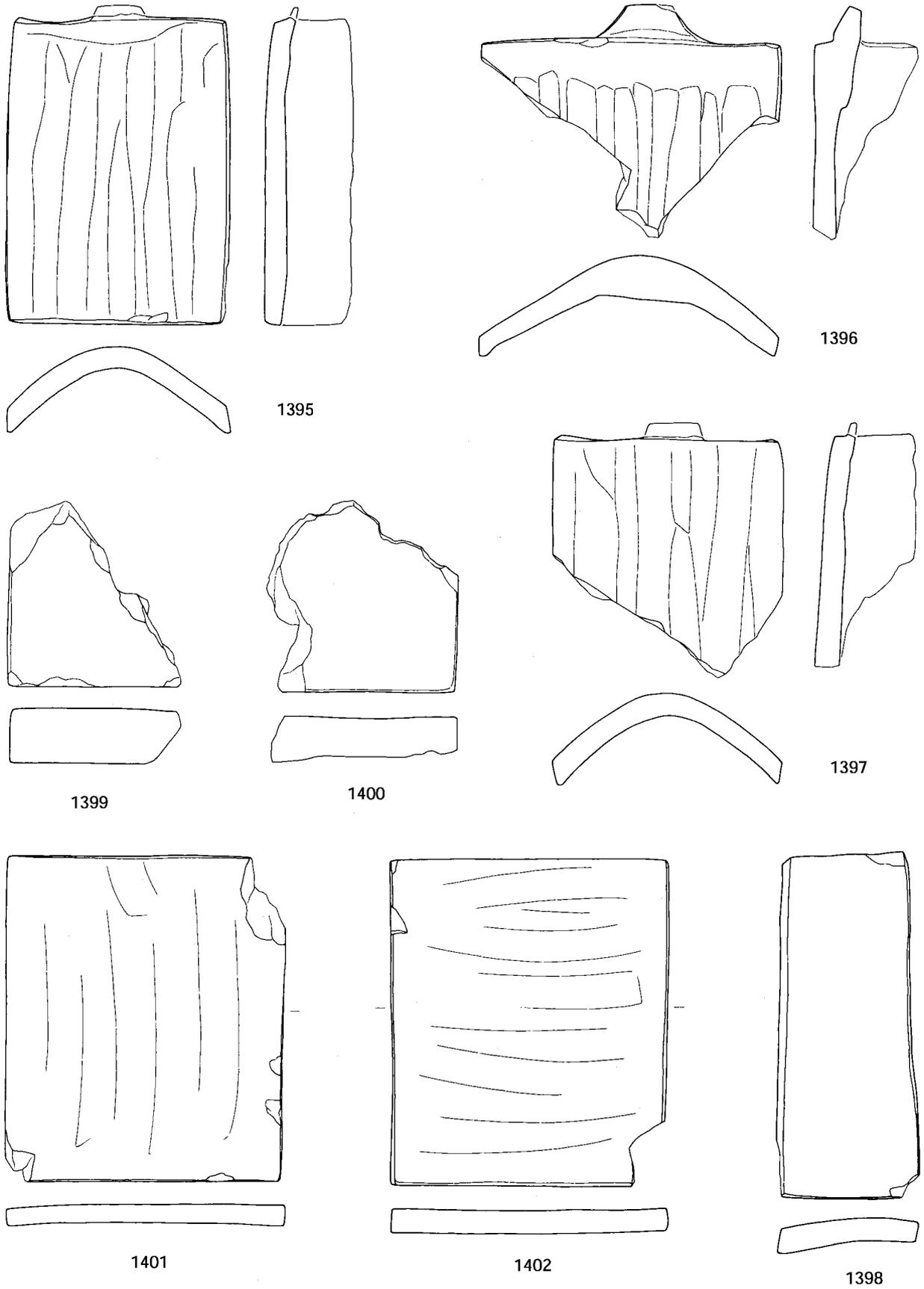
60cmほどある大棟用の鬼瓦で、厚い地板に粘土を貼り付けて鬼面をつくる。揚羽蝶を飾る**1357**は薄い地板の頂部を二段につくり裏面に把手を貼り付ける。巴文と見られる**1361**は突線で表す逆桐の左右に三転する唐草を配した范型を押す。

雁振瓦 (第130図、図版36)

雁振瓦には幅19.5~20.4cmで小ぶりの玉縁をもつ**1395・1397**と幅26.0cmで大きい玉縁をもつ**1396**とがあり、前者ではコビキA、後者ではコビキBが観察される。

熨斗瓦 (第130図、図版36)

長さ30.3cm、幅12.1cmあり、ちょうど平瓦を半裁した形状をとる。



第130図 瓦29 (1/5)

敷瓦（第130図、図版36）

敷瓦には厚さ4.9cmの**1399・1400**と厚さ1.7～2.1cmの**1401・1402**がある。堀から出土した後者は長さ28.5～28.8cm、幅23.8～24.3cm、重量1,820～2,320gを測り、平瓦とほぼ同大である。

（9）木製品

杯・椀（第131・132図、図版37）

杯・椀は83点出土しているが、このうち37点を図示した。**1403・1404**は内外面赤漆で仕上げた薄手の杯で、**1404**は口径9.4cm、器高3.2cmを測る。**1405～1409**は厚手につくられた杯で、口径10.0～10.9cm、器高3.0～4.0cmを測る。いずれも外面黒、内面赤漆で仕上げており、**1405・1407**には漆絵を施す。

椀は3つに分類した。口径12.1～12.8cm、器高3.0cmのA類**1410・1411**は器高の低い椀で、内外面を赤漆で仕上げる。B類は口径12.4～14.0cm、器高5.2～6.3cmを測り、外面黒、内面赤漆で仕上げるものが多いが、薄手の**1413・1415**は外面も赤漆で仕上げている。口径12.8cmのC類**1425**は、直立する口縁部の中ほどに突帯をめぐらしたいわゆる平椀で、内外面を黒漆で仕上げる。口径13.4～14.6cm、器高8.1～10.0cmを測るD類**1426～1439**は、厚手につくられた深い椀と高い高台からなる。外面黒・内面赤漆で仕上げるものが大半で、草花文や丸紋などの漆絵を施す。

杓子・籠（第133図、図版37）

杓子・籠は12点出土している。杓子には長さ18.3cm、幅6.6cmの**1440**、長さ12.6cm、幅2.9cmの**1441**がある。**1442**は先端を尖らせた籠で「守貞謄稿」にある蒲鉾板に似るが、赤色顔料が付着しておりベンガラ塗布の際に用いられたものと思われる。籠**1443～1449**は長さ18.0～24.9cmと様々であり、味噌を練り飯をよそうなど様々な用途が想定される。

箸（第133図、図版37）

箸は完存するもので362点ある。いずれも白木でつくられており、長さは22～29cmあるが24cm（8寸）に集中する。**1451～1459**は寸胴箸で端部が細くなるものもあるが、太く短かめにつくられた両口箸**1450**のように意識的に尖らせているものはない。

栓（第133図、図版37）

栓は15点出土した。長さ8cm前後、径2～3cmほどで、頭部に紐孔を開けるものが多い。

曲物（第133図、図版37）

曲物は25点ある。径7cmの**1465**から16cmの**1469**までであるが、**1468**のように径12cm（4寸）のものが最も多く、径15cm（5寸）の**1466・1467**や10cm（約3寸）のものがこれに次ぐ。このうち、小形の**1465**には樹皮を綴じたつまみが設けられており、小形の容器の蓋と考えられる。

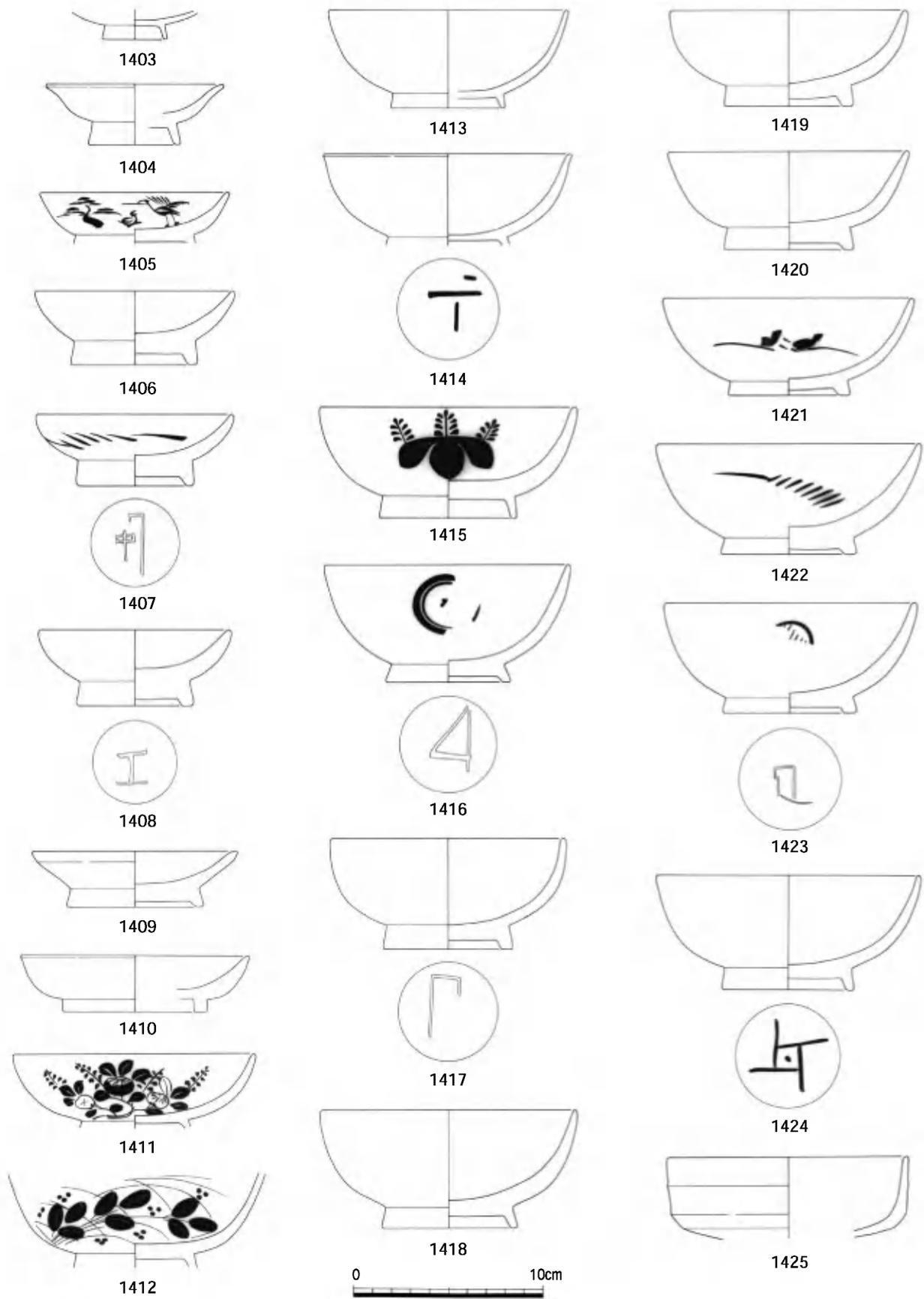
折敷（第134図、図版40）

折敷の底板のうち、一辺長が分かるものは12点ある。これらは、幅30～33cm（1尺～1尺1寸）の大形**1473・1474**と22～27cm（7～9寸）の中形、10cm（3寸5分）の小形**1475**に分けられる。このうち**1473・1474**は黒漆塗りで、**1273**には菖蒲の漆絵が施されている。

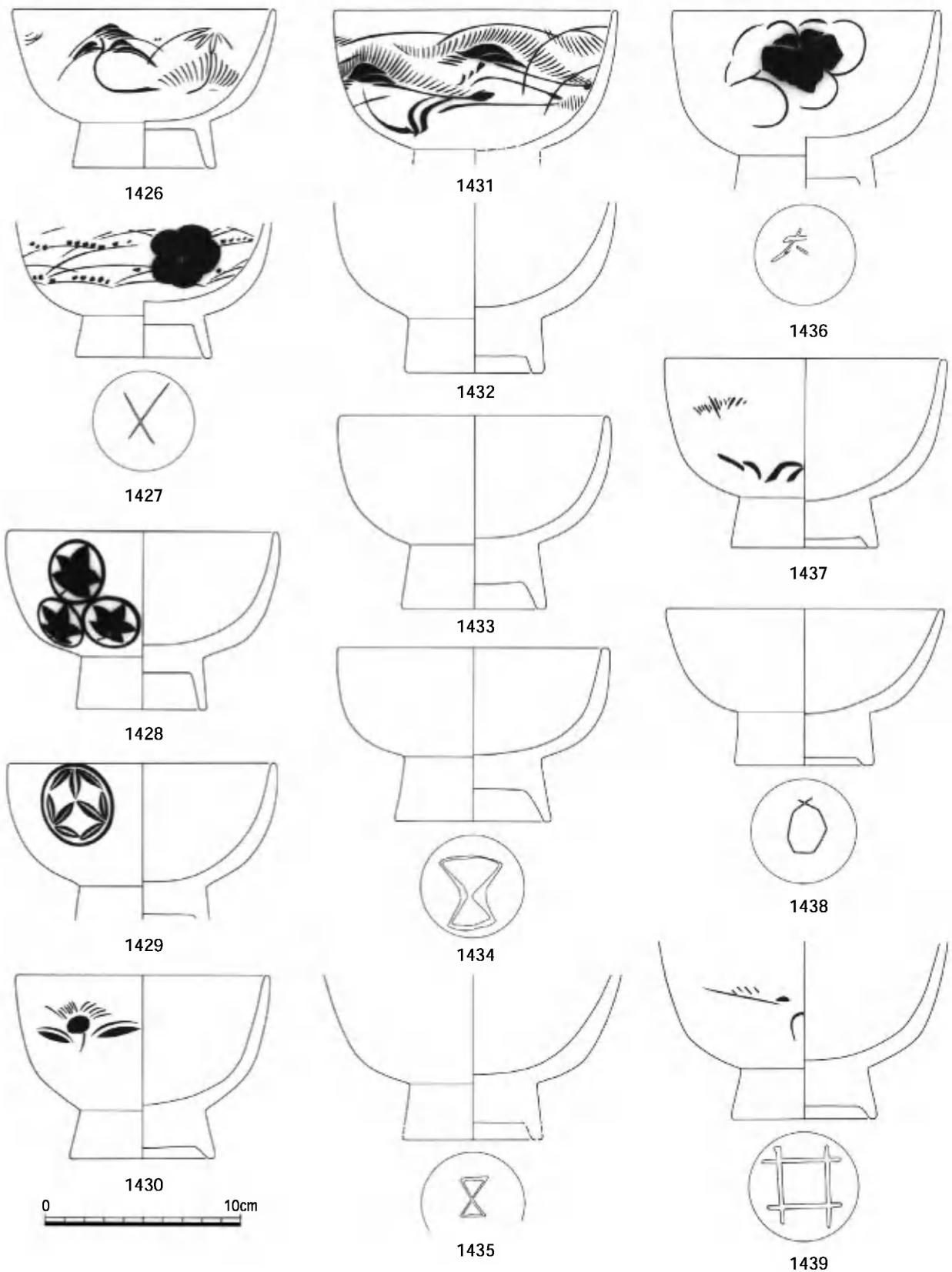
1476～1479は折敷の足板である。長さ19～22cmの**1476・1477**と25cmの**1478・1479**があり、11の組立て痕から見て、それぞれ中形と大形の折敷に付属するものと思われる。

墨書木製品（第135図）

墨書のある木製品は12点ある。このうち**1489～1492**は堀から出土した。長さ3.3cm、幅2.2cm、厚

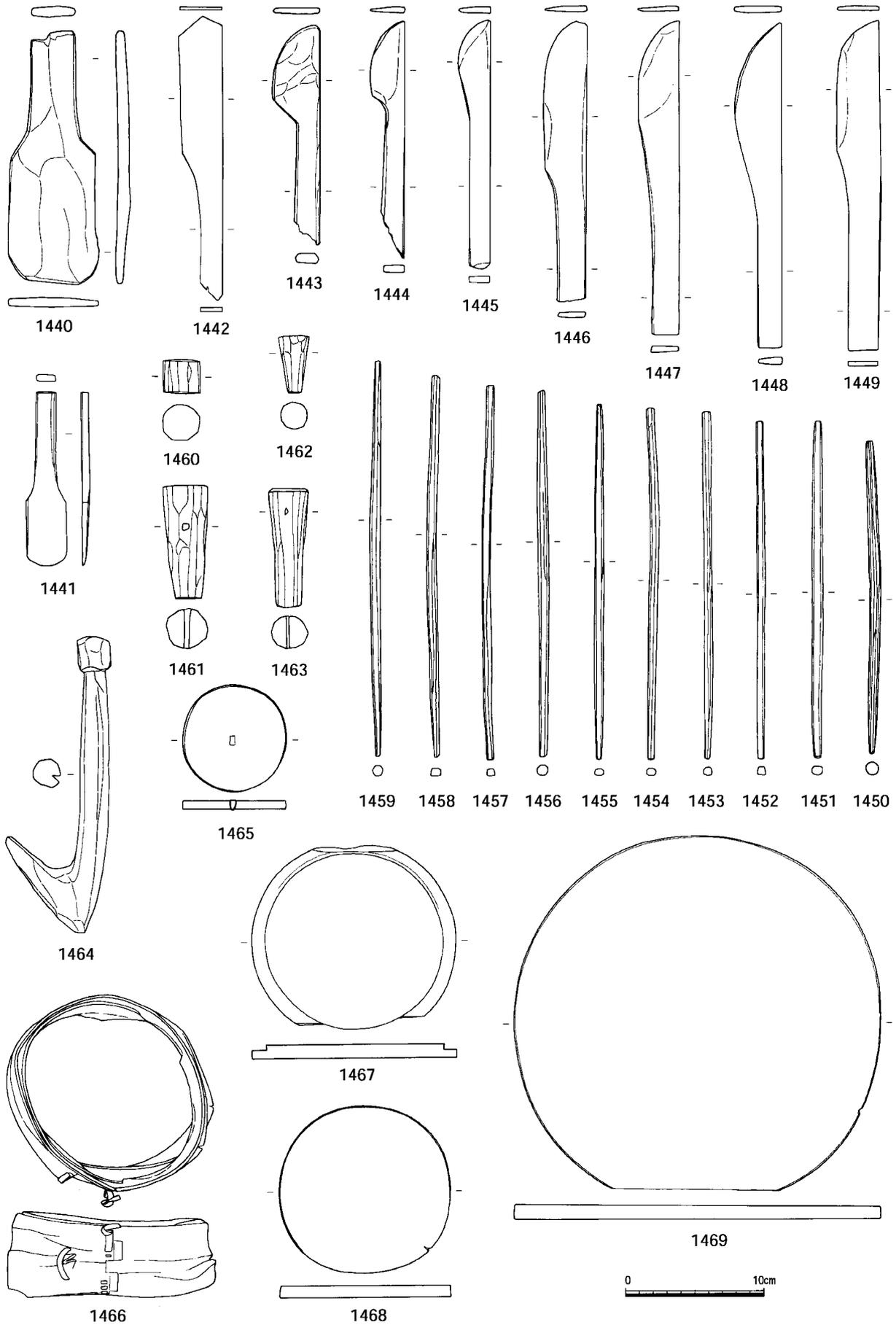


第131図 木製品1 (1/3)

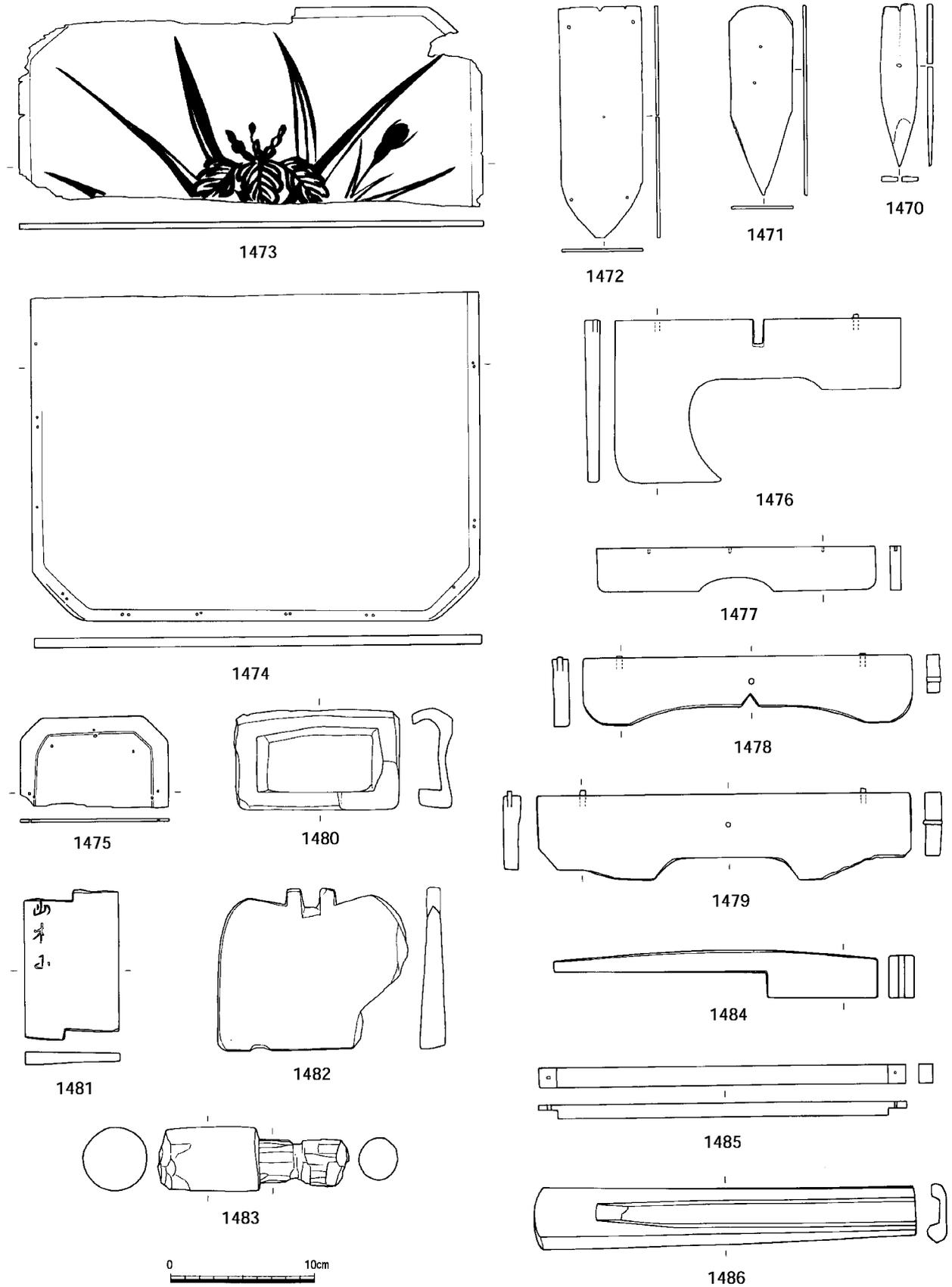


第132図 木製品2 (1/3)

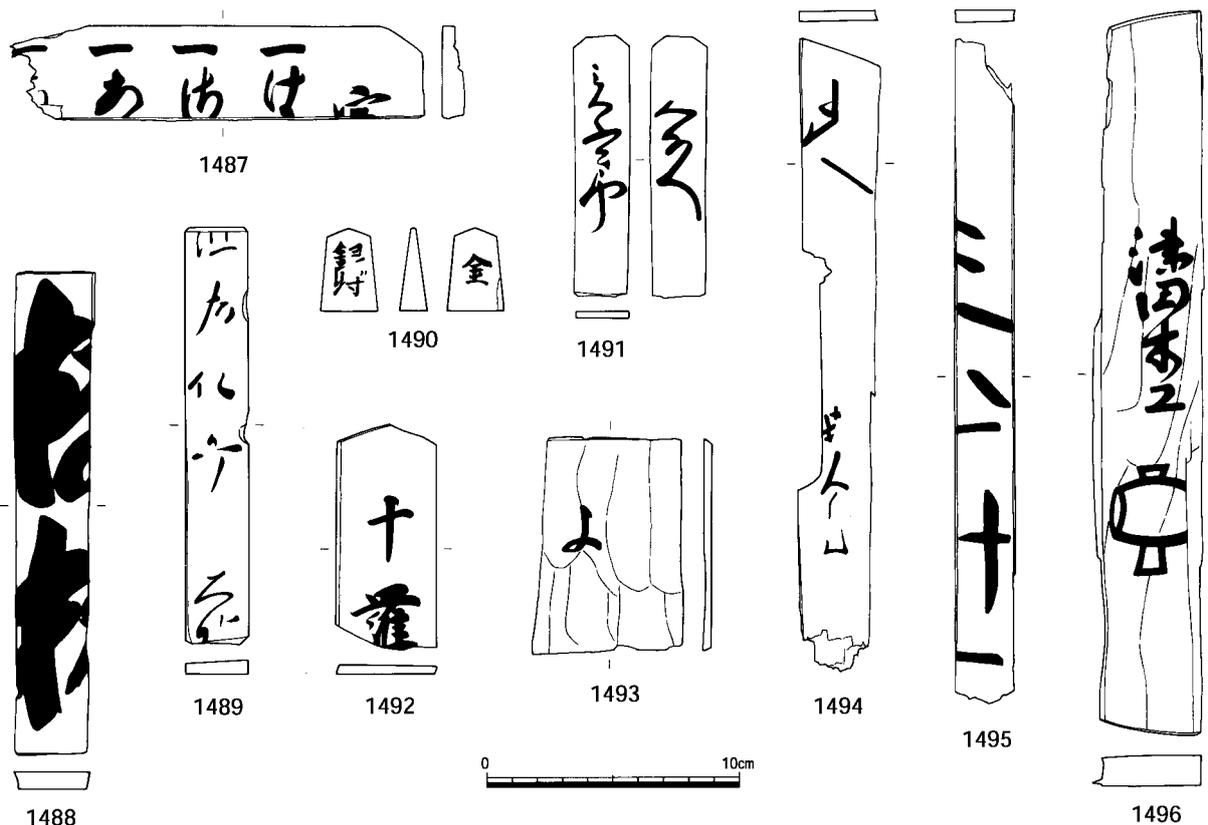
さ1.1cmある**1490**はいわゆる水無瀬駒で、表に「銀将」、裏に「金」の墨書がある。幅4.0cmの**1492**は圭頭をなす木札で「十羅」とあり、**1489**とともに日蓮宗関連の遺物と見られる。土壙63から出土し



第133図 木製品 3 (1/4)



第134図 木製品4 (1/4)



第135図 木製品5 (1/3)

た長さ29.0cmの**1496**は桶の底板と見られ、「津田木工」の下に木槌が描かれている。

下駄 (第136・137図、図版40)

下駄は21点出土しており、丸形と角形があるが、いずれも後歯の前に鼻緒の孔を穿つ。**1497**～**1504**は丸形の連歯下駄で、長さ21.2～21.3cm、幅7.2～8.9cmと細めの**1497**～**1499**と、長さ18.6～20.7cm、幅9.0～10.5cmと幅広の**1500**～**1504**に分けられる。角形には連歯下駄**1506**と割り下駄**1507**・**1508**があり、長さ21.2～22.1cm、幅8.8～9.0cmを測る。

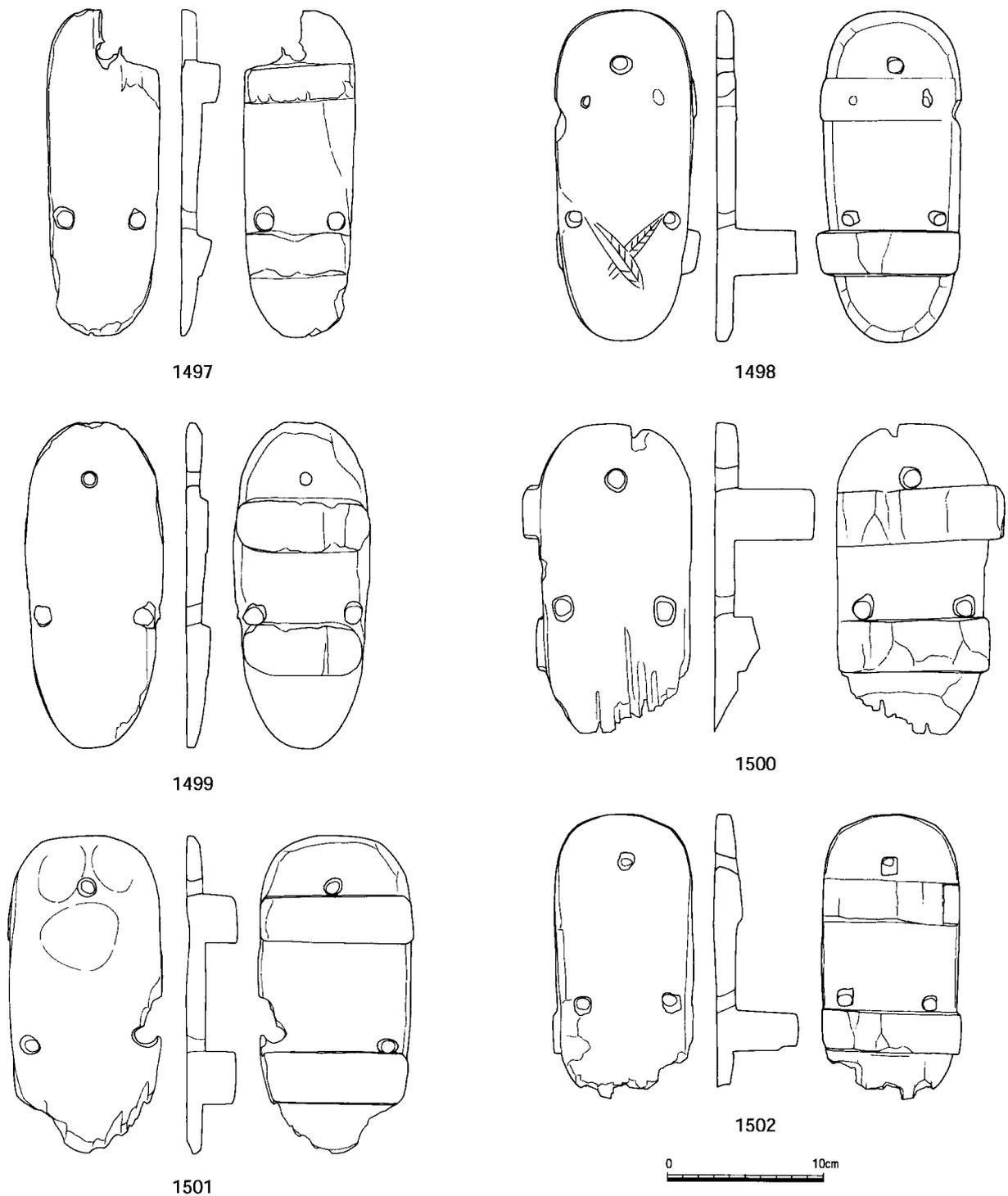
(10) 石製品

石塔 (第138・139図、図版39)

1509～**1527**は、堀の土堤状遺構から出土した26点の一石五輪の一部で、総高53.6～72.8cm、重量11.1～35.1kgを測る。これらは豊島石と呼ばれる凝灰岩の角材を段形に刻みこんでつくり出されており、空輪や水輪には素材の平面を残すなど、砂岩や花崗岩製のものとは比べて粗雑なつくりとなっている。

これらは素材の大きさによって4×4寸の**1509**、5×4寸の**1510**・**1512**・**1513**・**1515**・**1517**・**1520**・**1522**、5×5寸の**1514**・**1524**・**1525**、6×5寸の**1523**・**1527**、6×6寸の**1518**に分けられる。また火輪の形状に注目すると、頂部と軒部が区別してつくられているA類**1518**・**1519**、長方形をなす各面の上面を半円形に凹ませて軒反りを表現するB類**1509**・**1512**・**1513**～**1515**・**1523**～**1527**、凹形の軒反りのみを表現するC類**1510**・**1511**・**1520**～**1522**に分類できる。丁寧なつくりのA類は大形、B類は中形、簡略な表現のC類は小形に多く見られる。

1513・**1526**は妙法蓮華経と墨書され、**1510**の地輪には天正十一年十月廿八日の日付、**1516**・

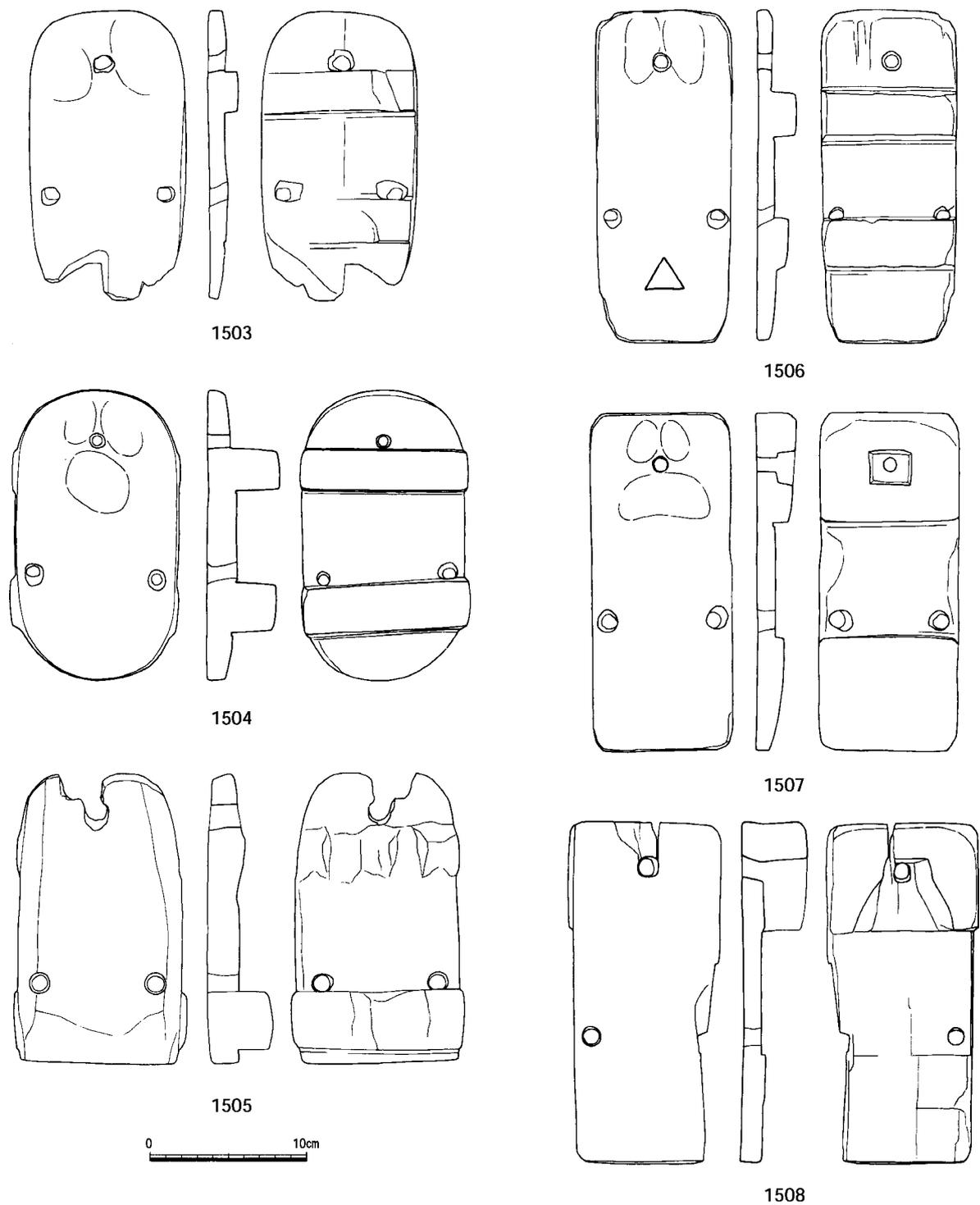


第136図 木製品6 (1/4)

1520では妙口という法号が読みとれる。

硯 (第140・141図、図版40)

1528～1538は黒色ないし灰色を呈する頁岩製の長方形硯で、幅2.4の小形から10cmの大形まである。幅7cm以下のものでは厚さは1cm前後のものが多いが、それ以上のものでは2cmほどの厚さとなる。また、大形の1537では動物をかたどった縁取りが見られる。



第137図 木製品7 (1/4)

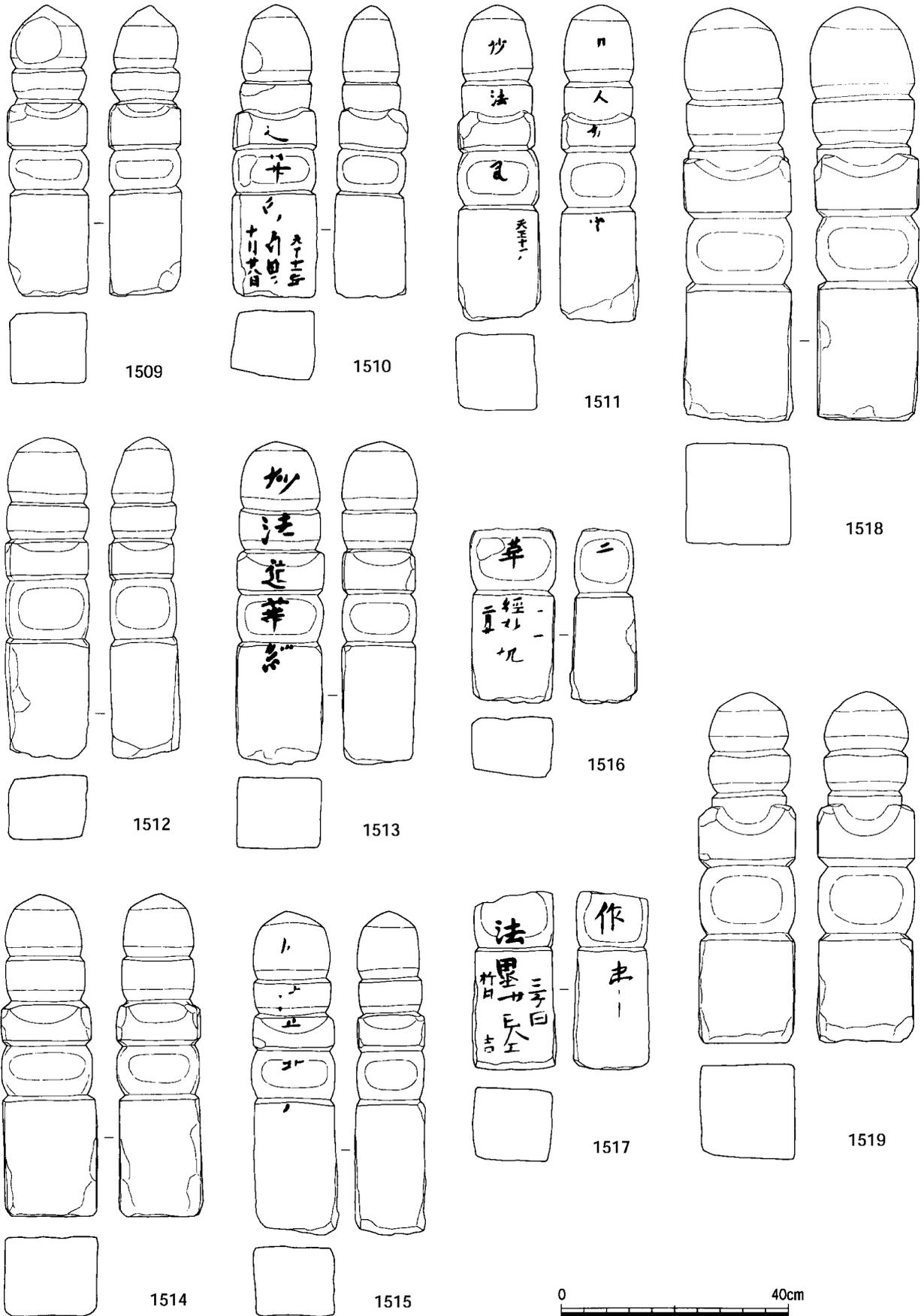
基石 (第141図)

1542・1543は白色をなす流紋岩製の基石で、径2.0~2.2cm、厚さ0.3~0.6cm、重量2.7~3.1gある。

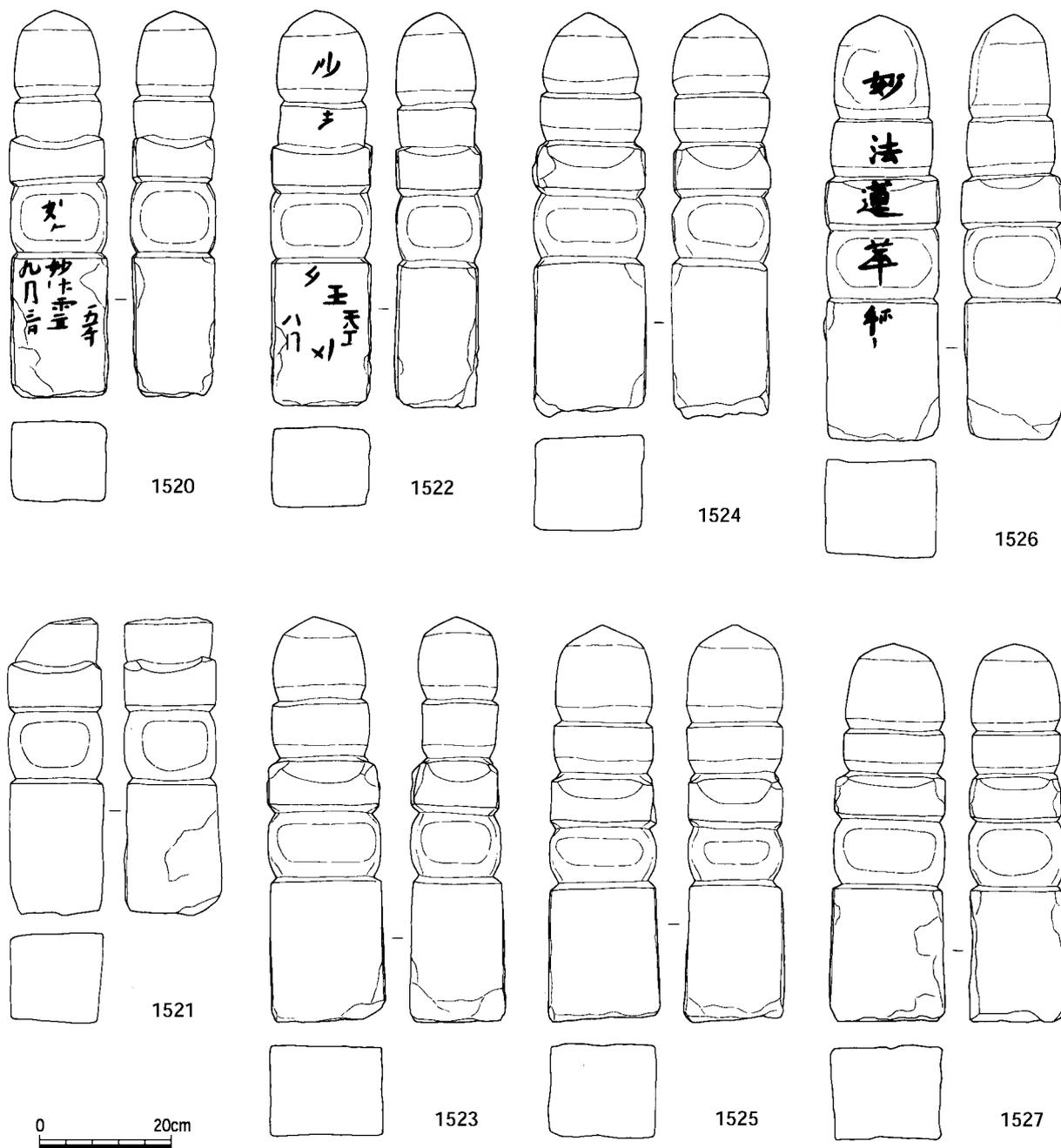
(11) 土製品

土錘 (第141図)

土錘は完存するもので63点出土している。1544は長さ5.5cm、径1.0cmを測る棒状の土錘で、両端



第138図 石製品1 (1/10)

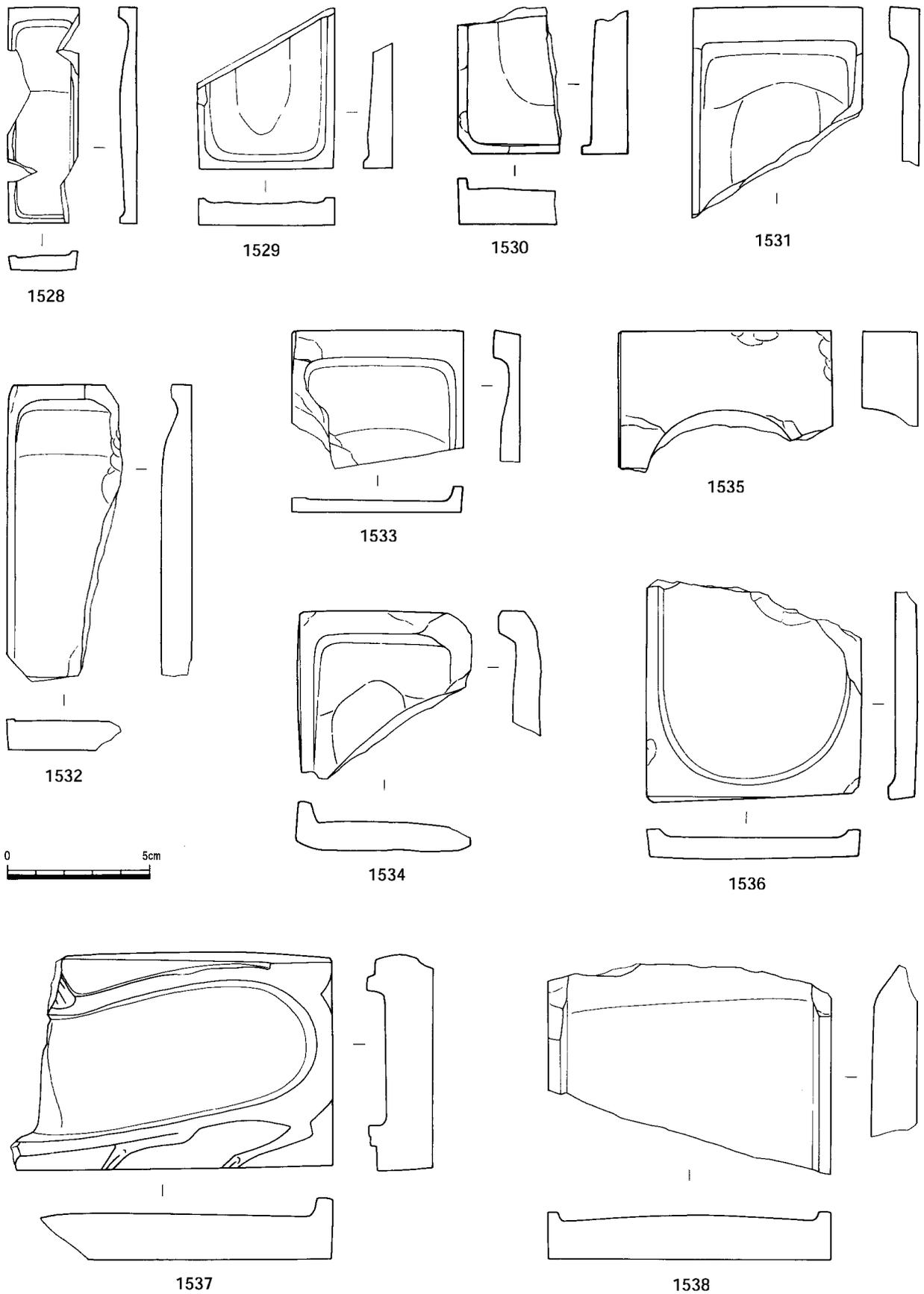


第139図 石製品2 (1/10)

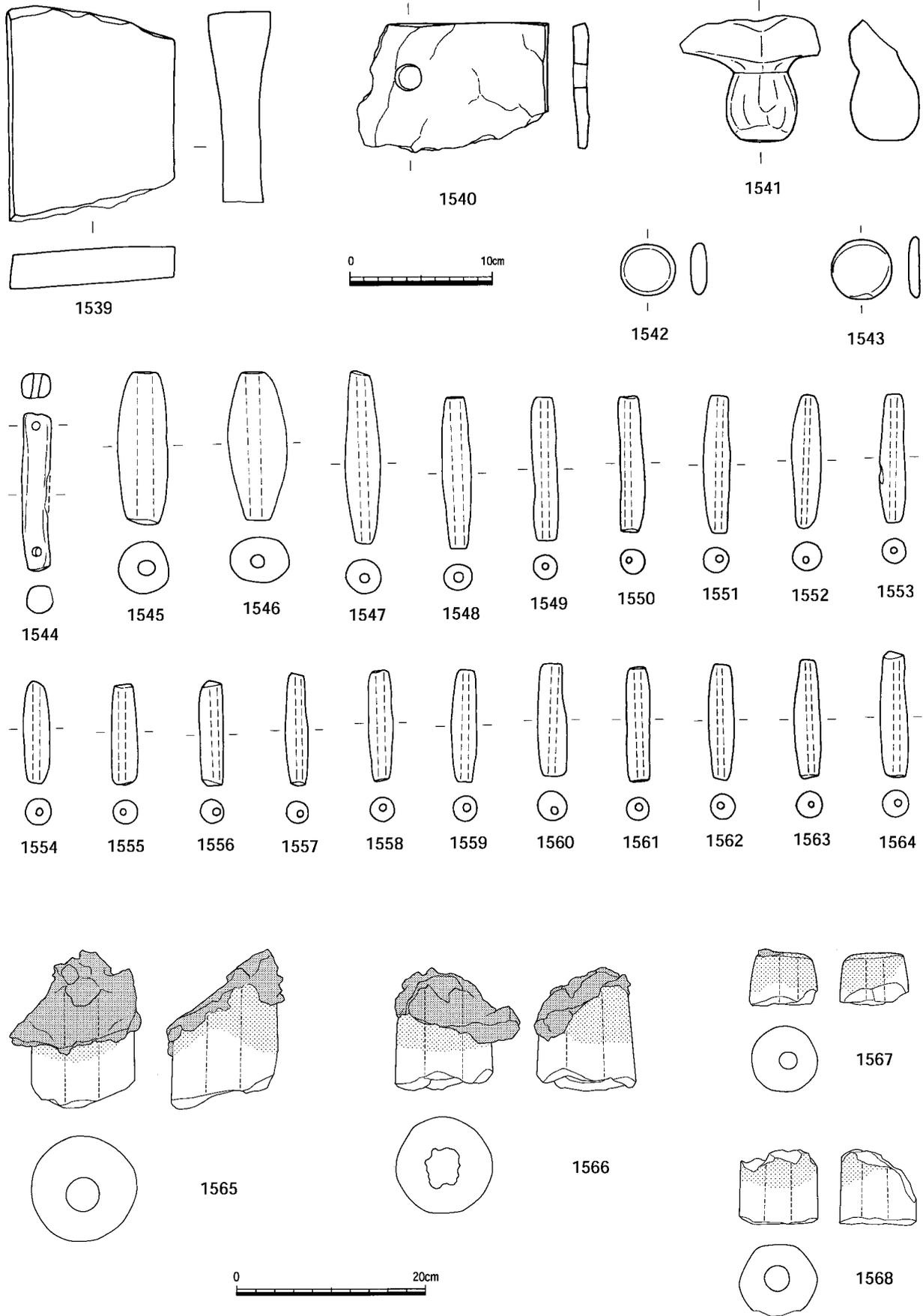
には孔を穿ち、重量は6.9gある。管状の土錘には、長さ5.2~5.9cm、重量14.8~15.5gの大形1545・1546、長さ4.4~6.1cm、重量6.4~9.3gの中形1547、長さ3.5~5.9cm、重量2.3~5.5gの小形1549~1564がある。このうち小形の1549~1564は土壙73から一括出土したものである。

羽口 (第141図)

羽口は下層の整地土や土壙から8点出土している。1565・1566は径10.2~11.7cm、孔径3.7~4.5cmの大形で、先端は熔融して斜面をなす。小形の1567・1568は径7.3~8.3cm、孔径2.0~3.1cmを測り、先端は変色するものの熔融部分は少ない。



第140図 石製品3 (1/2)



第141図 石製品4・土製品(1/2・1/6)

(12) 金属製品

簪（第142図、図版41）

1569は頭部に球形の飾りをつくりだした銅製の簪で、長さ14.2cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmを測り、重量は7.7gある。このほか、ガラスの棒を振った簪の断片が土壙35で出土している。

小柄（第142図、図版41）

小柄は9点あるが、堀から出土した**1571**～**1573**はほぼ全形を知り得る。長さ21.2～21.5cm、刃長11.9～12.4cm、身幅1.2～1.4cmを測り、重量は29～31gある。柄には銅の薄板を巻いており、鑢目のある**1573**には鍍金が施されている。

刀（第142図、図版41）

1575は内堀の埋め立て土から出土した刀で、全長68.7cm、刃長54.3cm、反り1.3cm、身幅2.8cmを測り、茎には目釘孔が残る。

鉞（第142図、図版41）

1576は長さ41.3cm、刃長20.0cm、身幅6.3cmを測る鉞で、柄の先には径5cmほどの円環をつくりつける。

弾型（第142図、図版41）

弾型**1585**は、長さ25.2cm、幅4.0cmの鉞形を呈している。先端には径1cmの球形をなす型をつくり、その合わせ目には径5cmほどの湯口を設けている。

煙管（第143図、図版41）

煙管は、羅宇煙管11点（雁首6点、吸口5点）と延べ煙管1点がある。**1586**～**1589**は羅宇煙管の雁首で、長い脂返しと径1.5cmの火皿からなり、**1589**で長さ6.8cmを測る。**1590**～**1593**は羅宇煙管の吸口で、肩をもつ**1593**ともたない**1590**～**1592**とがある。小口の径は**1590**で1.4cm、**1591**・**1592**で0.9cm、**1593**で1.1cmを測る。

長さ6.0cmの延べ煙管**1594**は、径1.0cmほどの胴に直接火皿を付けた真鍮製で、吸口はわずかに広がる。

金具（第142・143図、図版41）

1577～**1579**は刀装具と見られる銅製の金具である。**1577**は切羽で、長さ4.3cm、幅2.5cmの卵形を呈し鍍金を施す。**1578**は長さ3.0cm、幅1.8cmを測る目貫風の金具で、2筋の刻線がある。

このほか銅金具には、16弁の菊花文を刻む軸先状の**1580**や引手形の**1581**、仏器の蓋**1582**、縁金具と見られる**1584**、頭部の孔に針金が残る鉤形の**1595**、鍍金の残る棒状の**1596**、径0.2cmの銅製のピン**1603**・**1604**などがある。

釘（第143図、図版41）

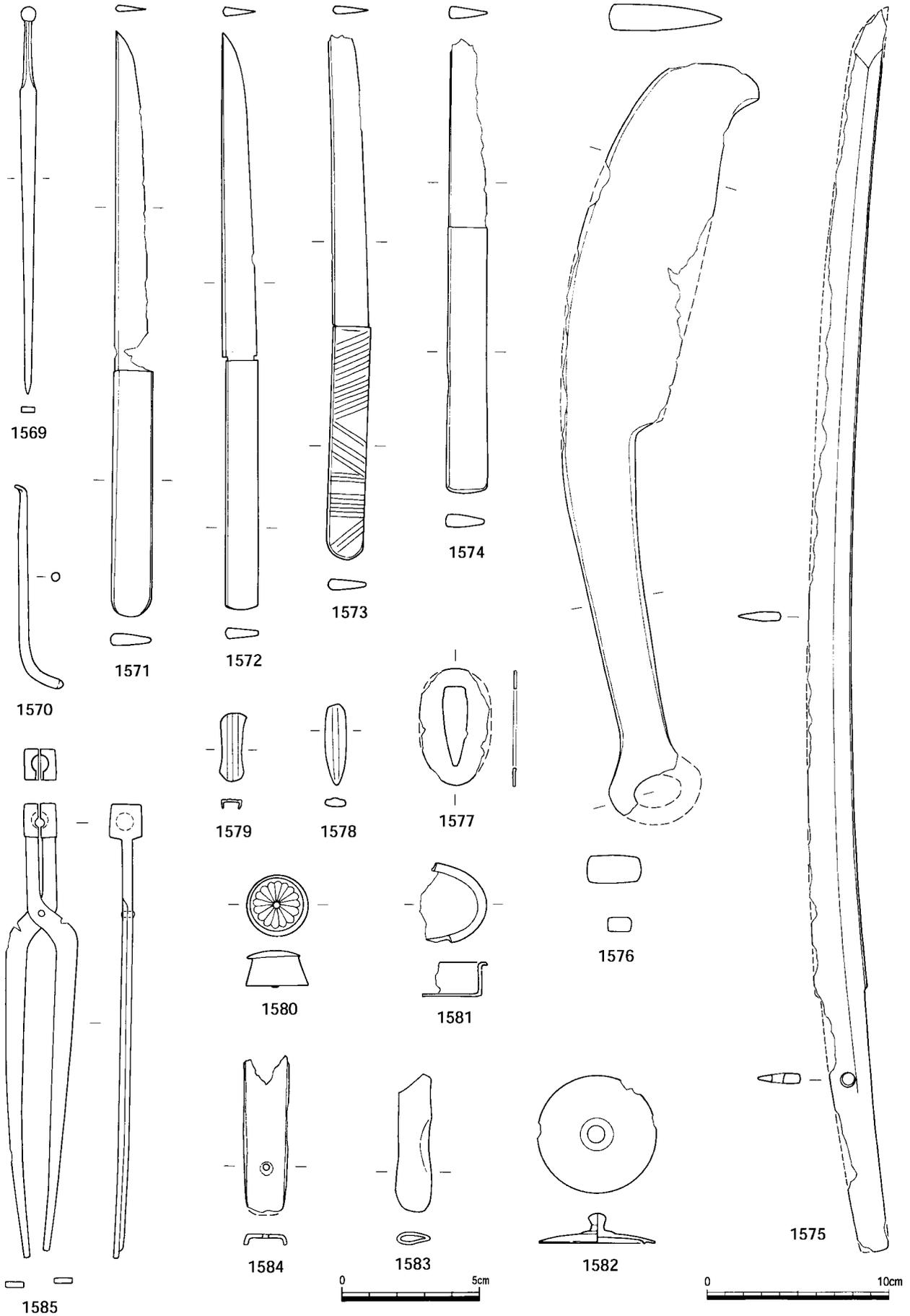
鉄釘は330点出土しており、木製品中に遺存するものもある。多くは**1600**・**1601**のように頭部を打ち延ばした角釘であるが、鋏頭の**1602**などもある。

金箸（第143図）

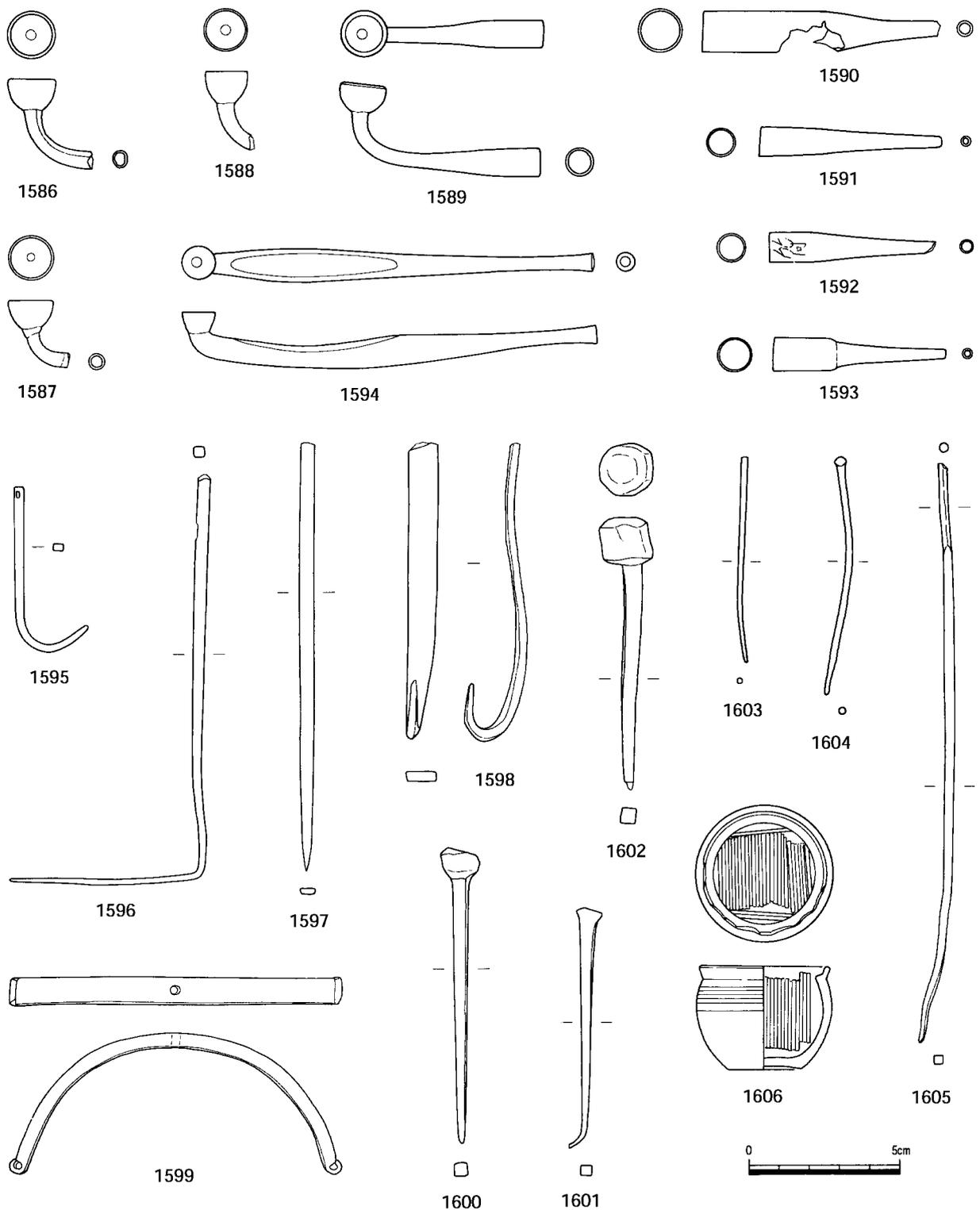
1605は0.6cm角の鉄棒でつくられた長さ29cm以上ある金箸で、頭部は角を潰して丸く仕上げる。

鉸（第143図、図版41）

1599は幅16.4cm、高さ4.3cmの弧状を呈する鉄製の鉸で、両端を曲げて環をつくり、中央に小孔を穿つ。鉸は**1598**のほか3点出土している。



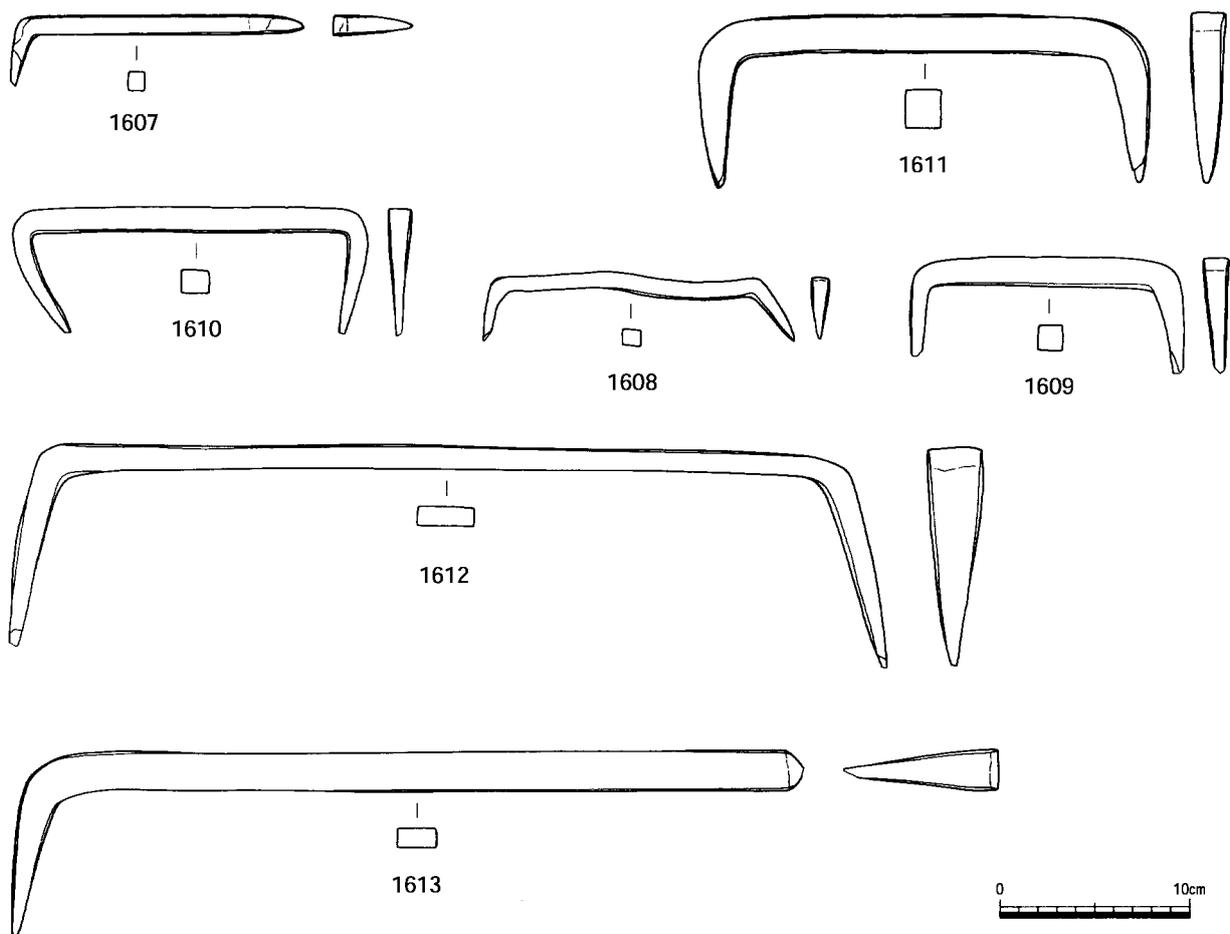
第142図 金属製品1 (1/2・1/3)



第143図 金属製品2 (1/2)

鋸 (第144図、図版41)

20点ある鋸は、いずれも外下馬橋の橋脚周辺で出土したもので、橋の修理・解体にあたって遺棄されたものと思われる。コ字形をなすものと手部が直交方向に曲げられたものがある。また大きさも全長15.2~16.3cm、手部の長さ3.3~4.2cm、重量74~78gの**1607・1608**、全長14.3~18.7cm、手部の



第144図 金属製品3 (1/4)

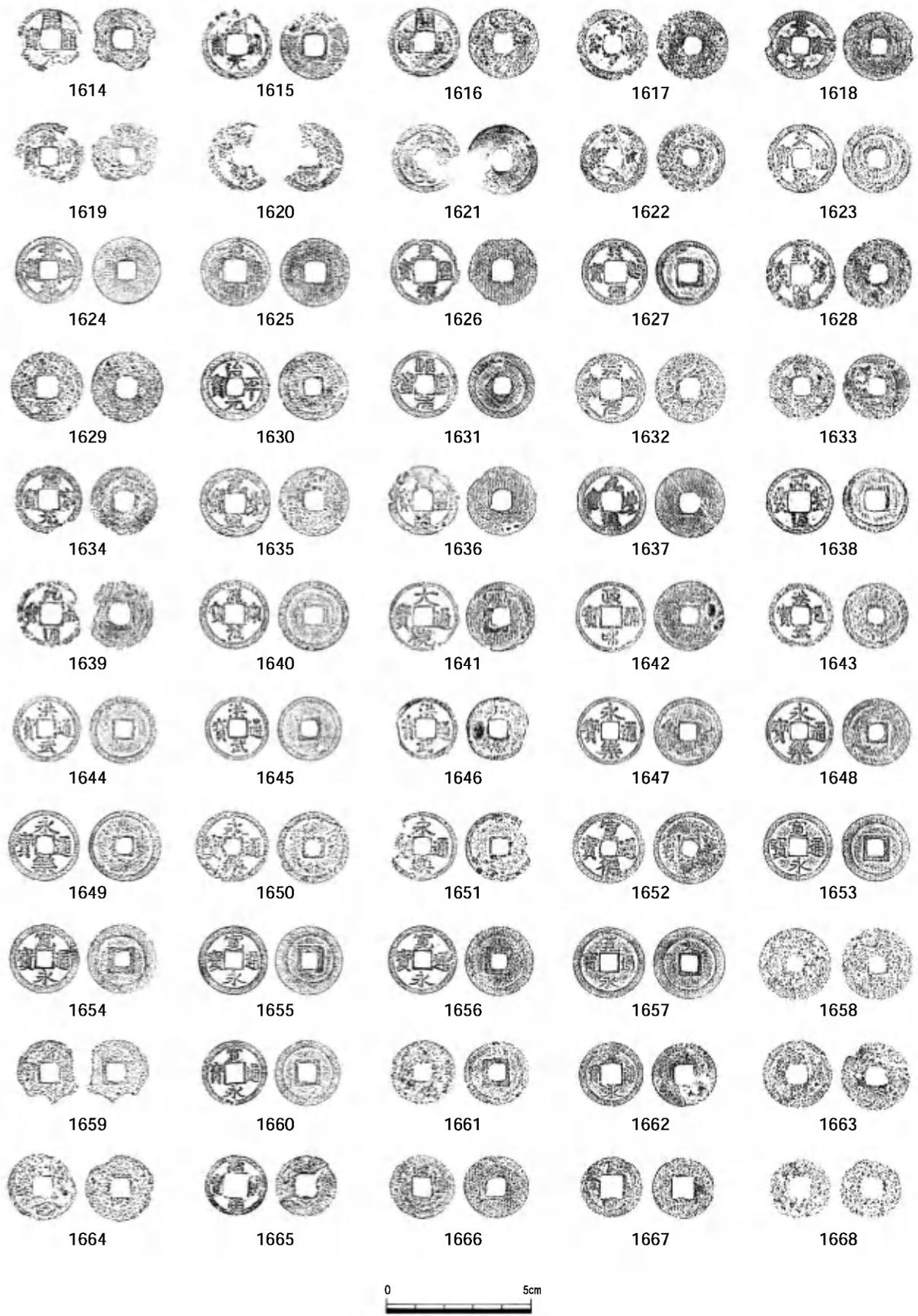
長さ6.2～6.7cm、重量189～248gの**1609・1610**、全長22.2cm、手部の長さ9.2cm、重量705gの**1611**、全長41.4～46.1cm、手部の長さ8.3～11.5cm、重量649～1,140gの**1612・1613**がある。このうち手部の長い**1609～1613**は上層から出土しており、その遺存状況からしても明治時代に取り壊された橋に伴っていた可能性が高い。

銅銭 (第145図、図版40)

銅銭は60点出土しているが、そのうち輸入銭が39点、寛永銭が12点、模鑄銭・無文銭が4点、銭種不明が5点ある。

輸入銭は、**1614～1616**が開元通寶 (唐621年)、**1617**が至道元寶 (北宋995年)、**1618・1624**が景德元寶 (北宋1004年)、**1619～1622**が祥符元寶 (北宋1008年)、**1623**が天禧通寶 (北宋1017年)、**1625～1629**が皇宋通寶 (北宋1039年)、**1630**が治平元寶 (北宋1064年)、**1631～1634**が熙寧元寶 (北宋1068年)、**1635～1637**が元豊通寶 (北宋1078年)、**1640**が聖宋元寶 (北宋1101年)、**1641**が大観通寶 (北宋1107年)、**1642**が政和通寶 (北宋1111年)、**1643～1646**が洪武通寶 (明1368年)、**1647～1651**が永樂通寶 (明1408年)、**1652**が宣徳通寶 (明1433年)である。

寛永通寶は、**1653～1656**が古寛永、**1657**が文銭、**1658～1662**が新寛永である。また、**1665**は元豊通寶の模鑄銭、**1666～1668**は無文の鋳銭である。



第145図 金属製品4 (1/2)

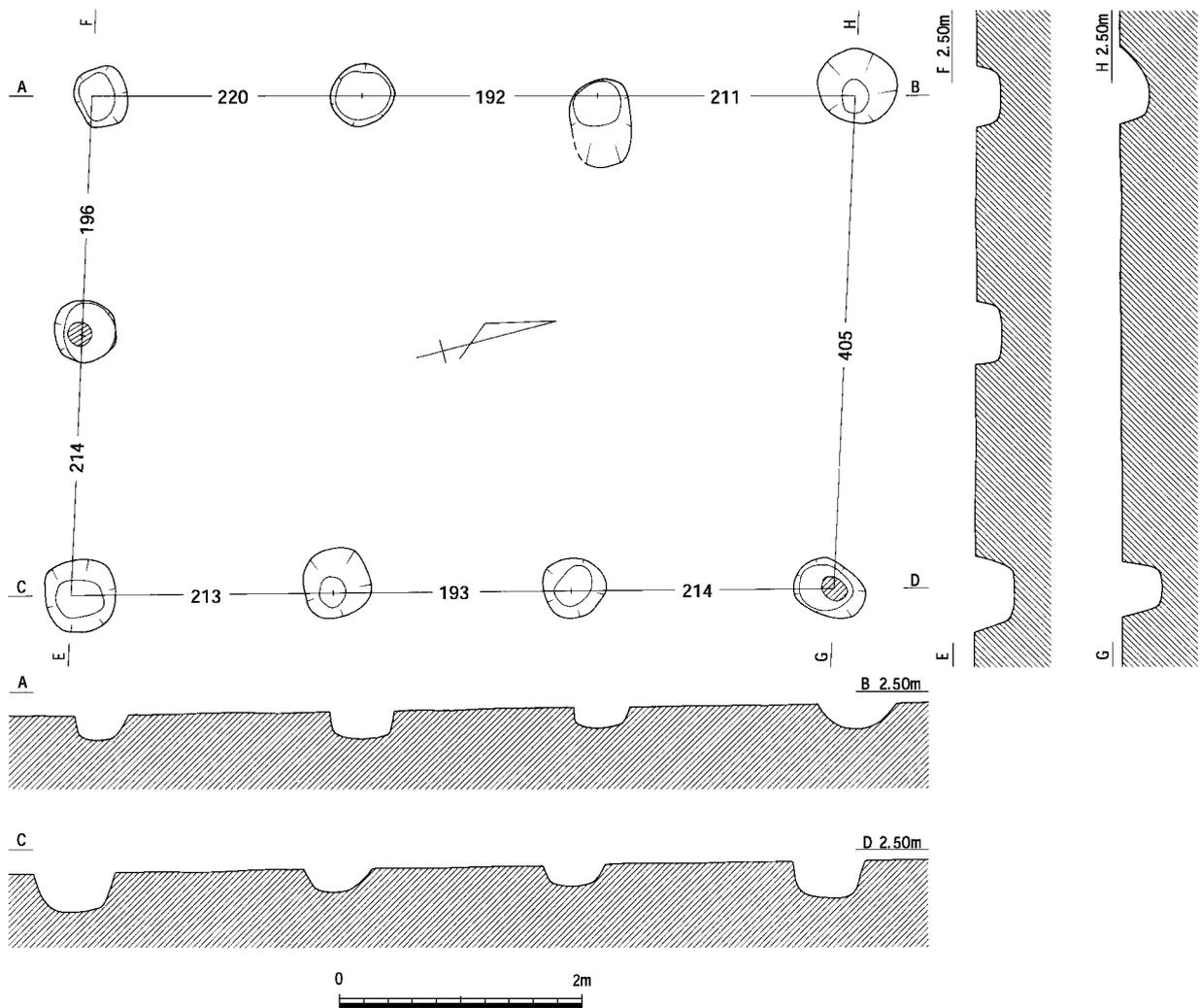
第4章 中世以前の遺構・遺物

第1節 平安～室町時代の遺構・遺物

(1) 平安～室町時代の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物1棟のほか土壇3基、井戸2基、溝6条、水田1面がある。
掘立柱建物（第146図、図版7）

桁行623cm、梁間410cmを測る3間×2間の建物で、N-14°-Eに主軸をおく。径50cm前後の円形をなす掘り方には、径20cmほどの柱痕跡が確認された。周辺でも多数の柱穴を検出したが、いずれも水田埋土を掘りこんでつくられており、出土した土師器椀などから14世紀の建物群と推定される。



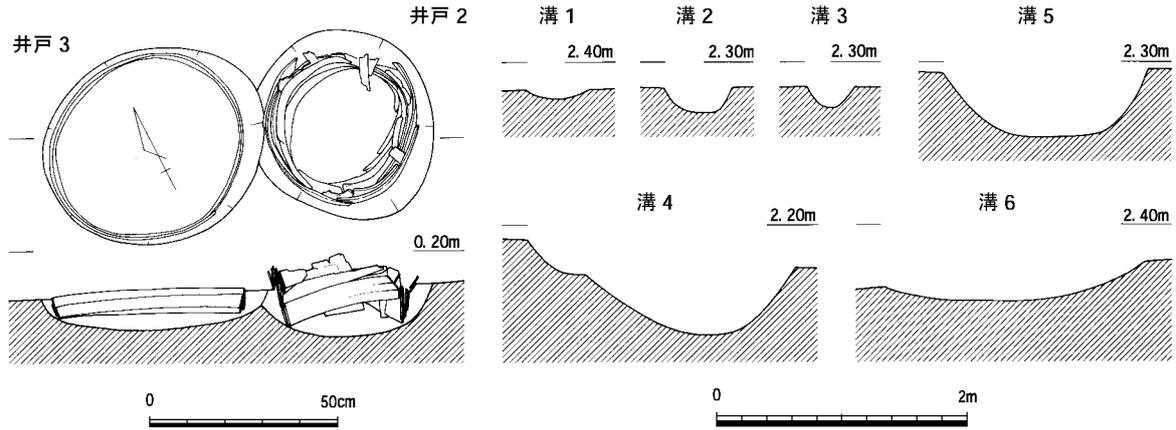
第146図 掘立柱建物（1/60）



第147図 中世以前遺構配置図 (1/500)

井戸 (第148図)

内堀南東の海拔0.1mを測る底面において、曲物が東西に並んで出土した。東側の井戸2は、長さ53cm、幅48cm、深さ13cmの掘り方内に、幅5cmほどの剥ぎ板でつくった径30cmの円筒を縦に差し込ん



第148図 井戸 2・3、溝 1～6 (1/20・1/60)

だ割り板を介して上下に積み重ねていた。井戸 2 を切ってつくられた西側の井戸 3 は、長さ60cm、幅52cm、深さ9cmの円形をなす掘り方内に径50cmの曲物を据えていた。掘り方底面の海拔高は井戸 2 が-2cm、井戸 3 が0cmを測る。出土遺物はないが、内堀の堆積下で検出した点、近接して底部を打ち欠いた備前の大甕が出土している点などから、中世に溯る井戸と判断した。

溝 (第146・148図)

溝 1 は東西に走る幅50cm、深さ7cmの溝で、灰褐色をなす埋土から土師器碗が出土しており、14世紀に機能したものと考えられる。溝 2・3 は南北方向に走る幅35～50cm、深さ15～20cmの溝で、溝 1・4 に切られている。西から流れる溝 4 は幅210cm、深さ60cmを測り、その東端は微高地斜面で開放する。埋土から15世紀の備前の播鉢**1708**や甕**1710**が出土している。溝 4 に併走する溝 5 は幅210cm、深さ60cmを測り、溝 6 は南西から北東に流れる溝で、幅205cm、深さ20cmあり、14世紀の土師器碗**1680**が出土している。

水田 (第146図)

建物群の下層で検出したもので、海拔高2.2mを測る田面は西側で15cmほどの段差をもって低くなる。上面は酸化鉄が沈着して黄褐色をなし、これを覆う褐色粘質土からは12～13世紀の土師器**1672**～**1674**や白磁**1701**・**1703**、青磁**1713**・**1716**が出土している。

(2) 平安～室町時代の遺物

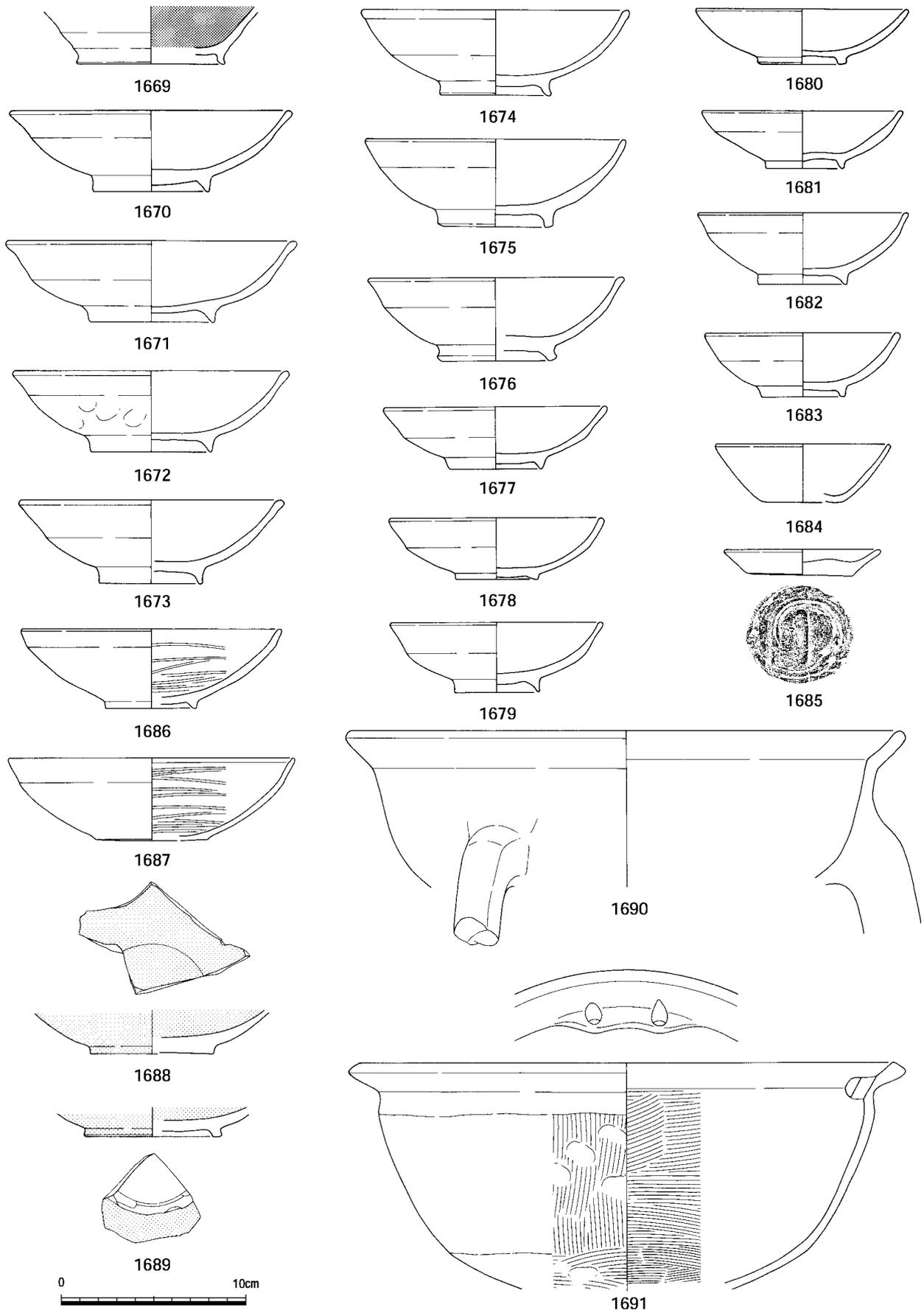
水田覆土や近世の遺構埋土から土師器や備前・東播系炆器、輸入磁器などが出土している。

1669は高台径7.8cmを測る杯で、内面を黒色に仕上げる。**1670**～**1683**は土師器の碗で、口径13.7～14.8cmで断面矩形の高台をもつ**1670**～**1676**と口径10.4～11.8cmで断面三角形の高台を貼り付ける**1677**～**1683**に分けられる。前者は12世紀後半～13世紀前半、後者は14世紀前半～後半に位置付けられる。口径9.2cm、器高4.4cmの**1684**は底部が凹むへそ碗で、14世紀後半に比定される。

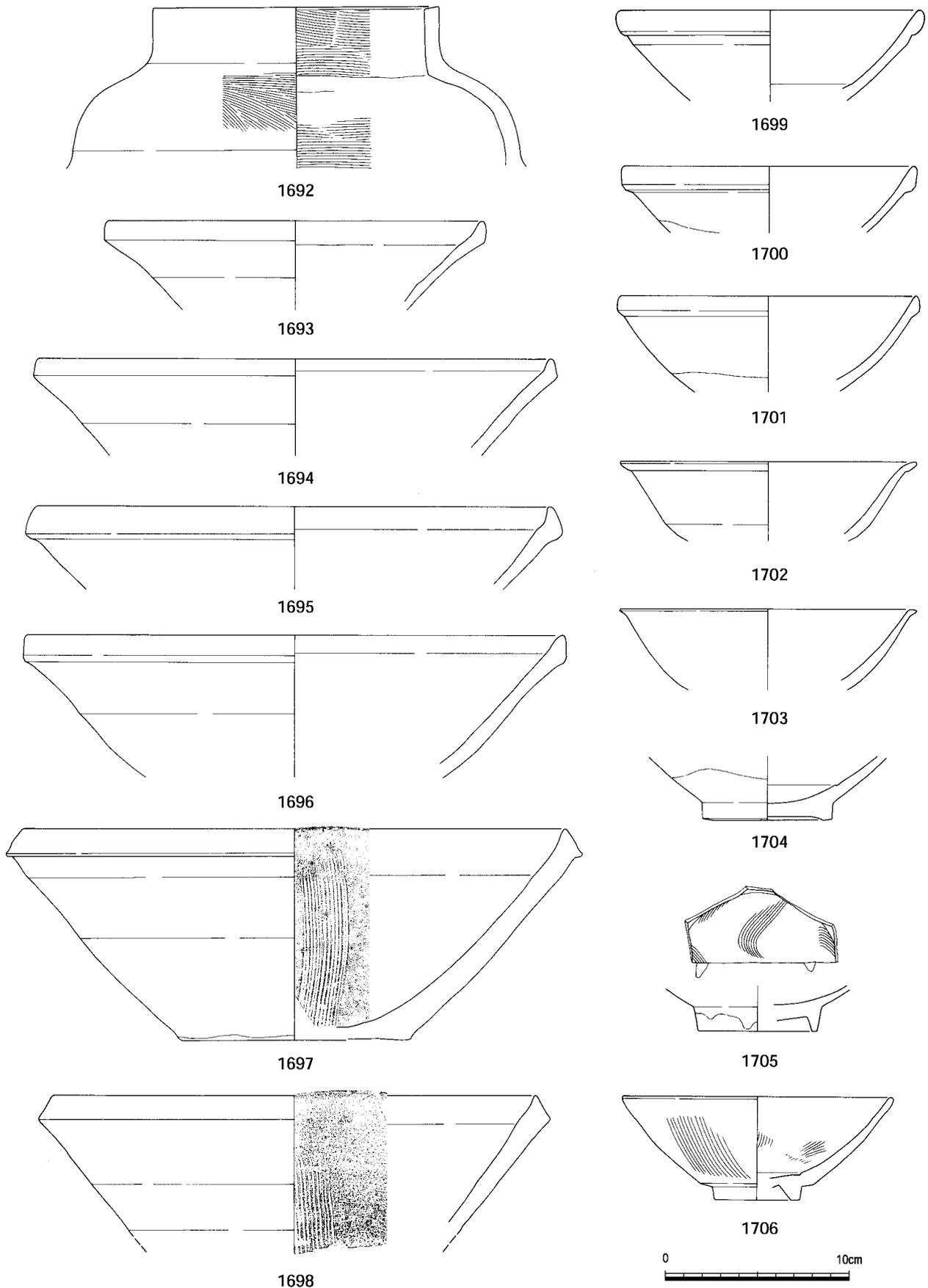
瓦器碗には、口径13.9cmで高台をもつ和泉型**1686**と、径15.2cmある口縁端部に沈線をめぐらし平底をもつ大和型**1687**があり、12世紀後半～13世紀前半に属するものと思われる。

1688・**1689**は京都産の緑釉陶器で、平高台の**1688**は9世紀中葉、輪高台の**1689**は10世紀前半に位置付けられる。

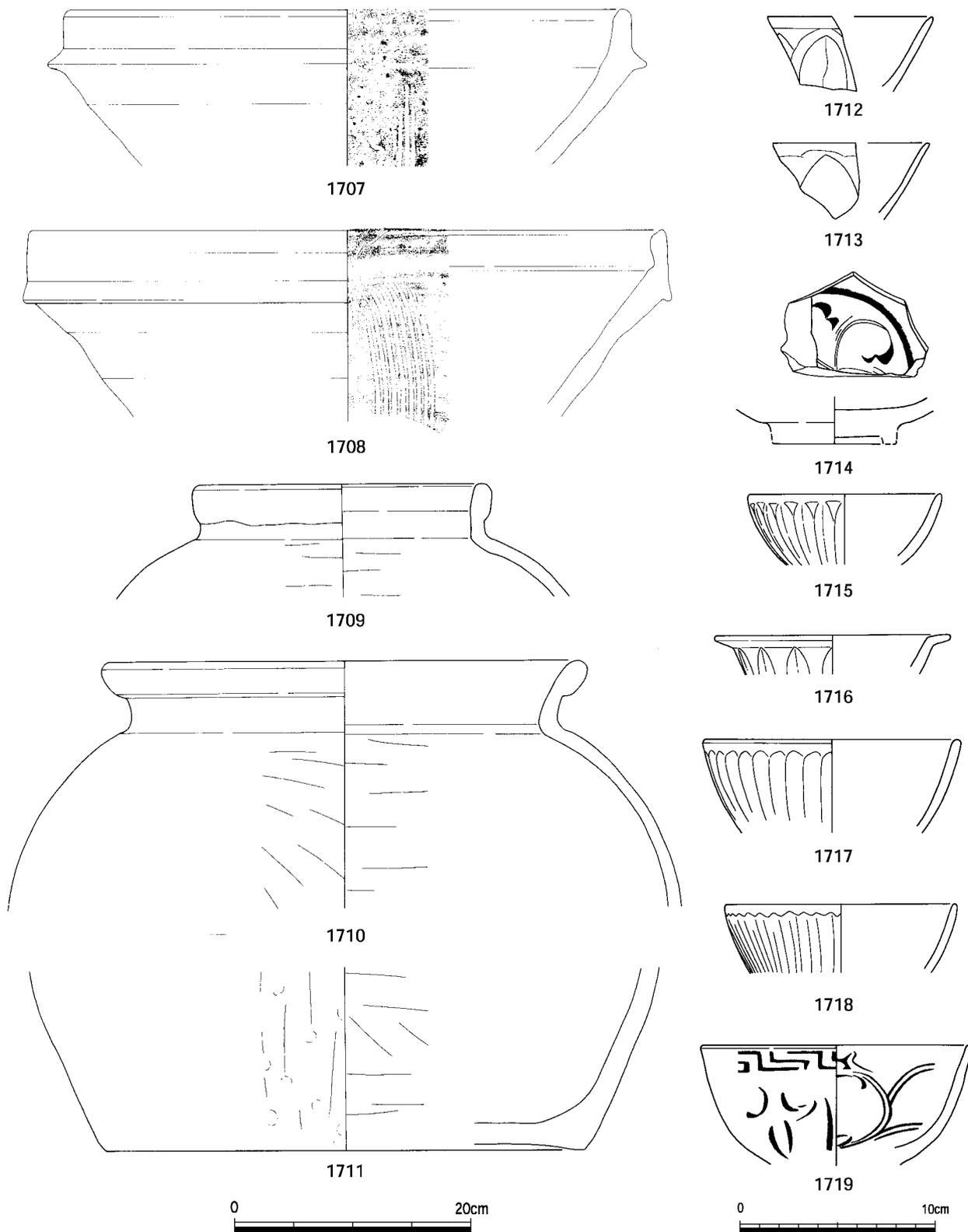
1693～**1696**は東播系の捏鉢で、口縁端部を上方に拡張しており、13世紀後半～14世紀初頭に比定



第149図 平安～室町時代の遺物1 (1/3)



第150図 平安～室町時代の遺物2 (1/3)



第151図 平安～室町時代の遺物3 (1/3・1/5)

される。備前の播鉢には、14世紀後半の1697・1698と15世紀後半の1707・1708があり、備前の甕1709～1711・1720も概ね15世紀に比定される。

白磁には玉縁をもつ1699～1701、外反する1702・1705があり、青磁には同安窯系の1709、龍泉窯系の1712～1716がある。これらは12～15世紀のものである。

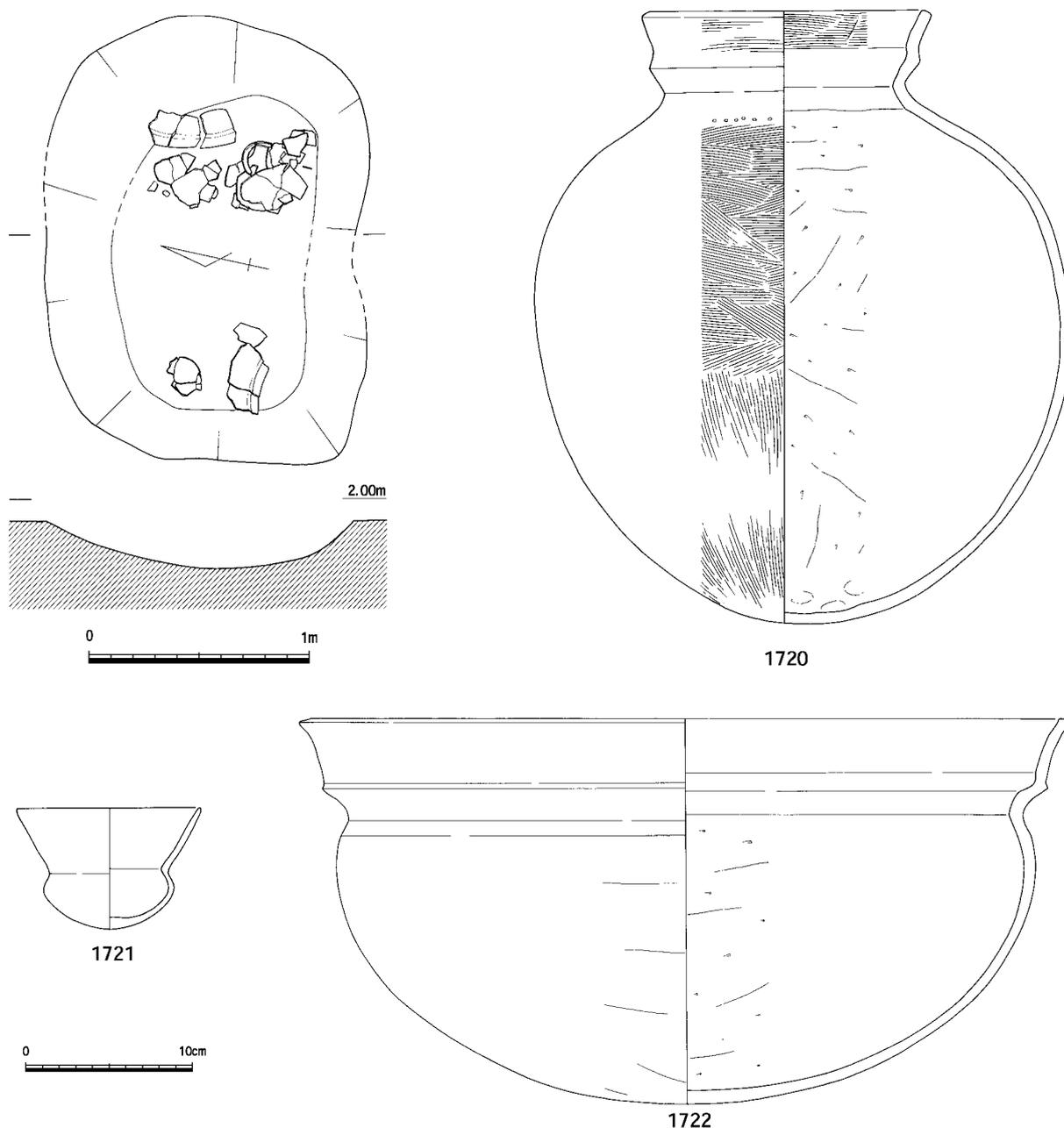
第2節 奈良時代以前の遺構・遺物

(1) 奈良時代以前の遺構

奈良時代以前の遺構として土壇1基を検出している。

土壇121 (第152図)

溝1の下で検出した土壇で、長さ200cm、幅145cmの楕円形を呈し、検出面から深さ18cmにある底面の海拔高は1.7mを測る。暗褐色をなす埋土からは二重口縁をもつ壺1720や鉢1722、小形壺1721、櫛描沈線を飾る甕などが出土しており、古墳時代前期前半に比定される。



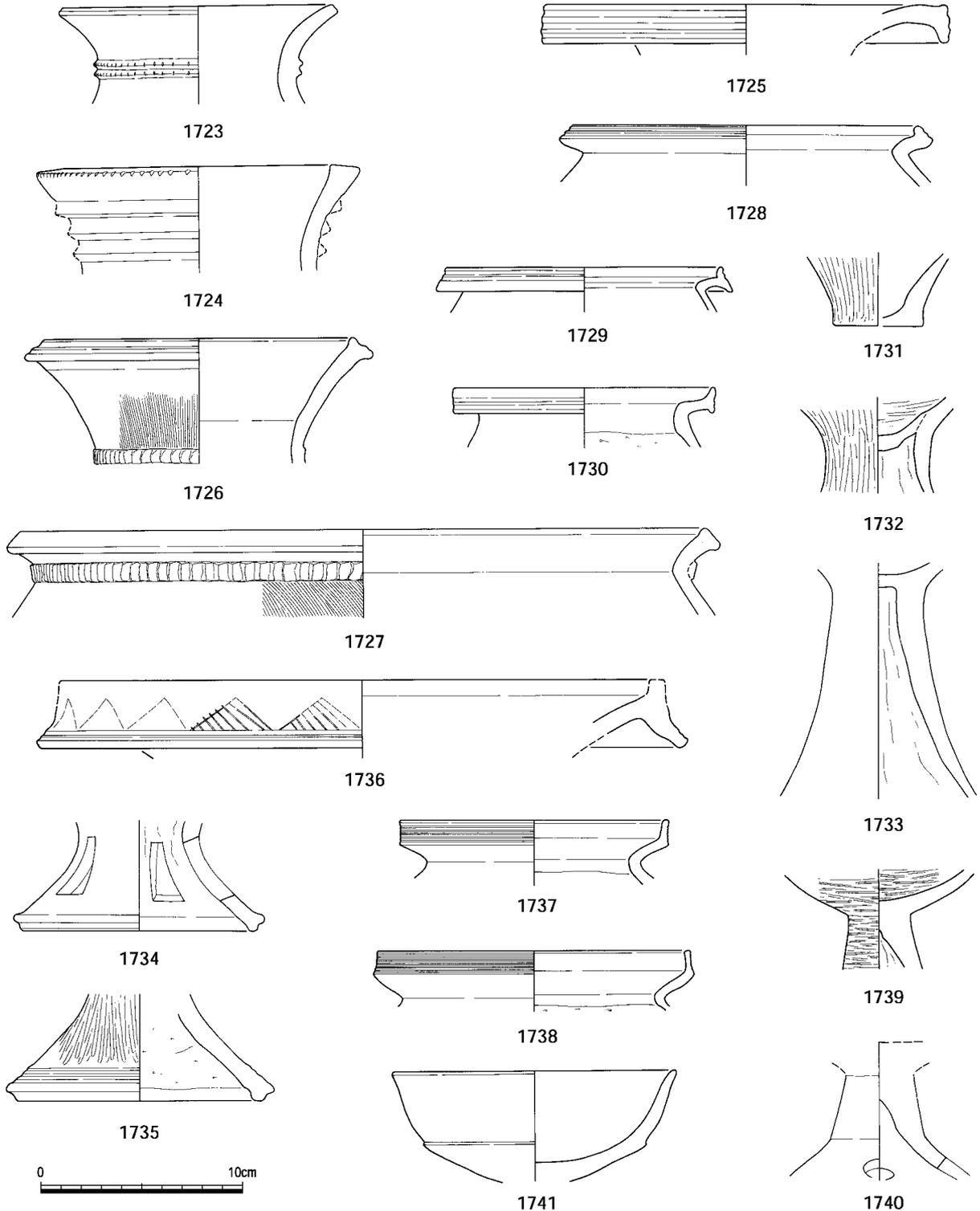
第152図 土壇121・出土遺物 (1/4)

(2) 奈良時代以前の遺物

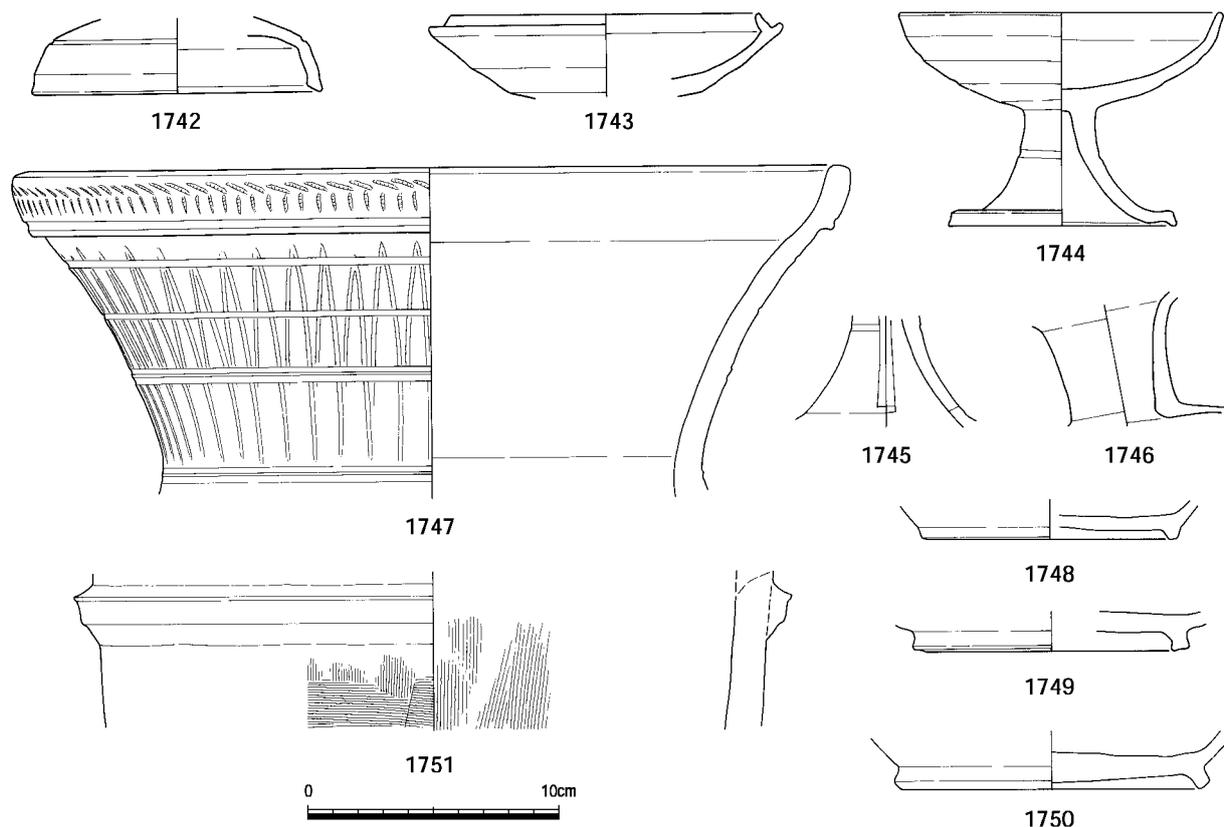
近世の遺構埋土や整地土などから弥生土器や土師器、須恵器、埴輪、布目瓦などが出土している。

弥生土器 (第153図)

口径13.3cmを測る**1723**は前期末の壺で、頸部に2条の刻目突帯をめぐらす。**1724**~**1726**は中期中



第153図 奈良時代以前の遺物 1 (1/3)



第154図 奈良時代以前の遺物 2 (1/3)

葉の壺で、頸部に突帯を貼り付ける**1724**は古段階に、拡張した口縁端部に凹線を飾る**1725・1726**は新段階に位置付けられる。甕には頸部に押圧した突帯を飾る中期中葉の**1727**と中期後半の**1728・1729**、内面をヘラケズリする後期後半の**1730**がある。**1733**は杯部と一体につくられた高杯の脚部で、杯底部には円盤が充填されている。**1734・1735**は径11.5～12.2cmを測る高杯の脚部で、**1734**は方形の透かしを三方に穿ち、**1735**は裾部に凹線をめぐらす。器台**1736**は径30cmある口縁の端部を上下に拡張して鋸歯文を飾る。

土師器 (第153図)

1737・1738は口縁部に多条の櫛描沈線をめぐらす前期前半の甕である。**1739・1740**は短く中実ぎみにつくられた軸部をもつ高杯で、**1740**は裾部に4つの透かし孔を穿つ。**1741**は径13.8cmある杯の口縁部と底部との境が鈍い段をなす中期前半の高杯である。

須恵器 (第154図)

1742は口径11.4cmを測る蓋で、口縁部と天井部の間に沈線をめぐらし、端部は内傾する面をもつ。口径12.2cmを測る**1743**は短く内傾する立ち上がりをもつ杯で、底部はヘラキリのままである。**1744**は口径12.7cm、器高8.4cmを測る高杯で、脚端をわずかに下方へ折り曲げる。口径31.2cmを測る甕**1747**は肥厚して段をなす口縁部に刺突文をめぐらし、上方に開く長い頸部に退化した波状文を飾る。

1748～1750は断面矩形の高台を貼り付ける杯で、高台径は10.2～11.8cmを測る。

埴輪 (第154図)

1751は径27.8cmの円筒埴輪で、断面台形の突帯を貼り付け、内面をタテハケ、外面をタテハケとヨコハケで調整する。

第5章 考察

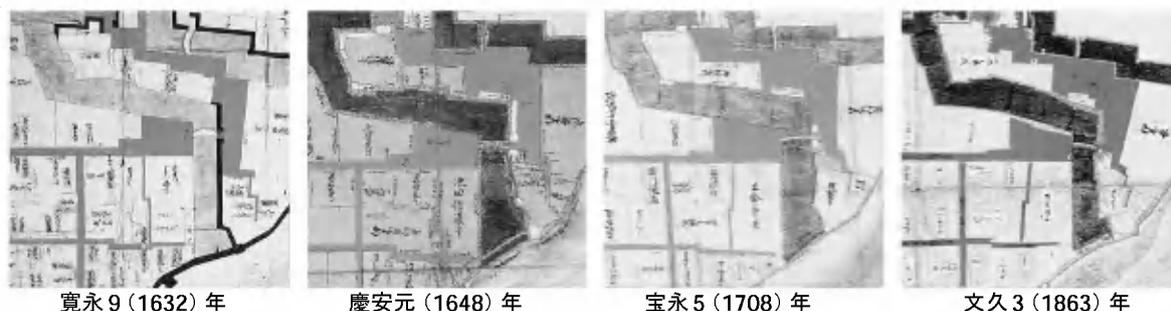
第1節 調査地の変遷

(1) 検出された遺構

内堀と堀

外郭下層で検出した堀は東端が南へ折れ曲がる鍵形をなし、北から東に並走する内堀の形状と一致する。こうしたことから、堀の位置を北ないし東にずらして内堀が掘削された可能性が高く、堀の埋め立てと内堀の掘削が連続してなされたものと思われる。堀の埋土からは本丸2期(宇喜多秀家段階)の瓦が出土しており¹⁾、その埋め立てが宇喜多ないしは小早川段階になされたものと思われる。一方、内堀北辺の石垣は本丸4期の特徴を備えており²⁾、池田利隆段階にあたるものと考えられる³⁾。こうしたことからすると、内堀の掘削は小早川期に手掛けられ、池田利隆段階に石垣を築いて完成したものと考えられる。

ところで、江戸時代に編纂された「和気絹」によれば、宇喜多直家入城に際して榎馬場にあった蓮昌寺や三社明神を他地に移転させたという。加原耕作は、ここに堀を掘削し城域を拡張するねらいがあったものと指摘する⁴⁾。当時の本丸は石山にあったとされるが、調査地点は石山と岡山との中間地点にあたり、もしそうであるならば二つの丘を取り込む広大な城域が設定されていたことになる⁵⁾。確かに堀下層の遺物は16世紀代の陶磁器が主体でありその可能性は十分に考えられるが、現段階では秀家段階に機能していたという事実を確認するに止めたい。なお、この堀の埋め立てに際して築かれた土堤状遺構に豊島石製の一石五輪が転用されていたことは報告した通りである。これらは「南無妙法蓮華経」の墨書が見られることからすると日蓮宗関連の遺物と見られ、同時に出土した木札**1492**や筋違い紋を飾る軒丸瓦**1137~1140**⁶⁾なども考え合わせると、前述の蓮昌寺にかかわる遺物である可能性が高い。しかし、一石五輪には天正11年(1583)の年紀を有するものもあり、「和気絹」の記述と矛盾する。墓地を残して建物のみが森下町に移転されたのか、あるいは小早川秀秋によって現在地(田町)に移されるまでこの地に止まっていたかのいずれかと考えられるが、今回の調査では蓮昌寺に関わる直接的な遺構は検出されておらず⁷⁾、現段階ではいずれとも断じがたい。



第155図 榎馬場周辺の変遷 (岡山大学付属図書館蔵)

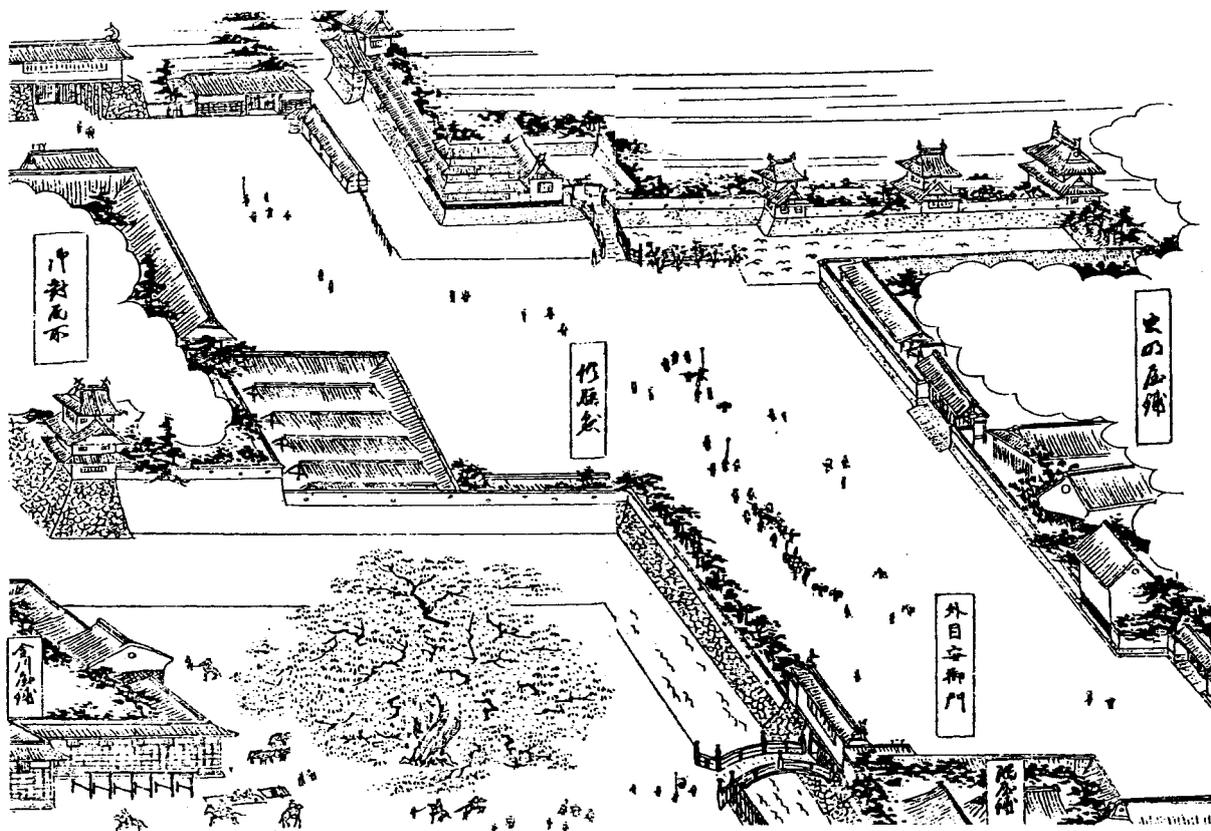
外下馬門・外下馬橋

ここで外下馬門の櫓台の石垣を見ると、築石に矢穴をもつ切石が散見されその法量も内堀の石垣より大きくなっている。これと同様の築石は本丸5期の築造と考えられる外郭東辺石垣の拡張部分に使用されている。また、石垣の傾斜にも天端に向かってわずかな反りが認められ、その間に明瞭な目地は確認できないものの、櫓台と内堀石垣の間に時間差を想定することは可能である。さらに、内堀石垣は基底部から3段目に横目地が通りその上下で築石に違いが認められることからすると、その構築が連続してなされていない可能性も考えられる。



第156図 明治時代の外下馬橋
(山陽新聞社提供、小西正浩氏蔵)

慶安年間の絵図(巻頭図版14)によると、外下馬(外目安)橋⁸の長さは19間半と記されているが、外下馬門から外郭東辺までの石垣上端の距離は36.8mあり、6尺3寸を1間と見なしていたとも考えられる⁹。明治の古写真(第156図)には欄干に3対の擬宝珠が認められ、幕末の岡山名所図絵稿本(第157図)の表現と一致するが、この絵では橋脚の表現が省略されており、詳細な構造については知り得ない。今回の調査成果からすれば、幕末期の外下馬橋は3本の橋脚を一对とする幅584cmの橋台6基で支えられていたようである。また、それに先行するものとして3本の橋脚を一对とする幅644cmの橋台7基で支持していた段階も確認している¹⁰。いずれにしても、外下馬橋は榎馬場と一体として整備された可能性が高く、本丸4期の造成後、同5期の改修を経て完成したものと思われる。



第157図 幕末の榎馬場周辺(岡山名所図絵稿本)

外郭

調査地点が江戸時代を通じて榎馬場と呼ばれる広場であったことは既に報告した通りである。このため、榎馬場関連の施設は暗渠と見られる石組遺構のみであり、これとても承応3年の洪水痕と見られる砂溜まりの上につくられていることから、それ以降に設置されたものと見られる。榎馬場は、寛永9年（1632）以前に成立した「岡山古図」（巻頭図版14）にすでに描かれており、以後文久3年（1863）の「備前岡山地理家宅一枚図」に至るまで改変された様子は伺われない。榎馬場の広さについては慶安年間の絵図に東西47間、南北27間の記載があり、これを調査成果にあてはめると、その西端は石山通り、南端は県庁通りの辺りとなる。「岡山古図」には池田忠雄が築いた月見櫓が描かれていないことから、1625年ころまでには成立したと考えられ、榎馬場もその頃までには造成されていたものと思われる。今回の調査でも忠雄の重臣荒尾氏や津田氏とのかかわりが想定される遺物が出土しているうえ¹¹、陶磁器の年代観とも一致する¹²。ただし、下層の遺物の中には17世紀後半の遺物が若干混入しているところからすると、痕跡としてはとらえられなかったもののその後も部分的な改修が行われた可能性は否定できない。

ところで慶安年間の絵図を見ると、榎馬場の西から続いてきた石垣は内堀北辺（対面所）石垣の折れに対応する位置で途切れて終わっている。この表現は、宝永年間や文久年間の絵図でも踏襲されており、慶安年間以後この箇所に石垣が築かれた形跡はない。今回の調査結果からも、当初からこの場所に石垣は存在していなかったものと判断された。その原因は明確ではないが、屋敷地に面する内堀には石垣が築かれていることからすると、この場所が当初から広場として設定されていたため護岸の必要がなかったことが考えられる。また、池田忠雄の嫡男光仲誕生の際にここで踊りが興行されたとの記録もあり¹³、この広場がさまざまな機能を有していたこともその一因としてあげられる。

ところで、下層の土壌群は外郭の北側に集中しており、北から南へ下る地形と一致しない。このため、これらの土壌群は内堀の掘削と密接な関係があるものと想定される。また、土壌に廃棄された遺物に建築部材が多く含まれることから屋敷替えに関連するものとも考えられるが、小早川氏以後の城主交替は池田家内で行われており、かつまた屋敷の廃棄物はその敷地内で処理されることが多いことからすると、むしろ城主交替を契機とする新たな普請に伴うものと見たほうがよさそうである。

（2）出土遺物

磁器

上層から出土した磁器は肥前磁器が99%を占め、瀬戸の磁器は数点あるにすぎない。瀬戸の磁器がこの地に本格的に流通するのは明治以降のようである。これらは廃棄時期に近い18世紀後半～19世紀前半のものが主体をなすが17世紀後半まで溯るものもあり、長期の使用が想定される。器種には杯・碗69%、皿15%、鉢1%、蓋物・段重・合子6%、瓶・壺3%、仏花瓶・仏飯器・香炉・置物・水滴6%があるが、特殊な盤**121**や高級磁器を生産した南川原窯の製品**112**・**117**なども見られ、重臣の屋敷に囲まれたこの場所の位置を物語る。下層の磁器は明の青花・白磁がほとんどであるが、17世紀前半の初期伊万里が数点含まれる。輸入磁器では景德鎮系の製品もあるが漳州窯系の製品が過半を占める。器種は杯・碗と鉢、皿に限られ、杯・碗（白磁8%、青花49%）、鉢（青花1%）、皿（白磁8%、青花34%）を占める。これらの多くは16世紀後半～17世紀前半に位置づけられるが、堀下層の磁器はこの中でも古相を呈するもので占められる。

第5章 考察

陶器

上層の陶器は、京・信楽などの関西系52%を主体に、瀬戸・美濃6%、肥前3%、萩0.3%、不明39%などが見られる。これらは18世紀後半～19世紀前半のものが大半で、磁器のように長期の時間幅は認められない。器種は杯・椀51%、皿4%、鉢1%、火入・灰吹・灯明皿12%、水注・土瓶18%、瓶・壺8%、鍋4%、甕1%がある。このうち、瀬戸・美濃や肥前、萩などの製品は量産の椀に多く、ほかに皿や瓶、鉢で少量見られる。また、土瓶や土鍋、甕などは産地不明であるが、関西系もしくは岡山周辺での生産が想定される。これらを磁器と比較すると、陶器の皿は僅少であるが口径9cm以下の小椀では磁器と拮抗する出土量があり、土瓶や急須の普及と深くかかわっているものと思われる¹⁴。

下層の陶器は、北部九州(唐津、上野・高取)が79%と最も多く、ほかに瀬戸・美濃7%、志野8%、織部6%、京1%がある。北部九州では椀、皿(胎土目43%、砂目57%)のほか壺、鉢、瓶など多様な器種がある。瀬戸・美濃は椀のほか皿、壺、水滴が、志野・織部は椀、皿もあるが主体となるのは向付などの鉢類である。

炆器

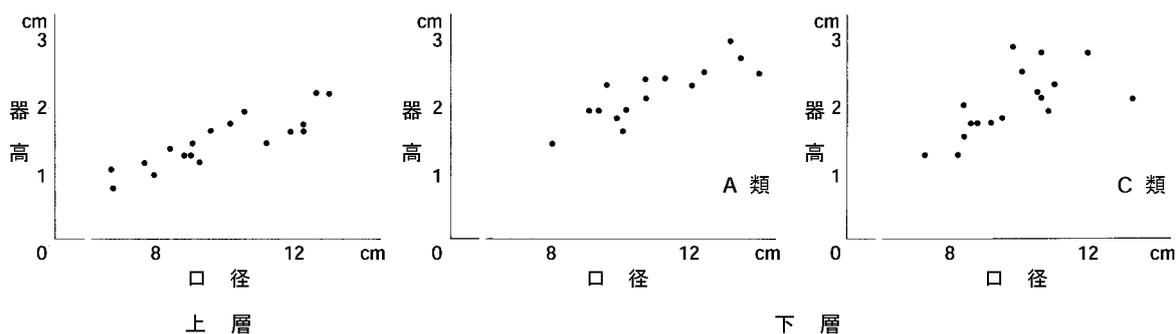
上層の炆器は皿2%、灯明皿52%、鉢5%、匣鉢16%、瓶7%、花入0.6%、播鉢14%、甕0.6%などがある。これらの大半は備前であるが、関西系播鉢が4点認められた。下層に比べて器種が減少したうえ、他産地の炆器が岡山城下にも流通するなど備前の低迷ぶりが伺える。その中において灯明皿

	磁器			陶器				炆器		土器	瓦質土器
	肥前	瀬戸	中国	肥前	京・信楽	瀬戸・美濃	その他	備前	関西		
杯・椀	323	1	1	1	115	10	23	1			
皿	71			7	2	2		4		141	
鉢・向付	3					2		4/34			
蓋物・段重	4/11										
瓶	16					2	22	12			
土瓶・水注					/1	/1	13/36			1	2/6
花瓶・花入	9							1			
香炉	6										
仏飯器	6										
水滴・置物	4										
火入・灰吹					6		4				
灯火具					26			92			
播鉢								21	4		
焼塩壺										2/	
壺										1	
水鉢・甕						1	3	2			
土鍋・羽釜							13			2	6
焙烙										9	
火鉢・焜籠										5	7

表1 上層の土器・陶磁器

	磁器		陶器						炆器	土器	瓦質土器
	肥前	中国	北部九州	京	瀬戸・美濃	志野	織部	中国			
杯・椀	1	119	95	1	22	10	7	1	7		
皿		73	196		4	4	2		3	402	
鉢・向付		1	19	3		8	10	1	55		2
瓶			6						17		
花瓶・花入			1						4		
播鉢									53		
焼塩壺										56/67	
壺	1		5					1	9		
甕									18		
土鍋・羽釜										12	3

表2 下層の土器・陶磁器



第158図 土器皿の法量

の出土量は突出しており、備前の主力製品の一つとして流通していた様子が伺える。

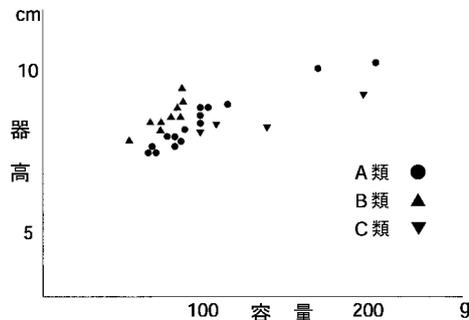
下層の炆器は前代から見られる壺6%・甕11%・播鉢32%に加え、椀4%や皿2%・鉢33%・瓶10%などがある¹⁵。ことに鉢は唐津や志野・織部などの影響を受けて多様な形態が生み出されている。これらは茶道具として見立てられることの多い器種であり饗宴の器としても理解されているが、農村部からの出土も見られ、なおかつ生産地でも多量に製作されているところから見ると当時の日常食器としても広く用いられたものと思われる。

土器

上層の土器には土師質の皿78%、鉢0.5%、鍋1%、焙烙5%、急須0.5%、壺0.5%、焼塩壺1%、焜炉3%、瓦質土器の羽釜3%、土瓶4%、火鉢4%など多様で、土器・陶磁器全体に占める割合は16%ほどである。これに対し下層の土器は土師器の皿74%、鍋2%、焼塩壺23%、瓦質土器の羽釜0.6%、鉢0.4%、火鉢0.2%と器種は少ないが、全体の41%を占める。これは土師質皿の大量消費による結果である。

下層の皿は形態や胎土によってA～Cに大別されることは既に報告したが、宇垣は16世紀末～17世紀後半にかけて、明褐色を呈し底部と体部の境が明瞭なもの（本書のC類）から、白褐色で内湾する体部と底部の境が不明瞭なもの（同A類）へ変遷することを指摘するとともに、複数の生産単位が併存する状況を中世と近世との差として捉らえている¹⁶。仲井光代はこの画期を4b期と想定しており¹⁷、下層の年代観とも一致する。また、上層の皿は小形で低平な形態へ変化し、胎土も灰白色に統一されている。その背景には、陶磁器の流通によって飲食器としての役割が減退し、かわって灯明皿（油皿）としての性格が強まったことが考えられる¹⁸。

焼塩壺はこれまで本丸や二の丸を中心に出土しており、上級武士などの食膳に供されたものと思われる。しかし123点という今回の出土量はこれまでの量をはるかに凌駕し、重臣群の屋敷に囲まれたこの場所に相応しい遺物と言える。これらはA～Dの4類に分類されることは既に述べたが、このうち堺産と見られるA類は84点と全体の68%を占める。これらは17世紀中葉の848や17世紀第3四半期の849・850に比べて小形のものが多く、これらより古く位置づけられることから、焼塩壺が岡山城下で大量に消費されたピークは17世紀前半にあった可能性もある。また、32点（26%）とA類に次いで出土量の多いB類は在地産の可能性も指摘されており今後の検討に待ちたい¹⁹。



第159図 焼塩壺の法量

瓦

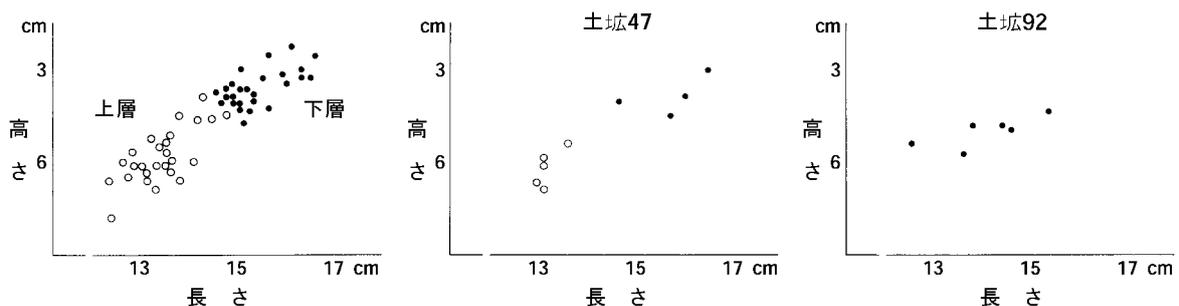
岡山城の瓦については乗岡実によって本丸の層位関係をもとに編年案が示されている²⁰。ここではそれに依拠して各遺構の年代を検討する（第160図）。堀から出土した軒平瓦は2期の1150・1255のほか、1期あるいはそれ以前に溯る1233・1292・1293からなり、3期のものを含まない。下層では1242・1243・1255など2期の軒平瓦を主体に、3期の1259・1265、4期の1192からなり、5期の軒平瓦を含まない。中層では1289など5期の軒平瓦に加えて、1期の1170や4期の1169が見られる。

軒丸瓦は本丸との対応関係が明示できないが、堀では珠文数17~34あり、特に下層の軒丸瓦は34を数える。下層の珠文数は12~30までであるが、その中心は17・18にあり本丸4期の傾向と一致する。

また、丸瓦を見ると堀ではコビキAで製作された大形のもので占められ、下層ではこれにコビキB

	堀	下層					中層
I期							
II期							
III期							
IV期							
V期							

第160図 各層位の軒平瓦（1/12）



第161図 丸瓦の法量（コビキA●、コビキB○）

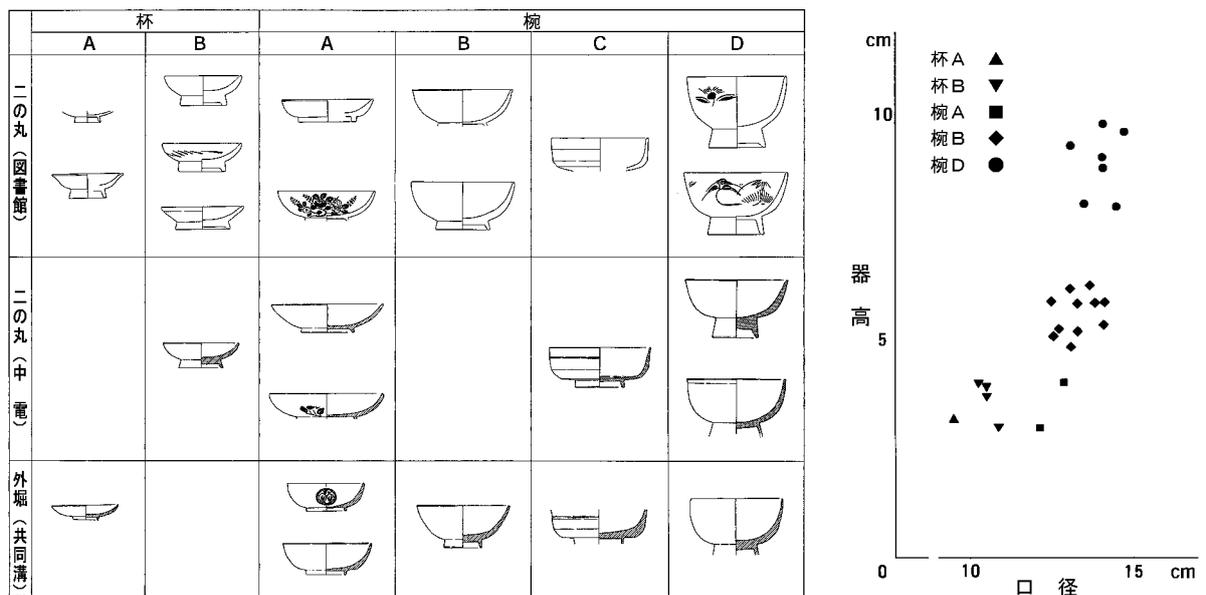
の丸瓦が少量混在する。しかし、丸瓦の法量はコビキA・Bでは明瞭に異なり、土壌単位で法量がまとまる傾向にあることからすると、コビキA・Bが混在して用いられることは少なかったと考えられる。また、棟込瓦も限られた土壌で多量に出土する傾向にあり、土壌への廃棄が建物単位でなされた可能性を示している。

木製品

漆碗は土壌や堀から87点出土しており、これらは杯A・Bと碗A～Dに分類される。このうち全体の6%占める杯Bは「守貞漫稿」に腰高とある高杯形の杯で、堀上層の段階から出現しており、この段階で碗B・Dとのセットが成立していた可能性がある。碗A（2%）は器高の低い碗で、総赤漆で仕上げるものが多く加飾率も高い。42%を占める碗Bには薄手と厚手があり、前者は総赤漆や加飾の率は高い。碗Cは総黒漆の平碗で18世紀以降に盛行する器種であるが、二の丸（中電）でも江戸前期の出土例が知られており、その出現が17世紀初頭に溯ることが判明した²¹。46%と最も多い碗Dは高い高台をもつ碗で、内割りの浅いものが多く古相を呈する。このように今回の資料では、「守貞漫稿」において汁碗とされる碗Bと飯碗とされる碗Dはほぼ1：1の比率をなすが、陶磁器との組み合わせを考慮する必要もあり、それぞれの機能については判断しがたい²²。また、装飾には九枚笹や唐花、抱き沢瀉、陰陽食い違い丁子などの丸紋のほか、鳳凰の金蒔絵も見られた。また、高台内の釘描には○や×、鍵形、立鼓形などがあるが、同文のものが複数出土している点は注意される。

折敷は底板が12点出土している。東京都の加賀藩邸跡では、寛永6年の將軍御成に際して使用されたと推定される折敷が、径1尺2寸、8寸、3寸5分の3つに区分されることが指摘されている²³。今回出土した折敷は点数も少なく、一定の時期幅も認められるものの、その法量がこれと一致する点で注意される。ところで、1476～1479のような足板を備えた折敷は足打と呼ばれ平折敷よりも格式の高い膳として使用されたものと推定されている。しかし、いずれも素木で割り裂いた痕を残す粗い作りであるところを見ると、饗応などの儀式毎に調え廃棄されたものと思われる。

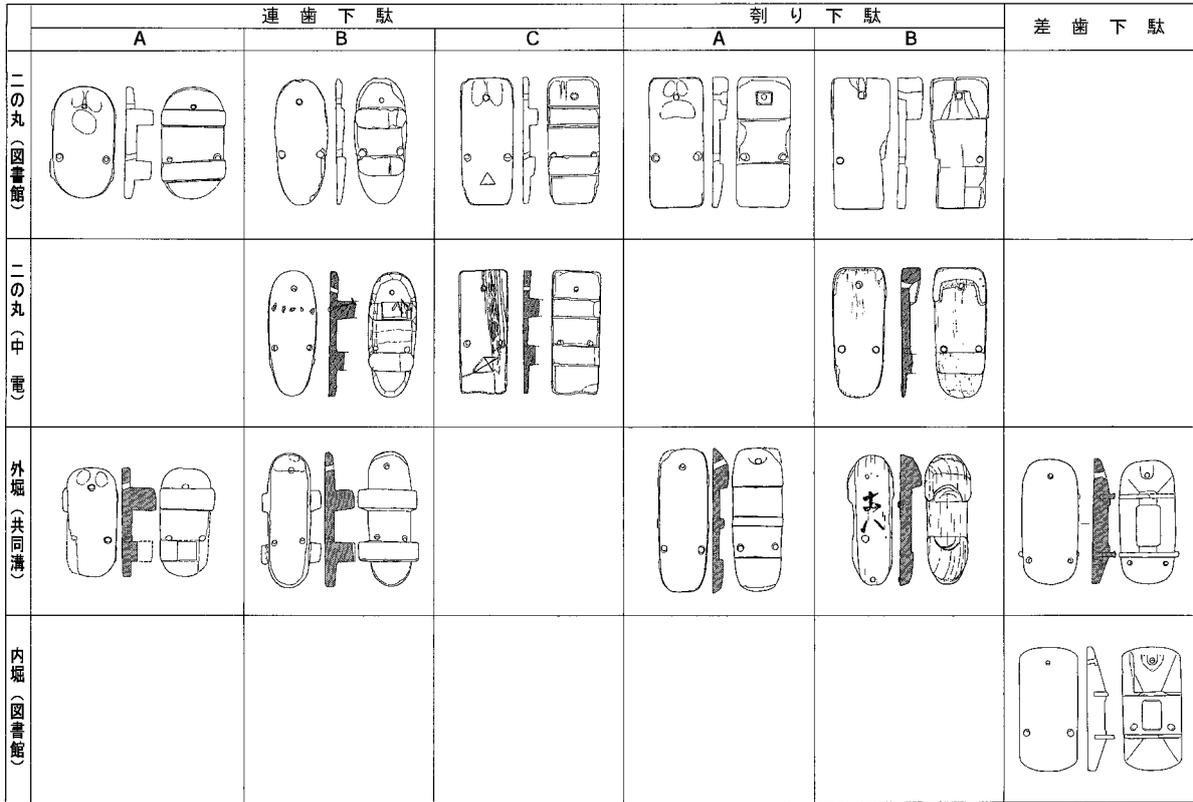
下駄は堀などから21点出土している。ここでは、広島県草戸千軒遺跡や中国電力変電所建設あるいは共同溝工事に伴って発掘された岡山城の資料と比較検討し²⁴、その位置づけを行う（第162図）。



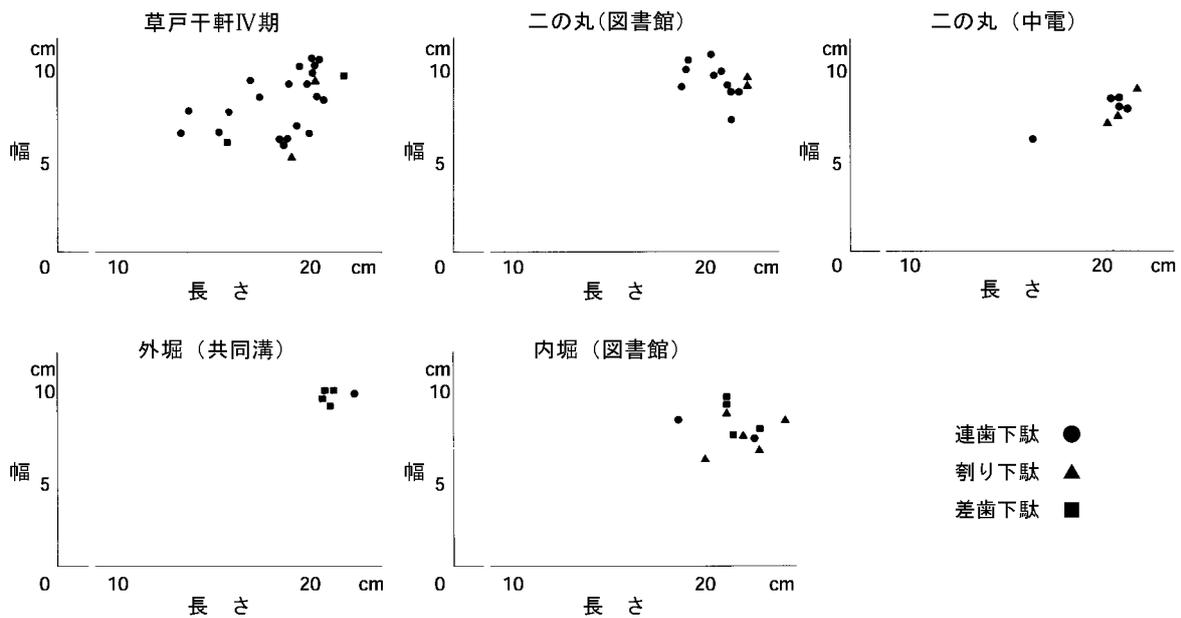
第162図 岡山城出土漆碗の分類と法量

第5章 考察

16世紀に比定される草戸千軒遺跡4期の資料は、丸形の連歯下駄が全体の74%を占め、法量のばらつきが大きい。これに対し17世紀初頭の二の丸(図書館)では角形が丸形と拮抗するとともに削り下駄の割合が増加し、法量もまとまる傾向にある。17世紀前半の二の丸(中電)もほぼ同様の傾向を示すが、削り下駄は全体の1/3に達するとともに台幅は狭まって10cmを越えるものは見られなくなる。19世紀中葉を中心とする外堀(共同溝)の資料では、削り下駄と差歯(陰卵)下駄がそれぞれ1/3



第163図 岡山城出土の下駄(近世・近代)



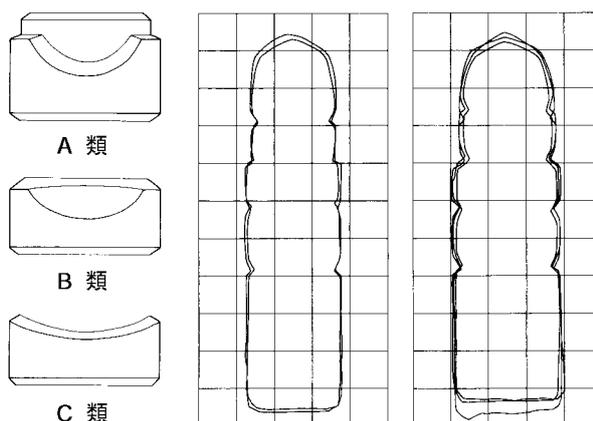
第164図 下駄の法量

を占めるとともに、台幅の狭い一群が析出する。そして19世紀後半の内堀（図書館）では差歯（陰卯）下駄が80%を占め、法量も長さ20cm、幅10cm前後にまとまる傾向を示す。

以上のように今回の資料は、幅広の丸形から狭長な角形へ形態変化するとともに、削り下駄の割合が増加していく段階にあり（表3）、いわば中世的な下駄から近世的な下駄へ移り変わる過渡期として評価できる。しかし、岡山城下では18世紀の資料はいまだ報告されておらず、当地における近世下駄の詳細についてはさらなる資料の増加を待ちたい。

石製品

堀から出土した豊島石（凝灰岩）製の一石五輪は一辺4～6寸の角材を刻み込んでつくられており、石質に大きな違いは認められない。風・地輪を除く各部は2～4寸で規格されており、第165図のように外形が一致するものも見られる。また、火輪の形態によってA～C類に分類できるが、これらは法量との相関が認められ、製作の精粗が反映されたものと思われる。



第165図 一石五輪塔の類型と法量
1マスが2寸（1/12）

ところで、豊島石製の石塔の初例は天正8年（1580）の紀年をもつ岡山市観音院の宝篋印塔が知られており²⁵、一石五輪では慶長年

間の紀年を有する岡山市高野谷例（吉備考古館蔵）などが報告されている²⁶。豊島石はその粗く脆い石質ゆえに在銘遺品は少なく、その点で今回出土した一石五輪は豊島石製石塔の初現期にあたる天正期の作例として重要な意味をもつ。

本稿の作成にあたり、加原耕作、大橋康二、市田京子、田村啓介、乗岡実、追川吉生、石井啓の諸氏から様々な教示にあずかった。また、発掘調査の実施および報告書の作成にあたって、下沢公明、島崎東、渡辺恵理子、杉山一雄、尾上元規、岡本泰典の各氏から援助を受けた。末筆ながら記して感謝します。

註

- 岡山城本丸の時期区分によると1期は天正年間（1573～91年）、2期は文禄年間から慶長5年（1592～1600年）、3期は慶長5年（1600年）直後、4期は慶長年間後半から寛永年間初め（17世紀第1四半期）、5期は寛永年間から元禄年間（17世紀第2四半期～末）とされている。
乗岡実「瓦について」『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、1997
- 60～70°という石垣の傾斜や築石の特徴、構築の手法などは4期とされる修覆櫓南内堀石垣、弓櫓東辺石垣に類似する。また、石垣基部の胴木と同様な構造は4期に築かれた本丸西側内堀の石垣においても確認されている。
乗岡実「岡山城本丸の石垣」『史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、2001
乗岡実「本丸西側内堀の構造調査」『岡山城内堀』岡山市教育委員会、1998
- 榎馬場の対岸にある対面所は、監国として西の丸に入った池田利隆が山陽道を往来する西国大名を迎接した場所であり、西の丸から続く内堀北辺石垣もこの段階に築かれた蓋然性が高い。
- 加原耕作「岡山城」『山陽新聞サンブックス』山陽新聞社、1994

第5章 考察

5. 石山期にも岡山が砦として使用されていたことは、本丸中の段の発掘調査によって明らかにされている。乗岡実「郭の構造と変遷について」『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、1997
6. 筋違い紋は松田氏の家紋と伝えられ、同氏の信奉する日蓮宗寺院での出土が知られている。とくに1137は蓮昌寺所用の瓦（岡山市埋蔵文化財センター蔵）と同範の可能性があり、「和気絹」の記述を彷彿とさせる。
乗岡実「中世山城の瓦三題」『吉備 されど吉備』古代吉備を語る会、2000
7. 蓮昌寺の遺構は、遺物の出土状況などからして県庁通りもしくはその南側に遺存するものと想定される。
8. 外下馬橋は、池田光政による目安箱の設置以後外目安橋と呼ばれたが、本書では外下馬橋の名称で統一した。
9. 乗岡実「絵図に示された時代（5期）の本丸」『史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、2001
10. 内下馬橋は、明治の古写真や現存する遺構を手掛かりとして類推すると幅6.3m（3間半）ほどになり、外下馬橋もこれと同様の規模と推定される。
11. 九曜紋を飾る棟込瓦1329・1330は荒尾氏の家紋瓦と推定され、「津田木工」の墨書がある1496は津田氏との関わりが指摘できる。寛永古図には榎馬場の南の屋敷地に荒尾図書、西の屋敷地に津田将監の名が見える。
12. 大橋康二氏によれば、出土陶器の主体を占める唐津は砂目段階でも最新のものを含まないと言う。
13. 土肥経平「備前渡辺数馬仇撃記」『吉備群書集成5』吉備群書集成刊行会、1931
14. 長砂古真也「日常茶飯事のこと」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会、2000
15. 下層土壌の備前は天正年間を中心とする南大窯東3号窯、堀下層の備前は慶長年間に比定される南大窯西2号窯の製品に類似する。
石井啓「伊部南大窯跡周辺窯跡群の出土遺物について」『第3回備前焼研究会資料』備前焼研究会、2000
16. 宇垣匡雅「まとめ」『岡山城二の丸跡』岡山県教育委員会、1991
17. 仲井光代「土師質土器皿について」『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、1997
18. 陶磁器の出現により土器皿の役割は次第に盃へ限定されていったと考えられる。また、備前の油皿と法量が近似することからすると安価な灯明皿として生産された可能性もある。
19. 乗岡実「出土遺物について」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会、2002
20. 註1文献
21. 中井さやか「近世の漆椀について」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会、1992
22. 朝倉治彦・柏川修一編「守貞漫稿」東京堂出版、1992
23. 萩尾昌枝「江戸時代初期の宴会の食器類」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会、1992
島崎とみ子「江戸時代の料理と器具」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会、2000
24. 下津間康夫「履物類の様相」『草戸千軒遺跡発掘調査報告V』広島県教育委員会、1996
松本和男ほか「岡山城二の丸跡」中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会、1998
杉山一雄ほか「岡山城外堀跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154』岡山県教育委員会、2001
市田京子「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』2000
25. 岡山市教育委員会「岡山市の石造物」1986
26. 永山卯三郎「岡山県金石史」岡山県金石史刊行会、1954

	連 歯		削 り		差歯(露卯)		差歯(陰卯)	
	角形	丸形	角形	丸形	角形	丸形	角形	丸形
草戸千軒Ⅳ期	7	35		2	3			
二の丸(図書館)	5	12	4					
二の丸(中電)	2	3	1	2				
外堀(共同溝)	1	2		4	1			4
内堀(図書館)	1						4	

表3 下駄の出土点数

第2節 内堀北辺石垣の測量調査

県立図書館の建設については、事前の確認調査（平成11・13年度）、発掘調査（平成12年度）の成果をふまえ、重要遺構である内堀石垣の現状保存を図りながら施工することとしていた。ところが、平成14年10月に着工して間もなく、石垣に近接する部分の掘削工事中、誤って石垣の一部を破損する事態が生じた。幅約5m、高さ約2mの範囲にわたって石垣が失われ、裏込めの川原石が露出する状態となった。県教育委員会では、直ちに文化庁と協議し、破損箇所を含めて連続する石垣を検出、調査し、旧状に即した積み直し工事を行うこととした。積み直し工事は専門業者に依頼し、原状部分と積み直し部分の境には真鍮線を入れて表示、保存している。

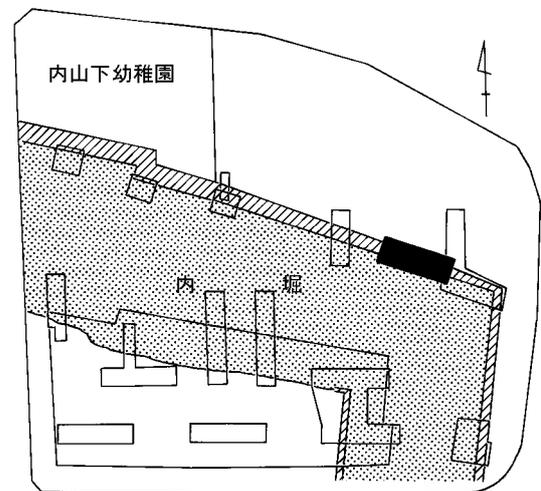
調査は、県教育庁文化課埋蔵文化財係で対応し、平成14年11月7日・8日・11日・20日・26日の5日間で行った。調査担当者は、松本和男課長代理、尾上元規文化財保護主任の2名である。

石垣の検出範囲は、破損箇所から西へ約13m、東へ約6m、合わせて幅約19mの連続する範囲で、石垣の底部まで検出した。このうち東側約4m分は、平成11年度確認調査のT3と重複している。

石垣は、最大で高さ約4.5mが残存しているが、旧学校施設と重なる部分については上部約1m分がすでに破壊を受けている。石垣上端が捨てコンクリートによって覆われている部分も見られ、このコンクリートについては今回の調査時に除去した。石垣底部の胴木は、およそ20cm角の角材を使用しているが、検出範囲の西端約3mの部分では認められない。

また、石垣裏込めの調査もあわせて行った。残存する石垣上端で平面的な検出を行い、破損箇所では断ち割りを行って断面を観察した。裏込めは川原石を充填したもので、その厚さ（奥行）は石垣表面から1.3～2m程度であった。

なお、石垣下部の3か所に墨書が確認された。漢字等が認められるが、判読の難しい部分が多い。判読にあたっては狩野久先生、文化課田村啓介課長補佐から教示をいただいた。aは、不明瞭だが「虫」の一字が右に90°倒れた方向で書かれているようにも見える。bは多数の字からなり、「□孫八良(郎) □□□ 五十人」と読める。「孫八郎」なる人物以下50人が石垣の築造に携わったということか。cは漢字1～2字と思われるが、判然としない。(尾上)



調査位置図 (1/2,000)



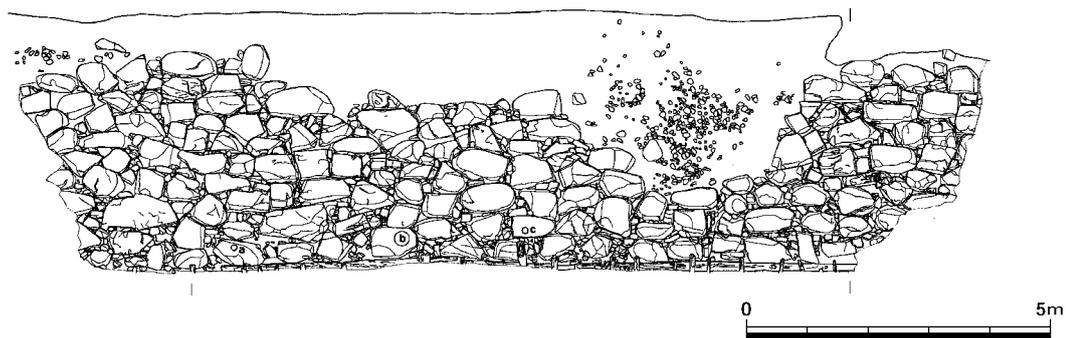
墨書 a



墨書 b



墨書 c



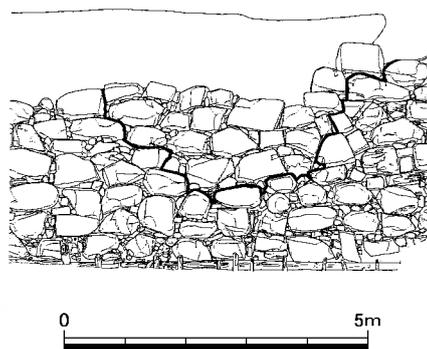
石垣立面図（1/150）a・b・cは墨書の位置を示す。



検出石垣全景（南西から）



胴木



石垣復元状況（1/150）

第3節 岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部

富岡直人

1 分析資料

岡山県岡山市岡山城二の丸跡において、岡山県古代吉備文化財センターによって調査・発掘され近世に属する包含層と土壌、堀等の遺構から145件（173点）の動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群について実施した分析結果を記すものである。

多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色から明褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄鉱（Vivianite: $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ））を析出し脆弱化している。また、一部は火を受け白色に変化している。

2 出土動物遺存体の特徴

岡山城二の丸跡出土動物遺存体資料を分類・同定し、個体数算定を行うとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡、生物顕微鏡、微小部測定用レーザー変位計で観察・測定し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施した。

骨格の保存状況は極めて良好で、これほど残存状況が優れた遺跡は県内ばかりでなく例が少ないであろう。出土座標等の詳細が不明な点が惜まれる。特に、いくつかの骨格は関節していた骨格の影響を表面の色調変化に止めており、微細な観察が可能な貴重な資料である。このような良好な保存状況を招いた原因は、包含していた堆積層の土壌のpHや水分量、土壌の鉱物質・有機質の内容が骨格の保存に適していたことが予想される。しかし、土壌に関する分析のためのサンプルは実施していないので、これらの所見は管見に止まるものである。

第1表 岡山城二の丸跡出土動物遺存体種名表

List of the animal remains from Locality Ninomaru, Okayama castle, Okayama city

軟体動物門	Mollusks	ボラ科	Mugilidae
腹足綱	Gastropoda	爬虫綱	Reptilia
アカニシ	<i>Rapana venosa venosa</i> (Valennciennes)	カメ目	Testudinata
サザエ	<i>Batillus cornutus</i> (Lightfoot)	ウミガメ科	Cheloniidae gen. indet.
斧足綱	Bivalvia	鳥綱	Aves
マルスダレガイ科	Veneridae	キジ目	Galliformes
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Röding)	キジ科	Phasianidae
フネガイ科	Arcidae	キジ属	<i>Phasianidus</i> sp. indet.
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i> Brisson
脊椎動物門	Vertebrata	ガンカモ目	Anseriformes
硬骨魚綱	Osteichthyes	ガンカモ科	Anatidae
スズキ目	Perciformes	カモ類Aタイプ	wild ducks A type
タイ科	Sparidae	コウノトリ目	Ciconiiformes
マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)	サギ科	Ardeidae
		アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i> Clark

第5章 考察

哺乳綱	Mammalia	ネコ目（食肉目）	Carnivora
シカ科	Cervidae	イヌ科	Canidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck	イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
イノシシ科	Suidae	ネコ科	Felidae
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.	イエネコ	<i>Felis catus</i>
ウマ目	Perissodactyla	サル目（霊長目）	Primates
ウマ科	Equidae	ヒト科	Hominidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus	ヒト	<i>Homo sapiens sapiens</i>

岡山城二の丸跡からは多くの動物遺存体が出土した。そのうち分析に供されたものは脊椎動物が中心であり、軟体動物はアカニシが検出されている。これらの動物遺存体は、古代吉備文化財センターにおいて選別され、岡山理科大学に搬入された。これらのうち綱目科属種の分類が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

送付された資料の番号は件数に従ってつけられている。出土資料の分析によって得られた属性の詳細（出土地区、帰属層位・遺構、所属時期、部分、部位、破損、風化、成長度、重量、計測値）を第3表に示す。

破損については、第2表に掲げる属性基準を設定し分類した。

出土遺構についての発掘所見は第3表の通りである。

第2表 破損分類基準（アンダーラインが付された部分が分類名）

規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性			
<u>Aタイプ</u> 切断（対象を完全に切断している切創：cut mark）			a 溝面が平滑あるいはゆるやかなカーブ（含：刃こぼれの傷）切創・切削痕跡：cut or scrape mark
<u>Bタイプ</u> 切創（5mm以上の深さ）	1 線状に伸びた痕跡		b 溝片面が破断打撃叩切痕跡：chop or huck mark c 断面に多数の平行線状痕跡 鋸引痕跡：saw mark
<u>Cタイプ</u> 切創（1～5mmの深さ）	2 刺突状に止まった痕跡		
<u>Dタイプ</u> 切創（1mm未満の深さ）	3 水平線に刃器を滑らせた痕跡		
規則性の低い創傷：動物による破壊の可能性			
局部的かつ集中的にクレーター状や断面半円の孔・溝を生じる → イヌ等食肉目の嚙痕 → <u>イヌ嚙痕</u> （岡山城二の丸跡の場合は大きさからイヌと考えられる） 二条の溝が一对になり、局所的に損壊される → ゲツ歯目の嚙痕 → <u>ネズミ嚙痕</u> （日本の多くの遺跡の場合は大きさからネズミ類と考えられる）			

第3表 出土遺構の時期

土壌1～42、101～103	江戸時代末期～明治時代初頭
内堀（橋脚付近）	江戸時代末期～明治時代初頭
砂溜まり	1652年以前（1603～1632年）
土壌43～100、104～115	1652年以前（1603～1632年）
内堀	1652年以前（1600～1632年）
堀	1652年以前（1590～1603年）

1. 軟体動物門 Mollusks

1652年以前の近世初頭に形成された土壌と溝を中心に軟体動物が検出された。

腹足綱 Gastropoda

アカニシ *Rapana venosa venosa* (Valennciennes)

第4表に古代吉備文化財センターが計測したアカニシ殻高と遺構のクロス集計表を掲げる。これによると10.5~12cm程度が平均的な大きさと考えられる。

ただし、1652年以前(1603~1632年)に帰属する土壌51と土壌106では明らかに殻高の分布に相違が看取され、同時期においても廃棄されたアカニシの殻高の大きさにバラツキがみられ遺構毎に廃棄や消費の局面が異なっていたことが予想される。

サザエ *Batillus cornutus* (Lightfoot)

土壌68より殻質が1点検出された。残存する殻高は79.20mmであった。

斧足綱 Bivalvia

マルスダレガイ科 Veneridae

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)

土壌51より右殻1点、土壌68より左殻と右殻各1点、土壌87より左殻2点、堀より右殻1点が出土している。周縁が破損し、計測が可能な個体はほとんどなかったが、土壌87の左殻2点の残存殻長は、67.7mmと40.5mmであった。

フネガイ科 Arcidae

ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)

土壌68より火を受け暗灰色に変色した右殻が1点、堀より右殻が2点—うち1点が火を受け暗灰色に変色—が出土している。特にハイガイが火を受けている点は、食用としての加熱ばかりではなく、漆喰の材料として加熱されたものが検出された可能性をうかがわせる。

2. 硬骨魚綱 Osteichthyes

岡山城二の丸の家老屋敷の地点(中国電力内山下地区)からは淡水性の魚類が検出されているが、今回の調査で外郭の土壌、溝、堀からは海水~汽水(河口域を含む)に生息する硬骨魚綱のみが検出された。科が特定できた資料は以下のタイ科とボラ科のみであった。特定できなかった資料のうち、第1椎骨(No.27)はイサキ科の魚類である可能性が高いが、特定することは困難であった。

スズキ目 Perciformes

タイ科 Sparidae

マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)

海水域の岩礁域や砂礫の底層に生息する。岡山県の縄文時代~近世にかけての遺跡で普通にみられる硬骨魚綱である。No.130を除いて全てが土壌から検出されている。左前上顎骨が3点(No.7,10,12)、右前上顎骨が1点(No.4)、右口蓋骨が1点(No.9)、上後頭骨が1点(No.130)出土している。左

第5章 考察

前上顎骨 (No.10) には切断された切創が残され、頭部を鋭利な刃器で切断する処理・調理方法が実施されていたことがうかがわれている。

ボラ科 Mugilidae

海水～汽水域に生息する。主鰓蓋骨が1点のみ出土した。岡山市内の遺跡では比較的検出量が多い魚種の一つであり、旭川下流～児島湾に多量に生息していたことが推測される。主鰓蓋骨が1点 (No.128) のみ出土している。

3. 鳥 綱 Aves

いずれも鷹狩りなどの獲物やワシタカ類への日常的な餌であった可能性が考えられる。魚類と同様検出量は少なかった。科属種が特定できた資料は以下の通りであるが、科の特定できなかったカモ類やキジ属程度の大きさの中型鳥類の左上腕骨 (No.8) が検出されている。

キジ目 Galliformes

キジ科 Phasianidae

キジ属 *Phasianidus* sp. indet.

陸上の山野に生息する。縄文時代～近世にかけて広く出土がみられる鳥綱である。土壙40より出土した尺骨 (No.13) は破片であったので種の特定ができなかったが、キジかヤマドリの可能性が考えられる。

ニワトリ *Gallus gallus domesticus* Brisson

堀より1点 (脛骨: No.133)、内堀より2点 (左大腿骨 (No.93)、左脛骨 (No.97)) が検出された。いずれにも切創が確認されず、解体されたものとする根拠は薄い、散乱した個体であることから、食用かイヌやワシタカ類の餌用に消費された可能性が考えられる。

ガンカモ目 Anseriformes

ガンカモ科 Anatidae

カモ類Aタイプ wild ducks A type

水域に飛来する渡鳥あるいは留鳥である。本資料はマガモ・カルガモ程度の体格であり、カモ類の中では比較的大きな体格の種類である。土壙40より右上腕骨 (No.11) が出土している

コウノトリ目 Ciconiiformes

サギ科 Ardeidae

アオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark

サギ科の中でも最も大きいアオサギが出土した (出土位置・層位不明)。江戸時代に食用とされていた鳥類の一つであり、本例も人間かワシタカ類等の食用に供された可能性が考えられる。同じ時期同じ二の丸内の大名屋敷地点からも下顎骨が検出されている (富岡 1998)。本地点からは左脛骨 (No.125) が堀より出土した。

4. 爬虫綱	Reptilia
カメ目	Testudinata
ウミガメ科	Cheloniidae gen. indet.

ウミガメ科の背甲骨板の破片が一点出土した (No.129)。岡山平野では、中世の百間川米田遺跡でも加工・損壊の見られるウミガメ科の背甲骨板が検出されているが、近くに所在する天瀬遺跡では江戸時代前～後期に属するウミガメの背甲骨板が検出されている。これらのウミガメ科の出土の特徴は、背甲骨板のみが出土し、四肢骨や頭蓋、脊椎、腹甲骨板が欠けている点が指摘される。

本資料には切創が外側に D1a タイプ、肋骨遠位端に Aa タイプがみられ、意図的に損壊されたものであることがうかがわれる。

5. 哺乳綱	Mammalia
--------	----------

今回、比較的多くの哺乳綱が検出された。同じ二の丸の内山下地区から出土した動物遺存体群と比較すると、この哺乳綱の出土量が顕著に多いことが、今回の調査資料の特徴である。これは、遺跡利用のあり方や付近の施設の特徴の違いが内容物に現れた可能性が高い。このように、同じ近世城内での動物遺存体内容の相違から場の機能が推定される研究例は少なく、岡山城二の丸のこれらの資料は極めて重要である。

ウシ目 (偶蹄目)	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin

中・近世の岡山で広くみられた小型在来和牛と考えられる。内堀より左上腕骨 (No.63)、土壙75より左大腿骨 (No.20) と左脛骨 (No.18)、土壙99より左中足骨 (No.45) が検出された。

出土した左脛骨 (No.18) の最大全長 (GL) の復元値より推定される体高は110～115cm程度であり、岡山の中近世のウシの中では中～大型の体格といえる。解体痕跡がみられることから、解体され皮革用や食用、イヌやワシタカ類への餌用に供されたものと推定される。ウシも二の丸の大名屋敷地点から切創を残した個体が検出されているが、今回の出土例も同様に多くの切創が確認できる。このことからみて、解体されたウシの骨格が内堀と土壙に廃棄されていたことが明確となった。

シカ科	Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck

岡山の山野に広く生息した哺乳類である。比較的小型の個体と大型の個体が検出された。本種も二の丸内大名屋敷から出土しているが、今回の調査では多量の骨格が検出された。今回の調査では包含層より13点、砂溜まりより1点、土壙より25点、内堀より37点、堀より7点、総計83点が検出された。他の動物遺存体が検出されていない包含層からの出土量が13点と多いことも本種の特徴である。83点中、明確な切創が確認できた骨格は34点であった。切創は軽微なものが多く、一部にはイヌやネズミの嚙跡が確認された。以上より皮革用や食用、あるいはイヌやワシタカ類の餌用として消費された可能性が考えられる。

出土部位は四肢骨が圧倒的に多く、脊椎は比較的少なく3点のみであった。角製品の材料となる鹿

第5章 考察

角は1点も検出されなかった。今回の調査地点のみならず、岡山城内の調査でもこの傾向はみることができる。これら以外の場所に、脊椎が廃棄されていたと考えられる。以上より、ニホンジカは枝肉の状態で城内に持ち込まれることが多く、肉を切り離す処理がなされた後、溝や土壌、堀に廃棄された可能性が高いと考えられる。

イノシシ科	Suidae
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.

野生イノシシか家畜ブタかの分類は困難であることからイノシシ類というカテゴリーで分類を行なった。本種も二の丸内大名屋敷から出土している。今回の調査では、土壌より6点（左尺骨No.37、左上腕骨No.41・47a、左脛骨No.22、左橈骨No.43・42）、内堀より1点（右橈骨No.115）、堀より1点（右頭蓋No.138）、総計8点が検出された。土壌95からは接合する骨格を含む4点が出土し、同一個体のまとまりである可能性があるが、それ以外の各遺構とも散漫な出土状況といえる。別の地点で解体された骨格が各遺構に廃棄・遺棄されたものであろう。出土部位は四肢骨が多く、頭蓋は少なく、脊椎は検出されなかった。切創も確認されることから、皮革用や食用、あるいはワシタカ類の餌用として消費された可能性が考えられる。

ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus

内堀より2点（左大腿骨：No.64、左脛骨：No.112）・堀より4点（頭蓋：No.134、下顎骨：No.127①・No.135、右橈骨：No.124①）・土壌87より1点（右中足骨No.36）の総計7点が出土した。No.112とNo.64、No.134とNo.135は接合関係が確認されたが、全てが同一個体とは考えられず、各遺構に解体され関節が外された骨格がある程度のまとまりを維持して廃棄・遺棄された可能性がある。

骨格の大きさから、中・近世の岡山で数多く出土している小型在来馬と共通したものであると考えられる。出土した骨格から体高を復元すると、左脛骨（No.112②）で90～100cm程度（G1値に基づく）であり、岡山の中近世のウマの中でも極小クラスの体格といえる。出土した骨格4点中3点である四肢骨類全てに明確な切創・解体痕跡がみられることから、解体され皮革用や食用に供されたものと推定される。

ネコ目（食肉目）	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck

土壌より25点（土壌17：21点、土壌63：1点、土壌81：1点、土壌82：2点）、内堀より12点、堀より2点が出土した。意図的に損壊された痕跡や骨折等にとまなう骨増殖の痕跡を残す資料が多く、粗放に扱われた個体と考えられる。本種も二の丸内大名屋敷から出土している。いずれの場合も頭部と四肢骨の骨格に偏っており、椎骨の出土量が少ない。切創も確認されることから、皮革用や食用、あるいはワシタカ類の餌用として消費された可能性が考えられる。

ネコ科	Felidae
イエネコ	<i>Felis catus</i>

比較的小型の個体がいずれも内堀から4点（右下顎骨（No.86）、右大腿骨（No.91）、左右脛骨（No.92、96））検出された。明確な切創は一切確認できず、意図的に解体されたものかは不明であるものの、骨格は部分的で中軸骨格である椎骨を欠いており、意図的に損壊された資料である可能性が考えられる。下顎骨（No.86）は第3、4前臼歯と第1後臼歯（永久歯）が生え揃っており、永久歯の萌出状況からは4ヶ月齢以上であるが、咬耗の様子も考えあわせると成～老齢と推定される。

サル目（霊長目）	Primates
ヒト科	Hominidae
ヒト	<i>Homo sapiens sapiens</i>

堀の土手の中から左頭頂骨（No.136、137）が出土した。発掘時の所見では、土堤を積み上げた土嚢の隙間の土壌から出土した可能性が高いとのことで、土堤築堤時に人骨を含んだ土砂をこの地点にもたらした可能性がある。発掘時以降の傷を除いて埋存前の切創や損壊はみられず、死因は特定できない。また、破片資料が部分的に出土しているのみであることから死亡当時の現位置を保っている可能性は極めて低く、死亡地点は別で、当該地域に移動した可能性が前述の通り高いであろう。ヒトの出土は城内でははじめてであるが、近接した近世の遺跡である天瀬遺跡では切創を残す個体が検出されている。

いずれも頭蓋で比較的薄いこと、鱗状・冠状・ラムダの各縫合が癒合していないことから若齢の可能性はあるが、年齢の特定は困難である。

3 考察

1590年より明治時代初頭に形成された岡山城二の丸跡外郭の包含層と土壌、堀等から検出された173点の動物遺存体は、遺構ごとに動物遺存体の種類と切創に特徴がみられた。

動物遺存体を出土した土壌は、その共伴遺物の特徴から大きくは二群に分けられる。

土壌1～42と土壌101～103は、明治時代初頭の廃城に伴って、周辺の武家屋敷から廃棄されたものと考えられる陶磁器や瓦を伴っている。出土した動物遺存体の内容は、土壌ごとに偏りがみられ、それぞれを廃棄した集団の廃棄物のまとまりを反映していると推定される。土壌30、40は魚類と鳥類が多く含んだ廃棄物、土壌17は中型の若齢以上のイヌ一頭を埋置したものである。このイヌの骨格からは、明確な切創は一切検出されなかったことから、意図的に屠殺・解体・処理されたものではないと推定される。

土壌43～100と土壌104～115は、1603～1632年にかけて製造された遺物類を含んでいるもので、広場造成の際に埋め込まれたもので、陶磁器・木器のような生活用具や瓦、金具、木材等の建築廃材を共伴している。この土壌群のなかで、土壌75、87はニホンジカを集中的に廃棄したものであり、1603～1652年頃に巻狩等によって得られたニホンジカの可能性が考えられる。

土壌出土資料に比べて、1603～1632年に形成された内堀や1590～1603年の堀から出土した動物遺存体には切創のみられる率が若干低いことが特徴として指摘される。これは、両者の廃棄の過程が異なっている点が大きく影響したと考えられる。この堀は、宇喜多家・小早川家が居城とした時期に形成

され廃棄されたものであり、ヒトやウミガメ科を出土したように、動物遺存体の多様な点も特徴的である。ことに埋め立ての仕切として築かれた土手の土俵中からも動物遺存体が検出されている点は、土俵の土壌を調達した地点が、動物遺存体が散乱したり包含されていた地点であることをうかがわせる。

以上のように、出土した動物遺存体の多様性より、城郭の場の機能の時期的変遷や特徴を詳細に比較分析することがより一層容易になったことが指摘できる。

切創や破損痕跡、出土の様相からみて、出土動物遺存体の一部は城内での食用とイヌやワシタカ類への餌用として消費された可能性がうかがわれる。ただし、堀より出土したウミガメ科の背甲板は、食用なのか調度品の残骸や端なのか、検討の余地を残している。他の岡山城跡の動物遺存体と比べると軟体動物門の魚上綱の出土量が極めて少ないことも特徴である。

謝辞

岡山県立古代吉備文化財センターの各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析と資料抽出にあたっては 岡山理科大学宮本葵さん、藤原圭子さん、塩谷勇一郎君、太田謙君、上岡真帆さん、谷村彩さんに御助力頂いた。さらに、東北大学文学部考古学研究室須藤隆先生、奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 阿部 永他 1994『日本の哺乳類』（東海大学出版局）
- 阿部 宗明 1987『原色魚類大図鑑』（北隆館）
- 今泉 吉典、岡田弥一郎 1983『学研生物図鑑 動物』（学研）
- 内田 亨 1979『新編日本動物図鑑』（北隆館）
- 内田 亨他 1972『谷津・内田 動物分類名辞典』（中山書店）
- 内田 亨 1979『新編日本動物図鑑』（北隆館）
- 大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13, pp. 51-74
- 大泰司紀之 1983「シカ」『縄文文化の研究 2 生業』pp. 122-135
- 岡田 要（校閲）・今泉 吉典（著） 1960『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）
- 岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965『新日本動物図鑑』下（北隆館）
- 金子 浩昌 1984『貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり』考古学シリーズ⑩（東京美術）
- 金子 浩昌 1995「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡 2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98：pp. 597-604
- 金子 浩昌 1996「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡 3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104：pp. 282-285
- 蒲原 稔治 1966『標準原色図鑑全集 第4巻 魚』（保育社）
- 小池 裕子、大泰司紀之 1984「遺跡出土ニホンシカの年齢構成からみた狩猟圧の時代変化」『古文化財の自然科学的研究』pp. 508-517
- 小池 裕子、林 良博 1984「遺跡出土ニホンイノシシの年齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』pp. 519-524
- 後藤 仁敏、大泰司紀之編 1986『歯の比較解剖学』（医師薬出版株式会社）
- 高野 伸二 1982『フィールドガイド日本の野鳥』（日本野鳥の会）
- 富岡 直人 1998「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告 岡山城二の丸跡』pp. 136-163
- 富岡 直人 2000「新蔵町3丁目遺跡出土動物遺存体」『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31：pp. 427-438

- 富岡 直人 2000「井手天原遺跡出土動物遺存体」『岡谷大溝散布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須島田遺跡、井手見延遺跡、井手天原遺跡—国道429号線改良に伴う発掘調査—』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156（岡山県教育委員会）：pp. 224-237 pp. 139-145、235-237
- 富岡 直人 2001「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』（岡山県教育委員会）：pp. 89-121
- 西中川 駿 1989『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究—特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）
- 林 壽郎 1968『標準図鑑全集 動物Ⅰ』（保育社）
- 林 壽郎 1968『標準図鑑全集 動物Ⅱ』（保育社）
- 林田 重幸、山内 忠平 1954「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2（2-4）：pp.122-126
- 林田 重幸、山内 忠平 1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6:146-156
- 林田 重幸 1957「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28（5）：pp. 301-306
- 松井 章 1995「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61：pp. 55-71
- Angela von den Driesch 1976 “A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites”
Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

動物遺存体属性表凡例

部 分 dia：骨幹部、prox：近位端、dist：遠位端

色 調 br：褐色

計測値 GL：最大全長、BFCr：前位関節最大幅

破 損 cm：切創、sp：スパイラル剥離

成長度 f：化石化終了、uf化石化未了

計測値 各部位の計測値のうち数字で計測点を示しているものはDriesch（1976）による。

整理 No.	地区	遺構	階位	重層 (g)	分類記号	大分類	小分類	部位	LR	部	分	成長度	色調	計測値	風化	破損	備考	
1	128 外郭西区	堀	下層	233	3	硬質炭素	ボラ科	主軸蓋骨	L	関節部+dia		不明	br	関節最大径径8.27	viv	不明		
2	9 外郭東区	土蔵30	埋土	052	3	硬質炭素	マダイ	上蓋骨	R	上位		不明	br	不明	viv	不明		
3	130 外郭西区	堀	埋土	287	3	硬質炭素	マダイ	前蓋骨	LR	上位		不明	br	不明	viv	不明	火を受けている	
4	10 外郭東区	土蔵20	埋土	071	3	硬質炭素	マダイ	前上蓋骨	L	dia		不明	br	不明	viv	前位、後位cm(Aaタイプ)		
5	4 外郭西区	土蔵25A	埋土	130	3	硬質炭素	マダイ	前上蓋骨	R	完形		不明	br	全長40.68	viv			
6	7 外郭東区	土蔵30	埋土	049	3	硬質炭素	マダイ	前上蓋骨	L	dist		不明	br		viv			
7	12 外郭東区	土蔵40	埋土	090	3	硬質炭素	マダイ	前上蓋骨	L	前位+dia		不明	br		viv			
8	24 外郭西区	土蔵40	埋土	270	3	硬質炭素	目不明	背骨	M	完形		?	白色	Bfcr388	viv			
9	18 外郭東区	土蔵40	埋土	015	3	硬質炭素	目不明	背骨	M	完形		不明	br	残存全長32.54	viv		火を受けて白色に変化、砂や土が混入している	
10	49 T6	土蔵63	埋土	036	3	硬質炭素	目不明	尾椎	M	椎体		不明	白色		なし			
11	48 T6	土蔵63	埋土	080	3	硬質炭素	目不明	椎体	M	椎体		不明	白色		なし			
12	129 外郭西区	堀	下層	154.8	5	爬虫類	ウミガメ	背甲板	?	dia		?	br		viv			
13	125 外郭西区	堀	下層	4.24	6	鳥類	アオオナギ	脛骨	L	dia+dist		dif	br	Bd11.34 Dd12.66 SC:5.40	viv	sp骨幹部、cmなし?	やや小型	
14	11 外郭東区	土蔵40	埋土	2.13	6	鳥類	カモ類Aタイプ	上脛骨	R	dia+dist		f	br	遠位端最大幅:13.69	viv	骨幹部外側位cm(Diaタイプ)		
15	13 外郭東区	土蔵40	埋土	068	6	鳥類	キジ類	尺骨	R	dia		?	br		viv			
16	8 外郭東区	土蔵30	埋土	4.43	6	鳥類	中型	上脛骨	L	dia		?	br		viv			
17	133 T6	堀	埋土	2.55	6	鳥類	ニワトリ	脛骨	L	dia+dist		dif	br	Dd12.11 Dd13.60 Sd7.66	viv	内側近位部cm(Diaタイプ、Aaタイプ)		
18	97 内郭東区	内堀	埋土	8.46	6	鳥類	ニワトリ	脛骨	L	完形		f	br	Gl:135.98	viv	不明		
19	93 内郭東区	内堀	埋土	6.50	6	鳥類	ニワトリ	大腿骨	L	完形		f	br	Gl:39.20 Lm88.60 Sc7.69 Bp18.43 Bc18.44 Dd16.49 Dpl13.26	viv	なし?		
20	96 内郭東区	内堀	埋土	10.40	7	哺乳類	イエネコ	脛骨	L	完形		dpl	明褐色	Gl:136.75 Sd7.56 Bp20.68 Dp22.85	viv	なし?		
21	92 内郭東区	内堀	埋土	5.29	7	哺乳類	イエネコ	脛骨	R	dia+dist		puif	br	Bd14.23 Sd6.16	viv	なし?		
22	86 内郭東区	内堀	埋土	5.57	7	哺乳類	イエネコ	下顎骨	R	完形(11×12×13×、P3○P4○、M1○)		MIエナメル質一部欠損、成~老	br	164.14 250.08 356.30 452.30 520.67	viv	なし?		
23	91 内郭東区	内堀	埋土	6.14	7	哺乳類	イエネコ	下顎骨	R	完形(大腿骨部欠損)		dpl、途中	br	SD7.82 Bd18.66 Dd17.51 GL:108.98	viv	なし?		
24	142 外郭東区	土蔵17	埋土	13.07	7	哺乳類	イヌ	下顎骨	L	P4、M1、M2、M3		若齢以上	br	M1歯冠長20.74 M1歯冠幅9.06 P4△M1○ M2△ M3○	viv	なし?	140と接合	
25	143 外郭東区	土蔵17	埋土	9.70	7	哺乳類	イヌ	下顎骨	R	P4、M1、M2、M3		若齢以上	br	P4△M1○ M2△ M3○	viv	なし?	143~162と同一個体	
26	85 内郭東区	内堀	埋土	24.15	7	哺乳類	イヌ	脛骨	R	完形		f	br	L.A 20.78 L.A.R 19.99 GL 133.08 SB 8.84 SH 17.58 L.Po 25.63	viv	cm(Diaタイプ骨質白)		
27	159 外郭東区	土蔵17	埋土	0.82	7	哺乳類	イヌ	距骨	L	dia+骨幹部		f	br		viv	なし?	142~157、159~162と同一個体	
28	146 外郭東区	土蔵17	埋土	2.24	7	哺乳類	イヌ	頸椎	M	椎体(左側突起一部欠損)		f	br		viv	なし?	142~144、146~162と同一個体	
29	83 内郭東区	内堀	埋土	33.15	7	哺乳類	イヌ	肩甲骨	R	完形		f	br	Gl.P 30.22 S.L.C 26.10 HS 139.22	viv	cm内側B1aタイプ)		
30	82 内郭東区	内堀	埋土	15.30	7	哺乳類	イヌ	肩甲骨	L	完形		f	br	Gl.D 25.56 S.L.C 21.42 HS 117.96	viv			
31	29② 外郭西区	土蔵81	埋土	2.61	7	哺乳類	イヌ	肩甲骨	R	dia		uf	br		viv		29①と同一個体	
32	149 外郭東区	土蔵17	埋土	1.03	7	哺乳類	イヌ	後頭骨	L	後頭額		不明	br		viv	なし?	142~147、149~162と同一個体	
33	150 外郭東区	土蔵17	埋土	1.23	7	哺乳類	イヌ	後頭骨	R	後頭額		不明	br		viv	なし?	142~148、150~162と同一個体	
34	107 内郭東区	内堀	青灰色土	28.10	7	哺乳類	イヌ	下顎骨	L	完形(11×12×13×、P1×P2○P3×P4○、M1○M2○M3×)		成~老、M3萌出	br	1:120.35 2:119.95 3:114.76 4:104.60 5:100.16 6:104.60 7:67.46 8:62.55 9:58.26 10:29.83 11:33.75 12:29.42 13:19.44 13B&C0 14:19.44 15:17.92 15B&C2 17:10.96 18:48.12 19:21.33 20:19.87 1:140.30 2:139.25 3:133.92 4:122.22 5:116.54 6:122.08 7:117.75 8:69.72 9:84.64 10:32.34 11:37.58 12:32.82 14:20.48 19:23.46 20:22.12 18:57.20	viv	不明		
35	114 内郭東区	内堀	埋土	49.42	7	哺乳類	イヌ	下顎骨	R	完形(欠損)		成~老	br	突起下部外側cm(Diaタイプ、長3.14)、新突起外側cm(Diaタイプ)新94.69	viv			
36	157 外郭東区	土蔵17	埋土	2.05	7	哺乳類	イヌ	尺骨	L	滑車凹痕		f	br		viv	なし?	142~155、157~162と同一個体	
37	30 外郭西区	土蔵62	埋土	9.88	7	哺乳類	イヌ	尺骨	R	dia+dist		dpl	br	残存全長135.38 DPA 21.36 BFC:16.00 SDO:17.28	viv	骨幹部後位cm(Diaタイプ、長3.14、1ヶ所)	32と同一個体	
38	152 外郭東区	土蔵17	埋土	4.92	7	哺乳類	イヌ	上顎骨	L	P4、M1、M2、P47、M1○、M2×		f	br	M1歯冠長11.90 M1歯冠幅11.95	viv	なし?	142~150、152~162と同一個体	
39	153 外郭東区	土蔵17	埋土	4.48	7	哺乳類	イヌ	上顎骨	R	P4、M1、M2、P4○、M1×、M2×		f	br		viv	なし?	142~151、153~162と同一個体	
40	88 内郭東区	内堀	埋土	51.03	7	哺乳類	イヌ	上脛骨	L	完形		f	br	Gl 160.56 GLC 156.13 Bd 34.26 SD 14.65 Bp 32.23 Dp 39.79 遠位端關節部	viv			

整理 No.	No.	地区	遺構	階位	重量 (g)	分類記号	大分類	小分類	部位	LR	部	分類	成長度	色調	計測値	風化	破損	備考	
70	43	外郭東区	土壘95	埋土	5.22	7	哺乳綱	イノシシ類	桡骨	L	dist	duf	br			viv		42と接合、39と同一個体	
71	42	外郭東区	土壘95	埋土	34.27	7	哺乳綱	イノシシ類	桡骨	L	prox+dia	duf, pf	br		GL:137.15, Bp:26.70, Dp:17.97, SD:15.75, Bd:29.88, Dd:24.48	viv		43と接合、39と同一個体	
72	115	内堀東区	内堀	埋土 (暗褐色土) L=2.7	39.30	7	哺乳綱	イノシシ類	桡骨	R	dia+prox	pf, duf	br		Cd:28.50	viv		骨幹部近位寄イヌ嚙痕、cm不明	
73	59	外郭東区	包含層	埋土	10.94	7	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	L	dia+dist	df				viv			
74	24	外郭西区	土壘80	埋土 (暗褐色土) L=2.7	5.66	7	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨	R	完形	f	br		全長36.16、近位関節最大径14.70	viv			
75	55	外郭東区	包含層	埋土 (暗褐色土) L=2.7	3.91	7	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨	I	完形(dist+一部欠損)	f			GL:45.70, 近位関節最大径7.81, Bp:15.55	viv		不明、偽切刃外側溝状	
76	57	外郭東区	包含層	埋土 (暗褐色土) L=2.7	4.42	7	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨	r	dia+prox	f			近位関節最大径38.55, Bp:15.40	viv		風化著しい	
77	131	T6	堀	埋土	26.30	7	哺乳綱	ニホンジカ	胸椎	M	完形	ca,cr,f	br		椎体前後最大径28.78	viv			
78	132	T6	堀	埋土	27.58	7	哺乳綱	ニホンジカ	胸椎	M	完形	ca,cr,f	br		椎体前後最大径39.27	viv			
79	140	外郭東区	包含層	暗褐色	8.44	7	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	L	完形(近位端片削一部欠損)	f	br			viv			
80	116	T10・11	内堀	埋土	41.81	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	完形	duf	br		GLP:36.36 BG:24.36 LG:26.66 SLC:18.32 HS:167.77 DHA:170.72 Ld:192.40	viv			
81	5	外郭西区	土壘25A	埋土	10.36	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	prox+dia	f	br		GLP:34.36 LG:27.39 BG:23.54 SLC:16.02 DHA:156.56 HS:150.38	viv		後位cm(D1aタイプ)	
82	102	外郭東区	堀下層	堀下層	34.77	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	完形	f	br		BG:25.86 LG:29.56 GLP:40.04 SLC:23.42 HS:193.65	viv		不明	
83	113	内堀東区	内堀(溝脚付近)	青灰色土	38.88	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	dia+dist	df	br		SLC:19.80 GLP:35.35 BG:26.66 LG:27.65	viv		骨幹部近位寄+近位寄イヌ嚙痕、頭部内側外側cm(D1aタイプ、幅約0.6mm、長約5mm、3ヶ所)	
84	34①	外郭東区	土壘87	埋土	49.87	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	dia+dist (ほぼ完形一部prox欠け)	f	br		GL:166.60 HS:166.70 DHA:17.00 Ld:102.44 GLP:39.21 SLC:19.70 BG:26.45 LG:29.93	viv		頭部内面外面cm(D1aタイプ)	
85	25	外郭西区	土壘80	埋土	48.04	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	完形	f	br			viv		同一個体か？	
86	52	外郭西区	包含層	暗褐色	29.31	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	完形	f	br		GLP:35.94 LC:26.10 SLC:19.74	viv		前後位頸部cm(D1aタイプ)	
87	105	内堀	土壘75	埋土	38.89	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	完形(端突起上位欠損)	f	br		BG:26.45 LG:29.93	viv		関節部cm(D1aタイプ)	
88	176	外郭東区	土壘75	青灰色土	49.62	7	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	完形	f	br			viv		前後位頸部cm(D1aタイプ)	
89	111	内堀東区	内堀	下層	25.76	7	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	L	dia+関節部完形	?	br		BPC:18.38	viv		後位cm(D3a)、近位寄イヌ嚙痕	
90	98	内堀東区	内堀	埋土	10.66	7	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	R	dia+関節部	duf	br		BPC:19.35	viv		sp骨幹部近位寄、骨幹部前面cm(D1aタイプ、長約1.09、5ヶ所)	
91	123	外郭西区	堀	下層	9.66	7	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	R	dia+関節部	puaf	br		BPC:16.68 DPA:30.55	viv		dia近位寄り前面cm(D1aタイプ、幅1.25mm、長1.75×2)	
92	76	内堀東区	内堀	埋土	62.65	7	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	dia+dist	df	br		Bd:40.00 SDR:19 Bc:33.16	viv		骨幹部後面cm(D3aタイプ、長4.25、幅3.28)関節部2cmなし、骨幹部前面遠位寄cm(D1aタイプ)	
93	106	内堀東区	内堀	青灰色土	130.33	7	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	R	完形	f	br		GL:200.80 SLC:181.85 Bp:48.47 PAW:39.23 SD:19.31 Bd:37.92 Bc:33.42 Dd:35.63	viv		骨幹部外側cm(D1aタイプ、長約3mm、3ヶ所)、骨幹部外側cm(D3aタイプ、長約2.00、長2.20)	
94	60	外郭西区	包含層	真砂土	54.00	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	dia	df?	br			viv		骨幹部前面遠位端寄cm(D3aタイプ)、骨幹部左側右内側縁切削、遠位端+近位端イヌ嚙痕	
95	40	外郭東区	土壘95	埋土	96.44	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	dia+dist	df	br		SD:18.63 Bc:32.82 Dd:25.90	viv		prox(イヌ嚙痕)、骨幹部内側cm(D1aタイプ、幅0.6mm、長3.25mm、1ヶ所)、骨幹部cm(D1bタイプ、幅0.82mm、長5.00)	
96	54	外郭東区	包含層	暗褐色土 L=2.7	41.48	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	dia+dist	df	明褐色		Bd:34.50 Dd:25.18 SD:22.83	viv		不明(風化のため)	風化著しい
97	66	内堀東区	内堀	埋土	93.42	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	dia+dist	df, puaf	br		Sd:18.54 Bc:31.08 Dd:25.64 残存全長246.15	viv		骨幹部前面cm(D1aタイプ、幅1.83mm)	風化著しい、79と接合。斜めに力が加わっている。
98	121	外郭西区	堀	上層	130.74	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	dia+dist	df	br		SD:23.55 Dd:33.13	viv		偽切削内側 dia後面cm(D1aタイプ)、SP:dia+dist、近位端イヌ嚙痕	

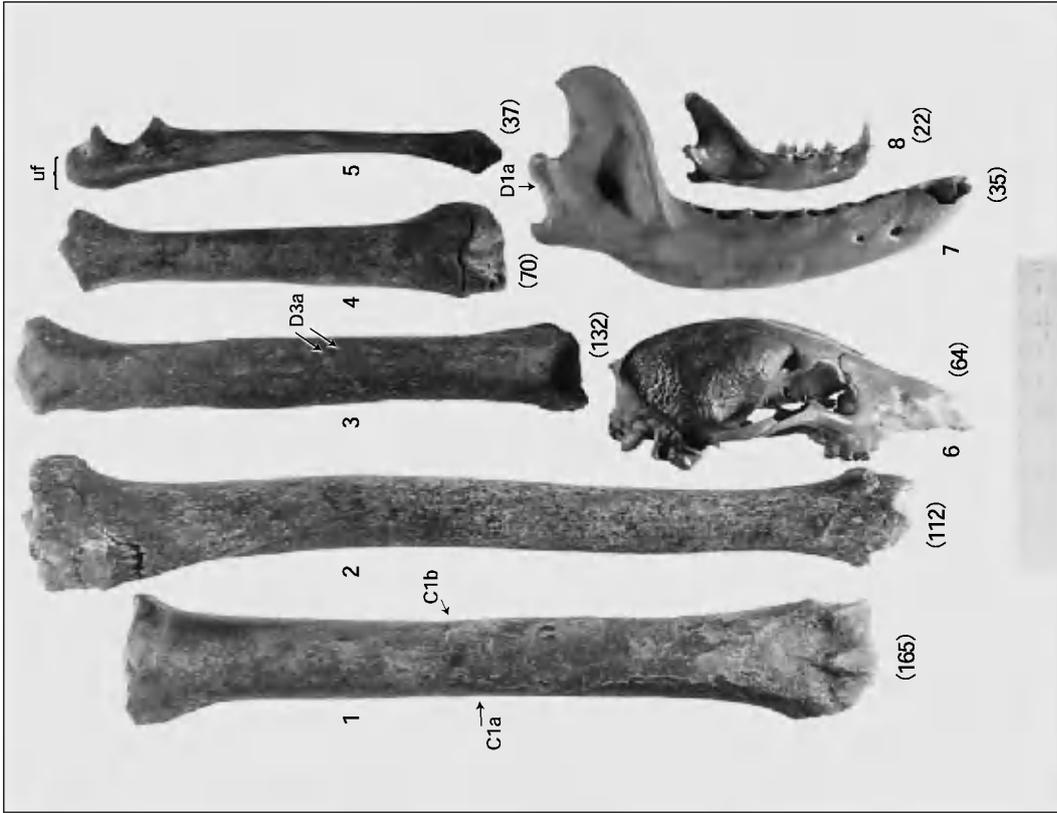
第3節 岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析

整理 No.	No.	地区	遺 跡	階 位	重 量 (g)	分類 記号	大分類	小分類	部 位	LR	部 部	分 類	成 長 度	色 調	計 測 値	風 化	破 損	備 考	
99	67	内堀東区	内堀	埋土	111.88	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形		d,pf	br	Bp49.16 Dp52.23 Ds32.13 Dd26.96 Sd19.50 GL266.6 L1246.45	viv	cmD1aタイプ幅320mm、2ヶ所、近位端イヌ歯痕、偽切歯外側骨幹部		
100	68	内堀東区	内堀	埋土	117.59	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形		f	br	Bd54.60 Pd51.26 Bd32.53 Dd27.15 Sd20.27 GL253.10	viv			
101	69	内堀東区	内堀	埋土	134.92	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形		d,pf	br	Sd22.15 Bd34.84 Dd28.38 Bp53.60 Dp56.48 GL281.65 L1261.70	viv	骨幹部後位右内側寄りcmD1aタイプ、幅14mm程度、5ヶ所		
102	38	外郭東区	土堀95	埋土	124.94	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形(前位一部欠損)		f	br	GL282.25 Sd23.42 Bd32.40 Dd26.88	viv		骨幹部遠位部へ受けたためか劣化、風化らしい	
103	46	T 6	土堀63	下層	39.55	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia		?	br	SD18.68 Bd31.81 Dd24.76 Bp53.34 Dp51.52 GL258.00 L1239.15	viv	骨幹部後位cmD1aタイプ、幅約9mm、3ヶ所	風化著しい、79と接合、斜めに力が加わっている。	
104	65	内堀東区	内堀	埋土	93.35	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia + dist		d,f, puf	br	Bd35.33 Dd27.45 Sd21.49 残存全長	viv	不明		
105	71	内堀東区	内堀	埋土	120.7	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia + dist		puf	br	SD20.92 Bd32.98 Dd26.34	viv	dia後位D3a27.3mm斜めに力が加わっているdia後位D1a(6mm程度約50ヶ所)左内側	118と接合	
106	119	T 10・11	内堀	埋土	109.64	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia + dist		puf, d,f	br		viv			
107	122	外堀西区	堀	下層	108.92	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia + dist		d,f, puf	br	BD29.44 Dd24.44 SD18.28 残存全長255.55	viv	骨幹部分側cmD3aタイプ、幅約80mm、長約35×2)、骨幹部後位cmD1aタイプ、幅0.90mm、長3.56mm)、骨幹部近位寄cmD1aタイプ、幅0.45、長3.63×1)		
108	79	内堀東区	内堀	埋土	14.79	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	prox		puf	br	85に記述	viv	後位骨幹部cmD1aタイプ、幅2.14、3ヶ所、前位偽切歯幅6.97	65に接合	
109	103	外郭東区	内堀	堀下層	80.29	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	prox		p,f	br	Bp50.90 Dp59.31 SD20.22	viv			
110	70	内堀東区	内堀	埋土	95.13	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	完形		d,pf	br	Bp54.65 Dp50.68 Bd32.56 Dd27.17 SD20.24 GL254.05 GL246.10 L1233.45	viv	骨幹部後位偽切歯		
111	34②	外郭東区	土堀87	埋土	193.47	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	完形		d,pf	br	GL305.65 Bp50.89 Dp58.96 SD21.51 Bd36.10 Dd29.20	viv	骨幹部後位偽切歯		
112	50	外郭東区	砂堀まり	上層	104.84	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	完形(左外側prox一部欠損)		d,pf	br	GL272.50 SD21.02 Bd32.18 Dd26.80	viv	近位端後位+骨幹部後位擬切歯、骨幹部前位cmD1aタイプ		
113	58③	外郭東区	包含層	(階級未定)		7	哺乳綱	ニホンジカ	第3足根骨	L	完形		f	br	最大全長12.54	viv			
114	19	外郭東区	土堀75	埋土	66.40	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	dia		d,puf	br	Sd16.96	viv	近位寄イヌ歯痕、cm不明		
115	101	外郭東区	内堀	堀下層	44.89	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	dia		puf	br		viv	sp骨幹部遠位端、遠位端前位+後位cmD1aタイプ、2ヶ所		
116	35	外郭東区	土堀87	埋土	76.55	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	dia + dist		f	br	Bd51.02 Dd68.17	viv	骨幹部cmD3aタイプ、sp骨幹部、関節部7cm		
117	62	内堀東区	内堀	埋土	110.2	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	dia + dist		d,f	br	Bd4(49.11) Dd62.64 SD21.78	viv	骨幹部後位+近位端イヌ歯痕		
118	17a	外郭東区	土堀75	埋土	123.9	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	dia + dist		d,f	br	Bd4(49.40) SD22.28 Dd(65.64)	viv	sp先端磨滅		
119	99	内堀東区	内堀	砂堀層	37.62	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	prox + dia		p,f	br	DC21.54	viv	sp先端磨滅		
120	104	外郭東区	内堀	堀下層	62.18	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	prox + dia		f	br	DC25.60 Bp59.22 SD21.24	viv	sp、骨幹部後位cmD3aタイプ、幅約2.5mm、長約3mm		
121	16	外郭西区	土堀77	下層	130.9	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	完形		d,pf	br		viv			
122	61	内堀東区	内堀	埋土	152.12	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	完形		d,pf	br	GL241.90 Bp52.00 SD21.59 Bd50.14 Dd66.94 DC25.16 GLC232.35	viv	近位端前位擬切歯、骨幹部内側cm、骨幹部前位cmD3aタイプ、幅約4mm、長約8mm		
123	139	外郭西区	堀	階級未定	84.43	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	L	完形		f	br	Bp50.64 Bd41.14 SD17.78 GL256.35	viv			
124	2	外郭西区	土堀5	埋土	40.55	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia		f	br		viv			
125	21	外郭東区	土堀75	埋土	56.38	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia		?	br		viv			
126	72	内堀東区	内堀	埋土	82.59	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia		puf	br	SD20.90	viv	骨幹部前位偽切歯		
127	87	内堀東区	内堀	埋土	27.93	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia		不明	br	SD18.26	viv	dia前位cmD1aタイプ、幅14.70、dia後位cmD1aタイプ、幅3.78mm)、sp(骨幹部)		
128	118	T 10・11	内堀	埋土	80.53	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia		p,d,f	br	SD21.12	viv	骨幹部前位D3aタイプ、幅5mm程度、5ヶ所、骨幹部後位D1aタイプ、幅1mm程度、1ヶ所、幅4.5mm程度4ヶ所	119と接合	

整理 No.	No.	地区	遺構	階位	重層 (g)	分類記号	大分類	小分類	部位	LR	部	分類	成長度	色調	計測値	風化	破損	備考
129	1	外郭西区	土層5	埋土	16.18	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dist+dia	f	br	Bd 42.16	viv	右側位cm(D1a・B1aタイプ)	2と接合	
130	6	外郭西区	土層25B	埋土	15.49	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	完形	f	br	Bd 52.47 SD 23.22 DC 26.52	viv			
131	51	外郭東区	砂層39	上層	94.61	7	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	完形(回転子欠損)	f	br	Bp 32.26 SD 20.00 Bd 29.30 Dd 21.82 GL 1.77	viv	骨幹部前位cm(D3aタイプ)、1ヶ所、幅4.77、長		
132	23	外郭西区	土層79	埋土	56.07	7	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	完形	f	br	Bp 32.26 SD 20.00 Bd 29.30 Dd 21.82 GL 1.77	viv	不明	141と接合	
133	141	外郭東区	包含層	暗褐色	3.40	7	哺乳綱	ニホンジカ	中心線足屈	L	左外側	f	br	不明	viv			
134	74	内郭東区	内層	埋土	61.07	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	完形	f	br	GL 201.35 L1 93.20 Bp 23.25 Dp 25.26 SD 15.20 Bd 27.78 Dd 19.00 DD 13.67	viv	骨幹部前位奇偽切削、骨幹部後位cm(D1aタイプ、長4.50×2ヶ所)	73と接合	
135	58①	外郭東区	包含層	(暗褐色) L=2.7	52.87	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	完形(一部欠損)	f	明褐色	GL 32.55 近位関節最大高:18.82	viv		風化著しい	
136	56	外郭東区	包含層	(暗褐色) L=2.7	2.27	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	完形(右外側一部欠損)	f	明褐色	GL 32.55 近位関節最大高:18.82	viv		風化著しい	
137	89	内郭東区	内層	埋土	21.39	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	dia	?若齢程の大きさ	br		viv			
138	53 T 5	包含層	暗褐色	33.55	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	prox+dia	df	br		viv				
139	108	内郭東区	脚付瓦	青灰色土	67.02	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	dia+prox	cut p.f	br	SD 15.12 Bp 23.65 Dp 25.41 DD 13.51 残存全長218.20	viv	骨幹部前位近位高cm(D1aタイプ、長約4.5mm、5ヶ所)、骨幹部近位奇イヌ歯痕		
140	73	内郭東区	内層	埋土	61.16	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	完形	f	br	GL 201.75 Bp 24.14 Dp 25.16 Bd 28.06 Dd 19.10 SD 15.32 GL 1.92.70 DD 14.10	viv	骨幹部後位cm(D1aタイプ、長約2.00mm、2ヶ所)	74と同一個体	
141	75	内郭東区	内層	埋土	87.30	7	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	完形	f	br	GL 22.55 Bp 26.44 SD 18.55 Bd 29.33 Dd 20.60 DD 15.62 Dp 27.87	viv	なし?		
142	58②	外郭東区	包含層	(暗褐色) L=2.7	7	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨	I	prox+dia	p.f	br	近位関節最大高:20.24	viv				
143	78	内郭東区	内層	埋土	40.55	7	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	L	完形	d.p.f	br	GL 187.35 P1 184.85 L1 181.15 SD 19.28m Bp 31.42 Bd 28.97	viv	骨幹部前位偽切削、骨幹部の中程に火をかけたためか黒褐色に変化		
144	26	外郭西区	土層80	埋土	54.25	7	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	dia+prox	cut p.f	br	Bp 33.68 SD 20.02 残存全長:168.56	viv	骨幹部後位cm(D1aタイプ、長6.3mm程度×6ヶ所)	同一個体か?	
145	77	内郭東区	内層	埋土	63.56	7	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	dia+prox	cut p.f	br	Bp 38.56 Dp 22.54 SD 20.95 残存全長:198.45	viv	不明		
146	33	外郭西区	土層84	埋土	87.87	7	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	R	完形	d.p.f	br	GL 210.70 Bp 36.32 Dp 22.28 SD 24.83 Bd 32.00 Dd 23.49	viv	不明	風化が著しい、獸分と砂質の付着が著しく、特に、下部が風化している。	
147	117	T 10・11	内層	埋土	66.32	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	L	完形	f	br	GL 193.25 Bp 26.88 SD 18.00 Bd 28.12 Dd 17.92 DD 13.48	viv	イヌ歯痕全面、遠位端かつ車部cm(C1aタイプ、幅4.75、長4.49)		
148	15	内郭東区	内層	暗灰色土	68.04	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	L	完形	f	br	GL 187.60 SD 18.58 Bp 28.04 Dp 20.46 Bd 28.66 Dd 19.50 DD 13.68	viv	前位cm(D1aタイプ)		
149	15	外郭西区	土層71b	埋土	57.51	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	L	完形	f	br	Bp 26.05 GL 190.64 Bd 26.67 遠位端最大幅:26.58 SD 11.96	viv	不明		
150	27	外郭西区	土層80	埋土	47.46	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	R	dia+prox	cut p.f	br	GL 188.60 Bp 26.49 Dp 20.34 SD 18.74 Bd 28.18 Dd 19.53 DD 13.4	viv	骨幹部cm(D1aタイプ)	同一個体か?	
151	80	内郭東区	内層	埋土	48.81	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	R	完形	f	br	不明	viv			
152	110	内郭東区	内層	下層	74.17	7	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	R	完形	d.p.f	br	GL 188.60 Bp 26.49 Dp 20.34 SD 18.74 Bd 28.18 Dd 19.53 DD 13.4	viv	なし?		
153	127-②	T 6	瓶	埋土		7	哺乳綱	ニホンジカ	腰椎	M	棘突起	f	br		viv	棘突起上位cm(C3aタイプ)、後位sp		
154	37	外郭東区	土層67	埋土	14.58	7	哺乳綱	ニホンジカ	肋骨	R	完形	f?	br	残存全長:202.60	viv	骨幹部近位奇(ネズミ歯痕)、骨幹部近位奇+遠位奇(イヌ歯痕)		
155	3	外郭西区	土層13a	埋土	2.36	7	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	R	dia	f	br	不明	viv			
156	63	内郭東区	内層	埋土	154.2	7	哺乳綱	ウシ	上腕骨	L	dia+dist.	df	br	BT 64.93 SD 31.76	viv	dist(イヌ歯痕)	風化著しい	
157	18	外郭東区	土層75	埋土	362.50	7	哺乳綱	ウシ	脛骨	L	完形 (158と同一個体)	d.p.f	br	SD 33.75 GL 4325.70 Bd 58.12 DD 47.26	viv	遠位端後位cm(C1aタイプ、深1.5、長8.00×2ヶ所)骨幹部後位cm(D3aタイプ、幅5.86、長7.00)	20とは同一個体	
158	20	外郭東区	土層75	埋土	471.30	7	哺乳綱	ウシ	大腿骨	L	完形(大転子欠損)	f	br	GL C 321.90 SD 31.90 Bd 89.83 Dd 113.15 DC 42.64	viv	骨幹部内側cm(D3aタイプ、幅2~6、長約117mm×2ヶ所)	18とは同一個体	
159	45	外郭西区	土層69	埋土	37.76	7	哺乳綱	ウシ	中足骨	L	dia+dist.	puf	br	Bp 40.95 Dp 35.52 SD 19.79	viv	prox+dist(イヌ歯痕)	風化著しい	
160	44	外郭東区	土層95	埋土	31.27	7	哺乳綱	偶蹄目	大腿骨	R	dia	?	br		viv	prox+dist(イヌ歯痕)		

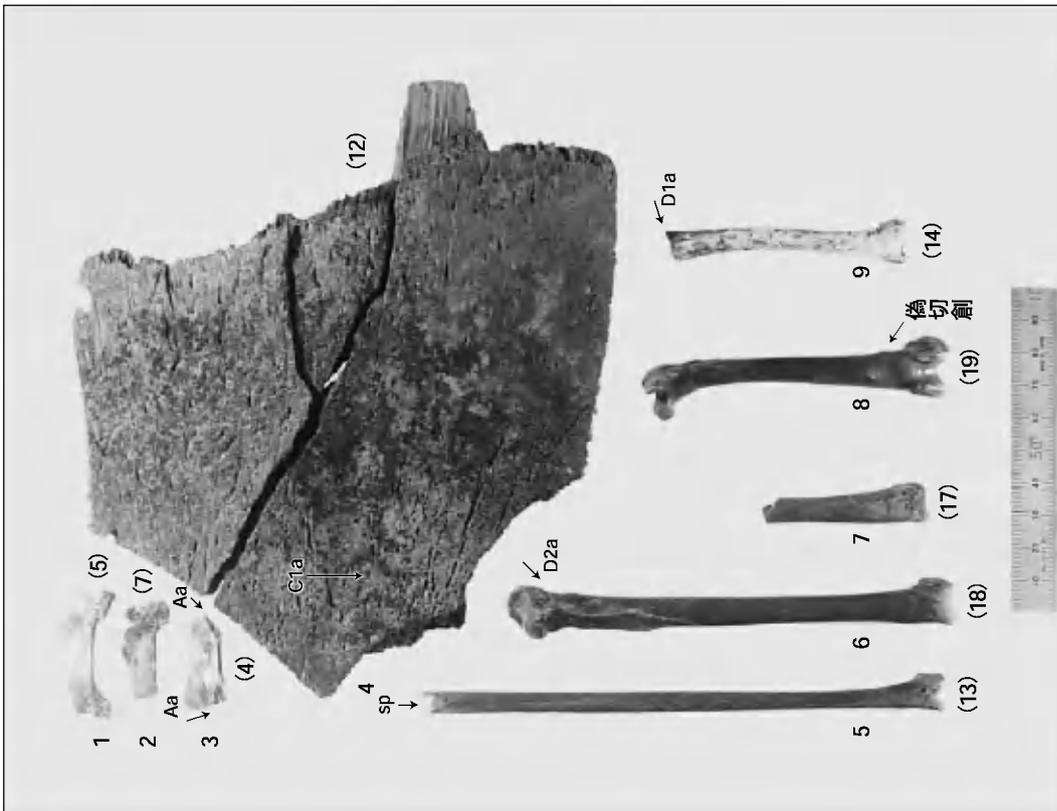
第3節 岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析

整理 No.	No.	地区	遺 跡	階 位	重量 (g)	分類 記号	大分類	小分類	部 位	LR	部 分	成 長 度	色調	計 測 値	風化	破 損	備 考
161	127 ①	外郭西区	堀	埋土	395.10	7	哺乳綱	ウマ	下顎骨	LR	完形(下顎体・筋突起・ 関節突起)1.(P2× P3○・P4○・M1○・ M2○・M3○)・R(P2○・ P3○・P4○・M1○・ M2○・M3○)	M1小窩連結	br	P2咬合面長27.88 咬合面幅12.91 歯冠 最大長29.94 歯冠最大幅15.48 P3咬合 面長24.68 咬合面幅14.10 歯冠最大長 24.68 歯冠最大幅16.38 P4咬合面長 24.00 咬合面幅13.42 歯冠最大長24.00 歯冠最大幅16.54 M1咬合面長22.08 咬合面幅13.38 歯冠最大長22.08 歯冠 最大幅16.42 M2咬合面長23.10 咬合面 幅12.04 歯冠最大長23.10 歯冠最大幅 16.42 M3咬合面長27.97 咬合面幅 :11.20 歯冠最大長27.37 歯冠最大幅 :13.06 咬合面長P2~P4:76.77 P2~3P :54.97 P3~4P:49.30	viv	右側顎突起sp、右骨幹前關節突起寄り cm(D1aタイプ)	134と同一個体
162	135	外郭西区	堀	埋土	328.20	7	哺乳綱	ウマ	下顎骨	L	完形(一部欠損)	f・P3小窩独立 平坦化、P4小窩 独立平坦化途次、 M1小窩独立平坦 化、M2小窩独立 平坦化、M3小窩 独立平坦化途次	br	M1-M3咬合面長64.85 M2-M3咬合面 長44.32 M1-M2咬合面長42.30 P3-P4 咬合面長50.52 P3-M1咬合面長71.02 P3-M2咬合面長92.08 P3-M3咬合面長 :114.54 P4-M3咬合面長89.44 P4-M2 咬合面長66.82 P4-M1咬合面長45.34 P3咬合面長26.00 P3咬合面幅24.25 P3歯冠長26.00 P3歯冠幅23.84 P4咬 合面長24.87 P4咬合面幅24.13 P4歯 冠長24.87 P4歯冠幅25.49 M1咬合面 長21.16 M1咬合面幅23.40 M1歯冠長 21.16 M1歯冠幅25.00) M2咬合面長 21.74 M2咬合面幅22.22 M2歯冠長 :21.74 M2歯冠幅24.90	viv	なし?	小型在来馬、134と接合
163	112 ②	内堀東区	内堀	暗灰色土	196.68	7	哺乳綱	ウマ	脛骨	L	完形(dist.prox一部欠損)	f	br	GI-273.30 SD:25.06 Bp:70.24	viv	骨幹部後位偽切創、cmなし?	近位関節に大腿骨が付着していた痕跡 が色の変化によりうかがわれ、No.64 と同一個体の可能性が考えられる。
164	64	内堀東区	内堀	埋土	110.5	7	哺乳綱	ウマ	大腿骨	L	clia	?	br	SD:25.34 GI-224.0 Bp:40.49 SD:24.83 DD:19.74	viv	骨幹部後位cm(D1aタイプ)、2条、 長さ不明	風化著しい
165	36	外郭東区	土堀87	埋土	145.1	7	哺乳綱	ウマ	中足骨	R	完形(遠位端一部欠損)	f	br	3736.08 3631.47 3487.92 3588.18	viv	骨幹部後位cm(C1bタイプ)	135と接合する。第1頸椎が付着して いた痕跡が色調の変化によりうかが われる
166	134	外郭西区	堀	埋土	145.96	7	哺乳綱	ウマ	頭蓋	LR	上顎骨、側頭骨、後頭骨	f	br		viv	なし?	
167	124 ①	外郭西区	堀	下層	232.47	7	哺乳綱	ウマ	橈骨	R	clia	d.puf	br		viv	前位骨幹部近位奇cm(C1bタイプ、幅 11.95mm、長約19mm×1、幅約10mm、 長約35mm×1、幅約3mm、長約23mm ×1、D3aタイプ、幅29.62、長16.44mm)	
168	136	T 6	堀	埋土	15.83	7	哺乳綱	ヒト	頭頂骨	L	clia	鱗状・冠状・ ラムダ縫合がuf	br		viv	不明、偽切創	破片と接合する
169	137	外郭西区	堀	埋土	8.50	7	哺乳綱	ヒト	頭頂骨	L	clia	鱗状縫合がuf	br		viv	不明、偽切創	
170	②	内堀東区 脚付込)	脚付込)	青灰色土	8.27	7	哺乳綱	中型	不明	?	clia	?	br		viv		
171	124 ②	外郭西区	堀	下層	18.92	7	哺乳綱	中~大型	四肢骨	?	clia	?	br		viv		
172	31	外郭西区	土堀82	埋土	28.07	7	哺乳綱	中~大型	不明	?	clia		br		viv	骨幹部cm(イヌ顎頭)、骨幹部前位cm (C1aタイプ)、sp-骨幹部	
173	47c	T 6	土堀63	埋土	14.17 (合計)	7	哺乳綱	中~大型	不明	?	clia	?	br		viv		破片10点



図版2. 出土動物遺存体

- 1・2. ウマ (1. 中足骨R、2. 脛骨L)、3. ニホンジカ (橈骨L)
 4. イノシシ類 (橈骨L)、5. イヌ (尺骨R)、6. タヌキ (頭蓋LR)
 7. イヌ (下顎骨R)、8. イエイヌ (下顎骨R)



図版1. 出土動物遺存体

- 1～3. マダイ (前上顎骨；1、R、2・3、L)、4. ウミガメ科 (背甲骨板)
 5. アオサギ (脛骨L)、6～8. ニワトリ (6・7 脛骨L、8・大腿骨L)
 9. カモ類Aタイプ (上腕骨R)
 {SP. スパイラル割れ、↓は切創や加圧の方向、文字は破損のタイプを示す}



図版4. 出土動物遺存体
1・2. ウシ (1. 大腿骨L、2. 脛骨L)



図版3. 出土動物遺存体
ウマ頭蓋 (外頭蓋底)

第4節 岡山城二の丸跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己

概要

岡山城築城時（1590～1632）頃が比定される岡山城二の丸跡出土の鍛冶関連遺物（椀形滓13点、粒状滓、鍛造剥片）を調査して、次の点が明らかになった。

出土椀形滓は、1,300 gを超える大型品が砂鉄系荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の不純物除去や成分調整を目的とした鍛冶で排出された精錬鍛冶滓（大鍛冶系）、650 g以下の中・小型椀形鍛冶滓は、廃鉄器原料をリサイクルした沸し鍛接で排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶系）に分類された（一部例外あり）。また、鍛打作業を証明する微細遺物の粒状滓や鍛造剥片の組成も把握できた。

以上から岡山城の築・改築に際しては、比較的の不純物の少ない荒鉄や廃鉄器が準備されて、工事に必要な機材の製作・調達がなされたと推定される。なお、今回調査の品は、1991年報告の鍛冶炉周辺の滓と、大差ない組成であった。^(注1)

1. 調査方法

Table. 1 に供試材の履歴と調査項目を示す。（鉄滓のマクロ組織は紙面の都合から割愛）

2. 調査結果

2-1. 炉5（径40cm、深さ20cm、ピット状鍛冶炉）出土品

(1) OKY-1～8：鉄滓

鉄滓の形状は、鍛冶炉の炉底に堆積形成されて6点は椀形状、OKY-6は不定形、OKY-8は塊状を呈する。顕微鏡組織をPhoto.1～4①までに示す。いずれも鉱物組成は、ヴスタイト（Wüstite： FeO ）と、淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）で構成される。鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓の晶癖である。ただし、外観が塊状小型（19g）のOKY-8のみは、ヴスタイトが大きく成長凝集しており、ズク卸し脱炭処理での排出滓の可能性をもつ。また、各供試材は含鉄（錆化）傾向をもち、OKY-2のみは、坦素量の多い過共析鋼（C：0.77%以上）であるが、他は極軟鋼（C：0.1以下）レベルであった。なお、OKY-1、3、4は、赤熱鉄素材の表面から鍛打で剥落した3層分離型（表層極微厚ヘマタイト： $\text{Hematite Fe}_2\text{O}_3$ 、中間層マグネタイト： $\text{Magnetite Fe}_3\text{O}_4$ 、内層ヴスタイト： Wüstite FeO ）の鍛造剥片の付着が発見されて、これらからも鍛錬鍛冶の裏付けがとれた。更に白色粒状結晶のヴスタイトの検証は、ビッカース断面硬度の測定で454～499 Hvの測定値が得られて、ヴスタイトの文献硬度値の450～500 Hvの範囲内に収まっている。^(注2)

OKY-1～4の化学組成をTable. 2に示す。4点共に全鉄分（Total Fe）は、55.7～62.9%と多く、ガラス質成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）は12.9～20.01%と少ない。次に同グループ

内でもOKY-2の脈石成分が高く0.55% TiO₂、0.02% V、0.13% MnOに対してOKY-1、3、4は脈石成分が少なく0.17~0.38% TiO₂、0.01% V、0.03~0.09% MnOと二分される。前者は一般砂鉄鍛錬鍛冶系であるが、後者は純度があがり廃鉄器原料のリサイクル鍛冶が想定される。当8点の供試材は31~237gの小型椀形滓である。

2-2. 土壌63出土品

(1) OKY-9：椀形鍛冶滓

中型(652g)の椀形鍛冶滓である。鉄滓の鉍物相写真は割愛して銹化鉄に共析鋼(C:0.77%)から過共析鋼(C:0.77%以上)の痕跡を留めた組織をPhoto.4の⑤⑦に示す。硬質な工具の製作に供された処理で排出された滓であろう。化学組成はTable.2に示す。全鉄分(Total Fe)は53.01%に対して酸化第1鉄(FeO)13.31%、銹化鉄なので酸化第2鉄(Fe₂O₃)が60.79%と大部分を占める。炭素量は有機物含みで2.15%と高く、絶対値は信頼できないまでも硬鋼クラスの裏付けとなる。0.10% TiO₂、0.01% V、0.03% MnOなど脈石成分の低さから鍛錬鍛冶滓廃鉄器系に想定される。

2-3. 下層(暗褐色土)出土品

(1) OKY-10~12：椀形鍛冶滓

OKY-10は1,400gの大型椀形鍛冶滓で鉍物組成、化学組成共に前述したOKY-1、3に準ずる。次にOKY-11は今回調査の最大重量の1,840gを測る。鉍物組成はPhoto.5の①~③に示すように白色粒状結晶のヴスタイト粒内に微細なFe-Ti系析出物が認められ、化学組成も1.27% TiO₂、0.1% Vと砂鉄原料濃度が高く、かつ、0.10% MnOとなる。精製された荒鉄の不純物除去と成分調整の精錬鍛冶滓に分類される。なお、白色粒状結晶の硬度値は523Hvと若干高め傾向となる。該品も銹化鉄を内蔵する。

OKY-12は619g中型椀形鍛冶滓である。鉍物組成は白色粒状結晶のヴスタイト(468Hv)で金属鉄の極軟鋼(75Hv)を共伴する。化学組成は純度が高く、0.11% TiO₂、0.01% V、0.04% MnOで廃鉄器リサイクル鍛冶滓に分類される。

2-4. 下層(暗褐色土)出土品

(1) OKY-13：椀形鍛冶滓

該品も1,300gの大型椀形鍛冶滓であり、前述したOKY-11精錬大型鍛冶滓に近似した鉍物組成(ヴスタイト粒内Fe-Ti析出物)と砂鉄系成分(2.09% TiO₂、0.10% V、0.35% MnO)の高い組成であった。精錬鍛冶滓に分類される。

2-5. 鍛冶炉近接ピット出土微細遺物

(1) OKY-14：粒状滓

沸し鍛接の高温作業時の初期段階で、鉄素材にまだ小さな凹凸がある場合、突起部は鍛打が加わると熔融鉄の一部は酸化されて飛び散り、表面張力の関係から球状化する。これが粒状滓(湯玉)である。大きな粒は5mm以上も存在し、小さなものは0.8mm以下まで認められる。供試材は2.7mm、1.9mm、1.0mmの3種類が選出されている。

OKY-14-1：粒状滓(2.7mm)。光沢質の黒灰色で歪な球状をもつ。顕微鏡組織はPhoto.6の⑥にマクロ組織、⑦がミクロ組織である。鉍物組成は最表層白色微厚のヘマタイト、中間層も健全でマグネタイト、内層は凝集ヴスタイトで構成される。内層全体に0.03~0.2mm径の気泡が多発する。

OKY-14-2：粒状滓(1.9mm)。光沢質黒灰色で歪の激しい粒状滓である。表面には数個所に小

突起が生じ、気孔が1ヶ所発生する。マクロ組織をPhoto. 6の⑧、ミクロ組織を⑨に示す。鉱物組成は外層へマタイト、中間層マグネタイト、内層は白色粒状結晶のヴスタイトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。内層内には0.25～0.05mmの気泡が多発する。

OKY-14-3：粒状滓（1.0mm前後か）。送付時の破損で破片を供試材とする。無光沢質の黒灰色の粒状滓である。マクロ組織をPhoto. 7の①、ミクロ組織を②に示す。該品は前述OKY-14-2に近似した組成である。気泡は小型化し、0.15～0.05mm径が多発する。

(2) OKY-15：鍛造剥片

沸し鍛接の高温時から火造り成形の低温時に発生する赤熱鉄素材の表面酸化膜で、鍛打により飛散した剥片である。厚みは0.7mm以下の場合が多い。供試材は0.35mm、0.25mm、0.11mmの3種類である。

OKY-15-1：鍛造剥片（5.1×4.7×0.35mm）。表裏共に光沢質で黒灰色のやや彎曲気味の剥片である。表面は平滑で、裏面は皺状の凹凸をもつ。Photo. 7の③にマクロ組織、④～⑥にミクロ組織を示す。王水腐食（Etching）で外層へマタイトと中間層のマグネタイト、内層は凝集ヴスタイトが明瞭に鑑別できた。3層分離型の鍛造剥片である。

OKY-15-2：鍛造剥片（9.5×6.4×0.25mm）。表面が光沢質の銀灰色、裏面は無光沢で黒灰色で平坦性を保つ大型剥片である。表裏共に僅かに肌荒れを呈す。Photo. 7の⑦にマクロ組織、⑧にミクロ組織を示す。鉱物相は3層分離型で内層ヴスタイトは非晶質となる。王水の腐食（Etching）効果は低くて風化気味である。鍛打作業も後半から仕上げに近い段階が想定される。

OKY-15-3：鍛造剥片（3.9×2.6×0.11mm）。表裏共に光沢質で銀灰色を呈する薄手の剥片である。極く僅かな彎曲傾向をもち、肌は表裏共に平滑である。Photo. 7の⑨にマクロ組織、⑩にミクロ組織を示す。外層へマタイトは不明瞭ながら存在し、中間層のマグネタイトと内層ヴスタイトの凝集気味が確認できた。王水腐食の効果は弱く風化された剥片である。鍛打作業は後半段階である。

3. まとめ

岡山城二の丸跡出土の鍛冶関連遺物の調査結果のまとめをTable. 3に示す。近世城郭の築城や改築に際しての必要鉄器の調達には郭内の一部に自前の鍛冶炉を設けて準備される。この場合の原料鉄は、在地の比較的高純度の荒鉄や廃鉄器が充当されて、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶を経て製品化が進む。

このような鍛冶作業と原料鉄の調達は、ほぼ一般的であって、大阪城の例^(註3)や金沢城跡^(註4)でも同様の内容の確認が取れている。

注

(1)大澤正己「岡山城二の丸跡遺構出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岡山城二の丸跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書78）岡山県教育委員会1991. 3

(2)日刊工業新聞社『焼結鉱物写真および識別法』1968. ヴスタイトは450～500Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

またウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上あればウルボスピネルと同定している。700Hvを超えればウルボスピネルとヘーシナイトの混合組成の可能性を考えている。

(3)大澤正己・鈴木瑞穂「大坂城跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『大阪城発掘調査報告Ⅰ』～大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～（財大阪府文化財センター調査報告書78集）〈自然科学・考察編〉（財大阪府文化財センター2002

(4)大澤正己「金沢城石川橋出土鑄造・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『金沢城石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』石川県埋蔵文化財センター1998

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目				備考
					大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	
OKY-1	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	93×78×30	236.8	H (○)	○	○	○	○	
OKY-2	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	84×74×34	222.5	H (○)	○	○	○	○	
OKY-3	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	80×68×35	199.6	H (○)	○	○	○	○	
OKY-4	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	83×69×23	145.0	H (○)	○	○	○	○	
OKY-5	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	79×50×39	128.5	H (○)	○	○	○	○	
OKY-6	岡山城二の丸跡	炉5	不定形鍛冶滓	1590~1632	59×35×18	40.6	H (○)	○	○	○	○	
OKY-7	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	40×38×19	31.2	H (○)	○	○	○	○	
OKY-8	岡山城二の丸跡	炉5	塊状鍛冶滓	1590~1632	34×28×19	18.6	H (○)	○	○	○	○	
OKY-9	岡山城二の丸跡	土層63	楕形鍛冶滓	1603~1632	126×95×70	652.1	H (○)	○	○	○	○	
OKY-10	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	198×125×62	1400.0	M (⊙)	○	○	○	○	
OKY-11	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	184×128×77	1840.0	L (●)	○	○	○	○	
OKY-12	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	118×105×40	618.6	L (●)	○	○	○	○	
OKY-13	岡山城二の丸跡	土層81	楕形鍛冶滓	1603~1632	211×152×41	1300.0	M (⊙)	○	○	○	○	
OKY-14	岡山城二の丸跡	ピット	粒状滓	1590~1632	-	-	なし	○	○	○	○	
OKY-15	岡山城二の丸跡	ピット	鍛造剥片	1590~1632	-	-	なし	○	○	○	○	

Table. 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目						重量 (g)	見所		
						Total Fe	Fe ₃ O ₄	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO			ガラス質成分	Cu
OKY-1	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	61.03	34.09	0.65	0.17	0.01	0.03	12.91	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (焼鉄器再生)	237
OKY-2	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	55.68	30.00	1.00	0.55	0.02	0.13	19.02	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (一連鉄塊か)	223
OKY-3	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	62.90	25.15	0.74	0.16	0.01	0.04	13.06	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (焼鉄器再生)	200
OKY-4	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	55.97	25.46	1.28	0.38	0.01	0.09	20.01	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (焼鉄器再生)	145
OKY-5	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鋼鍛冶滓	129
OKY-6	岡山城二の丸跡	炉5	不定形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鋼鍛冶滓	41
OKY-7	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鋼鍛冶滓	31
OKY-8	岡山城二の丸跡	炉5	塊状鍛冶滓	1590~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鋼鍛冶滓 (ズク削し滓か)	19
OKY-9	岡山城二の丸跡	土層63	楕形鍛冶滓	1603~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	53.01	60.79	0.66	0.10	<0.01	0.03	11.05	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (焼鉄器再生)	652
OKY-10	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	滓：W+F	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鋼鍛冶滓	1400
OKY-11	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	滓：W (粒内Fe-Ti析出)+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	54.09	51.14	0.81	1.27	0.10	0.10	15.34	<0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓	1840
OKY-12	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1603~1632	滓：W+F、鉄：極微細(P少量)、鍛造剥片付着	54.02	39.45	1.19	0.11	0.01	0.04	14.84	0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓 (焼鉄器再生)	619
OKY-13	岡山城二の丸跡	土層81	楕形鍛冶滓	1603~1632	滓：W (粒内Fe-Ti析出)+F、 W：凝集気味	50.70	18.97	2.11	2.09	0.10	0.35	18.04	0.01	砂鉄系鋼鍛冶滓	1300
OKY-14	岡山城二の丸跡	ピット	粒状滓	1590~1632	W：凝集気味	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打工程傍証	-
OKY-15	岡山城二の丸跡	ピット	鍛造剥片	1590~1632	3層構造：H+M+W・非晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打工程傍証	-

W : Wüstite (FeO) F : Fayalite (2FeO・SiO₂) P : Pearlitic H : Hematite (Fe₂O₃) M : Magnetite (Fe₃O₄)

Table. 2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	遷移成分 Total Fe	遷移成分 Total Fe	注
OKY-1	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1584~1632	61.03	0.04	47.79	34.09	9.16	2.62	0.33	0.32	0.31	0.17	0.03	0.17	<0.01	0.05	0.12	0.33	0.01	<0.01	12.91	0.212	0.003
OKY-2	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1584~1632	55.68	0.09	44.52	30.00	13.89	3.46	0.61	0.39	0.50	0.17	0.13	0.55	0.01	0.05	0.21	0.46	0.02	<0.01	19.02	0.342	0.010
OKY-3	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1584~1632	62.90	0.07	58.20	25.15	9.17	2.61	0.44	0.30	0.38	0.16	0.04	0.16	<0.01	0.03	0.13	0.23	0.01	<0.01	13.06	0.208	0.003
OKY-4	岡山城二の丸跡	炉5	楕形鍛冶滓	1584~1632	55.97	0.32	48.69	25.46	13.90	3.96	0.87	0.41	0.63	0.24	0.09	0.38	0.01	0.03	0.22	0.60	0.01	<0.01	20.01	0.358	0.007
OKY-9	岡山城二の丸跡	土庫63	楕形鍛冶滓	1584~1632	53.01	0.15	13.31	60.79	8.32	1.76	0.40	0.26	0.22	0.09	0.03	0.10	0.11	0.24	0.16	2.15	<0.01	<0.01	11.05	0.208	0.002
OKY-11	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1584~1632	54.09	0.13	23.41	51.14	12.06	2.09	0.53	0.28	0.27	0.11	0.10	1.27	0.20	0.18	0.24	0.67	0.10	<0.01	15.34	0.284	0.023
OKY-12	岡山城二の丸跡	暗褐色土	楕形鍛冶滓	1584~1632	54.02	0.31	33.60	39.45	11.14	1.87	0.89	0.30	0.46	0.18	0.04	0.11	0.06	0.13	0.26	1.46	0.01	0.01	14.84	0.275	0.002
OKY-13	岡山城二の丸跡	土庫81	楕形鍛冶滓	1584~1632	50.70	0.57	47.42	18.97	11.57	2.93	1.53	0.58	1.16	0.27	0.35	2.09	0.06	2.04	1.09	2.76	0.10	0.01	18.04	0.356	0.041
OKSH-1	岡山城二の丸遺構	東予南区東下層	鍛冶滓	1591~97年	57.5	—	47.2	298	14.18	1.87	1.42	0.55	0.85	0.13	0.10	0.33	0.02	0.037	0.490	0.20	0.011	0.004	22.99	0.400	0.006
OKSH-2	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉3 B 炉上部	鍛冶滓	1591~97年	62.1	—	39.8	44.5	8.60	2.00	0.52	0.32	0.15	0.06	0.12	0.50	0.03	0.006	0.342	0.30	0.017	0.003	11.66	0.188	0.008
OKSH-3	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉3	鍛冶滓	1591~97年	58.6	—	54.0	23.69	14.26	2.26	1.42	0.39	0.76	0.22	0.09	0.17	0.01	0.030	0.297	0.18	0.007	0.003	19.31	0.33	0.003
OKSH-4A	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉1L	鍛冶滓	1591~97年	58.9	—	57.7	20.11	13.52	2.17	1.16	0.43	0.86	0.27	0.08	0.26	0.02	0.023	0.229	0.13	0.014	0.004	18.41	0.313	0.004
OKSH-4B	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉1L	鍛冶滓	1591~97年	52.6	—	53.5	15.67	17.88	3.73	1.92	0.63	1.41	0.37	0.09	0.21	0.02	0.018	0.262	0.17	0.008	0.004	25.97	0.494	0.004
OKSH-5	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉4 付近	鍛冶滓	1591~97年	60.5	—	59.9	19.94	13.54	2.73	4.79	0.38	1.08	0.21	0.09	0.07	0.01	0.020	0.231	0.09	0.002	0.003	22.76	0.376	0.001
OKSH-6	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉3	鍛冶滓	1591~97年	61.4	—	43.0	40.0	10.12	1.56	1.30	0.28	0.23	0.04	0.10	0.61	0.04	0.023	0.134	0.34	0.081	0.003	13.53	0.22	0.010
OKSH-7	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉IK	鍛冶滓	1591~97年	62.6	—	63.6	18.83	10.44	2.26	0.62	0.62	0.68	0.22	0.12	0.59	0.02	0.018	0.287	0.06	0.049	0.003	14.84	0.237	0.009
OKSH-8	岡山城二の丸遺構	東予鍛冶炉3 P 3	鍛冶滓	1591~97年	54.1	—	58.6	12.18	20.56	3.60	1.64	0.50	1.30	0.38	0.10	0.29	0.01	0.023	0.151	0.07	0.013	0.003	27.98	0.517	0.005

(注1) 大澤正己「岡山城二の丸遺構出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岡山城二の丸跡』(岡山県理蔵文化財調査報告78) 岡山県教育委員会1991.3

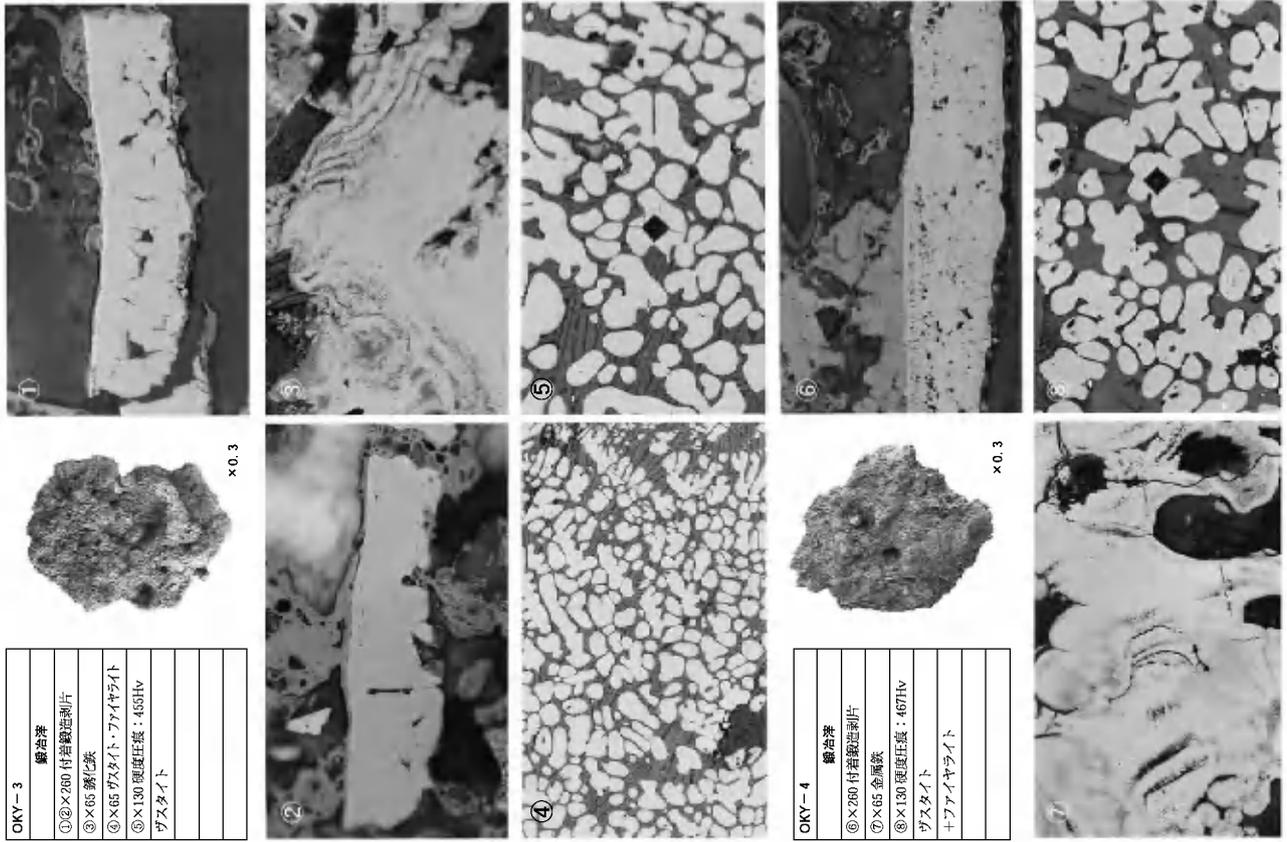


Photo. 2 鍛冶滓の顕微鏡組織

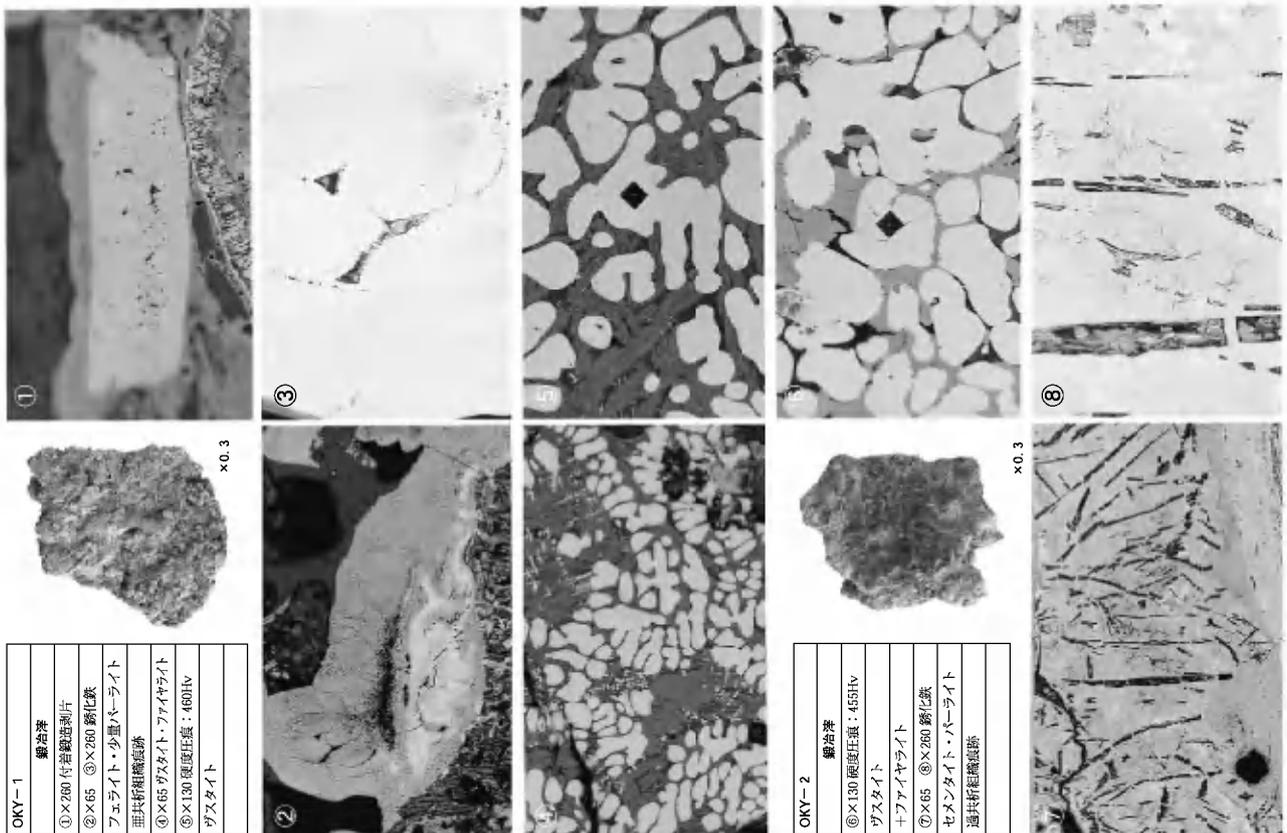
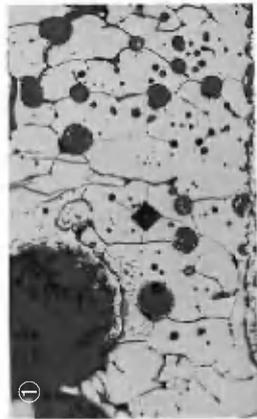


Photo. 1 鍛冶滓の顕微鏡組織

OKY-8
鍛冶滓
①×130 硬度圧痕：363HV
凝集ガスタイト、軟質の値は 風化の影響か
②×33 ③×260 酸化鉄 フェライト・少量パーライト 亜共析組織遺跡



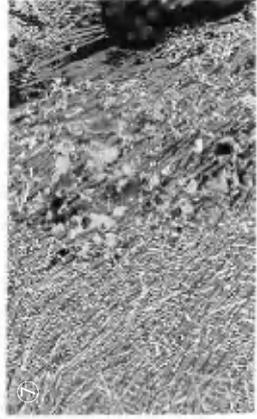
x0.4

OKY-9
鍛冶滓 (含鉄部)
①×33 付着水炭
②×65 酸化鉄 全面パーライト、共析組織 跡
③×65 酸化鉄 セメントイト・パーライト 過共析組織遺跡



x0.2

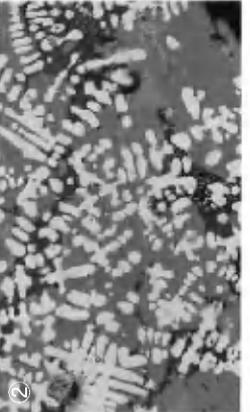
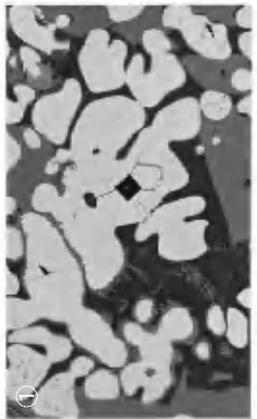
OKY-10
鍛冶滓
①×65 ガスタイト・ファイヤライト 微小酸化鉄粒散在



x0.1

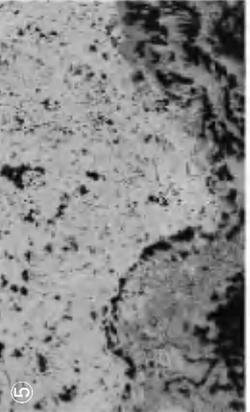
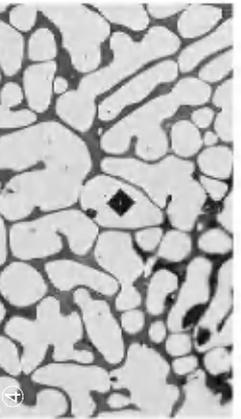
Photo. 4 鍛冶滓の顕微鏡組織

OKY-5
鍛冶滓
①×130 硬度圧痕：499HV
ガスタイト
②×65 ガスタイト(割内析出 物あり)・ファイヤライト
③×65 酸化鉄粒散在 ガスタイト・ファイヤライト



x0.3

OKY-6
鍛冶滓
①×130 硬度圧痕：454HV
ガスタイト
+ 細粒ファイヤライト
②×65 ③×260 酸化鉄 フェライト・少量パーライト 亜共析組織遺跡



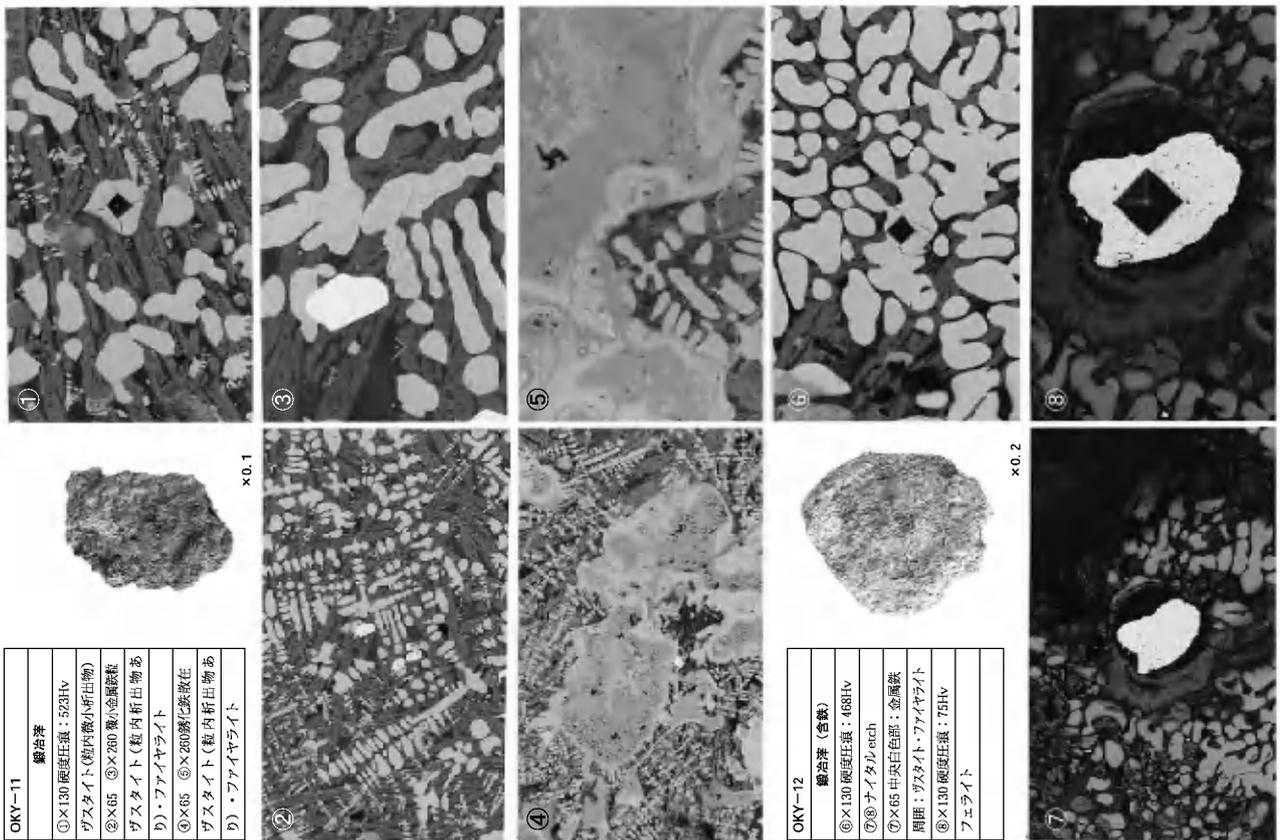
x0.4

OKY-7
鍛冶滓
①×65 中央白色部：金属鉄 ガスタイト・ファイヤライト
(硬度測定・圧痕写真参照) 白色粒状結晶 474HV ガスタイト



x0.4

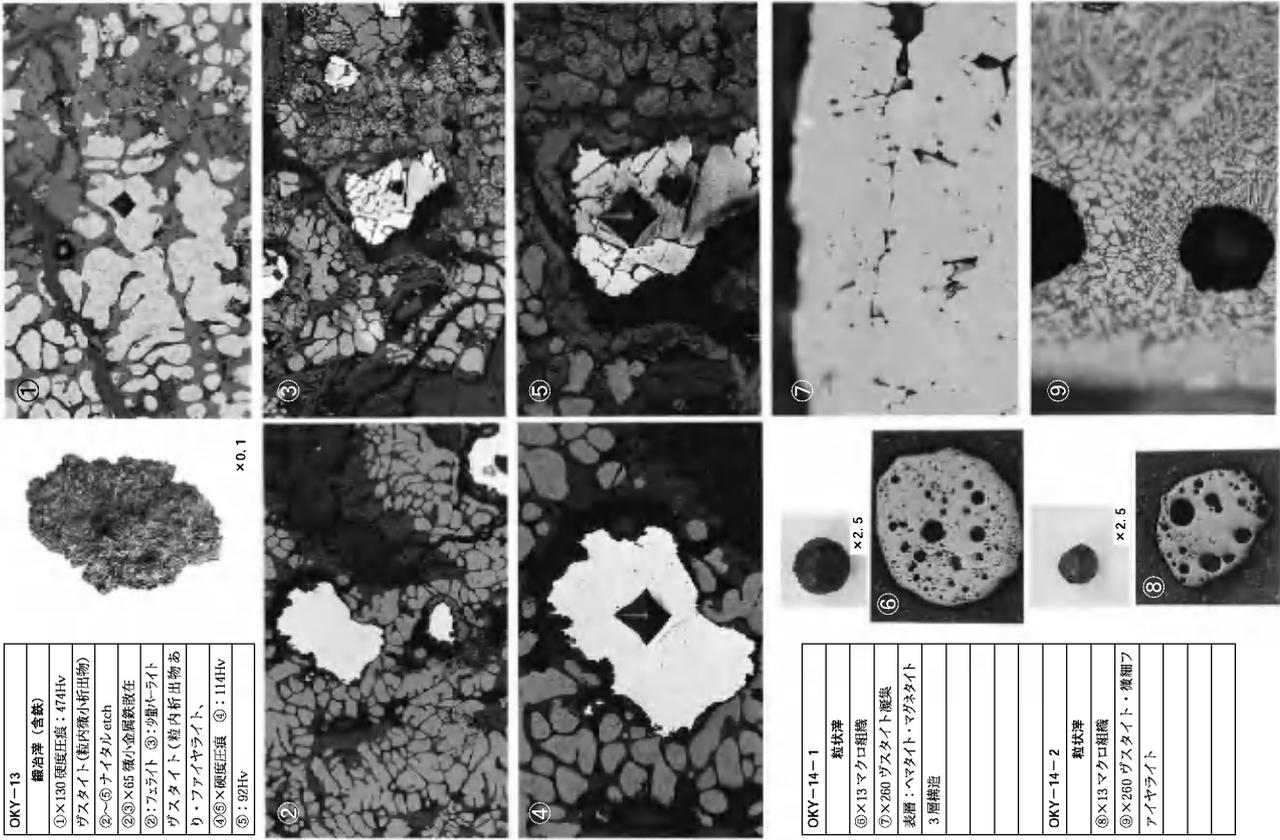
Photo. 3 鍛冶滓の顕微鏡組織



OKY-11
鍛冶滓
①×130 硬度圧痕：529Hv
ガスタイト(粒内微小析出物)
②×65 ③×200 微小金属粒
ガスタイト(粒内析出物) 各
り・ファイヤライト
④×65 ⑤×200 酸化鉄散在
ガスタイト(粒内析出物) 各
り・ファイヤライト

OKY-12
鍛冶滓(含鉄)
⑥×130 硬度圧痕：468Hv
⑦⑧ ナイタルetch
⑦×65 中央白色部：金属鉄
周囲：ガスタイト・ファイヤライト
⑧×130 硬度圧痕：75Hv
フェライト

Photo. 5 鍛冶滓の顕微鏡組織



OKY-13
鍛冶滓(含鉄)
①×130 硬度圧痕：474Hv
ガスタイト(粒内微小析出物)
②~⑥ ナイタルetch
②③×65 微小金属粒散在
ガスタイト ④⑤ 砂眼・ヘラト
り・ファイヤライト、
④⑥×硬度圧痕 ⑥：114Hv
⑦：92Hv

OKY-14-1
粒状滓
⑧×13 マクロ組織
⑦×200 ガスタイト・炭素
表面：ハマタイト・マガスタイト
3層構造
OKY-14-2
粒状滓
⑧×13 マクロ組織
⑨×200 ガスタイト・炭素
ファイヤライト

Photo. 6 鍛冶滓・粒状滓の顕微鏡組織

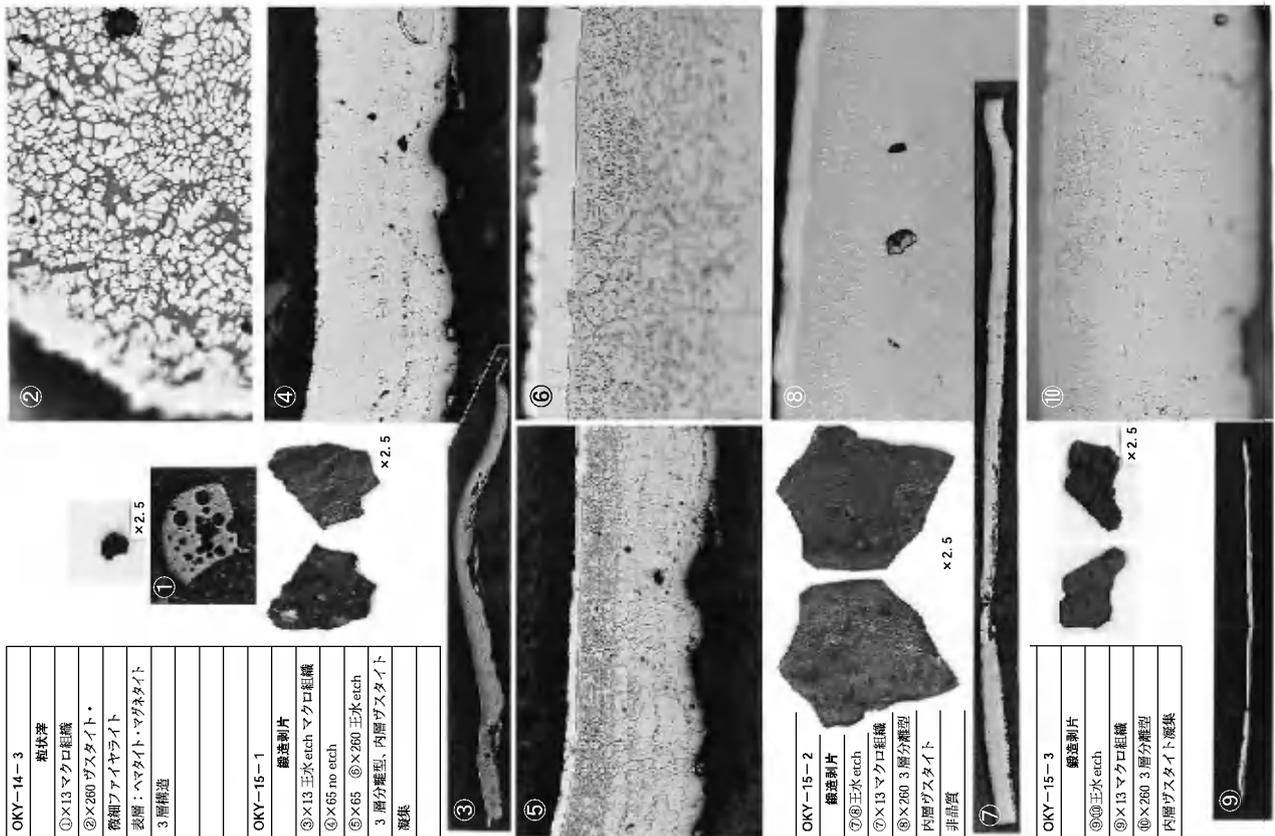


Photo. 7 粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織

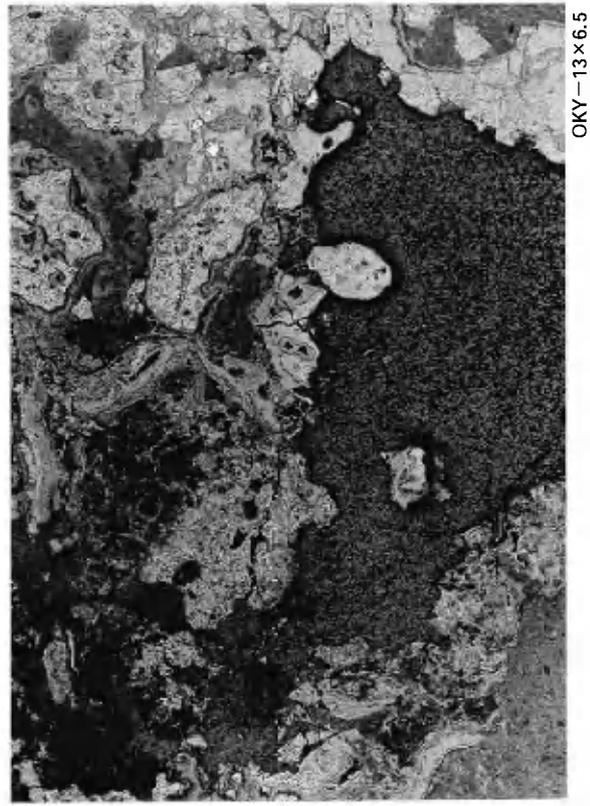
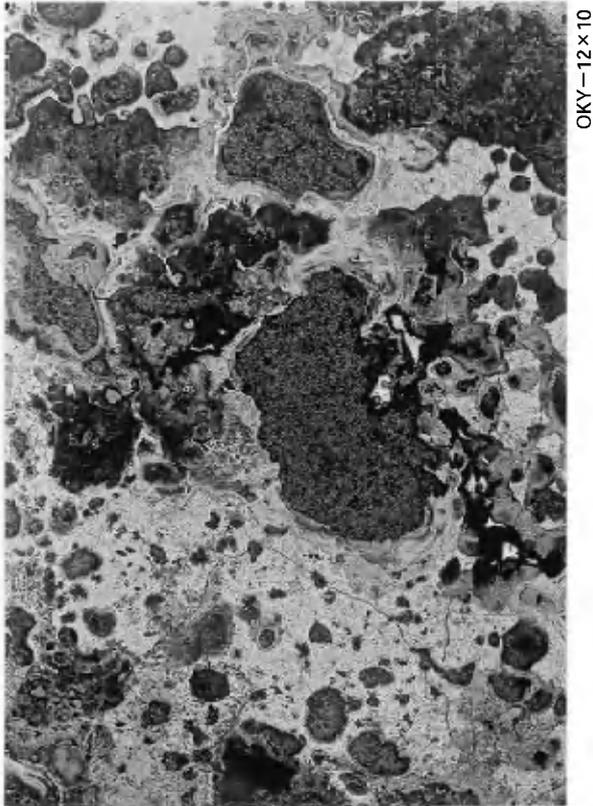


Photo. 8 鍛冶滓（含鉄）のマクロ組織

遺構一覽表

掲載遺構名	調査遺構名	調査区	時期	出土遺物	掲載遺構名	調査遺構名	調査区	時期	出土遺物
堀立柱建物	堀立柱建物	外郭西区	中世	土師器	土壇76	土壇76	外郭東区	17C前半	瓦
土壇1	土壇1	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇77	土壇77	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・貝・獣骨
土壇2	土壇2	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇78	土壇78	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・木鈎・獣骨
土壇3	土壇3	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇79	土壇79	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・貝・獣骨
土壇4	土壇4	外郭西区	19～20C		土壇80	土壇80	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・貝・獣骨
土壇5	土壇5	外郭西区	19～20C		土壇81	土壇81	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・下駄・鹿・鉄滓
土壇6	土壇6	外郭西区	19～20C		土壇82	土壇82	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・箸・土鏝・貝・獣骨
土壇7	土壇7	外郭西区	20C		土壇83	土壇83	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・土鏝・銭
土壇8	土壇8	外郭西区	19～20C		土壇84	土壇84	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・獣骨
土壇9	土壇9	外郭西区	19～20C		土壇85	土壇85	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇10	土壇10	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇86	土壇86	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・下駄
土壇11	土壇11	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇87	土壇87	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・下駄・羽口・銭・貝・獣骨
土壇12	土壇12	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・銭・釘	土壇88	土壇88	外郭東区	17C前半	瓦・貝
土壇13	土壇13	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘・獣骨	土壇89	土壇89	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・貝
土壇14	土壇14	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇90	土壇90	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・貝
土壇15	土壇15	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇91	土壇91	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇16	土壇16	外郭西区	19C前半		土壇92	土壇92	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇17	土壇17	外郭東区	19C前半		土壇93	土壇93	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・土鏝
土壇18	土壇18	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇94	土壇94	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇19	土壇19	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇95	土壇95	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・下駄・土鏝・銭・貝・獣骨
土壇20	土壇20	外郭東区	19C前半	瓦・釘	土壇96	土壇96	外郭東区	17C前半	瓦・箸
土壇21	土壇21	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・銭・釘	土壇97	土壇97	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・土鏝
土壇22	土壇22	外郭東区	19C前半		土壇98	土壇98	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇23	土壇23	外郭西区	19C前半		土壇99	土壇99	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・獣骨
土壇24	土壇24	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・銭・釘	土壇100	土壇100	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・下駄・土鏝・貝
土壇25	土壇25	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・煙管・釘	土壇101	土壇101	外郭西区	19C前半	瓦
土壇26	土壇26	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇102	土壇102	外郭西区	19C前半	瓦
土壇27	土壇27	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇103	土壇103	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘
土壇28	土壇28	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇104	土壇104	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇29	土壇29	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・銭	土壇105	土壇105	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・下駄・漆椀
土壇30	土壇30	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇106	土壇106	外郭東区	17C前半	瓦・貝
土壇31	土壇31	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇107	土壇107	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀
土壇32	土壇32	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇108	土壇108	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇33	土壇33	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇109	土壇109	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇34	土壇34	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇110	土壇110	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・銭・貝
土壇35	土壇35	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・簪・釘	土壇111	土壇111	外郭東区	17C前半	瓦
土壇36	土壇36	外郭東区	19C前半	獣骨	土壇112	土壇112	外郭東区	17C前半	瓦
土壇37	土壇37	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇113	土壇113	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇38	土壇38	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・銭・釘	土壇114	土壇114	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇39	土壇39	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・釘・砥石	土壇115	土壇115	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦
土壇40	土壇40	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・銭・煙管・魚骨	土壇116	土壇116	外郭西区	中世	土師器
土壇41	土壇41	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇117	土壇117	外郭西区	中世	
土壇42	土壇42	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇118	土壇118	外郭西区	中世	
土壇43	土壇43	外郭西区	19C前半	陶磁器・瓦	土壇119	土壇119	外郭西区	中世	土師器
土壇44	土壇44	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	土壇120	土壇120	外郭西区	17C前半	
土壇45	土壇45	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・釘	土壇121	土壇121	外郭東区	古墳前期	土師器
土壇46	土壇46	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	段状遺構	内堀斜面	外郭東区	19C前半	陶磁器・瓦・簪
土壇47	土壇47	外郭西区	17C前半	瓦・釘	石組遺構	石組遺構	外郭東区	17～18C	
土壇48	土壇48	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	井戸1	井戸	T3	17C後半	陶磁器・瓦
土壇49	土壇49	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・釘	井戸2・3	井戸	内堀東区	中世	
土壇50	土壇50	外郭西区	17C前半	瓦	炉1	炉1	外郭西区	17～19C	瓦
土壇51	土壇51	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・硯・釘・貝	炉2	炉2	外郭東区	16C末	
土壇52	土壇52	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	炉3	炉3	外郭東区	16C末	
土壇53	土壇53	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦	炉4	炉4	外郭東区	16C末	
土壇54	土壇54	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・釘	炉5	炉5	外郭東区	16C末	
土壇55	土壇55	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	炉6	炉6	外郭東区	16C末	
土壇56	土壇56	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	炉7	炉7	外郭東区	16C末	
土壇57	土壇57	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	溝1	溝101	外郭東・西区	13～14C	土師器
土壇58	土壇58	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	溝2	溝102・103	外郭東区	中世	
土壇59	土壇59	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦	溝3	溝104	外郭東区	中世	土師器・備前
土壇60	土壇60	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・釘	溝4	溝105・106	外郭東・西区	中世	土師器・備前
土壇61	土壇61	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・銭・釘・弾型	溝B	T8			
土壇62	土壇62	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・下駄・木簡・銭	溝5	溝107	外郭西区	中世	
土壇63	溝4	外郭西区	17C前半		溝6	溝108	外郭西区	中世	
土壇64	溝1	T6			大溝	T8			
土壇65	土壇64	外郭東区	17C前半		内堀	内堀	内堀区 T1～5, 7～11	17～19C	陶磁器・瓦
土壇66	土壇65	外郭東区	17C前半	瓦・釘	堀	堀	外郭東・西区 T6・8	16C後半	陶磁器・瓦・漆椀・下駄・木簡・銭・釘・小柄・石塔
土壇67	土壇66	外郭東区	17C前半	瓦	水田	水田	外郭東・西区	12～13C	土師器・磁器・備前
土壇68	土壇67	外郭西区	17C前半	瓦・貝	上層	灰色砂	外郭東・西区	17～19C	陶磁器・瓦・銭・煙管・釘
土壇69	土壇68	外郭西区	17C前半	瓦・土鏝・銭・釘	中層	黄褐色砂	外郭東・西区	17C中葉	陶磁器・瓦・銭・煙管・釘
土壇70	土壇69	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦・簪・部材	下層	暗褐色土	外郭東・西区	17C前半	陶磁器・瓦・銭・小柄・煙管・瓮
土壇71	土壇70	外郭東・西区	17C前半	陶磁器・瓦・箸・下駄・羽口・獣骨	最下層	真砂土	外郭東・西区	17C前半	陶磁器・瓦・銭・釘
土壇72	土壇71	外郭東・西区	17C前半	陶磁器・瓦		褐色土	外郭東・西区	12～13C	土師器・磁器・備前
土壇73	土壇72	外郭西区	17C前半	陶磁器・瓦					
土壇74	土壇73	外郭東・西区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・箸・下駄・瓮・折敷・曲輪・土鏝・貝					
土壇75	土壇74	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦					
土壇76	土壇75	外郭東区	17C前半	陶磁器・瓦・漆椀・箸・下駄・土鏝・銭・貝・獣骨					

遺物観察表

土器・陶磁器

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考
1	外下馬門区	内堀上層	ガラス	インク瓶	2.0		94	T8	上層	染付	小皿	9.4	瀬戸(1820~68)
2	外下馬門区	内堀上層	ガラス	インク瓶	2.0		95	内堀東区	段状遺構	染付	小皿	10.6	型押、肥前(18c末~19c前)
3	外下馬門区	内堀上層	ガラス	目薬瓶	1.6	参天薬房・大目薬	96	外郭東区	土壇13	染付	小皿	10.4	肥前(18c末~19c前)
4	外下馬門区	内堀上層	ガラス	目薬瓶	1.3	ロー目薬・本輔山田安民	97	外郭東区	土壇35	色絵	小皿	9.9	焼継、肥前(1690~18c前)
5	外下馬門区	内堀上層	ガラス	ワイン瓶	2.3		98	外郭西区	下層	染付	五寸皿	13.9	瘦皿、肥前(1630~40)
6	外下馬門区	内堀上層	ガラス	牛乳瓶	2.9		99	外郭東区	中層	染付	小皿	11.7	波佐見、肥前(18c後~19c初)
7	内堀西区	内堀上層	陶器	インク瓶	2.3		100	内堀東区	段状遺構	白磁	小皿	(7.5)	型押、肥前(17c後~18c初)
8	T5	上層	陶器	土瓶	8.0	汽車土瓶、ひらぬま・銀月軒	101	内堀東区	段状遺構	白磁	小皿	(8.8)	型押、肥前(18c前~中)
14	外郭西区	土壇24	白磁	小杯	4.2	肥前(18c末~19c前)	102	外郭東区	中層	染付	極小皿	4.8	完形、肥前(1630~40)
15	外郭東区	土壇13	白磁	小杯	4.6	肥前(17c後)	103	外郭東区	中層	白磁	五寸皿	13.9	型押、肥前(17c後)
16	内堀東区	段状遺構	染付	小杯	4.5	肥前(18c中~末)	104	外郭東区	土壇13	白磁	五寸皿	14.0	型打ち、肥前(19c初~1868)
17	外郭東区	土壇13	白磁	小杯	4.5	型押、肥前(18c)	105	T7	内堀埋土	染付	大皿	32.8	肥前、志田窯(19c初~1868)
18	内堀東区	段状遺構	染付	小杯	6.0	肥前(18c ~)	106	外郭西区	土壇11	染付	五寸皿	13.0	肥前(18c ~)
19	外郭西区	中層	染付	小杯	5.8	完形、肥前(17c後)	107	外郭西区	土壇24	染付	五寸皿	14.6	完形、肥前(18c後)
20	外郭東区	土壇19、25	染付	小杯	6.4	肥前(1630~50)	108	外郭西区	上層	染付	五寸皿	13.5	肥前(17c後~18c初)
21	内堀東区	段状遺構	染付	小杯	6.0	肥前(1660~70)	109	外郭西区	土壇24	染付	五寸皿	12.8	完形、肥前(18c後)
22	外郭東区	土壇29	白磁	小杯	7.7	肥前	110	T8	上層	染付	五寸皿	13.7	肥前(18c末~19c初)
23	外郭西区	土壇25	白磁	小杯	6.8	肥前	111	内堀東区	段状遺構	染付	五寸皿	14.6	肥前、簡江窯(18c後)
24	外郭東区	上層	染付	紅猪口	4.2	卯明、完形、瀬戸(郭治後~大正)	112	T8	土壇12	染付	五寸皿	14.4	肥前、南川原窯(1680~90)
25	外郭東区	土壇35	赤絵	紅猪口	4.9	肥前(18c末~19c前)	113	内堀東区	段状遺構	染付	五寸皿	14.6	肥前(1650)
26	内堀東区	段状遺構	染付	紅猪口	5.4	肥前(18c ~)	114	外郭東区	土壇30	染付	五寸皿	15.0	ハリ支え、肥前(1660)
27	外郭西区	上層	染付	紅猪口	5.5	肥前(18c後)	115	外郭東区	土壇25	染付	中皿	20.8	完形、肥前(1640~50)
28	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	6.3	肥前(17c末~18c前)	116	外郭東区	土壇25	染付	中皿	24.0	肥前(1640)
29	外郭東区	土壇29	白磁	小碗	5.6	肥前	117	T8	上層	染付	中皿	21.0	口縁、完形、肥前、南川原窯(18c前)
30	外郭東区	土壇24	染付	小碗	7.2	完形、肥前(18c)	118	外郭東区	土壇30	染付	中皿	20.8	肥前(1650前後)
31	外郭西区	土壇24	染付	小碗	7.0	完形、肥前(19c)	119	T8	上層	染付	中皿	18.2	波佐見(18c後)
32	外郭東区	土壇13	染付	小碗	7.0	焼継、肥前(1780~19c前)	120	外郭東区	土壇29	青磁	中皿	21.4	三足皿、波佐見(1630~40)
33	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	7.8	肥前(18c中~末)	121	T10,T11	内堀上層	染付	盤	20.8	肥前(18c前)
34	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	7.3	肥前(1770~19c初)	122	外郭東区	土壇35	染付	蓋物	5.3	肥前(18c後)
35	外郭西区	土壇24	染付	小碗	7.3	肥前(18c末~19c初)	123	外郭西区	土壇11	染付	蓋物	7.8	肥前(18c後)
36	外郭東区	土壇13	染付	猪口	6.8	肥前(18c後)	124	外郭東区	土壇13	染付	蓋物	9.0	焼継、肥前(1780~19c初)
37	T10,T11	内堀埋土	染付	猪口	7.2	渦巻、肥前(18c前)	125	外郭西区	土壇24	染付	蓋物	12.0	肥前(18c末~19c前)
38	内堀東区	段状遺構	染付	猪口	9.0	漆継、肥前(18c前~中)	126	内堀東区	段状遺構	染付	蓋物	11.0	肥前(18c後)
39	外郭東区	土壇13	染付	小碗	8.7	肥前(1770~1800)	127	内堀東区	段状遺構	染付	蓋物	10.5	肥前(18c)
40	外郭東区	土壇13	染付	小碗	9.0	肥前(1780~1810)	128	外郭東区	土壇13	染付	蓋物	9.4	肥前(18c後~19c初)
41	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	9.8	肥前(1770~1800)	129	外郭西区	土壇11	染付	蓋物	7.7	肥前(18c ~)
42	外郭西区	土壇24	染付	小碗	10.6	肥前(18c後~19c初)	130	外郭東区	土壇13	色絵	段重	7.5	肥前
43	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	10.2	肥前(1780~1810)	131	外郭西区	土壇35	染付	段重	8.4	肥前(18c後~19c初)
44	外郭東区	土壇13	染付	小碗	9.6	焼継、瀬戸(1820~68)	132	外郭西区	土壇24	染付	合子蓋	4.7	完形、肥前(18c末~19c前)
45	外郭西区	土壇24	染付	小碗	9.5	焼継、肥前(19c前)	133	内堀西区	上層	染付	合子蓋	6.6	肥前(18c末~19c前)
46	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	9.2	肥前(18c前~中)	134	外郭西区	土壇13	染付	段重蓋	4.0	肥前(18c)
47	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	10.0	完形、肥前(18c ~)	135	内堀東区	段状遺構	染付	段重蓋	4.8	肥前(18c後~19c前)
48	外郭東区	段状遺構	染付	小碗	10.1	肥前(18c前~中)	136	外郭西区	土壇35	染付	段重蓋	9.3	肥前(18c後~19c初)
49	外郭東区	土壇13	染付	小碗	10.0	肥前(18c後)	137	外郭西区	上層	染付	段重蓋	8.5	完形
50	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	10.0	肥前(18c前)	138	内堀西区	土壇103	染付	段重蓋	8.8	完形、肥前(18c後)
51	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	11.0	肥前(1660~80)	139	外郭西区	土壇2	染付	髪油壺	2.4	完形、肥前(18c後~19c初)
52	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	9.0	肥前(1780~90)	140	外郭東区	土壇35	染付	髪油壺	2.3	完形、肥前(18c中~末)
53	外郭東区	土壇13	染付	小碗	8.8	肥前(1780~1810)	141	外郭西区	土壇13・24	染付	大瓶		肥前(19c初~1860)
54	外郭東区	土壇13	染付	小碗	8.4	肥前(1780~1810)	142	外郭東区	土壇35	白磁	中瓶		肥前(18c末~1860)
55	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	9.0	肥前(1780~1810)	143	T10,T11	内堀埋土	染付	小瓶		肥前(18c)
56	外郭東区	土壇28	染付	小碗	9.0	肥前(1630~50)	144	内堀東区	段状遺構	染付	小瓶	2.6	肥前(18 ~ 末)
57	外郭東区	中層	染付	小碗	9.5	肥前(1640~50)	145	内堀東区	段状遺構	染付	小瓶		完形、肥前(18c末~19c前)
58	外郭西区	土壇24	染付	小碗	9.7	完形、波佐見(18c後)	146	内堀西区	段状遺構	染付	小瓶	1.6	完形、肥前(18c後~19c初)
59	内堀西区	内堀上層	染付	小碗	7.9	筒形、完形、肥前(18c後)	147	内堀東区	段状遺構	色絵	神酒德利		肥前(18c末~1860)
60	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	6.8	筒形、肥前(18c後)	148	外郭東区	土壇13	青磁	仏花瓶	8.0	肥前(18c後)
61	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	7.6	完形、肥前(1780~1810)	149	外郭西区	土壇2	染付	仏花瓶	8.4	肥前
62	内堀東区	段状遺構	染付	小碗	7.4	筒形、肥前(1770~1800)	150	外郭東区	土壇13	染付	仏花瓶		肥前(18c後)
63	外郭東区	土壇13	染付	中碗	10.2	広東形、肥前(1780~1868)	151	T5	下層	染付	壺		肥前(1610~30)
64	外郭西区	土壇24	染付	中碗	10.2	広東形、完形、波佐見(1780~1868)	152	外郭西区	土壇24	青磁	香炉	11.4	肥前(18c後)
65	外郭西区	土壇24	染付	中碗	10.2	広東形、肥前(1780~1868)	153	外郭東区	砂溜まり	青磁	香炉	13.6	肥前
66	外郭西区	土壇11	染付	中碗	11.4	広東形、肥前(1780~1868)	154	外郭西区	土壇13	青磁	香炉	7.5	完形、肥前(18c後~19c初)
67	外郭西区	土壇24	染付	中碗	11.0	広東形、肥前系(1780~1868)	155	外郭西区	下層	青磁	香炉	6.6	肥前(17c後半)
68	外郭西区	土壇24	染付	中碗	11.0	広東形、肥前(1780~1868)	156	T5	下層	染付	中皿	10.8	肥前(1610~30)
69	外郭西区	土壇24	染付	中碗	12.0	広東形、肥前(1780~1868)	157	内堀東区	段状遺構	染付	香炉	8.5	肥前(18前~中)
70	外郭西区	土壇2	染付	中碗	11.4	広東形、肥前(1780~1868)	158	外郭西区	土壇69	染付	鉢		肥前
71	外郭東区	土壇13	染付	中碗	12.0	広東形、波佐見(1780~1868)	159	内堀西区	土壇103	染付	香炉	4.8	漆継、肥前(1830~40)
72	外郭西区	土壇24	染付	中碗	11.7	広東形、肥前系(1780~1868)	160	T8	上層	染付	仏飯器	6.7	肥前(18c後)
73	外郭西区	土壇24	染付	中碗	12.7	広東形、波佐見(1780~1868)	161	外郭西区	土壇24	染付	仏飯器	6.8	肥前(18c後)
74	外郭西区	土壇24	染付	中碗	12.4	広東形、波佐見(1780~1868)	162	T5	上層	染付	仏飯器	7.1	肥前(18c前)
75	外郭西区	上層	染付	中碗	10.5	肥前(18c中~1770)	163	T10,T11	上層	染付	仏飯器	7.5	完形、肥前(18c前)
76	外郭西区	土壇2	染付	中碗	11.4	広東形、肥前(1780~1868)	164	内堀東区	段状遺構	染付	仏飯器	6.6	完形、肥前
77	内堀東区	段状遺構	染付	大碗	13.0	肥前(18c前)	165	外郭東区	土壇35	染付	水滴		型押、肥前(18c後~19c初)
78	内堀東区	段状遺構	染付	大碗	14.3	肥前(18c後)	166	外郭西区	土壇24	色絵	水滴	1.6	大鼓形
79	内堀東区	段状遺構	染付	大碗	15.2	渦巻、肥前(18c前~中)	167	外郭西区	土壇24	染付	置物		獅子形、肥前(17c末~18c前)
80	T5	上層	染付	大碗	15.2	波佐見(18c前~中)	168	外郭西区	下層	染付	小杯	5.4	青花・漳州
81	外郭西区	土壇24	染付	中碗蓋	9.8	完形、肥前	169	外郭東区	砂溜まり	染付	小杯	4.8	青花・景德鎮(1590~1630)
82	外郭西区	土壇2	染付	中碗蓋	10.2	完形、肥前(18c後~末)	170	外郭西区	下層	染付	小杯	6.8	青花・景德鎮(1590~1630)
83	外郭西区	土壇24	染付	中碗蓋	10.4	口縁、完形、肥前(18c後)	171	外郭西区	下層	染付	小杯	6.8	青花・景德鎮(1590~1630)
84	外郭西区	土壇11	染付	中碗蓋	9.0	肥前	172	外郭西区	下層	染付	小杯	6.6	青花・景德鎮(1590~1630)
85	内堀東区	段状遺構	染付	中碗蓋	10.0	肥前(18c後)	173	外郭東区	土壇54	白磁	小杯	7.0	景德鎮
86	外郭東区	上層	染付	中碗蓋	9.2	関西系(1820~60)	174	外郭西区	土壇2	染付	小碗	9.6	青花(19c前)
87	内堀東区	段状遺構	染付	中碗蓋	8.5	肥前(19c初~1860)	175	T6	堀埋土	染付	小碗	6.6	青花・景德鎮(16c後)
88	T8	土壇12	染付	中碗蓋	8.4	肥前(19c前)	176	外郭東区	土壇25	染付	小碗	9.8	釉薬紅、景德鎮(1610~40)
89	T8	上層	染付	中碗蓋	9.2	肥前(19c前)	177	外郭西区	堀下層	染付	小碗	10.4	青花・景德鎮(16c)
90	外郭東区	土壇24	染付	中鉢	14.2	焼継、肥前(18c末~19c前)	178	外郭西区	土壇83・84	染付	小碗	10.0	青花・景德鎮(1590~1630)
91	T10,T11	堀埋土	染付	中鉢	18.5	肥前(19c初)	179	外郭東区	下層	染付	小碗	10.9	青花
92	外郭西区	土壇24	染付	大鉢	32.0	肥前(18c前)	180	外郭西区	堀下層	染付	小碗	10.8	青花・景德鎮(16c後)
93	T8	上層	染付	小皿	8.1	完形、肥前(19c初~1868)	181	T5	下層	染付	中碗	12.6	青花・景德鎮

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考
182	外郭西区	土壇51	染付	中碗	12.6	青花・景德鎮(1590~1630)	270	内堀西区	土壇103	陶器	小皿	9.0	盤形、京・信楽
183	外郭西区	土壇47	染付	中碗	12.1	青花・景德鎮	271	外郭西区	土壇11	陶器	小皿	9.8	盤形、完形、京・信楽
184	外郭西区	土壇67	染付	中碗	12.8	青花	272	外郭東区	中層	陶器	大皿	29.0	二彩手、胎土目、肥前(17c)
185	外郭西区	土壇63	染付	中碗	12.9	青花・景德鎮	273	T 8	上層	陶器	中皿	23.8	馬ノ目皿、瀬戸・美濃
186	外郭西区	土壇61・62	染付	大碗	13.9	青花・漳州(1590~1630)	274	内堀西区	土壇103	陶器	中皿	25.4	馬ノ目皿、瀬戸・美濃(18c)
187	外郭西区	堀下層	染付	大碗	14.8	青花・景德鎮(16c)	275	外郭東区	土壇13	陶器	鉢	20.7	陶印、瀬戸・復興織部(18c)
188	外郭東区	砂溜まり	染付	大碗	15.2	饅頭心、青花・景德鎮(16c後)	276	T 8	上層	陶器	鉢	19.9	瀬戸・復興織部(18c)
189	外郭西区	下層	染付	中碗	11.0	青花・漳州	277	外郭東区	土壇13	陶器	水注	7.4	
190	外郭西区	下層	染付	中碗	11.4	青花・漳州	278	外郭東区	土壇35	陶器	土瓶	9.3	偏球形、瑠璃釉
191	外郭西区	土壇60	染付	中碗	11.0	青花・漳州	279	T 5	上層	陶器	土瓶	8.3	偏球形、灰釉、完形
192	T 5	下層	染付	中碗	11.9	青花・漳州	280	外郭西区	土壇24	陶器	土瓶	5.6	偏球形、墨書、鉄釉
193	外郭西区	土壇63	染付	中碗	11.9	青花・漳州	281	外郭東区	土壇13	陶器	土瓶	6.6	算盤玉形、鉄釉
194	外郭西区	土壇63	染付	中碗	12.5	青花・漳州	282	外郭東区	土壇13	陶器	土瓶	7.8	算盤玉形、鉄釉
195	外郭西区	下層	染付	中碗	11.8	青花・漳州	283	外郭東区	土壇13	陶器	土瓶	8.1	算盤玉形、鉄釉
196	外郭西区	土壇46	染付	中碗	12.1	青花・漳州	284	外郭西区	土壇35	陶器	土瓶	7.9	算盤玉形、灰釉
197	外郭西区	土壇66	染付	中碗	12.4	青花・漳州	285	外郭西区	土壇24	陶器	土瓶	10.2	算盤玉形、墨書、灰釉
198	外郭西区	土壇63	染付	中碗	12.2	青花・漳州	286	外郭西区	土壇2	陶器	土瓶	6.0	偏球形、透明釉
199	T 5	下層	染付	大碗	13.9	青花・漳州	287	外郭西区	土壇2	陶器	土瓶蓋	11.3	凹形、灰釉、完形
200	T 5	下層	染付	大碗	13.9	青花・漳州	288	外郭西区	土壇24	陶器	土瓶蓋	9.7	凹形、灰釉
201	外郭西区	土壇63	染付	大碗	14.3	青花・漳州	289	外郭東区	土壇35	陶器	土瓶蓋	8.5	凹形、灰釉
202	外郭西区	下層	染付	中碗	9.8	青花・景德鎮(1590~1630)	290	T 8	上層	陶器	土瓶蓋	6.6	凹形、鉄釉、完形
203	外郭西区	下層	染付	中碗	10.4	青花・景德鎮(1590~1630)	291	外郭西区	土壇24	陶器	急須蓋	5.8	凹形、鉄釉、完形
204	外郭西区	土壇69	染付	中碗	10.6	青花・漳州	292	外郭西区	上層	灰器	急須蓋	7.3	凹形
205	外郭西区	土壇63	染付	大碗	12.3	青花・漳州	293	外郭東区	土壇12	陶器	土瓶蓋	9.2	信楽
206	外郭西区	土壇46	染付	大碗	12.8	青花・景德鎮(16c)	294	外郭東区	土壇13	陶器	土瓶蓋	7.2	イッチン掛け、灰釉
207	外郭西区	下層	染付	大碗		青花・景德鎮(1590~1630)	295	外郭東区	土壇13	陶器	土瓶蓋	8.0	灰釉
208	外郭西区	下層	染付	大碗		青花・景德鎮(1590~1630)	296	外郭西区	土壇2	陶器	土瓶蓋	8.9	鉄釉、完形
209	外郭西区	下層	染付	大碗	13.0	芙蓉手、青花・景德鎮	297	外郭西区	土壇2	陶器	土瓶蓋	8.7	鉄釉
210	外郭西区	下層	白磁	大碗	14.6	型打ち、青花・景德鎮(1590~1630)	298	外郭西区	上層	陶器	土瓶蓋	8.9	鉄釉
211	内堀東区	内堀下層	染付	鉢	15.0	青花・景德鎮	299	外郭西区	土壇24	陶器	中鉢	15.6	灰釉、完形
212	外郭西区	下層	染付	大碗		芙蓉手、青花・景德鎮(1590~1630)	300	外郭西区	土壇2	陶器	中鉢	15.6	三足ハマ痕、灰釉
213	外郭西区	堀上層	染付	中碗		饅頭心、青花・景德鎮(16c後)	301	外郭西区	土壇24	陶器	土鍋	18.0	スス
214	T 5	下層	染付	中碗		青花・漳州	302	外郭東区	土壇13	陶器	土鍋	21.8	鉄釉
215	外郭西区	下層	染付	中碗		青花・景德鎮(1590~1630)	303	外郭東区	土壇2	陶器	土鍋	20.0	透明釉
216	外郭西区	下層	染付	中碗		青花・景德鎮(1590~1630)	304	外郭西区	土壇2	陶器	土鍋	22.0	鉄釉
217	外郭西区	下層	染付	中碗		青花・景德鎮(1590~1630)	305	外郭西区	土壇24	陶器	土鍋蓋	15.0	灰釉
218	外郭西区	下層	染付	中碗		青花・景德鎮(1590~1630)	306	外郭西区	土壇24	陶器	土鍋蓋	18.3	灰釉
219	外郭西区	下層	染付	中碗		青花・漳州	307	T 8	土壇19	陶器	中瓶		刷毛目、肥前(18c)
220	外郭西区	土壇66	染付	中皿		青花・景德鎮(16c前~中)	308	外郭西区	土壇24	陶器	中瓶	4.0	鉄釉
221	T 6	堀埋土	白磁	小皿	9.0	漳州	309	外郭西区	土壇19	陶器	中瓶	4.0	鉄釉
222	外郭西区	土壇69	白磁	小皿	9.6		310	外郭西区	土壇24	陶器	中瓶		高田徳利、灰釉
223	外郭西区	堀下層	白磁	小皿	11.2	漳州	311	外郭東区	土壇13	陶器	燗徳利	4.5	齋口形、透明釉
224	外郭西区	下層	白磁	小皿	11.7		312	内堀東区	段状遺構	陶器	中瓶	2.5	ペコかん形、鉄釉
225	外郭西区	土壇51	白磁	小皿	12.0		313	内堀東区	段状遺構	陶器	燗徳利		透明釉
226	外郭東区	土壇75	白磁	小皿	12.0	輪八ギ、漳州	314	外郭東区	土壇13	陶器	中瓶	2.2	ペコかん形、鉄釉
227	外郭西区	下層	白磁	中皿	16.2		315	T 8	上層	陶器	花瓶		鉄釉
228	外郭東区	下層	白磁	中皿	18.2	青花・景德鎮(16c末~17c初)	316	外郭西区	土壇24・25	陶器	水鉢	35.8	胎土目、瀬戸・美濃
229	外郭西区	下層	染付	小皿	9.9	青花・景德鎮(16c末~17c初)	317	外郭東区	土壇13	陶器	水鉢	29.6	鉄釉
230	T 6	下層	染付	小皿	10.0	青花・景德鎮(16c末~17c初)	318	外郭東区	土壇13	陶器	捏鉢	28.8	灰釉、信楽
231	外郭西区	堀上層	染付	小皿	9.8	青花・景德鎮(16c末~17c初)	319	外郭西区	土壇2	陶器	植木鉢	15.8	鉄釉
232	外郭西区	堀上層	染付	小皿	10.6	青花・漳州(16c後)	320	外郭西区	土壇24	陶器	鉢	7.0	薬味入、灰釉
233	T 5	下層	染付	小皿	11.6	青花・景德鎮(16c末~17c初)	321	外郭東区	土壇35	陶器	火入	7.8	透明釉
234	外郭東区	土壇64	染付	中皿	13.8	青花・景德鎮(16c末~17c初)	322	外郭東区	土壇13	陶器	火入	11.3	貝目痕、鉄釉
235	外郭西区	下層	染付	中皿	20.0	青花・景德鎮(17c初)	323	外郭東区	土壇13	陶器	火入	10.0	墨書、透明釉
236	外郭西区	堀上層	染付	中皿	13.8	青花・漳州(16c後~17c初)	324	内堀西区	上層	陶器	灰吹		完形
237	外郭西区	下層	染付	中皿	13.8	青花・景德鎮(17c初)	325	外郭西区	土壇2	陶器	油皿	11.0	灰釉、完形、信楽
238	外郭東区	下層	染付	中皿	14.0	青花(17c初)	326	外郭東区	土壇35	陶器	油皿	11.0	灰釉、信楽
239	外郭東区	土壇74	染付	中皿	13.9	青花(17c初)	327	外郭西区	土壇24	陶器	灯明台	8.0	灰釉、信楽
240	外郭西区	下層	染付	大皿	39.0	青花・漳州(1590~1625)、龍胎砂	328	外郭西区	土壇2	陶器	灯明台	7.8	灰釉、完形、信楽
241	外郭西区	下層	染付	大皿		青花・漳州(1590~1625)、龍胎砂	329	外郭西区	土壇24	陶器	灯明台	8.2	灰釉、信楽
242	T 5	下層	染付	大皿	46.4	青花(1590~17c初)	330	外郭西区	土壇24	陶器	灯明台	8.6	灰釉、信楽
243	T 5	上層	染付	大皿	43.8	青花漳州(1590~1625)	331	外郭東区	土壇13	陶器	灯明台	7.2	鉄釉
244	外郭西区	土壇11	陶器	小碗	7.2	杉形、灰釉、信楽	332	外郭東区	土壇35	陶器	下皿	12.0	灰釉、信楽
245	外郭西区	土壇24	陶器	小碗	9.1	杉形、信楽	333	外郭東区	土壇13	陶器	下皿	12.2	灰釉(18c以後)、信楽
246	外郭西区	土壇24	陶器	小碗	9.4	杉形、灰釉、信楽	334	外郭東区	土壇13	陶器	下皿	12.9	灰釉、信楽
247	外郭西区	土壇2	陶器	小碗	8.9	藁灰釉、萩	335	外郭東区	土壇13	陶器	中襖	32.0	墨流し、鉄釉、丹波系
248	内堀東区	段状遺構	陶器	小碗	8.1	信楽	336	T 8	上層	陶器	中襖	46.4	鉄釉
249	外郭東区	土壇13	陶器	小碗	8.9	灰釉、信楽、完形	337	外郭西区	下層	陶器	小碗	7.4	天目形、鉄釉、瀬戸
250	外郭東区	土壇24	陶器	小碗	9.2	灰釉、信楽	338	外郭西区	下層	陶器	小碗	7.6	天目形、鉄釉、瀬戸
251	内堀西区	上層	陶器	小碗	8.4	信楽	339	外郭西区	下層	陶器	小碗	7.4	天目形、鉄釉、瀬戸
252	内堀東区	段状遺構	陶器	小碗	9.2		340	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.8	天目形、中国・建窯(13~15c)
253	外郭東区	土壇13	陶器	小碗	9.0		341	外郭西区	土壇69	陶器	中碗	11.0	天目形、鉄釉、肥前
254	外郭西区	土壇35	陶器	小碗	7.1	筒形	342	T 6	下層	陶器	中碗	11.6	天目形、鉄釉、瀬戸
255	外郭西区	土壇2	陶器	小碗	8.6	肥前(1780~19c前)	343	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.8	天目形、鉄釉、瀬戸
256	内堀東区	段状遺構	陶器	小碗	8.7	京、色絵	344	外郭西区	土壇71	陶器	中碗	11.5	天目形、鉄釉、瀬戸
257	外郭西区	下層	陶器	小碗	9.0	肥前(1660~1670)	345	外郭西区	堀下層	陶器	中碗	12.4	天目形、鉄釉、瀬戸
258	内堀東区	段状遺構	陶器	中碗	9.6	腰折形、灰釉、京・信楽	346	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.7	天目形、鉄釉、瀬戸
259	内堀東区	段状遺構	陶器	中碗	11.1	腰折形、灰釉、京・信楽	347	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.4	天目形、鉄釉、瀬戸
260	外郭西区	土壇11	陶器	中碗	10.8	灰釉、信楽	348	T 5	下層	陶器	中碗	11.8	天目形、鉄釉、瀬戸
261	内堀東区	段状遺構	陶器	中碗	12.6	柳椀、完形、瀬戸	349	T 5	下層	陶器	中碗	11.4	天目形、鉄釉、瀬戸
262	外郭東区	土壇13	陶器	中碗	12.0	広東形、瀬戸	350	外郭東区	土壇94	陶器	中碗	11.0	天目形、鉄釉、瀬戸
263	外郭東区	土壇25	陶器	中碗	11.5	灰釉、肥前(17c後~18c初)	351	T 8	砂溜まり	陶器	中碗	11.6	天目形、鉄釉、瀬戸
264	内堀東区	段状遺構	陶器	中碗	11.0	鋸手椀、瀬戸	352	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.0	天目形、柿釉、瀬戸
265	内堀東区	段状遺構	陶器	中碗	11.1	陶胎染付、肥前(18c前)	353	外郭東区	土壇106	陶器	中碗	11.5	灰釉、瀬戸
266	外郭東区	段状遺構	陶器	中碗	11.0	刷毛目椀、肥前(17c末~18c初)	354	外郭西区	土壇86	陶器	中碗	11.0	柿釉、瀬戸
267	外郭東区	段状遺構	陶器	中碗	10.8	拳骨形、鉄釉	355	外郭西区	下層	陶器	中碗	12.2	柿釉、瀬戸
268	外郭西区	土壇24	陶器	中碗	11.8	平形、京・信楽	356	T 5	下層	陶器	小碗	6.2	糸切、胎土目、唐津(1590~1610)
269	外郭東区	土壇13	陶器	中碗	12.4	平形、京・信楽	357	T 6	土壇63	陶器	小碗		

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考
358	T 5	下層	陶器	小碗	7.2	糸切、胎~砂目、唐津(1590~1630)	446	外郭西区	上層	陶器	小皿	12.4	胎土目、唐津(1590~1610)
359	T 5	下層	陶器	小碗	7.8	糸切、唐津	447	T 5	下層	陶器	小皿	11.5	胎土目、唐津(1590~1610)
360	T 6	土壇63	陶器	小碗	8.0	糸切、胎~砂目、唐津(1590~1630)	448	外郭西区	下層	陶器	小皿	11.5	砂目、唐津(1600~1630)
361	内堀東区	内堀下層	陶器	小碗	6.4	胎土目、唐津(1590~1610)	449	外郭西区	下層	陶器	小皿	11.0	胎土目、唐津(1590~1610)
362	外郭東区	下層	陶器	小碗	7.2	胎~砂目、唐津(1590~1630)	450	外郭西区	土壇63	陶器	小皿	11.2	砂目、唐津(1600~1630)
363	外郭西区	下層	陶器	小碗	7.4	胎土目、唐津(1590~1610)	451	外郭西区	土壇86	陶器	小皿	12.8	胎土目、唐津(1590~1610)
364	内堀西区	上層	陶器	小碗	7.6	唐津	452	外郭西区	土壇86	陶器	小皿	11.1	胎土目、唐津(1590~1610)
365	外郭西区	下層	陶器	小碗	7.5	砂目、唐津(1610~30)	453	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.5	胎土目、唐津(1590~1610)
366	T 8	砂溜まり	陶器	小碗	7.5	砂目、唐津(1610~30)	454	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.9	唐津
367	外郭西区	下層	陶器	小碗	8.2	胎土目、唐津(1590~1610)	455	外郭西区	土壇92	陶器	小皿	12.6	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
368	内堀東区	段状遺構	陶器	小碗	7.8	志野	456	外郭西区	下層	陶器	小皿	13.4	砂目、刷毛目唐津(17c前半)
369	T 5	上層	陶器	小碗	8.1	志野	457	外郭西区	下層	陶器	小皿	14.0	砂目、刷毛目唐津(17c前半)
370	T 5	下層	陶器	小碗	7.8	志野	458	T 6	土壇63	陶器	小皿	11.3	輪花、砂目、唐津(1600~30)
371	外郭西区	土壇83	陶器	中碗	9.9	胎土目、唐津(1590~1610)	459	T 6	土壇63	陶器	小皿	11.7	輪花、砂目(古)、唐津(1600~30)
372	外郭西区	土壇83	陶器	中碗	9.8	胎土目、唐津(1590~1610)	460	T 5	下層	陶器	小皿	12.4	輪花、砂目、唐津(1600~30)
373	内堀東区	内堀下層	陶器	中碗	10.2	胎土目、唐津(1590~1610)	461	T 6	土壇63	陶器	小皿	11.2	砂目、唐津(1600~30)
374	内堀東区	内堀下層	陶器	中碗	10.6	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)	462	T 6	土壇63	陶器	小皿	11.4	砂目、唐津
375	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.1	胎土目、唐津(1590~1610)	463	外郭西区	土壇63	陶器	小皿	12.0	砂目、唐津(1600~30)
376	T 5	下層	陶器	中碗	10.9	胎土目、唐津(1590~1610)	464	外郭西区	下層	陶器	小皿	13.1	砂目、唐津
377	T 5	下層	陶器	中碗	10.8	胎土目、唐津(1590~1610)	465	外郭西区	土壇86	陶器	小皿	12.8	胎土目、唐津(1590~1610)
378	外郭東区	土壇73	陶器	中碗	12.1	胎土目、唐津(1590~1610)	466	外郭東区	砂溜まり	陶器	小皿	12.7	胎土目、唐津(1590~1610)
379	外郭西区	土壇83・84	陶器	中碗	11.6	胎土目、唐津(1590~1610)	467	T 5	下層	陶器	小皿	13.4	砂目、唐津(1600~30)
380	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.4	胎土目、唐津(1590~1610)	468	外郭西区	土壇47	陶器	小皿	14.2	砂目、唐津(1600~30)
381	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.6	胎土目、唐津(1590~1610)	469	外郭西区	下層	陶器	小皿	14.3	胎土目、唐津(1590~1610)
382	外郭西区	土壇63	陶器	中碗	10.9	胎~砂目、唐津(1590~1630)	470	外郭西区	土壇63	陶器	小皿	16.0	唐津
383	T 6	下層	陶器	中碗	11.5	胎土目、唐津(1590~1610)	471	外郭西区	下層	陶器	小皿	13.6	砂目、唐津(1610~30)
384	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.8	胎~砂目、唐津(1590~1630)	472	外郭西区	土壇63	陶器	小皿	13.3	砂目、唐津(1610~30)
385	外郭西区	土壇63	陶器	中碗	11.6	胎~砂目、唐津(1590~1630)	473	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.6	砂目、唐津(1610~30)
386	外郭東区	土壇87	陶器	中碗	11.0	胎~砂目、唐津(1590~1630)	474	T 6	下層	陶器	小皿	13.4	砂目、唐津(1610~30)
387	外郭西区	土壇80	陶器	中碗	10.0	胎~砂目、唐津(1590~1630)	475	外郭西区	下層	陶器	小皿	13.1	糸切、砂目、唐津(1610~30)
388	T 5	下層	陶器	中碗	10.5	鉄絵、唐津(1610~40)	476	T 5	下層	陶器	小皿	13.4	砂目、唐津(1610~30)
389	外郭西区	下層	陶器	中碗	10.8	砂目、唐津(1610~30)	477	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.7	摺り分、砂目、唐津(1610~30)
390	T 6	土壇63	陶器	中碗	11.2	刷毛目、砂目、唐津(17c前半)	478	外郭西区	土壇46	陶器	小皿	13.1	摺り分、砂目、唐津(1610~30)
391	外郭西区	下層	陶器	中碗	10.8	砂目、唐津(1610~30)	479	T 5	下層	陶器	小皿	14.4	摺り分、砂目、上野・高取
392	外郭東区	下層	陶器	中碗	10.9	砂目、唐津(1610~30)	480	T 5	下層	陶器	小皿	12.5	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
393	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.0	砂目、唐津(1610~30)	481	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.2	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
394	外郭西区	土壇63	陶器	中碗	10.0	砂目、唐津(1610~30)	482	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.3	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
395	外郭西区	土壇63	陶器	中碗	12.0	砂目、唐津(1610~30)	483	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.6	鉄絵、砂目、唐津(1610~30)
396	外郭西区	土壇46	陶器	中碗	11.6	砂目、唐津(1610~30)	484	T 6	下層	陶器	小皿	12.4	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
397	T 6	土壇63	陶器	中碗	13.1	砂目、唐津(1610~30)	485	外郭西区	土壇69・86	陶器	小皿	13.0	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
398	T 5	下層	陶器	中碗	11.4	砂目、唐津(1610~30)	486	外郭東区	下層	陶器	小皿	13.0	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
399	外郭西区	下層	陶器	中碗	11.6	砂目、唐津(1610~30)	487	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.2	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
400	外郭西区	砂溜まり	陶器	中碗	13.8	藁灰釉、上野・高取	488	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.8	鉄絵、砂目(古)、唐津(1600~30)
401	外郭東区	土壇13	陶器	中碗		藁灰釉、上野・高取	489	外郭東区	下層	陶器	小皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
402	外郭西区	下層	陶器	中碗	10.4	藁灰釉、上野・高取	490	外郭西区	下層	陶器	小皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
403	外郭西区	堀上層	陶器	中碗		京	491	外郭東区	土壇73	陶器	小皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
404	外郭西区	土壇80・81	陶器	大碗	12.6	鉄絵、志野	492	外郭西区	下層	陶器	中皿	17.8	胎土目、唐津(1590~1610)
405	外郭西区	土壇86	陶器	大碗		杏形、黒織部	493	T 5	下層	陶器	中皿	20.8	胎土目、上野・高取
406	外郭西区	下層	陶器	大碗		杏形、黒織部	494	外郭西区	下層	陶器	中皿	22.4	陶印、上野・高取
407	T 5	下層	陶器	大碗		杏形、黒織部	495	外郭西区	上層	陶器	中皿	19.8	鉄釉、北部九州
408	外郭西区	下層	陶器	大碗		杏形、黒織部	496	T 5	下層	陶器	中皿	19.2	唐津
409	T 6	下層	陶器	大碗		杏形、黒織部	497	外郭西区	下層	陶器	中皿	25.6	唐津
410	外郭西区	下層	陶器	大碗	13.7	杏形、胎土目、上野・高取(1590~1620)	498	外郭東区	土壇105	陶器	大皿	30.4	胎土目、唐津(1590~1610)
411	外郭西区	土壇69	陶器	小皿	8.5	鉄釉、瀬戸	499	外郭西区	下層	陶器	大皿	31.2	胎土目、唐津(1590~1610)
412	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.0	菊皿、志野	500	T 5	下層	陶器	大皿	30.8	胎土目、唐津(1590~1610)
413	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.4	菊皿、志野	501	T 5	下層	陶器	大皿	34.0	唐津
414	T 6	下層	陶器	小皿	11.8	鉄釉、瀬戸	502	T 6	下層	陶器	中皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
415	外郭東区	土壇107	陶器	小皿	8.8	灰釉、美濃(16c)	503	外郭西区	土壇97	陶器	中皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
416	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.1	藁灰釉、上野・高取	504	外郭東区	砂溜まり	陶器	中皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
417	外郭西区	土壇63	陶器	小皿	10.4	藁灰釉、上野・高取	505	T 5	下層	陶器	中皿		鉄絵、唐津
418	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.8	灰釉、美濃(17c前)	506	T 5	下層	陶器	大皿		鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)
419	外郭東区	土壇110	陶器	小皿	10.2	灰釉、美濃(16c)	507	T 5	下層	陶器	大皿	27.6	唐津
420	外郭西区	土壇97	陶器	小皿	14.1	灰釉、瀬戸・美濃(16c後)	508	T 5	下層	陶器	大皿	29.8	胎土目、唐津(1590~1610)
421	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.3	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)	509	外郭東区	下層	陶器	向付		型打ち、鉄絵、志野
422	外郭西区	下層	陶器	小皿	11.0	鉄絵、胎土目、唐津(1590~1610)	510	外郭西区	下層	陶器	向付		型打ち、鉄絵、志野
423	外郭東区	土壇73	陶器	小皿	11.0	胎土目、唐津(1590~1610)	511	外郭西区	土壇69	陶器	向付		型打ち、志野
424	外郭西区	土壇62	陶器	小皿	10.6	胎土目、唐津	512	外郭西区	土壇83	陶器	向付		型打ち、鉄絵、志野
425	外郭西区	下層	陶器	小皿	9.8	唐津	513	外郭西区	下層	陶器	向付		型打ち、鉄絵、志野
426	外郭東区	土壇95	陶器	小皿	10.0	胎土目、唐津(1590~1610)	514	外郭西区	土壇69	陶器	向付		半環足、鉄絵、志野
427	外郭西区	土壇51	陶器	小皿	11.0	胎~砂目、唐津(1590~1630)	515	外郭西区	土壇2	陶器	向付		半環足、鉄絵、志野
428	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.4	胎土目、唐津(1590~1610)	516	外郭西区	土壇83	陶器	向付		半環足、鉄絵、志野
429	外郭西区	下層	陶器	小皿	12.6	胎土目、唐津(1590~1610)	517	外郭西区	土壇61	陶器	向付		鉄絵、志野
430	外郭西区	土壇60	陶器	小皿	11.5	唐津	518	外郭東区	土壇95	陶器	向付		鉄絵、志野
431	外郭東区	土壇95	陶器	小皿	10.6	砂目、唐津(1590~1630)	519	外郭西区	下層	陶器	向付		半環足、鉄絵、志野
432	外郭西区	土壇100	陶器	小皿	10.7	唐津	520	外郭西区	下層	陶器	向付	15.2	半環足、鉄絵、志野
433	外郭西区	土壇97	陶器	小皿	11.1	胎土目、唐津(1590~1610)	521	外郭東区	土壇73	陶器	向付	14.5	鉄絵、志野
434	内堀東区	内堀下層	陶器	小皿	11.2	唐津	522	外郭西区	下層	陶器	向付	13.0	鉄絵、志野
435	外郭東区	土壇71	陶器	小皿	10.8	胎土目、唐津(1590~1610)	523	外郭西区	土壇83	陶器	向付	15.6	半環足、型打ち、墨書、鉄絵、織部
436	外郭東区	土壇87	陶器	小皿	12.6	唐津	524	内堀東区	段上遺構	陶器	向付		半環足、型打ち、鉄絵、織部
437	外郭東区	土壇73	陶器	小皿	13.0	胎土目、唐津(1590~1610)	525	外郭東区	土壇73	陶器	向付		型打ち、鉄絵、織部
438	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.5	砂目、唐津(1600~1630)	526	外郭西区	下層	陶器	向付		型打ち、鉄絵、織部
439	外郭東区	土壇74	陶器	小皿	11.5	貝目、唐津(1590~1610)	527	外郭東区	内堀下層	陶器	向付		半環足、型打ち、鉄絵、織部
440	外郭西区	土壇95	陶器	小皿	10.7	砂目、唐津(1610~1630)	528	外郭西区	土壇83	陶器	向付		半環足、型打ち、鉄絵、織部
441	外郭西区	土壇78	陶器	小皿	11.8	胎~砂目、唐津(1590~1630)	529	T 6	下層	陶器	鉢	23.0	半環足、鉄絵、織部
442	外郭西区	砂溜まり	陶器	小皿	12.8	唐津	530	T 5	下層	陶器	鉢		半環足、鉄絵、織部
443	外郭西区	下層	陶器	小皿	10.7	唐津	531	外郭西区	土壇63	陶器	向付		型打ち、鉄絵、織部
444	T 5	下層	陶器	小皿	13.1	胎土目、唐津(1590~1610)	532	T 6	土壇63	陶器	中皿		総織部
445	T 6	土壇63	陶器	小皿	13.3	胎土目、唐津(1590~1610)	533	外郭西区	下層	陶器	中皿	15.6	総織部

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考
534	T 6	下層	陶器	台付鉢		色絵、京	622	内堀東区	上層	炆器	下皿	8.0	完形、備前
535	T 5	上層	陶器	向付	14.0	鉄絵、唐津	623	外郭東区	土壇13	炆器	下皿	7.4	備前
536	内堀西区	内堀下層	陶器	向付		鉄絵、胎土目、唐津 (1590~1610)	624	内堀西区	上層	炆器	下皿	7.6	完形、備前
537	外郭東区	土壇73	陶器	向付	7.6	灰志野	625	外郭西区	土壇11	炆器	下皿	7.8	備前
538	外郭西区	砂溜まり	陶器	鉢		鉄絵、胎土目、唐津 (1590~1610)	626	外郭東区	土壇35	炆器	下皿	7.3	完形、備前
539	外郭西区	土壇63	陶器	鉢	9.3	砂目、唐津 (1610~30)	627	外郭東区	上層	炆器	下皿	8.0	完形、備前
540	外郭西区	土壇46	陶器	片口	11.4	唐津	628	外郭西区	土壇2	炆器	下皿	8.9	備前
541	T 6	土壇63	陶器	片口	11.0	鉄絵、唐津	629	外郭西区	土壇24	炆器	下皿	9.1	完形、備前
542	T 5	下層	陶器	片口	17.6	唐津	630	外郭西区	土壇2	炆器	下皿	9.1	完形、備前
543	外郭西区	土壇69	陶器	片口	20.9	鉄絵、唐津	631	外郭東区	土壇13	炆器	下皿	9.0	完形、備前
544	T10,T11	下層	陶器	鉢	34.4	藁灰釉、上野・高取	632	外郭東区	土壇13	炆器	下皿	8.9	完形、備前
545	外郭西区	堀上層	陶器	鉢	23.3	団子足、上野・高取	633	外郭西区	土壇2	炆器	下皿	10.8	完形、備前
546	外郭西区	土壇49	陶器	鉢	15.8	夕タキ、唐津	634	外郭西区	土壇35	炆器	下皿	11.0	備前
547	外郭東区	土壇73	陶器	鉢	19.5	夕タキ、貝目、唐津 (1590~1610)	635	外郭西区	土壇24	炆器	下皿	11.6	備前
548	外郭西区	下層	陶器	壺	12.6	唐津	636	外郭東区	土壇13	炆器	下皿	12.2	完形、備前
549	外郭東区	下層	陶器	壺	14.0	夕タキ、唐津	637	外郭西区	中層	炆器	下皿	12.2	備前
550	T 5	下層	陶器	壺	11.0	夕タキ	638	内堀東区	段上遺構	炆器	下皿	12.2	備前
551	外郭西区	下層	陶器	壺	10.2	夕タキ、唐津	639	T 5	下層	炆器	小椀		備前
552	外郭西区	下層	陶器	鉢		夕タキ、貝目	640	外郭西区	土壇88	炆器	中椀		備前
553	T 6	下層	陶器	花瓶		夕タキ、唐津	641	外郭西区	土壇63	炆器	中椀		備前
554	外郭西区	土壇63	陶器	中瓶		夕タキ、掛け分、唐津	642	T 6	下層	炆器	中椀	11.3	備前
555	外郭西区	土壇63	陶器	小瓶	2.9	唐津	643	外郭東区	土壇110	炆器	中椀	12.4	備前
556	外郭西区	土壇66	陶器	小瓶		唐津	644	外郭西区	下層	炆器	中椀		へラ記号、備前
557	T 6	下層	陶器	小壺		肩筒形、茶入、鉄釉、瀬戸	645	外郭東区	下層	炆器	小皿	5.7	輪花、備前
558	T 5	下層	陶器	水滴	2.0	水注形、鉄釉、完形、瀬戸	646	外郭東区	土壇73	炆器	小皿	10.4	備前
559	外郭西区	下層	陶器	大瓶		中国南部	647	外郭東区	堀上層	炆器	中皿	22.8	へラ描、備前
560	T 5	下層	陶器	小皿		ベトナム	648	T 8	砂溜まり	炆器	鉢	24.5	陶印、備前
561	外郭東区	砂溜まり	陶器	鉢		輪ハギ、中国 (17c前)	649	外郭西区	土壇46	炆器	鉢	22.0	備前
562	外郭東区	土壇35	炆器	蓋	6.0	備前	650	外郭東区	土壇71	炆器	鉢	19.0	備前
563	外郭東区	土壇13	炆器	小皿		型押、朱泥、備前	651	外郭東区	土壇110	炆器	鉢	15.3	備前
564	外郭東区	土壇13	炆器	小皿		型押、朱泥、備前	652	T 6	下層	炆器	鉢		角形、備前
565	外郭東区	上層	炆器	中皿	19.6	備前	653	外郭西区	土壇	炆器	鉢	27.6	八角形、備前
566	外郭東区	土壇35	炆器	小皿	9.6	型押、備前	654	T 5	下層	炆器	平鉢	40.6	備前
567	外郭東区	土壇35	炆器	鉢	10.4	陶印、輪花、備前	655	外郭西区	土壇63	炆器	平鉢	46.8	内面火罨、へラ記号、備前
568	外郭東区	土壇13	炆器	鉢	21.6	輪花、備前	656	T 5	下層	炆器	平鉢	43.4	陶印、備前
569	外郭東区	土壇24	炆器	鉢	8.4	陶印、朱泥、備前	657	T 5	下層	炆器	平鉢	46.4	外面火罨、へラ記号、完形、備前
570	外郭東区	土壇35	炆器	鉢	17.3	陶印、備前	658	T 5	下層	炆器	平鉢	48.0	外面火罨、備前
571	外郭西区	土壇24	炆器	鉢	15.6	備前	659	T 6	土壇63	炆器	平鉢	46.0	備前
572	外郭西区	土壇24	炆器	壺	18.6	水指、備前	660	T 5	下層	炆器	鉢	8.0	へラ記号、備前
573	T 5	上層	炆器	籠形		型物、備前	661	外郭西区	下層	炆器	鉢	11.2	備前
574	外郭東区	土壇13	炆器	小瓶	2.2	備前	662	外郭西区	下層	炆器	鉢	15.4	備前
575	外郭東区	土壇13	炆器	小瓶	1.8	ペコかん形、完形、備前	663	T 5	下層	炆器	鉢	10.2	備前
576	内堀東区	段上遺構	炆器	小瓶		角徳利、陶印、完形、備前	664	外郭西区	下層	炆器	鉢	15.2	備前
577	外郭西区	土壇28	炆器	中瓶	3.4	舟徳利、備前	665	T 6	下層	炆器	鉢	14.8	備前
578	T 5	上層	炆器	中瓶	3.0	備前	666	外郭東区	土壇65	炆器	鉢	12.9	備前
579	外郭東区	土壇13	炆器	匣鉢	10.6	陶印、備前	667	外郭東区	砂溜まり	炆器	鉢	9.1	子持ち、備前
580	外郭西区	土壇24	炆器	匣鉢	13.0	陶印、スス、備前	668	外郭東区	砂溜まり	炆器	鉢	13.7	備前
581	外郭西区	土壇24	炆器	匣鉢	12.0	陶印、完形、備前	669	外郭西区	下層	炆器	鉢		子持ち、備前
582	外郭西区	土壇24	炆器	匣鉢	12.6	陶印、スス、備前	670	外郭西区	土壇63	炆器	鉢	15.5	手鉢、備前
583	外郭東区	土壇35	炆器	匣鉢	12.4	備前	671	T 5	下層	炆器	鉢	11.8	備前
584	外郭東区	上層	炆器	匣鉢		曲物形、備前	672	外郭西区	土壇46	炆器	鉢	11.4	備前
585	外郭西区	土壇2	炆器	匣鉢	17.6	備前	673	T 5	下層	炆器	鉢		備前
586	外郭東区	土壇13	炆器	匣鉢	23.2	備前	674	外郭西区	下層	炆器	鉢		備前
587	T 5	上層	炆器	匣鉢蓋	13.0	備前	675	外郭西区	砂溜まり	炆器	鉢		へラ描、備前
588	外郭東区	土壇35	炆器	匣鉢蓋	24.2	備前	676	外郭西区	土壇61	炆器	鉢	13.2	手鉢、へラ記号、備前
589	外郭東区	土壇35	炆器	花入	9.9	陶印、完形、備前	677	T 5	下層	炆器	鉢	14.8	備前
590	T 8	上層	炆器	播鉢	17.6	明石	678	外郭東区	土壇65・113	炆器	鉢	16.7	樽形、へラ記号、備前
591	外郭西区	土壇24	炆器	播鉢	35.7	明石	679	外郭西区	下層	炆器	鉢	17.6	手筒形、備前
592	外郭西区	土壇27	炆器	播鉢	32.8	備前	680	外郭西区	堀上層	炆器	鉢	25.0	備前
593	外郭東区	土壇13	炆器	播鉢	34.0	備前	681	外郭西区	堀埋土	炆器	鉢	27.8	備前
594	外郭東区	土壇26	炆器	播鉢	38.8	陶印、備前	682	外郭東区	土壇40	炆器	鉢	15.4	備前
595	外郭東区	土壇13	炆器	油皿	7.3	備前	683	外郭東区	下層	炆器	鉢	13.4	備前
596	外郭東区	土壇35	炆器	油皿	7.3	備前	684	T 8	砂溜まり	炆器	鉢	13.8	備前
597	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	7.5	備前	685	外郭東区	下層	炆器	鉢	12.4	備前
598	外郭西区	土壇2	炆器	油皿	7.4	備前	686	外郭東区	砂溜まり	炆器	鉢		備前
599	外郭東区	土壇13	炆器	油皿	7.7	完形、備前	687	外郭西区	土壇63	炆器	鉢		備前
600	外郭西区	土壇11	炆器	油皿	7.5	備前	688	外郭西区	下層	炆器	鉢		へラ記号、備前
601	外郭西区	土壇2	炆器	油皿	7.8	完形、備前	689	外郭西区	土壇97	炆器	鉢	23.4	備前
602	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	7.6	スス、完形、備前	690	外郭東区	中層	炆器	鉢	5.5	備前
603	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	7.7	スス、備前	691	外郭西区	下層	炆器	花入	7.0	掛花入、備前
604	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	7.8	備前	692	T 6	土壇63	炆器	鉢	13.0	備前
605	外郭東区	土壇35	炆器	油皿	9.3	完形、備前	693	外郭東区	中層	炆器	片口	14.0	備前
606	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	9.5	スス、備前	694	外郭東区	土壇73	炆器	蓋	7.8	平蓋、備前
607	外郭東区	土壇13	炆器	油皿	9.5	備前	695	外郭西区	土壇63	炆器	蓋	14.0	平蓋、陶印、備前
608	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	9.7	スス、備前	696	外郭西区	下層	炆器	蓋	8.0	凹み蓋、へラ描、備前
609	外郭西区	土壇2	炆器	油皿	9.8	備前	697	外郭西区	下層	炆器	蓋	4.6	凹み蓋、糸切、備前
610	内堀東区	段上遺構	炆器	油皿	10.6	完形、備前	698	外郭西区	下層	炆器	蓋	11.2	備前
611	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	11.7	スス、完形、備前	699	外郭西区	下層	炆器	蓋	21.8	被せ蓋、陶印、備前
612	内堀西区	土壇103	炆器	油皿	12.2	備前	700	外郭西区	下層	炆器	播鉢	38.0	内面火罨、備前
613	外郭東区	土壇13	炆器	油皿	12.6	備前	701	T 5	下層	炆器	播鉢	37.5	へラ記号、備前
614	外郭西区	土壇24	炆器	油皿	12.4	備前	702	T 6	下層	炆器	播鉢	39.8	備前
615	外郭東区	土壇13	炆器	下皿	7.1	完形、備前	703	T 8	上層	炆器	播鉢	36.0	火罨、備前
616	外郭西区	土壇24	炆器	下皿	7.1	完形、備前	704	外郭東区	土壇73	炆器	播鉢	36.0	備前
617	外郭西区	土壇2	炆器	下皿	7.3	備前	705	外郭東区	土壇34	炆器	播鉢	41.2	備前
618	内堀西区	土壇103	炆器	下皿	7.3	完形、備前	706	外郭西区	土壇63	炆器	播鉢	34.1	備前
619	外郭東区	土壇20	炆器	下皿	7.3	完形、備前	707	外郭西区	下層	炆器	播鉢	28.0	備前
620	外郭西区	土壇24	炆器	下皿	6.9	完形、備前	708	外郭東区	砂溜まり	炆器	播鉢	28.4	備前
621	内堀東区	上層	炆器	下皿	7.4	完形、備前	709	外郭西区	土壇63	炆器	播鉢	28.8	備前

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種	別器	種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種	別器	種	口径(cm)	備考
710	外郭西区	下層	灰器	播鉢		28.4	備前	798	T 5	下層	土器	皿		10.9	糸切、スス
711	外郭西区	土壇46	灰器	播鉢		27.8	備前	799	外郭西区	土壇46	土器	皿		11.0	完形
712	外郭東区	下層	灰器	播鉢		29.4	備前	800	T 5	下層	土器	皿		11.0	糸切、スス、完形
713	外郭西区	土壇79	灰器	播鉢		23.0	備前	801	外郭東区	土壇66	土器	皿		7.9	糸切、完形
714	外郭西区	土壇100	灰器	播鉢		25.0	備前	802	T 5	下層	土器	皿		11.4	糸切
715	外郭東区	下層	灰器	播鉢		24.8	備前	803	外郭西区	下層	土器	皿		12.4	糸切、スス
716	T 5	下層	灰器	播鉢		20.0	備前	804	外郭東区	土壇66	土器	皿		13.8	糸切、スス
717	外郭西区	土壇63	灰器	播鉢		22.0	備前	805	外郭西区	堀埋土	土器	皿		6.0	糸切、完形
718	外郭西区	土壇63	灰器	播鉢		22.4	備前	806	T 6	堀埋土	土器	皿		6.6	糸切
719	T 5	上層	灰器	壺		5.4	備前	807	外郭西区	堀埋土	土器	皿		6.5	糸切、完形
720	外郭西区	中層	灰器	壺		8.2	雀口、ヘラ記号、備前	808	外郭西区	堀埋土	土器	皿		6.4	糸切、完形
721	外郭東区	土壇67	灰器	壺		6.8	備前	809	外郭西区	堀中層	土器	皿		8.7	糸切
722	外郭東区	砂溜まり	灰器	中瓶		4.8	備前	810	外郭西区	堀上層	土器	皿		8.7	糸切
723	外郭東区	土壇86	灰器	中瓶			備前	811	外郭西区	堀上層	土器	皿		8.9	糸切
724	T 5	下層	灰器	中瓶			ヘラ記号、備前	812	外郭東区	堀下層	土器	皿		8.8	糸切
725	外郭西区	堀	灰器	小瓶		3.8	ヘラ記号、備前	813	外郭東区	堀下層	土器	皿		8.6	糸切、完形
726	T 6	下層	灰器	小瓶			ヘラ記号、備前	814	外郭東区	堀下層	土器	皿		9.0	糸切
727	外郭東区	下層	灰器	小瓶			糸切、ヘラ記号、備前	815	外郭西区	堀上層	土器	皿		10.3	糸切、スス、完形
728	内堀東区	内堀下層	灰器	小瓶		1.0	備前	816	外郭西区	堀上層	土器	皿		10.3	糸切
729	外郭西区	土壇83	灰器	花瓶			備前	817	外郭西区	堀土堤	土器	皿		10.2	糸切、スス
730	T 5	下層	灰器	花瓶			備前	818	外郭西区	堀中層	土器	皿		10.5	糸切
731	T 5	下層	灰器	花瓶		21.0	備前	819	外郭西区	堀上層	土器	皿		10.7	糸切、完形
732	外郭西区	土壇91	灰器	壺		10.8	雀口、双耳、備前	820	外郭西区	堀土堤	土器	皿		11.0	糸切
733	外郭西区	下層	灰器	壺		13.0	備前	821	外郭東区	堀下層	土器	皿		10.4	糸切、スス
734	外郭西区	下層	灰器	甕		20.0	備前	822	外郭西区	堀上層	土器	皿		9.6	糸切
735	T 7	下層	灰器	甕		52.4	ヘラ描、備前	823	外郭西区	堀下層	土器	皿		9.0	
736	外郭西区	土壇71	灰器	甕		57.0	備前	824	外郭東区	土壇110	土器	皿		8.9	スス
737	外郭西区	土壇63	灰器	甕		37.5	備前	825	外郭西区	土壇104	土器	皿		8.9	スス
738	外郭西区	堀上層	灰器	甕		26.4	備前	826	外郭西区	土壇104	土器	皿		9.6	
739	外郭西区	土壇46	灰器	焼台		8.1	備前	827	外郭西区	土壇26	土器	焼壇壺蓋		7.5	完形
740	外郭西区	土壇63	灰器	焼台		19.2	備前	828	T 6	上層	土器	焼壇壺蓋		7.2	A類、内面布目、泉州岸、完形
741	外郭西区	土壇63	灰器	焼台		20.9	備前	829	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		7.0	A類、完形
742	内堀東区	上層	土器	皿		6.7	糸切、スス、完形	830	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.7	A類、完形
743	内堀西区	上層	土器	皿		7.7	糸切、完形	831	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.6	A類
744	内堀東区	段状遺構	土器	皿		6.8	糸切、完形	832	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		6.9	A類、内面布目、完形
745	内堀東区	段状遺構	土器	皿		8.0	糸切	833	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		6.8	A類
746	外郭東区	段状遺構	土器	皿		9.1	糸切、完形	834	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.7	A類、完形
747	外郭東区	段状遺構	土器	皿		9.0	糸切、完形	835	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.4	A類、完形
748	外郭西区	土壇13	土器	皿		8.5	糸切	836	外郭西区	土壇46	土器	焼壇壺蓋		6.8	A類、完形
749	外郭東区	土壇30	土器	皿		9.2	糸切、完形	837	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		6.4	A類、完形
750	内堀東区	段状遺構	土器	皿		9.4	糸切	838	外郭西区	土壇42	土器	焼壇壺蓋		8.2	A類、完形
751	外郭西区	土壇27	土器	皿		9.8	糸切、完形	839	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		7.8	A類
752	外郭西区	上層	土器	皿		10.4	糸切、完形	840	外郭東区	下層	土器	焼壇壺蓋		7.5	A類、完形
753	外郭東区	土壇13	土器	皿		10.8	糸切	841	外郭東区	砂溜まり	土器	焼壇壺蓋		7.1	A類
754	外郭東区	土壇29	土器	皿		11.5	糸切、スス、完形	842	T 6	下層	土器	焼壇壺蓋		7.0	A類
755	外郭東区	土壇28	土器	皿		12.6	糸切	843	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		7.4	A類
756	外郭西区	土壇27	土器	皿		13.0	糸切、スス	844	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.8	B類、完形
757	外郭東区	土壇13	土器	皿		12.2	糸切、墨書	845	外郭東区	土壇73	土器	焼壇壺蓋		6.6	A類、完形
758	外郭東区	土壇13	土器	皿		12.6	糸切、墨書	846	T 6	下層	土器	焼壇壺蓋		7.2	B類
759	外郭東区	土壇13	土器	皿		13.4	糸切、スス、ヘラケズリ	847	T 6	土壇63	土器	焼壇壺蓋		6.8	B類、完形
760	外郭東区	下層	土器	皿		8.1	糸切、完形	848	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		6.3	A類、ミナと藤左工門、完形
761	外郭西区	土壇46	土器	皿		9.3	糸切	849	外郭東区	下層	土器	焼壇壺蓋		6.5	A類、天下一堺ミナと藤左工門
762	T 6	土壇42	土器	皿		9.6	糸切、スス、完形	850	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		7.0	A類、天下一堺ミナと藤左工門
763	外郭西区	下層	土器	皿		11.2	糸切、スス、完形	851	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		5.6	A類、完形
764	T 5	下層	土器	皿		10.1	糸切、完形	852	外郭東区	砂溜まり	土器	焼壇壺蓋		5.6	A類、完形
765	外郭東区	下層	土器	皿		10.3	糸切	853	外郭西区	土壇86	土器	焼壇壺蓋		5.4	A類、完形
766	T 5	下層	土器	皿		11.0	糸切、スス	854	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		5.3	A類、完形
767	T 5	下層	土器	皿		10.4	糸切、完形	855	外郭西区	土壇69	土器	焼壇壺蓋		5.2	A類、完形
768	T 5	下層	土器	皿		11.0	糸切、完形	856	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		5.3	A類、完形
769	外郭西区	下層	土器	皿		11.6	糸切、完形	857	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		5.5	A類、完形
770	外郭西区	土壇21	土器	皿		11.7	糸切、スス、完形	858	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		5.6	A類、完形
771	T 5	下層	土器	皿		12.4	糸切	859	外郭東区	土壇73	土器	焼壇壺蓋		5.2	B類
772	T 5	下層	土器	皿		12.8	糸切、スス	860	T 6	下層	土器	焼壇壺蓋		5.3	B類、完形
773	外郭西区	下層	土器	皿		13.9	糸切	861	外郭西区	土壇63	土器	焼壇壺蓋		5.7	B類、完形
774	外郭東区	下層	土器	皿		13.6	糸切	862	外郭西区	下層	土器	焼壇壺蓋		6.0	B類、完形
775	外郭東区	砂溜まり	土器	皿		14.5	糸切、完形	863	外郭東区	土壇62	土器	焼壇壺蓋		5.6	B類、完形
776	T 5	下層	土器	皿		5.4	糸切、完形	864	T 5	下層	土器	焼壇壺蓋		5.6	B類、完形
777	外郭西区	下層	土器	皿		6.4	糸切、完形	865	外郭東区	砂溜まり	土器	焼壇壺蓋		5.5	C類、完形
778	T 5	下層	土器	皿		6.5	糸切	866	外郭東区	土壇73	土器	焼壇壺蓋		5.2	C類、完形
779	T 5	下層	土器	皿		6.9	糸切	867	T 8	上層	土器	土瓶		8.4	瓦質土器、完形
780	外郭東区	下層	土器	皿		6.6	糸切	868	外郭東区	土壇13	土器	急須		5.8	白泥、千鳥墨書
781	外郭西区	土壇46	土器	皿		8.6	糸切	869	外郭東区	土壇28	土器	羽釜		14.4	瓦質土器
782	外郭西区	土壇46	土器	皿		7.7	糸切	870	外郭東区	土壇13	土器	羽釜		15.2	
783	外郭西区	下層	土器	皿		8.7	糸切	871	外郭東区	土壇13	土器	鍋		24.2	
784	外郭東区	下層	土器	皿		9.0	糸切、完形	872	外郭西区	堀下層	土器	鍋		38.4	内耳
785	外郭西区	下層	土器	皿		8.7	糸切、完形	873	外郭西区	堀下層	土器	鍋		30.0	
786	外郭東区	下層	土器	皿		8.7	糸切、完形	874	外郭西区	土壇2	土器	焙烙		39.2	内耳、スス
787	外郭東区	下層	土器	皿		11.0	糸切	875	外郭西区	土壇24	土器	焙烙		32.4	D類
788	外郭西区	下層	土器	皿		9.0	糸切、スス、完形	876	T 6	上層	土器	焙烙		32.0	タタキ、C類
789	T 5	下層	土器	皿		8.4	糸切	877	T 5	下層	土器	焙烙		26.6	タタキ、A類
790	外郭西区	土壇46	土器	皿		8.6	糸切	878	外郭西区	土壇93・94	土器	焙烙		22.4	
791	T 5	下層	土器	皿		9.0	糸切、完形	879	外郭東区	下層	土器	焙烙			瓦質土器、把手付
792	外郭東区	土壇29	土器	皿		8.9	糸切、完形	880	T 8	上層	土器	壺		16.8	火消し壺
793	T 6	土壇63	土器	皿		8.6	糸切、スス、完形	881	外郭西区	土壇24	土器	鉢		39.7	
794	T 5	下層	土器	皿		9.4	糸切、スス	882	外郭東区	土壇106	土器	鉢		38.0	瓦質土器
795	内堀東区	内堀下層	土器	皿		9.8	糸切、完形	883	外郭東区	堀下層	土器	鉢			瓦質土器
796	T 5	下層	土器	皿		10.4	糸切、完形	884	外郭東区	砂溜まり	土器	火鉢		13.0	
797	外郭西区	土壇46	土器	皿		10.1	糸切、完形	885	外郭西区	下層	土器	火鉢		14.5	印花、瓦質土器

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	備考
886	外郭西区	土壇26	土器	火鉢	15.6	瓦質土器	1745	外郭西区	下層	須恵器	高環		二方透かし
887	T 5	下層	土器	火鉢	15.8	瓦質土器	1746	外郭東区	中層	須恵器	平瓶		
888	外郭東区	土壇30	土器	火鉢	19.5	瓦質土器	1747	外郭東区	砂溜まり	須恵器	裏	31.2	
889	外郭西区	土壇2	土器	火鉢		瓦質土器	1748	外郭東区	中層	須恵器	杯		
890	外郭東区	土壇35	土器	火鉢		瓦質土器	1749	外郭西区	下層	須恵器	杯		
891	外郭西区	土壇2	土器	火鉢	23.5	瓦質土器	1750	T 5	下層	須恵器	杯		
892	外郭西区	土壇46	土器	火鉢	19.6	瓦質土器	1751	外郭西区	土壇98	埴輪	円筒		
893	T 5	下層	土器	火鉢	19.8	瓦質土器							
894	外郭東区	土壇13	土器	火鉢	25.4	瓦質土器							
895	外郭東区	土壇13	土器	焜炉	25.4	へら記号	898	外郭西区	堀埋土	軒丸瓦	右三巴	22	釘穴
896	外郭西区	土壇2	土器	焜炉	25.4	口縁内瓶掛	899	外郭西区	堀上層	軒丸瓦	右三巴	25	圏線
897	外郭西区	土壇2	土器	焜炉	24.0	口縁内瓶掛	900	外郭東区	下層	軒丸瓦	右三巴	19	
1669	T 6	堀埋土	黒色土器	杯		B類	901	外郭西区	土壇93・94	軒丸瓦	右三巴	23	コピキA、莫産目
1670	T 5	最下層	土師器	椀	14.8	早鳥式土器	902	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	20	
1671	外郭東区	土壇75	土師器	椀	15.4	早鳥式土器	903	外郭西区	砂溜まり	軒丸瓦	右三巴	17	
1672	外郭西区	最下層	土師器	椀	14.6	早鳥式土器	904	外郭西区	土壇80	軒丸瓦	右三巴	19	コピキA
1673	外郭西区	最下層	土師器	椀	14.0	早鳥式土器	905	T 7	下層	軒丸瓦	右三巴	19	
1674	外郭西区	最下層	土師器	椀	14.2	早鳥式土器	906	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	19	范傷、圏線
1675	外郭東区	土壇75	土師器	椀	13.7	早鳥式土器	907	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	18	タタキ、コピキB
1676	T 5	最下層	土師器	椀	13.7	早鳥式土器	908	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	18	圏線
1677	外郭西区	下層	土師器	椀	11.8	早鳥式土器	909	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	18	板目痕、圏線
1678	外郭西区	最下層	土師器	椀	11.4	早鳥式土器	910	外郭西区	土壇83	軒丸瓦	右三巴	17	
1679	外郭西区	土壇80	土師器	椀	11.2	早鳥式土器	911	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	17	釘穴、莫産目
1680	外郭東区	土壇110	土師器	椀	11.3	早鳥式土器	912	外郭西区	砂溜まり	軒丸瓦	右三巴	16	釘穴、コピキB、莫産目
1681	外郭西区	土壇68	土師器	椀	10.6	早鳥式土器、完形	913	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	右三巴	15	范傷、コピキB
1682	外郭西区	最下層	土師器	椀	11.1	早鳥式土器	914	外郭西区	土壇63	軒丸瓦	右三巴	14	圏線
1683	外郭西区	最下層	土師器	椀	10.4	早鳥式土器	915	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	14	釘穴、コピキB
1684	外郭西区	最下層	土師器	椀	9.2	早鳥式土器	916	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	右三巴	13	范傷、圏線、コピキA
1685	外郭西区	最下層	土師器	小皿	8.2		917	T 7	土壇75	軒丸瓦	右三巴	13	
1686	外郭西区	最下層	瓦器	碗	13.9	内泉型	918	内堀西区	土壇103	軒丸瓦	右三巴	12	
1687	内堀東区	内堀下層	瓦器	碗	15.2	大和型	919	外郭東区	中層	軒丸瓦	右三巴	12	
1688	外郭西区	最下層	陶器	皿		緑釉陶器、京都(9c中)	920	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	珠文間に大
1689	外郭西区	堀上層	陶器	皿		緑釉陶器、京都(10c前)	921	T 6	中層	軒丸瓦	右三巴	12	コピキB
1690	T 8	溝4	土師器	鍋	29.4	三足	922	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	釘穴、板目痕、タタキ
1691	T 8	溝4	土師器	鍋	28.6	内耳	923	T 3	井戸1	軒丸瓦	右三巴	12	
1692	T 8	溝4	瓦質土器	羽釜	15.4		924	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	キラコ
1693	外郭西区	最下層	陶器	捏鉢	20.1	束播系	925	外郭西区	土壇8	軒丸瓦	右三巴	12	キラコ
1694	外郭西区	最下層	陶器	捏鉢	27.4	束播系	926	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、キラコ、莫産目
1695	外郭西区	下層	陶器	捏鉢	23.0	束播系	927	外郭東区	土壇35	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、キラコ、コピキB
1696	外郭西区	ビット172	陶器	捏鉢	29.0	束播系	928	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	11	コピキB
1697	T 8	溝4	炆器	播鉢	29.2	備前	929	外郭東区	土壇95	軒丸瓦	右三巴	11	圏線
1698	外郭東区	土壇110	炆器	播鉢	26.0	備前	930	外郭西区	堀下層	軒丸瓦	左三巴	34	圏線
1699	外郭東区	土壇105	白磁	碗	16.0	中国(12~13c)	931	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	31	
1700	外郭西区	土壇77	白磁	碗	15.6	中国(12~13c)	932	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	30	
1701	外郭西区	最下層	白磁	碗	15.9	中国(12~13c)	933	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	27	范傷、コピキB
1702	外郭西区	下層	白磁	碗	15.8	中国(12~13c)	934	外郭東区	土壇74	軒丸瓦	左三巴	27	
1703	T 5	最下層	白磁	碗	15.8	中国(12~13c)	935	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	26	圏線
1704	T 5	中層	白磁	碗		中国(12~13c)	936	外郭西区	土壇50	軒丸瓦	左三巴	26	
1705	外郭東区	土壇75	白磁	碗		中国(12~13c)	937	外郭西区	堀埋土	軒丸瓦	左三巴	25	
1706	外郭西区	土壇68・82	青磁	碗	14.5	同安窯(12~13c)	938	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	23	范傷
1707	外郭東区	下層	炆器	播鉢	27.3	備前	939	外郭東区	土壇65	軒丸瓦	左三巴	22	圏線
1708	T 8	溝4	炆器	播鉢	31.4	備前	940	外郭西区	堀上層	軒丸瓦	左三巴	22	
1709	外郭西区	包含層	炆器	裏	23.4	備前	941	外郭東区	土壇74	軒丸瓦	左三巴	22	圏線、コピキA
1710	T 8	溝4	炆器	裏	39.2	備前	942	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	21	吊紐痕
1711	外郭東区	土壇68	炆器	裏		備前	943	外郭西区	土壇81	軒丸瓦	左三巴	21	范傷、コピキA
1712	T 6	堀埋土	青磁	碗		蓮弁文、竜泉窯(13~14c)	944	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	21	范傷、圏線、コピキA
1713	外郭西区	最下層	青磁	碗		蓮弁文、竜泉窯(13~14c)	945	外郭東区	土壇95	軒丸瓦	左三巴	21	范傷、圏線
1714	外郭西区	最下層	青磁	碗		劃花文、龍泉窯(12~13c)	946	T 6	堀埋土	軒丸瓦	左三巴	21	
1715	外郭西区	下層	青磁	碗	9.6	蓮弁文、龍泉窯(12~14c)	947	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	21	コピキB
1716	外郭西区	最下層	青磁	鉢	11.9	蓮弁文、龍泉窯(12~14c)	948	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	左三巴	21	范傷、圏線、コピキA
1717	外郭東区	堀下層	青磁	碗	12.8	蓮弁文、中国(15c中~16c前)	949	外郭西区	土壇71	軒丸瓦	左三巴	20	范傷
1718	外郭東区	堀下層	青磁	碗	11.6	蓮弁文、中国(15c中~16c前)	950	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	左三巴	20	圏線
1719	外郭東区	下層	青磁	碗	13.7	雷文帯、中国(14~15c)	951	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	20	圏線
1720	外郭東区	土壇121	土師器	壺	16.3		952	外郭西区	土壇55	軒丸瓦	左三巴	20	范傷、圏線、コピキB
1721	外郭東区	土壇121	土師器	埴	10.9		953	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	20	コピキA
1722	外郭東区	土壇121	土師器	鉢	44.5		954	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	21	コピキA
1723	外郭西区	下層	弥生土器	壺	13.3		955	外郭東区	土壇106	軒丸瓦	左三巴	20	釘穴、大小の珠文、コピキA
1724	外郭東区	下層	弥生土器	壺	16.0		956	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	左三巴	20	范傷、釘穴、コピキA
1725	外郭西区	土壇83・84	弥生土器	壺	19.5		957	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	20	コピキA
1726	外郭西区	土壇93	弥生土器	壺	15.2		958	外郭西区	土壇81	軒丸瓦	左三巴	19	コピキA
1727	外郭西区	下層	弥生土器	裏	17.0		959	外郭西区	土壇81	軒丸瓦	左三巴	19	コピキA
1728	外郭西区	下層	弥生土器	裏	17.0		960	外郭西区	土壇85	軒丸瓦	左三巴	19	コピキB
1729	T 6	堀埋土	弥生土器	裏	13.6		961	外郭東区	土壇105	軒丸瓦	左三巴	19	圏線
1730	外郭西区	下層	弥生土器	裏	12.9		962	外郭東区	堀下層	軒丸瓦	左三巴	19	圏線、コピキA
1731	外郭東区	土壇	弥生土器	裏			963	T 6	土壇52	軒丸瓦	左三巴	18	
1732	外郭東区	堀上層	弥生土器	高環			964	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	18	圏線
1733	外郭東区	下層	弥生土器	高環			965	内堀東区	内堀下層	軒丸瓦	左三巴	18	圏線、コピキB
1734	外郭西区	土壇97	弥生土器	高環			966	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	18	釘穴、圏線、コピキB
1735	外郭西区	土壇77	弥生土器	高環			967	外郭西区	土壇63	軒丸瓦	左三巴	18	圏線
1736	外郭西区	下層	弥生土器	器台	30.0		968	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	18	
1737	外郭西区	堀埋土	土師器	裏	13.2	櫛描沈線	969	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	18	
1738	外郭西区	下層	土師器	裏	15.4	櫛描沈線	970	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	18	范傷、圏線
1739	外郭東区	土壇108	土師器	高環			971	外郭東区	土壇96	軒丸瓦	左三巴	18	圏線
1740	外郭西区	最下層	土師器	高環			972	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	18	范傷
1741	外郭西区	土壇93	土師器	高環	13.8		973	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	18	圏線
1742	外郭東区	堀下層	須恵器	蓋	11.4		974	外郭西区	堀上層	軒丸瓦	左三巴	18	
1743	T 6	堀埋土	須恵器	杯	12.2		975	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	左三巴	18	釘穴、コピキA
1744	外郭東区	土壇106	須恵器	高環	12.7		976	外郭西区	土壇71	軒丸瓦	左三巴	18	巴に珠文、圏線、コピキA

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	文様	珠文	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	文様	珠文	備考
977	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	18	釘穴、范傷、巴に珠文、コビキB	1065	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12	珠文間にL、コビキB
978	外郭東区	土壇95	軒丸瓦	左三巴	18	巴に珠文、圏線	1066	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	
979	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	18		1067	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	釘穴、莫羅目、コビキB
980	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	18	范傷	1068	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	12	珠文間に△
981	外郭東区	上層	軒丸瓦	左三巴	17	莫羅目	1069	外郭西区	土壇13	軒丸瓦	左三巴	12	
982	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	17		1070	外郭東区	土壇20	軒丸瓦	左三巴	12	タタキ、莫羅目、コビキB
983	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	17	コビキB	1071	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	珠文間に大、コビキB
984	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	17	莫羅目	1072	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	タタキ
985	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	17	范傷、釘穴、コビキB	1073	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	
986	外郭東区	土壇87	軒丸瓦	左三巴	17	釘穴、圏線、コビキA	1074	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12	莫羅目、コビキB
987	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	17	釘穴、コビキB	1075	内堀東区	段上遺構	軒丸瓦	左三巴	12	吊組痕、釘穴、コビキB
988	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	17	范傷、コビキA	1076	T 3	井戸1	軒丸瓦	左三巴	12	コビキB
989	外郭西区	土壇80	軒丸瓦	左三巴	17	タタキ、釘穴、コビキB、莫羅目	1077	外郭西区	中層	軒丸瓦	左三巴	12	釘穴、莫羅目
990	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	17		1078	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	コビキB
991	T 6	堀埋土	軒丸瓦	左三巴	17	范傷、圏線	1079	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12	
992	外郭西区	堀上層	軒丸瓦	左三巴	17	范傷	1080	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	12	
993	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	17	コビキB	1081	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	12	莫羅目、コビキB
994	内堀東区	内堀下層	軒丸瓦	左三巴	17	コビキB	1082	外郭西区	上層	軒丸瓦	左三巴	12	
995	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	17		1083	T10、11	内堀上層	軒丸瓦	左三巴	12	コビキB
996	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	17	釘穴、コビキB、莫羅目	1084	内堀西区	土壇102	軒丸瓦	左三巴	12	莫羅目、コビキB
997	外郭東区	土壇95	軒丸瓦	左三巴	17		1085	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	コビキB
998	外郭東区	土壇87	軒丸瓦	左三巴	16		1086	外郭西区	土壇35	軒丸瓦	右三巴	12	
999	外郭東区	中層	軒丸瓦	左三巴	16	范傷	1087	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	莫羅目、釘穴、コビキB
1000	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	16		1088	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	
1001	外郭西区	土壇48	軒丸瓦	左三巴	16	范傷	1089	外郭西区	土壇24	軒丸瓦	右三巴	12	
1002	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	16		1090	外郭西区	下層	軒丸瓦	右三巴	12	コビキB
1003	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	16	珠文間に井桁、圏線	1091	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、釘穴
1004	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	16		1092	外郭西区	土壇6	軒丸瓦	右三巴	12	
1005	外郭東区	土壇35	軒丸瓦	左三巴	16	コビキB、莫羅目	1093	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	
1006	外郭西区	土壇63	軒丸瓦	左三巴	16	圏線、コビキA	1094	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、莫羅目
1007	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	16	釘穴、莫羅目	1095	外郭西区	土壇10	軒丸瓦	右三巴	12	莫羅目
1008	外郭東区	土壇87	軒丸瓦	左三巴	16	コビキB、莫羅目	1096	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、莫羅目
1009	外郭西区	土壇80	軒丸瓦	左三巴	16	范傷、コビキB	1097	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	莫羅目
1010	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	17	コビキA	1098	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ
1011	外郭西区	土壇83	軒丸瓦	左三巴	16	莫羅目	1099	外郭東区	中層	軒丸瓦	右三巴	12	
1012	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	17		1100	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	右三巴	12	タタキ、莫羅目
1013	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	15	圏線	1101	T10、11	内堀上層	軒丸瓦	右三巴	12	
1014	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	15		1102	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	コビキB
1015	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	16	コビキB、莫羅目	1103	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	莫羅目
1016	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	15	圏線、コビキB、莫羅目	1104	T 5	上層	軒丸瓦	右三巴	12	莫羅目、コビキB
1017	T 6	土壇63	軒丸瓦	左三巴	15		1105	外郭西区	土壇13	軒丸瓦	右三巴	12	
1018	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	左三巴	15	范傷、圏線	1106	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	莫羅目、コビキB
1019	T 3	井戸1	軒丸瓦	左三巴	15	范傷	1107	内堀西区	土壇103	軒丸瓦	左三巴	12	
1020	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	左三巴	15	圏線、コビキB	1108	内堀西区	土壇103	軒丸瓦	左三巴	12	
1021	外郭西区	土壇48	軒丸瓦	左三巴	15	圏線	1109	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	
1022	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	15	范傷、コビキB、莫羅目	1110	外郭西区	土壇11	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ、莫羅目
1023	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	左三巴	15	釘穴、圏線、コビキA	1111	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1024	外郭西区	土壇62	軒丸瓦	左三巴	15	コビキB、莫羅目	1112	外郭西区	土壇2	軒丸瓦	左三巴	12	タタキ、キラコ、莫羅目
1025	T 6	下層	軒丸瓦	左三巴	16	コビキB、莫羅目	1113	外郭西区	土壇9	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1026	外郭西区	土壇42	軒丸瓦	左三巴	15	コビキB、莫羅目	1114	外郭西区	土壇7	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1027	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	25		1115	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	
1028	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	19		1116	内堀東区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1029	外郭西区	土壇83、84	軒丸瓦	左三巴	15		1117	外郭西区	中層	軒丸瓦	左三巴	12	タタキ
1030	外郭東区	土壇107	軒丸瓦	左三巴	15		1118	外郭東区	土壇35	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1031	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	左三巴	15	圏線	1119	外郭東区	土壇35	軒丸瓦	左三巴	12	キラコ
1032	外郭東区	土壇105	軒丸瓦	左三巴	15	コビキA	1120	外郭東区	土壇19	軒丸瓦	左三巴	12	
1033	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	15		1121	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	左三巴	11	コビキB
1034	外郭西区	土壇81	軒丸瓦	左三巴	15		1122	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	11	コビキB
1035	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	15	圏線	1123	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	11	コビキB
1036	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	15		1124	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	11	
1037	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	15		1125	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	11	莫羅目、コビキB
1038	外郭西区	土壇47	軒丸瓦	左三巴	15		1126	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	11	珠文間にL、コビキB
1039	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	14	タタキ	1127	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	左三巴	11	莫羅目、コビキB
1040	外郭東区	土壇65	軒丸瓦	左三巴	14	圏線、コビキB	1128	外郭西区	土壇3	軒丸瓦	左三巴	11	コビキB
1041	T 6	土壇63	軒丸瓦	左三巴	14		1129	外郭東区	下層	軒丸瓦	左三巴	10	釘穴、コビキB
1042	T 5	下層	軒丸瓦	左三巴	14		1130	内堀西区	段状遺構	軒丸瓦	左三巴	9	珠文間に△、范傷、釘穴2
1043	外郭西区	堀埋土	軒丸瓦	左三巴	14		1131	外郭西区	土壇81	軒丸瓦	左三巴	12	莫羅目
1044	T 3	井戸1	軒丸瓦	左三巴	14	珠文間にL、釘穴、コビキB	1132	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12	
1045	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	14	釘穴、コビキB	1133	外郭東区	中層	軒丸瓦	左三巴	12	
1046	外郭西区	土壇71	軒丸瓦	左三巴	13		1134	外郭東区	土壇65	軒丸瓦	左三巴	12	
1047	外郭西区	土壇47	軒丸瓦	左三巴	13	コビキB、莫羅目	1135	外郭西区	排土	軒丸瓦	左三巴	12	コビキA
1048	外郭西区	排土	軒丸瓦	左三巴	13	珠文間にL、圏線、コビキB	1136	外郭西区	土壇83	軒丸瓦	左三巴	12	コビキA
1049	外郭西区	上層	軒丸瓦	左三巴	13	墨線、莫羅目、針穴、コビキB	1137	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	筋違文	25	
1050	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	圏線、珠文間に唐草	1138	T 6	下層	軒丸瓦	筋違文	25	
1051	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	13	珠文間に△、圏線、コビキB	1139	外郭東区	土壇107	軒丸瓦	筋違文	26	
1052	T 6	土壇46	軒丸瓦	左三巴	13		1140	外郭西区	堀上層	軒丸瓦	筋違文	22	
1053	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	13		1141	外郭西区	下層	軒丸瓦	五七桐		本丸中の段403
1054	外郭西区	土壇63	軒丸瓦	左三巴	13		1142	外郭東区	土壇87	軒丸瓦	五七桐		本丸中の段403
1055	外郭西区	上層	軒丸瓦	左三巴	13		1143	外郭東区	土壇97	軒丸瓦	五七桐		本丸中の段401
1056	外郭西区	土壇91	軒丸瓦	左三巴	13		1144	外郭東区	中層	軒丸瓦	揚羽蝶		
1057	外郭西区	砂溜まり	軒丸瓦	左三巴	13	范傷	1145	T 3	井戸1	軒丸瓦	揚羽蝶		
1058	外郭西区	土壇69	軒丸瓦	左三巴	13		1316	T 5	下層	棟込瓦	左三巴		
1059	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	珠文間にL、コビキB	1317	外郭西区	下層	棟込瓦	左三巴		
1060	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12	コビキB	1318	外郭西区	土壇24	棟込瓦	左三巴		
1061	外郭西区	下層	軒丸瓦	左三巴	12		1319	外郭西区	土壇24	棟込瓦	左三巴		
1062	外郭西区	土壇28	軒丸瓦	左三巴	12	范傷、圏線、コビキB	1320	内堀西区	段状遺構	棟込瓦	左三巴		
1063	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	圏線、針穴	1321	内堀東区	段状遺構	棟込瓦	左三巴		
1064	T 5	上層	軒丸瓦	左三巴	12	釘穴、莫羅目、コビキB	1322	内堀西区	段状遺構	棟込瓦	左三巴		

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	文様	珠文	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	中心飾	唐草	備考
1323	外郭東区	上層	棟込瓦	右三巴			1223	外郭西区	下層	軒平瓦	桐	2転	
1324	外郭東区	上層	棟込瓦	左三巴			1224	外郭西区	土壇63	軒平瓦	桐	3転	本丸中の段67
1325	外郭西区	土壇68	棟込瓦	右三巴			1225	内堀東区	内堀	軒平瓦	桐	2転	本丸下の段107
1326	T 9	上層	棟込瓦	右三巴			1226	外郭西区	土壇63	軒平瓦	桐	2転	コピキB
1327	T 6	土壇63	棟込瓦	五六桐			1227	外郭西区	砂溜まり	軒平瓦	桐	2転	
1328	T 6	側溝	棟込瓦	五三桐		本丸中の段315	1228	外郭西区	土壇62	軒平瓦	桐	2転	
1329	T 6	下層	棟込瓦	九曜文		タタキ	1229	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	桐	3転	コピキB、板痕
1330	外郭西区	土壇63	棟込瓦	九曜文			1230	外郭西区	土壇48	軒平瓦	桐	1転	
1331	外郭西区	下層	棟込瓦	菊花		12弁	1231	外郭西区	下層	軒平瓦	桐	1転	
1332	外郭西区	トレンチ	棟込瓦	菊花			1232	外郭西区	下層	軒平瓦	桐	1転	コピキB
軒平瓦							1233	外郭西区	堀埋土	軒平瓦	宝珠	4転	
掘埋土							1234	外郭西区	堀埋土	軒平瓦	宝珠	5転	
1146	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	単葉	3転		1235	外郭西区	土壇47	軒平瓦	宝珠	3転	
1147	外郭東区	土壇75	軒丸瓦	単葉	3転	完形、二の丸(県庁) 165	1236	外郭西区	土壇100	軒平瓦	宝珠	3転	
1148	T 4	中層	軒丸瓦	双葉	2転		1237	T 5	下層	軒平瓦	宝珠	3転	
1149	外郭西区	堀埋土	軒丸瓦	三葉	5転	本丸中の段11	1238	T 6	堀埋土	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段90
1150	外郭東区	土壇87	軒丸瓦	三葉	4転		1239	外郭東区	土壇105	軒平瓦	宝珠	3転	
1151	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	4転		1240	外郭東区	土壇96	軒平瓦	宝珠	2転	
1152	外郭東区	下層	軒丸瓦	三葉	3転		1241	T 6	下層	軒平瓦	宝珠	3転	板痕、本丸中の段86
1153	外郭西区	堀中層	軒丸瓦	三葉	3転	コピキB、本丸中の段13	1242	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	4転	本丸中の段79
1154	T 6	堀埋土	軒丸瓦	三葉	3転	コピキA	1243	外郭東区	土壇73	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段81a
1155	外郭西区	下層	軒丸瓦	三葉	3転		1244	外郭東区	土壇95	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段84
1156	外郭西区	堀埋土	軒丸瓦	三葉	3転		1245	外郭東区	土壇75	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段84
1157	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転		1246	外郭東区	土壇75	軒平瓦	宝珠	3転	宝珠右に十字
1158	内堀西区	土壇102	軒丸瓦	三葉	3転	コピキA	1247	外郭西区	土壇97	軒平瓦	宝珠	3転	宝珠右に十字
1159	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転	板痕、本丸中の段15a	1248	T 6	土壇63	軒平瓦	宝珠	3転	宝珠左に十字
1160	外郭西区	土壇60	軒丸瓦	三葉	3転	板痕、本丸中の段15b	1249	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	3転	宝珠左に十字、本丸中の段80
1161	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転		1250	外郭東区	土壇78	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段85
1162	外郭西区	土壇50	軒丸瓦	三葉	3転	板痕	1251	外郭東区	土壇93	軒平瓦	宝珠	3転	宝珠左に十字、本丸中の段85
1163	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転		1252	T 6	上層	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段82
1164	T 5	下層	軒丸瓦	三葉	3転	本丸中の段 6	1253	外郭東区	下層	軒平瓦	宝珠	3転	
1165	T 5	下層	軒丸瓦	三葉	3転		1254	T 6	下層	軒平瓦	宝珠	3転	コピキA、本丸中の段87b
1166	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	三葉	3転		1255	T 6	堀埋土	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段87a
1167	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転	板痕、本丸中の段23	1256	外郭西区	土壇42	軒平瓦	宝珠	3転	コピキA、本丸中の段97
1168	外郭東区	土壇73	軒丸瓦	三葉	3転	板痕、本丸中の段23	1257	T 6	堀埋土	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段97
1169	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	三葉	2転	板痕、本丸中の段29	1258	外郭西区	土壇46	軒平瓦	宝珠	6転	宝珠左右に十字、本中88
1170	外郭東区	砂溜まり	軒丸瓦	三葉	2転	本丸下の段40	1259	内堀東区	段上遺構	軒平瓦	宝珠3	3転	宝珠左に十字、本丸中の段124
1171	T 5	上層	軒平瓦	三葉	2転	板痕、ナデ、本丸下の段58	1260	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	宝珠3	3転	本丸中の段124
1172	T 5	上層	軒平瓦	三葉	2転	完形、コピキB	1261	T 6	下層	軒平瓦	宝珠	3転	
1173	外郭西区	下層	軒平瓦	三葉	2転	本丸中の段22	1262	外郭西区	土壇63	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段143
1174	T 5	下層	軒平瓦	三葉	2転		1263	外郭東区	土壇64	軒平瓦	宝珠	3転	
1175	外郭西区	下層	軒平瓦	三葉	2転		1264	外郭東区	土壇73	軒平瓦	宝珠	3転	
1176	T 6	下層	軒平瓦	三葉	2転		1265	外郭東区	土壇73	軒平瓦	宝珠	3転	本丸中の段125
1177	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	三葉	2転		1266	外郭西区	土壇47	軒平瓦	宝珠	2転	
1178	外郭西区	土壇63	軒平瓦	三葉	2転		1267	外郭西区	土壇47	軒平瓦	宝珠	3転	
1179	外郭西区	土壇63	軒平瓦	三葉	2転		1268	T 5	上層	軒平瓦	宝珠	3転	
1180	T 6	堀埋土	軒平瓦	三葉	2転		1269	外郭東区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1181	外郭西区	土壇81	軒平瓦	三葉	2転	コピキB、本丸中の段41	1270	T 6	堀埋土	軒平瓦	宝珠	3転	変形唐草
1182	外郭西区	土壇51	軒平瓦	三葉	2転		1271	外郭東区	土壇73	軒平瓦	宝珠	2転	本丸中の段147
1183	外郭西区	土壇47	軒平瓦	三葉	1転		1272	T 5	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1184	T 6	土壇63	軒平瓦	三葉	2転		1273	T 6	上層	軒平瓦	宝珠	2転	
1185	外郭西区	下層	軒平瓦	三葉	2転		1274	外郭西区	土壇42	軒平瓦	宝珠	2転	本丸中の段94
1186	外郭西区	土壇42	軒平瓦	三葉	2転		1275	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1187	T 6	下層	軒平瓦	三葉	2転		1276	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	変形宝珠、本丸中の段128
1188	外郭東区	土壇75	軒平瓦	三葉	2転	本丸中の段46	1277	外郭西区	土壇68	軒平瓦	宝珠	2転	
1189	外郭西区	土壇83	軒平瓦	三葉	3転	コピキB	1278	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1190	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	三葉	2転		1279	T 5	上層	軒平瓦	宝珠	2転	
1191	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	三葉	2転		1280	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	宝珠	2転	
1192	外郭西区	堀上層	軒平瓦	三葉	2転	コピキB、本丸下の段78	1281	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	本丸中の段108
1193	外郭東区	段状遺構	軒平瓦	三葉	2転	本丸下の段79	1282	外郭西区	土壇68	軒平瓦	宝珠	2転	
1194	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	三葉	2転	板痕、本丸下の段81	1283	T 8	砂溜まり	軒平瓦	宝珠	2転	二の丸(県庁) 169
1195	外郭西区	土壇67	軒平瓦	三葉	2転	本丸下の段78	1284	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	宝珠	2転	
1196	外郭東区	土壇28	軒平瓦	三葉	2転		1285	T 6	土壇63	軒平瓦	宝珠	2転	
1197	外郭西区	土壇2	軒平瓦	三葉	2転		1286	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1198	外郭西区	土壇83	軒平瓦	三葉	2転	本丸下の段110	1287	外郭西区	下層	軒平瓦	宝珠	2転	
1199	T 6	下層	軒平瓦	三葉	3転	本丸中の段47	1288	外郭西区	土壇2	軒平瓦	宝珠	2転	
1200	外郭西区	土壇47	軒平瓦	逆三葉	3転	コピキB、本丸中の段55	1289	外郭西区	土壇42	軒平瓦	宝珠・木槿	2転	
1201	T 5	下層	軒平瓦	逆三葉	3転	本丸下の段91	1290	T 8	上層	軒平瓦	宝珠	2転	
1202	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	逆三葉	3転	本丸下の段90	1291	T 5	上層	軒平瓦	宝珠	2転	
1203	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	逆三葉	3転	本丸下の段90	1292	外郭西区	堀下層	軒平瓦	蓮華	6転	
1204	T 6	下層	軒平瓦	逆三葉	3転		1293	外郭西区	堀中層	軒平瓦	蓮華	6転	コピキA
1205	外郭西区	土壇63	軒平瓦	逆三葉	3転		1294	T 6	下層	軒平瓦	蓮華	2転	
1206	外郭東区	土壇105	軒平瓦	逆三葉	3転	コピキB	1295	外郭西区	下層	軒平瓦	木槿	3転	コピキA、本丸中の段126
1207	T 6	下層	軒平瓦	逆三葉	2転	本丸中の段60	1296	T 6	土壇63	軒平瓦	宝珠・木槿	2転	本丸下の段179
1208	T 5	上層	軒平瓦	逆三葉	2転	コピキB、本丸中の段60	1297	外郭西区	土壇56	軒平瓦	木槿	2転	
1209	外郭東区	土壇40	軒平瓦	逆三葉	2転	本丸下の段89	1298	外郭西区	下層	軒平瓦	木槿	2転	
1210	T 5	下層	軒平瓦	逆三葉	4転	コピキB	1299	外郭東区	土壇73	軒平瓦		2転	
1211	外郭西区	土壇79	軒平瓦	逆三葉	4転	本丸中の段51	1300	外郭東区	土壇75	軒平瓦		2転	
1212	外郭西区	下層	軒平瓦	逆三葉	4転		1301	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	井桁	2転	本丸下の段136
1213	外郭東区	土壇87	軒平瓦	桐	3転	板痕	1302	外郭西区	土壇83	軒平瓦		2転	鋸歯文
1214	外郭西区	土壇2	軒平瓦	桐	3転	コピキA	1303	外郭東区	土壇95	軒平瓦		2転	鋸歯文
1215	外郭西区	下層	軒平瓦	笹	3転		1304	外郭西区	土壇63	軒平瓦	九曜文	2転	
1216	外郭東区	下層	軒平瓦	笹	3転		1305	外郭西区	下層	軒平瓦	九曜文	2転	二の丸(中電) 78
1217	外郭西区	土壇47	軒平瓦	笹	3転	コピキB	1306	外郭西区	堀上層	軒平瓦	左三巴	3転	
1218	外郭西区	土壇47	軒平瓦	笹	3転		1307	外郭西区	堀上層	軒平瓦	左三巴	3転	
1219	外郭西区	土壇47	軒平瓦	桐	3転	本丸下の段97	1308	外郭西区	土壇35	軒平瓦	右三巴	2転	
1220	外郭東区	砂溜まり	軒平瓦	桐	3転	本丸中の段64	1309	外郭東区	上層	軒平瓦	左三巴	2転	
1221	外郭区	下層	軒平瓦	桐	3転	タタキ	1310	外郭西区	土壇35	軒平瓦	右三巴	2転	
1222	T 5	下層	軒平瓦	桐	3転	板痕	1311	内堀区	土壇102	軒平瓦	右三巴	2転	キラコ

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	胎土	色調	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	塗内・外	文様	備考
1312	内堀西区	土壇101	軒平瓦	右三巴	2転	完形	1409	外郭西区	土壇105	杯	赤・黒		B類
1313	内堀東区	上層	軒平瓦	桶			1410	T 7	土壇75	椀	赤・赤		A類
1314	T 6	上層	軒平瓦	桶			1411	T 5	下層	椀	赤・赤		漆絵、A類
1315	外郭東区	土壇87	軒平瓦	沢瀉		本丸中の段250a	1412	外郭西区	土壇63	椀	黒・黒		漆絵、B類
その他の瓦							1413	外郭西区	堀中層	椀	赤・赤		B類
掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	胎土	色調	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	塗内・外	文様	備考
1333	外郭西区	土壇62	鳥衾	精良	灰	范傷、釘穴2、左三巴、珠文15	1414	T 6	堀埋土	椀	赤・赤		漆描、B類
1334	外郭東区	土壇85	鳥衾	精良	暗灰～灰	木爪	1415	外郭西区	土壇63	椀	赤・赤	桐	漆絵、B類
1335	外郭東区	土壇75	鳥衾	精良	灰	五七桐、本丸中の段401	1416	外郭東区	土壇107	椀	赤・黒	丸紋	釘描、漆絵、B類
1336	外郭西区	下層	鳥衾	細砂～粗砂	灰	右三巴、珠文13	1417	外郭東区	土壇73	椀	赤・黒		釘描、B類
1337	外郭西区	土壇79	鳥衾	細砂	灰	左三巴	1418	外郭東区	内堀下層	椀	赤・黒		B類
1338	外郭西区	下層	軒平瓦	細砂～粗砂	灰	右三巴	1419	外郭西区	土壇87	椀	赤・黒		B類
1339	外郭西区	下層	獅子口	細砂～礫	鈍い黄橙	右三巴、珠文16	1420	T 5	下層	椀	赤・黒		B類
1340	外郭東区	下層	獅子口	細砂～礫	灰白	右三巴、珠文16	1421	外郭西区	土壇80	椀	赤・黒		漆絵、B類
1341	外郭東区	土壇	獅子口	細砂～礫	灰黄	右三巴、珠文13、金箔瓦	1422	内堀東区	内堀下層	椀	赤・黒		漆絵、B類
1342	外郭東区	土壇105	獅子口	細砂～礫	灰白	左三巴、珠文15	1423	外下馬門区	内堀下層	椀	赤・黒	丸紋	釘描、漆絵、B類
1343	外郭西区	土壇46	鉢	細砂	灰		1424	外郭西区	堀中層	椀	赤・黒		釘描、B類
1344	T 5	下層	鉢	細砂	灰白		1425	内堀東区	内堀下層	椀	黒・黒		C類
1345	外郭西区	下層	鉢	細砂	灰白		1426	外郭東区	土壇110	椀	赤・黒	草花	漆絵、D類
1346	外郭西区	下層	鉢	細砂	暗灰		1427	内堀東区	内堀下層	椀	赤・黒	梅花	釘描、漆絵、D類
1347	外郭西区	堀埋土	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1428	外郭東区	土壇73	椀	赤・黒	楓紋	漆絵、D類
1348	外郭西区	堀埋土	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1429	外郭東区	土壇73	椀	赤・黒	九枚笹紋	漆絵、D類
1349	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1430	T 5	下層	椀	黒・黒		漆絵、D類
1350	外郭西区	堀上層	鬼瓦	細砂	暗灰	鬼面	1431	外郭西区	堀下層	椀	赤・黒	草花	漆絵、D類
1351	T 6	下層	鬼瓦	細砂	灰	鬼面、金箔瓦	1432	外郭西区	土壇87	椀	赤・黒		D類
1352	外郭東区	砂溜まり	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1433	外郭西区	土壇87	椀	赤・黒		D類
1353	外郭西区	土壇63	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1434	外郭西区	土壇95	椀	赤・黒		釘描、D類
1354	外郭西区	堀上層	鬼瓦	細砂	暗灰	鬼面	1435	外郭西区	堀中層	椀	赤・黒		釘描、漆絵、D類
1355	外郭西区	土壇62	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1436	外郭東区	土壇73	椀	赤・黒		釘描、漆絵、D類
1356	T 5	下層	鬼瓦	細砂	灰	鬼面	1437	外郭西区	堀中層	椀	赤・黒		漆描、D類
1357	外郭西区	土壇62	鬼瓦	細砂	灰	揚羽蝶	1438	外郭東区	土壇73	椀	赤・黒		釘描、D類
1358	外郭東区	土壇95	鬼瓦	細砂	暗灰	左巴	1439	T 6	堀埋土	椀	赤・黒		漆描、釘描、D類
1359	外郭西区	土壇62	鬼瓦	細砂	灰	木葉	1440	外郭西区	土壇100	杓子			
1360	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂・礫	灰	木葉	1441	外郭東区	土壇73	杓子			
1361	外郭西区	土壇105	鬼瓦	細砂	灰		1442	外郭西区	土壇75	篋			ペンガラ付着
1362	外郭東区	土壇73	鬼瓦	細砂	暗灰	木槌	1443	外郭西区	土壇80	篋			
1363	外郭東区	中層	鬼瓦	細砂	暗灰	宝珠	1444	外郭東区	土壇73	篋			
1364	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰		1445	外郭西区	土壇87	篋			
1365	外郭西区	土壇61	鬼瓦	細砂	暗灰		1446	外郭東区	土壇73	篋			
1366	外郭東区	土壇75	鬼瓦	細砂	灰	木葉	1447	外郭東区	土壇73	篋			
1367	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰白	木葉	1448	外郭東区	土壇73	篋			
1368	外郭東区	土壇73	鬼瓦	細砂	暗灰		1449	外郭東区	土壇73	篋			
1369	T 6	下層	鬼瓦	細砂	灰		1450	外郭東区	土壇73	篋			両口
1370	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰		1451	外郭東区	土壇73	箸			
1371	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰		1452	外郭東区	土壇73	箸			
1372	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰		1453	外郭東区	土壇73	箸			
1373	外郭西区	土壇62	鬼瓦	細砂	灰		1454	外郭東区	土壇73	箸			
1374	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰白		1455	外郭東区	土壇73	箸			
1375	外郭西区	下層	鬼瓦	細砂	灰白		1456	外郭東区	土壇73	箸			
1376	外郭東区	土壇95	丸瓦	細砂	灰白	コビキA、行基葺式	1457	外郭東区	土壇73	箸			
1377	T 5	下層	丸瓦	細砂	灰白	コビキB、行基葺式	1458	外郭東区	土壇73	箸			
1378	外郭西区	土壇81	丸瓦	細～粗	灰	コビキB、行基葺式	1459	外郭東区	土壇73	箸			
1379	T 5	上層	丸瓦	精良	灰白	コビキB、玉縁式	1460	外郭東区	土壇73	椀			
1380	T 5	上層	丸瓦	細砂	灰黄	コビキB、玉縁式	1461	外郭東区	土壇73	椀			紐孔
1381	内堀東区	段状遺構	丸瓦	細砂	暗灰	コビキB、玉縁式	1462	外郭東区	土壇73	椀			
1382	外郭西区	土壇47	丸瓦	細～粗	灰白	コビキA、玉縁式	1463	外郭東区	土壇78	椀			紐孔
1383	外郭東区	土壇73	丸瓦	細砂	灰白	コビキA、玉縁式	1464	外郭東区	土壇73	木鉤			
1384	外郭東区	土壇73	丸瓦	細砂	暗灰	コビキA、玉縁式	1465	外郭東区	土壇73	曲物			つまみ付
1385	内堀東区	段状遺構	平瓦	精良	灰		1466	外郭東区	土壇73	曲物			
1386	内堀東区	段状遺構	平瓦	精良	灰		1467	外郭西区	土壇75	曲物			底板
1387	T 6	上層	平瓦	精良	黄灰	コビキA	1468	外郭東区	土壇73	曲物			
1388	外郭西区	土壇67	平瓦	細砂	灰		1469	外郭東区	土壇73	曲物			底板
1389	外郭東区	土壇106	平瓦	細砂～粗砂	灰白		1470	内堀東区	内堀下層				
1390	外郭西区	堀上層	平瓦	精良～細砂	灰		1471	内堀東区	内堀下層				
1391	外郭西区	下層	平瓦	精良	灰白		1472	内堀東区	内堀下層				
1392	外郭西区	土壇47	平瓦	精良	灰白		1473	T 5	下層	折敷			漆絵、底板
1393	外郭西区	土壇82	平瓦	粗砂	暗灰	コビキA	1474	T 6	堀埋土	折敷			底板
1394	T 13	下層	平瓦	細砂	灰白		1475	T 6	堀埋土	折敷			底板
1395	外郭西区	堀上層	雁振瓦	細砂～粗砂	灰白		1476	外郭東区	土壇73	折敷			足板
1396	外郭東区	土壇87	雁振瓦	精良	灰白	コビキB	1477	外郭東区	土壇73	折敷			足板
1397	外郭西区	堀上層	雁振瓦	細砂～粗砂	灰	コビキA	1478	T 6	堀埋土	折敷			足板
1398	外郭西区	土壇2	熨斗瓦	細砂	灰白		1479	外郭西区	堀土壇	折敷			足板
1399	外郭西区	下層	敷瓦	細砂	灰		1480	T 5	下層	加工材			箱
1400	外郭西区	土壇68	敷瓦	細砂	黄灰		1481	外郭東区	土壇73	加工材			朱書
1401	外郭西区	堀埋土	敷瓦	細砂～粗砂	灰		1482	T 5	下層	加工材			
1402	外郭西区	堀上層	敷瓦	細砂～粗砂	灰		1483	外郭西区	土壇100	加工材			
							1484	外郭東区	土壇73	加工材			
							1485	外郭東区	土壇73	加工材			
掲載番号	地区	出土遺構	種別	塗内・外	文様	備考	掲載番号	地区	出土遺構	種別	塗内・外	文様	備考
9	外下馬門区	内堀上層	椀	赤・赤			1486	内堀東区	内堀下層	加工材			靴形
10	外下馬門区	内堀上層	椀	赤・黒			1487	外郭西区	下層	木筒			墨書
11	外下馬門区	内堀上層	折敷	赤・黒		底板	1488	内堀東区	内堀上層	木筒			墨書
12	外下馬門区	内堀上層	下駄			後歯下駄	1489	T 6	堀埋土	木筒			墨書
13	外下馬門区	内堀上層	下駄			差歯下駄	1490	T 6	堀埋土	駒			墨書 「銀将」・「金」
1403	外郭東区	土壇73	杯	赤・赤		A類	1491	T 6	堀埋土	木筒			墨書 「十羅」
1404	内堀東区	内堀下層	杯	赤・赤		A類	1492	T 6	堀埋土	木筒			墨書
1405	外郭東区	土壇95	杯	赤・黒		松鶴	1493	外郭西区	土壇80	木筒			墨書
1406	外郭西区	堀中層	杯	赤・黒		B類	1494	T 6	堀埋土	木筒			墨書
1407	外郭西区	堀中層	杯	赤・黒		釘描、漆絵、B類	1495	T 6	堀埋土	木筒			墨書
1408	外郭西区	堀中層	杯	赤・黒		釘描、B類	1496	外郭西区	土壇63	木筒			墨書 「津田木工」
							1497	外郭東区	土壇73	下駄			丸形連歯

遺物観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	塗(内・外)	文様	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	
1498	外郭東区	土壇95	下駄				1581	外郭西区	下層	金具	(6.3)	銅		
1499	外郭西区	土壇81	下駄				1582	外郭西区	T 8	上層	仏具	8.7	銅	
1500	外郭東区	土壇73	下駄				1583	外郭西区	下層	金具	(5.6)	銅		
1501	外郭西区	堀下層	下駄				1584	外郭西区	下層	金具	12.8	銅	鍍金	
1502	外郭西区	堀中層	下駄				1585	外郭西区	土壇62	彈型	93.5	鉄		
1503	外郭西区	堀下層	下駄				1586	外郭西区	T 6	下層	煙管	(4.5)	銅	雁首
1504	外郭西区	堀埋土	下駄				1587	外郭西区	下層	煙管	(3.3)	銅	雁首	
1505	外郭西区	堀埋土	下駄				1588	T 6	土壇63	煙管	(2.8)	銅	雁首	
1506	外郭東区	土壇73	下駄				1589	内堀西区	内堀上層	煙管	10.8	銅	雁首	
1507	外郭西区	土壇81	下駄				1590	T10.11	内堀上層	煙管	(10.3)	銅	吸口	
1508	外郭西区	土壇81	下駄				1591	外郭西区	土壇1	煙管	6.6	銅	吸口	
石製品							1592	外郭西区	中層	煙管	(7.3)	銅	吸口	
掲載番号	地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	掲載番号	地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	
1509	外郭西区	堀土堤	一石五輪	11100	凝灰岩	完形	1593	外郭東区	土壇40	煙管	3.0	銅	吸口	
1510	外郭西区	堀土堤	一石五輪	10000	凝灰岩	完形	1594	外下馬門区	内堀下層	煙管	16.1	銅	延べ煙管	
1511	外郭西区	堀土堤	一石五輪	13200	凝灰岩	完形	1595	外郭西区	土壇35	金具	2.4	銅		
1512	外郭西区	堀土堤	一石五輪	13200	凝灰岩	完形	1596	外郭西区	下層	金具	(12.8)	銅	鍍金	
1513	外郭西区	堀土堤	一石五輪	14800	凝灰岩	完形	1597	外郭西区	土壇35	簪	(7.7)	銅		
1514	外郭西区	堀土堤	一石五輪	17800	凝灰岩	完形	1598	外郭西区	下層	鉸	(120.3)	鉄		
1515	外郭西区	堀土堤	一石五輪	13200	凝灰岩	完形	1599	T10.11	堀埋土	鉸	128.9	鉄		
1516	外郭西区	堀土堤	一石五輪	(6500)	凝灰岩	水・地輪	1600	外郭西区	堀中層	鉸	8.5	鉄		
1517	外郭西区	堀土堤	一石五輪	(8000)	凝灰岩	水・地輪	1601	T 6	堀埋土	釘	4.5	鉄		
1518	外郭西区	堀土堤	一石五輪	35100	凝灰岩	完形	1602	内堀西区	土壇102	釘	29.1	鉄		
1519	外郭西区	堀土堤	一石五輪	22200	凝灰岩	完形	1603	外郭西区	土壇83	ピン	0.9	銅		
1520	外郭西区	堀土堤	一石五輪	14000	凝灰岩	完形	1604	内堀東区	段状遺構	釘	2.3	銅		
1521	外郭西区	堀土堤	一石五輪	(12000)	凝灰岩	空輪欠	1605	外郭西区	堀中層	金簪	(36.1)	鉄		
1522	外郭西区	堀土堤	一石五輪	15300	凝灰岩	完形	1606	T11	内堀埋土	錢壺	119.1	銅	寛永通寶、22枚	
1523	外郭西区	堀土堤	一石五輪	17500	凝灰岩	完形	1607	外下馬門区	内堀下層	鏡	78.0	鉄		
1524	外郭西区	堀土堤	一石五輪	20000	凝灰岩	完形	1608	外下馬門区	内堀下層	鏡	74.3	鉄		
1525	外郭西区	堀土堤	一石五輪	19000	凝灰岩	完形	1609	内堀東区	内堀上層	鏡	189.4	鉄		
1526	外郭西区	堀土堤	一石五輪	20500	凝灰岩	完形	1610	内堀東区	内堀上層	鏡	248.1	鉄		
1527	外郭西区	堀土堤	一石五輪	18500	凝灰岩	完形	1611	内堀東区	内堀上層	鏡	705.2	鉄		
1528	外郭東区	下層	硯	(14.8)	頁岩		1612	内堀東区	内堀上層	鏡	1,140.7	鉄		
1529	外郭東区	堀下層	硯	(45.2)	頁岩		1613	内堀東区	内堀上層	鏡	649.8	鉄		
1530	外郭東区	井戸	硯	(51.6)	頁岩		1614	外郭東区	鍛冶炉	錢	(1.1)	銅	開元通寶	
1531	外郭西区	土壇51	硯	(44.5)	頁岩		1615	外郭東区	土壇95	錢	2.1	銅	開元通寶	
1532	T 5	下層	硯	(83.9)	頁岩		1616	外郭西区	土壇83	錢	3.2	銅	開元通寶	
1533	T 5	下層	硯	(41.9)	頁岩		1617	外郭東区	溝3	錢	2.2	銅	至道元寶	
1534	T 6	土壇63	硯	(44.6)	頁岩		1618	外郭東区	鍛冶炉	錢	4.2	銅	景德元寶	
1535	T 6	中層	硯	(125.6)	頁岩	獸形文	1619	外郭東区	中層	錢	(1.5)	銅	祥符元寶	
1536	外郭西区	土壇81	硯	(112.8)	頁岩		1620	T 6	下層	錢	(1.8)	銅	口符通寶	
1537	外郭西区	下層	硯	(296.7)	頁岩		1621	T 6	堀埋土	錢	(2.5)	銅	祥符通寶	
1538	外郭西区	堀中層	硯	(208.2)	頁岩		1622	外郭東区	土壇110	錢	3.2	銅	祥符通寶	
1539	外郭東区	土壇39	磁石	(120.8)	流紋岩		1623	外郭東区	鍛冶炉	錢	3.2	銅	天禧通寶	
1540	T 6	土壇63	溜石	28.8	穿孔		1624	T 6	堀埋土	錢	2.5	銅	景德元寶	
1541	外郭東区	中層	容器	(36.0)	火成岩	脚部	1625	外郭東区	土壇95	錢	3.4	銅	皇宋通寶	
1542	T 6	堀埋土	碁石	3.1	流紋岩		1626	外郭西区	土壇95	錢	1.8	銅	皇宋通寶	
1543	外郭西区	中層	碁石	2.7	流紋岩		1627	外郭西区	土壇38	錢	1.8	銅	皇宋通寶	
土製品							1628	外郭東区	鍛冶炉	錢	3.1	銅	聖宋元寶	
掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	重量(g)	色調	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	
1544	外郭西区	土壇83	土鉢	6.9	鈍い橙		1629	外郭西区	土壇83	錢	3.5	銅	聖宋元寶	
1545	外郭西区	堀上層	土鉢	15.6	赤褐		1630	外郭西区	下層	錢	3.6	銅	治平元寶	
1546	外郭西区	土壇93	土鉢	14.7	橙		1631	外郭東区	下層	錢	3.1	銅	熙寧元寶	
1547	T 5	下層	土鉢	7.3	鈍い黄橙		1632	外郭西区	土壇83	錢	3.1	銅	熙寧元寶	
1548	外郭西区	土壇100	土鉢	4.1	鈍い赤褐		1633	外郭西区	土壇83	錢	3.2	銅	熙寧元寶	
1549	T 7	土壇75	土鉢	4.4	鈍い橙		1634	内堀西区	砂溜まり	錢	2.4	銅	熙寧元寶	
1550	T 7	土壇75	土鉢	3.6	鈍い赤褐		1635	外郭西区	土壇69	錢	2.7	銅	元豐通寶	
1551	T 7	土壇75	土鉢	3.8	鈍い赤褐		1636	T 5	下層	錢	2.3	銅	元豐通寶	
1552	T 7	土壇75	土鉢	4.5	鈍い赤褐		1637	外郭東区	下層	錢	2.3	銅	元豐通寶	
1553	T 7	土壇75	土鉢	5.0	橙		1638	外郭東区	土壇87	錢	1.5	銅	元豐通寶	
1554	T 7	土壇75	土鉢	3.1	鈍い橙		1639	外郭西区	下層	錢	(1.8)	銅	元豐通寶	
1555	T 7	土壇75	土鉢	3.2	鈍い赤褐		1640	外郭東区	鍛冶炉	錢	3.0	銅	聖宋元寶	
1556	T 7	土壇75	土鉢	2.8	鈍い赤褐		1641	外郭西区	下層	錢	2.4	銅	大觀通寶	
1557	T 7	土壇75	土鉢	2.4	鈍い橙		1642	外郭東区	土壇21	錢	3.5	銅	政和通寶	
1558	T 7	土壇75	土鉢	2.9	鈍い赤褐		1643	外郭東区	中層	錢	3.1	銅	洪武通寶	
1559	T 7	土壇75	土鉢	3.0	鈍い赤褐		1644	外郭東区	土壇75	錢	3.9	銅	洪武通寶	
1560	T 7	土壇75	土鉢	4.5	鈍い赤褐		1645	T 6	堀埋土	錢	2.3	銅	洪武通寶	
1561	T 7	土壇75	土鉢	2.9	鈍い赤褐		1646	外郭東区	土壇87	錢	1.6	銅	洪武通寶	
1562	T 7	土壇75	土鉢	2.9	鈍い橙		1647	T 6	下層	錢	3.1	銅	永樂通寶	
1563	T 7	土壇75	土鉢	3.4	鈍い赤褐		1648	T 6	堀埋土	錢	2.3	銅	永樂通寶	
1564	T 7	土壇75	土鉢	4.0	鈍い赤褐		1649	外郭西区	下層	錢	2.0	銅	永樂通寶	
1565	外郭西区	土壇71	羽口	(1440.0)	灰褐		1650	外郭東区	中層	錢	3.1	銅	永樂通寶	
1566	外郭東区	土壇67	羽口	(1095.0)	鈍い黄橙		1651	T 6	下層	錢	(1.7)	銅	永樂通寶	
1567	T 6	中層	羽口	(68.9)	橙		1652	T 6	中層	錢	2.4	銅	宣德通寶	
1568	外郭西区	土壇63	羽口	(484.6)	明赤褐		1653	外郭東区	土壇29	錢	3.0	銅	寛永通寶	
金属製品							1654	T 8	土壇5	錢		銅	寛永通寶	
掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	掲載番号	出土地区	出土遺構	種別	重量(g)	材質	備考	
1569	内堀西区	段状遺構	簪	5.9	銅		1655	T 8	土壇5	錢		銅	寛永通寶	
1570	T 6	下層	耳搔き	6.8	銅		1656	外郭東区	下層	錢	2.9	銅	寛永通寶	
1571	外郭西区	堀土堤	小柄	29.7	銅・鉄		1657	外郭東区	下層	錢	2.9	銅	寛永通寶	
1572	外郭西区	堀下層	小柄	31.4	銅・鉄		1658	外郭東区	土壇24	錢	3.4	銅	寛永通寶	
1573	T 6	堀埋土	小柄	(24.0)	銅・鉄		1659	外郭東区	上層	錢	(1.5)	銅	寛永通寶	
1574	T 5	下層	小柄	(33.6)	銅・鉄		1660	外郭東区	上層	錢	2.4	銅	寛永通寶	
1575	内堀東区	内堀上層	刀	400.7	鉄		1661	外郭東区	上層	錢	2.3	銅	寛永通寶	
1576	外郭西区	下層	鉈	(725.7)	鉄		1662	外郭西区	土壇12	錢	1.4	銅	寛永通寶	
1577	外郭西区	土壇63	切羽	2.5	銅	鍍金、線刻	1663	外郭東区	土壇40	錢		銅		
1578	外郭西区	土壇62	金具	2.4	銅		1664	外郭西区	土壇81	錢	2.2	銅		
1579	外郭東区	土壇104	金具	1.1	銅	鍍金	1665	外郭西区	土壇63	錢	1.2	銅		
1580	T 5	下層	金具	8.2	銅		1666	T 6	堀埋土	錢	2.2	銅		
							1667	T 6	堀埋土	錢	1.5	銅		
							1668	外郭西区	下層	錢	(1.0)	銅		



調査地周辺（北上空から）

図版 2



トレンチ1全景（南から）



トレンチ12石垣（東から）



トレンチ13石垣（南から）



トレンチ13石垣基部（南東から）



トレンチ3全景（南から）

図版 4



トレンチ 3 石垣 (南西から)



トレンチ 3 井戸 (南西から)



外郭東辺石垣と橋脚 (東から)



外郭全景（北東から）



外郭・内堀土層断面（北西から）



石組遺構（南から）

図版 6



土壌群と整地層（北東から）



鍛冶炉群全景（南から）



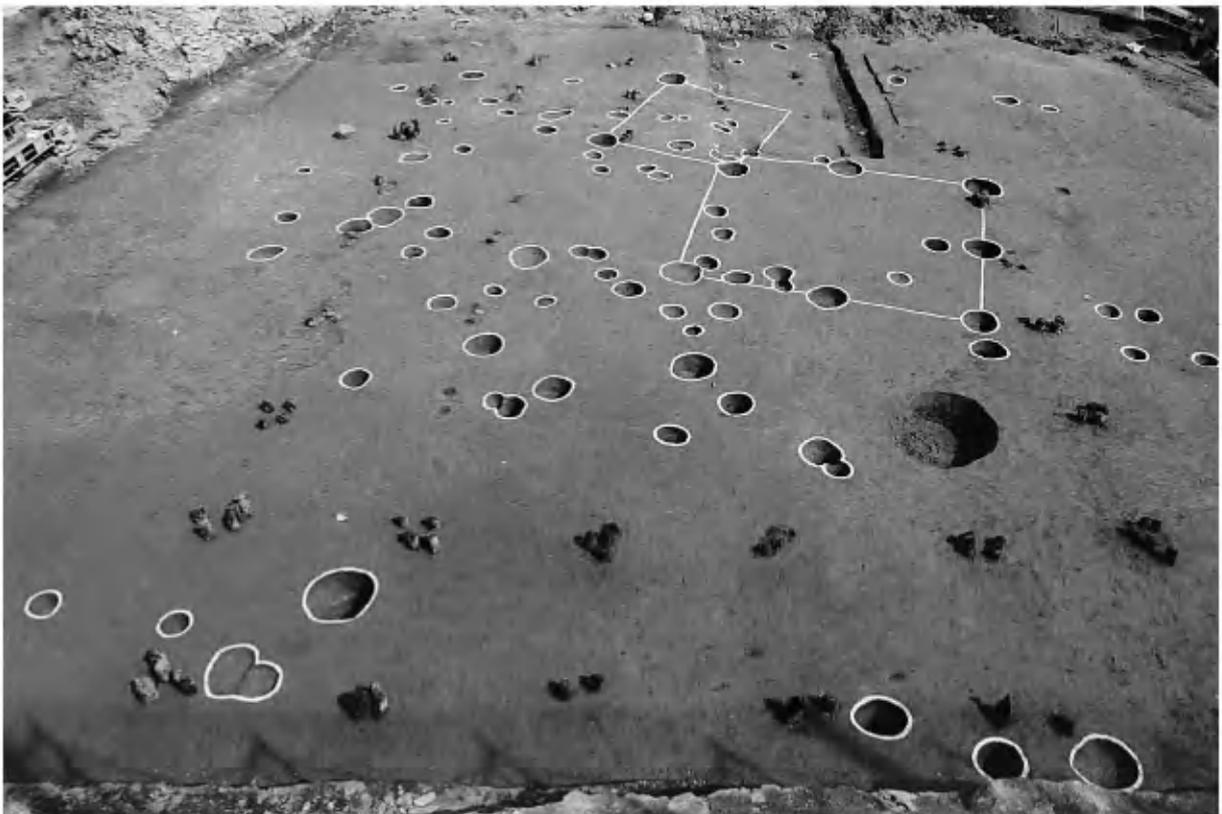
堀全景（東から）



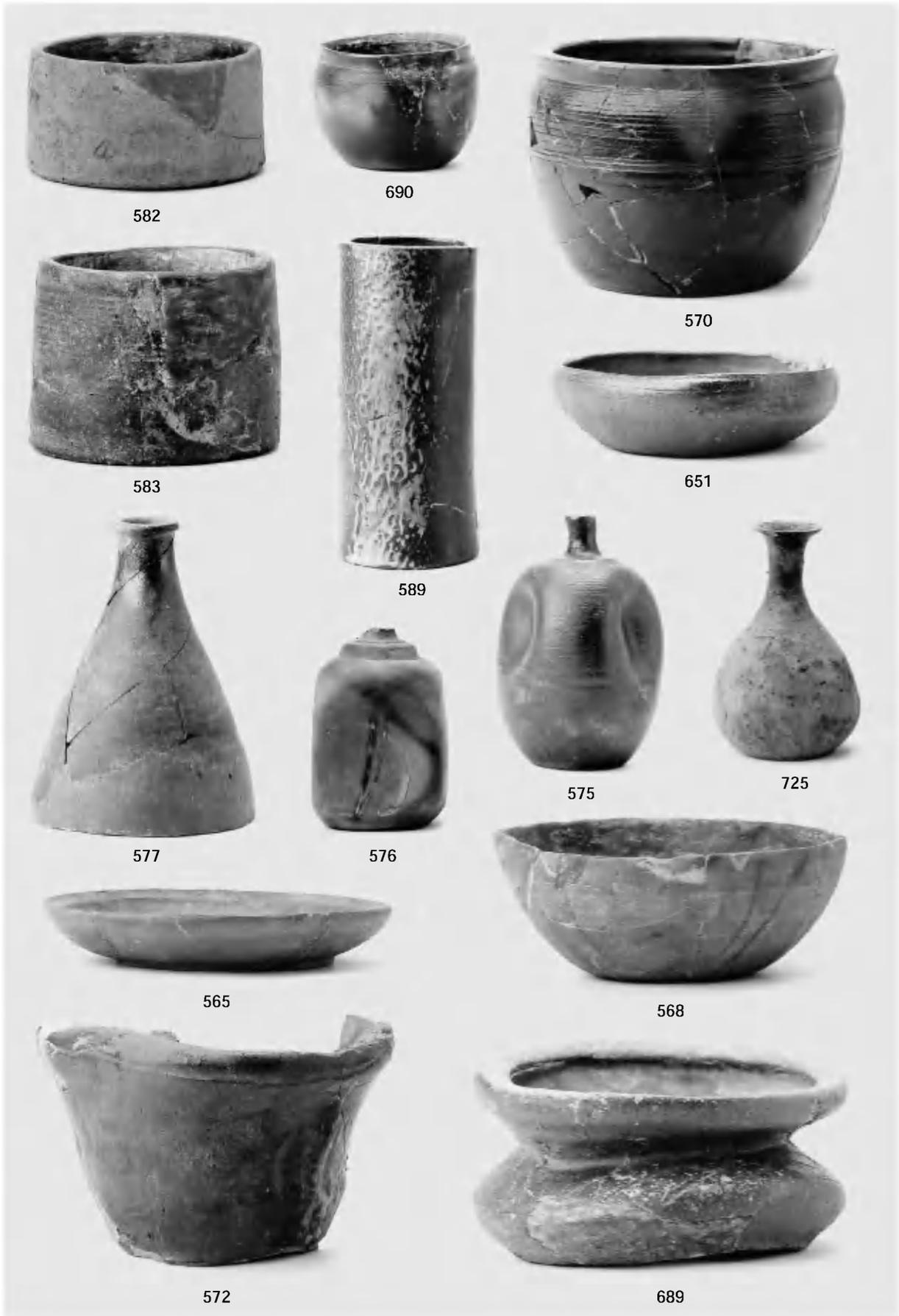
土堤状遺構（南から）



土堤状遺構（南東から）



中世遺構全景（南から）



炆器 1



炆器 2

图版10

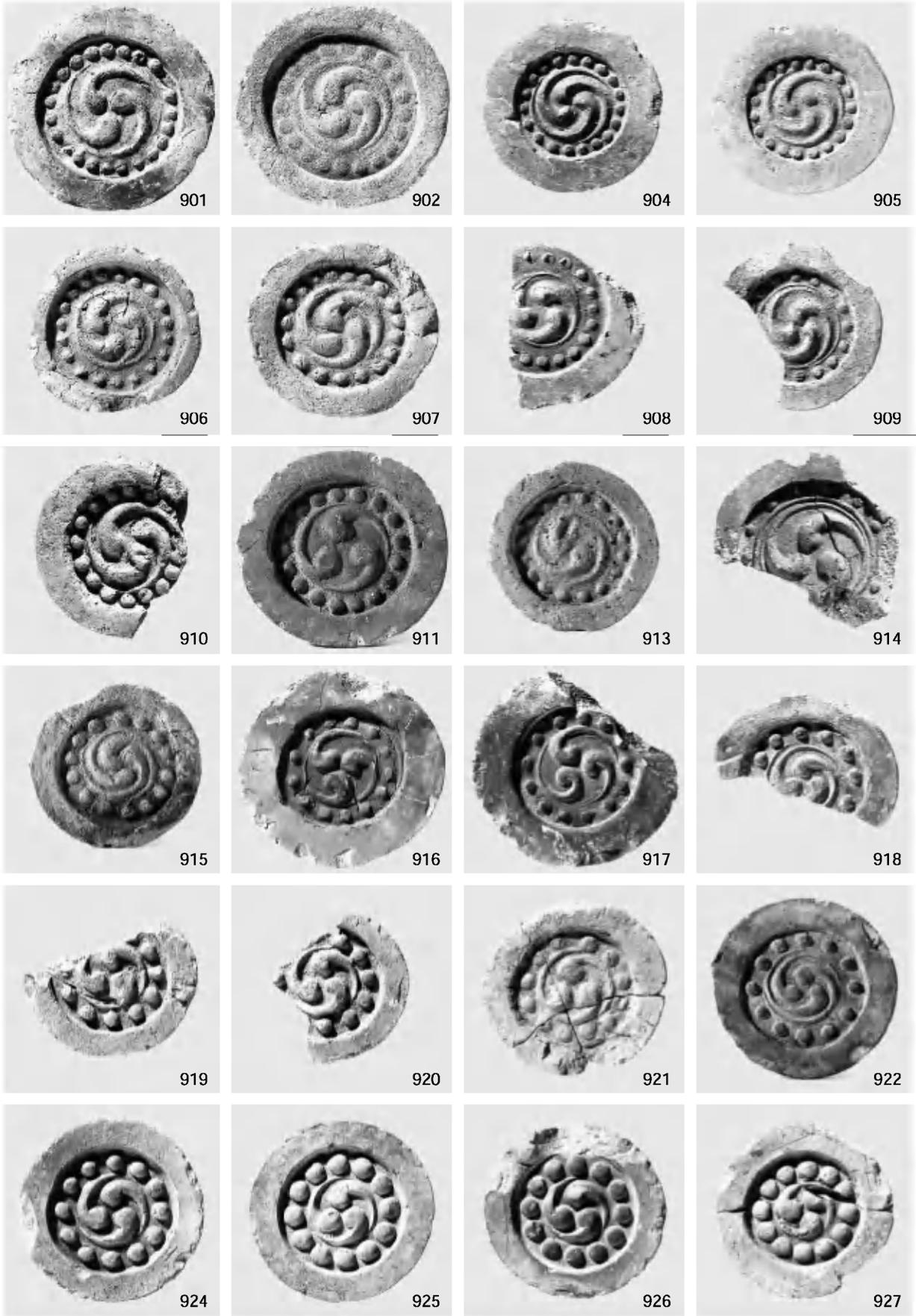


土器



棟达瓦·軒丸瓦 1

图版12

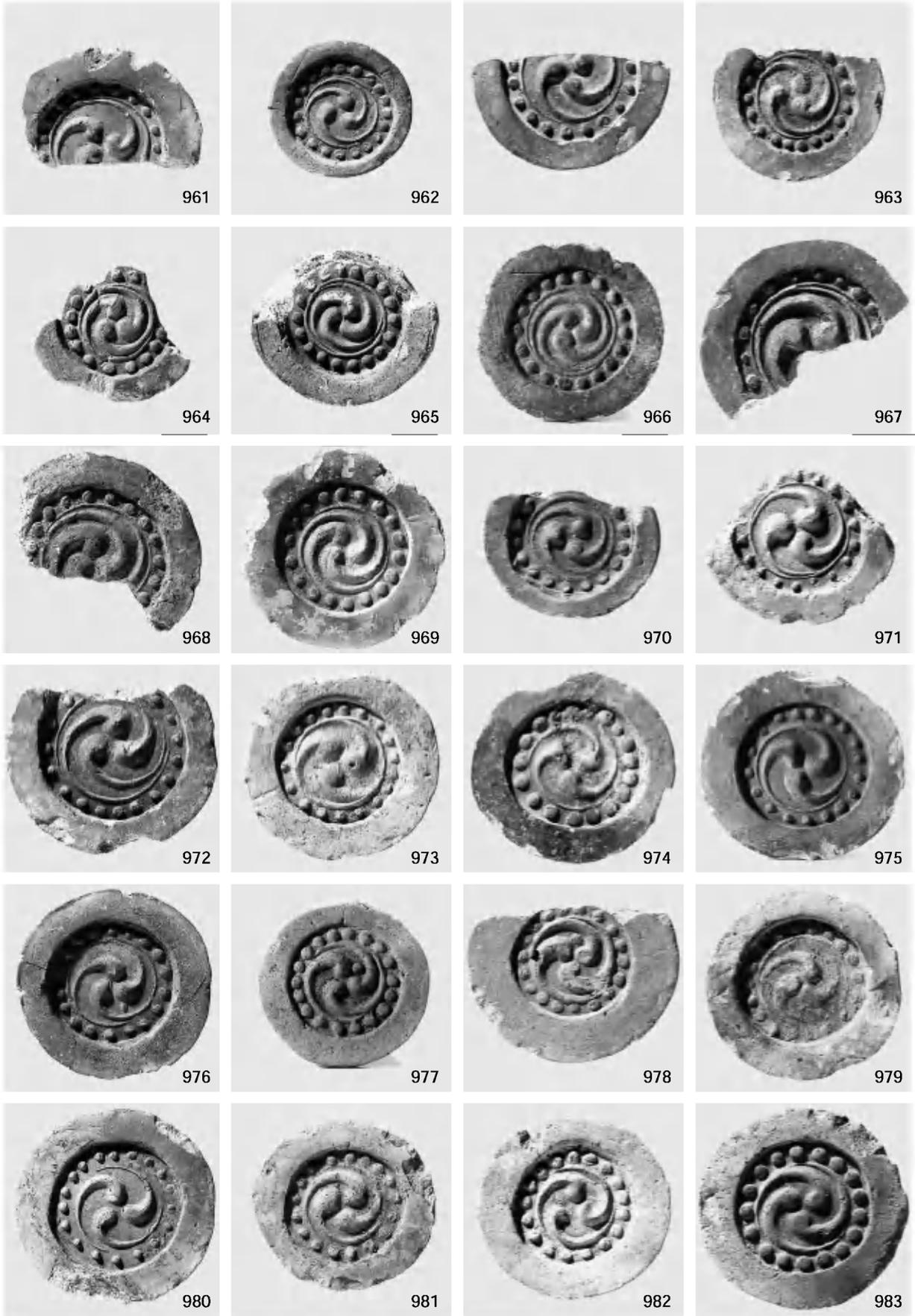


軒丸瓦 2

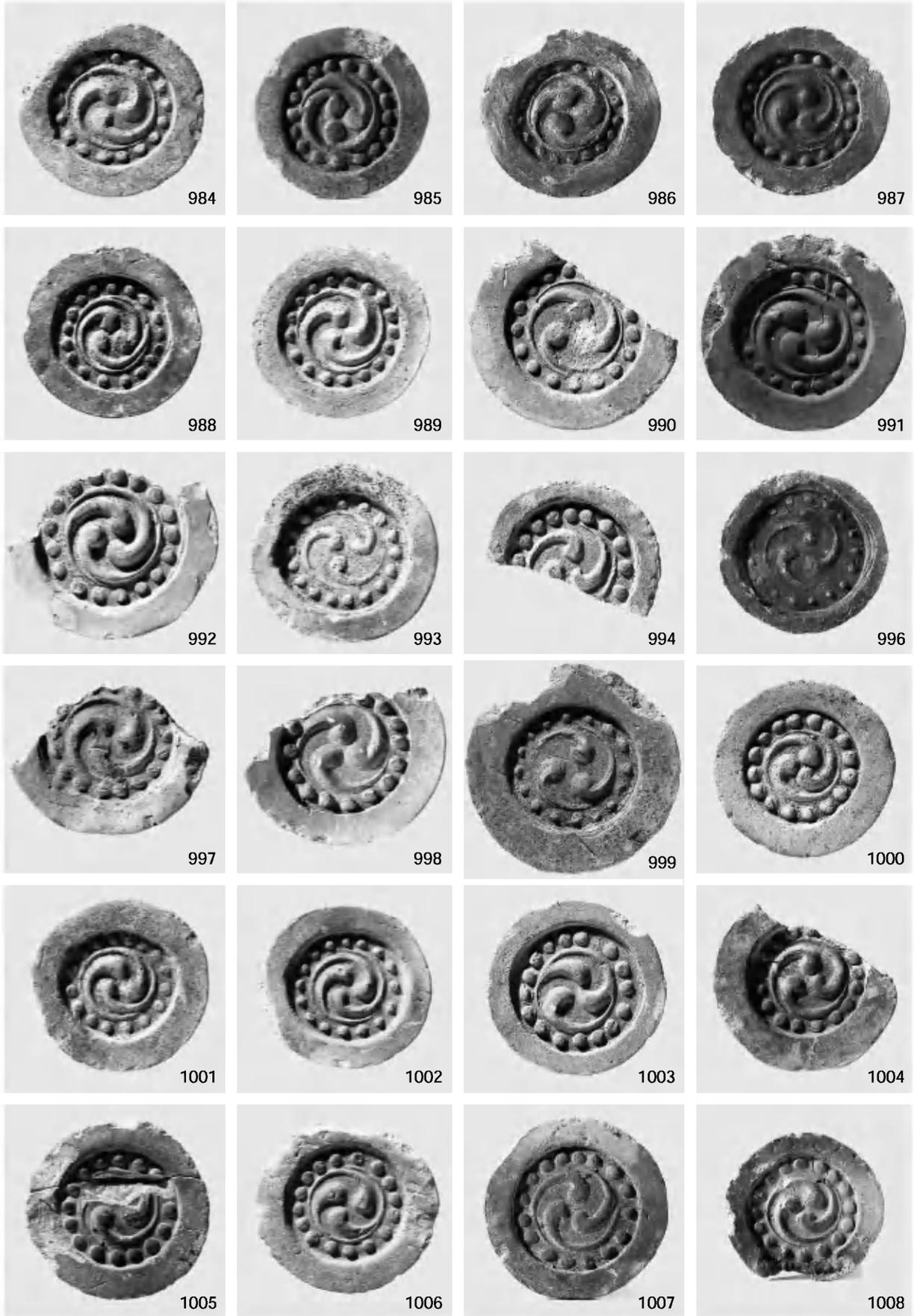


軒丸瓦 3

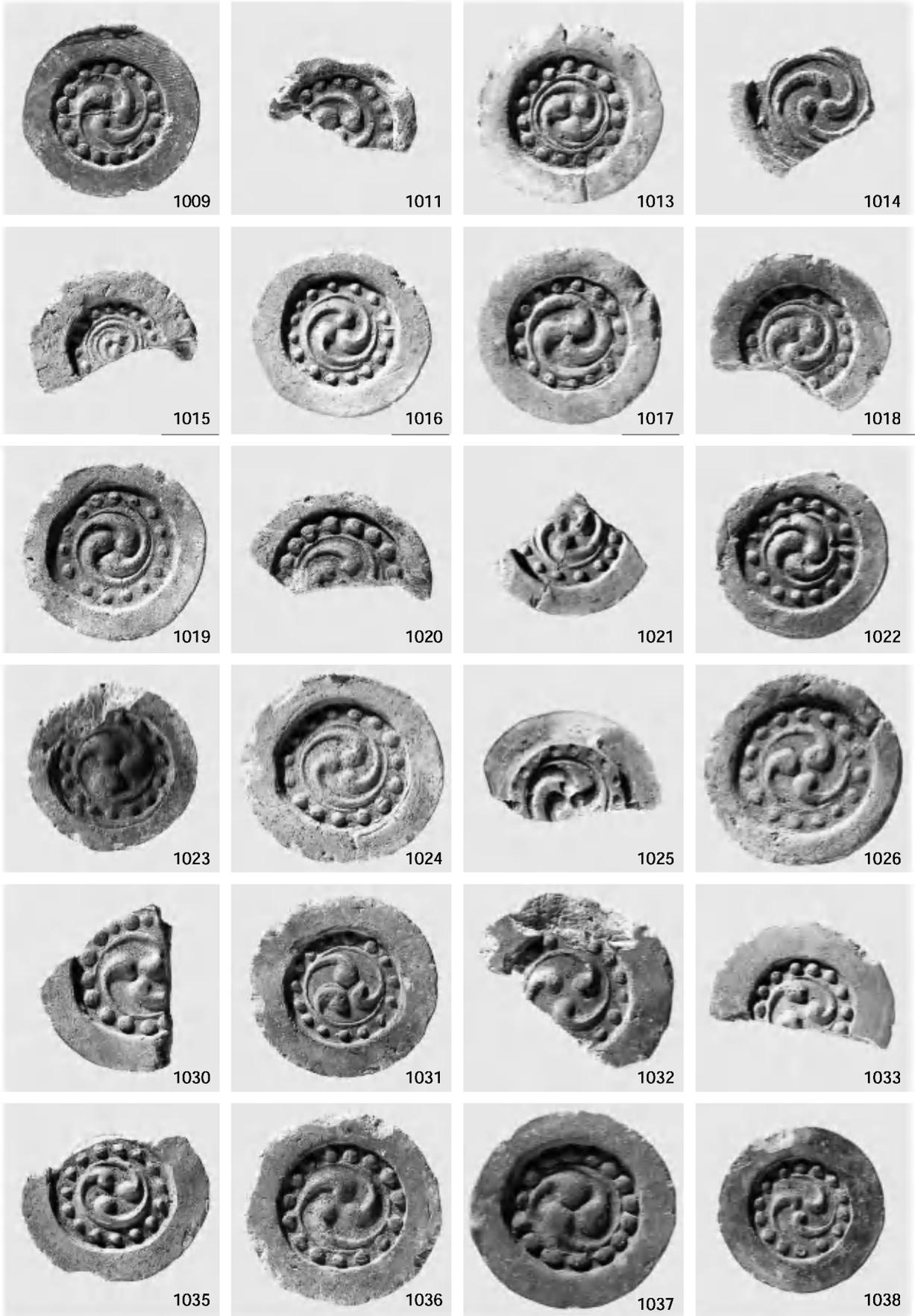
图版14

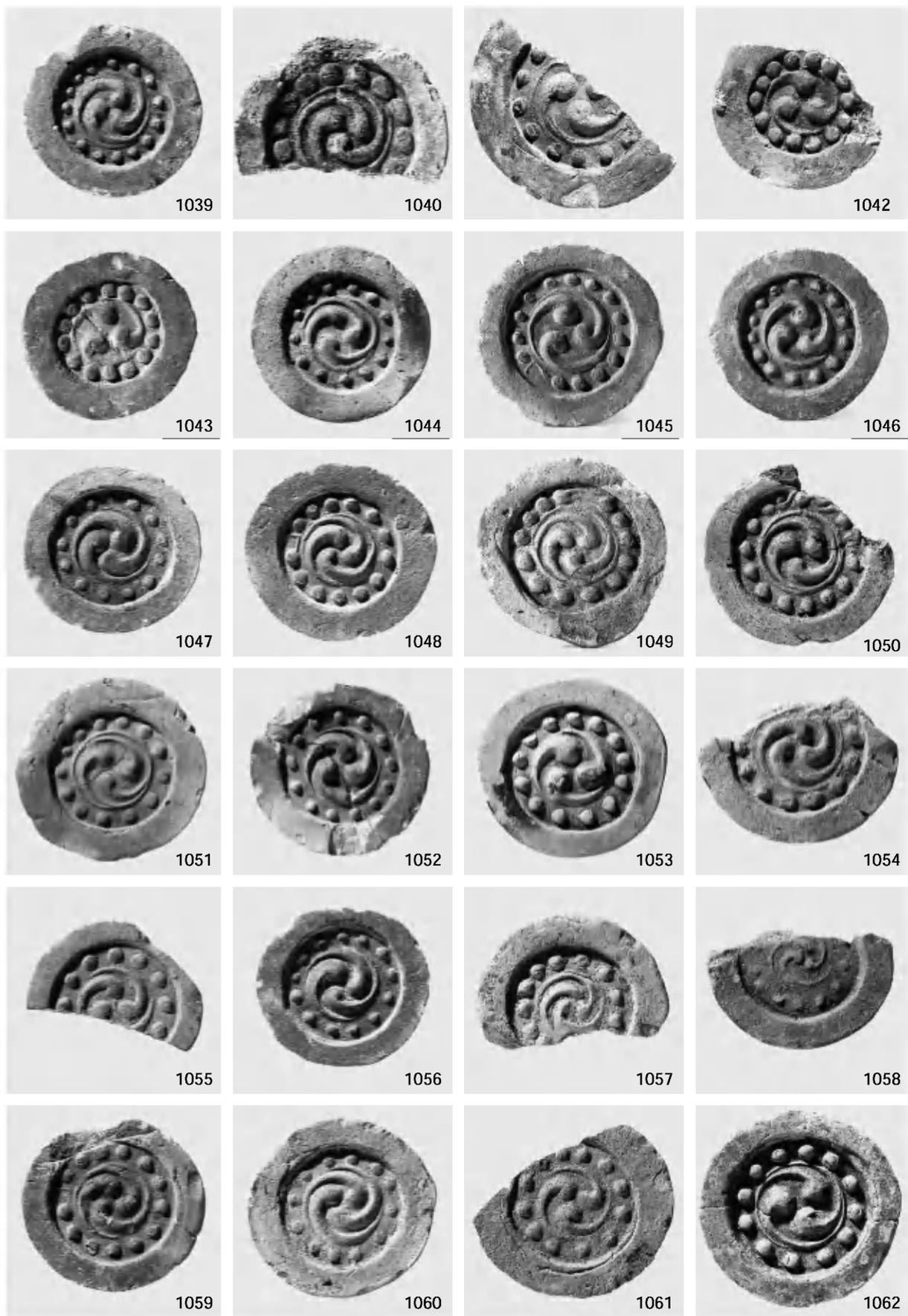


軒丸瓦 5



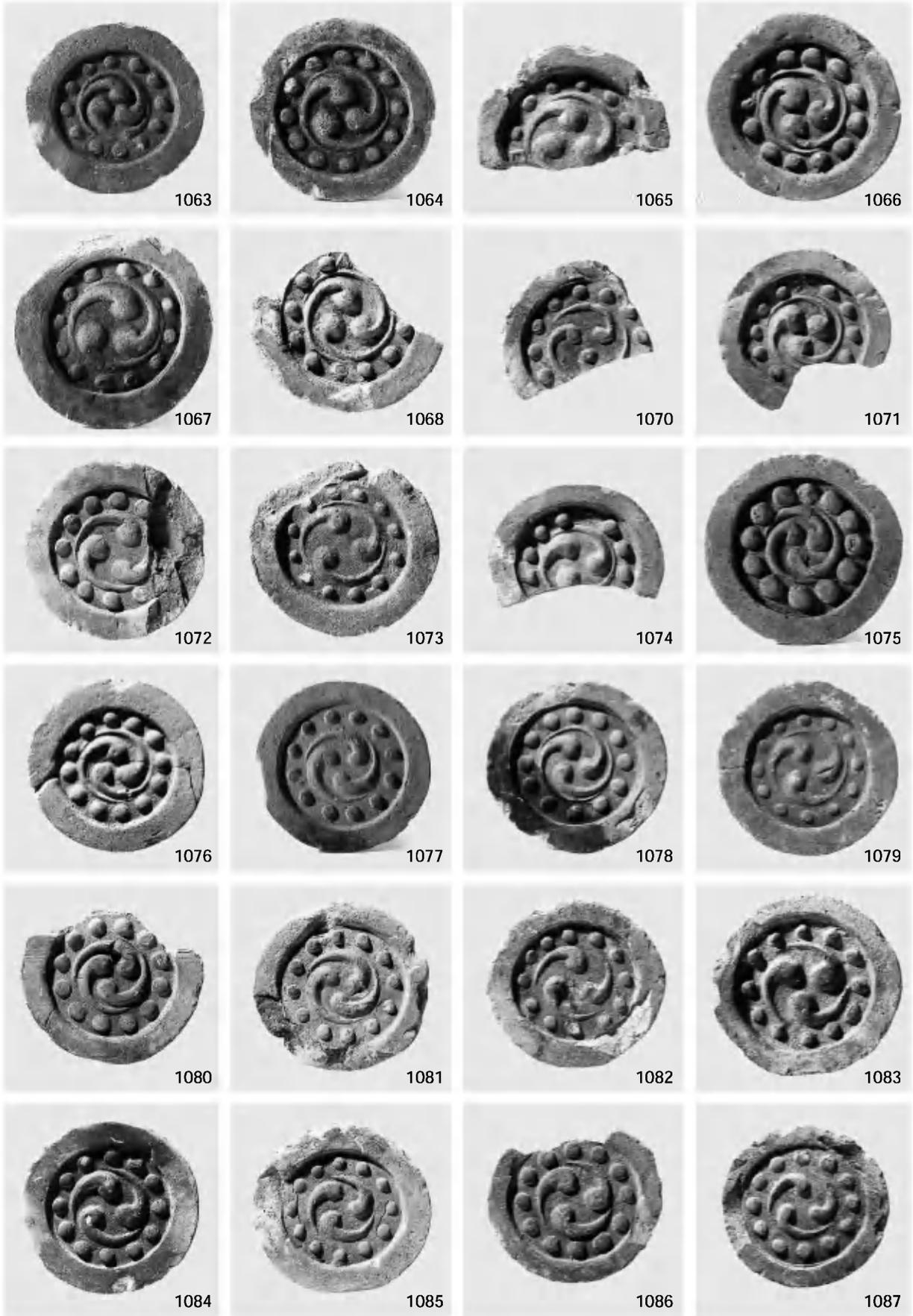
軒丸瓦 4



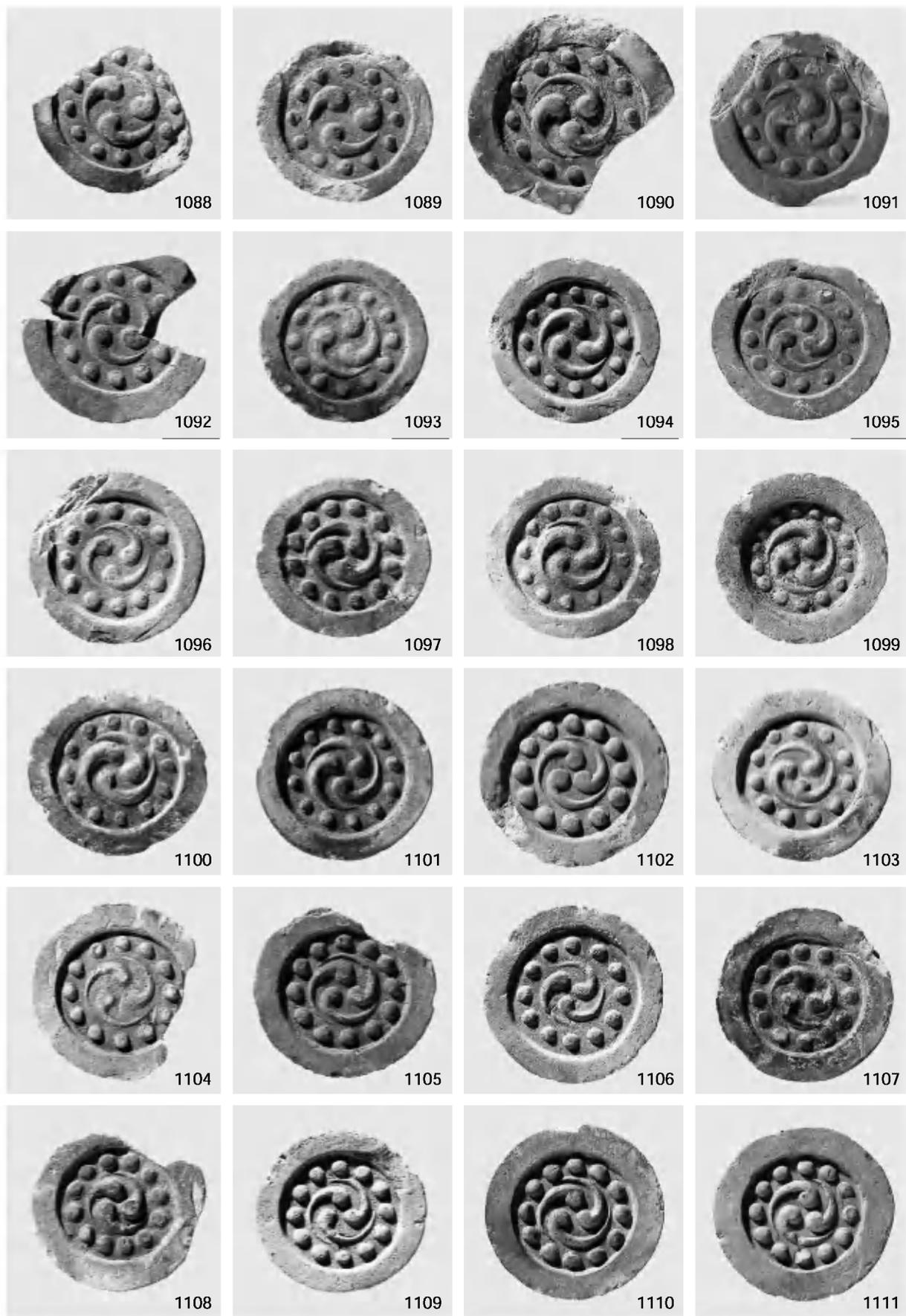


軒丸瓦 7

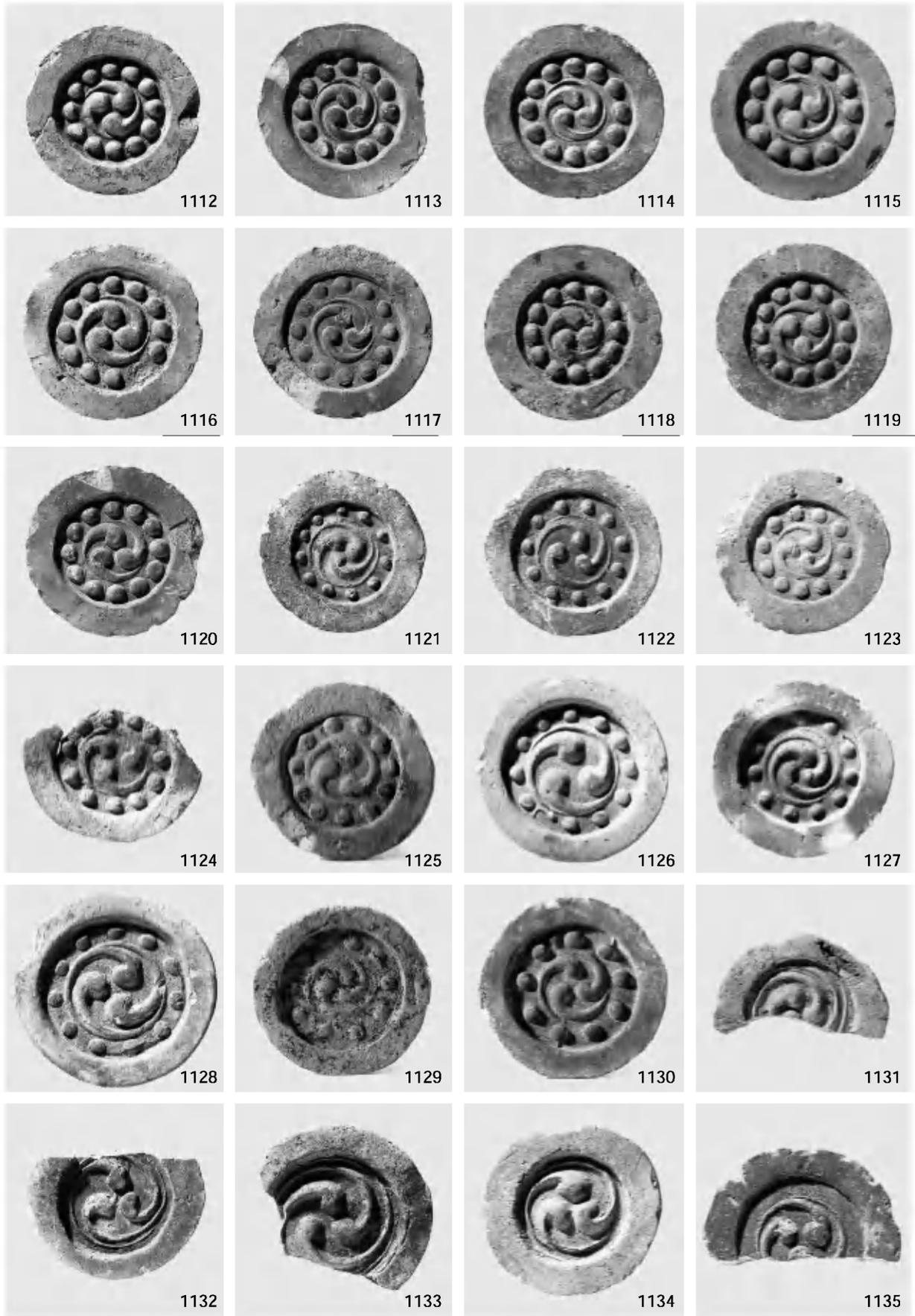
图版18



軒丸瓦 8



图版20

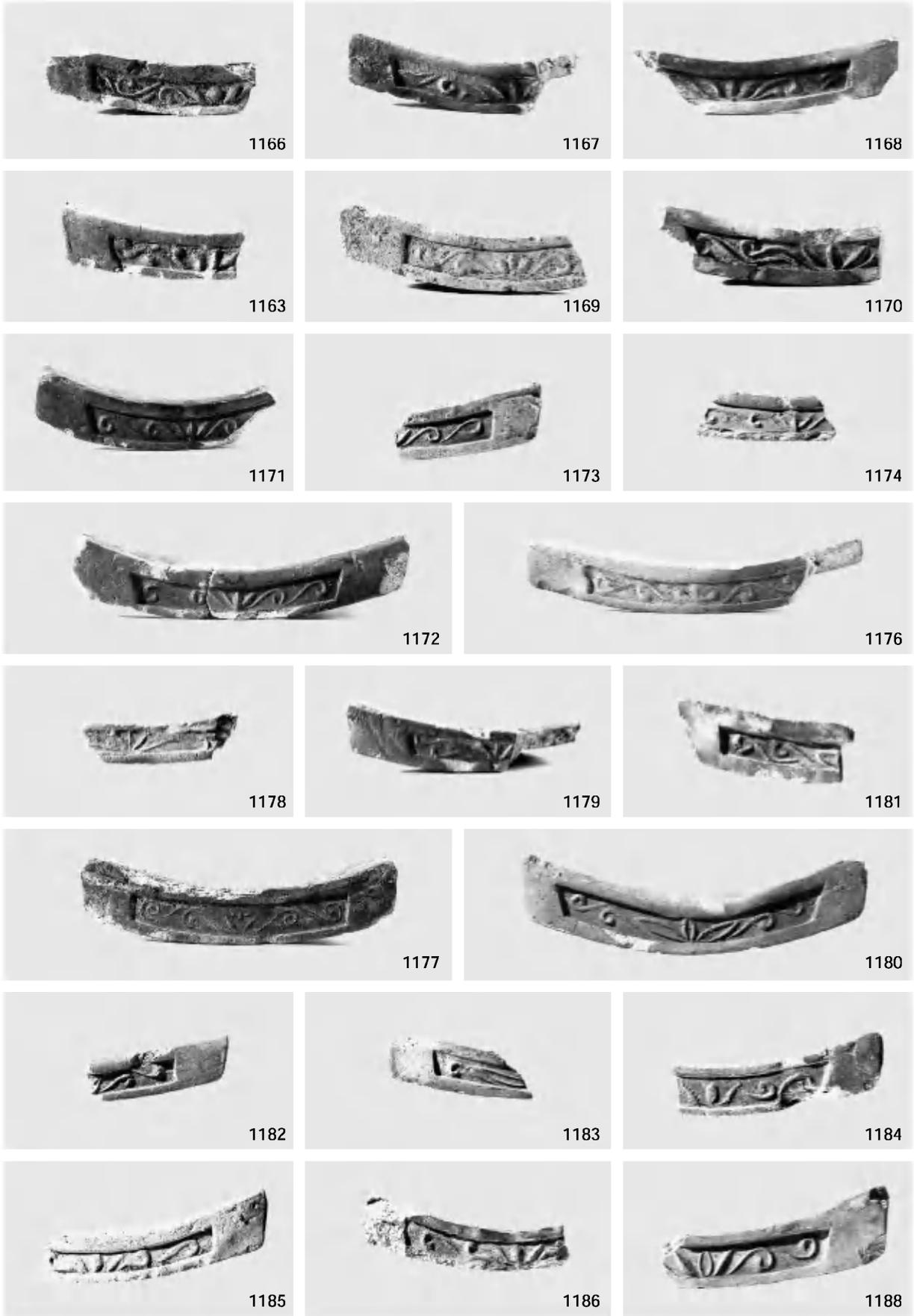


軒丸瓦10



軒平瓦 1

图版22

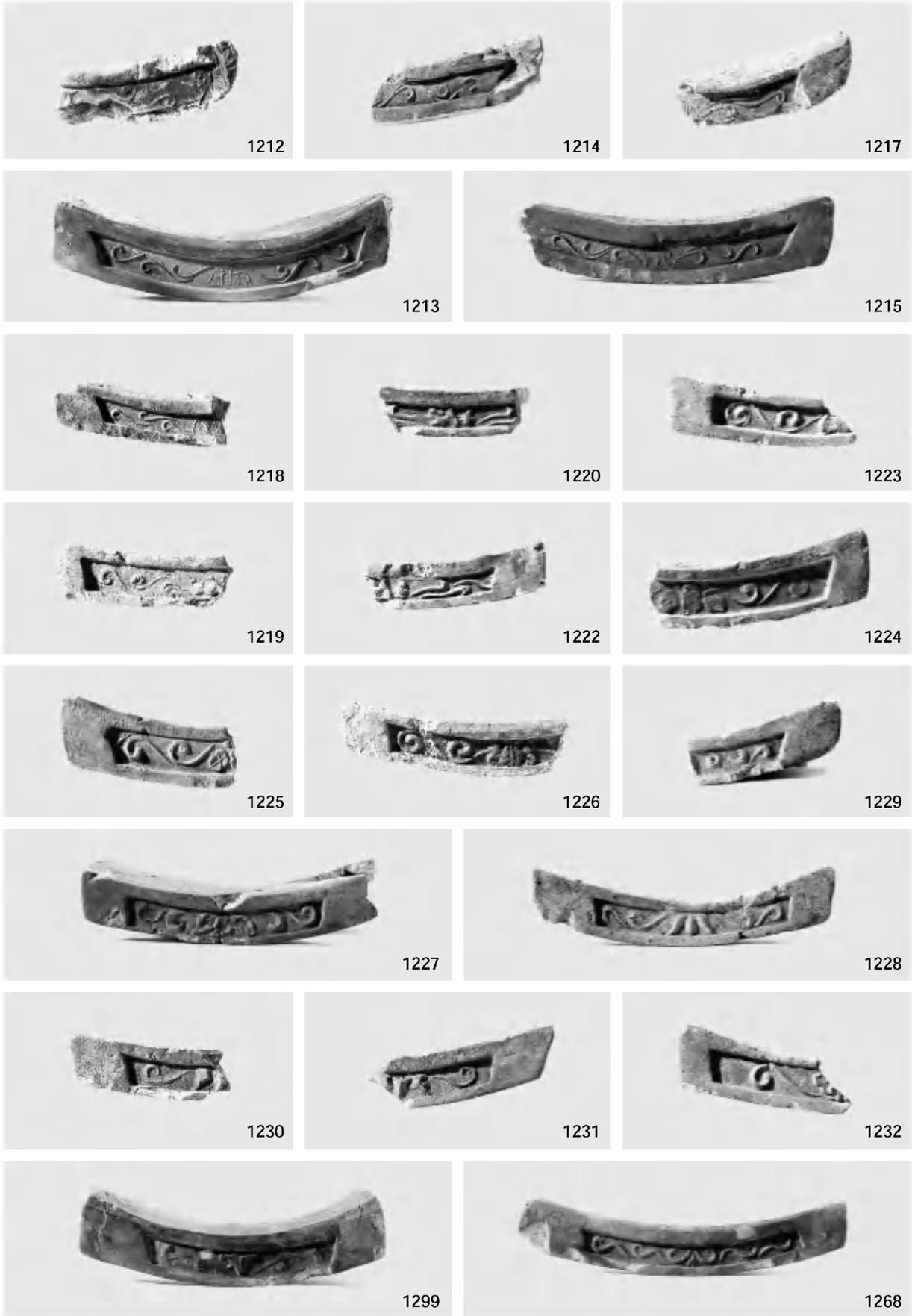


軒平瓦 2



軒平瓦 3

图版24



軒平瓦 4







1274



1278



1281



1282



1283



1280



1284



1287



1286



1289



1279



1288



1296



1291



1290



1293



1270



1292

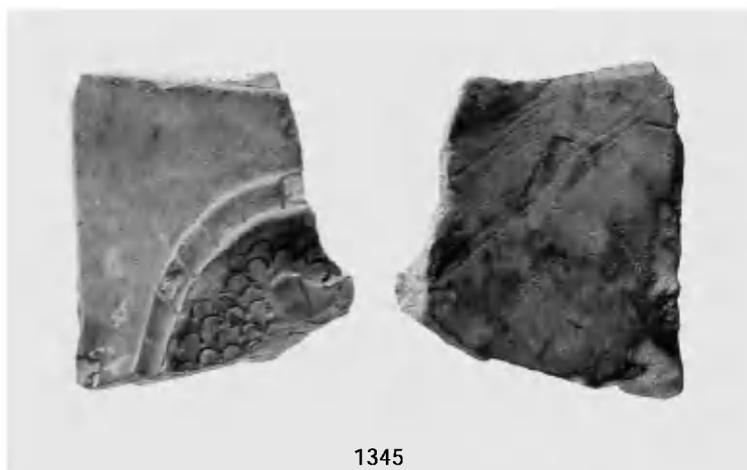


1294



1315





1345



1343



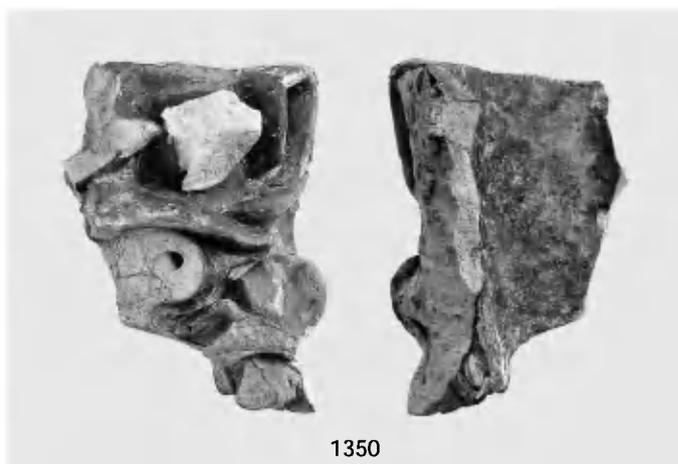
1344



1346



1353



1350



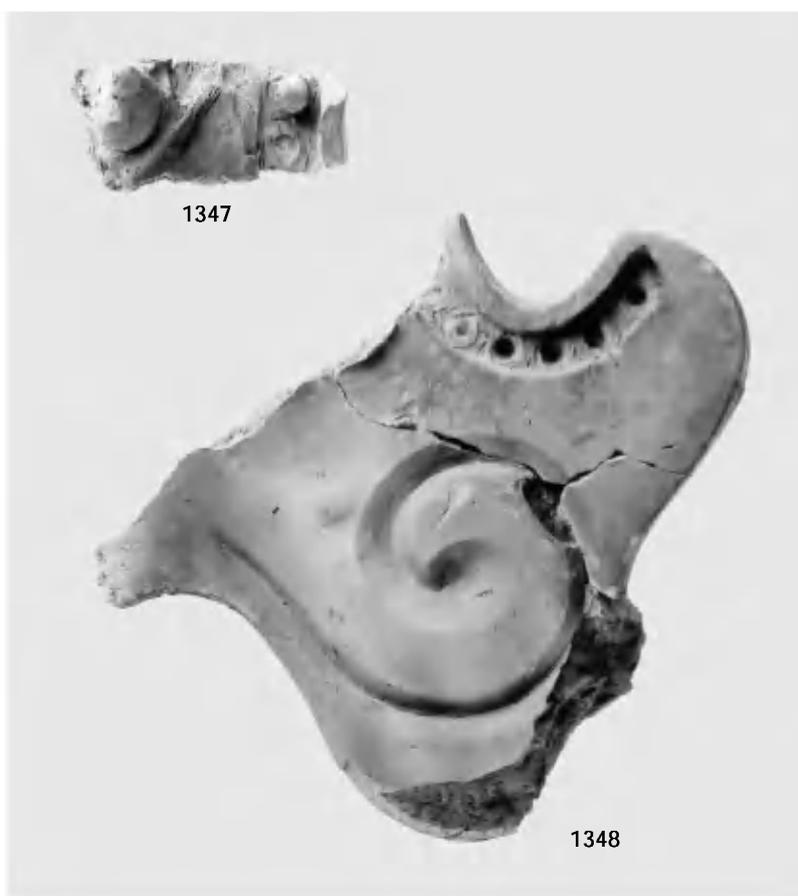
1349



1352



1355

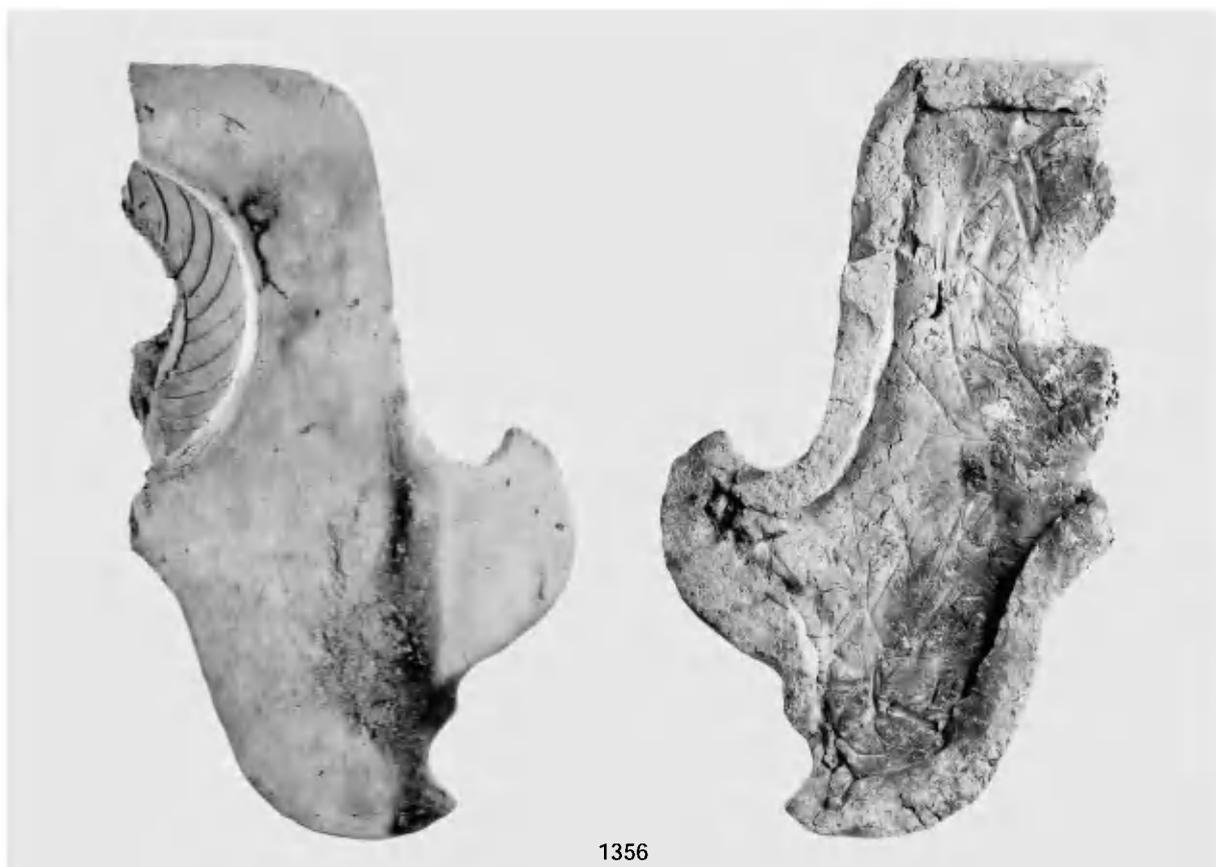


1347

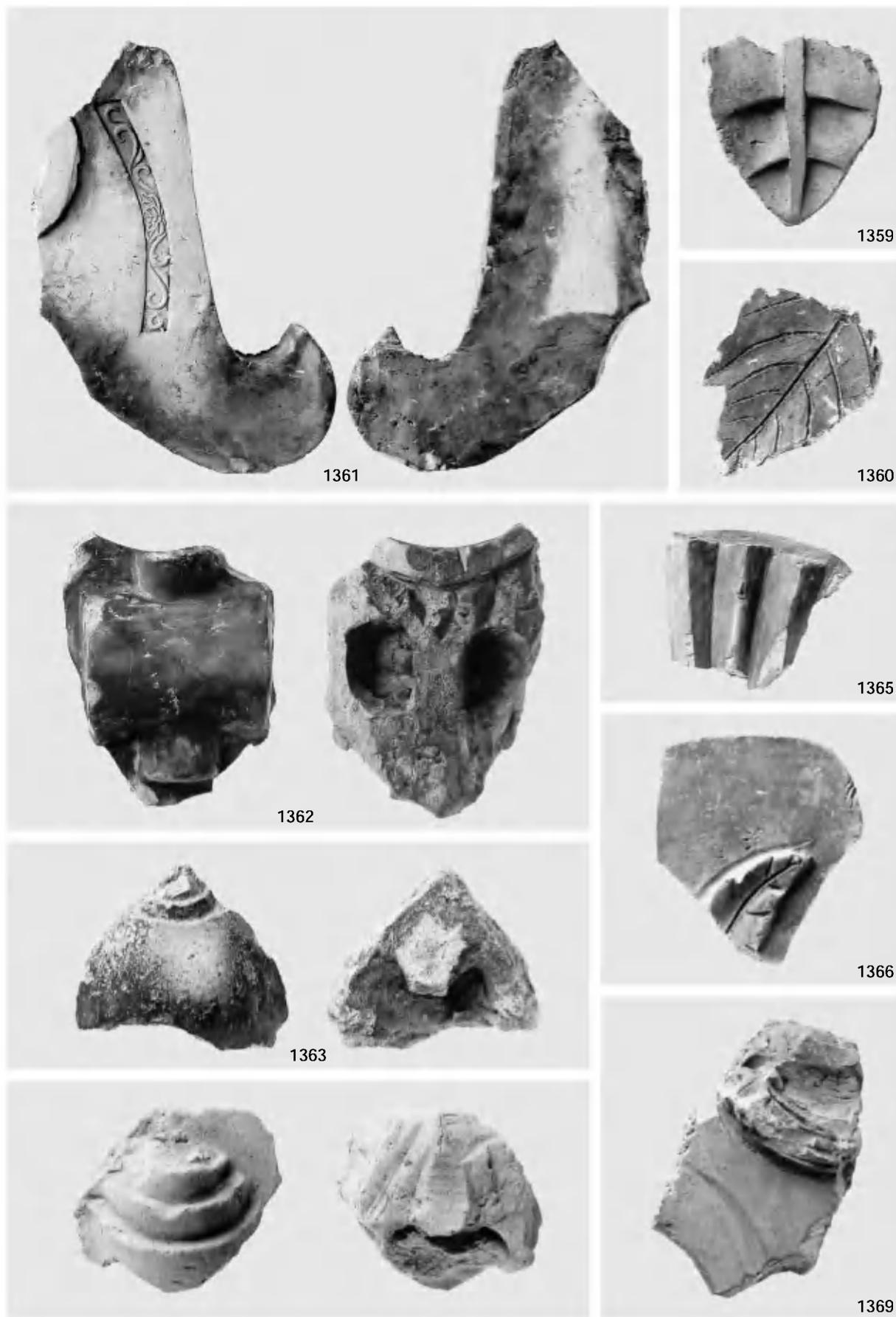
1348



1354



鬼瓦 3



鬼瓦 4



1335



1333



1334



1336



1337



1342



1339



1338



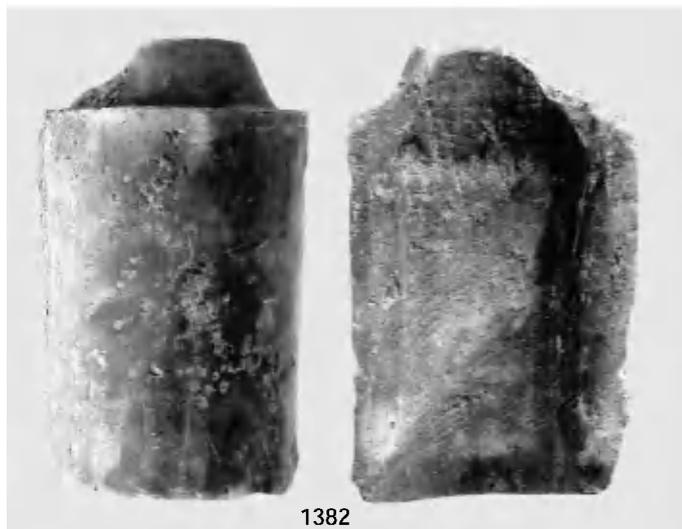
1341



1340



1380



1382



1379



1383

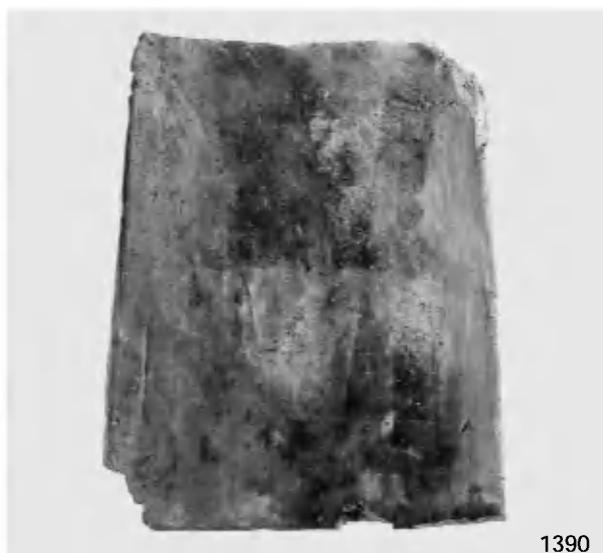


1378



1384

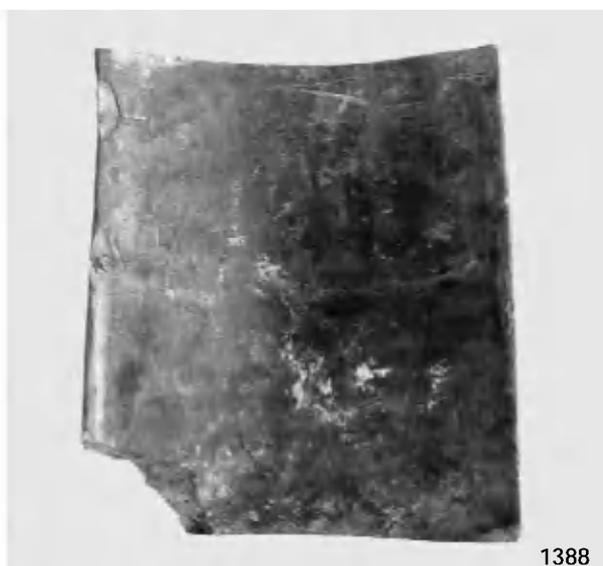
丸瓦



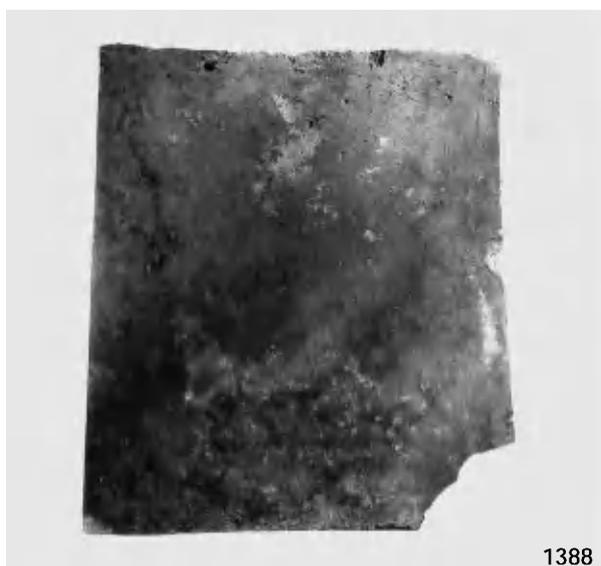
1390



1390



1388



1388

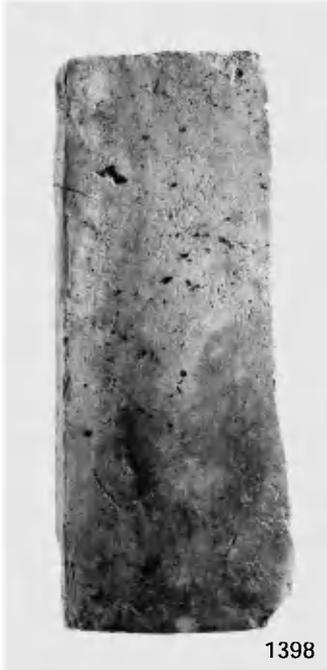


1393

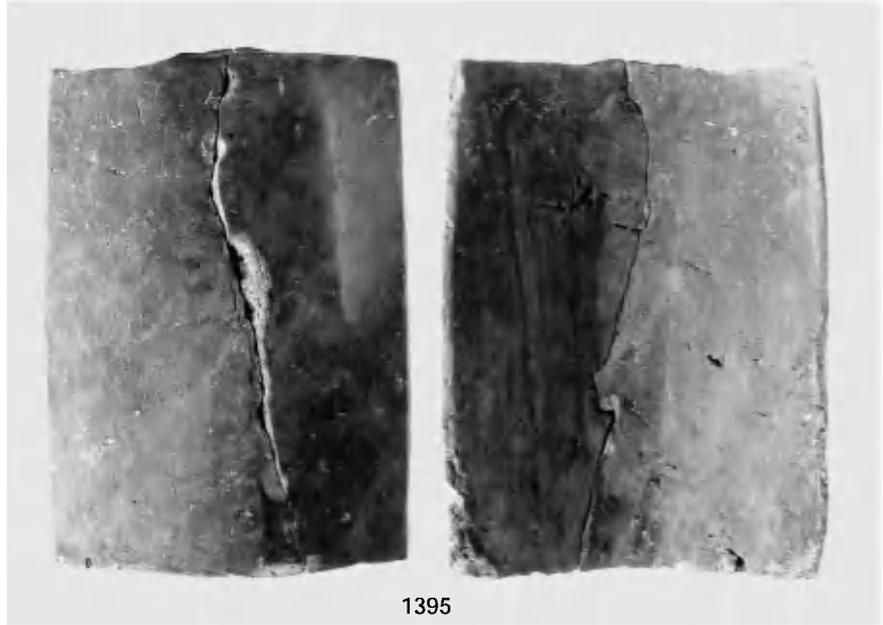


1393

平瓦



1398



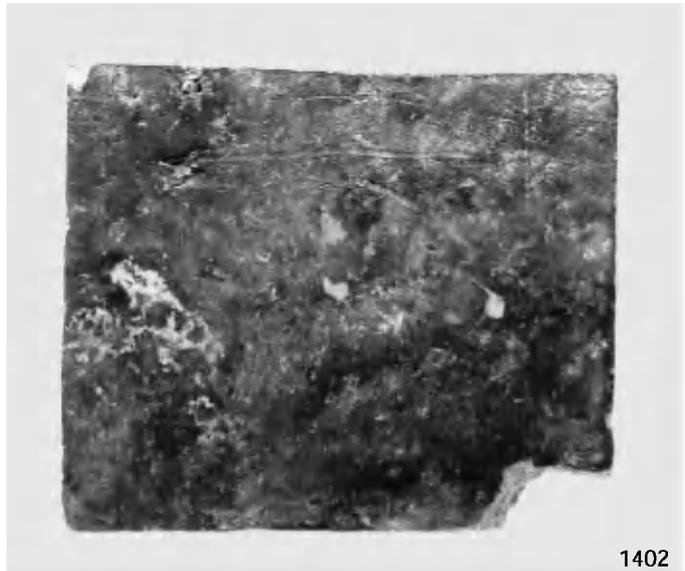
1395



1396

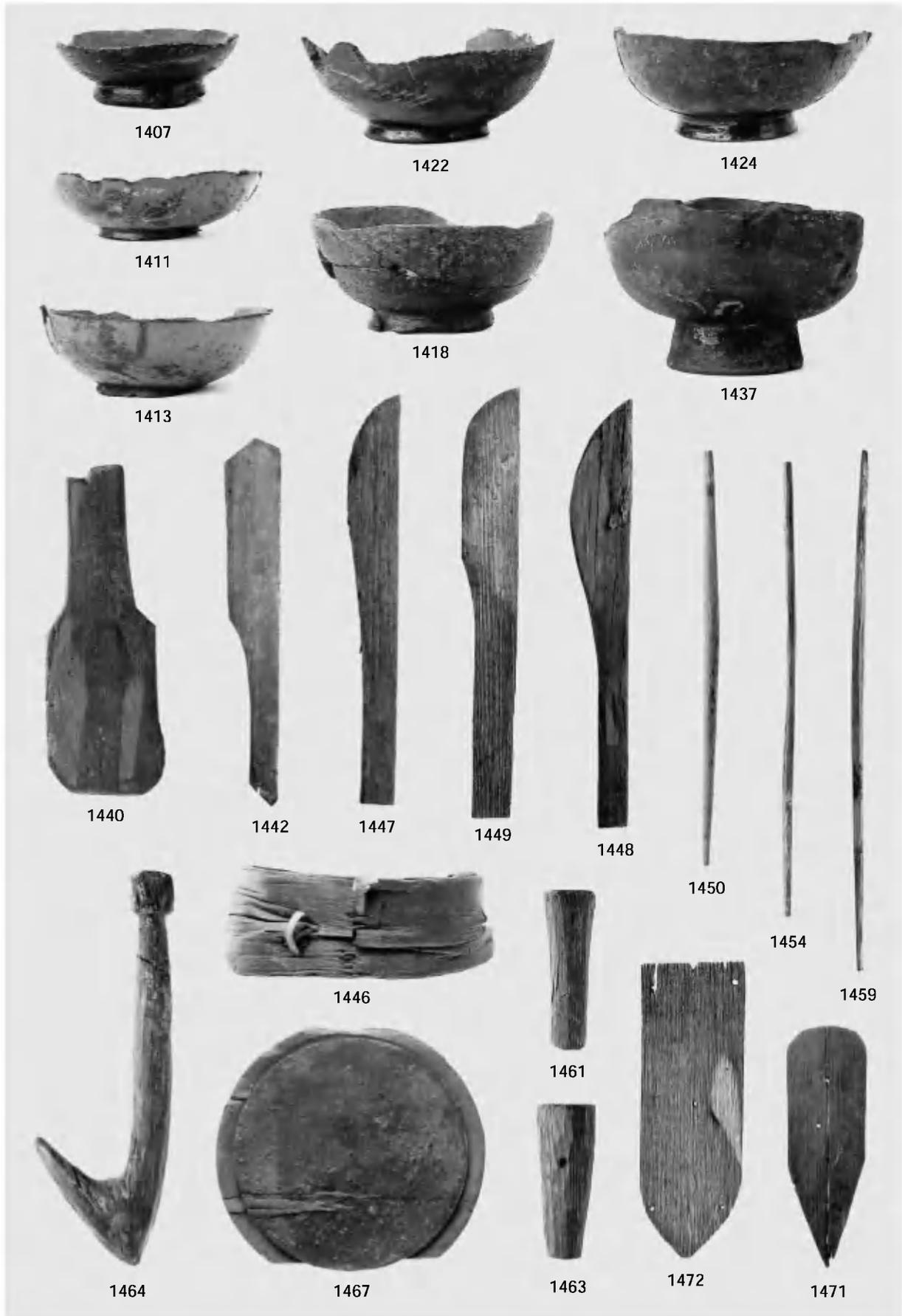


1401

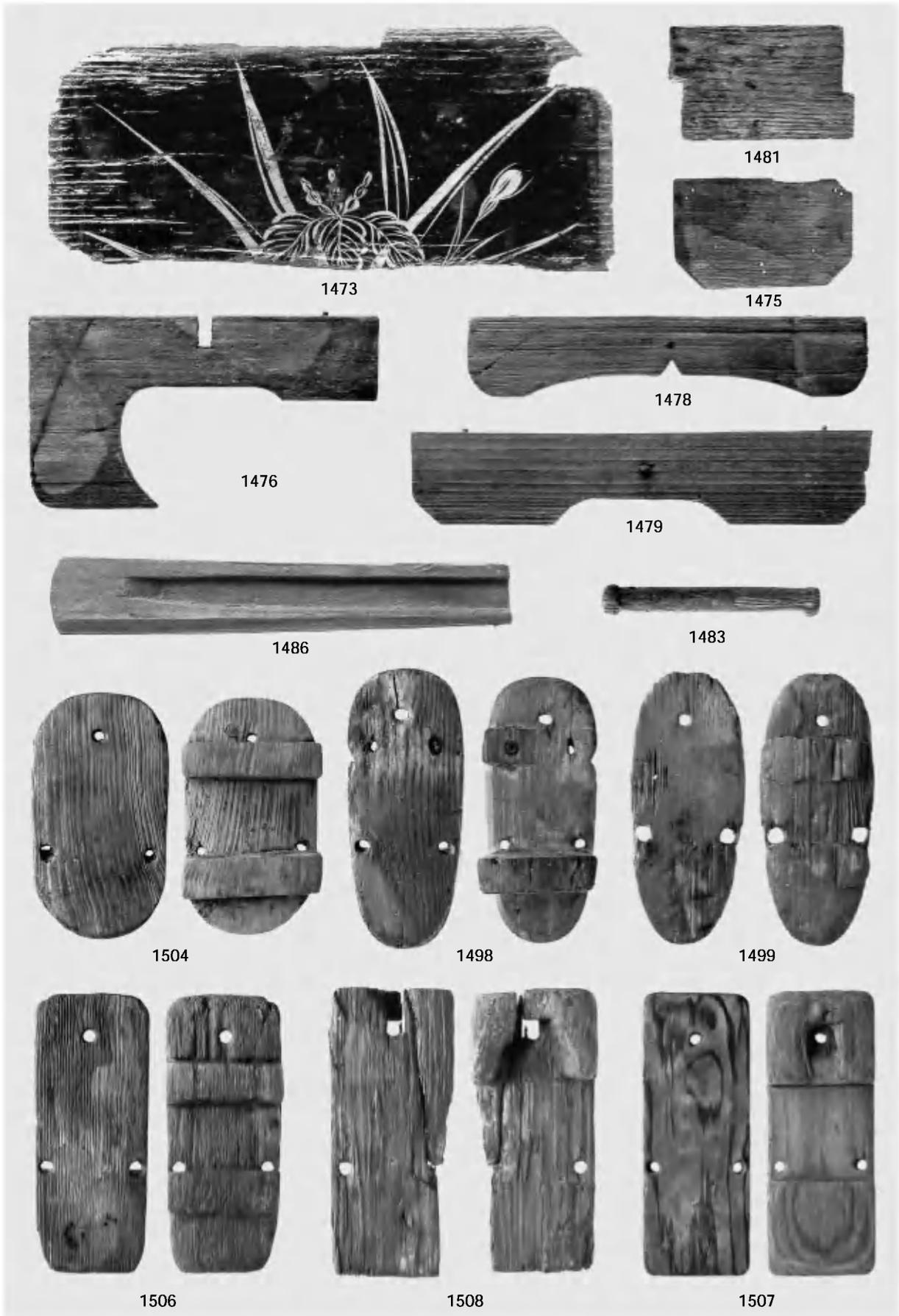


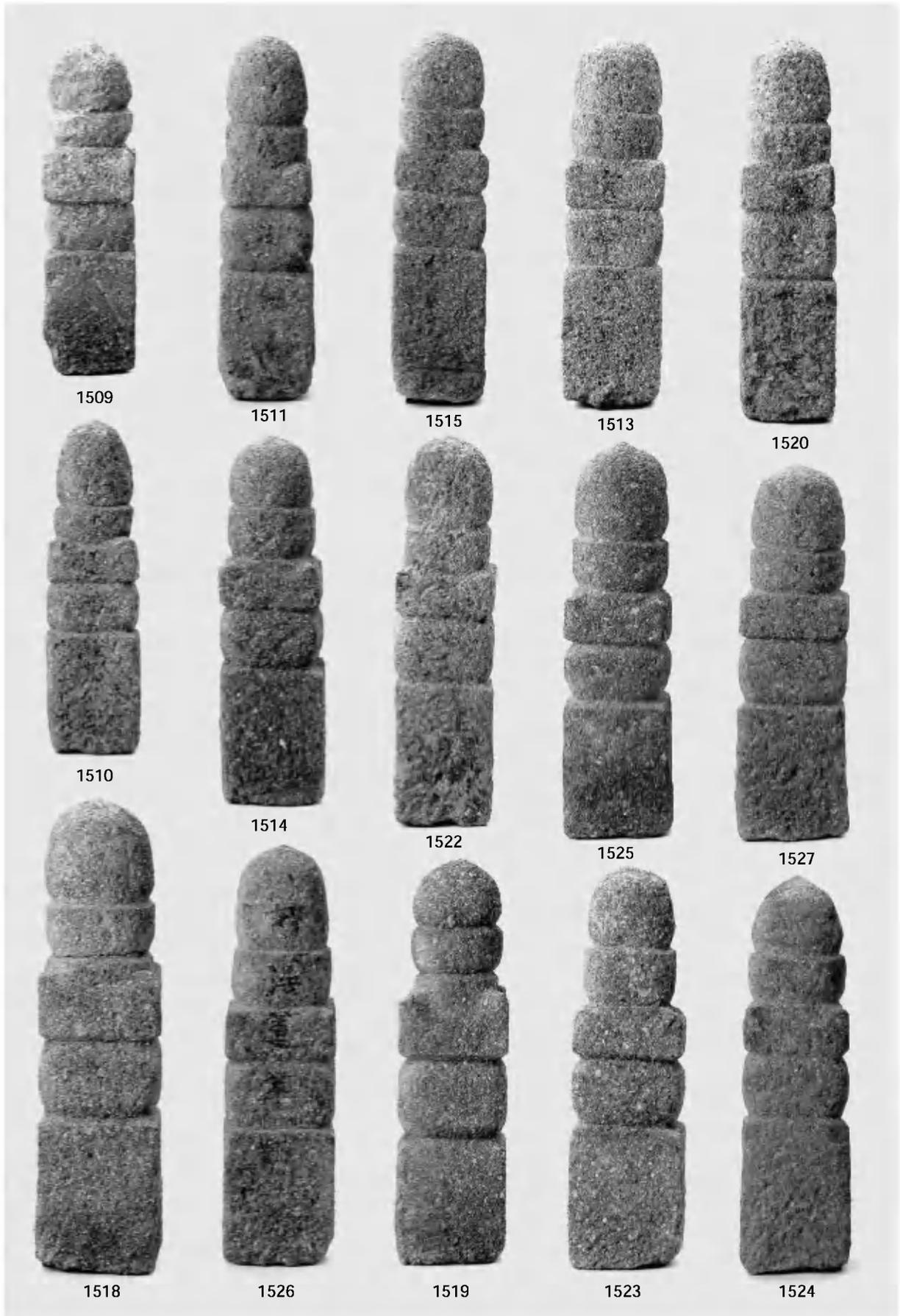
1402

熨斗瓦 · 雁振瓦 · 敷瓦

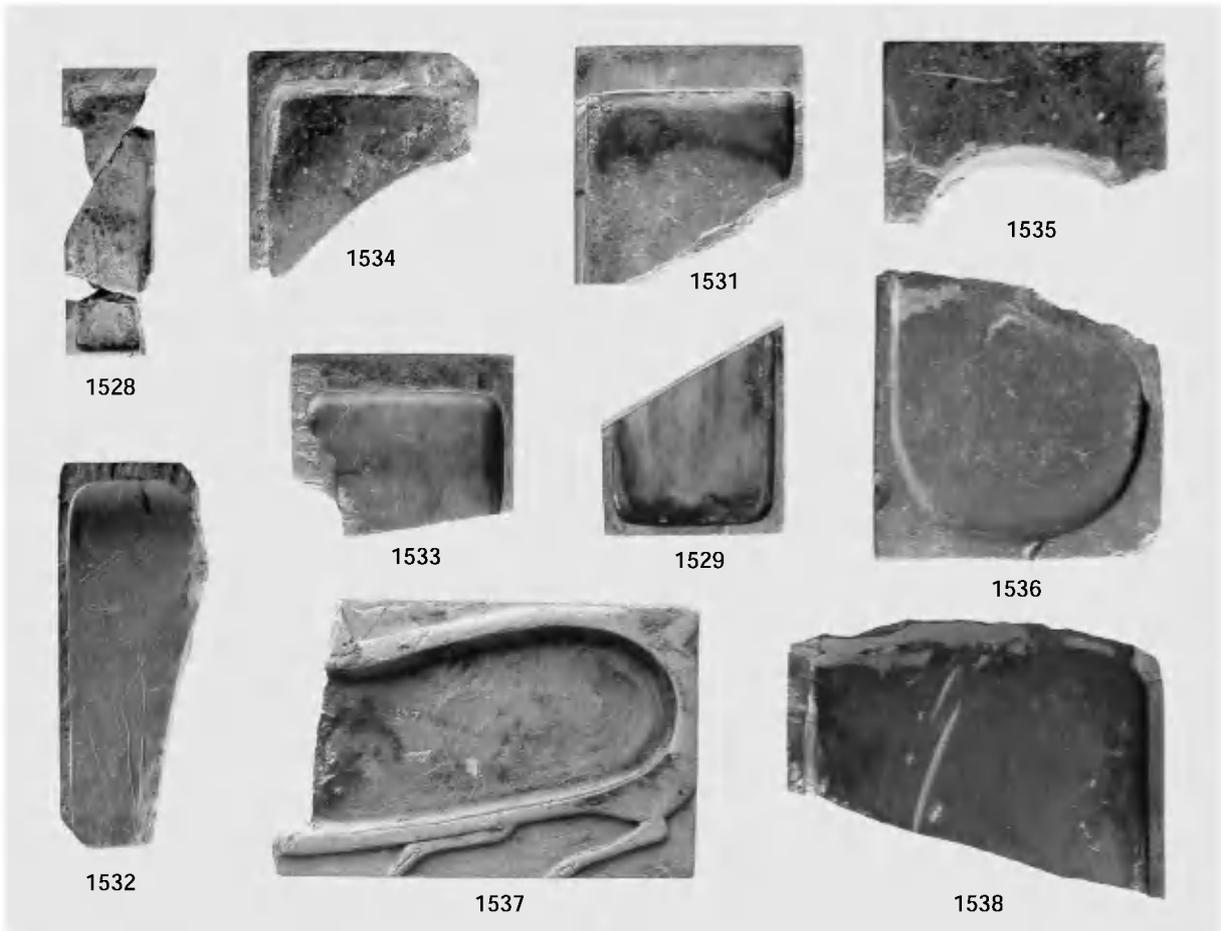


木製品 1

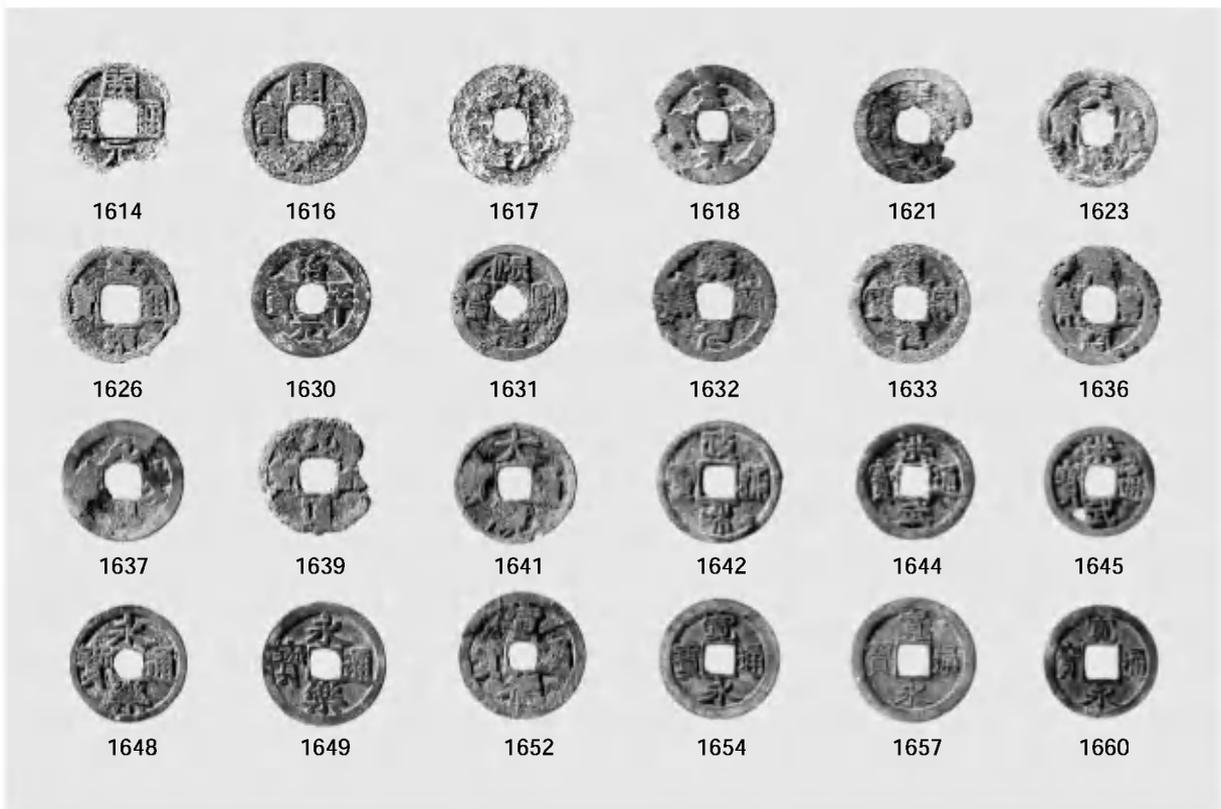




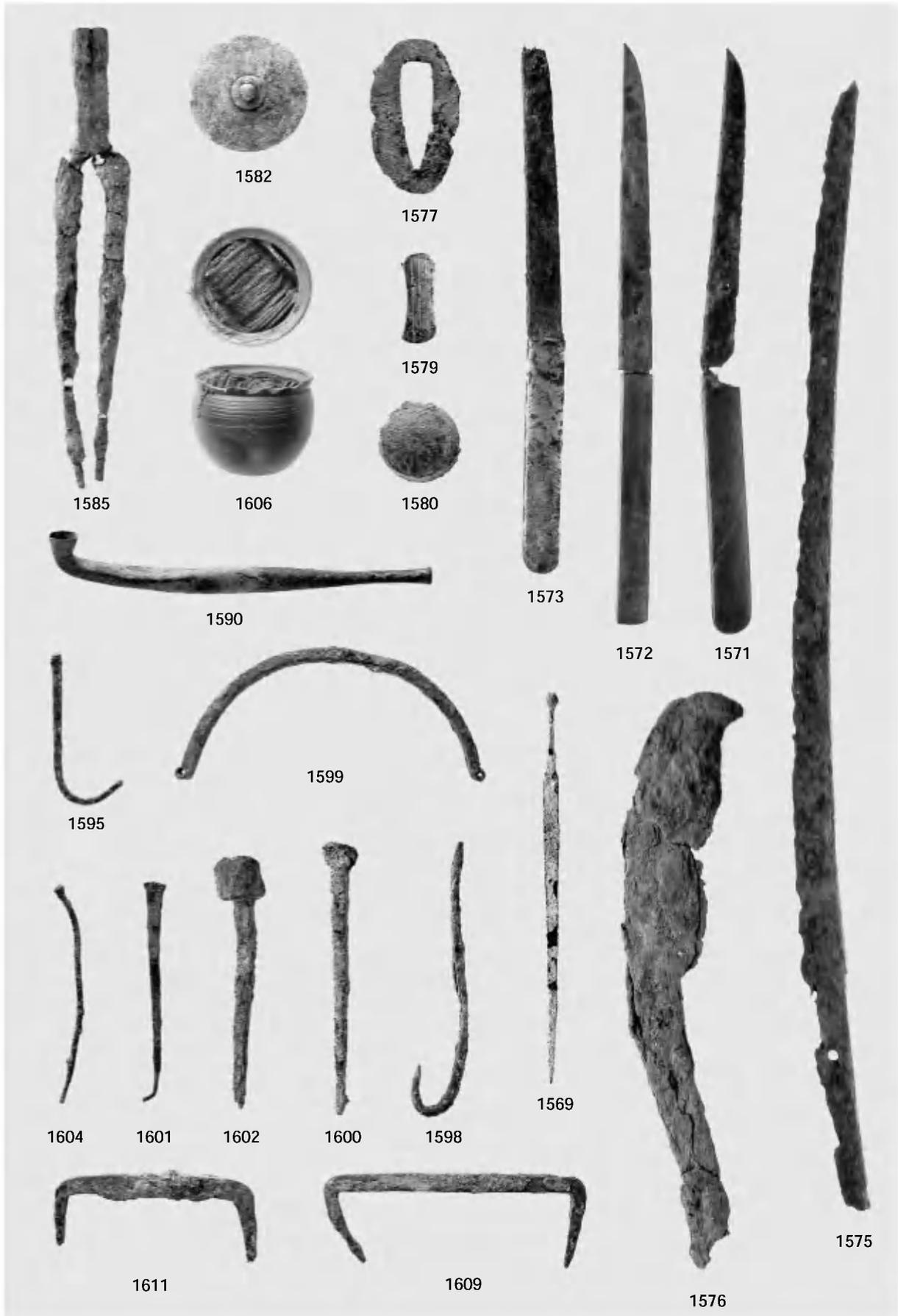
石製品 1



石製品 2



金属製品 1



金属製品 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	おかやまじょうにのまるあと							
書 名	岡山城二の丸跡							
副 書 名	県立図書館建設に伴う発掘調査							
巻 次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	175							
編著者名	亀山行雄・松本和男・尾上元規・富山直人・大澤正己							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所 在 地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所 在 地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2003年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
おかやまじょう 岡山城 にのまるあと 二の丸跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 うちさんげ 内山下2-6-45	33201		34° 39' 37"	133° 56' 15"	1999. 10. 4 ~2000. 1. 29 2000. 10. 2 ~2001. 3. 30	1,250 2,700	県立図書館 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
岡山城 二の丸跡	城館	江戸時代	堀・石垣・橋・暗渠・井戸・土壇		陶器(瀬戸・美濃・京信楽・萩・肥前)、磁器(染付・青花・青磁・白磁)、炆器(備前・明石)、土器、瓦、土製品(土錘・羽口)、石製品(五輪塔・砥石・硯・碁石)、木製品(漆椀・折敷・箸・曲物・篋・木札・下駄)、金属製品(刀・小柄・鉞・弾型・簪・煙管・釘・鏝・銭)		外郭(榎馬場) 内堀・外下馬橋	
	集落	平安~ 鎌倉時代	建物・土壇・水田・溝		土器(土師器・黒色土器・瓦器)、緑釉陶器、磁器(青磁・白磁)、炆器(備前・東播系)			
		古墳時代	土壇		土師器			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告175

岡 山 城 二 の 丸 跡

県立図書館建設に伴う発掘調査

印刷 平成15年3月24日

発行 平成15年3月31日

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 西尾総合印刷株式会社